PL
799
R3
1931
v.5

Rai, San'yō
Rai San'yō zensho

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/raisanyozensho05rais

德富猪一郎監修
木崎愛吉
賴成一　共編

賴山陽全書

頼山陽全書

徳富猪一郎監修
木崎愛吉
頼成一共編

PL
799
R3
1931
V.5

賴山陽先生遺蹟顯彰會藏版

LIBRARY
FEB 21 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

山陽先生手書
『日本外史』初稿本、廿冊

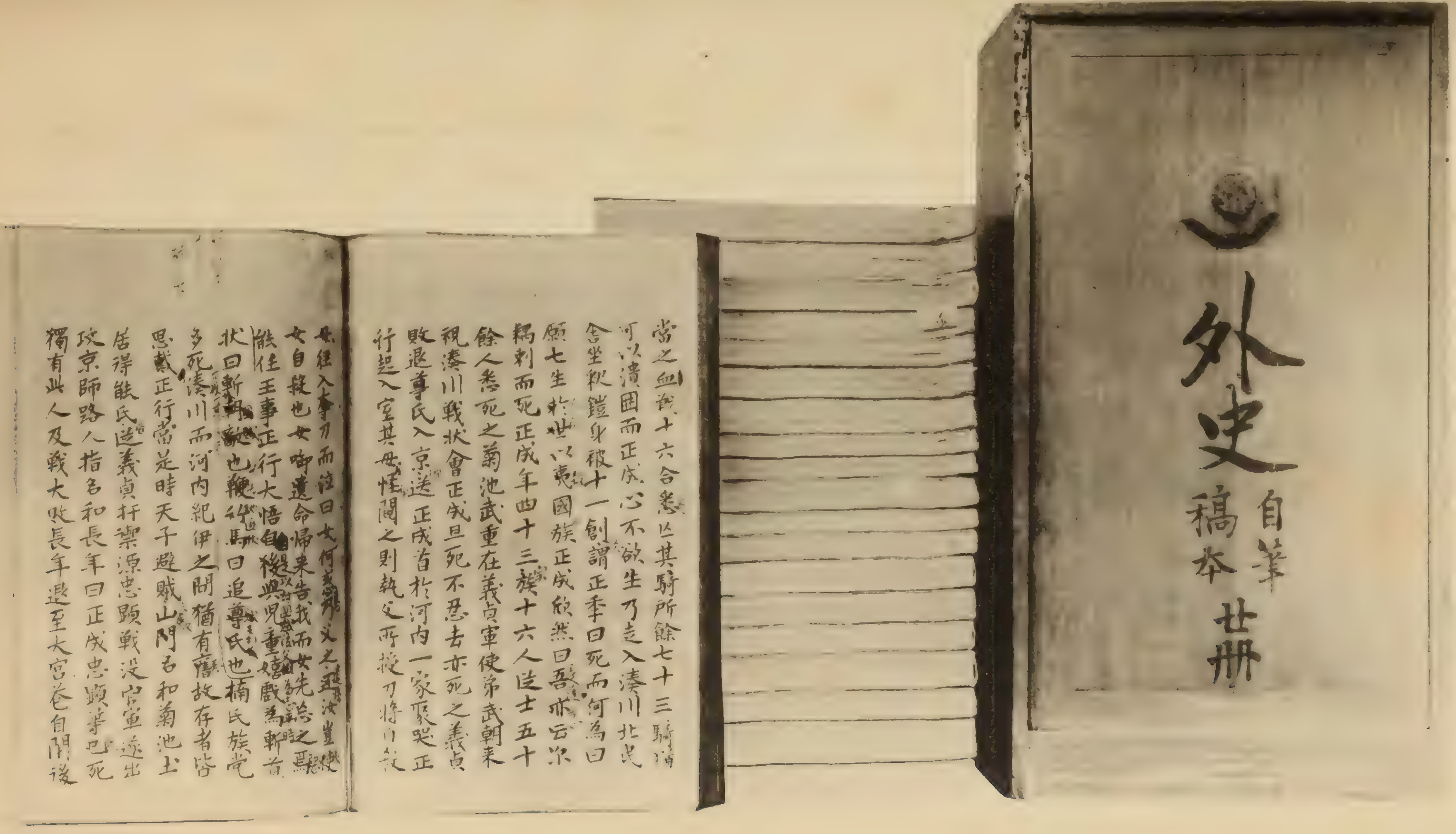
『外史』の寫本・獻本・刊本、そのおびたゞしき中に就き、先生の手稿本廿冊〔德川氏三冊は後年の補作〕は、實にその青年期に於ける命がけの大著述たり。

初稿成りて以來、刪潤又刪潤、朱・藍・墨の色を分ち、更に附箋〔貼紙〕をさへ施して、年々にその成稿を得べく努力の功を積みたるを見るべく、茲に楠公湊川戰死の條を示す。

この貴重なる稿本、初め先生門人關藤藤陰の兄、關島翁の手に歸せしを、弘化二年正月、その友人生長小太郎四十壽賀のため轉贈せられしまゝ、現にその家に傳へらる。

〔備中笠岡・生長家襲藏〕

PL
799
R3
1931
v.5


外史
自筆稿本
廿冊

已而

弟正平諫曰、帝王有命、不可妄冀、願熟圖之。將門曰、天縱以武、吾取帝位、孰能抗之。乃遂

時國香爲常陸大掾、良兼爲下總介、皆與將門

兵、索於常陸、不得、乃散其衆、獨以千餘人至

有一挫、及將

接之、

合兵

盛合兵

敗、貞盛

此邪、遂與謀反、謂純友

曰、他日得志、吾王族也、當爲天子、公藤原氏、能爲我關白乎

山陽手書・日本外史初稿本〔一部〕

『外史』の稿本は、その刊本に先だち、門人其他の轉寫に由り、世に傳へられたるもの少からず、而も山陽の手書に成れるものは、備中笠岡・生長家の襲藏以外、これを見るを得ず。

こゝに、その內容一斑を徵すべく、「卷之一、平氏」の初頭、將門反亂の一節を拔き、成稿の後、幾たびか删潤改案に苦心の存する所を示さんとす。

末尾二行は、本文第十一・二行目の紙上に、附箋〔貼紙〕せられしものに係る。

原本寫眞は別にこれを掲げ、この內容一斑は、こゝに、東京・中島松次郎氏の寫本に據り、これを複寫したり。

時國香爲常陸大掾、良兼爲下總介、皆與將門
有隙、承平中將門終攻殺國香、將門之在京師也、
嘗詣敦實親王、從兵可五六騎、適貞盛亦來謁、
會將門出門、貞盛謂人曰、將門必生事天下者、
今日使吾率士卒、輙擊殺之、至是貞盛棄官而
東、欲復父仇、與良兼及從弟良正共攻將門、不
利、貞盛謂、私鬭、不若公伐也、將還京、有所請、將
門要擊之信濃、貞盛大敗、脫身入京、將門延。與
世王者爲謀主、遂掠八州、自號平新皇、開府置
百官。初將門與藤原純友者友善、嘗同登比叡
山、下視皇城曰吾欲爲天子公能爲我關白乎
至是純友爲伊豫掾、任滿不還、據海島爲盜、以
遙應將門、是時朝廷任貞盛常陸掾、將門聞之、
率兵索、於常陸、不得、乃散其衆、獨以千餘人至
下野、下野有押領使藤原秀鄕、世爲大族、及將
門起兵、往見之、將門方梳髮、捉髻而出、欵接之、
命食共食飯粒墮前拾而食之
秀鄕知其不足與有爲也、乃從貞盛、貞盛合兵
四千餘人、急襲將門、將門遽出拒之、大敗、貞盛
山俯瞰皇城曰壯哉大丈夫不當宅此邪遂與謀反謂純友
曰他日得志吾王族也當爲天子公藤原氏能爲我關白乎

已而
於是良兼率
將門乃據下
總遂襲執
常陸介藤
原維幾取
常陸武藏
守與世五兒險
喜亂往說
將門曰關東八
州沃饒而四塞
日據以霸天下
夫取一州誅取
八州亦誅々耳
願公安所決

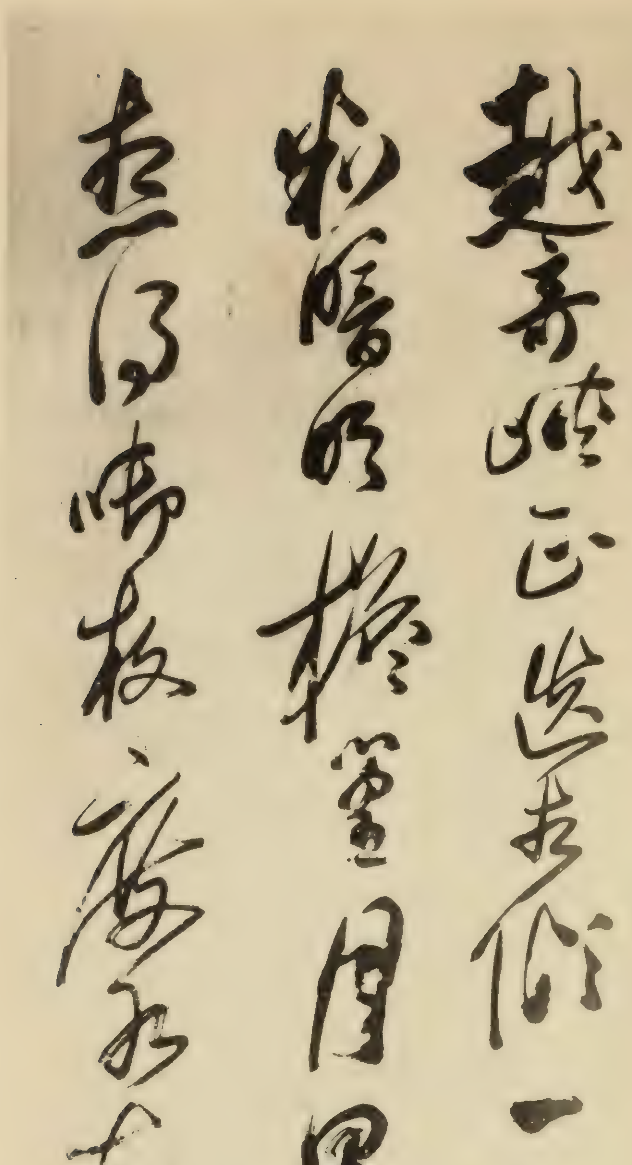
願公安
所決耳將門
大悅延爲謀主
遂攻下野上
總武藏相摸
悉下之而居相
馬自號平新
皇開府置官
屬弟正平諫
曰帝王有命
不可妄冀願
熟圖之將門
曰天縱
以武吾取
帝位孰能
拒之乃建

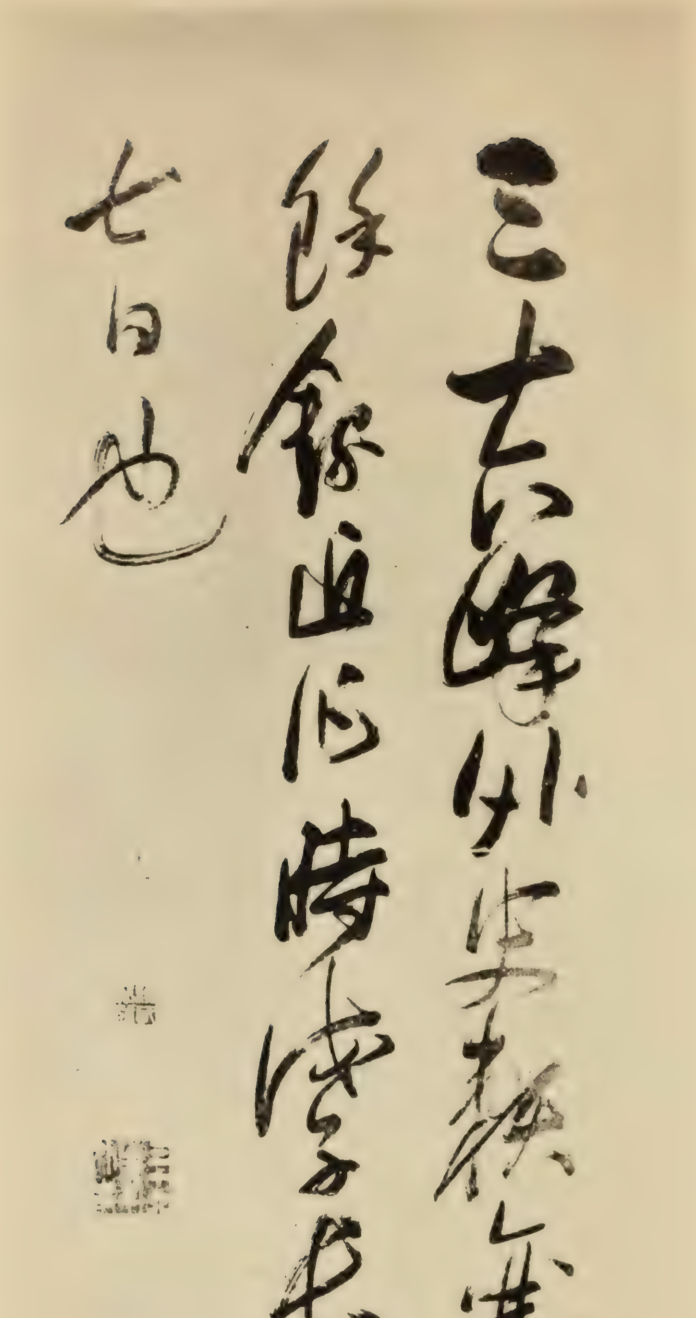
「修史偶題」文政十年、整錄

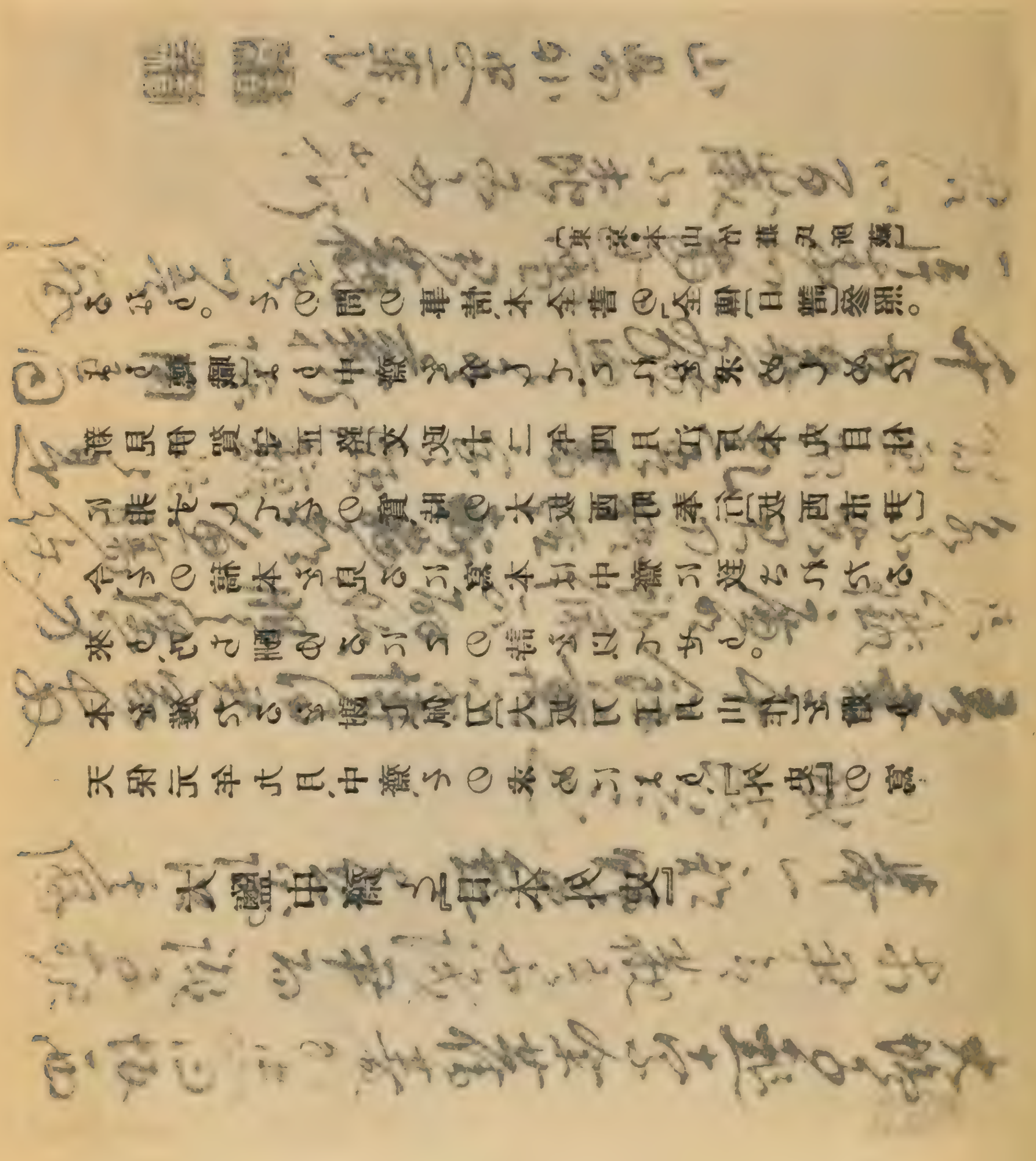
右、十首、文政十一年〔四十九歲〕四月七日の眞蹟中、文化三年〔廿七歲〕の原作〔黑鼠〕及び甲越二將を詠ずる作〔越奇〕の二首と款識とを複寫す。

〔播磨・片島竹香氏舊藏〕

黑甲異然鷄鳴忽然諸從前劇
場　鵝猿狸共描寫成
何可一新　東方相研書



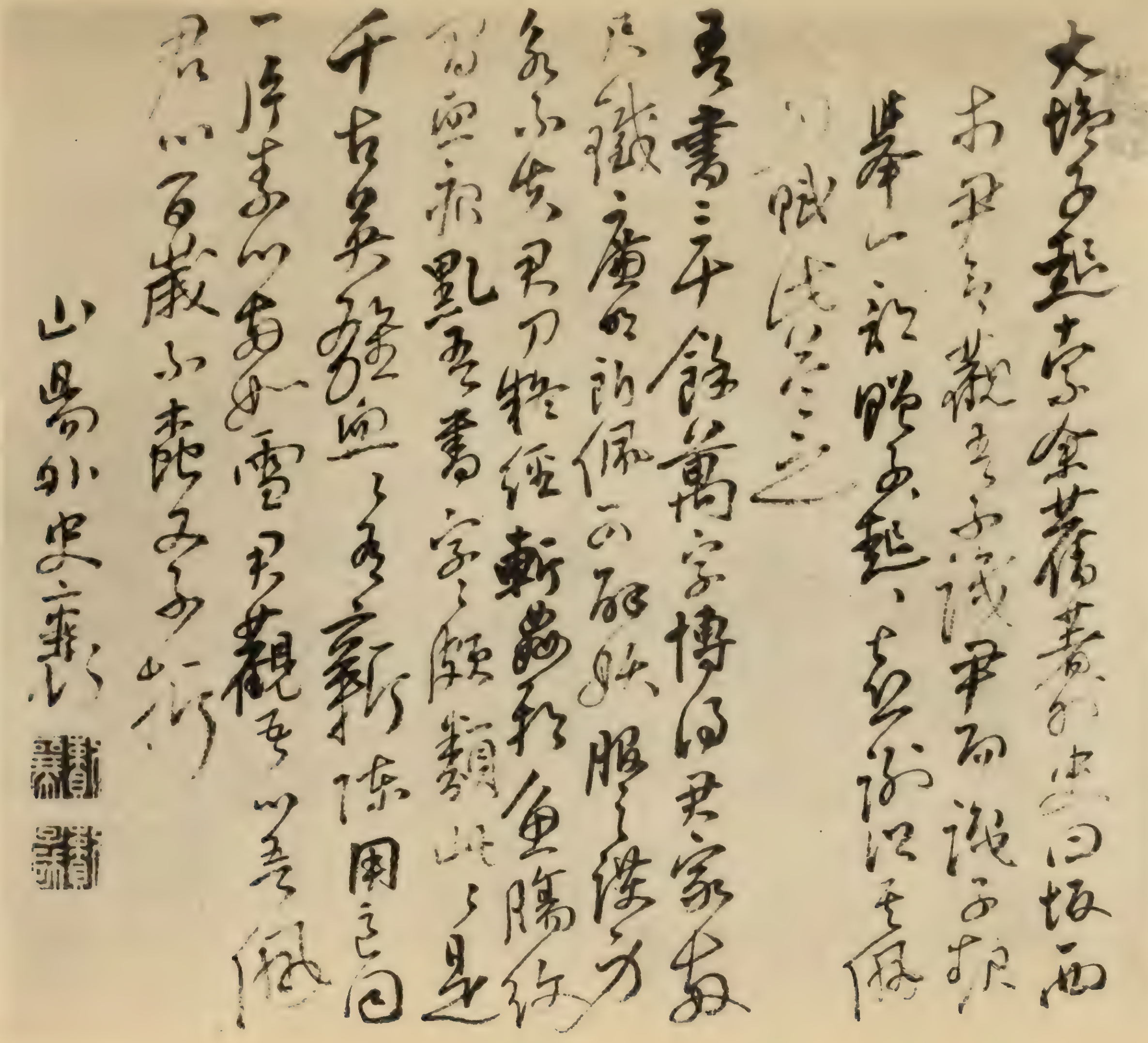




大鹽中齋と『日本外史』

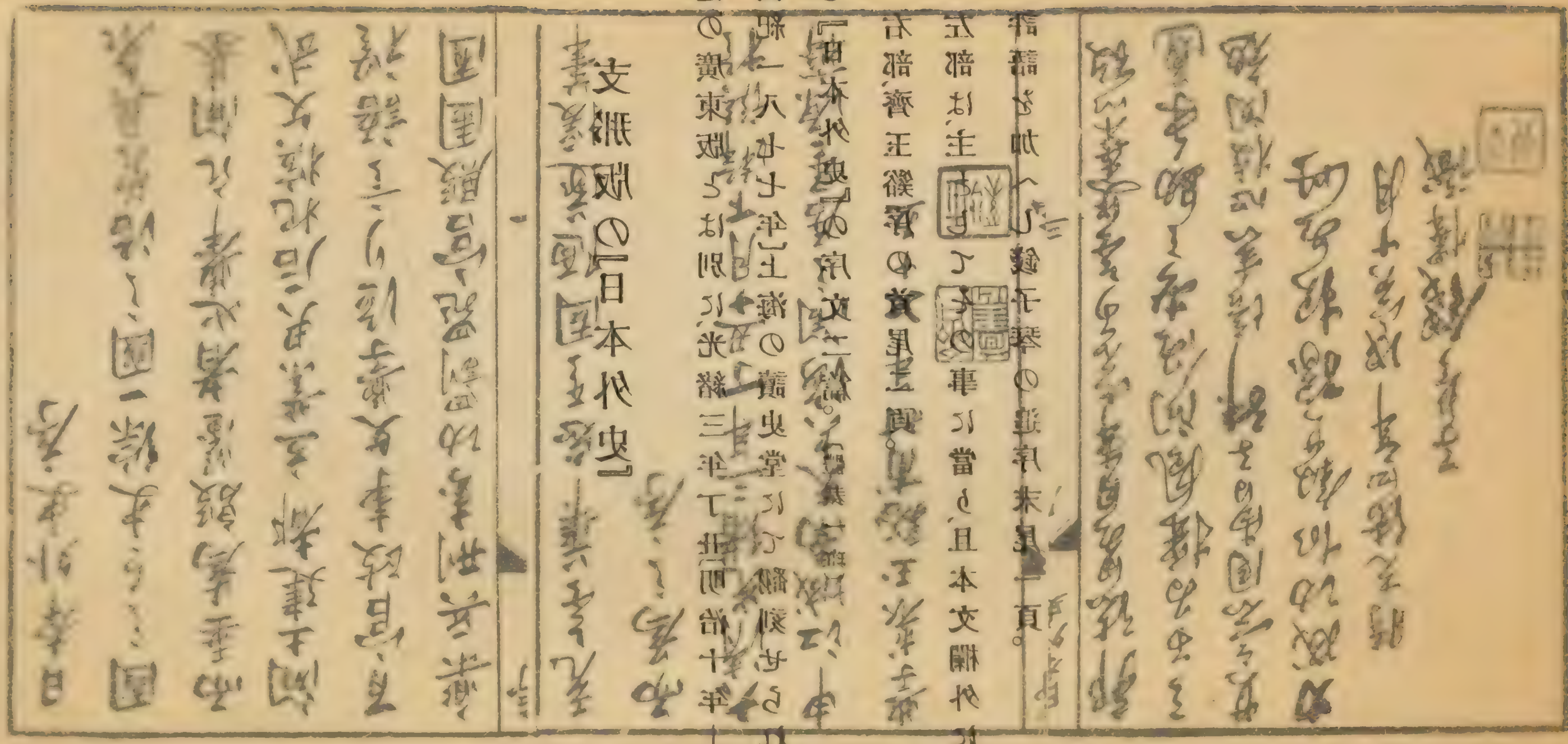
天保元年九月、中齋、その求めにより、『外史』の寫本を獲たるを謝し、佩刀〔大坂刀工月山作〕を贈り來り、乃ち酬ゆるにこの詩を以てせり。今、その稿本を見るに、寫本は中齋に致されたるに非ずして、その實、時の大坂西町奉行〔坂西市尹〕新見伊賀守正路〔文政十二年四月、江戸本丸目付より轉職〕より中齋を介して、これを求めしめたるなり。その間の事情、本全書の「全傳〔日譜〕參照。

〔東京・本山竹荘氏所藏〕



支那版の『日本外史』

他の廣東版は、別に光緒三年丁丑（明治十年—西紀一八七七年）上海の讀史堂に於て翻刻せられし『日本外史』序文二篇。右部、齊王鏳序の首尾二頁。左部は、主として本文欄外に評語を加へし銭子琴の進序末尾二頁。


日本外史序
國之有史綜一國之治亂興衰
而垂爲殷鑒者也舉凡開基
闢土建都立業與后妃嬪文武
百官政事文學語言禮
樂兵刑賞功罰罪宮殿園囿
而爲之序
時光緒四年戊寅十月
錢懌識

支那版の『日本外史』

他の廣東版とは別に、光緒三年丁丑（明治十年—西紀一八七七年）上海の讀史堂にて翻刻せられし『日本外史』の序文二篇。〔體裁一斑〕

右部、齋玉谿序の首尾二頁。

左部は、主としてその事に當り、且本文欄外に評語を加へし錢子琴の追序末尾一頁。

日本外史序

國之之史綜一國之治亂興衰

而垂為殷鑒者也舉凡開基

闢土建都立業與后妃嬪文武

百官政事文學德行言語禮

樂兵刑事功罰罷宮殿園囿

羌之華忽至固陋遂援筆

而為之序

大清光緒三年丁丑十月下澣謹於

申江城南天出海潤之居墨源齋

學裴玉谿甫附年七十五

邦誌既有年紀本末以致

三百為採風問俗者之助免遺

其意因當日子静誌志心接閲勉

力識功綴數語以為如

時光緒四年戊寅十月

子亭錢懌識

露文翻譯の「日本外史」

一九一五年（大正四年）うらじほすとつくに設立の東洋學院教授メンドリン翻譯『日本外史』（分冊）の中、第五冊『楠氏』の部、表紙と扉の二面。

【東京・坂本箕山氏所藏】

ИЗВѢСТІЯ ВОСТОЧНАГО ИНСТИТУТА

Томъ I.

В. М. Мендринъ.

ИСТОРІЯ СЁГУНАТА ВЪ ЯПОНІИ

НИХОНЪ ГАЙСИ.

日本外史

Сочиненіе Рай Дзіо Сисей.

賴襄子成著

КНИГА V.

楠氏

КУСУНОКИ.

1915.

НИХОНЪ ГАЙСИ.

日本外史

КНИГА V.

КУСУНОКИ.

楠氏

...ТАБАТАКЕ 北畠氏. КИКУЦИ 菊池氏. НАВА 名和氏.

КОДЗИМА 兒島氏. ДОИ 土居氏. ТОКУНО 得能氏.

露文飜譯の『日本外史』

一九一五年〔大正四年〕うらじぼすとつくに設立の東洋學院教授メンドリン飜譯『日本外史』〔分冊〕の中、第五冊「楠氏」の部、表紙と扉の二面。

〔東京・坂本箕山氏所藏〕

ИЗВѢСТІЯ ВОСТОЧНАГО ИНСТИТУТА
[illegible] ГОДЪ ИЗДАНІЯ. 1912—1913 АКАДЕМИЧЕСКІЙ ГОДЪ.
Томъ L.

В. М. Мендринъ.

ИСТОРІЯ СІОГУНАТА ВЪ ЯПОНІИ.

НИХОНЪ ГАЙСИ.

日本外史

Сочиненіе Рай Дзіо Сисей.

頼襄子成著

ВЪ XXII КНИГАХЪ.

ПЕРЕВОДЪ СЪ ЯПОНСКАГО СЪ ПРИМѢЧАНІЯМИ И КОММЕНТАРІЯМИ

КНИГА V.

楠氏

КУСУНОКИ.

Съ приложеніемъ очерка Сапею по данным „Три священныхъ сокровища Япо- [illegible] милии Кусуноки, двухъ алфавитныхъ указателей и одного портрета.

ВЛАДИВОСТОКЪ.
[illegible] Восточнаго Института
1915.

НИХОНЪ ГАЙСИ.

日本外史

КНИГА V.

КУСУНОКИ.

楠氏

КИТАБАТАКЕ 北畠氏. **КИКУЦИ** 菊池氏. **НАВА** 名和氏.
КОДЗИМА 児嶋氏. **ДОИ** 土居氏. **ТОКУНО** 得能氏.

日本外史

賴氏藏版

舊藏版主　賴　久一郎

解題

『日本外史』ノ解題ニ先ダチ、ココニ遡リテ、父春水ガ國史纂修ニ志シ、廣島藩ノ認可ヲ經テ、ソノ緒業ニ從ヒシコトヲ以テソノ端ヲ發セントス。

春水ハ、天明三年（卅八歳・山陽四歳）三月廿四日、藩庫ニ藏セラルル、自身筆寫ノ『大日本史』訓點ヲ、藩主淺野重晟公ノ江戸藩邸ヨリ歸城以前ニ完成スベキ命ヲ承ケ、七月七日、ソノ業ヲ卒ヘタリ。　是ヨリ先、春水ハ大坂ニ在リ、本書ヲ手寫シ、コレヲ藩庫ニ獻納セントシテ、ソノ聽許ヲ蒙リ、天明元年ノ秋（〇八月廿五日）小姓頭林甚左衞門ニ對シテ、斡旋ノ勞ヲ謝シ、「蠹蝕ニ不ニ相成一候はゞ、本藩興學之機可レ察、鄙生之光輝、何可レ過」トイヘリ。ソノ年、十二月十六日、公ノ召命ヲ以テ廣島ニ入リ、十七日、藩儒トシテ拔擢セラレ、二年ノ春（〇二月十一日）ニ至リ、新學問所ノ開講アルニ至レリ。　春水ガ一藩ノ儒職ヲ命ゼラレシハ、蓋シ本書手寫獻納ノ事、ソノ動機ノ由ル

所タルヲ想フベキト共ニ、今更ニソノ訓點完成ノ命ヲサヘ承ケタルハ、一藩學風ノ傾向ヲ察知スルニ難シトセズ、春水ニ在リテモ又、國史纂修ノ宿志ヲ遂グベキ機會ノ到來ヲ感ジタリケン、四年ノ冬〇十月ニ至リ、江戸藩邸ニ在リ、始メテソノ願意ヲ當局〇重役關外衞ニ内申スルニ至リ、「私儀、年來存じ込候所、申上試候」トテ、

「本朝歷代、治亂興廢之模樣、相約め〔要約〕可レ申候書物、著述仕見申度奉レ存候。……大日本史は、無ニ比類ニ大業に御座候、右は紀傳之體に御座候。私今度申上試候は、編年に仕り、折節自他論辨を加へ……此儀出來仕候上にては、乍恐國家〔本藩〕之御光り、不朽之盛事と可レ申……。」

トイヘリ。見ルベシ、春水ガ修史ノ目的・史體ノ選擇、乃至宿志ノ存スル所、實ニソノ身命ヲ竭盡シテ、本藩ノ重キヲ加ヘントスルモノアリシヲ。ソノ志業ノ大ニシテ、且抱負ノ輕カラザル、蓋シ學問所當面ノ職務ヲ兼ネ行フニ於テ、或ハソノ完成ヲ疑ハシムルモノナシトセズ、而モ春水ノ自カラ期スル所、此クノ如キモノアリ、ソノ如何ニ修史ノ上ニ己ガ全力ヲ分タントスル意思ノ鞏固ナリシカヲ思ハザルベカ

ラズ。春水ノ恪勤精勵、ソノ學職ヲ忽カセニセザリシハ、素ヨリ說クヲ須ヰザル所。而モ明年春〇天明五年二月ニ至リ、更ニ內申書ヲ致シテ、「當時之勤向にては、御用之外、此筋〔修史の任〕に御備へ被レ爲レ置候樣仕度奉レ存候。」トコトワリ、更ニ、「尤、私一人之手には、行屆不レ申候儀、勿論に御座候。」トテ、ソノ夏〇六月ニ至リ、當局ノ內意ニ依リ、本藩ニ對シテ願意ノ徹底ヲ期セシニ、秋ニ入リ〇九月十二日本藩ニ於ケル「申談相濟」ミタリトテ、修史ノ宿志ハココニ始メテ達セラルルト共ニ、助手ノ人選〇藩邸在勤黑瀨登內號白茅ヲサヘ通達セラレ、更ニ春水ハ自カラ弟杏坪〔三十歲〕ヲ薦メテ勞ヲ分タシメントシ、日ナラズシテ亦コレヲ聽許セラルルニ及ベリ。

　春水・杏坪ノ戮力ヲ以テ、加フルニ助手ソノ人ヲ得タリ、事業ノ進行、以テ期スベキナリ、而シテ春水自身ノ本懷如何ニゾヤ。修史ノ起稿ハ、ココニソノ緒ニ就キ、孜々ソノ業ニ當リ、明年夏〇天明六年四月廿九日ニハ早クモ「編輯物、書ニ試一編」ミテ當局ノ內覽ニ供スルニ至レリ。爾後、本藩ニ在ルト、江戶勤務中トニ論ナク、史料ニ、史友ニ、蒐集物色、概ネ虛日アルナク、年ヲ逐ヒテ著述ノ行程ヲ進メツツアリシ

ニ、寛政元年〔四十四歳〕夏〇四月廿八日ニ至リ、俄然トシテ事業頓挫ノ運命ニ會シ、五年間ノ苦心ハ、一朝水泡ニ歸シ、修史ノ前途ハ、イツノ程ニカ雲烟茫々、復タ尋ヌベクモアラズ、而モソノ記錄ノ徵スベキモノアルナク、世、ソノ何ノ故ナルカヲ知ラザルヲ致セリ。今、廣島賴家ニ在リテ、纔ニ春水手筆ノ原稿數紙ヲ存スルニ過ギザルヲ奈何セン。

山陽ハ、文化七年〔三十一歳〕七月廿六日、父執菅茶山ノ廉塾ニ寓居シ、十餘年來、ソノ稿ヲ進メツツアリシ『日本外史』ハ、現ニ成稿ヲ告ゲントセリ、而モ編摩潤刪コレ日モ足ラズ、身ヲ京坂ノ地ニ寄セテ、廣ク史料ヲ蒐輯シ、史友ヲ物色スルニ急ナリ、乃チソノ再生ノ父ニシテ且恩師トモイフベキ本藩用人ノ要職ニ在ル築山嘉平〇號捧盈ニ對シテ、漢司馬遷〇『史記』ノ著者ガ任安ニ與フル書ニ擬セリト稱セラルル一大書翰ヲ致シテ本藩ヲ去ルベク、一意、父ノ墜緒ヲ繹ネテ、同ジク修史ノ宿志ヲ成サシメラレンコトヲ縷陳セリ。ソノ文中、

「卽、籠居〇幽屏ノ事情、後述――ソ以來、日本外史と申、武家の記錄二十卷〇後ニ廿二卷著述成就

仕居候へども、是は區々たる事にて、引用の書なども不自由、私心に滿不レ申、愚父壯年の頃より、本朝編年之史、輯申度志御座候。官事繁多に而、十枚計致かけ候儘に相止申候。私義、幸、隙人「仕官せざる身」に御座候故、父の志を繼、此業を成就仕、日本にて必要之大典とは、藝州の書物と、人に呼せ申度念願に御座候。」

ト、ソノ心事ヲ吐露スルト同時、春水ノ遺志ヲ繼ギ、本藩ノ光輝ヲ發揚センコトヲ期ストイヘリ。ソノ志望ノ存スル所、一ニ春水ノ修史ニ著手セントセシ當初ノ意氣ト相類スルノ甚シキヲ見ルベシ。

抑ゝ山陽ハ何ニ由リテ、ソノ自カラ稱スル如ク、幽屏ノ逆境ニ己ガ身ヲ投ズルニ至リシゾ。言フマデモナク、青年十九歲「寛政十年」――江戸遊學ヨリ歸藩ノ後二年「同十二年九月五日」、本藩ヲ脫奔シテ上國ニ放浪セシニ、ヤガテソノ罪ヲ贖ハシメラルベク、自邸ノ一室ニ幽屏ノ運命ヲ續ケツツアリキ。而モ筆硯ノ自由ヲ許

サルルヤ否、早ク既ニ著述ノ一部ヲソノ手ニ握レリ。著述トハ何、言フマデモナク、『日本外史』ノ一書卽チ是レ。余、ツネニ謂ヘラク、山陽ハ生レナガラノ史人ナリ、幼時ノ嬉戲ハ、おもちやニ於テセズシテ、武者繪、讀本（よみほん）ノ上ニ在リ、四書五經ノ讀誦ニ兼ネテ、史論ヲ作ルニ他事ナカリキ。更ニ父執柴野栗山ノ訓言ヲ、［同赤崎海門ノ口ヨリ］傳ヘラレテ、『通鑑綱目』ノ大義ニ通ズルニ努メ、同ジク父執ニシテ、同時ニソノ外叔母［梅月］ノ夫タル尾藤二洲ノ史說ニ動カサレツツ、濃厚ナル史味ハ、夙ニソノ滿喫スル所タリ、和漢ノ史籍ニ親シミテ、殊ニ思ヲ我邦治亂興廢ノ故ニ致シ、勢、武家政治ノ現勢ヲ咒ハザルヲ得ザルニ至リ、而モ修史ノ志、ソノ間ニ醞釀セラルルニ當リ、ソノ身分ノ部屋住ナルヲ以テシテ、史料蒐輯ノ容易ニ望マルベクモアラズ、忽然脫藩シテ上國ニ放浪セシモノ、イヅクンゾソノ心中、何物カノ摑マルベキモノアルヲ期スルニ非ザリシヲ知ランヤ。

山陽ノ脫藩ニ先ダツコト一年〇寛政十一年、三月廿五日、京都ノ福井新九郞トイフ者、來リテ春水ノ塾ニ學ベリ、春水ハ特ニ彼レヲ遇スルニ厚ク、而シテ山陽ノ彼レト相契合ス

ルコト尤モ深キモノアリ。ソノ出デテ上國ニ入ルヤ、先ヅ彼ノ家ニ客寓セリ、是レ或ハ兩者ノ間ニ早ク手筈ノ打チ合ハサレタル豫定ノ行動ニハ非ザリシ歟。藩士ノ嫡男ニシテ脱奔スル者、藩法、コレヲ「追打」ノ刑ニ問ヘリ。山陽、コレヲ顧ミズシテ、コノ重刑ノ上ニ身ヲ投ズルヲ辭セズ、上國ニ放浪スルニ至リシ所以ノモノ、蓋シ已マント欲シテ、已ム能ハザルモノアリシナルベシ。而モ春水ノ江戸邸勤務中、椿事ハ勃發セリ、後見ノ位地ニ立テル叔父杏坪ハコレヲ善處スベク、人ヲ四方ニ馳セテ踪跡セシムルニ急ナルト共ニ、柬ヲ諸方面ニ飛バシテ、ソノ配慮ヲ求ムルニ力メタリ。飯岡滄浪（○山陽ノ母梅颸ノ父義齋ノ嗣）ニ寄セタル文中、

「本人義、素より別に刑憲を犯し、遁去候樣の義に毛頭無レ之、但豪俠狂妄の所爲にて御座候。然し狂妄なりに、宿志も有レ之事と相見へ候得者、當分は必潛居候て、追手を忍可レ申、若し御見當り卒爾に御留置被レ成候はゞ、必逸居可レ仕候間、御見留の事も御座候はゞ、隨分御談合にて、御周旋御取計奉レ囑候。誠に弊家存亡の所レ係に御座候得者、費用は何程入候ても不レ苦候間、御手厚に

御取計可レ被レ下候。」

トアリ。今、山陽ハ素ヨリ「豪俠狂妄」ナル所爲ヲ敢テシテ、藩國ヲ脫奔セリ、而モ杏坪ノ眼識ハ、コレヲ「宿志」ノ驅ル所ナルベシト謂ヘリ。ソノ幼年以來、父ニ代リテ薰陶セラレタル乃叔ガ破的ノ一語ハ、他ノ嘵々タル言議ヲ排シテ、山陽ノ心事ハ十分ニ理解セラレテ在リキ。上方ヘノ脫奔ハ、蓋シ宿志遂行ノ第一步ヲ踏ミ初メタルナルベシ。

山陽ハ、ヤガテ追跡セラレテ、心ナラズモ歸藩セシメラレタリ、狂者ノ擧動ハ、コレヲ一室ニ拘禁シテ、藩府ニ對スル自贖ノ途ニ出デシメラレザルヲ得ズ。コノ歲十一月三日、自邸ニ謹愼ノ意ヲ表スベク、「圍ひ」ノ中ニ幽屛セシメラレ、「久(ヒサ)太郞」ハ「憐二」ノ假稱ノ下ニ、一身ノ不自由ヲ忍ブベクナリヌ。母梅颸ハ、夫春水ノ不在中、一時、身ヲ杏坪ノ邸內ニ避ケタリ。

一面、江戶ニ在リシ春水ハ、其筋ヨリ圖ラズモ「恩命」ノ傳ヘラルルト共ニ、廢嫡ノ意ヲ決シ、「義子內談」ノ事ニ及ビ、願書ノ執達ヲ當局ノ手ニ托セシハ、コノ

月二十四日ニ在リ。明年夏〇享和元年五月十六日藩主ニ扈従シテ歸藩シ、文化元年春〇正月十五日弟春風ノ次男景讓ハ入リテ養嗣子トナレリ。山陽ハ是レヨリ先〇享和三年十二月六日、既ニ「闔ひ御寛免」ノ沙汰ヲ、用人築山嘉平ノ手ヨリ傳ヘラレテアリキ。

ココニ山陽ハ全クソノ一身ヲ藩籍ヨリ脱スルヲ得ルト同時、家ニハ後嗣ソノ人アリ。宿志ハ早ク達セラレテ、『日本外史』ハ、屛居中、既ニソノ大部分ヲ成稿シ得タリ。君父ノ大恩ハ、由リテ以テ答ヘラルベク、ソノ著書ニハ、滿腔ノ熱血ヲ盛リテ、「歴代治亂興廢」ノ跡ヲ敍述シ、評論シ得テ、「日本にて必要之大典とは、藝州の書物と」呼バルベキ基礎ノ確立ハ言ハレ得ベキニ至レリ。

『日本外史』ノ義例ハ、松平樂翁公ニ上ツリシ書中ニ、微シクソノ意ヲ顯ハシテイフ、

「夫レ右族迭ヒニ興リ、甲起リ、乙仆レテ以テ海宇ノ沿革ヲ成シ、而モ事、必ラズシモ王室ニ關セザリシハ、我ガ中世以還ノ國勢ナリ。故ニ實ニ依リテ

體ヲ創メ、以テ世變ヲ形ハシ、而シテソノ中、貫クニ帝系年號ヲ以キテ、以テ條理ヲ表シ、大義ノ繫ル所ニ在リテハ、必ズ特書ヲ用キタリ。」

乃チ知ル、國家體制ノ變態ヲ敍シツツ、「帝系年號」ノ上ニソノ「條理」ヲ表明スベカラシメントシ、更ニ『外史』ノ序論ニ入リテハ、堂々ト大書特筆シテ、天皇親政ノ本義ヲ闡明シテ曰ク、

「蓋シ我朝ノ初メテ國ヲ建ツル、政體簡易ニシテ、文武一途、海内ヲ擧ゲ、皆兵ニシテ、天子ハ、コレガ元帥タリ……豈復タ謂ハユル武門武士ナル者アランヤ。……是ヲ以テ大權、上ニ在リ、能ク海内ヲ制服セリ。……藤原氏、外戚ヲ以テ、世々政權ヲ執ルニ及ビ、卿相ノ位ハ、ソノ族人ニ非ズンバ擬セズ、……將帥ノ任ハ、毎ニ源・平二家ニ委セリ、是ニ於テ乎、始メテ武門ノ稱アリ……始メテ武士ノ稱アリ。……保元・平治ノ際ニ至リ、乃チ釁ニ乘ジテ起リ、潰裂四出、復タ收ムベカラズ、横流ノ極、終ニソノ千載不拔ノ權ヲ失シテ、コレヲ嚮ニ奴僕視スル所ノ者（○武門武士）ニ授クルヲ致セリ、慨スルニタフベ

ケンヤ。
吾レ、外史ヲ作リ、首メニ源・平二氏ヲ敍シ、未ダ嘗テ王家ノ自ラソノ權ヲ失セシヲ歎ゼズンバアラズ、而モ國勢ノ推移ハ、人力ノ能ク維持スル所ニ非ザルモノアリ。世變ニ因リテ、以テ得失ヲ見ル、後ノ世ヲ憂フル者、マサニ以テ心ヲ留ムルコトアラントスルナリ。」

是レ實ニ『外史』一編ノ大結論ニアラズシテ何ゾ。而モコレ乃チ序論ナリ、而モ一編ノ序論ニ非ズシテ、源平紀ノ小序論タルニ過ギザル形式ヲ示シツツ、一面終末德川氏ノ紀事ハ、ソノ現代ニ入リテ、

「今公、一橋ヨリ入リテ世子タリ、名ハ家齊、實ニ有德公（德川八代將軍吉宗）ノ曾孫ナリ。〔征夷大將軍〕ノ職ヲ襲グニ及ビ、復タビソノ政ヲ修メ、賢ニ任ジ能ヲ使ヒ、百廢悉ク擧ガリ、在職最モ久シク、左大臣ニ累遷シテ、終ニ太政大臣ニ拜ス〔文政十年三月十八日〕。…是ニ於テ〔彥根藩主〕掃部頭井伊直亮・〔舊白川—桑名藩主—樂翁公ノ子〕越中守松平定永ヲシテ入朝謝恩セシム。源氏・足利氏

以來、軍職ニ在リテ、太政大臣ヲ兼ヌル者、獨リ公ノミ。蓋シ武門ノ天下ヲ平治スル、是ニ至リテソノ盛ヲ極ムト云フ。」

ト、現代目前ノ史實ヲ直敍シテ、武家政治空前ノ盛ヲ極メツツアルヲ語レリ、乃チ序論ノ置場ヲココニ移シテ一讀ヲ試ミヨ、蓋シ思ヒ半ニ過グルモノアラン。

大將軍ニシテ文官ノ極位ヲ占ムルニ至レル眼下ノ實況ニハ、如何ニモ肝積ノ昂ブルニ堪ヘザリシモノノ如ク、ソノ宣下ノ取沙汰ハ、前々ヨリ喧シクソノ耳朶ヲ掠メタリト見エ、文政九年十月十八日、菅茶山ヘ消息ノ文中、

「關東、太政大臣宣下と申候、左大臣さへあるに、又々如何の事に候や。昔、實朝の飽ニ取官爵ニて、思出にすると申は、不レ恠(けしからず)惡き例(ためし)に候。御子は夥敷、御官は極上と申候へば、非ニ惜福之道ニと奉レ存候。後嵯峨〔天皇〕なども、およびただしき御子、果して王朝盛極萠レ衰に、杞憂狂人笑候へ共、只有ヨ先生語ニ此意ニ候故、申上候、如何に候。」

ソノ日、又、姫路仁壽山學問所儒員近藤抑齋ヘモ、

「〔家齊將軍〕太政〔大臣〕之拜は、私も疑居候。貪ニ官爵ニせられ候は、入らぬ事ならずや。源實朝は、あしき前例に候。」

而モ前ノ噂ハ、果シテ後ノ事實トナレリ。ソレヲ史筆ニ著シテ、「蓋シ武門ノ天下ヲ平治スル、是ニ至リテソノ盛ヲ極ム」ル〔盛極萠レ衰〕ノ意味ハ、深ク作者隱微ノ筆ニ藏メラレタルヲ思フベシ。

顧フニ、武家政治極盛ノ世ニ生レテ史筆ヲ立ツル、史家ノ困難、是レヨリ甚シキハアラジ。忌諱ヲ避ケツツモ、史實ヲ直筆スル、作者ノ危險、是レヨリ大ナルハアラジ。ソノ苦心慘澹タル筆意ヲ、門人牧百峯ニ示シテ、「序論・論贊ハ、他ノ文ト同ジカラズ、皆隱微ニシテ言ヒ難キ情事ヲ指シ、半呑半吐シツツ、古今ニ俯仰シテ感慨コレニ係ル」ト云ヘリ。

幕府ノ謝恩使ハ、日ヲ剋シテ入洛セリ、ソノ盛儀想フベキナリ。五月二十五日、菅茶山ヘノ消息ニ、

「此節、京ハ太政大臣哉(とやら)ノ謝恩之御使參。まぜ反し申候。されども世外之者は

傍觀而已。……家母抔、二使京入を拜見して出立などゝも申候へ共、私申は、日本一之シッパク大名二頭揃て被ㇾ參候に、可ㇾ觀事あらんやうなく候故、遺憾なく御出立あるべし「梅颸。杏坪一行は、それに先だち、五月八日發程西歸」と申候事に候。」

ト云ヒ、世外ニ立テル身ハ何等痛痒相關セザル態度ヲサヘ示セシニ、何ゾ圖ラン、謝恩使ノ一員タル松平侯ヨリ、京師邸吏ノ手ヲ經テ―樂翁老侯ノ所望トシテ―『外史』ノ一覽ヲ索メ來ラントハ。

靑年以來、刻苦修撰ノ餘、刪潤又刪潤、今ャ始メテソノ完稿ノ成リツツアリシコノ際コノ秋、ソノ精血ヲ灑ギ來レル著書ハ、實ニ武家政治ヲ呪詛シタルモノニテアリキ。而モ前ノ老中ソノ人ヨリ、公々然、ソノ進覽ノ命ニ接シ、更ニソノ耽讀愛誦ノ餘、一篇ノ題辭「文政十一年正月」ヲ贏チ得ルニ至ラントハ、蓋シ著者ソノ人ノ、カケテモ思ヒ寄ラザリシ所ナッシナルベシ。

ソノ年「文政十年」十月二日、母梅颸ヘ對シテ、

「樂翁様より、先達而鄙著外史差上候御會釋として、銀貳拾枚・集古十種全部二箱、御書付添候て、用達〔京都、齋藤某〕持參、御著述日本外史被ニ聞及一所望致候所、御許容にて、御差越被レ致、披閲候處、殊に感心被レ致候、因レ是乍ニ輕微一云々〔の口上〕、自ニ樂翁一被ニ申越一候と御文言にて參候。私に取候て、榮耀本意至極に奉レ存候、早速國元老母へも申遣〔可レ申〕候段申遣候。十月五日御忌日、薄奠仕、〔可レ〕奉ニ祝告一候。御酒〔供奠〕之時、先大人配享候て〔可ニ〕奉告一候。」

トソノ次第ヲ報告シ、家祖祝告ノ儀ハ最近祭日ヲ迎フル祖父又十郎亨翁ノ父彌右衛門善祐〔十月五日忌〕ノ靈位ニ於テシ、兼ネテ父春水ノ配享供奠ヲ行フベシトナリ。山陽ノ本懷・賴家〔更ニ一藩ノ〕ノ名譽、是ニ至リ始メテ言フヲ得ベキナリ。

『日本外史』ハ、既ニ公行セラレタリ、ソノ寫本ハ、翼ナクシテ天下ニ飛ベリ。瀧澤馬琴ノ如キ、亦、一本ヲ傳寫セリ。『外史』ノ刻本ハ、天保七八年頃、江戸下

谷ノ士中西伯基ノ手ニ由リ、『拙修齋叢書』ノ中ニ、木活字ヲ以テ印刷セラレタルヲ首メ、弘化元年十二月ニハ、川越藩學問所博喩堂藏版トシテ、藩儒保岡嶺南ノ序文ヲ加ヘ、江戸靈南坂ノ藩邸ニテ製本セラレ、忽チニシテソノ盛行ヲ見ルニ至リシニ、賴家ニ在リテハ未ダ刻本ヲ成スニ至ラズ、偶〻川越版ノ新本ハ、書肆ノ手ヨリ京都賴家ニ示サレ、支峯ハ直チニ廣島・聿庵ノ手ニ轉送シ、相共ニ謀リテ、遽カニソノ開版ヲ急ギ、嘉永元年九月二日ニ至リ、發行書肆〔大坂・河内屋記一兵衞〕ヨリ、新刻一本ヲ致セリ。支峯、乃チ一書〇九月五日ヲ聿庵ニ送リ、

「初二日、外史〔刻本〕卒業、御同樣ニ大賀之至に候。其日、……乃祭㆓新著於〔山陽〕靈位㆒、以㆓線香一炷、併紺菊一瓶㆒、不㆑到㆓九泉之靈㆒如何。製本已呈㆓尊所㆒否、未㆑到、以㆓路之遠㆒達否。」

二日着本ノ當日、支峯ハ直チニ先考ノ靈ヲ祭リ、新版一部ヲ奠シテ、一炷ノ香・一瓶ノ菊ヲ供セリ、九泉ノ英魂、定メテ感受スル所深キモノアリシナルベシ。コトシ九月二十三日ハ、實ニ山陽十七回忌辰ニ方リ、「喜撰一箱」ヲ添ヘテ、コノ手束

ハ廣島ヘ致サレタリ。手紙ニ又、

「『外史新版』明快不レ可レ言。可レ謂ニ近世刻本中之最上ニ者に候。」

「頼氏正本」ハ、此クノ如クニシテ出デ來レリ。爾來、川越本ト相竝ビテ、諸藩學問所ハ、齊シクコレヲ教材トスルニ至リ、滔々トシテ一世ニ流布シ、殆ンド戸藏家誦ノ勢アリ。『外史』ノ精神ハ、期セズシテ發揚セラレ、尊皇倒幕ノ題目ハ、志士ノ標語トシテ、果然、「後ノ世ヲ憂フル者」ヲシテ、一道ノ黎明ヲ望ムベカラシメタリ。京都東山ナル長樂寺ノ墓畔ニ「記恩碑」〇支峯撰文建立アリ、明治十四年三月二十一日、五十年祭ノ行ハルルヤ、枯骨ハ、天恩ニ霑ヒ、

「亡父襄夙ニ尊　王之志篤ク書ヲ著シテ大義名分ヲ明ニシ、其世益不尠仍テ

爲祭粢料金百圓下賜候事」

御沙汰書ノ全文ヲ大書深刻シテ、絶大ノ記念ハ留メラレタリ。

爾後、明治二十四年十二月十七日ニハ、更ニ特旨正四位ヲ贈ラセタマヒ、コトシ昭和六年五月十六日、ソノ百年祭ノ擧行ニ臨ミ、亦復、祭粢料金參百圓下賜ノ

恩命ヲ辱クセリ。

○

『外史』ノ修撰ハ、ソノ端ヲ前述、二十一歳ノ頃ニ發シ、爾來、隨時隨處、ソノ潤删ヲ怠ラズ、家居ニ旅行ニ、ソノ稿本ハ毎々ソノ身邊ヲ離レズ、九州ノ遊歷・神邊ノ寓居、ミナソノ行李ニ納メ、三十二歳、京都ニ入リテ後、論賛ノ成稿ヲ見ルニ及ベリ。文政十年桑名藩納本ノ後、更ニ姫路（○文政十二年十二月）・彦根（○天保元年）二藩庫ニ納メラレ、ソノ間、尙潤删ノ筆ヲ休メズ、文政十二年十月十四日、島原藩儒川北溫山來見ノ際ノ如キ、ソノ實狀ヲ目擊シタリトイヘリ。

稿本潤删ノ功程ハ、獨リ自身ノ筆ヲ動カスニ止マラズ、廣ク諸友ノ忠言ヲ求メ、後輩門下ノ意見ヲ徵シ、文政十一年八月八日、大槻磐溪來見ノ席上、稿本ヲ示セシニ、正記・前後記ナドノ目ハ未ダ立テラレザリシトイヘリ。是ヨリ先、文化十四年五月二十三日、小野蘇庵ニ與ヘシ書中ニハ、

「近來は外史を直し申候、少々之柱一本入かへと存候所、ねだまではづし、棟

をも取かへと申樣に相成候。論贊も書申候、又十年前とは、見識かはり申候。」

トアリ。

『外史』ノ自筆初稿本ニ就キ、連年潤删ノ迹ヲ經タルモノ、今、藏メラレテ、備中笠岡ノ生長家ニ在リ。全部廿册、朱書・藍書・墨書、乃至附箋ハ、各行間ト欄外トニ亘リ、蠅頭斑々、ソノ苦心ヲ窺フニ足レリ。コノ本、モト門人關藤藤陰ノ兄、島翁ノ手ニ歸セシヲ、弘化二年正月、生長家ノ先代小太郎ニ贈ラレタルナリ。本書圖版ノ中、ソノ一部分ヲ縮寫シタルヲ見テ、ソノ全豹ハ察セラルベシ。

『外史』一書、ソノ體制ヲ論ズル者、川田甕江ハ、「編年ニ非ズ、紀傳ニ非ズシテ、ソノ體ハ、晉書ノ載記ニ類セリ」トイヒ、重野成齋ハ則チ「史記ノ世家ニ仿ヒ、而モ世家ト裁ヲ殊ニス」トイヘリ。而シテ山陽自カラ曰フ、

「拙書、未曾有ノ體ヲ創メ、世家ヲ以テシ、上、本紀ヲ包ネ、下、列傳ヲ總

ブ、故ニ瑣細ニシテ快讀シ難キ處多カラン。然モ扼要總會ノ處ニ遇ヘバ、輙チ數筆ヲ以テ、讀眼ヲ指南シ、前後筋節ヲシテ皆動カシム、着意領略セザルベカラス。」

「一家ゴトニ、一篇ノ文字ヲツクリ、首尾開合ス。然モソノ中、各片段ヲツクリ、大片段アリ、小片段アリ、分チテコレヲ觀ル、各自章ヲ成シ、以テ觀者ニ便セリ。苟クモ一滾讀過スルトキハ、則チ頭緒ヲ失ハン。然モ亦宜シク一滾讀過スベキ時アルベキナリ。」

「編年「體」ノモノ、年月ニ依リテ直敍シ、作ルニモ易ク、讀ムニモ亦易シ。紀傳ハ然ラズ、作ルコト難ク、讀ムコトモ難シ、ソノ大部勒・大開闔・大炤應ノ處ヲ觀ルヲ要ス。編年ハ、唯左氏ニ此ノ意アリ、穿插錯綜、備サニ變化アリ、戰鬭ノ事實、瑣屑畢ク露ハレ、而シテ筋脈流動セリ。僕、法ヲ左・史ノ二書ニ取ル、鑑ノ月ヲ學ブガ如クナリト雖、亦公輩ノ少シクソノ法ヲ按ゼンコトヲ冀フ、亦此ヲ以テ事勢世態ヲ領スベキナリ。」

「敍中、攅簇ノ處アリ、結繳ノ處アリ、伏案アリ、了案アリ、暗中回顧ノ處アリ、乍チニシテ讀ム、知リ難シ、必ラズシモ尋研セズト雖、歩々顧ル意ヲ着ケテ可ナリ。」

「コトサラニ前後ヲ倒置スルモノアリ、讀者ヲシテ了然トシテ迷ハザラシメント欲ス、是レ亦乍チニシテ讀マバ、知リ難カラン。」〇以上門人牧百峯ニ示ス

「此ノ書、各家ノ興廢ヲ詳ニシ、以テ覽觀ニ資スルヲ要トス、敢テ本紀ヲ立ツルコト、正史ノ如クナラズ。特ニソノ中、帝王年號幾年幾月ヲ以テ、條理ヲ表明スルノミ。嘗テ年表大事記ヲ作リ、コレヲ冠セント欲シ、未ダ果サザルナリ。」〇外史例言

甕江、又曰フ、

「山陽先生ハ、近代ノ名儒ナリ、生レテ幕府全盛ノ日ニ遇ヒ、王權ヲ既ニ墜チタルニ復セント欲シ、著ハス所ノ外史、名分ヲ正シ、稱謂ヲ謹ミテ、國家治亂成敗ノ跡ヲ歷敍シ、直筆褒貶シテ、畏避スル所ナシ。樂翁公ノコレヲ見

ンコトヲ求ムルニ及ビ、告グルニ微志ノ在ル所ヲ以テセリ。居ルコトイクバクモナクシテ、先生、公トトモニ相踵ギテ物故セリ。而モ外史ハ遍ネク海内ニ行ハレ、人心興起シテ、遂ニ維新ノ洪基ヲ開ケリ。流レニ沿ヒ、源ヲ討ネ、論者、功ヲ先生ニ歸ス、洵ニ溢美ニ非ザルナリ。」

成齋、亦曰ク、

「復古〔明治維新〕以來、兵權、上ニ歸シ、聖上、大元帥ノ任ヲ躬ラシタマヒ、征討アル毎ニ、皇親〔親王〕コレガ總督トナリタマフ。頼襄ノ持論、是ニ至リテ始メテ行ハレタリ。襄ヲシテ今日ヲ目セシメナバ、マサニ欣躍ニ堪ヘザルベシ、則チ此篇〔外史序論〕、中興ノ皇猷ヲ翼賛スト謂ハンモ可ナリ、豈獨リ文字ノ妙ナルノミナランヤ。」

「楠氏ヲ以テ源・平氏ニ繼グ、〔世ニ〕ソノ不倫ヲ疑ヘリ。然モ元・建〔建武・延元〕ヨリ、南朝ヲ終フルマデ、五十年ノ間、天下ノ王事ニ勤ムルモノ、皆楠氏ノ風ヲ承ケシ者ナリ。是レ五十年間、楠氏コレガ紀綱タリ。史氏、ソノ實ニ據

リテ、而シテソノ名ヲ與フルノミ。鎌倉ノ五將軍ハ空名ニシテ實ナク、陪隷〔北條〕ハ悖逆ニシテ、名ヲ與フベカラズ。故ニ楠氏ヲ以テ、直チニ二氏ニ接セリ、眞ニ千古ノ特筆タリ。」

「〔古ノ謂ハユル〕武臣ハ、王ニ勤ムルノミト、此ノ語、外史一編ノ綱領タリ。源・平・織・豐ハ、ソノ名ヲ攘ミ、北條・足利ハ、名實倶ニ乖ケリ。一意、公ニ奉ジテ、武臣タルニ負カザリシモノ、獨リ楠氏ノミ、故ニ此ニ於テコレヲ發セルナリ。」

「外史ノ特筆二アリ、楠氏ヲ以テ源・平ニ繼ギ、新田氏ヲ以テ、足利氏ニ先ンズル、是ナリ。從前ノ史家、皇統ノ南北ヲ論ジテ、而モ將家ノ正閏ニ及バズ、概ネ成敗ヲ以テコレヲ定ム。外史、一タビ出デヽ、始メテ楠・新二氏ノ不遇困蹐ナルモ、姦雄ノ奕葉累世ナルヨリモ多ナルコト、萬々ナルヲ知レリ。ソノ世教ヲ益スルコト、水史〔大日本史〕ノ三特筆ノ下ニ在ラズ。」

思フニ『外史』述ブル所ノ事蹟ニ就キ、區々、ソノ誤謬ヲ指摘シ、屑々、ソノ瑕瑾

ヲ檢出スルモノ、指、屈スルニ遑アラズ、儒家ト國學者トヲ問ハズ、事ニココニ從ヒ、以テ己ガ名聲ヲ博セントスルニ似タリ。然モ外史ハ讀ミテソノ名ノ如ク、畢竟閫外ノ一典タルニ止マリ、「寒陋ノ一書生ヲ以テ、獨力、古今ヲ罔羅シ、」「引据剪裁、皆一家私乘ノ體ヲ成セリ。」「若シ夫レ博引旁搜、錙銖ヲ辨拆スルハ、世ニ自カラソノ人アリ、」何ゾ『外史』ヲ病ムニ足ラン。

『外史』ノ流傳、年ヲ逐ヒツツ、愈々盛ヲ加ヘ、ソノ刻版ト活字版トヲ併セテ、現代ニ至リ、約四五十種ノ多キアリ。更ニ講解評注ナドノ類ニ及ビテハ、ソノ幾許ニ達スルヲ知ラズ。タトヒ我邦出版界ノ最高頂ニ立ツヲ言ヒ易カラズトスルモ、コレニ比肩スベキモノ寥々タルヲ見ル。隨ヒテ海外ニ在リ、ソノ複刻・反譯本ヲ出セルモノ、清朝光緒元年（明治八年）ノ廣東・同四年ノ上海ニ於ケルト二本アリ。後者ハ卽チ錢子琴自カラ評注ヲ加ヘ、齊玉谿コレニ序セリ。別ニうらじぼすとつくナル東洋學院教授メンドリン譯ノ露文分冊ニ成レルモノ數冊子アリ〔一九一〇年（明治四十三年）――一九一五年（大正四年）〕、ソノ完成ト否トヲ知ラズト雖、『外史』ノ爲ニ氣ヲ

吐クニ足ルモノナクンバアラズ。

『外史』ノ文體ニ就テハ、又ソノ異論ヲ逞クスルモノ寡カラズ、ソノ尤モ喧シキハ、行文、漢人ノ筆ニ似ズト云ヘリ。吾レハ謂フ、是レ實ニ『外史』ニ取ルトコロノ多ナル所以ナリ、試ミニ『外史』ノ記述ニシテ、耳親ミ易カラザル漢人ノ作ニ類セシメンカ、吾レ其ノ流傳ノ速カニシテ且廣キコト彼レガ如キヲ得ザルヲ見ルナリ。山陽ハ、初メソノ起稿ニ先ダチ、專ラ左氏傳ノ文ヲ摹シテ、紀事ヲ習作セリ〔文集參照〕、蓋シソノ少年期ノ筆ニ係レリ。爾後、筆硯ヲ新タニシテ、初稿ヲ出スニ當リ、ソノ文體ハ一變シテ、讀ンデ親ミ易ク、解スルニ難カラザルヲ覺エシムベキモノトナレリ。

抑〻漢文體ノ作品ガ、一般讀者ノ上ニ普及シタルハ、蓋シ元祿・享保ノ頃ニ始マリ、明和・寛政ノ際ニ躍進シテ、文政・天保ニ及ビ漸次爛熟シ來レリ。ソノ間ニ在リテ代表スベキ作家ヲ求メテ、荻生徂徠ノ一派ヲ外ニシテ、室鳩巣・柴野栗山・

佐藤一齋・齋藤拙堂・坂井虎山等ハ、ソノ稱首タルベキモノナラン。山陽、乃チ群中ニ崛起シテ、天分ノ才筆ヲ揮ヒ、ソノ作ル所、題跋小品ノ如キ、稱シテソノ匹罕レナリトセラル。角田九華、ソノ作ヲ評シテ曰ク、山陽ノ文、唐・宋ヲ宗トスト言フト雖、ソノ實、清朝ノ作ニ似タリト。是レ或ハ中ラズト雖、遠カラザルモノアルヲ覺エシム。

今、『外史』ノ文ヲ見ルニ、ソノ風趣、餘リアリテ、而モ詰屈聱牙ノ態ヲ見ズ、時代ノ一般讀書子ニ歡ビ迎ヘラレシモノ、蓋シコレニ由レリ。ソレヲシテ、龜井昭陽ノ爲ル所「蒙史」ノ如クナラシメバ、ソノ流傳ノ範圍尤モ狹クシテ、『外史』全編ヲ貫通スル尊王ノ大義ハ、或ハ恐ル、反響ノ盛且大ナルモノ彼レノ如クナル能ハザリシカヲ。更ニ『外史』ノ文ノ國文ヲ以テセザリシヲ云々スルモノアルモ、當時ノ讀書界ニ在リテハ漢文體ヲコソ喜ベ、國文、殊ニ擬古體ノモノタラシムレバ、吾ハ到底ソノ普及ヲ信ズル能ハズ。是ニ由リテコレヲ觀レバ『外史』ノ盛行ハ、全ク山陽ノ筆加減、能クコレヲシテ然ラシメタリト斷言シテ不可ナキニ似タリ。

ココニ『日本外史』ヲ複製スルニ當リ、及ブ限リソノ異本ヲ擧ゲテ校注シ、以テソノ定本ヲ得來ランコトヲ庶幾セリ。解題ニ就テハ、別卷『日本政記』ノ卷頭、更ニ關聯シテ、ソノ足ラザル所ヲ補足センコトヲ期ス。

昭和六年七月三十一日

木崎愛吉

凡例九則

一、本書ハ嘉永元年出版家刻日本外史ヲ臺本トナス。

一、日本外史ハ諸本異同極メテ多シ。故ニ之ヲ對比校合スルノ要アリ。今第九刻川越本日本外史、拙修齋叢書本日本外史及ビ門田堯佐舊藏寫本日本外史ノ四種ヲ選ビ、家刻本ト對校シ、ソノ文字ノ異同ハ鼇頭ニ標記シテ之ヲ明ニセリ

一、文字ノ異同アル場合ニハ、五種本中尤モ妥當ト思ハルル文字ヲ採リ本文中ニ編入ス。

一、同一文字ニシテ前後同樣ノ相異ヲ繰返セル場合ニハ、一々之ヲ標記スルノ煩ヲ避ケテ之ヲ省略ス。

一、明ニ誤謬ト思ハルル文字ハ之ヲ訂正セリ。

一、活字ハ能フ限リ正字ヲ採用セリ。而レドモ往々其ノ然ラザル者アルハ、此等活字ヲ一々鑄造スルコトノ困難ナルト、發行時日ノ接迫セル故時間ノ缺乏セルトニ因レリ。

一、鼇頭標記中、正本トアルハ家刻本、川越本トアルハ松平家藏板校刻日本外史、拙修本トアルハ拙修齋叢書本日本外史、寫本トアルハ門田堯佐舊藏寫本日本外史ノ略稱ナリ。

一、句讀點ハ之ヲ區別セズ、一樣ニ句點ヲ用フ。

一、返點ハ文部省所定ノ法ニ準據シテ之ヲ施ス。

昭和辛未八月

賴成一識

おほきにこゝろをおこしてなかりてしと
それをわかれはしくさもけもまう
雲をうちおもひをみつからすめ
まことにたらすへし深海寺を
ありけりのさしよかりめとものの
いのち西住すれはせ證にて
して後の中たゝをたのゝ西へ
慈悲のめくみにとりつきて
かくのすゑにしかれはまさく

時有しものはよのか里や
いさらしとのゝりたる人さきれ
こゝよ志賀のさたはのひよ海い
しいゆのあ花鄰

文政十一年正月廿五日

鳳花

閣。川越本標註云。一作閣。下同。

昔。川越本・拙修本竝作古。

布衣賴襄謹再拜白

少將樂翁公閣下。襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書愛之。以爲自昔進言於當世王侯者。大抵有求而自售。識者所醜。獨轍偉魏公人物。比之名山大川。欲接其言貌以養己作文之氣。言雖近狂。其澹泊無求可知也。雖然。魏公是時猶當路秉權。人將疑轍之有求焉。

閣下。今代之魏公也。而勇退高踏。久處閑地。使襄學轍所爲。可以無嫌矣。特貴賤懸絶。不啻如轍於魏公。則徒仰而心嚮之而已。今茲。

尊嫡君侯膺

幕命。入朝謝

殷勤。川越本。掘修本竝作慇懃。

大拜之恩。襄伏在草莽。側聞盛事。而不圖邸吏帶
閣下之命。來就襄家。取所著私史。欲賜　覽觀。禮意殷
勤。愧悚交至。夫襄不敢求於
閣下。而
閣下求於襄。襄之榮大矣。復何所嫌而辭避乎。雖未接
謦欬。聞　其詞命。亦可以自壯。於是。忘其蕪穢。出以納
下執事。又敢有所瀆告。轍書稱史遷文有奇氣。他日自
作古史。則論遷之疎略輕信淺陋無識。夫遷官太史。總
領天下文籍。猶不免疎略之譏。況如襄以寒陋一書生。
獨力罔羅古今。其不自揣而招大方嗤笑。必也。然少小
嗜讀國乘。每病常藩史之浩穰。又恨其有闕。至近代之

拆。川越本標註云。拆作折、拙修本作折。

川越本・拙修本並無事字。

事與夫

隆治之所由。非無先輩撰著。又未有晰其端緒。綜各家終始者。於是。私倣遷史世家。而加詳備。斷自源平氏。至於今代。間以中興諸將。及割據群雄關係治亂者。家別紀之。或錯而合之。要覽其成敗盛衰之狀。與臣屬謀戰忠邪之跡。取其大體最明確者。若夫博引旁搜。辨拆錙銖。世自有其人。以爲非襄　輩所及也。至其義例。蓋亦有貽淺陋之嘲者。事繫

一姓之下。而不有統紀以總之。列將家。而雜以雄長。擧　今代。而稱謂論說。如欠尊崇者。是自有說焉。夫右族迭興。甲起乙仆。以成海宇之沿革。而事不必關於

帥。正本作師誤。　統。山陽遺稿作總。　統。掘修本作糾。

王室者。我中世以還之國勢也。故依實創體。以形世變。而其中貫以帝系年號。以表條理。至大義所繫。必用特書。雖廁權豪於元帥。隨成敗次第。而因署題以見統屬。而載之事實。名分截然。讀者自能見之。至若　今代稱謂。則謹據奕葉名爵。天下公行之稱。名實輕重。按跡可知。不敢私撰名號以瀆　今代而眯後世耳目。閱首至尾。睹其得失之相形。明其分裂統合之所漸。則今日無前之功德。有不待言者。又不敢喋喋頌贊使人疑其諛與溢。自謂敬之至也。凡是襄區區撰述之本意。不可不為閣下一言之。野人朴直。以所謂無求之心著書。取其簡

倣。川越本・拙修本竝作倣。

約。自便省覽。始非謀公之世也。所以引据剪裁。皆成一家私乘之體。至寫錄體貌。又一倣古史。不肯學輓近之文縟。是以拮据二十餘年。藏之篋笥。未嘗示人。今乃得閣下之寓目。以取信於天下後世。眞意外之幸也。襄雖無求於今日。而不無求於千百載。非經大賢之鑒識。不足以保其傳也。然苟得流傳。不別今與後。其損益於世道人心。尤不可不加謹。襄也病羸。不能效力父母之邦。況敢望有益於世。然生遭此極盛之運。以其庸陋之筆墨。裨補萬一焉。則不負爲太平之民也。蘇轍謂魏公。苟以爲可教而教之則幸矣。閣下其亦有以教襄焉。冒瀆　尊嚴。惶懼無已。

文政十年丁亥。五月廿一日。布衣賴襄謹再拜白。

外史例言

一此書本欲志將家興廢。以爲閫外一典。然元弘・延元之後。附屬官軍者。不可謂之非武族而略焉。元龜・天正之際。割據方隅者。不可謂之非元帥而舍焉。舍焉。略焉。則當時之事。有不覩其全者矣。平氏始之。北條氏終之。闕此二者。源氏之事。亦爲不備。故源・足利・織田・豐臣四家與我德川氏。則卷分上下。或成數卷。而其餘者。皆單一卷。以見差別。不附其後。而挿其間者。欲使讀者覽成敗分合之次第也。

一此書要詳各家興廢。以資覽觀。不敢立本紀如正史。特其中以帝王年號。幾年幾月。表明條理耳。嘗欲作年表・大事記冠之。未果也。

一署正記・前後記者。以示名分不可混也。使觀者勿以奬姦雄譏之。

一中世以還。風氣東遷。歷數興廢。而後大成於我德川氏。致今日太平・極盛之治。生於今日者。不詳從前喪亂。或不自知其生之幸也。讀此書者。自首卷漸

次覽閱。以至末編。自能見之。不必喋喋頌贊也。

一以國朝例言之。源・平爲姓。足利・北條爲氏。以西土例言之。源・平爲氏。足利・北條爲族。要不可混也。然列而稱之。因襲既久。常藩之史。亦無所分。今亦循其例。曰某氏某氏。不復甄別。讀者詳其事跡。不患不辨之矣。

一中興諸將。以楠氏爲主。自餘隸之。新田氏又未嘗膺上將之位。而置之足利氏之上。雖兵部卿之親。北畠氏之貴。皆繫其中。不復拘其資望崇卑。及相統屬與否。蓋正史自有體裁。不可得云云。此以家乘。故得伸其私心。以發幽光耳。

一近古雄長不止四族。如里見・佐竹・伊達・最上之於東。大友・島津・龍造寺・長曾我部之於西。皆是。然土地之大。事跡之繁。莫之與京。或暴致强大。亦旋興旋廢。而其事不必關係天下治亂。則不復別記。特於四氏語中。互見之。

一武田・上杉以敵國合其傳。似不倫也。然不如是。莫以能盡其爭鬪之情狀。如太史公敍魏其・武安之意。

一近時諸儒於非君非臣之間別造名號。左支右吾。議論蠭起。雖曰崇之。其實黷之。褻則不敢焉。今之所著。斷然據左氏紀齊晉漢書紀霍氏之例。皆用見今公行之名。以直書其實。名實之際。使讀者自見之。不復私撰稱謂。以昧後世耳目。抑吾輩文字。何干天下名義。然自我亂之。亦心所懼。後之君子。必有取此言焉。

一歸有光云。史記合傳。本是一滾寫。分頭別項。出於後人。此說爲是。然分其頭緒。可便省覽。此書合傳。倣史記體。而寫樣故仍俗本。如楠氏及武田・上杉是也。

一此書倣史記世家。而詳略迴異。猶包三國諸臣傳於劉・曹・孫語中。又不殺其事跡。而務省約。故致卷册彭亨。頭緒煩數。讀者靜心熟閱。不患不了了。蓋此間有宇宙未曾有之國勢。敍之當用宇宙未曾有之文體。

一源平諸臣系譜本末。就各語中首尾照管。略使可概見。細川・上杉等之於足利氏亦然。至於今時列國之先。毛利・長尾等自有別志。其餘錯出於織田・豐

臣・德川三家中。至德川氏勳舊。則具於德川語中。皆是例也。

一中世以後。將士有濫稱官號代字者。有通稱小字者。今槩從刪殺。獨擧姓字。尙簡省也。其間又有以字著稱者。又有事跡中須擧字者。特表之。其他當族異日。盡注其傍。

一各家事跡。有甲是乙非疑出愛憎者。其無大異同者。兩存各語中。使讀者照對審察。

一敍是傳。則稱謂言語。皆如私是人。是紀傳體耳。如史記傳項羽。不得爲當代變其體。觀此書者。幸諒之。

一古史於當代之事。不必提書・闕字・闕畫。蓋史體爲然。又臨文不諱之意也。爲之者始於明淸。雖臣子之禮。而近於繁縟佞諛。今不敢從。

一父母之邦。稱呼異例。亦私書之體耳。觀者諒之。

一古人云。讀史記一事。紀中有之。傳中亦有之。易於記識。如通鑑。一見輒沒了。是紀傳之所長也。如此書。敍關原一役。織田・豐臣・毛利・上杉皆擧其概略。而

後特詳於末編。不避重複。其他皆類此。

一自幼至老。所嗜在此。所讀不下數百部。就中常藩國史・成績。及東府諸家所著。引證宏博。考索明覈。故因以爲根據。力可及者。盡檢其所原。時補萬一之遺。又有私心不敢從者。不盡疏辨。極知其多疏繆脫誤。又照管不及。交相矛盾者。竢正於博雅耳。

一凡事跡領其大意。而馳騁顚倒。期於明瞭。故不能一一注其所出。

一凡敍事。雖已入前人雅文者。其可變者變之。以成一家言。然事詞允當。不可易者。不得不依舊。非敢勦襲也。大抵主明白質實。直寫情勢。不敢文飾。

一序論論贊。皆言其不可已者。自敍編述之意。或取與敍事相發。不敢甚高論。即有與前人雷同者。亦存而置之。不必標新領異。

子成氏識

日本外史引用書目

神皇正統記
今昔物語
陸奥話記
奥羽軍記
將門記
純友追討記
後三年合戰草紙
保元平治物語
平家物語
長門本平家物語
源平盛衰記

東鑑
承久記
太平記
異本太平記
參考太平記
太平記綱目
櫻雲記
伯耆卷
菊池軍記
關城書
保曆間記

梅松論
花營三代記
足利治亂記
室町殿日記
明德記
應永記
富士御覽記
北山行幸記
椿葉記
永亨行幸記
長祿寬正記

嘉吉記
結城戰場物語
應仁記
應仁略記
應仁別記
重編應仁記
文明一統記
鎌倉大草紙
細川勝元記
細川政元記
三好成立記
三好別記
松永記

十河物語
穴太記
光源院記
赤松記
北條五代記
房總治亂記
豆相記
相州兵亂記
河越記
國府臺前記
國府臺後記
北條早雲箇條書
里見軍記

蘆名記
伊達成實記
最上記
山形記
東國太平記
甲亂記
甲陽軍鑑
武田三代記
北越軍記
謙信軍記
河中島合戰記 幷圖
北國太平記
上杉輝虎注進狀

中國治亂記
陰德太平記
江就記
毛利家記
筑紫軍記
別所長治記
長曾我部元親記
九州治亂記
信長記
織田眞記
立入宗繼記
太閤記
天正記

豐鑑
小松記
富樫記
淺井軍記
朝倉軍記
江北記
江濃記
蒲生氏鄉記
惟任退治記
柴田退治記
余吾莊合戰覺書
紀州發向記
島津家記

朝鮮軍記并圖
朝鮮征伐記
高麗陣日記
朝鮮物語
淸正記
前田軍記
黑田長政記
細川忠興記
將士美談
武邊物語
武家閑談
武者物語
武將感狀記

武家高名記
武家盛衰記
老人雜話
故老物語
大河內秀綱物語
三河記
三河物語
松平譜
德川記
創業記
藤澤寺緣起
松榮紀事
家忠日記

增補追加家忠日記
關原記
關原軍記幷圖
關原記大全
關原外記
石田記
石卯餘史
駿府政事錄
東照宮御遺訓
御遺訓附錄
御遺誡
慶長記
慶長一統記

慶長日記
元和記
四戰紀聞
三形原合戰記幷圖
小牧合戰圖
大坂記
大坂軍記幷圖
難波戰記四種
冬夏日記
秀賴記
大坂首帳
若江合戰記
大坂冬夏陣覺書

櫻井合戰記幷圖
淺野家記
淺野家臣記
小幡景憲事記
酒井家記
本佐錄
落穗集
玉露叢
玉滴隱見
岩淵夜話
武野燭談
㭴營祕鑑
諸家大祕錄

諸家深祕錄
君臣言行錄
續日本紀
續日本後紀
文德實錄
三代實錄
令義解
類聚三代格
延喜式
姓氏錄
三善淸行意見封事
職原鈔
皇胤紹運錄

尊卑分脈
公卿補任
武家敍任
大系圖
武家大系圖
足利系圖
細川系圖
德川系圖
上杉系圖
貞永式目
建武式目
知譜拙記
主圖合結

武鑑五種
水鏡
扶桑略記
世繼物語
榮華物語
續世繼物語
增鏡
宇治拾遺
玉海
百錬鈔
愚管鈔
古事談
續古事談

著聞集
十訓鈔
徒然草
愚昧記
後愚昧記
康富記
親元記
祇園執行日記
東寺執行日記
吉野拾遺
義貞記
菊池武朝申狀
吉野事書案

新葉集
宗良親王集
大日本史
大日本史贊藪
國史實錄
烈祖成績
藩翰譜
王代一覽
鎌倉將軍譜
京都將軍譜
織田信長譜
豐臣秀吉譜
東照宮年譜

年譜附尾
武德大成記
武德安民記
武德編年集成
東遷基業
東遷成基
大業廣記
元史
明史
明史紀事本末
懲毖錄
皇明通紀
皇明實紀

兩朝平壤錄
中山傳信錄
異稱日本傳
和漢合運
木下長嘯集
羅山集
讀史餘論
五事略
保建大記
本朝通紀
中興鑑言
制度通
南留別志

駿臺雜話
通語
逸史
常山紀談
稱謂私言

日本外史目次

卷之一
源氏前記
平氏……一
卷之二
源氏正記
源氏上……四九
卷之三
源氏正記

源氏下……八九
卷之四
源氏後記
北條氏……一二七
卷之五
新田氏前記
楠氏……一六七
卷之六
新田氏正記
新田氏……二〇七

卷之七
足利氏正記
足利氏上……二四三
卷之八
足利氏正記
足利氏中……二八五
卷之九
足利氏正記
足利氏下……三一一
卷之十

足利氏後記
後北條氏……………………三三三

卷之十一
足利氏後記
武田氏　上杉氏……………………三六三

卷之十二
足利氏後記
毛利氏……………………四〇九

卷之十三
德川氏前記

織田氏上……四四七
卷之十四
德川氏前記
織田氏下……四七七
卷之十五
德川氏前記
豐臣氏上……五一三
卷之十六
德川氏前記
豐臣氏中……五五七

卷之十七
德川氏前記
豐臣氏下……五九九
卷之十八
德川氏正記
德川氏一……六三七
卷之十九
德川氏正記
德川氏二……六六七
卷之二十

德川氏正記
德川氏三……六八九
卷之二十一
德川氏正記
德川氏四……七二五
卷之二十二
德川氏正記
德川氏五……七八三

日本外史　卷之一

源氏前記

平氏

川越本・拙修本並在下有於字。

在此時。寫本作在於此。

偏。諸本作編非。

蓄。正本作畜。

外史氏曰。吾讀舊志。見鳥羽帝時。數下制符。禁諸州武士屬源平二氏。曰。大權之歸將門也。其在此時歟。及讀三善清行封事。陳宿衞豪横之患。乃知制度之弊。其來久矣。非壹始於此也。蓋我朝之初建國也。政體簡易。文武一途。擧海內皆兵。而天子爲之元帥。大臣・大連爲之偏裨。未嘗別置將帥也。豈復有所謂武門・武士者哉。故天下無事則已。有事則天子必親征伐之勞。否則皇子皇后代之。不敢委之臣下也。是以大權在上。能制服海內。施及三韓・肅愼。無不來王也。及至中世。摹倣唐制。官分文武。乃特置將帥。六衞之將。將天子親兵。而兵部居八省之一。建左右馬寮。以蓄貢馬。而邊要之國。諸郡皆有軍團。三分一國之丁。

于。寫本作之。

川越本・掘修本竝出字在自字上。

場。川越本作埸非。

而取其一五人爲伍。伍二爲火。火五爲隊。隊二爲旅。旅十爲團。各有首領。一火六馬。使騎射者。特爲騎隊。皆任守令簡點。衞京戍邊。按籍差遣。每擧征伐。令沿道諸國。須契敕勘合。凡征行萬人。乃有將軍。有副將軍。有軍監。有軍曹。有錄事。每總三軍。大將軍一人。大將出征。必授節刀。臨軍對敵。首領不從約束者。皆聽專決。還日。具狀以聞。建勳位十二等。論功酬賞。而罷其兵。凡其器仗藏于兵庫。出納以時。皆管之於兵部。中朝制兵。大略如此。雖不及上世之旨。其防亂慮禍。可謂密矣。是故有事。則下尺一之符。數十萬兵馬立具。而平時散歸卒伍。爲之將帥者。或自文吏出。臨兵陣。畢事而歸。脫介冑而襲衣冠。未嘗有所謂武門武士者也。及藤原氏以外戚世執政權。卿相之位。非其族人不擬。官論品流。因習成俗。庶僚百揆。概世其職。而將帥之任。每委源平二家。於是乎。始有武門之稱焉。光仁・桓武之朝。疆場多事。寶龜中。廷議汰冗兵。殷富百姓才堪弓馬者。專習武藝。以應徵發。其羸弱者。皆就農業。而兵農全分。至貞觀・延喜之後。百度弛廢。上下隔絕。奧羽・關東之豪民。以軍功至六衞舍人者。或坐制鄉曲。不勤宿衞。而

守令莫之能制。清行所謂非六軍貔虎。而爲諸國豺狼者。所在皆是。平居藏甲蓄馬。儼然自稱武士。於是乎。始有武士之稱焉。自從天慶。馴致寛治。源平二氏。數鎭東邊。每用此輩。以奏功效。而各有所習用。以相隸屬。因襲之久。如君臣然。自是其後。苟有事。輒命之二氏。二氏各發其隸屬赴之。如探物於嚢。不復煩選將徵兵。而討伐勦誅。莫不立辦。廟堂之上。務取恬熙。不憂其勢之積重不回。方且延爲爪牙。以相傾排而已。鳥羽之下此令也。如察其弊者焉。而不窮弊之所由。於救之之術。蓋已疎矣。當是之時。源氏有梗命者。敕平氏討之。平氏有難制者。令源氏誅之。更相箝制。以爲得控馭之術。而不知異日搏噬攘奪之禍。又甚於此。敗壞古制。苟媮一時。皆足以自取困蹶也。抑戎事。民命所繫。而兵食之權。不可一日去國。先王之必躬親之。其旨深矣。今委之一二宗族。又賤其事而不省。至於別其品類。不齒之朝廷之上。甚則奴僕視之曰。是武門耳。是武士耳。及其論功行賞。或悋而不與。嗚呼。幾何其不相率以自棄於法度之外也。特以積威所約。抑不敢發爾。至於保元平治之際。乃乘釁而起。潰裂四出。不復可收。横

後之憂世者以下十一字。寫本作後之君子可以覽觀焉。

子高見以下八字。寫本作三子高棟・善棟・高見王。高見王子高望王。寬平中。

高望四子以下二十三字。寫本作高望王・國香・良將・良兼。

檢。諸本作撿。下同。

寫本無亦來以下十字。

流之極。終致失其千歲不拔之權。而授之嚮所奴僕視者。可勝慨哉。吾作外史。首敍源平二氏。未嘗不歎王家之自失其權。而國勢之推移。有非人力所能維持者。因世變以見得失。後之憂世者。將有以留心焉。

平氏出自桓武天皇。天皇夫人多治比眞宗生四子。長曰葛原親王。幼有才名。長而謙謹。好讀書史。觀古今成敗。以自鑒。敍四品。任式部卿。子高見。孫高望。高望賜姓平氏。拜上總介。子孫世爲武臣。其旗用赤。高望四子。國香・良將・良兼・良文。並任東國守・介・鎭守府將軍。國香子曰貞盛。材武善射。爲左馬允。良將子將門。性桀黠。倚攝政藤原忠平。求爲檢非違使。忠平不省。將門怒。去之東國。據相馬里。刧掠常陸・下總。時國香爲常陸大掾。良兼爲下總介。皆與將門有隙。承平中。將門終攻殺國香。將門之在京師也。嘗詣敦實親王。從兵可五六騎。適貞盛亦來謁。會將門出門。貞盛謂人曰。將門必生事天下者。今日恨不率士卒。卽率士卒者。當擊殺之。至是。貞盛棄官而東。欲復父仇。與良兼及從弟良正。共攻將門。不利。貞盛謂。是私鬭也。不若受敕討之。將還京師。有所請。將門要擊之信濃。

維幾。寫本作維畿。
塞。拙修本作出。
相摸。拙修本作相模。下同。
將平。正本作正平。
耶。川越本・拙修本並作邪。廣韻云。邪與耶同。下皆從耶。
天慶二年
天慶三年
征東。拙修本作征夷。
鄕。拙修本作卿。下同。

貞盛大敗。脫身入京師。已而良兼卒。將門乃據下總。遂襲執常陸介藤原維幾。取常陸。武藏守興世王。兇險喜亂。往說將門曰。關東八州。沃饒而四塞。可據以霸天下。夫取一州誅。取八州亦誅。誅一耳。顧公安所決。將門大悅。延爲謀主。遂攻下野・上總・武藏・相摸。悉下之。弟將平諫曰。帝王有命。不可妄冀。願熟圖之。將門曰。天縱我以武。吾取帝位。孰能拒之。乃建僞宮於下總猿島。置文武百官。初將門與藤原純友者友善。嘗同登比叡山。俯瞰皇城曰。壯哉。大丈夫不當宅此耶。遂與謀反。謂純友曰。他日得志。吾王族。當爲天子。公藤原氏。能爲我關白乎。至是純友爲伊豫掾。任滿不還。據海島爲盜。以遙應將門。潛遣人入京師。行火坊市。京師戒嚴。時天慶二年也。三年。朝廷拜參議藤原忠文爲征東大將軍。率諸將東伐。發東海・東山兵。募以重賞。而任貞盛常陸掾。發兵討將門。將門聞之。率兵索貞盛於常陸。不得。乃散其衆。獨以千餘人至下野。下野有押領使藤原秀鄕。世爲大族。及將門起兵。往見之。將門方梳髮。捉髻而出。款接之。命食共食。飯粒墮前。拾而食之。秀鄕知其輕率不足與有爲也。乃從貞盛。貞盛窺將門無

後。川越本・拙修本・寫本皆作累。

天仁元年

大治

追。川越本・拙修本竝作逮。

備。與秀郷合兵四千餘人。急襲之。將門遽出拒之。大敗。貞盛乘勝疾攻。將門欲誘之險阻。走據島廣山。貞盛火其營。大戰于山北。將門以見兵四百騎死鬭。貞盛麾兵蹙之。將門獨身出走。貞盛叱咤追馳。射中其右額。墮馬。秀郷斬其首。與世王以下。悉伏誅。梟于京獄。八州皆定。而純友尋平。忠文等皆途還。貞盛以功敍從五位上。後遷從四位下。任鎭守府將軍。兼陸奧守。世呼曰平將軍。貞盛四子。季維衡最勇。與平致頼・源頼信・藤原保昌齊名。稱四天王。任下野守。後私與致頼鬭。謫徙淡路。貞盛又養從子維茂。亦勇敢亞維衡。維衡曾孫正盛。有武幹。時平氏與源氏。竝爲武臣。而源義家樹功邊陲。宗黨尤强。其長子義親。爲對馬守。剽掠九州。殺官使。流隱岐。逃歸出雲。殺吏奪貢賦。勢甚猖獗。於是。詔正盛爲追討使。賜鐸鈴。率兵討之。與義親戰。斬其首。梟于京獄。時天仁元年也。正盛生忠盛。忠盛居伊賀・伊勢之間。爲人眇一目。大治中。山陽・南海盜起。忠盛追捕有功。事白河・鳥羽二上皇。竝有寵焉。鳥羽上皇建得長壽院。以忠盛董役。役竣。除但馬守。聽昇殿。擧朝憎之。謀以豐明節會。乘暗刺之。忠盛曰。朝則蒙訴。不朝爲

甆。正本作瓫。

仁平

祇。拙修本作祗。非。

針。川越本・拙修本竝作鍼。

稈。拙修本作稗。

捉。正本作提。

怯。其辱宗一也。乃帶刀而入。家人平家貞與其子家長。裏甲從焉。吏訶止之。家貞對曰。主君有戒心。臣將與之同死。吏不得止。忠盛昇殿。就闇拔刀。刀光外射。衆大畏。不敢發。及宴。召忠盛命舞。衆歌曰。伊勢瓶子醋甆。蓋國音瓶子通平氏。醋甆通眇也。忠盛愧之。不終宴退。呼主殿司。脫刀授之而出。衆劾奏忠盛帶劍上殿。以兵自衞。請正典刑。上皇驚。召忠盛問之。對曰。臣之家人聞道路之言。尾臣而來。不使臣知。唯陛下斷其罪。如其佩刀。請問之主殿司。主殿司進刀。木刀塗銀也。上皇嘻曰。忠盛用意良苦。以死衞君則武人之習耳。遂無所問。忠盛累遷。以正四位下・刑部卿。卒於仁平中。忠盛有七子。曰。清盛・經盛・敎盛・家盛・賴盛・忠重・忠度。而清盛最極寵貴。初忠盛之事白河上皇。上皇有嬖姬。居祇園祠傍。嘗夜幸焉。雨甚。覩鬼髮如束針。乍覩乍失。命忠盛射之。忠盛捕而視之。一老僧束麥稈以代笠。捉火器行吹之。曰將上燭于祠也。上皇謂忠盛膽勇可倚。益有寵。所幸宮人兵衞佐局。與忠盛私。有身。上皇卽賜之曰。生女則朕取之。卽男也。卿以爲子也。宮人免身生男。是爲清盛。後更娶妻。生家盛・賴盛。清盛出依中御

權。寫本作柄。

保元元年

門氏。大治中。任左衛門尉。累遷至從四位下・安藝守。航海赴任。有魚入其舟。或曰。興家之兆也。先是。鳥羽太子受禪。是爲崇德帝。帝母璋子。幼養於白河法皇。鍾愛之。及長不衰。頗涉物議。鳥羽是以不子視崇德也。戲目之曰叔父兒。鳥羽寵姬曰得子。號美福門院。生皇子體仁。命崇德養爲太子。四歲受禪。是爲近衛帝。帝崩。崇德希復位。崇德皇子重仁。又長而賢。中外屬望。而美福以近衛蚤世爲出呪詛。乃密勸鳥羽。立崇德同母弟雅仁。是爲後白河帝。朝野駭然。崇德憤恚。召左大臣藤原頼長。語之以情。頼長慧黠。世稱惡左府。與兄忠通爭權。不逞。欲使上皇復位。而己專柄也。乃慫慂擧兵。物情恟然。保元元年。七月。法皇崩。即夜葬之。上皇遂擧兵。據白河殿。源爲義等屬之。法皇豫度有變。遺命諸將當召者。清盛不與焉。蓋以忠盛夫妻傅重仁也。美福曰。安有强如平宗。而不召乎。遂召之。清盛擧其宗。應召焉。叔父忠政。獨赴上皇宮。清盛義子基盛。爲檢非違使。擒上皇黨源親治于宇治。已而敕源義朝攻白河殿。留清盛等衛宮。少納言藤原通憲奏。使清盛同往。清盛長子曰重盛。從父攻其西門。西門將源爲朝善拒。

平治元年

竝。正本作幷。

我先鋒二將。爲其所射殺。清盛曰。吾受命。不必此門。重盛不肯曰。擇敵而進。豈武臣所爲乎。兒請當之。清盛令兵士擁止重盛。與共攻南門。白河殿陷。上皇出走。入如意山。削髮奔南都。途被執。遷于讚岐。賴長中流矢。已而自殺。帝詔清盛捕爲義。未獲。忠政出。依清盛乞降。不聽。殺之。朝議因令義朝殺爲義。以清盛爲播磨守。超遷太宰大貳。重盛以下。受賞有差。始興甲第于六波羅。義朝視平氏聲望出己上也。心常嫉之。藤原通憲娶清盛女爲婦。亦與義朝有隙。通憲參與大議。多所釐正。帝授位太子。是爲二條帝。而上皇仍聽政。政在於通憲。上皇嬖人曰藤原信賴。求爲近衞大將。上皇欲聽之。通憲不可。因圖唐安祿山事跡上焉。以諷之。信賴慚恨。乃與義朝。深相結納。陰謀作亂。藤原經宗・藤原成親・藤原惟方等。皆與其謀。謀既定。而畏清盛。不敢發。平治元年。冬。清盛・重盛率筑後守家貞等五十人詣熊野。行至切部。六波羅使者來告曰。昨夜信賴・義朝。與源賴政・源光基等。率兵五百。圍三條殿。火之。竝火少納言第。殺傷無算。遂幽上皇及主上於禁內。少納言亦遭害矣。衆愕然。清盛曰。爲之何如。宜到熊野計之乎。重

川越本標註云。下失一作矣。屬上句。寫本無下失字。

躍。正本作踊。

盛曰。武臣赴天子之急。何猶豫爲清盛曰。如無甲何。家貞曰。臣豫慮有是事矣。
開其擔。出甲冑五十。器械弓箭稱之。衆乃結束北還。已而聞源氏兵要阿部野。
清盛曰。彼衆我寡。我且避之四國。以謀再舉。重盛曰。機不可失。失今不伐。彼將
先我。我寡而敗。何恥之有。今日之事。有死而已。清盛曰。吾志決矣。率衆疾馳。未
至阿部野。遇一騎。衆意。源氏使也。騎至。曰。臣至自六波羅。六波羅之兵迎駕見
在阿部野。請速歸。衆相喜慶。踴躍入京師。當是時。信頼自爲大臣大將。義朝以
下。皆拜官。信頼衣冠僭擬乘輿。坐百官上。聽斷庶政。百官莫敢仰視。獨左衛門
督藤原光頼不屈。因會議折信頼。勗其弟惟方。護二宮。以待清盛。清盛既還。信
頼聞之。益諸門守兵。清盛謀怠其備。乃致名簿於信頼。以示無他。清盛計拔帝。
乃與惟方通謀。夜放火二條大宮。守門兵舍守救之。天皇乃與皇后同車。蒙衣
而伏。出藻壁門。惟方從。門者誰何。惟方曰。宮人也。門者燭於車中。曰。可矣。既出。
重盛以騎三百迎謁于途。奉入六波羅。百官萃焉。關白藤原基實亦至。衆以其
妻信頼妹也。疑之。或告清盛曰。關白至矣。清盛曰。此大臣也。假令不來。吾固將

兵。川越本・拙修本並作路。

闕。川越本・拙修本並作閉。

勵。正本作厲。下同。

墮。正本作墜。下同。

宸。正本作震非。

追。拙修本作迫。

濠。正本作壕。下同。

召焉。衆心乃安。已而上皇又逃於仁和寺。而信頼等仍據大內。帝召清盛命討賊。且戒之曰。宜佯退走。誘賊出宮。莫使宮闕罹兵燹也。清盛對曰。臣誅逆賊。如指之掌。勿以勞天心。至若後命。臣甚惑焉。雖然。不敢不盡心。乃勒兵三千騎。令重盛・敎盛・頼盛將之。分兵赴大內。賊開昭明・建禮二門。闕陽明・待賢・郁芳三門。樹白旗二十餘旒守之。我兵望見色動。重盛勵衆曰。年爲平治。地爲平安。而我平氏也。天示吉兆。獲勝必矣。汝輩努力。乃分其兵爲二。留一于大宮巷。以其一傅待賢門。大呼挑戰。信頼怖墮馬。重盛排門而入。至大庭椋樹下。與源義平。大戰紫宸殿前。七匝櫻橘樹。出至大宮巷。杖弓以息。平家貞目之曰。可謂平將軍再生矣。重盛更兵復入。義平呼曰。我源氏嫡子。公平氏嫡子。宜與決死也。重盛曰。諾哉。乃進戰且退。與二卒景安・家泰俱走。義平及鎌田政家追之。至二條濠。重盛踰濠。政家射之。中肩及背。甲堅不入。射馬。馬倒而胄墮。政家薄之。重盛扞以弓。取胄被之。景安至。搏仆政家。爲義平所殺。重盛怒。欲親鬬。家泰進。與義平相搏。爲政家所殺。重盛得間走。當是時。頼盛等攻郁芳門。與義朝戰。退走。義朝

寫本無走字。

卒有善走者八町二郎。以鐵搭鉤其冑。賴盛拔刀截搭。二郎仰仆。賴盛走。源氏兵空宮而出。敎盛乃以千騎橫入大內。關諸門守之。義朝・義平。無所獲而還宮。宮皆赤旗矣。進退失據。遂進攻六波羅。清盛乃上北臺。踞床指麾。賊兵沓至。官軍逡巡。賊乘勝而進。矢及內戶。清盛怒。上馬。大呼馳出。親突敵陣。更兵交進。賊遂大敗走。清盛乃入大內。收名籍。笑曰。昨予今取。何速也。乃分兵追賊。義朝奔關東。信賴至仁和寺。乞哀於上皇。上皇爲請之於帝。帝不許。重盛曰。卽宥之。彼何能爲。清盛曰。首惡不可不誅。且如帝命何。乃遣敎盛。引兵圍仁和寺。捕信賴及其黨源師仲・藤原成親等五十餘人。斬信賴于六條磧。重盛・敎盛。與成親有姻。乞而宥之。帝賞清盛戰功。進其子弟官爵。尾張人長田忠致。誅義朝。獻其首。梟之獄門。賴盛將平宗清。亦捕義朝少子賴朝至。將斬。宗清憫之。因池尼請宥。池尼。賴盛母。於清盛爲繼母。清盛不聽。尼怒曰。刑部卿而在。汝安得侮我言乎。重盛與賴盛固請。乃減死一等。流于伊豆。義平變服入京師。狙擊清盛。清盛覺之。捕獲斬之。平氏威振天下。肥前人日向通良作亂。遣平家貞討夷之。當是時。

永暦元年

永暦二年

永暦六年 六年。川越本・拙修本竝作六歳。

永萬元年

疾。正本作病。下同。

政在上皇。藤原經宗・藤原惟方。勸帝親政。兩宮交惡。上皇引清盛自援。永暦元年。上皇進清盛正三位。任參議。清盛乃奉上皇旨。收執經宗・惟方。帝嘗納故近衞帝后。爲中宮。世呼之二代后。清盛以二人不諫。陷帝於惡。爲罪。欲斬之。前關白忠通救解。乃宥死處流。明年。清盛累遷。至權中納言。六年。遂進從二位。任權大納言。重盛至正三位・參議。永萬元年。秋。帝崩。諸寺僧徒會葬。延暦・園城二寺。爭禮欲鬭。上皇召源頼政自衞。有訛言。上皇圖平氏。平氏大驚。聚兵自守。重盛曰。事必妄也。請往法住寺。親驗之。法住寺。上皇宮也。乃往。途遇上皇來幸平氏第。欲口解諭。因扈還。清盛稱疾不出。重盛入而諫曰。大人宜出謁。吾宗有功無罪。事何遽至此。大人愼勿形之辭色。不則讒或因以入。苟吾之執忠直。何渠畏人言。清盛善之。而竟不出。上皇還。謂左右曰。訛言誰使之者。藤原師光前曰。天使之言耳。衆無敢應者。師光。阿波人。嘗以狡黠。爲藤原通憲所愛使。後削髮稱西光。爲院北面。頗有寵。心嫉平氏驕恣。數承間說上皇。是時。太子嗣立。是爲六條帝。帝幼。政復歸上皇。上皇寵后滋子。爲清盛妻時子之妹。生憲仁。上皇欲立

仁安元年

仁安二年

仁安三年

嘉應元年　次。拙修本・窮本竝作長。

資盛下于。正本作之。

承安元年

承安四年

治承元年

之。仁安元年。以清盛敍正二位。任內大臣。二年。遂至從一位。陞太政大臣。賜隨身兵仗。聽輦車入宮。敕賜邑于播磨・肥前・肥後。爲大功田。世襲。重盛敍從二位。任權大納言。聽帶劍昇殿。次子宗盛。敍從三位。任參議。三年。二月。憲仁受禪。甫五歲。是爲高倉帝。帝母之兄大納言時忠謂衆曰。方今。天下之人非平族者。非人也。當是時。平族爲朝官者。六十餘人。其采邑跨三十餘州。朝政盡決於清盛。清盛有疾。詔行非常赦以禱之。既而清盛削髮稱淨海。興別第于西八條居焉。選童三百。服異服。散布京城內外。察誹謗者。輒處法。京師側目。上皇積不能平。嘉應元年。上皇削髮稱法皇。平氏益橫。重盛次子資盛。與數騎出獵。途値攝政藤原基房。不下馬。徑衝其衞。衞士捽而下之。重盛責資盛無禮。基房縛送衞士以謝。重盛釋其縛。勞而遣之。清盛聞之。怒曰。當今日。誰敢辱淨海之孫者。必報之。重盛諫止。清盛弗聽。伏三百人。要基房于路。摧折其車。切從者髻。帝因輟朝三日。重盛逐資盛于伊勢。承安元年。清盛進其女德子爲女御。遂立爲中宮。四年。右近衞大將闕。重盛奏請。自拜之。治承元年。轉左近衞大將。尋拜內大臣。居

西。描修本作酉非。
師。正本作市。
寫本無鬬僧徒三字。川越本標註云。一無門字。
座。正本作坐。

小松第。弟宗盛爲右近衞大將。已而進正二位。朝臣舉妬平氏。藤原成親以權大納言。爲法皇執事。重盛娶其妹。生子維盛。又娶其女爲子婦。成親子成經。娶敎盛女。然成親殊希爲大將。而不得。居常憤憤。遂圖滅平氏。乃與西光謀。饗藏人源行綱。密語之曰。平氏專恣。子所目也。吾受院敕。陰圖之。而未得將率焉。子源氏胄也。盍爲我將。成殊功。取顯位。行綱諾之。成親遂結檢非違使平康賴・式部大輔藤原章綱・前近江守源成雅等。又欲結法勝寺執行俊寬。數飲之酒。令姬人侍焉。因乘間說之。會其鹿谷別館計事。宴酣馬逸。坐者驚起。誤仆瓶子。成親曰。平氏仆矣。西光曰。盍梟其首。康賴進曰。梟首檢非違使之任也。取瓶懸之柱上。一坐大笑。成親因建策曰。祇園祭日。京師雜沓。乘此時縱火平氏第。疾攻之。可以逞矣。乃遺行綱布五十匹。部署諸將所向。未發。西光子師高。爲加賀守。其目代師經。與白山僧徒鬬。僧徒來訴之延暦寺。延暦寺僧徒與之合兵。入京師犯闕。重盛以三千騎衞宮門。擊卻之。山徒不服。還圖再舉。法皇令平時忠往諭解之。五月。請師高・師經流之。西光慚恨。終間叡山座主明雲於法皇處流。明

鞫。正本作鞠通。構。正本作搆。下同。

雲素善清盛。清盛爲奏救之。不省。已而山僧奪還明雲。法皇怒。敕諸將士討之。清盛不奉敕。則更敕成親。成親大喜。因聚兵。行綱自度。事竟不成。不若自首。乃夜馳赴西八條。聞清盛在福原。又赴焉。請而告事。清盛出面之。行綱曰。院中集兵。君知其由乎。清盛曰。欲攻山徒耳。行綱進。附其耳語曰。否。否。事係貴族。嚮日。新大納言氏。俄要行綱于鹿谷。謀云云。聞法皇亦欲親臨焉。因法印靜憲諫之而止。事已至此。不敢不告。清盛大駭。直歸京師。悉召子弟宗族。遣檢非違使阿部資成。就院中奏曰。有凶徒。圖滅臣宗。臣且執而鞫之。然事必有源。是以敢奏。法皇失色。不知所答。乃縛西光至。使跪階下。清盛叱曰。下奴。恃過分之寵。構陷無罪。又敢欲危我家。西光笑曰。何謂過分乎。公之父但馬守。朝官所愧齒。公爲其嫡子。常著高屐。伺候中御門氏。人呼曰高平太。比十八九。以捕海賊二十人功。爲四位兵衞佐。人以爲異數焉。而今乃至於太政大臣。是之謂過分耳。清盛大怒。躍起蹴其面。痛掠治之。得實。命裂其口。又使人召成親。成親未知事覺。曰。平公欲宥山徒。令吾請法皇耳。乃往。比及西八條。見甲士繹騷。心驚。及入門。平

用。川越本作以。
川越本無原字。

擊。川越本・拙修本並作毆。
爵。拙修本作屬。
下。拙修本作平。

氏士難波經遠・妹尾兼康、耦進捽之、因於小室。將待昏殺之。成經・康賴以下。皆被逮捕。久之。重盛至。衆迎而謂之曰。有大事。公來何晚。重盛曰、是私事。何言大事。入謂清盛曰。聞欲殺六納言。願再思之。兒豈以姻戚云爾哉。彼爲名族。受君寵。未可用私怨殺也。往時。少納言信西（シンサイ）、與行死刑。發惡左府之墳。未二歲。信西之墓、亦爲藤原信賴所發。善惡之應。殃慶立至。願再思之。出見經遠・兼康。讓其亡狀。因戒之曰。愼勿使我公乘怒抵悔。乃歸。敎盛亦爲成經固請。皆得減死。而清盛怒不自禁。乃就見成親。成親低首。清盛呼而仰之曰。公面可憎。公當死於平治者。因內府之請宥之。祿位並隆。何苦而反。成親曰。僕何與知焉。事必出讒口。僕於貴族。有何所怨。敢倍畔也。清盛顧左右。取西光狀來。乃自讀二過。曰。猶言不與知乎。公面可憎。以其狀擲成親面而入。令經遠・兼康拷掠成親。二人畏重盛。下成親于庭。附其耳曰。我公隔壁而聽、君第叫號。二人擊地。成親輒叫。清盛曰。可矣。於是。清盛乃被甲。執長刀而出。召平貞能曰。亟戒將士。今擧朝之人。嫉我圖我。蓋謂我官爵踰分耳。在昔。田村丸。微者也。以下東夷功。超拜大將。他

多類此者。豈獨淨海。淨海勤勞非一日也、保元之變、我宗族大半赴新院。且重仁親王者。我父所覆育也、而我思故院遺詔。獨屬官軍。終克平亂逆、平治之變。信賴・義朝之猖獗。吾而自愛。事未可知。重命輕躬。夷滅凶黨。以至於收經宗・惟方等。數冒大難。無非爲官家者。以此言之。官家恩宥。雖窮子孫可也、今乃輕信讒言。欲見族滅。卽毋告者。豈不危殆。異日。細人有再進言。則下宣討我。曰我爲賊不可悔也。吾欲先發移之鳥羽宮。否者。請幸於此耳、北面奴輩、或且扞我。亟戒將士。有主馬盛國者。馳告重盛。重盛大驚。急命駕赴之、入第門。族人皆擐甲鞍馬、旗幟成列。將起。重盛烏帽直衣而入、宗盛叩其袖曰、公何以不被甲、重盛睨曰、汝等何以被甲。敵人何在乎。吾爲大臣・大將。自非有寇賊犯闕。則不宜被甲也、淸盛望見之。遽起表黑衣而出。數正襟。襟呿甲覩、謂重盛曰、吾察西光狀。如成親等。乃其枝葉耳。間羣小彙進、覬覦不已、而御以輕躁之君。何所不至、我欲且請幸一邊。以待事定。語未畢。重盛泣數行下。久之言曰。重盛熟視尊貌。知家門已屬衰運也。重盛聞之。世有四恩。皇恩爲最、抑我門雖辱桓武・葛原之胤。

而降爲人臣。中微不顯。以平將軍之功。而不過國守。刑部卿聽內昇殿。萬人反脣。及至大人。乃陞太政大臣。以兒之不肖。且辱大臣・大將。宗族駢植朝廷。田園半於天下。叨恩極矣。爲官家所疾。誰謂不宜。而運命未艾。讒人既獲。宜論罪所當。退陳事由。則公家豈有不霽威。何必草草爲也。兒又聞之。以王事辭家事。不以家事辭王事。況善惡較著者乎。重盛自六位至三公。沐浴君恩。不可勝舉。嚮背之決。自有在焉。素所撫循士。願爲重盛死者。二百餘人。保元之亂。源下野守以敕命斬六條判官。兒在當時。以爲大逆無道。不忍言者也。此非大人所親睹乎。欲忠則不孝。欲孝則不忠。重盛進退。窮於此矣。生覲是慼。不若死也。大人必欲遂今日之擧。先刎重盛首。然後發。且言且泣。擧坐感動。淸盛曰。淨海以衰老爲此擧。非爲一身計。徒慮子孫耳。乃以爲不可。汝好計之。乃起入內。重盛顧讓諸弟曰。今日之事。縱令公老耄發事。子等何不匡救。乃慫慂之也。出敕將士曰。欲從公赴院者。見重盛剄首。然後行也。乃還小松第。既夜。憂慮弗能措。於是。出令徵兵。曰。有大事。速來會。衆相告曰。沈重人。出如此令。必有由也。於是。爭赴之。

汝。正本作女。按正本汝字多作女。皆從汝。

冎。正本作咼非。

幷。川越本・拙修本作竝。

治承二年

身。川越本・拙修本竝作月。

艱。寫本作難。或謂。川越本作或日。

綿。寫本作錦。

治承三年

一夕二萬餘騎。而西八條無復一人。重盛乃令家貞・貞能往護清盛。清盛問曰。小松第何由徵兵。二人對曰。院宣內府曰。汝父忘君恩。欲亂國家。命汝討伐之。內府慮君自急也。令臣等來護。曰。君安之。重盛在焉。當以身請。清盛惶懼曰。爲我語內府。吾前途已迫。不復事事。唯卿令之。二人還報。重盛漣然曰。使父爲此語。吾罪大矣。乃親臨勞兵曰。汝等應召即來。眞不負平生。而事出謬傳。宜亟罷去。後有緩急。幸毋狃焉。因盡罷去。法皇聞之。泣曰。重盛報怨以恩。使人慚愧。已而清盛使武士冎西光。幷殺師高・師經。流成親于備前。後使人殺之。放成經・康賴・俊寬于硫黃島。敎盛常餽遺成經。成經分之二人。因得不乏。二年。中宮娠。清盛身親祈嚴島神。冀得皇子。敎盛乃因重盛。請下赦令。成經・康賴得歸。俊寬終死島中。十一月。中宮將產而艱。人或謂成親・俊寬所祟。令衆僧禳之。法皇乃爲誦經。卒分身生皇子。清盛喜極而哭。獻金綿謝之。法皇弗懌。抛其謝書曰。驗者視朕耶。三年。立爲皇太子。清盛驕恣益甚。重盛日夜憂懼。一夕。夢清盛被誅。覺而泣。會維盛至。飲之酒。令好以刀。維盛意是小鳥。小鳥者。平氏傳家寶刀也。受

獲。川越本作得。

而視之。乃無文刀。葬時所佩者。乃變於色。重盛曰。毋尤也。使公令終。吾將佩焉。今賜之汝。汝後當知之。五月。重盛造熊野祠祈死。歸獲瘍疾。適有醫。至自宋。淸盛欲使治焉。重盛辭以失國體。且曰。兒之獲疾。命也。遂不使治。法皇臨視其疾。三月。遂薨。年四十二。法皇與攝政基房議。收其封戶。會、中納言闕。淸盛壻藤原基通當任。而基房子師家任之。甫八歲。是時。淸盛在福原。十一月。地大震。京師相驚曰。太政入道來矣。已而淸盛以數千騎入京師。基房入。泣訴法皇曰。聞淸盛來欲修怨於臣。果被竄流。不復能奉左右矣。法皇曰。雖朕亦不能自保也。明日。使法印靜憲往諭淸盛。且問其意。淸盛不見。及昏無所答。靜憲請去。淸盛使子知盛出答曰。臣耄矣。不復能事君。如此而已。靜憲趨出。颺言曰。賢相明德。跼天蹐地。淸盛聞之。召返面之曰。聞子諫止鹿谷之幸者。吾是以見子也。抑我家何所負官家。重盛新死。遊幸自如。獨不憫老夫乎。重盛見危授命者數。官家賜之越前。曰。傳汝子孫。而死即見褫。死者何罪。且吾爲基通請中納言再三。而超拜師家。何也。凡如淨海者。卽有過惡。當宥及七世。今餘命無幾。動將見誅。身後

藉。摺修本作籍非。

治承四年

那智。川越本・摺修本竝作那知。

可知矣。言畢垂涙。靜憲亦泣。少焉。説以大義。且慰藉之。清盛意頗解。禮而遣之。既而奏帝貶基房。代以基通。削師家以下四十三人官爵。流前太政大臣藤原師長。使宗盛率衆造法皇。法皇問曰。將見流遠地乎。宗盛曰。非敢然也。且幸鳥羽殿。以待事定。遂移之鳥羽。靜憲請而從焉。清盛乃使人白帝曰。今後諸政陛下親之。即日。還福原。四年二月。帝禪位於皇太子。世稱其出清盛意也。清盛夫人時子。既拜二位。削髮稱二位尼。於是。夫妻竝准三宮。三月。上皇幸嚴島。希解清盛之意。臨發覲法皇。法皇之徙鳥羽。中外皆咎宗盛。不若其亡兄也。宗盛數諫清盛。乃奉還法皇于八條烏丸。五月。熊野別當上變。告以仁王下令。舉東國源氏。欲滅平氏。廢帝而自立。曰。事成有重賞。那智・新宮僧徒亦應之。清盛大驚。率兵入京師。與公卿議。遣檢非違使源兼綱等。以官兵圍高倉宮。將徙王于土佐。兼綱父賴政。爲王謀主焉。平氏未之知也。賴政急使王先奔倚園城寺僧徒。而自率子弟從之。清盛聞之怒曰。吾嘗奏賴政授三位。聽昇殿。何負我乎。清盛將藤原忠清獻策曰。聞叡山・南都僧兵。皆應於王。我前後防敵。曠日彌久。諸國

大庭。川越本・拙修本竝作大場。下同。

源氏來會。勝敗未可知也。宜速下院宣於山徒。因啗以利。清盛從之。山徒乃倍王。王奔南都。清盛遣子重衡等。將二萬騎。追擊于宇治河。王入平等院。斷橋而軍。僧徒善鬭。我將平盛清。請分兵由河內進。遮敵前路。下野人足利忠綱進曰。我家嘗與秩父氏。夾利根河相挑。未嘗不亂流決戰。今日利在速戰。何猶豫爲。乃以手下三百騎先渡。下令曰。上駿者。下駑者。操於淺。而縱於深。其步卒迭相提挈。或溺者授弰援之。令畢而濟。不亡一人。忠綱呼曰。我藤原秀鄕六世之孫也。盍來決死。兼綱笑曰。汝以名族。乃爲平氏所驅役耶。對曰。平氏奉詔討亂賊。安得不從也。乃大戰。終射殺兼綱。我軍悉渡。擊大破源氏兵。賴政及子仲綱等皆死。王南出走。中流矢薨。南都僧兵至木津川。聞之引去。重衡等凱旋。獻首闕下。清盛賞忠綱。清盛常愛福原。又築島其南。以便漕運。終欲遷都焉。六月。遂決意。趣帝・三宮・百官徙焉。奉帝于賴盛第。遂徙之己第。使兵守法皇。議建宮城。地狹不可建。乃權造焉。物議囂然。八月。源賴朝奉以仁王令。舉兵伊豆。相摸人大庭景親擊走之。武藏人畠山重忠又擊破其黨三浦氏。景親急騎報捷。且曰。賴

朝走死。已而東人交來告。賴朝未死。兵復振。清盛大怒曰。東國奴輩。皆彼父祖家人。而我流彼於東國。是使彼脅以滅我家也。何異借盜鑰乎。切齒久之曰。向使吾不聽池尼請。彼惡得保首領。忘恩規利。敢敵我子孫。其能免神明之罰耶。重忠父重能。與弟有重在福原。進而言曰。東人獨北條時政。與賴朝婚。其或附之。其他豈肯黨流人。君勿爲意。平氏子弟。人人奮願東伐。清盛輦入見上皇曰。陛下妙齡。蓋未及知耳。往時。有爲義・義朝者。敢行凶逆。欲敵法皇。臣以謀略誅夷之。而義朝少子有賴朝者。此豎子獲之伊吹岳麓。當斬。臣繼母爲請宥之。臣卽召見之。曰。十三歲。短身涅齒。有問輒答不知。臣憫其幼稚。且自謂。與源氏非有宿怨。特以君命焉爾。遂宥之。今聞其在配所。敢謀不良。臣不堪悔恨。請得宣旨討之。上皇曰。稟法王。答曰。主上幼。陛下親父。決在聖斷。何直稟法皇。爲陛下莫乃庇源氏乎。上皇哂曰。猶爲此言耶。卽賜宣旨。因問大將可屬誰。曰。臣嫡孫維盛可。卽命維盛。以右近衞中將。爲追討使。而忠度翼之。用高祖正盛伐源義親故事。賜鐸鈴。將五千騎。發福原。以齋藤實盛暗東事。以爲鄉導。行收兵。至駿

鐸。正本作驛。

河。實盛曰。宜急踰足柄。收武藏・相摸兵。藤原忠清曰。今我兵皆京畿新募。以此深入。未見其可。維盛從之。實盛乃辭而西。維盛曰。無實盛。吾寧不能戰乎。以忠清爲先鋒。進軍于富士河。當此時。畠山重忠以下。皆附賴朝。以二十萬騎至河東。使使者來貽書。多謾言。忠清勸維盛斬其使者。相持未戰。我軍夜聞水禽起。相驚以爲敵大至也。人馬相踏藉而走。維盛怒。欲留戰。忠清固諫。乃西歸。平明。源氏軍乃知之。令一將來追。伊藤某殿戰而死。維盛歸至近江。清盛弗許其入京師。曰。汝奉王命討亂賊。不交兵而歸。何面目來見我乎。軍即不利。盍横尸原野。因欲流維盛。剄忠清。衆救解之而止。先是。源義仲起兵于信濃。義仲幼孤。齋藤實盛取育之。已而屬之木曾人中原兼遠。於是。宗盛召兼遠。命亟縛義仲來獻。兼遠效誓書。還逐義仲。是月。上皇再幸嚴島。清盛從焉。因要上皇作書。誓不右源氏。既還。造宮于夢野。以奉法皇。自清盛遷都。上下苦之。山徒亦數請復舊都。清盛會諸公卿。問兩都孰便。公卿皆希其旨。曰。福原便。獨左大辨藤原長方曰。平安便。清盛作色而入。衆爲長方危之。已而清盛即奉三宮以下。復都平安。

養和元年

讃岐。拙修本作二讃岐一非。

衆大悦。時十一月也。或問長方曰。子何以能忤相國。答曰。使無悔心。何問於人我因而導之耳。清盛素重長方。先是。長方建議於朝曰。亂人得志。是天意人心所致。宜復政於法皇。召還基房・師長等。改過遷善。庶幾免焉。清盛稍從其言。平氏家多怪。清盛嘗獨坐。見階下有數百人頭。合爲一大頭。瞋眼視清盛。清盛亦瞋眼視之。人頭漸縮小而滅。占者曰。爲義・義朝等鬼也。又有鼠。巢廄馬尾。占者曰。小侵大。子犯午。爲源逼平之兆。復都之月。近江源氏兵起。翌月。遣知盛・資盛等。將兵擊夷之。初園城寺黨賴政。得重譴。益怨平氏。至是與山徒皆應近江源氏。乃遣清房攻園城寺。燒夷之。殺僧八百人。又聞南都叛。遣妹尾兼康赴攻。僧徒逆擊敗之。又造木丸。呼爲淨海頭。蹴擊之。清盛積怒。是月。遣重衡。率兵數千騎擊之。燒東大・興福二寺。殺僧數百人。而諸道源氏益興。養和元年正月。上皇病崩。清盛益悔悟。復政於法皇。法皇不聽。固請而聽。乃獻美濃・讃岐爲御邑。詔以宗盛總管近畿。二月。斬河內人源義基。聞源行家舉兵至美濃。遣知盛・通盛・清經・忠度等伐之。敵據板倉壘。我兵遶出其後。縱火攻拔之。走行家。清盛又令

川越本・拙修本並頼朝上有源字。

南海兵控扼東兵。而徵糧于北陸・西海。西海菊池氏・緒方氏・皆應源氏。肥後守平貞能請往定之。法皇令院廳官從貞能。已而知盛在洲股。病作。罷戍而還。源氏益振。宗盛乃欲親將大軍東伐。法皇許之。命統諸武官。以官符徵兵。刻日而發。衆曰。此行必夷源氏。以二十七日發行。先發一日。清盛疾作。宗盛止行。車馬集於六波羅。清盛病煩熱。浴於冷水。水輒沸。叫號聲徹門外。閏二月。疾大篤。擧族擁枕。問所欲言。清盛大息曰。生者必死。何獨我。我自平治年間。建功王室。專制天下。位極人臣。爲帝者外祖。復何所遺憾。所遺憾者。未睹頼朝頭而死。吾死之後。毋以供佛爲。毋以誦經爲。特斬頼朝頭。懸我墓前。我子孫臣隷。咸服我言。勿敢或怠。病七日薨。歲六十四。遺表法皇。事必與宗盛議。清盛既薨。宗盛奏還法皇於法住寺殿。奏曰。臣不肖。不能救父過。以至於今。今後將唯聖旨是仰。法皇乃會公卿。議調兵食。遣重衡・維盛・通盛・忠度等入美濃。併其戍兵。與源行家・源義圓。夾水而戰。斬義圓。破行家。虜行家子行頼。追行家。至參河而還。頼朝數遣書於頼盛。謝其舊恩。又間上書曰。臣非敢爲亂。乃靖亂耳。陛下尚不棄平氏。

壽永元年

壽永二年

則請兩講和。二姓並仕。如往昔事。其忠其否。簡在陛下。法皇以書示宗盛。宗盛答曰。臣父臨終命臣等曰。必與賴朝決死。語猶在耳。臣不能和矣。於是。請敕陸奧藤原秀衡擊賴朝。敕越後城資長擊義仲。資長。平維茂七世孫也。六月。資長與弟長茂收兵。南擊義仲。不利還。八月。除資長越後守。秀衡陸奧守。趣伐源氏。資長復發疾卒。九月。宗盛遣從弟通盛・經正。東與源氏戰于越前。敗績。經正走入若狹。通盛退保敦賀城。召經正未至。義仲兵來攻。乃解兵西還。壽永元年。九月。城長茂復南伐義仲。復不利還。是月。宗盛任內大臣。賜隨身兵仗。具騶從。拜賀。二年。二月。敍從一位。四月。以維盛・通盛・忠度等爲追討使。將山陽・山陰・西海諸國。及參河以東。若狹以南。徵兵十萬餘人。入北陸道。將夷義仲。然後及賴朝也。齋藤實盛在遣中。謂大庭景尙曰。平替源興。盍降木曾。景尙曰。東人無不知吾輩姓名。以興衰變節。若人言何。實盛曰。吾徒以試子耳。入見宗盛曰。越前臣鄉也。古曰。衣錦歸鄉。臣受君恩久矣。今老矣。唯有一死以報君。君盍賜錦直垂。臣衣以歸。死有餘榮。宗盛憫之。如其言。義仲聞我軍向越前。遣將守燧城。城

齋明。正本作齊明。下同。
隄。川越本・攝修本並作堤。下同。

據山帶谿。最爲要地。我軍阻谿水。不能近城。將有齋明者。爲書約之矣。以射我軍曰。源氏築隄貯水。君決東山趾。立涸矣。臣爲內應焉。我軍從之。立拔其城。連戰皆捷。追至三條野。敵將齋藤光平出戰。實盛曰。與我同姓。寧死於我。與鬭斬之。我軍長驅定越前。進入加賀。源氏兵退。據安宅渡。平盛俊令子盛綱試水。還報曰。可亂矣。盛俊以兵五千先渡。大軍從之。遂拔林・富樫二城據之。降將齋明進言曰。義仲在越後。越後・越中之界。有寒原之險。君宜急扼此。毋使敵踰焉。乃遣盛俊赴之。至般若野。敵已踰寒原。盛俊與戰。不利退。維盛乃以七萬騎軍砥並山。忠度以三萬騎軍志雄山。義仲以五萬騎至。令行家攻忠度。而自當維盛。維盛恃險不備。義仲乘夜來襲。維盛大敗走。義仲乘勝追之。參河守知度。清盛七子也。與五十餘騎。大呼冒敵陣。馬仆而徒。敵有岡田親義。來擊知度。知度舉刀斫其胄。胄墜。因斬其首。親義子重義踵至。我騎遮鬭。知度自屠而死。敵益進。右兵衞佐爲盛。賴盛次子也。亦爲樋口兼光所殺。維盛退保佐良岳。當此時。忠度與盛俊。擊破行家。而聞維盛敗。引兵與之合。退據安宅渡。忽有鞍馬十匹。濟

寫本麾騎下無逆之景倘斬十三騎八字。

水而至。畠山重能在前軍。視之曰。敵近矣。乃與三百騎。登篠原岳瞰之。馳使中軍。告曰。源氏兵悉濟。臣將先進。請賜後繼。義仲召樋口兼光。指岳頂。問曰。汝知彼一隊將爲誰。曰。畠山重能也。臣數遊武藏。記其旗章矣。義仲曰。此可與鬪者。遣兼光與鬪。殺傷相當。維盛等乃進當義仲。戰且退。至成合。返擊大戰。大庭景尙自呼而鬪。義仲曰。名士也。麾騎逆之。景尙斬十三騎。被創自殺。衆悉退。實盛獨留戰。敵將手塚光盛。呼問其名。實盛曰。汝斬我首。獻木曾公。公知我也。進薄光盛。光盛從騎遮之。實盛攫騎。將殺之。光盛救之。三人相搏墜馬。光盛遂刺實盛。獻頭於義仲。告其狀曰。單騎衣錦。其語東音。義仲曰。莫乃實盛乎。召兼光視之。兼光曰。是也。義仲曰。吾知實盛年高。今其髮黑者何。對曰。實盛嘗與臣言於東國曰。白頭從軍。吾將涅我髮。否則難以伍壯者矣。蓋踐其言也。乃洗其頭。頭髮皆白。義仲泣曰。吾幼孤。爲此老所鞠育。使其來歸。將父事之。乃重恩就死。可不謂義乎。收尸葬之。義仲復追我軍。平盛綱・藤原景高等十餘人死之。我諸將敗歸。法皇會議。藤原長方引漢和匈奴故事。請遣使赦諸源罪。不聽。平氏遺書

多。正本作田。

山徒誘之。山徒不從。七月。平貞能既定西海。以降將菊池高直・原田種直以下兵千騎・糧十萬石至。平氏咸喜。欲用禦東北。美濃人來告曰。義仲已至近江矣。於是。資盛・知盛・重衡。與貞能等守宇治・勢多。又遣賴盛繼之。賴盛辭不往。强遣之。已而源行綱等四窺京師。山徒亦黨義仲。宗盛乃召還諸將。遣貞能擊行綱于攝津。知盛以五百騎次粟津。與義仲前軍戰。不利退。義仲進軍叡山。宗盛大召族人議曰。兵寡。我欲奉帝及法皇奔西國。以圖再擧。何如。知盛進曰。不可。我祖桓武實肇此都。後降爲武臣。於今八世。未嘗退避。寧決戰于此。刀折矢盡而後已。敎盛・經盛等。皆以爲然。宗盛不聽。使人造法皇。法皇不在。宗盛大失意。乃奉帝及皇太后・皇弟惟明。收劍璽。縱火諸第。率其子右衞門督淸宗・其弟中納言知盛・右中將重衡・淡路守淸房・其義弟式部丞淸定・丹波守淸邦・其叔父參議經盛・中納言敎盛・薩摩守忠度・經盛子皇后宮亮經正・若狹守經俊・敎盛子越前守通盛・能登守敎經・從五位下業盛・知盛子武藏守知章・經俊弟敦盛・淸房二弟維俊・良衡・故基盛子左馬頭行盛等。及攝政藤原基通・大納言平時忠

而西。權大納言賴盛從而後。比及鳥羽。撤赤幟而東。倚法皇伏匿。基通亦還走。
平盛嗣欲追之。宗盛曰。舍之。吾無所用此不義人也。因問曰。小松中將何如。曰。
未來。宗盛曰。亦賴盛比耶。乃召畠山重能兄弟曰。汝子弟在武藏。汝盍東。二人
對曰。臣等蒙平氏恩。二十年于此。見危而遁。不忍爲也。宗盛曰。父子相慕。無貴
賤一也。父在西。子在東。以相殘滅。吾心憫之。汝宜亟去從賴朝。二人泣辭而東。
宗盛等至關戶。顧見數百騎至。則維盛也。率其弟右中將資盛・左中將淸經・左
少將有盛・侍從忠房・備中守師盛來。衆大喜。維盛曰。吾遺妻孥而來。皆啼哭牽
我。吾是以後。宗盛曰。衆皆挈家。子何獨否。答曰。挈焉而行。終可庇乎。衆相顧悽
然。經正幼仕仁和寺法親王。貺其所愛琵琶。雖征行。未嘗不攜。是日。齎返謁王
曰。臣等事已至此。願得一敍別而行。因卽席彈數曲。王及左右皆垂淚。經正曰。
臣嘗欲守此賜。以傳子孫。今行且死亡。不忍幷寶器滅沒之。乃奉還琵琶而去。
忠度亦自淀河還。詣其和歌師藤原俊成。夜叩門通刺。請面謁。俊成微啓門見
之。忠度曰。自兵興。不得數於君門。今當遠別。聞君奉敕有所撰輯。臣幸得收一

奪。川越本作停。

緒方。川越本標註云。一作尾形。下同。

章焉、死且不朽。乃出其歌集於鎧縫。俊成泣而受之。行盛師俊成子定家。亦遺其集。留別焉。俊成・定家後並撰集。收二人所作云。於是舉族奉輿而西。會平貞能自攝津還。下馬跪曰、諸公欲何之。宗盛告故。貞能大諫其不可。不聽。貞能獨東入京師。則諸第皆燼矣。乃夜詣重盛墓。白曰、君豫知有今日爾。然願以冥護圖恢復。旦日發墓。收其骨而西。追至福原。宗盛等方會將士。議曰、我家不足惜。如帝王神器何。皆泣而對曰、臣等世受君恩。不以隆替易志。窮海極天。唯君所適。鳥獸且記恩。況於人乎。宗盛喜。乃相率拜清盛墓。張樂於墓前徹夜。天明燒其宮殿諸第。航赴西海。法皇敕奪平族百八十餘人官爵。沒其邑。分賜之義仲等。乃立高倉帝第四子卽位。平氏聞之。悔其不取去也。遂奉帝。建行在所於豐後。豐後國司藤原賴輔之子賴經。與州人緒方維義傳院宣。收西海兵。使使來告曰、公等不宜止此。時忠讓之曰、正統天子在此。若胡爲者。維義不對。以三萬騎來攻。乃遣貞能・高直・種直等拒之。敗還。乃奔箱崎。遂徙山鹿。聞菊池・原田諸族皆叛。則又徙柳浦。祈于宇佐宮。聞維義來。終航海而遁。清經自度終不可免。

夜上柁樓。看月吹笛。投海死。時長門國爲知盛所管。其目代紀通資。獻船百餘艘。以徙讃岐屋島。阿波豪傑田口成能。以千騎來附。且爲徇四國。諭以順逆。多來屬者。因建屋島爲行宮。遂徇山陽道。閏十月。源義仲遣足利義淸・高梨高信・海野幸廣來犯。而身繼之。重衡・通盛・敎經。以三百餘艘逆擊之。據水島城。源氏以千餘艘負陸。敎經出城東北門挑敵。敵以五千騎來攻。敎經佯走。重衡・通盛將舟師。自島西南。縱左右翼遶之。敎經豫連舟布板。以便進退。親射殺高信。北兵不習水戰。屬日蝕晦冥。我兵乘之。北兵遂大敗走。追擊斬義淸・幸廣。獲首千二百級。初篠原之戰。妹尾兼康爲敵將倉光成澄所虜。因仕成澄見親信。今井兼平謂義仲曰。彼瞻視異常。不若殺之。義仲不聽。兼康從容說成澄。以其鄕妹尾地肥美狀。成澄乃請義仲往收之。兼康爲鄕導先往。會其子宗康以下千餘人。掩殺成澄。據板倉寨。義仲將赴備中。聞而怒。令今井兼平來擊兼康。兼康戰且走。欲赴屋島。宗康體肥不能行。兼康棄之走。行里許。復還視之。追兵薄至。乃刃宗康而死。義仲將遂攻屋島。聞賴朝來討己。則東還。十一月。敎盛・敎經・重衡

等。與源行家戰室山。大破之。山陽・南海十餘州。多來屬者。當是時。義仲縱兵暴掠京師。亦以事怨望法皇。謂將士曰。汝與其敵凡人。寧敵王者。遂擧兵反・焚法住寺殿。矢及乘輿。遂幽帝于閑院。法皇于五條宮。公卿皆裸跣遁。義仲乃謂將士曰。爲帝爲院。唯吾所欲。爲公爲卿・唯汝所請。乃奪公卿以下四十九人官爵。以其妻兄藤原師家爲攝政。京師苦其暴。乃思平氏也。義仲既與賴朝有隙。恐其來討。欲與平氏爲從。貽書屋島言其意。宗盛欲許之。知盛曰。義仲使我至此極。我乃與之和。恐賴朝之笑我也。公宜答曰。天子在焉。汝免冑弛弓。自來乞降。吾則許之。宗盛從之。明年。以山陽既定。奉帝復福原。因城焉。負山臨海。集兵守之。二月。敎盛以五百騎。屯備中下道。會讚岐廳衆二千騎。叛應源氏。乘船過下道。仰射我營。敎盛怒曰。此輩嘗秣我馬飲我馬者。今敢亡狀如此。飛舸追之。廳衆走淡路。倚源義嗣・源義久。敎盛攻而鏖之。幷殺義嗣・義久。遂攻河野通信於伊豫。通信遁走安藝。與緒方維義合。東入備前。據今木城。敎經赴攻。一晝夜拔之。宗盛奏帝。進敎盛正二位大納言。辭不拜。是時。賴朝二弟範賴・義經。討義仲

山。拙修本作門。

殺之。終以院宣。大舉來攻。關東將士悉從之。刻期會戰。知盛・重衡拒東門。貞能
等拒西門。而資盛・有盛・師盛等。以兵七千守北山。義經以萬騎夜襲之。我兵大
敗走。資盛愧之。獨奔尾島。宗盛令諸將代之。皆憚往。教經請當之。即夜。與通盛・
盛俊往守北山。範賴至東門。土肥實平等至西門。藤原景清等力拒西門。敵不
能入。重衡・知盛。又擊東門敵卻之。已而義經自間道來襲。縱火。城卒陷。重衡西
走。東人莊家長。追射其馬。馬倒。其騎騎副馬。重衡呼而取之。騎爲不聞走。重衡
欲自殺。遂爲家長所獲。忠度亦爲岡部忠澄所追。忠度紿曰。吾東兵也。忠澄曰。
幘而涅齒者。非東兵也。忠度返鬭。搏忠澄伏之。三刺之。不入。忠澄僕來。終爲所
殺。忠澄撿其鎧得歌稿。因知其爲忠度也。經正走。過大藏谷。莊高家呼而求鬭。
顧答曰。吾羞與若鬭也。高家怒逼之。經正下馬自殺。其弟經俊及通盛・業盛・師
盛・清定・清房・盛俊等皆死。通盛妻聞其夫死。投海而死。教經航赴淡路。宗盛奉
帝于舟。諸敗兵爭舟。而溺者無數。知盛初爲武藏守。國人識而追之。垂及。其子
知章時年十七。遮鬭。斬其一騎。死之。知盛得間而遁。下馬上舟。舟隘不容馬。則

北馬首鞭之。馬躍上陸。田口成能曰。良馬也。與其獲於敵。寧射殺之。知盛曰。吾由此免。不忍殺之。馬望知盛三斷。終爲義經所獲。知盛謂宗盛曰。子死以救父。父棄子而走。使他人如此。吾當唾其面。今吾爲之。謂之何哉。因歔欷流涕。敦盛亦與知章同齡。望知盛舟馳之。爲熊谷直實所獲。是日。直實冒曉向西門。聞城上有笛聲。及獲敦盛。見其腰挿笛。念嚮所聞者。是也。乃請首於義經。幷其笛歸之經盛。義經以諸首虜歸。獻法皇。法皇使人諭重衡曰。汝貽書宗盛。使效神器。則宥汝死。放還屋島。對曰。臣宗世建勳王家。而子孫卒爲君所棄。以至於此。命也。勝敗豈關臣一人。臣不才。至爲累囚。假令生還。將何面目見宗族哉。宗族亦必不肯以臣易神器也。雖然。臣不敢不奉勅。乃作書。從院宣使至屋島。時子得書悲泣。欲聽之。知盛執爲不可。教宗盛作答表。曰。謹領宣旨。通盛以下。既授命矣。重衡豈獨欲生哉。至若神器。不可須臾離聖體也。陛下倘思貞盛・清盛遺勳。則辱枉龍駕。臨幸西州。臣等護以西南四道兵。以討亂賊。不者。臣等有赴三韓・契丹而已。不能奉命。平時忠捕院使。劓而遣之。法皇怒。以重衡附賴朝誅焉。賴

懷。川越本作憶。
弗。川越本作不。
熊。拙修本作態。非。
烏。拙修本作鳥。非。

朝檻致之鎌倉。延見。使梶原景時將命。來跪重衡旁。重衡不肯聽。遙語賴朝曰。重衡至此。命也。公倘記先人之德。則請速賜之死。賴朝乃屬之狩野宗茂。具湯沐。令姬千手侍浴。因問其所欲。重衡欲削髮。賴朝不許。因餽酒。遣千手及工藤祐經佐之。祐經撾鼓。千手彈琵琶。重衡屬杯千手。朗吟曰。燭暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲。賴朝微行。側耳戶外。聞而憐之。更遣名姬伊王。與千手更直。明年。六月。以南都僧侶請。斬于奈良阪。二女皆削髮爲尼云。初重衡之虜入京師也。維盛妻孥在京師。聞三位中將被虜。意其維盛也。使僕視之。非也。然見師盛首。則憂恐。維盛在屋島。亦懷家不措。是歲。三月。間出之京師。途梗弗達。於是。赴高野山。偶值其舊臣爲僧者。語之以情。曰。先君嘗德賴朝。內府以故猜疑。比吾於賴盛。吾故適至此。欲一詣熊野祠。赴水而死。乃與俱詣焉。投那智海死。豫命隸人。還告資盛曰。唐皮甲・小烏刀。在貞能許。公宜取之。萬一事平。幸傳之我兒。初平氏有小烏・拔圓二刀。例傳嫡長。至忠盛。傳小烏於清盛。傳拔圓於賴盛。二家自是相惡。賴盛於是在京師。是歲。五月。賴朝以書召之。且曰。必攜宗清。賴盛

文治元年

成能。川越本・拙修本・寫本皆作成良。下同。川越本標註云。按成良即成能。

即東行。宗清不肯從。曰。臣非不辨禍福。獨不愧西海諸公舊僚乎。乃送頼盛至近江。辭而西。來至屋島。是月。貞能弟貞繼。起兵伊賀。應平氏。集二百人。襲彼州守護大内惟能。遂入近江。與源秀義戰而斬之。已而爲惟能所敗死之。世呼曰三日平氏。平氏欲復山陽道。九月。行盛以兵二千屯兒島。範頼以十萬騎來攻。我軍敗還。宗盛以下。日悒悒不樂。知盛曰。吾嚮欲守京師。公等不從。今終如何。宗盛莫以應。明年。春。知盛城長門引島。扼門司關。又遣兵擊破土肥實平於備前。復兒島。又擊破河野通信。斬其族黨百六十人。效首屋島。宗盛撿之。時聞源義經自阿波來攻。而未得確報。明日。望高松里火起。田口成能曰。敵來襲也。請急御舟。令將士拒于陸。從之。義經果襲至。我兵能拒。義經縱火行在。我兵盡上舟。海陸交射。景清上岸挑戰。美尾屋十郎者。來鬭而走。景清追攫其錏。錏斷。挂之薙刀。掀而呼曰。吾景清也。盍來決死。敵莫敢近。我兵踵上。大戰。佯卻上舟。以誘致義經。幾獲而逸之。宗盛召教經曰。我兵數逸義經。義經兵不過數百騎耳。煩公一戰。教經乃與盛嗣・景清等三十人。迫陸而射。教經勁弓長箭。射殺敵精

屋島。正本作八島。

騎數十人。會日暮。義經退軍高松。敎經軍屋島。欲夜襲源氏。盛嗣與江見盛方爭先。徹曉不果襲。天明。義經以七千騎來攻。我三十人步行。持短兵接戰。敵騎披靡。敎經因射之。戰終不利。遂上舟而退。熊野湛增・河野通信等。盡屬源氏。源氏軍日盛。平氏奉乘輿。避于志度。義經復來攻。乃退保引島。已而長門・周防悉應源氏。乃赴箱崎。聞範賴以大衆在豐後。則旋泊于壇浦。源氏軍充塞海陸。兵艦三千。四面來攻。我有五百艘。知盛立船首。謂諸將士曰。勝敗之決。在於今日。汝輩有進死。毋退生。一心戮力。必獲義經而後已。景淸・盛嗣等。爭願決戰。田口成能潛通款於敵。知盛謂宗盛曰。士氣奮矣。獨成能可疑。請斬以徇。不聽。固請。宗盛乃召成能勗之。成能唯唯。知盛握刀目宗盛。宗盛終不能斷也。已而大戰。我兵奮擊。東軍數卻。成能降義經。告之曰。平氏徙帝於兵船。徙兵於帝船。欲誘敵而夾擊之。義經知乘輿所在。合軍疾攻。知盛乃赴帝船。諸嬪迎問狀。知盛大笑。答曰。卿等當睹東國男兒耳。一船皆哭。知盛手掃除船中。盡棄汙穢物。時子乃抱帝。相約以帶。挾劍璽。出立船首。帝時八歲。問時子曰。安之也。時子曰。虜集

進。川越本・拙修本並作追。四年。諸本作二年。

矢於御船。故將他徒也。遂與俱投海死。皇太后繼投。東兵鉤其髮獲之。行盛・有盛聞之。皆力戰死。教經驍名素著。敵爭欲獲之。教經殊死戰。殺敵無數。知盛呼曰。公盍早自爲計。多殺雜兵。毋爲也。教經曰。中納言。欲吾與義經決死耳。乃進索義經。卒與之遇。教經免冑。撤鎧袖。躍入其船。敵兵遮鬭。輒搏仆之。直逼義經。敵中有安藝家村。力兼三十人。率二力士。進當教經。教經蹴仆其一人。挾二人投海死。宗盛與清宗。不能自裁。從士擠之海。泅而逝。敵兵鉤獲之。藤原景經。景清從弟也。見之曰。奴輩敢辱我君。進斬一人。中箭死。知盛聞而切齒久之曰。吾可以死矣。與教盛皆自殺。平家長等八人殉之。時壽永四年三月廿四日也。經盛・資盛皆逝。已而自殺。宗盛父子。與皇弟・皇太后・平時忠以下。從義經而東。有命。徇宗盛以下于京師。宗盛自輿中四望。清宗不仰視。既罷。皆拘于義經第。宗盛不解衣。寢以袖庇清宗。守兵見而憫之。五月。送於鎌倉。頼朝延之前舍。隔庭相見。將命者至。宗盛悚然請宥死。頼朝措魚于俎。加刀焉。示之。諷使自殺。宗盛不曉其意。又送還京師。至篠原。父子別拘。知將被殺也。乃請僧稱佛曰。吾不死

於壇浦。以有清宗故耳。於是皆被斬。宗盛有次子。曰副將。先斬于京師。初壇浦之敗。時子謂衆曰。宗盛非故相國之子也。吾之再娠也。相國期其生男。而女生焉。吾恐相國恨怒也。密使人易之一傘工男兒。宜矣。其不若重盛。以至於此也。宗盛既死。時忠等皆處流。時義經與賴朝有隙。逃奔西海。賴朝恐其與平氏遺黨。相依託作亂也。遣北條時政于京師。購索平氏胤子。伏匿所在者。幼孩生埋之。稍長者刃之。其母若保。往往隨死。啼哭四聞。維盛子曰六代。依其母匿大覺寺側。爲人所告。當斬。其乳母因僧文覺請宥。賴朝素重文覺。且思重盛德己也。特宥之。削髮爲文覺弟子。及文覺圖不軌。六代坐死。初維盛弟忠房。遁壇浦匿紀伊。知盛次子知忠。當族人西奔時。甫三歲。乳母子紀友方。攜匿備後。後徙伊賀。平氏舊臣藤原忠清。先宗盛一年見捕斬。平貞能削髮。奉重盛骨。隱於常陸。忠清二子忠光・景清。與平盛嗣等。潛匿各處。後八年。鎌倉有土木事。賴朝臨焉。忠光雜役徒。欲刺賴朝。嵌魚鱗于眼以爲眇。荷畚出入。賴朝見而怪執之。懷利刃。曰。平氏臣忠光。欲爲故主復仇。究問其黨。曰。獨有盛嗣。聞前在丹波。不知今

刃。正本作刀。

何之。不復言。絶食飲。月餘死。賴朝大索天下。無所獲。後五年。知忠自伊賀還。入京師。匿于法性寺側。盛嗣・景清聞之。皆至。諸舊臣稍稍來屬。謀襲賴朝妹壻藤原能保。能保覺之。令兵圍攻。我兵二十餘人。亂射殺敵而死。知忠與友方倶自殺。盛嗣・景清遁走。聞忠房在紀伊。往歸之。擧兵據湯淺城。爲熊野別當所攻破。忠房被捕殺。盛嗣・景清又遁。會賴朝慶東大寺。景清雜衆中。欲刺之。事覺被捕。屬之和田義盛。義盛苦其不遜也。辭之。乃屬於八田知家。景清終不食而死。盛嗣變姓名。仕但馬人氣比道廣。爲其廏卒。因通其女。每浴馬爲馳射狀。道廣知其盛嗣而不問。既而隨道廣如京師。遊故妾家。妾家告之源氏。乃令道廣捕之。道廣遣力士數人。候其浴闌之。盛嗣罵曰。奴輩吾欲遁即遁。而不欲累主人。出而就縛。賴朝面讓之曰。盍死於壇浦。對曰。欲擁一平氏胤。以復舊業耳。又問曰。聞汝依義經。有諸。盛嗣曰。否也。嚮在京。圖判官而不遂。爾來頗儲利刃銳鏃。欲一試之於將軍之身。遂被斬。

外史氏曰。自我先王之開國也。非無僭亂之臣也。而未有謀危社稷者。獨有一

猶視。川越本・拙修本竝作視猶。

將門焉。而出於平氏。豈非其宗之大恥哉。然能討滅之者。亦出於平氏焉。則足以相償矣。且自將門一伏誅。而後世無復覬覦神器者。可謂彼以其身。標天下大戒也。抑使將門得一檢非違使。則未必甘爲反賊。故天慶之亂。皆相門驕傲。壅塞上下之所致也。當其無事也。寵朝廷名爵於私門。而不恤人之失職。及其急也。乃遽揭朱紫。呼號天下。使天下英雄有以窺朝廷。後世源平爭起。以功邀其上者。焉知其不基於此也。世稱。清盛功不償其罪。擧不臣者。輒以爲稱首。而不知相家不臣。已什倍清盛。清盛蓋視而學之。否則何遽至此。詩云。唯其有之。是以似之。自相門之專權也。后皆其女。天子皆其女所生。而卿相皆其子弟親屬。苟非其族類。鋤而去之。雖皇族不能免焉。甚則易置其主。猶視奕棊。清盛所爲。無一不似彼己氏者。而加以鷙悍。其意曰。以無功之人。猶擅權寵如此。吾之有大造於王室。何爲而不可。世以其拔興之無漸。羣起咎之。而不言有爲之師者焉。且清盛所以至此。由後白河帝養成其勢爾。夫名爵公器。不可私用。人臣而私名爵。是負其君也。人君而私名爵。是負其先王也。帝濫授先王名爵於清

捍。川越本作悍非。
途。正本作塗。
廟。正本作國。
飭。拙修本作飾非。
寫本源氏名至或然也。作「賴朝初念不過割據東隅。而源義仲一取京師。無復遠志。向使平氏猶能保守鎭西。據山海之險。觀釁而動。則異日足利氏之事。將

盛。藉以濟其私焉。而長其負功邀上之心。至於不可制。將誰咎哉。雖然。成平氏之勢者。不獨始於帝也。初忠盛受寵於白河・鳥羽。連進官爵。人以爲不次。蓋朝廷倚其力。以抑源氏。抑源氏。所以殺相家之權也。源氏自滿仲・賴光。每爲相門之爪牙。攝政兼家之騙花山也。源賴信實捍衞道途。降至文治之際。朝廷疑關白兼實之助源賴朝。亦非以其世相黨援哉。由是觀之。延平宗以抗相門。院政廟論。所相傳承。其猶寬平之擢任菅氏耶。文武雖異。其意一也。以菅公之賢。猶不能無戀權之意。平氏除重盛之外。皆不學無術。其矜功擅寵。進不知止。曷足尤焉。假設重盛後父而死。盡反其所爲。戒飭子弟。輔翼王室。則雖接踵比隆於藤原氏可也。而源氏何資以起哉。源氏名爲治棊亂。而其實攘竊王權。源平之罪。未易輕重也。且夫源氏猜忍。骨肉相食。孰與平氏闔門。至死不失懿親耶。世傳平語。倚琵琶演之。其音悲壯感憤。聽者莫不悽愴。余嘗西遊長門。過壇浦。觀平氏覆滅之處矣。又抵肥後。聞其州有五家山。山谷深阻。平氏或竄匿焉。子孫至今猶有存者。不與外人交通云。夫平氏於王家。功罪相償。天不必勦絕其後。

先見於當時。焉。乘興在我。順逆勢異。而知盛教經之將材。又非尊氏直義之比。天下成敗未可知也。宗盛駿愚。不足以語此。乃徒知慕舊都。棲泊中道。以圖攀援。豈非無策者哉。要之源平世武。固不相下也。而平氏泰於富貴。驕逸愉情。至於如此。亦似彼己氏者也。正權之移一篇。寫本附三卷末。

則是其或然也。

外史氏曰。王權之移於武門。始於平氏。成於源氏。而基之者。藤原氏也。故略敍王室・相家之系統。以備參觀云。蓋神祖而後。三十九世曰天智。是爲中宗。天智子大友即位。而天武以叔父簒立。傳之持統・文武・元明・元正・聖武・孝謙・帝大炊。凡七世而天武之嗣絕。光仁以天智孫。入繼大統。傳之其子。是爲桓武帝。桓武三子。平城・嵯峨・淳和。兄弟相及。仁明以嵯峨子繼之。文德以仁明子又繼之。文德幼子。以藤原氏故立即位。是爲清和帝。清和子陽成。爲藤原氏所廢。光孝以文德弟代之。光孝而下。宇多・醍醐・朱雀・村上。父子相繼。村上之子。冷泉・圓融。兄弟相及。花山以冷泉子繼圓融。一條以圓融子代花山。三條又以冷泉子繼一條。一條之子。後一條・後朱雀。兄弟相及。後朱雀而下。後冷泉・後三條・白河・堀河・鳥羽・崇德。父子相繼。崇德而下。詳於源平語中。崇德而上。至於文德廿一世。其非藤原氏之出者。宇多・後三條而已。故皆計抑其權。而在位不長。莫能遂志。然宇多以後三朝。不置攝關。政在天子。白河以後。已辭位而猶聽政。政在上皇。其

寫本桓武下。無仁明二字。自平城至文德。川越本・拙修本・寫本皆作平城以下至於文德。懾。正本作攝非。

花。正本作華。下同。

餘皆仰藤原氏之成。而其擅政始於文德云。然余謂。藤原氏驕專。其來久矣。非獨始於文德時也。鎌足助天智。效力王室。其子不比等。爲四朝元老。文武・聖武。竝娶其女。而孝謙。其外孫女也。而皆淫縱。惠美押勝。嬖於孝謙。殆危國家。實不比等孫。則其家法可知也。其後。光仁・桓武・仁明。獨不出於藤原氏。而自平城至文德。又皆其出。文德外舅。左大臣冬嗣。爲不比等四世孫。冬嗣之子良房。又納女文德。生清和。文德欲立長子惟喬。而憚良房。遂立清和。則藤原氏之威。懾人主非一日。又可知也。清和生九歲卽位。良房以外祖攝政。其子基經。廢陽成立光孝。關白萬機。攝關之號始此。基經二子。時平・忠平。忠平攝政於朱雀之朝。與其二子實頼・師輔。竝列三公。於是乎。有天慶之亂。冷泉二弟。爲平・守平。村上欲立爲平爲冷泉儲貳。而實頼等。以其非藤原氏出沮之而立守平。是爲圓融。於是乎。有安和之變。師輔三子。曰。伊尹・兼通・兼家。兼家三子。曰。道隆・道兼・道長。皆兄弟爭政。伊尹女生花山。兼家女生一條。故兼家令道兼賺花山遜位。而以一條代之。是其最甚者也。後一條而下三帝。皆道長女所生。是其最極寵榮者也。

寫本可不哀至世變矣夫。作亦可哀矣。抑相家始奪王權於淸和之朝。而將家以淸和之裔。起而收之。儻有天命耶。議其不可。川越本・拙修本並作議爲不可。

道長二子。賴通・教通。相繼執政。而賴通生師實。師實生忠實。忠實疎其長子忠通。而愛少子賴長。於是乎。有保元之禍。忠通三子。基實・基房・兼實。基實生基通。基房生師家。兼實生良經。更執朝政於源平之際。其論議可觀者。獨有兼實。他充位而已。其後。一姓分爲五派。更爲攝關。而其進退皆不復關天下事。不足錄也。總之。良房而下。奕葉秉鈞。大抵務營私門。不以國家休戚經心。而當其爭權。父子兄弟。且不相保。奔競從諛。擧朝成風。宜乎。大亂之基於是。而其終與王室俱衰共頹。徒存空名。可不哀耶。外史氏曰。吾閱史。有知王霸所以廢興也。源賴朝嘗奏大江廣元。爲廳使衞尉。攝政兼實議其不可曰。非儒家進仕之例。嗚呼。以門閥爲賢。以格例爲政。驅其才俊。以資梟雄。而猶不覺悟。爭此區區。兼實且然。其他可知。向使相家有憂國之心。通變之略。何患於王權之外移耶。顧嚮者天慶之亂也。亦由藤原忠平之不許廳使於平將門也。久矣哉。相家之沈滯豪傑也。抑將門欲自與也。而以得失爲榮辱。賴朝欲與之其下也。而不以從違爲損益。又可以觀世變矣夫。

卷之一終

日本外史卷之二

源氏正記

源氏上

天慶

安和二年

源氏出自清和天皇。天皇宮人王氏。生貞純親王。敍四品。任兵部卿。稱桃園親王。親王二子。曰經基。曰經生。皆賜姓源氏。經基有武幹。善騎射。以親王爲帝第六子。世呼經基曰六孫王。天慶中。爲武藏介。平將門之反。間行。入奏之。因拜從五位下。從藤原忠文。伐將門。又從小野好古。伐賊黨藤原純友。終敍正四位下。任鎭守府將軍。子孫世爲武臣。其旗用白。有八子。長滿仲。生于攝津多田。襲父職位。得關東士心。冷泉帝安和二年。中務少輔橘繁延・前相摸介藤原千晴等。密謀挾爲平親王。奔關東爲亂。滿仲與焉。已而滿仲與繁延有隙。遂自首。以攝政藤原實頼旨。與弟滿季。捕繁延・千晴。流之當是時。京師騷擾。如天慶之亂云。

滿仲嘗謂。武臣衛天子。不可無利刀。乃召筑前良冶某。鍛錬六旬。得二刀。曰截鬚。曰膝圓。傳之子孫。滿仲官至左馬頭。及卒。贈從三位。四子賴光・賴親・源賢・賴信。源賢爲僧。賴親坐與興福寺僧鬪。處流。子孫居大和。稱大和源氏。賴光材武有名。爲東宮大進。永延中攝政藤原兼家造新第。落之。賴光遺馬三十匹。以分賓客。兼家子道隆襲攝政。其弟右大將道兼與之爭權。賴信素事道兼。謂賴光曰。吾力能刺道隆。使我主代之。賴光掩其口曰。毋妄言。事敗。肝腦塗地。汝主亦豈可晏然止哉。賴信乃止。賴光有三子。長賴國。子孫世居多田。稱攝津源氏。賴信尤勇敢。善用兵。長元中。爲甲斐守。會上總介平忠常作亂。朝廷命上野介平直方將東海・東山兵討之。三歲不能平也。乃以賴信爲常陸介。伐之。賴信聞命即往。人勸其待兵集而進。弗聽。遂率子賴義等。進赴鹿島。忠常奪舟。列柵海岸。不可濟。賴信計示弱怠之。使使請和。忠常不肯。於是聚衆議戰。衆謂其無舟筏宜循海赴攻。賴信曰。不可。賊恃險。吾直渡。攻其不備。可一戰下也。聞有淺處可騎渡。軍中豈有知之者乎。有高文者。自稱知之。馳入海。行立葦爲表。賴信麾軍

代。川越本・插修本竝作伐。

川越本標註云文或作丈。

材。川越本・拙修本並作才。川越本名下無日字。爲人。川越本・拙修本並作潤達。

永承七年

從之。忠常驚怖。出降。斬之。效首京師。以功敍從四位上。任上野常陸介。賴信謝曰。臣藉天威。得不血刃而降强賊。何功之有。臣老矣。不堪遠任。願得改守丹波。非所敢望也。不許。子賴義。沈斷有武略。爲小一條院判官代。每從獵。善用弱弓殪猛獸。平直方奇其材藝。以女妻之。旣而賴義夢八幡神賜劍。其妻有娠。生子。賴義喜曰。此兒必興我家。因名曰義家。及長。冠于八幡祠前。稱八幡太郞。爲人英果。善射。每有征行。未嘗不從。賴義爲相模守。州俗好武。賴義・義家。撫以恩威。豪傑爭服。樂爲之用。當是時。陸奧豪族安倍賴時。幷諸部落。爲六郡酋長。國守與秋田城介。合兵伐之。賴時逆擊。大敗之。白河關以北。傳檄盡叛附焉。朝議以賴義爲陸奧守。與義家及次子義綱。率兵赴伐。會、大赦。賴時解兵而降。臣事賴義。賴義遂兼鎭守府將軍。永承七年。任滿將還。入府視事。賴時厚犒其軍。旣罷歸國府。宿于阿栗川。有人夜襲藤原光貞營。初賴時長子貞任。請婚於光貞。不聽。以故報之也。於是。賴義欲執貞任。賴時乃擧兵反。據衣川關。賴義奏請再任。發兵伐之。賴時壻藤原經清・平永衡。來屬官軍。或告永衡與虜有私。賴義捕永

不自。拙修本作二自不一。

天喜五年

飢。川越本・拙修本並作レ饑。崎。正本作レ碕通。下同。雪。拙修本作レ雷。

康平五年

衛斬之。經清亦不自安。遁歸於頼時。頼時族富忠。勇而有衆。頼義以敕旨諭。應官軍。頼時亦親往説之。頼義令富忠伏兵要撃。獲頼時。誅之。而貞任軍猶張。貞任魁傑。善用兵。官軍數不利。屬歲比飢。糧食不給。天喜五年。頼義奏請徵兵食。其十一月。自將兵千八百。撃貞任于河崎。會大風雪。人馬凍飢。貞任以選兵四千。戰于鳥海。縱左右翼。大敗我軍。我軍所餘僅六騎。虜急鬭之。矢下如雨。頼義・義家皆傷馬。從騎下而授之。義家與藤原範明等。縱橫奮撃。虜兵相警曰。八幡太郎也。遂退去。頼義既免。乃奏兵食不至。遠近皆然。且出羽守不與臣戮力。於是。詔罷出羽守。新守至。亦不敢來援。貞任勢益張。令經清以私符徵官物。令曰。用白符。勿用赤符。赤符。官符也。頼義益困。對守數歲。康平五年。任滿。詔高階經重代任。國民慕頼義。不服經重。經重不得已而去。於是頼義矢必滅虜。使人説出羽酋清原光頼。及弟武則。諭以大義。七月。武則率子弟以下萬餘人而至。頼義以三千人。會議于營岡。爲七陣。以武則等分將之。而自將第五陣。進至萩埒。將攻小松柵。以凶日不果。會清原氏候騎誤失火民家。柵中大譟。頼義謂武則

是則。拙修本作武則。游。川越本作遊。下同。五十。拙修本作五千。遹。正本作矯。下同。廚川。寫本作府川。

曰。機不可失。拘日何爲。對曰。我兵怒如火。宜及此時用之。乃遣騎兵。絶其衝路。而步兵薄攻之。深江是則等。以死士冒險入柵。虜大擾。貞任令弟宗任出戰。賴義以麾下橫擊破之。虜游軍又襲我第七陣。亦擊大破之。虜遂棄柵走。乃焚柵而退。會霖雨。留旬餘。磐井以南。盡應宗任。侵奪我糧道。賴義分兵赴拒。九月。貞任瞰我兵寡。以精騎八千來襲。武則曰。我客兵糧乏。利在速戰。彼不坐困之而來戰。是自授首也。賴義大喜。爲長蛇陣。逆戰半日。大破之。追走至磐井河。曰。吾欲乘機遂擣其巢穴也。則令武則以八百騎夜追之。武則更揀死士五十。自間道焚貞任營。內外合擊。虜軍大亂。走保衣川之險。賴義・義家進攻之。河水方漲。武則等戰不利。見河岸有樹覆水。武則使遹捷者攀樹踰河。縱火虜營。貞任駭走。賴義追擊。連破二柵。進拔鳥海柵。乃會將士飮。謂武則曰。吾得至於此。子之力也。子視吾面目。奚若也。對曰。臣爲將軍執鞭。何力之有。將軍盡忠於天子。暴露于野十餘年。頭髮皆白。天地爲動。將士爲奮。破虜如決河。臣今視將軍。髮復半黑也。即獲貞任。則全黑矣。賴義喜。又進破三柵。追貞任。至廚川柵。柵據水澤。

康平六年

恪。拙修本作格。

鈔。川越本・拙修本並作抄。

高壘深塹。塹中植刃。以死守之。殺我兵數百人。賴義令壞人家塡塹。下馬遙拜京師。手取火。號爲神火投之。會風起。壘柵皆火。我軍因急圍之。虜殊死戰。武則解其一角。虜逃走。賴義擊鏖之。貞任乃獨身出鬭。我兵叢刺之。不殊。載之巨楯。六人舁之至。賴義視之。腰圍七尺。長稱之。賴義數其罪斬之。及其子千代・其弟重任。經清亦被縛至。賴義命用鈍刀斬之。曰。猶能用白符乎。宗任等皆降。賴義見柵中有所虜掠美女數十人。盡分賜將士。六年。二月。使人齎貞任以下首。獻闕下。詔敍正四位下。任伊豫守。敍義家從五位下。任出羽守。義綱爲左衞門少尉。淸原武則爲鎭守府將軍。八月。賴義建八幡祠于鎌倉鶴岡。賽戰功。七年。春。賴義・義家以諸降虜入朝。奏請賞有功將士。朝議未許。以故未赴任。任國不登。以私資濟貢賦。如是二年。上書請重任。曰。臣聞。人臣建勳功。受恩賞。和漢古今所同也。是以或有起徒隸而係金紫。出卒伍而至將相者。賴義以功臣之裔。效恪勤之節舊矣。適東夷蜂起。侵盜郡縣。鈔略人民。六郡之地。不服皇威者。數十年矣。及於近歲。日益猖獗。賴義以永承六年。受任彼州。至天喜中。兼帥鎭府。臣

凰。正本作皇。

責。拙修本作貢。

啣鳳凰之詔。以向虎狼之國。被堅執銳。身受矢石。暴露千里之外。而出入萬死之途。藉天子之威與將卒之力。終得奏其功。其渠帥安倍貞任。藤原經淸等。皆伏誅戮。傳首京師。其餘醜虜安倍宗任等。束手歸降。掃其巢窟。收之縣官。叛逆之徒皆爲王民。乃蒙錄功績。得守伊豫。臣忝聖恩。欽荷不暇。而以鎭服餘燼。猶留奧地。且征戰之際。有功勞者十餘人。爲請抽賞。未得裁許。是以不敢赴任。況去歲九月。被賜任符。遲引之罪。出不獲已。四歲之任。空過二稔。不能徵納官物。而封家納官。督責如雲。仍以私物。且償進濟。聞彼州吏言。頻年旱凶。田無秋實。民有菜色。臣謹按傍例。延滋境之年限。以救闔國之凋弊者。其人寔繁。況致希世之功者。寧無殊常之恩。昔班超以三十年平西域。今賴義以十二歲誅東夷。遲速優劣。採擇非難。饒無受千戶之封。曷不許重任之典。望請。天恩哀矜臣意。忝賜允可。使臣徐得處與復之計。以致辨濟之方。臣不任懇款。先是。諸降虜皆處流。義家愛宗任勇。特親信之。一夜。問所私女子。乘車而往。獨宗任從。心陰圖報復。拔刀窺車中。見其睡。不敢發。後遂傾心事之。義家嘗過藤原賴通第。談陸

承曆三年
延久三年
永保二年
永保三年
赴。拙修本作走。
寬治元年

奥戰事。博士大江匡房在別室。聞之曰。好男子。惜未知兵法。宗任微聞之慍。告義家。義家曰。其或然。見匡房出。禮之。遂就學焉。」承曆三年。美濃亂。詔義家。往定之。亂人聞之。皆遁。」延久三年。陸奥亂守源賴俊討平之。賴俊者。賴親孫。賴義從姪也。」永保二年。賴義卒。」三年。詔義家爲陸奥守。兼鎭守府將軍。初淸原武則有二子。曰。武貞・武衡。武貞生眞衡。又納藤原經淸之寡婦。生家衡。亦養經淸子淸衡。而眞衡爲嫡嗣。家衡・淸衡以下。皆臣事之。其姑夫吉彥秀武。以事怨眞衡。擧兵背之。眞衡赴攻之。秀武使人說家衡・淸衡襲其虛。眞衡乃還救。已而聞義家至。迎饗之。復往攻秀武。二弟又來襲。義家從兵入其城。拒卻之。義家自赴出羽。攻家衡。不利還。武衡喜。來謂家衡曰。子克八幡太郎。我曹之榮也。當與戮力。遂合兵據金澤柵。義家大怒。寬治元年。九月。自將數萬騎攻之。去柵數里。望見雁行亂。曰。是有伏也。縱兵搜索。果獲鏖之。謂衆曰。兵法言鳥亂者伏也。我不學則殆矣。遂進圍柵。相摸人鎌倉景政挑戰。敵射中其右目。景政不拔箭。而索射已者。終射殺之。武衡據險死鬭。多傷我兵。又使卒千任者詬言義家曰。汝父納名

軍。寫本作戰。

會食。拙修本作命食。

秀方。川越本・拙修本並作季方。下同。

結。川越本・拙修本並作約。

簿於我。以獲克敵。簿見在我。汝何以負我。義家怒。攻之。未能下。義家弟義光。稱新羅三郎。亦勇智多技能。是時。爲右兵衞尉。在京師。聞兄軍不利。奏請赴援。不許。遂舍官赴之。義光素好音。嘗學笙於豐原時元。是時。時元已死。其孤子時秋送義光。至足柄山。會月明。義光因吹笙。盡授所學。訣別。遂至陸奥。義家喜泣曰。吾見汝。猶見先君也。乃與俱進攻。柵固不拔。義家因會食。設勇怯兩列。以勵戰士。義光從臣腰秀方。無日不列勇列也。吉彥秀武降在我軍。進說。宜持久困之。義家從之。下令休戰。武衡使人來言曰。我軍苦無事。我有健兒龜次。請得一力人角之。乃遣鬼武者。勝而殺之。虜愧憤出戰。已而虜食盡。出羸兵來降。秀武曰。是紓糧也。宜斬。義家又從之。虜益窘。因義光乞降。不聽。再乞。且請義光臨柵中爲要結。義光欲往。義家止之。乃使秀方往。虜露刃待之。秀方夷然。武衡賂之以金。秀方卻之曰。我輩將旦暮分取之。不煩汝賂也。撫刀而出。時天漸寒。軍士恐凍。一夜。義家出令軍中曰。燒我營取煖。今夜虜柵陷矣。不復用營也。黎明。柵中火起。家衡遁。武衡潛池水中。義家獲之。誚曰。而父屬吾父樹功。吾父請授官爵。

者。正本作生。

途。川越本作塗。

九年。川越本・拙修本並作二九歲。

天仁元年

構。川越本・拙修本並作搆。

寢。川越本・拙修本並作寑。

若以怨報德。何也。名簿果安在。因執千任。拔其舌。令斬武衡。武衡乞哀於義光。義光請曰。降者宜赦。義家作色曰。悔過來歸如宗任者。是之謂降耳。擒而求活者。非降也。遂斬之。家衡爲其下所殺。義家欲獻武衡・家衡以下首。奏請官符。廷議謂其私鬪也。弗許。以故不賞將士。遂棄首于途而還。義家承父祖業。善撫將士。其征陸奧。前者九年。後者三年。東國士民。皆服其恩信。相與共請留其子弟擁戴之。而自呼其家人。稱義家曰八幡公。當是時。八幡公威名徧於朝野。白河法皇嘗患夢魘。詔義家獻其兵器鎭之。義家獻一玄弓。建御枕上。卽無患。法皇問曰。毋乃東征所執乎。對曰。臣不記也。法皇嗟賞之。然義家官位甚卑。以正四位下右衞門尉。卒於天仁元年。年六十八。有六子。義宗・義親・義國・義忠・義時・義隆。義忠最有名。官至檢非違使。季父義光嫉之。誘義忠臣鹿島某。使陰殺之。初義忠叔父義綱。與義家相惡。構兵。詔禁兩家兵入京師。事得寢。後義綱以陸奧守。擊平亂人平師妙于出羽。以功拜從四位上。其黨頗廣。至此朝議以義忠死。爲出於義綱子義明。遣兵殺之。義綱據甲賀山。詔源爲義討之。義綱自髡降。

生。正本作出。

保元元年

流佐渡。義光子孫世居甲斐。稱甲斐源氏。爲義者。義親子也。義親爲對馬守。以罪被誅。爲義幼孤。義家奇之。欲以爲義忠之嗣。甲賀之捷。拜左兵衞尉。時年十四。其明年。義家卒。爲義遂直承義家之後。居五歲。南都僧兵攻叡山。又命爲義。爲義與十七騎。逆擊于栗子山。走之。後十餘歲。累遷爲檢非違使左衞門大尉。敍從五位下。爲義有二十三子。長曰義朝。尤善戰。居相摸鎌倉。關東家人盡附之。爲下野守。第八子曰爲朝。猿臂善射。幼凌犯諸兄。爲義患之。逐之豐後。曰鎭西八郎。自稱九國總追捕使。以妻父阿曾忠國爲鄕導。數與菊池・原田諸大姓戰。比十五歲。遂盡伏九國。九國守介交訴之朝廷。敕太宰府討之。不能克。爲義坐免官。爲朝聞而病之。與須藤家季等二十八人。俱至京師。待罪。是歲。近衞帝崩。帝爲鳥羽法皇寵姬得子所生。夙受禪于崇德上皇。及帝崩。上皇願復位。法皇與得子議。立帝兄卽位。是爲後白河帝。帝之保元元年。法皇有疾。召得子。授之一筐。戒曰。緩急啓之。七月。法皇崩。上皇起兵。據白河殿。左大臣藤原賴長爲謀主焉。四募兵。京畿大擾。得子乃啓筐。則書武臣十人名矣。義朝爲之首。卽召義

少。川越本•拙修本竝作小。

竊。川越本•拙修本竝作私。寫本作而。

地。川越本•拙修本•寫本皆作他。

朝。義朝乃率兵。與族賴政等。俱衛高松殿。賴政者。賴光五世孫也。安藝守平清盛亦應召入衛。於是。上皇使使者召爲義。爲義辭曰。臣老羸。非復平昔。長子義朝勇而有衆。而既赴禁內矣。餘子獨爲朝可用。君請用之。毋以臣爲也。且臣夢。家所傳八甲。爲風所漂。臣心惡之。往必不利也。使者強之。爲義不得已。率諸子赴之。上皇喜。以爲判官代。賜邑及寶劍。以四子賴賢爲藏人。因會議戰。爲朝進而言曰。臣大戰二十。小戰二百。以芟鋤九國。以少擊衆。每利夜攻。臣請今夜襲高松殿。火其三方。而要之一面。其善戰者。獨有臣兄義朝。然臣一矢斃之。至如平清盛輩。臣鎧袖一觸。皆自倒耳。則乘輿必不得不出。臣乃加矢其從兵。徙輿於此。而奉陛下於彼。易如反掌。則東方未白。大事集矣。賴長曰。爲朝年少負氣。所言皆鄙人私鬪之事。安可施之帝王之戰耶。兩帝爭國。當用堂堂之陣。南都僧兵。應召且至。成軍以戰。未爲晚也。爲朝退。竊罵曰。唉。長袖者。惡知兵哉。家兄有謀。將出我所欲爲。僧兵寧可須也。爲義又進策曰。本宮垣溝單淺。無地可據。以寡兵保此。非計也。陛下宜幸南都。撤宇治橋以守。卽不利。幸于關東。臣糾合

川越本曾祖下無祖字。

川越本・寫本竝可下有也字。

伊東。川越本作伊藤。下同。

家人。奉興復闕。臣等之不難。賴長弗聽。爲義退而言曰。吾不知死所矣。與其六子賴賢・賴仲・爲宗・爲成・爲朝・爲仲。分八甲撰之。送一於義朝。爲朝軀幹大。不可服。乃服他甲。獨以二十八人守西門。餘子盡從父以百騎守南西門。平忠政等諸將。以兵數百分守諸門。義朝在禁內。關白藤原忠通以下。聚議不決。義朝數趣之。有詔。召義朝於階下。問計。對曰。取勝一擧。莫若夜攻。臣聞。南都兵千餘。應上皇徵。已次宇治矣。宜及其未至擊之。從之。詔。戰勝聽昇殿。義朝對曰。武臣赴戰。不期生還。臣請拜賜而死。攝衣而昇。藤原通憲奏曰。彼之曾祖・祖父嘗聽昇殿。而父則未也。以子先父若何。詔曰。勿問。義朝感喜。還營繫鞭車傍曰。我卽戰死。誰知我得昇殿。此識之也。乃以選兵四百。襲白河殿。平淸盛亦赴之。兵凡數千人。上皇諜者還報。爲朝哂曰。固當然爾。賴長恐爲朝不爲用。遽拜爲藏人。爲朝曰。吾何用藏人爲。吾鎭西八郞可矣。辭不拜。將戰。諸子爭先。不決。爲朝曰。臨戰何論兄弟。然吾嚮以不遜獲罪。故欲先而不敢。唯敵勁難當處。輒命於我。賴賢・賴仲。邀擊義朝。敗退。義朝隨攻之。平淸盛攻西門。其將伊東景綱。與二子伊

返。拙修本作遮。

速。正本作趣。

川越本・拙修本竝敢下有爲字。

烟。川越本作煙。同。

東五・伊東六先進、爲朝射之、洞五之胸。而著六之袖。淸盛慴懼而退。獨其騎山田伊行返戰、爲朝又射斃之、馬逸、入義朝陣。鏃穿鞍、大如巨鑿。部將鎌田政家。取而獻之曰。八郞君所爲也、義朝曰、彼弱齡未當至此。詐設以怖敵耳、汝嘗試之。政家自呼而進、爲朝曰。爾非吾家人乎。對曰、昔爲主君。今爲兇徒、射中其冑。爲朝大怒、與二十八騎、鬪門突出、政家辟易退走、義朝以二百騎馳之、呼曰。吾奉宣旨來。汝盍速降。乃彎弓於其兄乎、爲朝曰。判官公受院宣。令爲朝等拒戰。且彎弓於其兄。孰與推刃於其父。因大戰。義朝立馬莊嚴院門。爲朝望見之。注箭。既而舍之曰、父在此。兄在彼、焉知其不有所潛約。勝敗互相救護哉、乃注鳴鏑。顧謂家季曰、吾且褫其魄。家季曰、得毋誤乎、爲朝曰、第觀吾所爲。乃射穿冑臍。貫門扇。義朝大驚、乃呼曰。八郞射未爲精、爲朝曰。不敢焉耳、卽被許。甲之鬲。冑之題。唯阿兄所命、乃注大箭。深巢淸國進蔽義朝。應弦而倒。義朝兵死傷最衆。爲朝亦喪二十三騎、猶固守、爲義・賴賢等又善拒、天漸明。義朝馳使、奏請用火攻。聽之。乃縱火上風。烟焰蔽宮、宮中大亂。義朝等鼓譟、終陷之、上皇出奔。入

汝。諸本作女。

如意山。爲義以下悉從之。上皇親諭散遣之。皆揮泣而散。爲義將適東國。病不能行。抵簑浦。追兵來薄。諸子力戰卻之。士卒垂盡。乃削髮。欲因義朝請降。爲朝諫曰。上皇者。帝同母兄。而左府爲關白親弟。聞上皇已遷讚岐。左府亦死。骨肉之不可恃如此。大人盍鑒焉。不若赴東國。倚其豪族。官軍卽來。兒爲竭力。力盡而後死。不亦可乎。不聽。遂出降。初清盛奉敕索爲義。不得。會平忠政出降。其叔父也。素與有隙。則斬而獻之。以搖義朝。有詔。令義朝斬爲義。義朝數請以己戰功贖其命。帝怒曰。清盛能誅叔父。義朝獨不能誅父乎。果不能。將命清盛斬之。義朝憂懼。不知所出。謀之鎌田政家。政家對曰。此非臣所敢議也。然旣爲國讐矣。竟不免於誅。與其死於人。寧死於子。義朝意決。使政家誘殺之。自奉其首詣闕。賴賢以下五人。皆伏誅。猶有四弟。曰乙若・龜若・鶴若・天王。皆幼。義朝以詔遣人殺之。鶴若謂使者曰。抗闕者當死。吾儕何同科。恐汝謬聞。龜若曰。家兄誤矣。使吾輩存在。多於數百士卒也。乙若諭諸弟曰。汝輩勿復言。下野守旣忍於父矣。何有於弟哉。是無他。陷淸盛計中。自鎩其羽翼耳。事已至此。生猶豪辱。不若

寖。川越本作浸。擺修本•寫本竝作竊。

平治元年

速死以從父於地下也。駢首受刃。爲朝匿于輪田。將奔鎭西。聞平氏將平家貞要之也。不果。適有疾。浴於民家。或覘其身材魁偉。告之於官。官遣兵闘之。爲朝裸體抉柱。擊殺數人而就縛。至闕庭。特減死一等。拔其臂筋。流于大島。爲朝筋力雖減。用箭加長。曰。天子賜我大島。遂幷有傍五島。舊臣稍稍來附。後數年。敕狩野介攻之。爲朝射沒其一艦。而自逃入琉球云。」義朝之捷也。賞爲右馬權頭。義朝奏曰。是先臣滿仲所拜。然彼左。此右。且曰權焉。臣未知其榮也。於是陞爲左馬頭。而資望終不及平氏也。平氏素與少納言藤原通憲善。通憲以帝乳母子。貴幸用事。義朝欲以女爲其婦。通憲鄙義朝。郤之曰。我子學生。子女非偶也。乃與清盛婚。帝既禪位於二條帝。而猶聽政。嬖人藤原信賴與通憲惡。則寖引義朝自援。說以甘言。義朝深結之。平治元年•十二月。清盛如熊野。信賴乃謂義朝曰。通憲恃寵自專。陰與清盛。謀剪除子家。彼之專橫雖上皇亦厭之矣。吾欲發事誅夷讒人。子何不相助。義朝曰。吾建殊功。而不能贖父命。親屬摧頽。清盛欲乘此時。以陷擠我。我非不知之。公有此擧。敢不效力。信賴大喜。贈以鎧仗名

擊。川越本作戰。

馬。義朝又教之招賴政。於是義朝以五百騎夜圍三條殿焚之。又焚通憲第。所殺傷甚衆。通憲遁逃。追獲斬之。信賴挾帝及上皇據大內。義朝第三子曰賴朝。稱鬼武者。時年十三。爲右兵衞佐。進謂義朝曰。聞淸盛等將還。盍逆擊。乃坐待之乎。賴朝長兄義平在鎌倉。嘗與其叔父義賢有隙。戰于大藏斬之。人呼曰惡源太。於是聞變。晨夜馳至。信賴欲授之以官。義平辭曰。嚮叔父八郎。辭藏人不拜。知綬急也。吾亦姑用惡源太之號可矣。如聞。平氏將還。願假吾一隊兵。吾要之阿部野。梟淸盛以下首。然後拜命耳。信賴弗聽。已而淸盛入京師。帝上皇皆乘夜逃出。入平氏第。信賴旦起。乃覺之。意大沮喪。義朝撿其兵。稍稍散亡。所餘有二千騎。乃分守諸宮門。授賴朝以傳家寶刀截鬚。攜以臨軍。信賴不習騎。騎而墜。左右扶之。守待賢門。平重盛來攻。信賴舍守走。重盛以五百騎破門而入。義朝望見。咄嗟曰。豎子敗吾事矣。呼義平拒鬭。義平乃與鎌田政家・三浦義澄・平廣常・平山季重・熊谷直實等十六騎。躍馬而出。指視其騎曰。赤甲而黃馬者。重盛也。宜生擒之。進戰于大庭。騎皆注目重盛。追之七匝。重盛走出。以生兵入。

義平復撃走之。義朝馳使。讓義平曰。若何不善拒。而使敵數入也。義平乃出。至大宮巷。直衝平氏陣。陣潰亂。重盛與兩騎走。義平追之。垂及而馬跌。重盛踰塹。政家射之。甲堅不入。義平曰。射馬。射馬。重盛墜。追及之。其兩騎遮鬭死。重盛僅以身免。義平慮義朝。還而援之則義朝方與平頼盛。戰于郁芳門。大破之。頼朝射斃二人。傷一人。義平至。代父進戰。平氏軍悉敗走。退保六波羅第。我軍追北。信頼從出。半途逃走。平氏兵乘虛入大內。義朝直進。攻六波羅。頼政獨陣于六條磧。義平察其有貳心。以五十騎突之。頼政走。歸於清盛。清盛聞我軍至。大怖失措。倒蒙冑。從者言之。淸盛曰。帝在於後。不可背也。乃闢門固守。義平力戰。排門而入。敵分兵更戰。我兵自旦至晡十餘合。刀折矢盡。人馬皆傷。義朝欲親決戰。政家扣馬諫曰。衆寡勞逸。不較明矣。且走東國。以爲後圖。孰與殞身徒卒。以辱家聲。義朝乃收兵。退至三條磧。敵兵來薄。平賀義信・佐佐木秀義・首藤俊通等救戰。俊通死之。義信者。義光孫也。義朝得間。與三十騎東走。山門僧徒聞其敗也。以三百人要於路。義朝患之。武藏人齋藤實盛。免冑謂僧徒曰。左馬既死

墓。川越本・拙修本・寫本皆作塚。下同。

衆。正本作眾。

矣。我輩新募之兵。將歸鄕耳。公等欲褫我鎧仗。所不敢愛。顧子衆我寡。不能周給。請拋擲之。公等自取焉。乃投其冑。僧相蹂踐爭之。三十騎因驅突而過。至八瀨。顧見信賴來。呼義朝曰。子何棄我。義朝罵曰。豎子首謀。乃先走。何而來見我乎。擧鞭挟其面。棄之而去。至龍華。又遇僧徒要路。皆下馬破柵而過。叔祖義隆中矢死。子朝長被射股。拔箭復戰。義朝怒。力戰走之。至堅田。見義隆首。泣語其騎曰。八幡公遺體。獨見此人。而至於此。沈首湖水。將渡。會風濤起。取路於勢多。乃諭實盛等二十餘人。令散去。獨義平・朝長・賴朝・義信・政家及源重成・豎金王從之。賴朝騎睡。而後夜過森山驛。土兵聚。且捕之。賴朝乃覺。拔刀斬二人。義朝怪賴朝不在。使政家返索。獲之。至鏡驛。聞平氏拒不破關。乃由間道東出。會大雪。馬不能前。皆釋甲步行。復與賴朝相失。至青墓驛。義朝嘗嬖驛長女延壽。生一女。於是。投其家。乃分遣義平・朝長。募兵於信濃・飛驒。朝長創劇。途還。義朝曰。賴朝雖幼。不如汝怯。欲留之而去。朝長請父殺己。勿爲追兵所獲。義朝乃刃之。土兵聞義朝在焉。羣衆圍之。重成詐稱義朝。射殺十餘人。剺而自殺。義朝乃走。

入舟。正本作入船。

耦。川越本作偶。

譁。川越本標註云。一作譟。

又遣義信募兵。義信曰。公欲安適。曰。欲適内海。依長田忠致。忠致者。政家妻父也。義信曰。不可。彼性趨勢。恐不利於公。弗聽而訣。道塞不達。聞大俠玄光者延壽母兄也。遣金王就謀。玄光乃航載義朝・政家。柴覆之。由株瀬河如内海。津吏覺。呵止之。玄光爲不聞而過。吏追射之。玄光回舟至岸。吏入舟。發柴索之。玄光曰。義朝雖敗。亦從二三十騎也。安依吾儕求活乎。假使在焉。必自殺耳。安落子等手。義朝耳語政家曰。玄光諷我自殺也。如何。政家曰。且待之。吏亦不究而去。明日。達内海。忠致厚待之。義朝欲亟東去。時屬除夜。忠致固止之。止三日。忠致子景致。密勸其父殺義朝。忠致從之。乃伏力士三人于浴室。而進浴。金王操刀侍浴。力士不敢發。義朝求浴衣。不至。金王自出取之。力士乃入。義朝赤手搏仆一人。其二人耦刺殺之。金王聞浴室譁。則返。輒斬三人。政家方與忠致飲。聞變且起。行酒者拔刀。政家奪其刀斬之。景致自後斬政家。忠致女嫁政家者。伏政家之刀而死。金王・玄光。欲報忠致父子。不獲。殺數十人。取馬逃去。忠致乃獻義朝及政家首于平氏。義朝與政家。年竝三十八。信頼以下。皆伏誅。義平在飛驒。

衆。川越本作レ多。

烏丸。拙修本作二烏坊一。

可。川越本作レ能。

託。正本作レ托。

來屬者甚衆。聞二義朝死一。皆散。義平欲二自盡一。念レ當下報二父仇一而死上。乃變レ服入二京師一。適値二舊臣志内景澄一。因僞爲二其僕一。出二入平氏第一。舍二于三條烏丸一。舍主人視二僕擧止非一レ凡。又怪三主僕每食二於隱處一也。竊窺レ之。則易レ饌而食。乃走。告二平氏一。平氏使下難波經房以二三百騎一圍上レ之。義平拔レ刀出。斬二數人一。躍升レ屋。不レ知レ所レ往。經房乃執二景澄一去。義平晝伏夜行。以伺二平氏一。欲レ倚二東近江舊人一。行至二逢坂一。經房詣二關神祠一。途見二義平困臥一。以二五十騎一圍レ之。義平蹶起。箭中二其臂一。不レ可レ揮レ刀。終被レ縛。至二六波羅一。坐二之堂緣一。怒曰。吾何坐レ此。自起入レ堂。清盛出見。謂レ之曰。脫二於三百騎一。獲二於五十騎一。何嚮勇後怯也。義平笑曰。命焉耳。子之命窮。亦至二於此一。吾爲二子之大患一。宜二速見一レ殺。乃斬二于六條磧一。義平臨レ刑。仰レ首睨二平氏第一曰。保元之亂。處レ斬者以レ夜。今乃白日斬レ我。平賊何無狀乎。嚮使二我言行一。奴輩無二遺類一矣。遂被レ斬。時年二十。賴朝之與二父兄一相失也。夜迷失レ路。出二於小平山一。有二漁人一。知二其非常人一。舍レ之。裝爲二女子一。而薦二包其刀一。自肩レ之。送至二青墓驛延壽家一。賴朝託二截鬢刀於延壽一。而去之二關東一。遇二平氏將平宗淸一被レ虜。還過二延壽門一。義朝所レ生女。年十二。聞レ之泣曰。我他日受レ辱。寧

詣。川越本標註云。一(捆修本)作請。
乞。川越本作請。

今從阿兄死。將走出。衆止之。後獨赴水死也。賴朝既至六波羅。就斬有日。宗清謂之曰。欲活耶。曰。然。父兄皆亡。非吾誰祈其冥福。宗清詣清盛後母池尼。尼從容問曰。賴朝如何。對曰。肖右馬君。右馬。蓋尼之子。蚤死者。尼悲之。爲乞清盛再三。乃得宥死。流于蛭島。道傍觀者。見其有威容。相語曰。是猶放虎於野耳。舊臣皆勸其削髮。獨秩父盛安附其耳語曰。郎君。宜存髮以待前途。賴朝首肯而去。」賴朝有六弟。曰義門。蚤死。曰希義。居駿河。被虜流土佐。曰範賴。爲藤原範秀所養。稱蒲冠者。平氏不問也。曰今若。曰乙若。曰牛若。三兒皆婢常盤出也。竝從母匿於龍門里。平氏索之。不獲。因捕常盤之母。常盤乃自至。清盛悅其色。密挑之。不肯。其母涕泣。說以禍福。不得已從之。清盛乃釋三兒。盡爲僧。今若改名全成。居醍醐。乙若更名義圓。事圓慧法親王。牛若甫二歲。居鞍馬山寺。稱遮那王。未削髮也。」平氏勢威。歲熾月盛。賴朝在配所。以其乳母比企禪尼。常餽遺之。纔得不乏。伊豆人伊東祐親・北條時政。奉平氏令監視之。關東舊臣齋藤實盛・大庭景親・畠山重能以下。皆叛事平氏。其屬意賴朝者。亦弗敢來通。獨佐佐木秀義。

徑。拙修本作經。

自近江來。寓相摸。倚澁谷重國。使其子定綱等數問賴朝。安達盛長・加藤景廉等數人。亦往來給仕焉。賴朝深沈有大略。性堅忍。喜怒不形於色。爲衆所畏愛。中宮屬三善康信。其故人也。一月三使。使以報京師動靜。淸盛累遷。至太政大臣。其妻姊幸於法皇。生皇子。遂受禪。是爲高倉帝。淸盛納女。立爲中宮。先是。常盤寵衰。出嫁於人。牛若年已十一。嘗見諸家系譜。自知其先世。悵恨久之。於是。晝讀書。夜學劍搏。爲人短小精悍。面白齒出。甚趫捷。爲衆僧所患苦。師勸其削髮。對曰。二兄爲僧。吾已恥之。可復傚乎。强之。竟弗聽。時藤原淸衡孫秀衡。爲鎭守府將軍。牛若欲往倚之。適有鐵買吉次。往來陸奧。會其詣山。牛若乃陰語之以情。吉次曰。事甚易。然取子而去。恐遭僧徒怒。牛若笑曰。彼輩苦我。我去。其所欲已。又會下總人深棲賴重詣山。牛若與之狎。於是。三人與偕東。至鏡驛。牛若乃自加冠。名曰義經。稱九郎。遂至下總。居數月。適有一强盜。盜馬。衆追之。盜負樹。衆不敢迫。義經徒手捕之。又有盜數十。爲劫。義經赴救。立斬四人。賴重服其勇。而憚物議。稍戒之。義經乃去。徑上野。得伊勢人義盛者。約爲君臣。至陸奧。因

寫本報下有於字。

承安四年

川越本・拙修本嘉下有賞字。拙修本嘉賞下無之字。

治承元年

川越本・拙修本竝無比字。

辯。正本作辨。

治承二年

治承三年

治承四年

四年。拙修本作三年。

吉次通秀衡。秀衡善遇之。義經請之金。以報吉次。在陸奧。又得佐藤嗣信兄弟。時承安四年也。當是時。除陸奧・出羽外。盡係平氏所管。所在源氏。皆爲人所擯斥。獨兵庫頭賴政。平治中。決意屬官軍。多材藝。聽昇殿。嘗奉敕射怪禽寢殿上。獲之。帝嘉之。後遂敍從四位下。治承元年。比叡山僧徒擁神輿犯闕。詔諸武臣拒之。賴政守達智門。僧兵來攻。賴政免冑下拜。遣其裨將言之曰。賴政崇敬山神。有年矣。不幸奉敕。弗敢關弓向神輿。昔源平氏竝衞朝廷。保元以降。平盛源衰。況以賴政老憊寡兵。徹甲不足以迎公等。左近衞大將平重盛。以大兵守陽明門。避彼攻此。不可謂勇。公等思之。即不見許。賴政與衆卒。駢死輿前而已。僧兵乃向陽明門。敗還。世稱賴政以智辯免禍也。是時。僧兵欲再擧。敕大納言藤原成親討之。成親初稱受法皇密旨。陰圖平氏。託事聚兵。攝津源氏有行綱者焉。與其謀。已而度衆寡不敵。自告清盛。清盛捕成親等。悉殺之。二年。清盛女生皇子。立爲太子。明年。清盛使其次子宗盛將兵。徙法皇。幽之鳥羽。四年。廢帝立太子。是爲安德帝。平氏以外祖益專橫。賴政爲從三位。削髮而老。子仲綱爲伊

編。插修本作騙。

是歲。插修本・寫本並作四年。

豆守。有名馬。宗盛數欲借之。仲綱弗肯。賴政懼。令仲綱許之。宗盛借而不還。大會客而出其馬。烙記仲綱二字。曰。騎仲綱。曰。鞭仲綱。仲綱與父言而憤之。賴政素善於以仁王。以仁王者。法皇次子也。第在三條高倉。稱高倉宮。賴政嘗夜詣高倉。從容說曰。大王者。於上皇爲庶兄。於今上爲伯父。才德兼備。天人交應而齡已及壯。未得爲親王。臣竊爲大王羞之。王亦見清盛所爲乎。廢立生殺。一從其私。當今之時。大王亦竟不能保終。自平氏之專權也。諸州源氏列於編戶。皆見奴僕使。憤怨鬱積。因屈指擧之。得賴朝・義經以下四十餘人。曰。大王誠能仗義聲罪。此輩皆可傳檄而致也。王何不速擧大事。上拔法皇幽厄。下援萬姓塗炭耶。王意悅。終聽之。會源行家自熊野來。賴政薦之於王。行家。故爲義第十子也。是歲。五月。拜行家爲藏人。密齎王令旨。以諭諸源。以賴朝爲嫡宗。特賜一通。行家又密誘新宮僧徒爲援。行家既發。僧徒相告語。謀泄。熊野別當。平氏黨也。聞而攻之。敗還。馳告平氏。平氏未悉事端也。遣兵圍王宮。賴政次子兼綱爲檢非違使。在遣中。急告之賴政。賴政卽馳使王宮。告曰。王急逃之園城寺。臣等將

渡邊。正本作渡部。下同。

齧。川越本。插修本竝作嚙。

追赴焉。王隷士長谷部信連。被王以婦人服。遣之。開門而待。昧爽。吏卒入門。呼索王。信連大罵。殺傷十餘人。而被執。終不告王所在。賴政焚其第。率仲綱兼綱等五十餘人。追赴王所。其舊臣渡邊競。居平氏第後。衆欲呼之與偕。賴政曰。毋以爲也。彼不呼而來者。已而宗盛聞賴政奔。使人闞競。在焉。乃召見之。問曰。三位逝矣。汝何以不從。競佯答曰。臣近與三位有隙。故不相聞知也。宗盛誘以厚祿。競佯喜從之。因言。新圖報效。獨患無馬。宗盛與以所愛駿馬。競乃歸舍。結束騎其馬。過平氏門。呼曰。渡邊競。源家舊臣。何能改慮仕仇敵哉。今將赴援三位。何不要擊。平氏莫敢出者。遂至園城寺。仲綱大喜。截其馬鬣尾。烙記宗盛二字。夜使人驅入之平氏第。馬入廄。與他馬相踶齧。一第驚騷。宗盛慚恚。於是。賴政招叡山南都。竝援王。因建策曰。今夜遣羸兵千。縱火三條。以誘平氏兵。且戰且卻。而以精騎數百。還襲六波羅。必得克矣。僧眞海者。陰附平氏。故發異議沮之。天遂明。平氏亦以利啗山徒。山徒叛。欲攻賴政。賴政乃奉王走南都。王不習騎。墜者六。因息于平等院。平知盛等以二萬騎追至。賴政撤宇治橋板。拒之。會曉

進。川越本‧拙修本竝作迫。

伊東。正本作伊藤。下同。

寨。川越本作塞。下同。

霧。平氏兵緣橋架來戰。渡邊競等善拒。殺傷過當。已而敵亂流大至。賴政中流矢傷膝。兼綱亦戰死。賴政乃與王訣。使王脫走。而自還戰。亂射。敵不敢進。乃入院。釋鎧而坐。謂其騎曰。吾年已七十七矣。爲天下倡義。可以死也。與仲綱皆自刃。王途爲追兵獲。殪。皆傳首京師。清盛聞諸源圖己。幽法皇益固。六月。迫徙都福原。奉帝於己家。作三間板屋。以囚法皇。遂欲誅鋤諸源。三善康信飛書戒賴朝。使早爲備。賴朝初寄伊東祐親家。以事相惡。遂欲殺賴朝。祐親子祐淸。密告之賴朝。賴朝乃倚北條時政。時政素器之。妻以其女政子。會以仁王令旨至。賴朝大喜。陰與時政謀擧兵。平兼隆。平氏疏屬也。爲伊豆目代。居八牧寨。賴朝計先擊之。竊遣京人藤原邦通。與兼隆游。圖其地形還。會大庭景親自京師歸。以清盛旨。圖賴朝。語之佐佐木秀義。秀義密使其子定綱。馳告之賴朝。賴朝已得康信書。知其信然也。乃欲先發。因語定綱以所爲擧大事。曰。吾欲首擊目代。以卜成否。子宜留此招致諸弟。定綱請還取鎧仗與俱來。乃去。久之不至。賴朝疑其意變。悔語之也。已而定綱率三弟經高‧盛綱‧高綱而至。甲冑敝惡。羸馬繩轡。

闕。川越本・拙修本竝作闕。

傳。川越本作傳。

賴朝目之。慘然泣下。於是賴朝令時政等八十騎攻八牧。出圖指授其所嚮。留盛綱及加藤景廉自衞。時八月十七日也。時政待昏而發。賴朝呼時政還之曰。吾何以知勝敗。對曰。勝卽擧火。苟敗矣。馳使報之。君自爲計。乃往。敵驍將堤信遠。別居寨北。遣佐佐木氏攻之。經高自前門入。射之。信遠知有寇。亦射。揮刀而出。時月已出。經高覩之。舍弓交刃。定綱・高綱繼至。遂斬信遠。亦赴八牧。賴朝使人升樹望火。火不擧也。顧景廉赴援。授以薙刀。曰。爲我斬兼隆。景廉與僕洲崎三郎。俱赴八牧。則戰方酣。寨堅不拔。景廉進而迫塹。令楯數枚。綴以弓弦。投諸塹以渡。踰壘而入。敵有善射者闕屋八郎。自櫓上呼曰。吾箭一而已。誰當之者。三郎佯稱景廉而進。當箭死。景廉進擊殺八郎。遂入。又殺一人。及寢。寢戶闔。戶內有燭。乃脫冑冒於薙刀。伸刀入戶。如人窺戶狀。兼隆在戶側。謂敵人入也。擊之。景廉揮刀斬兼隆。用燭火。傳屏障以出。賴朝望火擧。則大喜。已而時政等凱旋。景廉提兼隆首。視賴朝。曰。公定天下。可以此卜也。兼隆族知親。爲蒲屋邑吏。爲民所患。賴朝自稱受令旨。宰關東。因罷知親。民大悅。伊豆人狩野茂光・相摸

常胤。正本作經胤。下同。

依違。拙修本作移依。

人土肥實平等。稍稍來集。會于土肥里計事。於是。使安達盛長傳令旨。歷說八州豪傑。先抵大庭景親。景親素爲平氏所厚遇。弗聽。兄景能謂之曰。汝爲恩也。吾爲義也。乃來歸。次抵首藤經俊。經俊嘲笑之曰。以流人圖平氏。猶鼠鬪猫耳。乃去。抵三浦義明。義明聞使者至。扶病出。召諸兒孫謂曰。吾家世仕源氏。吾今餘喘未絕。得遭此擧。汝等勉之。事克興家。不克死義。禮盛長遣之。遂抵千葉常胤。常胤遲疑。其子胤正諫。常胤乃決意。因進策曰。鎌倉地形險固。源家之故也。公宜先據之。臣亦將赴焉。盛長終抵平廣常。廣常心持兩端。依違應之。盛長乃還。而常胤・義明等未至。二十三日。賴朝以三百騎。軍于石橋山。明日。大庭景親以首藤經俊等三千騎來攻。會日且暮。或議待明日戰。景親欲及三浦黨未至而戰也。進而挑戰。自名曰。我鎌倉景政裔也。倡亂者何人。賴朝使人對曰。我君。八幡公四世孫也。奉王命誅無道。東國士族。誰非君家人。汝獨不記乃祖之從八幡公於陸奧乎。乃背義嚮利。以瀆家聲也。景親語塞。乃與弟景尙先進。賴朝召岡崎義實問。孰當彼兄弟者。義實。乃三浦義明弟。居伊豆者也。於是。薦其子

杉山。描修本作二椙山一。下同。

箱根。正本作二筥根一。下同。

義忠。義忠受命而退。召僕家安曰。我欲爲佐公死也。汝全身而歸。語之我妻子。家安不肯歸。曰。郎君年二十。乃能爲佐公死。臣年六十。焉不爲郎君死。乃從而進。義忠遇景尙。搏而伏之。呼從者。從者未屆。而敵人長尾爲宗來援景尙。時夜黑大雨。咫尺不辨。義忠曰。上者景尙也。景尙曰。上者義忠也。爲宗進摸其鐙。義忠揚足蹴之。急拔刀刺景尙。刀不脫室。爲宗弟定景亦來。義忠終被殺。家安死之。比明。我兵遂大敗。走入杉山。敵兵羣追賴朝。殿而親射。敵應弦而倒。景廉扣馬諫止。自與佐佐木高綱・天野遠景等留戰。高綱弟義淸娶景親妹。在追騎中。高綱呼曰。汝以一婦人故。背君離親。何無恥之甚。因奮鬪。數卻敵兵。賴朝得間。獨與土肥實平冒險逃走。狩野茂光老大艱步。使子親光舍己從賴朝。乃自殺。親光與時政・景廉・高綱等六人。俱踪賴朝。見其立偃樹上。請生死以之。實平曰。多人則顯。宜散去之。賴朝乃遣時政赴甲斐。發其諸源。其餘皆期後會。散之。獨與實平俱匿。景親大索山谷。其族梶原景時。知賴朝所匿處。故導之他。景親亦聞賴朝自殺也。馳使告之京師。賴朝既免。出杉山。匿箱根山。初三浦義明遣子

眞鶴、拙修本作詣鶴。是。川越本作此。

義澄・義連・庶孫義盛等。以三百騎會頼朝于石橋山。至酒匂。聞頼朝敗死。乃還。與畠山重忠戰于小坪。克之而歸。守衣笠城。重忠以三千騎攻之。義明年八十九。力疾上馬、欲親戰。義澄等止之。出戰不克。城竟陷。義明謂義澄等曰。佐公有勇略。非一敗而死者。汝輩宜索而從之。吾老矣。不能行。當止死於此。吾耄耋、死不足惜。獨憾不目佐公成業耳。義澄等固請扶行。弗聽。逡巡間。遂爲敵兵所獲死。義澄等航海走安房。索頼朝、頼朝之匿箱根山。投僧家。僧弟嘗善於平兼隆者、欲爲復仇、乃逃出、循山走土肥。自眞鶴崎上舟、赴安房。獨土肥實平・岡崎義實從之、當是時。海陸皆敵。二人盡心防護。數日。望見一大船載甲士者。二人急匿頼朝于船腹。而待大船。至則三浦氏也。見義實。爭問佐公何在。義實不輒對曰。吾亦索公耳。義澄等泣曰。吾棄父而去者。欲見公焉耳。今如此。悔不與倶死。頼朝聞之、匍匐而出。義澄驚喜。拜曰。君在此耶。亡父之言。果驗矣、頼朝聞義明死。悲慟。義實亦語石橋之戰。義忠死狀。相共泣涕。義盛進曰。諸君何徒泣爲。今得與佐公遭。盍議大事。諺曰。欲食者先器。嚮藤原忠清以相國命。得爲土所別

欽。正本作「歆」。
親政。摺修本作「親正」。

當。八州士人。羣聚其門。臣意欽之。君而得志。願授臣以此職。賴朝笑而諾之。於是。賴朝乃上安房。移檄遠近來會。其間敵地者。使由海路來。九月。徵小山朝政・下河邊行平。得三百騎。進赴下總。千葉常胤擒州目代千田親政。以兵三百。迎謁于國府。因建策曰。宜多張旗幕。以誘觀望者。賴朝從之。進至隅田川。於是。平廣常乃以萬騎來會。欲見賴朝。賴朝不輒見。使實平言曰。吾奉敕擧義。汝何不速來。當在後陣以待召呼。廣常悚然。退謂人曰。此公必成大事。吾以我衆援其孤弱。不圖其如此也。賴朝既幷廣常兵。又會石橋散兵來歸。軍大振。先是。石橋報至京師。清盛大喜。已而聞賴朝未死。勢復振。則恐。十月。遣孫維盛・弟忠度。以五萬騎來攻。以藤原忠清監軍。齋藤實盛爲鄉導。賴朝召諸將議曰。吾欲徇上野・下野。然後進。如何。廣常曰。不若及敵未踰足柄。而取武藏・相摸。二州既獲。天下唯君所欲爲。賴朝然之。濟河而軍。畠山重忠・江戶重長等來降。賴朝詰重忠以攻三浦氏之由。對曰。臣父重能在京師。故以藉口耳。非臣本心。實平・常胤請而釋之。乃命在前軍。立功自贖。於是。武藏・相摸豪傑相告來降。兵凡十餘萬。乃

無河。川越本・拙修本竝作無川。
畜。川越本・拙修本竝作蓄。

入鎌倉。立爲幕府。部署諸將士。遂親將而西。逆擊平氏。八州將士爭追附之。比踰足柄山。凡二十餘萬騎。北條時政引武田信義等兵會之。信義者。義光曾孫也。世居甲斐。於是。與子信光・弟安田義定等。擧州兵二萬。南入駿河。是時。大庭景親。與弟景尙。以兵千餘走。欲歸維盛。聞甲斐兵塞路。景親竄匿。乃與首藤經俊・長尾定景等。俱來降。景尙遇義定于波太山。戰敗遁走。歸維盛。信光又擊破州目代。斬長田入道父子。平賀義信・其子維義。亦發信濃兵。來屬賴朝。賴朝乃合諸軍。進與維盛。夾富士河而陣。初維盛遇行旅自東來者。問賴朝兵數。對曰。八州草木。無不風靡。無山無河。皆其兵也。已而賴朝至河東。白旗林立。望之無際。維盛召齋藤實盛。問曰。汝知東事者。度賴朝兵。挽强如汝者。幾人。曰。弓五箇力。箭十五拳。以貫甲七札。若是者。一隊不下二十人。人畜五六馬。馳山谷如平地。戰而喪親。踐尸而進。如臣者。斗量帚掃。不足數耳。如我畿內・西國兵。幺麼尫弱。託喪稱創。動輒欲退。而所乘皆駑。豈可與彼輩較哉。蓋實盛與藤原忠淸。議事不合。既對維盛。遂辭而西。一軍恐怖。維盛以忠淸爲先鋒。進至河岸。河水方

固。川越本・拙修本竝作因。

又。拙修本作爲。

漲。兩軍相持未戰。武田信光爲我先鋒。遣使平氏營。與約戰期。平氏不答。信光乃潛兵。由間道。夜出西軍後。道徑大澤。鵞鴨驚起。西軍大駭潰走。頼朝欲追走遂西。常胤・廣常・義澄。皆說曰。常陸・陸奥諸州未服。恐窺我後。先定關東。然後西伐。未爲晚也。頼朝從之。乃令信義守駿河。義定守遠江。而引兵還。次于黃瀨（キセ）河。」會、有一將。率二十騎來。因土肥實平。求見頼朝。頼朝問狀。對曰。其年齒二十左右。面目俊邁。曰。是陸奥九郎也。亟呼入。實平導入幕。果義經也。曰。聞阿兄起義。喜不自禁。固辭秀衡而來。頼朝大喜曰。八幡公之東征也。遇新羅公來援。曰。猶見故將軍也。今吾遇汝。猶見頭公也。兄弟相對涕泣。是時。頼朝諸弟希義在土佐。爲平氏所殺。範頼・全成（ゼンジヤウ）・義圓。皆來歸。」頼朝還鎌倉。大行刑賞。梟長田入道父子首。斬大庭景親。乃召首藤經俊。言曰。鼠圖猫如何。將斬之。其母嘗乳養頼朝。因爲請哀。宥之。賜長尾定景于岡崎義實。曰。乃子之仇也。義實又請而宥死。伊東祐親欲航海西奔。爲天野遠景所捕。囚于三浦氏。召祐清。欲報其德。祐清固辭。以嘗受平氏厚恩。請去而從之。頼朝義而許之。佐佐木義清降。亦以父兄故

養和元年

山木。掴修本作山本。

宥之。十一月。賴朝將兵攻佐竹義政于常陸。以廣常爲其姻戚。使說降。誘殺之。其姪秀義據金砂城。廣常又誘秀義叔父義弘以利。令爲內應。潛兵入城。擊走秀義。分其邑賜將士。十二月。新館成。徙居焉。令將士三百餘人各占邸第。別置士所。以和田義盛充別當焉。踐其前諾。選壯士十一人。每夜直寢室。以自衞。當是時。諸道豪傑。起兵以應賴朝者。甚多。河野氏起南海。菊池氏・緒方氏。起鎭西。山木氏・柏木氏。起近江。而木曾義仲起於信濃。義仲於賴朝爲從弟。其父義賢。爲義平所殺者也。義仲幼孤。畠山重能受義平命。欲殺之。而不忍。託之齋藤實盛。實盛更託之中原兼遠于木曾。稱木曾氏。義仲常憤宗族殘滅。陰圖報仇。與羣兒嬉戲。每爲騎射狀。稍長。壯偉多力。善射。潛入京師。覘平氏者數。及以仁王令旨至。喜而集兵。立得千餘人。平氏聞之。召詰兼遠。兼遠敎義仲。出依根井行親。招甲斐・下野諸源。聞石橋事起。欲赴援。會、州人笠原賴直。爲平氏來攻。義仲擊走之。因據木曾峽。養和元年。春。清盛薨。宗盛嗣。以遺命。遣諸弟。將兵東下。賴朝聞之。遣和田義盛。援安田義定。守遠江。賴朝叔父義廣在常陸。欲襲取鎌倉。

資長。正本作二資永一。

壽永元年

聚兵三萬。入下野。誘足利忠綱・小山朝政。忠綱應之。朝政詐應。設伏擊破之。義廣奔歸於義仲。賴朝季父行家在美濃。與平氏戰。敗退。賴朝遣弟義圓。將兵赴援。三月。行家・義圓。以兵二千。與平重衡七千騎。夾墨股河軍。義圓夜挺身渡河。爲平氏邏騎獲。戰死。行家繼進。不利。戰且走。保矢矧川。使人爲役夫狀西行。遇西兵。問鎌倉援兵來否。對曰。前軍及菊河。後軍及見附。重衡大恐而退。行家使人馳徇美濃・尾張。曰。平氏走矣。不射之者。我敵也。二國人爭起要擊。西軍狼狽而去。行家欲遂入京師。請援於山徒。山徒不應。奔歸於賴朝。先是。平宗盛令陸奧藤原氏攻賴朝。藤原氏不聽。又令越後城氏攻義仲。城氏聽之。六月。城資長發兵萬餘。入信濃。義仲設三伏。擊殺其九千人。九月。平通盛等亦來攻。亦逆擊之越前。大敗之。壽永元年。城長茂以四萬騎來攻。義仲有見兵三千。以源光基策。分爲七隊。張赤旗迎之。敵以爲平氏黨也。及漸近。仆赤旗。樹白旗。急迫之。敵軍驚潰。長茂被創走。北陸豪傑。悉附義仲。武田信光欲以其女妻義仲子義高。義仲曰。娶爲妾耳。信光怒。構義仲於賴朝曰。義仲數捷。張於北國。平宗盛嘗養

壽永二年

瀦。川越本・拙修本並作引。

砥並。諸本作礪並。

其兄女。欲以妻義仲。與連和共東。頼朝大怒。會行家來鎌倉。請邑自給。頼朝曰。吾取十州。義仲取五州。公亦盍自取。行家慍。以千餘騎去。歸義仲。頼朝益怒。二年。三月。親將十萬騎。入信濃。義仲集將士議。樋口兼光・今井兼平。欲壁于富部拒之。義仲曰。世皆言。源氏相肉。今又舍深仇之平氏。而與同宗交兵。若人笑何。乃引兵。避之越後。頼朝亦引兵還。使使言義仲曰。平氏罪惡貫盈。朝廷命我宗討之。當日夜赴命。而十郎私構兵圖我。子乃庇之。舍西向東。何也。子苟無他心。則請速逐十郎。否則得養貴息爲子。二者不聽。則將以八州之卒。與子相見。義仲將小室忠兼。勸聽其請。兼平曰。君聞大藏之事乎。佐公豈終釋然於君哉。不若蚤絶之。義仲從忠兼言。遣義高爲質。四月。平氏以十餘萬騎東伐。先擊義仲。義仲乃遣其將仁科幸弘等。拒之于燧城。瀦日野河爲濠。西兵不能進。我新附將齋明者。通款平氏。決水導兵。城輙陷。西兵乘勝。連陷諸城。五月。西將平盛俊。進至般若野。義仲在越後國府。遣今井兼平。馳先奪寒原之險。擊破盛俊。西軍退陣于志雄・砥並二山。砥並山南有栗殼壑。深數千仞。義仲發國府。行收兵。得

六動寺。拙修本作不動寺。

嶽。川越本・拙修本竝作岳。

赴。拙修本作赴非。

輿。拙修本作輿非。

五萬騎。閲兵于六動寺。自向砥竝山。謂樋口兼光等曰。彼衆我寡。彼舍山東下。就平地戰。非我利也。我先陣山東麓。敵必下巔而陣。我一軍則遶出山西。驅敵于南壑中。可一舉而鏖也。諸將皆曰。善。乃分萬人。屬兼光等。而自將三萬人。進至東麓。盛旗幟。蔽林而軍。平氏望見之。果下巔。陣于山腹。兩軍射戰終日。而兼光等已在敵背。日暮。萬人鼓譟突出。義仲麾兵而上。夾擊西軍。西軍大駭潰走。陷南壑。死者幾二萬人。壑爲塡塞。平氏將帥僅以身免。收散兵。保佐良嶽。初義仲使行家別將兵。向志雄山。戰不利。義仲赴援。西軍不戰而走。六月。追走。陣于小楯林。相持未戰。西兵獲我芻者。問曰。北軍何謀。曰。謀夜襲。西兵怖走。爭渡安宅渡。溺者千餘。既渡。截橋而陣。義仲至渡頭。濁流方漲。試放馬十匹。水及馬腹。全軍從之。終大破之。乘勝追走。進至越前。獲齋明及齋藤實盛等。平氏既連爲義仲所破。走歸京師。義仲進至近江。使其史覺明牒誘山徒。七月。濟湖軍于叡山。平宗盛大恐。擧族挾乘輿西奔。獨頼盛。其母嘗德於頼朝。頼朝間通書招之。且欲報其臣宗清。故不從奔。法皇避平氏之叡山。義仲與行家。帥北兵六萬。分

路入京師。京師人相告曰。不圖今日復見白旗也。

日本外史卷之二終

五位。拙修本作四位。

隕。川越本・拙修本竝作殞。

日本外史　卷之三

源氏正記

源氏　下

是月。法皇會諸公卿。論討平氏功。頼朝第一。義仲第二。叙義仲從五位下。任左馬頭。除越後守。除行家備後守。二人不悅。更除義仲伊豫守。行家備前守。竝聽院昇殿。收平氏五百餘邑。賜其百四十于義仲。留衞京師。世呼曰旭日將軍。義仲生長山野。擧止粗鄙。不任衣冠。爲京人所嗤笑。初以仁王子爲僧。奔越後。稱北陸宮。年十七。義仲奉以入京師。八月。法皇以乘輿西奔。京師無主。議立天子。時有高倉帝皇子二人。叔五歲。季四歲。法皇欲擇而立之。因宣問之義仲。義仲屬意於北陸宮。奏曰。立君重事。非鄙人所敢間。然辱受咨問。敢不竭情。故三條宮憤平氏之專横。欲拔陛下於幽厄。時命未會。隕身鋒鏑。天下悲之。臣之樹功

日窺臣背。川越本・拙修本並作日夜窺背。
晰。川越本標註云。一作晰。

於今日。亦奉遺令也。今議建立。而不及其胤。人心云何。法皇以其嘗爲僧。不聽。卜二皇子。叔吉。法皇納寵姬言。欲立季。再卜而立之。是爲後鳥羽帝。法皇頗厭義仲。欲召賴朝來京師。義仲爭爲不可。弗聽。義仲憤懣。而北兵乏糧。四出鹵掠。法皇患之。時平氏在南海。屢侵山陽。行家請赴討。詔許之。義仲曰。行家雖勇。數奇。不可使將。乃更命義仲。義仲發京師。以足利義清等爲先鋒。閏月。義清與平氏戰于水島。敗死。義仲欲進攻南海。途聞賴朝遣兵。且入京師。則引還。有詔。止之。不肯。先是。法皇使者至鎌倉。賴朝延見言曰。平氏棄京師自逃。而義仲・行家。擣虛入之。乃矜功要賞。敢擇任國。胡爲者也。臣嘗疾往伐之。而藤原秀衡等日窺臣背。臣未可以奉詔。且帥大兵入輦下。徒爲騷擾。使者歸報。公卿皆想望賴朝風采。爭問狀。使者言。賴朝軀矮而面大。然擧止詳雅。言語明晰。非義仲比也。賴朝又使使奏曰。平氏所侵諸邑。宜盡復其故主。臣等不宜利之。平氏降者。宜從赦宥。臣嚮被宥。故有今日。源平並立。同衞王家。古制爲然。自朝廷視之。何有彼此哉。法皇益屬意於賴朝。屢使使召之。於是賴朝使弟範賴・義經。監關東貢

屢詔。拙修本作詔屢。

停。川越本標註云。一作奪。

賦西上。以詗義仲。義仲欲拒之。與行家謀奉法皇於軍。行家素有寵於法皇。密奏之。法皇乃使僧靜憲詰義仲。義仲對曰。孰造此言者。臣徒慨官家之貳於賴朝也。故欲與決雌雄耳。願得賜討賴朝宣。遂詣法皇宮。獻誓書。且請聞孰讒人。詔慰解之。十一月。屢詔趣義仲西征。曰。或謂。汝之不西。欲謀不良也。義仲對以備東兵。而鹵掠益甚。法皇遣其幸臣平知康詰之。知康善擊鼓。稱鼓判官。義仲曰。鼓判官。反欲爲人所擊乎。知康怒。還報曰。義仲反形已成。請討之。法皇聽之。驟徵叡山・園城寺僧兵。以知康將之。義仲會將士言曰。我有功無罪。何遽至此。我以五萬士馬。留衞京師。而官無所給。不剽豪戶。何以生存。然未嘗敢抄掠皇人也。彼鼓乃讒我。以至此。我將擊而破之。樋口兼光・今井兼平切諫之。勸其詣闕降。義仲怒曰。吾自起兵數十戰。未嘗知有所謂降者。即降。吾反爲鼓所擊殺耳。遂令將士曰。吾今日決死。汝輩勉之。勿爲賴朝所笑。乃分軍爲七隊。闖法住寺。知康上牆。踊躍罵義仲。義仲咄嗟赴之。知康走匿。北兵縱火焚之。不獲。遂奉法皇于攝政第。帝于閑院。停公卿以下至知康官爵。自爲院廄別當。先是。義仲

元暦元年

解。川越本作辭。

高綱。拙修本作高總誤。

娶藤原基房女。於是。基房徐開諭之。乃徙法皇于西洞院。自辭其官爵。元暦元年。正月。義仲敍從四位下。任征夷大將軍。先是。行家與平氏戰室山。敗。遂據河內。畔義仲。義仲遣樋口兼光。將兵擊之。而範賴。義經。已至伊勢。橘公友（キントモ）者。往告變焉。遂赴鎌倉。賴朝見公友曰。義仲有罪。宜詔臣誅之。知康何人也。焉得與義仲敵。乃檄八州將士。西討義仲。而知康來鎌倉。欲自解說。賴朝戒內外。勿爲通。知康至。無肯顧者。無幾何。徵兵聚者六萬。乃盡委之於範賴。義經。因令曰。木曾阻我兵。必於宇治河。皆具善馬。可以騎渡。賴朝有駿馬二。曰池月。曰磨墨。梶原景時有寵。其子景季。年少銳勇。於是。請得池月以先登。賴朝曰。乞焉者多。吾不與也。顧範賴等。戰不能克。吾且親往。此吾乘也。乃賜磨墨。諸將士皆發。明日。佐佐木高綱自近江來謁。賴朝問曰。聞汝在近江。盍直從軍入京乎。高綱對曰。臣如從軍。不敢期生。欲一見君訣別。且奉指揮也。馳三日。乃達。臣唯一馬。罷不可用。故後期在此。賴朝喜。因謂之曰。汝能爲我先登於宇治乎。曰能。臣居河上。識其淺深也。於是。遂出池月賜之。高綱感喜謝曰。君聞高綱未戰而死。則不能先

登也。聞未死而戰。則先登者高綱也。拜舞而出。賴朝呼返。戒之曰。景季等乞焉。而不與。汝記之。對曰。諾。時大軍陣于浮島原。景季視羣馬。無過磨墨者。牽而上高丘。誇示於衆。已而有大嘶聲。畠山重忠曰。池月聲也。何以至此。已而高綱僕牽池月至。過丘下。景季問曰。誰乘。僕對曰。佐佐木氏之乘。景季大慍曰。不圖公之視彼踰我。我寧與彼死。使公喪二良。卽扣刀要路而待。高綱望見之。謂其騎曰。彼非梶原耶。公之囑我。殆爲是也。漸近。景季呼曰。四郎久濶。彼乘。公所賜乎。高綱哂曰。否。吾患無善馬。欲就公廏借之。聞磨墨已賜於子矣。池月不得命矣。子且然。況於高綱乎。然君事方急。不遑顧慮。遂誘廏人竊之矣。後有責問。子幸救解之。景季色解。笑曰。悔我不竊也。乃與俱西。範賴向勢多。義經向宇治。義仲聞之。議戰守。見兵千騎。乃遣今井兼平・山木義弘拒勢多。根井行親。楯親忠拒宇治。撤橋板。樹柵。張繩於水中守之。二十日。義經以騎二萬五千至東岸。戒居民避軍。而火其廬舍。以布陣焉。起櫓自登。具筆硯。書將士功最。曰。將以報鎌倉也。將士皆奮欲戰。義經又發令。而軍囂厖不聞令。乃取平等院鼓。撾於櫓下。一

軍屬耳。義經乃令。二萬人中。必有善泅者。直前營之。我勇士緣橋架防敵。勿使敵射我泅者。泅者爭釋甲而沒。刀截其繩。平山季重・澁谷重助・熊谷直實等。上架而射。射戰良久。有二騎。鞭馬亂流而進。先者景季。後者高綱。高綱自後紿景季曰。子之馬條慢矣。景季駐馬約條。高綱則超乘而過。上岸自名。景季踵上。義經上功簿。高綱爲先登第一。景季爲第二。畠山重忠以手兵繼渡。行親射之。中其馬。重忠泅而達岸。揮刀而進。北兵辟易。義經乃以全軍渡。擊大破之。行親搏戰而退。義仲馳使。請法皇幸醍醐寺。弗聽則率兵。馳赴其宮。拔刀瞋目。立于階下。具輿趣幸。宮中股栗。會、有來告東軍已至木幡矣。義仲馳出。過五條第。訣妻藤原氏。久而不出。有二士諫之。自殺帳前。義仲乃出。遇行親・親忠。合其兵。兵僅三百騎。望見東軍。旗幟彌天。曰。吾死矣。諭將士散去。衆請生死相從。義仲乃進。冒東軍。重忠・景時等。累進皆潰。義仲驅進。與義經遇。義經以數百騎。攢蹄衝擊。因亂射之。義仲大敗被創。以殘兵西走。義經使其兵追之。而與重忠等詣法皇宮。大江業忠上宮垣。望見之曰。義仲復至矣。一宮驚怖。業忠又報曰。旗號自別。

十三。寫本作二三十一。
還。正本作レ返。下同。

蓋東兵也。義經踵門下馬、颺言曰。臣源賴朝使者義經也。破賊而至矣。願爲奏之。業忠驚喜跳下。匍匐入奏之。法皇大喜。延六人列立中門外。見之。使人指問其名。穿赤錦袍者。曰源義經。被緋甲帶大刀者。曰。畠山重忠。亞重忠者二人。曰。澁谷重助・河越重賴。玄甲者。梶原景季、黃甲者。佐佐木高綱。法皇曰。皆壯士也。因敕護宮焉。義仲既敗。欲挾法皇西奔。還至于宮。義經等擊卻之。義仲走。至三條積。東兵爭要擊之。義仲且戰且走。殘兵十三騎。重忠復追之。義仲妾曰巴。兼平妹也、有膂力。每從軍。是時。單騎止鬬。重忠欲生得之。注目薄之。攫巴甲袖。巴策馬。馬躍。袖絕。重忠舍之而還。義仲以七騎走。會、範賴既破勢多而入。遠江人內田家吉在其先鋒。巴與之搏。斬其首。以視義仲。義仲歎曰。家吉美而勇。乃授首於女子。不知吾亦終死何人手也。因諭巴遁去。曰。臨死攜妾。人謂我何。巴請共死。義仲強之。巴乃泣涕辭去。義仲走。至粟津。遇兼平。兼平曰。義弘戰死矣。臣未審主公爲何狀。是以脫歸耳。義仲曰。吾宜死於京中。欲一見汝。故忍而至此。身創力竭。可以自殺矣。兼平曰。主公努力。方今。平氏在西。佐公在東。主公盍走

丘。川越本作邱。
赴丘。諸本作赴邱。
見。川越本作被。

保北國。以圖三分。臣請留防敵。主公可以逃也。乃樹旗集潰兵。潰兵稍聚。得數百騎。進衝敵陣。貫而過者三。乃有二十餘騎。範賴以數千騎圍之。義仲奮戰盡亡其騎。獨有兼平。兼平乃指一丘樹。謂義仲曰、君赴於彼。徐自爲計。臣請拒於此。義仲徑田赴丘。馬陷于淖。顧視兼平。箭中額死、年三十一。兼平方奮鬭。箙餘八矢。射斃八騎。聞敵中傳呼木曾公死。曰、吾事終矣。啣刀墜馬。自貫而死、東軍振旅、而兼光方破行家。追之紀伊。聞難還京師。其兵道亡。比及鳥羽。有三十騎。東兵赴擊。兒玉黨與之有姻。諭降以歸。請宥死。朝議不聽。義經傳義仲以下首京師。帛書其髻曰。賊義仲、縛兼光。從其後。終斬之。義仲叔父義廣。初防一口(イモアラヒ)。兵敗。逃伊勢。後爲賴朝所攻殺。義仲子義高。質於鎌倉。賴朝妻以女、後欲殺之。義高覺而遁。追捕見斬、妻悲慟不食。賴朝歸罪於追者。斬之、欲改嫁女於藤原高保。不肯而死、義仲妾巴。既別義仲。釋甲間行。歸信濃。遇義仲親故。具語以故、相泣也。時年二十八、削髮爲尼。居越後友松。祈義仲冥福。以終身云。」義仲既死。平宗盛自南海徙山陽。山陽將士。自室山・水島二役。服從平氏。平氏終復福原。

至。川越本作赴。

築城據焉。負山臨海。生田爲東門。一谷爲西門。勝兵十萬餘。繫大艦數千。平教經轉戰于備前・安藝・淡路・和泉。皆捷。源賴賢子義嗣・賴仲子義久。居淡路。皆爲所殺。平氏威振關西。期犯京師。賴朝聞之。趣二弟赴伐。以二月三日攻一谷。範賴以五萬騎向東門。梶原景時監軍焉。義經以萬騎向西門。土肥實平監軍焉。以明日爲清盛忌辰。延至七日。先期三日。早發。義經取丹波路兼行。比暮。至三草山。聞平資盛等七千騎陣山西也。召實平議曰。夜襲之乎。抑待旦也。實平未對。田代信綱進曰。敵謂我恃衆稽留也。則急襲之必勝。義經曰。是得我心。卽發。命僕辨慶。火沿道民家。取明而過。夜半至山西。急襲資盛。資盛果不備。大敗走。天明。令信綱・實平以七千騎赴西門。而自將精騎三千。向鵯越。鵯越者。城後間道也。日暮。駐軍熊谷直實・平山季重。在麾下。直實謂其子直家曰。冒險混進。孰後孰先。欲立功者。不若向西門。直家曰。然。此公常先士卒。不可隨也。未知平山子何如。使僕覘之。季重甲冑按刀。獨語曰。誰能先我。僕歸報。直實曰。彼所見。亦同我也。乃馳至一谷。天未曙。薄門自名。季重踵至。敵關門。二人突入奮鬭。城兵

高直。擱修本作高重。

辟易。季重出。亡其旗卒。乃復入。斬其敵而出。實平・信綱皆至。令士卒繼攻門堅不破。範頼亦令諸軍薄東門。武藏人河原高直。與其弟踰柵先登。中箭死。梶原景時使輕卒拔柵。以五百騎入鬪。既退。顧失景季所在。復入索之。景季在敵中。被髮而鬪。箙挿梅花。以自標。景時識見。挈之而出。當是時。平氏專防東西二門。而不圖義經。義經之向鵯越也。路險夜黑。令辨慶索鄕導。辨慶認火光。得一人家。見翁媼對坐。告以故。翁曰。小人以獵爲業。諳知山路。而今老矣。有一兒。膽氣可用。呼起。從辨慶謁義經。義經執火視之。長身高顴。持獵弓矢。問其歯。曰。十七。義經爲冠之。命姓名。曰鷲尾經春。給鎧仗。以爲鄕導。問鵯越如何。經春曰。太險。人馬不可行。唯鹿能踰之。義經曰。鹿四足。馬四足。等耳。先衆馳之。至鵯越。則天明。頫視城中。二門戰方酣。義經欲急應之。而懸崖數百仭。如經春所言。衆相目。莫敢進者。乃試驅鞍馬二下之。一傷一達。義經曰。可下矣。乃屈其所騎馬後足。一鞭而下。三千騎皆傚之。冑鞍相觸。直達城後。大呼而入。平氏軍駭擾。自相撃刺。敎經等敗走。義經縱火乘之。烟焰漲城。範頼・實平。破東西門而入。三面合撃。

範賴・義經。川越本・插修本竝作義經・範賴。

是。川越本作此。

在。川越本作内。

斬平通盛等十人。擒平重衡。宗盛奉乘輿。航海而逃。衆攀舟爭乘。斷臂滿舟。遂奔讚岐。倚田口成能之衆。保于屋島。九日。範賴・義經。以首虜還京師。請徇而梟之。不許。義經抗疏曰。臣父義朝。盡忠於保元。而爲人所詿誤。卒宣訴於獄門。平氏昨爲戚勳。今爲國賊。臣等竭力攻討。進不顧死者。不獨重王命。乃欲雪父恥也。臣兄賴朝。深存是志。今而不見許焉。臣等復何所望。朝議終許之。三月。賴朝以平義仲功。敍正四位下。遣梶原景時。檻致重衡於鎌倉。而見。使景時將命。曰。吾非忘相國之德。若王命何。然不圖公之卒臨此也。則至若右大臣氏。亦當不日相見。重衡請速死。賴朝屬之於狩野氏。待以二姬。餽酒食焉。以平族未夷。不輒殺也。是月。令土肥實平鎭撫山陽道。六月。奏請任範賴參河守。敍從五位下。範賴來謝鎌倉。置酒勞之。八月。復遣西征。是月。法皇以義經任左衞門尉。補檢非違使。時伊賀人作亂。應平氏。州守護平賀惟義。討平之。餘黨竄匿京師。義經捕斬之。九月。賴朝以範賴統西海軍事。義經統南海軍事。令範賴先發。以三萬騎下山陽道。聞平行盛軍兒島。赴攻。陣于藤戸。阻海水望敵。敵招之挑戰。我兵

文治元年

二月。川越本作踰月。

不能渡。佐佐木盛綱潛問土人以津。夜與俱濟。植竹條爲標而還。旦日。敵復挑戰。盛綱躍馬破濤而進。衆從之。擊走行盛。進入周防。是月。義經敍從五位下。聽院昇殿。十月。頼朝置公文所。以大江廣元爲別當焉。以出政令。置問注所。以三善康信爲執事焉。以決訟獄。令將士曰。凡武門之事。悉奉法皇旨。有不便者。徐分疏之。遂奏曰。方今。天下半定。貢賦闕乏。請簡擇國守。撫輯流民。京畿控弦之士。悉從義經。西討平氏。其有功者。宜附臣論賞焉。僧徒帶兵者。宜附臣禁止收取焉。又檄關西諸族。援攻平氏。文治元年。正月。範頼至赤間關。無舟可濟。軍疲糧乏。將士皆思東歸。範頼以書請濟軍食。頼朝答書。因戒範頼曰。在軍。務綏撫衆心。愼勿左右耳語。致其危疑。乃至進戰。愼勿犯先帝・太后。願使二位尼奉帝而至也。宗盛恇怯。必生得之。範頼諭臼杵(ウスキ)氏。給戰艦。木上氏餽糧食。遂進濟海。諮千葉常胤曰。吾聞之家兄。周防通京畿。控宰府。爲西國咽吭。吾今欲令智勇而有衆者居守焉。誰可者。對曰。三浦義澄。其人也。乃命義澄。固辭。不許。範頼以諸軍濟海。二月。頼朝所給糧舟至。軍益振。與原田種直戰于葦屋浦。大破之。得

校。正本作挍。
究。川越本・拙修本並作窮。

其子賀摩。先是。義經數請征南海。法皇以京師多賊黨不許。許先遣其將校。義經奏。曠日彌久。範賴糧盡東歸。而鎮西兵士。屢屬平氏。則勢難拔也。乃許之。義經乃戎服抵法皇宮。白曰。自平氏奔竄關西。奪官稅。亂官民。三年于此。臣既奉追討之命。鬼界・高麗。究其所至。鏖之而後已。否者。不復入王城矣。二月。發京師。艤于渡部。東兵不習水戰。人人自危。梶原景時曰。請爲逆櫓。義經曰。何謂逆櫓。曰。舳艫皆設櫓。進以舳。退以艫。義經曰。求進而退。兵之通患。乃欲求退乎。曰。宜進而進。宜退而退。良將也。有進而無退。野猪而介者耳。義經變色曰。猪乎。鹿乎。吾不自知。吾唯知進而勦敵爲快而已。公若爲大將。逆櫓千百。聽公所爲。若義經則不欲也。衆目笑景時。景時慚恚。義經遂令將士曰。進而死者。從我。退而生者。自此去。畠山重忠・熊谷直實・金子家忠・佐佐木高綱等。願從者。數百人。將發。逆風俄起。舟艦壞破。乃留修艦。艦成。義經託言落宴。以具糧食。即夜。令解纜。時風反而益暴。舟人不肯。義經曰。風順。盍發。伊勢義盛張弓注矢曰。不用命者射殺。舟人相謂曰。行死。止死。死一耳。乃發。從者五艦。百五十騎。獨置炬於義經舟。

覵。川越本•拙修本並作覰。

島。正本作嶋。下同。

乘暗而南。舟駛如射。黎明。達尼子浦。望岸上。有赤幟。可三百騎。義經令曰。我馬足瑟縮。不可直用。驅而游之。結束騎焉。勿虛發以費箭。衆從之。上岸大戰。擒敵將田口良連。其捕虜言。櫻間良遠以五十兵。守勝浦城。義經馳抵城。疾攻拔之。進至中山。見一卒齎書。京人也。義經問曰。子何之。曰。之屋島。義經曰。吾阿波人。應內府徵者。如聞源氏艤淀河。子必途覵之。其兵幾何。卒曰。可六萬。曰。子所齎誰書。曰。六條夫人書。夫人。內府妹也。曰。書中何言。曰。吾焉得知之。獨口授我曰。九郎既發京矣。彼眞可畏者。以木曾如鬼神。彼一擧取之。君急修城集兵。以爲之備。書辭亦如是耳。若公等。亦宜亟赴之。曰。諾。且子屢赴屋島乎。曰。然。曰。聞其城甚固。然否。曰。否。潮來則須舟。潮去可騎渡。義經乃叱曰。吾九郎也。奪其書。縛卒于樹。以五十騎疾馳。明日。至屋島。縱火於高松里。平氏大驚。以爲大兵至也。擧族乘舟。而義經已至城下矣。騎能屬者。七人而已。城兵有平有國。呼曰。大將誰。伊勢義盛對曰。九郎判官。曰。是義朝婢子。從鐵賈如陸奧者乎。義盛怒。城兵嘲罵不已。金子家忠令弟近範注箭。射殺罵者。義經恐敵知其寡單也。乃縱火

燒城。平氏兵皆航。更來迫岸。七騎拒射。我兵後者。稍稍來屬。又有州人藤原範忠者。以生兵數騎來。曰。臣曾祖範明。嘗從八幡公戰陸奧者。義經喜。以爲先鋒。戰而交退。日既晡。敵以一舟載美姬。挿扇于竿。植之舳。去陸五十步。麾而請射。義經曰。誰命中之者。衆薦下野人那須宗高。義經召而命之。宗高騎而獨出。兩軍注視。宗高一發斷扇轂。扇翻而墮。兩軍大呼。平氏兵怒而來戰。義經親擊卻之。追而入海。遺其所執弓于波上。俯欲取之。敵兵爭以鐵搭鉤其冑。義經以刀扞之。鞭扱其弓。從兵呼曰。舍之。義經不聽。終取之還。從兵曰。君何輕身而重弓。曰。不也。使吾弓如叔父鎭西八郎之弓則可。否者。是貽敵笑也。宗盛憾失義經。令敎經率精兵。迫岸射義經。佐藤嗣信以身蔽義經。輒仆。敎經豎菊王下舟。欲斬其首。嗣信弟忠信。射殺菊王。扶兄還營。義經親視嗣信。枕之膝。問所欲言。嗣信曰。臣自出陸奧。已委身於君。代君而死。死且不朽。獨不覩君鏖敵爲憾耳。義經泣曰。我鏖敵在旬日。而不及醻汝勞。嗣信背謝而絕。是日。鎌田光政亦被箭死。義經請僧葬光政・嗣信于高松。賵以名馬。蓋藤原秀衡所贐。宇治・一谷二役

址。川越本・拙修本竝作趾。

安田。川越本・拙修本竝作淺利。川越本標註云。按義遠安田義定弟。稱淺利與一。

所騎也。一軍感泣。皆思爲義經死。是夜。西軍陣屋島故址。東軍陣高松。東軍皆倦臥。獨伊勢義盛虞敵來襲。徇警徹明。明日。義經侵晨。復赴屋島。西兵善戰。擊破之。平氏走。保志度浦。義經追擊。復破之。因降將言。聞平氏將田口成能遣其子成直。以兵三千徇伊豫。命伊勢義盛。往說降之。義經幷其兵。使成直作書招成能。成能終送款焉。平氏舟逃志度而西。義經循陸追之。東軍阻風後發者。悉來屬。軍益振。時三月廿三日也。宗盛欲赴鎭西。範頼以三萬騎軍豐後。平氏不能入。還泊壇浦。兵艦凡五百艘。熊野湛增・河野通信。皆來附義經。明日。義經以兵艦七百艘。大戰海上。西兵殊死戰。我兵少卻。義經勵衆進。和田義盛挺進而射。箭軼二百步。及平知盛舟。知盛使新居親淸答射。箭汰義盛冑。傷其後騎。我軍羞之。義經命安田義遠還射。義遠按其箭曰。幹短且弱。請以我箭。乃注十四拳箭。洞親淸胸而過海三十步。義遠。義定弟也。義盛慚憤。迫敵亂射。殺傷甚多。義經以成能言。知宗盛等所在。麾軍萃之。令成能爲內應。西軍大敗。敎經怒。入我船。薄義經。義經躍入別舟。敎經不能及。乃赴海死。知盛以下六人。前後皆死。

五人。拙修本作八人。

二位尼懷養和帝投海。平太后繼投。我兵搭得之。義經使徇曰。赴海者。貴人也。我兵勿得辱。於是。奉太后以下于其船。遂生擒宗盛。鏖平氏軍。海水爲之赤。四月。東軍振旅。以俘獲旋。徇之京師。還納鏡璽。範賴留鎭西海。六閏月。乃還。賴朝遣使二名西。禁兵士侵掠。事無大小。一奉朝旨行。將士不因其奏。而拜衞府官者。不許東歸。詔敍賴朝從二位。五月。檻致宗盛父子於鎌倉。義經護送。行至內海。使父子徒行。七匝義朝墳。六月。至鎌倉。於是。賴朝大會諸將士。自坐簾內。而延宗盛於前舍。使比企能員言之曰。賴朝非敢復私仇。乃成王命爾。今日之臨。何幸甚也。宗盛懾伏。請宥死。不許。諷使自殺。不解。乃復命護送西還。更宗盛名末國。貶爲讃岐權守。斬之于篠原。傳首京師。梟于右獄。斬平重衡于南都。處大納言平時忠於流。八月。詔使使就義朝墓。贈內大臣正二位。是月。賴朝奏請。以同姓五人。補東國諸守。特詔任義經伊豫守。兼院廐別當。宿衞京師。初賴朝擇西征大將。欲試諸弟之材。陰以火烙盤器。而使諸弟更侍執焉。執輒驚釋。獨義經終盤不釋。神色自若。賴朝是以知其堪事。而心陰畏之。梶原景時有寵。監義

坂。正本作阪。下同。

經軍。義經不與諮事。景時怒。屬範賴。畠山重忠初隷範賴。憎景時負寵凌人。去屬義經。景時益怒。譖之於賴朝。賴朝性忌克。平廣常・源忠賴。皆以驕傲見誅殺。聞義經亦負功自專也。稍惡之。景時又爭逆櫓議。相啣益甚。壇浦之役。請爲先鋒。義經不聽而自先。景時誶罵不已。義經怒。欲誅殺之。景時撫刀曰。我知有鎌倉公而已。諸將居間。事乃解。景時歸鎌倉。百方讒之。平時忠爲平氏疏屬。其從西奔。竊贊謀畫。及其就擒。有簿書一篋。爲義經所收。時忠與其子。謀奪還之。以除禍本。乃以女妻義經。義經乃還其篋。賴朝聞而惡之。賴朝方擧一男。而親信其外舅北條時政。諸骨肉皆被猜防。義經東獻俘鎌倉。至腰越驛。賴朝弗許入。使時政出受俘。義經乃寄書於大江廣元。自訴曰。義經代征討之勞。上夷國賊。下雪家恥。心竊期褒賞。不圖忽蒙讒言。曠日於此。莫以自明。徒涕泣爾。將永違恩顏。骨肉誼絕。自非先人之再生。誰爲分疏焉。義經幼孤。從母逃匿。流寓諸國。爲氓隷所役。未嘗一日安居焉。然而幸慶忽會。至忝重任。或策馬峻坂。或凌風大海。不敢顧軀命。欲以慰冤魂伸宿憤。豈有他哉。既辱五位尉。榮顯何加。而

忽遭此厄。憂深悲切。敢上誓書。要之百神。而威猶不霽也。不得不仰公之救護。伏願乘間進說。庶幾亮其無他。卒被恩宥。得享終身之安。不報。義經怏怏而西。賴朝聞其怨望也。怒奪其邑。時行家匿京師。義經潛相往來。賴朝遣梶原景季。命義經討行家。且詗之。義經稱病。間日。乃見景季。景季反言其病羸狀。景時曰。兩日間。廢寢食。以裝病焉爾。賴朝乃召諸將。言曰。誰爲我擊九郎者。九郎亦不負我知耳。而先我昇殿。不告我爲五位尉。車服華侈。翺翔院中。饒有君寵。何不自孫。壇浦之役。與太后同舟。又娶平虜女。橫恣如此。不得不誅鋤。誰爲我擊九郎者。衆莫敢答。賴朝不懌。乃命景時。景時辭曰。判官素惡於臣。臣往。判官必備之。不若遣其意外者襲之。乃命昌俊。昌俊者。南都僧也。因事在鎌倉。以勇桀見親近。於是。授計而西。至京師。去義經堀川第四町而舍。義經尤其不亟來謁。召而詰之。對曰。臣此行。詣七大寺。欲畢事然後謁耳。義經笑曰。否。否。得非以二位旨圖我乎。吾今欲囚汝。顧恐。人謂吾爲怯也。且汝兄氏使者。吾不可先發。昌俊獻誓書歸舍。義經所幸舞姬曰靜。闚昌俊。謂義經曰。彼將去。四顧第中。而注目

毆。川越本。拙修本竝作歐。下同。

於廏。恐有異志。義經不爲意。及昏。又告曰。大逵塵起。入行距躪。不可不虞也。使二童往詗昌俊舍。久之。不還。又使婢。婢走還曰。童騈死于門。門內鞍馬可五十匹。士擐甲將騎焉。夜既三鼓。第外大譟。直于第者僅七人。靜急取甲被義經。義經令開門。騎而突出。呼曰。在今日。誰敢圖義經者。昌俊與兒玉黨六十餘騎。散而亂射。義經從士。聞變四至。行家亦來救。昌俊終敗走。義經徑詣法皇宮。箭蝟集於胄。而在廡者三。奏變而還。昌俊逃鞍馬山。山僧與義經有故。索獲獻之。義經詰其背誓。對曰。誓者昌俊。襲者二位。義經怒。毆其面曰。我面即二位面。毆我面。是毆二位面也。義經壯之。欲使活還。昌俊請速死。乃斬之。義經•行家。遂迫請討賴朝宣旨。公卿皆憚義經。欲權許之。獨藤原兼實不肯曰。賴朝罪未至當討。且命弟討兄。如之何。法皇遂許之。義經僕安達清經。常爲賴朝間義經。於是。走報之鎌倉。賴朝方落長勝壽院。聞報曰。可也。畢禮而歸。曰。彼殺吾使。可以伐也。乃戒諸將束裝。曰。且日將發。小山朝政以下五十餘人。請即夜發。乃以爲先鋒。命之曰。及我未至。誅彼二兒。後五日。親發鎌倉。檄諸道。會軍於途。義經聞之。詣

姦。川越本•拙修本竝作奸。下同。

此。川越本作是。

預。川越本作豫。

文治二年

法皇。請勅關西兵援己。法皇許之。補義經九國地頭。行家四國地頭。十一月三日。義經與行家及女壻源有綱等。倶奔竄西海。不知所往。伊勢義盛與義經訣。歸伊勢。襲守護首藤經俊。敗。匿鈴鹿山。經俊攻殺之。頼朝至黃瀨河。聞義經既奔。乃還鎌倉。以朝廷宣討己。訴寃不已。法皇乃急宣諸州索義經。未獲也。平氏餘黨。又竄匿所在。天下騷然。頼朝患之。大江廣元建策曰。方今。大亂初平。關東倚安師府。而姦豪伏匿於諸道。隨起隨討。輒發東兵。則勞費不貲。民苦誅求。爲今計者。莫若國司置守護。莊園置地頭。所在追捕。則天下可坐而定也。頼朝大悅。遣北條時政。護衞京師。因奏請之。且請課畿內及西南四道。每段五升。以充兵食。朝議從之。頼朝薦家人有功勞者。分爲守護•地頭。而身統之。世因稱頼朝。曰六十六國總追捕使。頼朝素聞兼實賢。且德其爭院宣也。貽之書曰。頼朝當平賊之熾。孤身擧義。得至奏功。而不敢自專。今亂人乃挾命恃柄。敢規非分。頼朝特恐禍亂之端。復自此起。近日所奏請。非以營私。乃爲天下定亂焉耳。因奏請。置議奏官十人。撰公卿充焉。按治公卿以下。預東討宣者。二年。春。兼實遂爲

文治三年　文治四年　文治五年　颶。正本作颶。

攝政。四月。頼朝又貽書議奏官曰。僕生武門長鄙野。不諳知朝章。偶有所奏。願諸公簡之。專執公平。以安天下。至如宣旨。或有不便民。亦當盡言焉。面從非忠也。時北條時定代時政護京師。獲行家于和泉。有綱于大和。斬之。十二月。以天野遠景爲筑紫奉行。捕行家・義經黨與竄鬼界島。擊平之。先是。頼朝奏。以比年軍興。民不任農。蠲其管内九國逋租。遂薄其正稅。而諸國準之。是歲。又發倉。賑相摸窮民。三年。春。遣中原親能・大江廣元等。修閑院殿。時輦下多強盜。遣千葉常胤・下河邊行平按之。寓書於藤原經房。稱鎮壓亂賊。莫若二人。二人至京師。盜賊悉平。四年。六月。造六條殿。五年。正月。敍正二位。三月。修大內。七月。奏請討陸奥藤原氏。以其舍義顯也。義顯。卽義經。削籍改名。義經之出京師也。上舟于大物浦。遇颶。與行家相失。匿吉野。五日。山僧羣聚捕之。佐藤忠信曰。臣兄既授命於屋島。臣今亦將代君死。乃佯稱義經。亂射。義經得間逃。至多武峰。又徙十津川。復還匿京師。忠信亦來匿。而發覺。與吏卒鬭。終自殺。義經乃與妻河越氏及辨慶等。爲道士裝。由北陸道奔陸奥。初義經姬靜。從匿吉野。義經諭之訣別。

引。川越本標註云。一作稱。

變色。正本作色變。

嘗。正本作曾。

岡。川越本・拙修本並作屠。

使僕齎貲送歸京師。僕奪其貲。棄靜。靜獨行風雪中。爲山僧獲。致於北條時政。送之鎌倉。詰義經所在。靜固陳不知。以其有娠留之。夫人政子聞其善歌舞。欲一見。引病不往。賴朝夫妻詣鶴岡祠。召靜命舞。垂簾觀焉。靜固辭。强之再三。乃起上場。工藤祐經撾鼓。畠山重忠擊銅拍子。靜整衣而進。唱離別曲。又作歌。言慕義經意。衆皆垂泣。賴朝變色曰。賤婢不肯頌我。而敢慕亂人。欲誅之。政子諫止。賜纏頭罷之。祐經與梶原景茂等。俱就靜舍飮。景茂。景時季子也。醉挑靜。靜怒而泣曰。吾嘗侍豫州。豫州非鎌倉公親弟哉。汝乃公家人。何遇吾亡狀。使公而全友道。汝欲識我面。得乎。景茂大慚。已而分身生男。安達淸經受命。奪而戕之。靜見放還。政子厚賜遣之。初賴朝聞藤原秀衡舍義經。奏劾其納亂人。院宣讓秀衡。秀衡陳謝。尋病卒。遺言子泰衡等。舉二國聽於義經。以抗賴朝。有院宣。使泰衡圖義經。泰衡疑惑。是歲。二月。賴朝奏曰。泰衡庇反者。罪與反同。臣請奉王命伐之。因大徵兵。四月。晦。泰衡遣兵襲衣川。辨慶・經春等。奮戰死。義經手刃妻子而自殺。五月。泰衡乃使使齎義經首。來獻鎌倉。賴朝方落鶴岡浮圖。使使

止之於途。六月。首至。盛以漆函。醇酒浸之。令和田義盛・梶原景時檢之。或曰義經不死。匿在蝦夷。頼朝不復推究。遂奏。泰衡負險阻化。不速奉敕。不可不伐。朝議未許。而徵兵稍聚。頼朝諮之大庭景能。景能曰。大將臨事。不顧君命。且泰衡先世。爲君家人。君討其罪。何須敕允。聚兵徒費。毋爲也。頼朝從之。使景能及三善康信等留守鎌倉。分爲三軍。常陸・下總兵。自東海道進。千葉常胤・八田知家將之。武藏・上野兵。自北陸道進。比企能員・宇佐美實政將之。頼朝自將中軍。以畠山重忠爲先鋒。自東山道。直入陸奥。次于多古。小山政光迎犒之。入謁。見一甲士侍。問其名。頼朝曰。此本朝無雙勇士。熊谷直家者也。政光曰。此輩單進。與臣等異。故易成名耳。士赴君難。何有彼此。顧其子朝政・朝光曰。汝等亦單進。八月。頼朝進至白河關。泰衡軍于鞭楯。而城厚樫山北。使庶兄國衡將精兵二萬守之。國衡將金剛秀綱。以數千人爲先鋒。山下穿大濠。引遇隈河瀦之。頼朝令重忠赴攻。發卒塡濠。朝光挺軍。與加藤景廉等進擊。重忠繼進。大破之。秀綱退合於國衡。日既暮。頼朝令軍中。明日攻城。三浦義村・葛西清重先登。斃數千人。

津雲。揾修本作雲津。吾。川越本作我。

旦日。頼朝親進攻。城甚固。國衡善拒。朝政・朝光以下。皆殊死戰。呼聲動地。積鏃成堆。朝光與族朝綱。豫遣死士七人。自城後冒險入。大呼而射。城兵謂大兵夾擊。則大亂。國衡潰圍北走。和田義盛張弓追之。國衡亦回馬射。義盛先發。中其左膊。國衡傷走。重忠部將大串某。追斬之。朝光亦追獲秀綱。泰衡聞敗而遁。頼朝進至國府。東海道軍。斬敵將佐藤元治以下十八輩而來會。頼朝未詳泰衡所在。使朝政等攻物見岡。而自圍誰母城。城兵皆降。乃出令曰。我軍至津雲橋。則敵避之平泉。以死守之。先鋒諸將。勿貪功輕進。傷吾一士。遂以諸軍進。連破栗原・三迫諸寨。遂至平泉。泰衡已火城遁。使使乞降。不許。九月。進軍陣岡。北陸軍度念珠關。斬敵將田河行文等而來會。兵總三十萬騎。白旗蔽空。泰衡奔蝦夷。至贄柵。其將河田二郎襲殺泰衡。持其首來降。頼朝誚讓之曰。泰衡在吾掌中。何須若力哉。若忘恩規利。大逆無道。乃斬之。命梟泰衡首。而宣旨適至。乃進至廚川。泰衡族。俊衡以下悉出降。頼朝出鎌倉四十餘日。而平陸奥・出羽。乃索其版籍。皆罹兵燹。既聞實俊・實昌者諳州事。召見之。使圖其所記。以知其戸口

建久元年

走。正本作奔。走者之走亦然。

冢。川越本・拙修本竝作塚。

阨塞。復流民。賚老人。放俘囚。禁鹵掠。取糧於上野・下野。毫不累士人。乃至國府。大書其廳曰。國法一切仍秀衡之舊。勿得更革。令葛西清重留鎭州事。使使奏捷。謝其擅伐。簿上將士功。請分予二州地。十月。還鎌倉。十一月。法皇欲賞其戰功。遣大江廣元辭之。請賑貸陸奧窮民。十二月。法皇封賴朝以伊豆・相摸。促朝京師。先是。出羽留守撿邑。將廢間田。賴朝禁止之。以安人心。已而泰衡舊臣大河兼任。在出羽。聚數千人。詐稱源義經・木曾義高。建久元年。正月。轉入陸奧。由利維平逆戰。死之。清重上變。使者謬報曰。由利維平走。橘公成死。賴朝曰。維平非走者。公成非死者。驗之果然。乃令上總介足利義兼。與千葉常胤・比企能員。將兵伐之。小山朝光以下邑陸奧者。道會之。相摸以西。具兵待命。脅從降者勿斬。二月。義兼等。與兼任戰于栗原。大敗之。兼任卻。阻衣川陣。義兼等亂流。又大敗之。清重率州兵來會。兼任逃之外濱。壘于兜味山。義兼等圍而鏖之。兼任脫走。踰龜山。爲樵夫斧殺。賴朝責出羽留守失政。罰甲二百。賴朝以天下全定。乃議入朝。重忠爲前隊。常胤殿之。十月。發鎌倉。由海道入朝。途過內海。謁義朝冢。

青墓。川越本。拙修本並作二青塚一。

建久二年

建久三年

建久四年

獵罷。川越本標註云。作二賴朝一。

伊東。正本作二伊藤一。

至青墓。召女延壽。先是。延壽聞賴朝起。返致其所託刀截髮。於是。相見道舊故。十一月。入京師。居六波羅。先謁法皇。即日。朝帝。帝直授權大納言。尋兼右近衞大將。法皇待之甚厚。每入見。漏數刻不許出。十二月。辭兩職。賜大功田百町。薦功臣十人。拜衞府官。使藤原高能留守六波羅。而辭歸鎌倉。凡往還所需。不累百姓。遠近悅服。二年。正月。改公文所。稱政所。凡事以政所下文行。二月。修法住寺殿。冬。法皇弗豫。賴朝齋戒禱祈焉。三年。三月。遂崩。賴朝因大張法會。施濟於民一百日。七月。天皇詔。以賴朝爲征夷大將軍。使中原景能就拜之。賴朝曰。吾爲武臣。敢坐受王命乎。使三浦義澄迎天使于鶴岡祠。受詔書。思其父死義。以榮之也。四年。正月。定將士座次。四月。獵于那須野。五月。大獵于富士野。長子賴家從焉。獵罷將還。伊東祐成者。與弟時致夜入工藤祐經舍。斫殺之。會雷雨。士卒出鬬。多死者。遂斬祐成。時致犯幕被捕。旦日。賴朝親詰之。蓋祐成父祐泰嘗爲祐經所殺。奪其曾我莊。故復仇也。賴朝問何犯吾幕。曰。吾祖祐親。將軍仇之。吾仇祐經。將軍寵之。吾是以怨焉。賴朝壯之。思宥其死。祐經子哀訴。乃處斬。復

辯。正本作辨。
力。寫本作小。

曾我莊租。以弔二孤。」二孤之變。鎌倉訛傳。賴朝遭害。夫人駭悲。範賴曰。安之。範賴在焉。賴朝聞而惡之。初義經負功專恣。而範賴每事稟賴朝。及義經反。令範賴討之。固辭。不許。將發。入見。賴朝曰。汝亦爲九郎之貳舞者。範賴大懼。不敢發。獻誓書千通。至是。又獻焉。就大江廣元。謝失言。賴朝見其誓書署源範賴。曰。稱姓濫也。使者辯之不釋。賴朝夜聞床下有人氣息。急呼衛士。結城朝光發床。獲一人。乃範賴力臣當麻也。曰。臣視參州憂迫。欲聞幕中之議耳。掠治之。無異辭。八月。遂命狩野氏。拘範賴于伊豆修禪寺。其羣臣相聚。據濱館。遣兵夷之。梶原景時勸殺範賴。以其手兵五百襲之。範賴射殪十餘人。縱火自殺。」

建久五年

五年。八月。安田義定亦被殺。義定子義資。嘗挑賴朝侍女。爲景時所發。處斬。義定坐免。憤怨。有告其反者。於是殺之。」

建久六年

六年。三月。賴朝與政子・賴家赴南都。落東大寺。寺嘗爲平氏所燒夷。法皇修之。賴朝爲給其資。令僧文覺司役。慶以馬千匹。遂朝京師。踰月而歸。」時平賀義信爲武藏地頭。百姓便之。賴朝揭其廳曰。凡守國者。當則義信。」八月。令東國地頭。有匿姦盜者。皆奪其職。以予捕獲者。」

建久七年

七年。六月。平知忠

建久八年

建久九年

歿。正本作沒。

正治元年

一宮。拙修本作二宮。

者。聚兵京師。謀襲賴朝妹夫藤原能保。能保初請賴朝。延後藤基清自衞。於是。基清攻殺知忠。平氏餘黨。於是悉平。八年。十二月。賴家敍從五位上。爲右近衞權少將。九年。十二月。稻毛重成修相摸川橋。賴朝親臨落之。歸墮馬。疾作。明年。正月。遂薨。年五十三。賴朝年三十三起兵。六歲夷平氏。握天下兵馬者十五年。乃歿。詔以賴家爲右近衞權中將。總天下守護地頭。是歲。正治元年也。賴家年十八。北條時政以外祖執政。不使賴家親聽訟。獨與其狎臣五人游處。褻淫縱。母政子驟戒之。不悛。時政如不聞知也。賴家有弟。曰千幡。爲賴朝所愛。嘗置之懷中。召宗族諸將囑之。小山朝光與焉。及賴朝薨。朝光欲爲削髮。以有遺託未果。一日。衆言其意。梶原景時譏之於賴家曰。朝光有忠臣不事二君之語。恐有異志。朝光聞而自危。問計於三浦義村。義村。義澄子也。固善朝光。乃與和田義盛・安達盛長以下六十六人。俱罪狀景時。因大江廣元上焉。廣元欲其和解。不敢上。義盛促廣元。廣元以實對。義盛責之。乃上。賴家以其疏示景時。景時奔其邑一宮。無何。潛還鎌倉。賴家命義盛等逐之。毀其第。景時據邑聚兵。欲擁武田

正治二年

建仁元年

鳥坂。正本作二鳥阪一。

安田。川越本・拙修本並作二淺利一。

有義爲將軍。約至京師舉關西兵。有義者。信義子也。二年。正月。景時舉族西奔。賴家遣兵追之。景時至狐崎。爲士豪吉香某所鏖殺。衆快之。景時終賴朝世。信寵不衰。建久中。熊谷直實與久下直光。爭疆而訟。直實口訥不能辯。怒曰。景時黨直光。臣無所望矣。走出。拔刀斷髮。西奔京師。賴朝使人遮止之。而不問景時。義盛有疾。景時借其士所別當。而遂不還焉。至是。義盛乃得復職。建仁元年。正月。越後人城長茂。作亂於京師。襲小山朝政第。朝政時從幸不在。其兵拒卻之。賊闌上皇宮。請討賴家。宣。不許。奔匿吉野。賴家下令急索。二月。獲而誅之。長茂姪資盛。據鳥坂反。賴家命佐佐木盛綱伐之。盛綱適出。在其門外。命至。不入家而發。三日至鳥坂。其子盛季先登。資盛逃亡。其姑曰板額。醜而多力。善射。遂被虜。送到鎌倉。安田義遠請娶之。賴家問其意。對曰。欲使生勇士。以忠於君耳。賴家笑而聽之。賴家累遷。是歲。七月。終襲征夷大將軍。敍從二位。五月。有告叔父全成在阿野謀反。使武田信光捕。放之常陸。尋命八田知家殺之。當是時。幕政無大小。皆決於時政。其族黨半於一府。賴家受制。心不能平。八月。賴家有疾。政

三十八。拙修本作二十八。
議。川越本作計。

修禪寺。拙修本作修泉寺。

建仁二年

子與時政議。令傳總守護于其長子一幡。而割關西三十八州地頭。以予千幡。一幡外祖比企能員。因其女謂賴家曰。近日之議。分權起爭。不便莫大焉。賴家亦憤北條氏所爲。密召能員於臥內。與議事。政子側耳障外聞之。使人馳告於時政。時政與其黨謀之。伏甲而託事召能員。能員子弟皆曰。毋往。卽往。以兵自備。能員曰。是啓釁也。彼何有他意。遂往。甲起殺之。從者走歸。告之其子宗員。宗員擧族奉一幡。據小御所。時政遣長子義時。率諸將攻之。宗員等奮擊却之。畠山重忠選兵疾攻。宗員力盡。焚第自殺。遂悉夷其族。幷殺一幡。諸與能員親善者。皆見誅竄。賴家病間聞變。大恨怒。時政歸罪於仁田忠常。殺之。忠常刃能員者也。旣而宣言。賴家與忠常圖己。遂迫賴家削髮。幽之修禪寺。以千幡代之。賴家幽囚無憀。寄書於母與弟。請得故近臣數人侍己。不答。遣三浦義村視察之。禁其通書。明年。七月。時政遣人圖之。憚賴家趫捷。候其浴圍之。飛絙約首以殺之。年二十三。子一幡先卒。猶有二子。長者四歲。政子使千幡養之。遂爲僧。曰公曉。次者曰千壽丸。爲中務丞某所養。千幡十二歲而立。詔敍從五位下。襲征夷

元久元年

大將軍。賜名實朝。居北條氏第。下令安撫諸將。徵誓於京畿・西國將士。遣武藏守平賀朝雅。率關西地頭。監護京師。元久元年。三月。伊賀・伊勢盜起。伊賀守護首藤經俊逃走。實朝令朝雅討之。獲盜魁平基度・平盛時。乃奪經俊職。授於朝雅。朝雅。義信子也。與畠山重忠。皆娶時政女。而朝雅所娶。其後妻牧氏出也。以故時政偏愛朝雅。讒惡重忠。終欲殺之。誣以謀反。令二子義時・時房攻殺重忠子重保其第。時重忠在其邑。時政遣人紿告鎌倉有難。宜赴援。重忠即從百餘騎而發。中途望見大兵蔽野而來。始知其實。部下交勸其據邑聚兵。重忠不肯曰。吾不倣梶原景時之苟免而貽譏也。奮戰中箭死。重忠族稻毛重成・榛谷重朝等。同日皆斬。重成初媚時政。構陷重忠。而終爲時政所殺。北條氏忌重忠。日久。重忠勇而有衆。從賴朝。常爲軍鋒。而性忠厚。不與人爭功。賴朝深知其長者。委託後事。而爲北條氏所陷。天下冤之。七月。分畠山氏邑。以賞將士。實朝在時政第。時政終謀弑實朝。立朝雅。因聚兵。事覺。閏月。政子遣諸將。遷實朝於義時宅。兵皆從歸焉。義時終徙時政夫妻於北條里。令京師將士誅殺朝雅。當是時。

耽。川越本・拙修本竝作沈。

建保元年

鞠。正本作鞫。

上總。拙修本作下總。

諸豪傑千葉常胤・土肥實平等。皆老死。佐佐木高綱・熊谷直實。前後逃隱。獨北條氏專掌幕府事。而實朝仰其成。實朝性喜文事。師文章博士源仲章。學和歌于中納言藤原定家。而武技不及賴家。然賴家荒淫。至奪安達景盛妾。欲殺景盛。賴朝召呼諸將。不敢名之。賴家輒名之。平知康等。以技藝進。負寵凌人。將士憤怨。實朝爲人優柔。爲將士所愛。初年令將士。各獻賴朝所下文書。爾時所授地頭。不輒褫職。自賴朝・賴家之世。數禁守護地頭干與吏務。侵取分外。至是。又徵其下文。辨恩勳之殊。使結番追捕。遣使者行管內。問吏民寃枉。然政權在於義時。實朝日夜與文士飮宴。耽溺歌詠。不問外事。義時益專。建保元年。信濃人泉親衡。奉故賴家子千壽丸。起兵討義時。使僧安念說諸將。諸將多應者。義盛二子義直・義重・姪胤長等與焉。次至千葉成胤。成胤不肯。執安念。送之義時。義時令家臣金窪（カナクボ）行親・安藤忠家鞠之。得狀。遣兵執親衡。親衡姓源。經基子滿快之遠孫也。有勇力。殺吏卒數十人而逃。千壽剃髮匿京師。義直等就虜。是時。義盛在上總。馳歸面謁。請贖二子。義盛爲實朝所親信。特受命。與結城朝光。竝統

彊。川越本・拙修本並作强。
仗。正本作狀非。
弗。川越本作不。

衛兵。於是聽其請。義盛大喜而出。旦日。以其族九十八人。列幕府南庭。因大江廣元乞赦胤長。義時素忌其彊宗。欲激而除之。命行親・忠家縛胤長。過義盛前。而屬之吏。放陸奧。義盛慚忿。塞門不出。胤長第在便地。多欲得之者。義盛請實朝。遣人守焉。義時請而奪之。逐守者。割與行親・忠家。義盛大怒。遂欲滅北條氏。日夜會宗黨謀之。謀泄。幕府使者來問之。義盛陳謝無他。使者微見其子弟閱兵仗。還報。有令徵兵。更遣使者詰義盛。義盛乃對曰。老夫受故將軍殊恩。豈敢謀反。獨兒輩憎義時專恣。欲往問狀。老夫諭之而弗聽也。遂以百五十騎。分爲三隊。分攻義時・廣元第。而急赴幕府。欲取實朝。其族三浦義村與弟胤義約守北門。而意中變。走告義時。義時與廣元。自北門入。義盛隨闖之。三子義秀。排門而入。所向皆破。與足利義氏遇。攫其甲袖。義氏鞭馬踰濠。袖斷。義秀與土屋義清・古郡保忠俱奮擊。一府中皆辟易。有縱火者。烟焰滿天。義時・廣元挾實朝。避之法華堂。接戰一晝夜。黎明。義盛兵疲退。軍前濱。會橫山時兼擧族來援。得三千騎。軍復振。近國兵聞變來聚。義時召之。疑而不至。請實朝敎書示之。乃至。既

五百。川越本・拙修本竝作五十。川越本標註云。東鑑諸書竝作五百。

建保二年

建保六年

承久元年

而義直戰死。義盛泣而氣沮。終爲江戸能範所射殺。七子皆死。義秀以五百人航海而逃。義時分和田氏邑。以賞將士。二年。六月。旱。實朝齋戒誦經。既而雨。減東國租稅。十一月。義盛遺臣奉千壽。聚兵京師。事覺。大江氏卒攻殺之。十二月。實朝命僧修法會。曰。疇昔夢義盛率族羣至我前。吾爲修其冥福也。先是。實朝已累敍正二位。任權中納言。六年。累遷至權大納言。三月。兼右近衞大將。大江廣元從容言曰。將軍欲貽慶來裔。宜戒滿盈。盍辭諸官。獨帶征夷將軍。及高年。然後求大將。實朝曰。吾非不悅卿所言。然吾念源氏正統。縮於今日。不可慮子孫。吾欲飽取官職。以擧家聲。不暇慮子孫也。廣元無言而退。先是。宋佛工陳和卿來在大和。實朝召見之。和卿自稱知實朝前生。實朝遂欲如宋。命造巨船。既成。不可用。是歲。北條氏召故賴家子公曉。至自京師。用補鶴岡別當。公曉常憤父幽死。謂實朝父仇也。竊謀報復。稱有所祈。祈鶴岡祠者千日。時鎌倉傳言。幕府有怪物。被婦人衣。行步如飛。十月。實朝任內大臣。十二月。進右大臣。承久元年。正月。拜賀于鶴岡祠。卜二十七日戌時。將出。廣元進謁曰。臣平生未嘗出淚。

此論文與寫本有大異。參看第一部文集。

今無故泫然。臣危疑焉。先大將落東大寺。衷甲自備。君宜倣焉。毋輕擧也。源仲章曰。大臣・大將不可衷甲。廣元又請晝日行禮。仲章曰。秉燭故事也。實朝臨出。使秦公氏梳髮。拔髮一縷與之。晒曰。吾遺物也。公卿以下悉從。隨兵千騎。義時侍持劍焉。比入祠門。稱病作。授劍於仲章而歸。實朝乃悉屏隨兵。獨仲章從。儀畢。揖公卿降階。有一人。自階側跳出。揮刀斬實朝及仲章。持其首逃去。時方闇黑。內外騷擾。不知何人所爲。已而有大呼者。曰。吾公曉也。報父仇矣、衆始知公曉所爲。闔其所居。公曉提實朝首。直赴備中某宅以食。手不釋首。三浦義村少子。爲公曉弟子。公曉因使使問計於義村。義村紿曰。將以兵迎。而告義時。義時命速殺之。義村乃遣長尾定景。率力士五人赴之。公曉望迎兵。久之不至。乃自踰祠後高阜。如義村家。途遇五人奮鬪。定景自傍斬其首。送之義時。公曉年十九。實朝年二十八。明日。葬實朝。不得首。以所遺一髮代之。源氏正統。於此而絕。

外史氏曰。余嘗踰函嶺。望八州之野。北控奧羽。知源氏基業深且遠矣。世傳。八幡公臨終。遺書其家曰。吾後世必有操天下之權者。雖信否未可知。非無其謂

疇。川越本・拙修本並作酬。

也。蓋我王化自西漸東。東之强悍難服。足以敵全國。雖中古勦治。纔就條緖。叛服不常。每爲國患。而廟堂不以爲憂。蓋綱紀之弛。非一日也。相門爭寵。骨肉相軋。而不能制也。盜賊公行。劫公卿。焚宮闕。而不能禁也。則何暇恤邊疆哉。而夫貞任・家衡等。皆桀黠之才。足以乘而逞焉。微源氏父子。封豕長蛇。荐食上國。誰能拒之。其有大功德於天下如此。而朝廷疇功。不塞其什一。賴義遷任。適致困斂。義家官不過四位衞尉。子孫或以罪誅。或以謫逐。保平之亂。又鬭其骨肉。殘亡垂盡。何報施之倒也。天之福人。縮於父祖。則贏於子孫。固其所也。故源氏之福。大發於賴朝。遂得司天下之權。義家儻預睹之耶。然余嘗謂。天下之權。歸源氏久矣。而源氏不自知也。賴義・義家。經略東北。捍護其民。前後十有五年。而朝廷如不關知焉。及其奏功爲將士請賞格。遷延不決。甚而目以私鬭。停之官符。使其以私恩噢咻之。則是朝廷自舍其征伐刑賞之柄。而付之源氏。遂令東北豪傑。曰寧背天子。勿負源氏。當是之時。使義家一唾手起。則函嶺以東。非朝廷之有。不必待賴朝也。而不敢失臣節。以終其身。乃所以貽慶子孫也。舊志稱賴

伊東。拙修本作伊豆。是。正本作此。
搢紳。川越本・拙修本竝作縉紳。同。

朝之逃伊東也。心私祝曰。願得主關東八國。否則猶領伊豆。得以報伊東氏。由是觀之。其初念不過割據一隅。而豪傑之素附焉者。爭爲之用。兵鋒所嚮。莫不克捷。又得廷臣抱才而不遇者。以輔其所不及。而會於國家綱紀極墮之時。碁布所謂素附者於七道。而坐制其命。是雖其智術有以劫持上下。籠絡一世。則亦時勢之自至焉。而其源實出於父祖之餘慶焉爾。吾嘗聞之搢紳之家。鎌倉之興。大江・三善之徒。有竊抱民部省簿記而往者。亦可以見人心所向矣。夫王家自放失其權。而莫之或收。民安所倚哉。於是王族之任其器者。代而操之。以宰天下。亦不得已之勢也。源氏以清和之冑。世勤勞王事。以至於賴朝。經營艱苦。刱建大業。以致天下小康。而不敢僭踰。恭順其跡。又再傳乃亡。天未艾源氏之福也。是以足利氏・新田氏。皆以清和之源。更起宰天下。而皆以上將代操國權。以服事天子。莫非襲賴朝之故者。則是賴朝爲天下萬世創不得已之事。以立不可踰之限。而君臣之際。兩得其宜也。不然。焉知莽・操・懿・卓不接踵我國哉。雖曰賴朝有功德於天下勝其父祖。可也。

卷之三終

晦澁以下十三字。寫本作者。往々回護不直。闇胸不明。

不復。川越本作未復。

日本外史 卷之四

源氏後記

北條氏

外史氏曰。北條氏之事。吾不忍言之也。而諸敍其事。晦澁不愜。亦有疑於文飾者。獨源親房之論。頗可取信云。其論曰。源氏以武臣。掌握天下。朝廷蓋不能平。況其後嗣既絶。寡妻陪隷。繼當其家。欲乘此時而變之。以復舊權。似也。雖然。王綱之衰久矣。頼朝奮一臂。以平其亂。雖朝廷不復其舊。而民庶息肩。非有德政足以勝之。則安克變之。縱使克變之。民之不安。天豈與之。王者之師。必加有罪。頼朝陞高官。管重職。皆出法皇之允裁。非私竊之也。北條氏以其外家。久司其權。未嘗失人望。非有顯然之罪也。而欲遽加之誅。是朝廷未爲無過。而北條氏又不可比之反賊獲利者也。夫以頼朝之業。而猶不能過二世。北條氏乃以陪

臣執國命。奕世累葉。是豈偶然哉。蓋義時非有才德過人也。泰時繼之。修政立法。專操正直。不獨不踰己之分。戒飭親族。及諸將士。莫敢規望高爵。至其子孫。能守其法。不敢失墜。雖其政漸衰。卒至於亡。而得傳之七世之久。亦可謂無憾矣。大凡以保平以來之亂。而不有若賴朝。有若泰時。則六十州之民。何所底止。不詳於此。而特稱皇威之衰。武臣之專者。謬矣。外史氏曰。吾讀親房之論。而悲其意焉。其亦出於不得已。而告君之體。宜如此爾。後之君子。因其言而詳其事。可也。蓋源氏之嗣既絕。藤原賴經爲征夷大將軍。其子賴嗣襲職。既而宗尊親王往代之。傳之其子惟康。久明親王又往代之。傳之其子守邦。而兵馬之政。每在於北條氏。故凡事皆不得不係之北條氏。

北條氏出於平貞盛。貞盛七世之裔時政。其父曰時家。時家父時方。養於祖父直方。直方父維時。維時父卽貞盛次子常陸介維將也。維將後三世。始與源氏婚。子孫世居伊豆北條。因氏焉。北條氏以豪族。世屬源氏。源義朝與平清盛戰京師。敗績。宗黨死亡略盡。義朝子賴朝被執。宥死。流于伊豆。時政以淸盛命。與

州人伊東祐親。竝監護之。賴朝四世祖義家。樹恩威於東國。卽直方女所生。以故時政頗屬意於賴朝。賴朝初寄伊東氏。通其女。生男。女之繼母。告之祐親。祐親懼平氏疑己。投其男於水。嫁女於江間某。遂圖賴朝。賴朝逃依北條氏。久之。問人曰。聞時政多女。孰尤美。曰長美。次否。否者。後妻出也。賴朝懲伊東氏。欲通次女。作書。託僕安達盛長。致焉。盛長竊慮。次女無貌。賴朝情好不終。徒足階禍也。更作書。致於長女。前一夕。次女夢鳩銜金函至。覺語之其姊。姊心動。曰吾當買妹夢。乃與妹以其妝鏡。曰。薄以償直。且曰。得書。遂通之。情好日密。女名政子。時年二十一。是時。時政役於京師。役滿而歸。路遇平兼隆。兼隆。清盛族人。爲伊豆目代者。時政與偕歸。許以政子妻之。已聞其與賴朝私。且驚且喜。而難違兼隆約。則爲不知。嫁於兼隆。其夜。雨甚。政子出奔。匿伊豆山。與賴朝俱居焉。兼隆索之。不得。時政素器賴朝。且思其高祖事。至是。陽怒而陰益厚之。賴朝亦謂時政謀慮可倚。深相結託。治承四年。以仁王討平氏令至。賴朝先示之時政。遂發東國家人。家人至者頗多。賴朝輒延之別室。曰。爲我努力。人人各自以爲賴朝

高綱。正本作經高。川越本標註云。高綱一作經高。疑當據東鑑・盛衰記諸書。作定綱爲是。

踪。正本作跡。

治承五年

特厚已也。而至其陰謀。獨時政得知之。八月。時政率佐佐木高綱等八十五騎。夜襲平兼隆。斬之。遂糾伊豆・相摸豪傑。以擁賴朝。據石橋山。令政子居守。賴朝與大庭景親戰。而敗走。時政疲而後。加藤景廉・狩野祐茂・堀親家・小山實政等。請從焉。時政揮之。令從賴朝。而自之甲斐。欲發其諸源。長子宗時。至平井鄉。爲伊東氏兵所圍。中箭死。逮夜。時政遇賴朝于杉山。箱根別當行實。素善賴朝。聞其敗。使弟永實來餽餉。先見時政。時政紿曰。大將既死矣。永實曰。子疑吾歟。大將而死。子豈生存者。時政哂。使見賴朝。賴朝乃匿箱根。令時政及其次子義時如甲斐。而自走土肥。使土肥遠平存問政子。航抵獵島。時政與三浦義澄等。出迎賴朝。賴朝曰。卿何以在此。時政曰。吾啣命北行。而中道自度。不覩君所底。安所取信。故踪君至此。請自此行矣。於是。終抵武田・一條諸族。得二萬人。助賴朝。擊平氏于駿河。走之。賴朝還。至相摸國府。論功行賞。以時政爲首。武田信義以下次之。賴朝撫鎌倉府。政子助之於內。而時政・義時輔之於外。諸將士目以北條公。莫敢抗禮。明年。七月。政子生男。是爲賴家。立爲世子。北條氏以外祖益貴

文治元年

正治元年

重。陰收人心以自固。賴朝有變姬。託之伏見廣綱家。時政妻牧氏知之。告政子。政子性妬悍。卽使牧宗親毀廣綱宅。驅逐其姬。姬走。依大多和義久者。賴朝聞之。託事往義久宅。召宗親罵之。親截其髻。時政聞而恥之。不告而歸其邑。賴朝謂梶原景季曰。江馬必不從。汝往視之。江馬者。義時也。還報曰。在。賴朝召義時曰。汝可託吾子孫者。已而事釋。時政還鎌倉。被親信如初。賴朝忌弟義經勇智。謀除之。文治元年。冬。親將擊之京師。義經奔竄。賴朝途還。遣時政以千餘騎護京師。四索不獲。於是。以賴朝意奏請。諸國司置守護。莊園置地頭。所在追捕弗被允。時政抗辨再三。終被允。自爲七國地頭。已而辭之。當是時。大亂初平。京畿多事。時政身當其衝。事無不立辨。歲餘東歸。以詔舉從弟時定自代。亦賴朝意也。賴朝嘗獵富士野。賴家甫十二。射中走鹿。賴朝大喜。使人報之政子。政子曰。彼將家胄子。獲一禽。何煩專使。賴朝愧之。正治元年。正月。賴朝薨。賴家立。政子削髮爲尼。而與聞政事。時政敍從五位下。任遠江守。爲政所別當。與大江廣元・三善康信・中原親能・三浦義澄・八田知家・和田義盛・比企能員・安達盛長・足立

三河。川越本。拙修本竝作二參河。下同。

正治二年

建仁元年

遠光。梶原景時。藤原行政。參決諸政。餘毋得傳宣。賴家有狎臣五人。下教曰。五人親黨。有罪勿論。七月。三河盜起。遣安達景盛討之。景盛新買妾於京師。殊弗欲行。不得已而行。歸則賴家已奪其妾。絕愛幸之。有告景盛怨望者。賴家令五人討之。府下大擾。時賴朝薨。纔六閱月。政子急如安達氏。使使詰讓賴家。且曰。汝不聽我言。吾以身當汝箭。賴家乃止。政子徵景盛誓書。使佐佐木盛綱齎送賴家。以和解之。因諭賴家曰。視汝近狀。倦政忘民。遠賢近佞。只聲色是溺。無禮於親戚。願少留意。勿及於悔。賴家般樂如故。已而聽梶原景時讒。欲誅結城朝光。朝光與諸將連署抗訴。景時出奔。旋還鎌倉。時政逐之。景時終奔京師。令人追誅之。二年。五月。有爭疆而訟者。賴家視其地圖。援筆抹圖中央曰。廣狹命也。不能費按檢。凡疆場之訟。以此爲準。卽不厭心。不如毋爭。建仁元年。秋。大風雨。關東禾稼不登。下總海溢。民死者千人。九月。蹴鞠工紀行景。至自京師。大江廣元攜謁賴家。賴家素好蹴鞠。請上皇得行景也。自是。日學其技。不復視朝。義時有子。曰泰時。少有器局。密召賴家狎臣中野能成。謂曰蹴鞠無害於事。獨不畏

飢。正本作饑。

竢。川越本・拙修本並作俟。下同。

責也。川越本標註云。也作之。

建仁二年

建仁三年

災異乎。故將軍每逢天變。輒止出遊。是後世所當法耳。子親臣也。盍嘗試諷之。時北條告飢。泰時且往視之。會僧觀清至。曰。將軍聞能成語。怒曰。言非無理。踰父祖而言。何也。公且稱疾歸邑。竢其怒衰可也。泰時曰。吾聊語鄙意於侍臣耳。豈敢諫乎。卽被譴怒。非所避也。吾有事如邑。且日將發。子莫以爲避焉。乃出簑笠視之。遂至邑。邑人去歲貸籽種。約明秋償之。而不稔也。相與謀逃亡。於是泰時召諸負債者。悉燒其券曰。父老安之。饒使年豐。吾不復責也。乃賜酒食。人給斗米。皆泣拜祝曰。願使君多子孫。二年。七月。泰時娶三浦義村女。義村。義澄子也。三年。七月。頼家有疾。政子議。使其遜職。分其所管。傳之同母弟千幡與子一幡。一幡母。比企能員之女也。能員陰懷異議。使其女說頼家。頼家遽召能員。欲圖北條氏。政子微聞之。急作書。使侍女齎致時政。時政將赴名越第。途得其書。按轡思念。直詣大江廣元曰。能員憑恃外戚之親。凌蔑衆士。今又乘將軍不省事。矯命圖逆。宜先發誅之。否乎。廣元曰。僕自先將軍在日。獨執文墨議論。至於兵事。不敢與知。今日之事。在公之心耳。時政卽起。天野遠景・仁田忠常。在從騎

元久元年

元久二年

中。至荏柄祠前。時政顧謂二人曰。能員反矣。子等將兵伐之。遠景曰。殺一老翁。何必發兵。宜召而誅之耳。時政至第。又召廣元。廣元有戒心。而屛從士。獨從一人。曰。有急刺我。遂往。時政與之坐。良久乃罷。於是。時政衷甲。令遠景・忠常伏中門。而遣人謂能員曰。吾修佛事。公盍一臨。因與計事。能員輒往。入門。二人突出。捉其左右手。伏而斬之。其僕走歸。比企氏族。擁一幡據其第。遣義時・泰時。將兵攻之。比企氏縱火自殺。一幡燒死。賴家病間。聞之大怒。使堀親家密命和田義盛・仁田忠常誅時政。義盛告之時政。時政召忠常。久之不出。其馬卒怪而歸告。忠常二弟危疑。遂攻義時第。義時不在。其家人防戰斬之。忠常歸途聞之。遂赴幕府。爲加藤景廉所殺。政子終令賴家削髮。徙于伊豆。無幾何薨。於是。以千幡爲嗣。奉之於時政第。更名實朝。時政與妻牧氏保護之。侍姬阿波局。密語政子曰。牧氏笑謔中。挾忮心。不可託保姆之任。政子以爲然。乃迎實朝。置府中。以義時弟時房。掌營中事。是歲。時政令女壻源朝雅率關西守護。往鎭京師。元久元年。義時爲相摸守。二年。有告畠山重忠反。義時・時房將兵擊之。初重忠與朝雅

政子遣。川越本標註云。遣上一(寫本)有遽字。

時政遽。川越本標註云。一(寫本)無遽字。

建保元年

皆時政壻。而朝雅所娶。牧氏出也。以故最被親愛。是歲。實朝娶於京師。命重忠子重保等迎之。候朝雅於六波羅。與飲。爭禮相鬩。朝雅銜惡之於牧氏。牧氏終與時政。謀殺重忠父子。誣以謀反。召義時・時房。議擊之。二子諫止。時政怒而入。牧氏使人謂義時曰。以繼母故。目吾爲讒乎。義時不得已從之。擊殺重保。遂與重忠戰于鶴峯。斬之。七月。時政遂欲立朝雅代實朝。實朝時在時政第。政子遣諸將。徙之於義時第。時政兵率歸義時。時政遽削髮。老於北條。年六十八。後十一年卒。是月。義時遣兵誅朝雅。以時房代爲武藏守。先是。和田義盛求爲上總國司。賴朝制。諸士不得爲國司。以故不許。義盛獻書。因大江廣元苦請。三歲不獲命。乃請還前書。亦不省。建保元年。義盛子姪。黨於泉親衡者。謀擁故賴家子作亂。事覺。義盛請宥其子。得釋。遂舉族抵幕府。又請宥其姪。姪爲首謀。不可釋。義時縛之屬吏。五月二日。義盛輒舉兵反。三浦義村以族人故黨之。既而與其弟胤義議。自白於北條氏。北條氏有宴。義時方與客棋。報至。終局而起。更被烏帽子。穿水干衣。以赴幕府。與大江廣元奉實朝。徙於賴朝影堂。命長子泰時將

扼、川越本・拙修本竝作阨。

兵防之。次子朝時。與義盛子義秀鬭。被創。義盛兵乘勝而進。呼聲震天。車而戰。見星未已。泰時督戰。身先士卒。黎明。擊卻義盛兵。自扼衢路。遣足利義氏追擊之。敵兵復振。義時與廣元連署。令武藏・相摸諸國來援。敵驍將土屋義清。中流矢死。敵兵大沮。義盛以下敗死。泰時獻首虜。置酒勞諸將士。謂之曰。吾不復飲酒。疇昔與宴。其明亂作。吾擐甲上馬。而宿醉未醒。吾意自今禁飲。已而戰數十合。渴而索水。葛西六郎執榼進酒。我輒飲之。甚矣。吾無常操也。吾不復飲也。已而論功行賞。泰時辭賞曰。義盛無反心。獨恨臣父爾。而諸將士多爲之致死。臣爲父擊仇。焉可受賞。宜以賞臣者恤死事之家。弗聽。義時代義盛。爲士所別當。即日。移書京師。鎭安將士。九月。故畠山重忠季子僧重慶。在日光山謀反。遣小山宗政捕之。宗政斬之。還報。實朝使人言曰。重忠冤死。其胤爲變。虛實未可必。汝輒斬之。何也。宗政瞋目曰。彼兇反跡已明。臣所以不生致者。恐將軍聽內謁宥之也。將軍詠歌蹴鞠。廢棄武備。重婦女。輕戰士。諸沒官之邑。舉與嬖妾。故將軍之業墜矣。實朝怒。禁其朝從。無幾何得解。實朝爲人優柔。耽溺歌詠。雖有罪

建保二年

建保六年

承久元年

者。獻歌則免。而軍國事。一決於義時。二年。冬。和田氏餘黨。作亂京師。戍卒擊夷之。七月。定鎌倉買人之員。當是時。鎌倉權勢日盛。後鳥羽上皇居常憤懣。謀滅源氏。初讓位於太子。是爲土御門帝。尋又使禪之少子。是爲順德帝。而政常在上皇。自後白河時。置北面武士。上皇益開西面。廣徵材勇。親鑄刀劍。欲驕實朝以斃之。連進其官爵。實朝不覺。遂求左近衞大將。義時謂廣元曰。故將軍每賞下輒辭之。以爲後胤之地。而今將軍年未壯。昇進太速。又令家臣不朝而取官爵。僕愚昧竊危之。欲爲入言。而恐遭譴怒。公盍言焉。廣元曰。僕亦思之。故將軍每事下問。今也則否。故默以至今耳。將軍坐享成業。而不次榮進。積殃嬰害。其能免乎。公有言焉。僕敢不言。遂入言。實朝不聽。六年。遂爲大將。累進右大臣。承久元年。正月。拜賀於鶴岡祠。卒爲故賴家子公曉所狙擊。薨。公曉因欲自立爲將軍。義時以政子令誅之。初政子與義時。俱詣熊野。過京師。上皇召見政子。辭曰。東鄙老尼。不閑禮節。則令前相國賴實妻勞之。政子與語曰。實朝卽無子。敢請得一皇子。爲鎌倉主。至是。令諸將連署奏請曰。願擇於上皇二皇子。得戴一

人。上皇不許曰。是樹二主也。及實朝薨。請藤原賴經。初賴朝妹壻藤原能保。以女妻攝政良經。良經。關白兼實子也。良經生道家。道家生賴經。以故義時定議。遣時房請。七月。至鎌倉。甫二歲。政子聽政簾內。政子爲人明決。佐賴朝定天下。爲諸將士所畏服。目曰尼將軍。以其拜從二位。又曰二位尼。義時爲右京權大夫。兼陸奧守。與廣元等。令諸將修賴朝舊規。義時妻弟伊賀光季。與廣元子親廣。並護衞京師。實朝遭害之翌月。故阿野全成子時元。起兵駿河。謀自立爲將軍。義時遣兵擊殺之。賴經至鎌倉之月。大內守護源賴茂。與子賴氏。入仁壽殿。縱火自殺。蓋賴茂。源賴政孫。自以爲源氏嫡宗。因圖自立。事覺被誅。上皇謂源氏衰滅。王政可復。而關東權勢自如。會關東家人仁科盛遠者。挈二子詣熊野。遇上皇幸焉。錄其子爲西面。盛遠大喜。留不東歸。義時怒。收其邑。上皇命復之。不奉詔。上皇嬖妓龜菊。食長江・倉橋二莊。其地頭侮慢之。上皇怒。令褫其職。義時對曰。先右大將以王命誅平氏。乃請置地頭。以賞有功。義時不敢無故褫之。上皇積怒。遂決意討義時。義時素善右大將藤原公經。上皇欲殺公經。右大臣

一。拙修本作二。

籠牢。川越本標註云。諸本作籠牢。今从門田堯佐家本。

詔。川越本・拙修本並作誥。下奪詔之詔亦然。

藤原公繼止之。且諫曰。臣聞。本邦稱曰葦原。原之大處。是爲關東。漸西漸小。以小敵大。以弱抗强。不待時而行。行以無謀。臣未知其可也。義仲之難。可以鑒焉。權中納言藤原光親亦切諫。上皇皆弗聽。使西面藤原秀康誘三浦胤義。胤義妻。初爲賴家婢。生一男。義時殺之。妻悲痛。胤義戍京師。不復欲東。秀康於酒間微說之。胤義奮躍。應命曰。臣兄義村。力能擒義時。上皇大悅。五月。使順德帝讓位於太子。以便計議。太子立。是爲九條廢帝。上皇乃託城南寺流鏑馬。徵畿兵千七百人。囚公經。召親廣・光季。親廣務從。光季不至。令胤義・秀康討之。光季及子光綱。奮鬭而死。卽日。上皇詔五畿七道討義時。召將士。問曰。東人黨義時者。有幾。胤義對曰。不過千許人。莊家定者。進曰。不然。彼收人心。有年於此。願爲之死者。不可勝計。使臣等在東國。亦被籠牢耳。上皇弗懌。彌益聚兵。遣善走者押松。齎詔。歷說東國諸豪。特使胤義作書。以重賞啗義村。義村以示義時。義時曰。唯子意所嚮。義村誓無貳心。義時哂曰。吾預知有此事久矣。因大索鎌倉。獲押松。奪詔燒之。啓狀於政子。政子乃大會諸將于簾下。使安達景盛傳命曰。吾今

川越本・摺修本並今上有即字。

生。摺修本作成。

喜。川越本作好。

次。川越本作二。

日將訣於諸君也。先將軍被堅執銳、闢草萊以創大業。諸君所知也。今讒諛之徒、詿誤人主。欲傾危關東之業。諸君苟不忘先將軍之恩。則協心戮力。誅除讒人。以全舊圖。卽欲應詔西上者。今決之。諸將皆感激。願效力。莫敢異辭。於是。會義時宅議事。義村・景盛等。皆曰。宜扼足柄・箱根。以待官軍。廣元曰。不可。守險曠日。人心內變。是自敗之道也。宜直進兵攻京師。聽成敗於天耳。政子從之。以泰時爲將。泰時時爲武藏守。待武藏兵至而發。居五日。或議。其懸軍遠進。是危道也。廣元曰。待武藏兵非計。所以生此異論也。遷延如此。雖武藏兵。不保其無變。今夜、武州宜單身揚鞭。東兵猶雲從龍已。三善康信方臥病。政子召而諮之。康信對如廣元議。於是。令泰時卽夜發程。黎明。泰時帥十八騎而西。相摸守時房・前武藏守足利義氏・駿河守三浦義村等從之。行三日。得十萬騎。自東海道進。式部丞朝時。自北陸道進。武田信光・小笠原長淸等。自東山道進。凡從役者。父行留子。子行留父。行者。凡十九萬。義時乃放還押松。使歸上言曰。臣無罪被討。不敢逃避。聞陛下喜戰。謹獻臣長男泰時・次男朝時以下十餘萬人。使之爲戰。

拒。正本作距。下同。

大江。川越本・拙修本並作毛利。按大江氏後稱毛利。

澱。川越本・拙修本並作淀。

軍。川越本作陣。

夾水。川越本作夾河。

陛下觀焉。猶不厭於心。則猶有二十萬人在。臣將自將以繼之。押松走歸白之。內外失色。上皇曰。可也。東人必有乘虛誅義時者。六月。朔。部署諸官軍。宮崎定範・仁科盛遠等。拒越中。藤原秀康・三浦胤義等。部諸將爲九隊。拒尾張・美濃。兵凡一萬七千餘人。信光・長淸以四萬騎亂大井渡。擊官軍將大內惟信。走之。胤義欲赴援。秀康曰。吾腹背受敵。不若退守宇治・勢多。敕旨如此。乃鞭馬先走。胤義以下。皆從之。官軍將山田重忠。源滿政苗裔也。奮而留戰。泰時亂流而前。重忠連射。斃東兵。泰時麾軍萃之。重忠敗走。官軍將鏡久綱。自書名于旗。與大江季光戰而敗。曰。恨與懦夫共事。乃自殺。泰時進與信光合。義村建策。分爲五隊。其子泰村請曰。嚮與右京君約。從武州生死。因辭義村。從泰時。泰時鼓行而西。京師震駭。乘輿幸叡山。山徒遜辭。力不足以扞東軍。乃還。分見兵二萬五千。守宇治・勢多及澱。時房攻勢多。山田重忠帥山徒二千。截橋力戰。時房不利而卻。泰時攻宇治。前中納言源有雅・參議藤原範茂等。率南都僧萬人。壓河而軍。時・霖雨水漲。泰時欲待旦而進。泰村夜挺前。夾水射戰。義氏赴援。泰時遂以全軍

從之。橋板已撤。兵緣架進。官軍矢石雨下。東兵多死。泰時令芝田兼義試水。春日貞幸・佐佐木信綱等繼之。貞幸馬傷而溺、從者援還。泰時親爲炙之。乃蘇、將士爭渡。溺者八百。信綱先達中島。其子重綱年十五。攀父馬尾。泅而渡。信綱使之還請兵。泰時諾而遣之。召其子時氏曰。我衆將敗。汝進死之。時氏以六騎渡。泰村繼之。泰時乃親渡。貞幸扣馬諫。不聽。貞幸紿之曰。釋甲而渡。不則沈溺。泰時下馬釋甲。貞幸乃奪馬去、不得渡。其兵渡者五百騎。與兼義・信綱皆達。進冒官軍。殺傷相當、義氏撤民屋。縛筏以濟軍。泰時遂至前岸。武藏・相摸將士。奮進大戰。有雅以下潰走。右衞門佐藤原朝俊。帥八田知尙・佐佐木氏綱等。留戰死之。時氏縱火而進。義村・季光攻大納言藤原忠信于淀。破之。重忠・胤義走歸奏事。上皇閉門不納。重忠擊門而罵曰。懦主誤我。遂走嵯峨。自殺。胤義遁走。泰時進至樋口河原。遇院宣使至。下馬。使人讀之。宣曰。近日之事。非出朕意。皆臣僚所爲。唯汝論其罪。莫使兵士擾輦下。泰時乃與時房。館于六波羅。朝時之出北陸道也、從軍四萬。官軍張弩、扼寒原塞。朝時夜收數十牛。束薪其角。火之。驅赴

險。川越本・拙修本竝作嶮。
砥竝。諸本作礪竝。
川越本標註云。逃下一(寫本)無去字。
祠。拙修本作嗣。非。
卒。川越本・拙修本竝作死。
稚。川越本・拙修本竝作穉。
旣。川越本作已。
庖。川越本・拙修本竝作廏。川越本標註云。據東鑑諸書。廏當作庖。
押。拙修本作抑。

官軍。官軍弩發。東兵乃踰塞。至市振。官軍據險設柵。東軍騎兵渡海。而步兵破柵。戰砥竝山。殺盛遠。走定範。進會泰時于京師。於是。東軍塡塞街衢。四出捕斬。胤義以部下據東寺。遣佐原景吉攻之。胤義叱曰。汝非吾族人乎。與戰走之。盡亡其騎。獨與其長子逃去。欲投其妻家。匿木島叢祠中。遇所識僧。勸其自裁。長子先卒。胤義謂僧曰。以我父子首。視於我妻。然後致之駿州。爲我告駿州曰。阿兄自剪手足。當逞於意。僧如其言。義村從之泰時。泰時聞佐佐木經高贊上皇謀。亡匿鷲尾。欲宥之。經高自殺。其子高重・兄子廣綱等皆死。廣綱稚子當宥。叔父信綱請而斬之。泰時與時房議。凡論罪從輕。不復究捕。遂奏求首謀者。上皇以忠信・有雅・光親及中納言藤原宗行・參議藤原信能答。乃分屬之諸將。時氏召所同渡六騎。置酒勞之。捷報鎌倉。上下相慶。初義時既遣軍。日夜疑懼。會雷震其庖。義時大怖。以告廣元曰。吾命窮乎。廣元曰。君臣之命。皆天所司。今事之曲直。斷在天心。公何必怖也。故將軍之捷陸奧。雷震其陣。此安知非吉兆哉。於是。捷聞果至。廣元引文治故事。論公卿斬。泰時難戮之於京師。七月。令諸將押

元仁元年禳。拙修本作禱。

川越本・拙修本竝對下有二曰字。

送之東國。皆斬于途。獨忠信以其妹嘗適實朝。宥死流越後。後泰時得光親諫疏。大悔殺之云。於是義時廢帝。立高倉帝孫守貞親王之子。是爲後堀河帝。遂遷上皇削髮。徙之隱岐。徙順德上皇于佐渡。兩親王于但馬・備前。土御門上皇不與謀。且諫之。以故不問。乃敕義時曰。朕安忍獨留。十月。徙之土佐。後徙于阿波。是月。獲秀康父子于南都。諸所籍沒三千餘邑。義時悉分與戰功將士。一無所取焉。而北條氏勢威滋熾。泰時既破官軍。與時房留鎭京畿。四年。分居六波羅南北。號兩六波羅。泰時在京師。聞栂尾僧高辨名。往訪之。高辨語泰時曰。治國猶治病也。不究其因而藥焉。徒益病耳。治亂之因。在人之欲。公苟絕欲以率之。治可幾矣。泰時大悅。元仁元年。大旱。世以爲亂逆所致也。北條氏祈禳甚力。六月。義時病卒。泰時・時房皆東歸。政子欲以泰時襲執權。以傳賴經。以其在服疑之。諮於廣元。廣元對。宜速定議以鎭人心。泰時有八弟。多後母藤原氏出。泰時割與之父邑。自取太少。曰。吾爲執權。復何求焉。而藤原氏與其弟光宗。謀以其所生子四郎政村爲執權。以其女壻參議藤原實雅爲將軍。政村之冠。三浦

適。拙修本作通。

太。川越本・拙修本並作大。

他。正本作佗。下同。

嘉祿元年

義村爲賓。約爲父子。於是。光宗與弟光重。驟適三浦氏。府下洶洶。口耳相屬。人或警泰時。勸其兵備。泰時曰。置之。乃故禁人出入。獨許數人給仕而已。遣時氏及從弟時盛於六波羅。二人曰。鎌倉可虞。泰時曰。不如京師可虞也。遂遣之。有婢。密告泰時曰。光宗兄弟。矢於太夫人之前曰。莫之或渝。是必有異圖也。泰時曰。兄弟莫渝。爲可嘉耳。已而騷擾不已。政子從一侍女。夜造義村。義村惶恐出迎。政子曰。近日物議騷然。聞政村・光宗。日聚首於子家。所謀何事。得非圖武州。義村曰。不知也。政子作色曰。何得曰不知也。且子挾政村。以圖反乎。抑計和平也。義村乃誓曰。四郎無他。獨光宗微有異圖。臣當禁止之。明日。義村往謁泰時。曰。僕記故大夫眷遇。公與四郎。於僕何擇焉。所願安平是已。日者。光宗欲云云。僕盡心諷導。終得服從。泰時顏色自若。曰。僕於政村。固無釁隙。安有所偏私也。居十餘日。府下又大擾。政子終抱賴經。入泰時第。召義村及諸宿將。令廣元論決。逐實雅。歸京師。流光宗于信濃。遷藤原氏于北條。廷議流實雅于越前。事即定。不問黨與。嘉祿元年。六月。廣元卒。七月。政子薨。泰時置評定・引付兩職。諮詢

貞永元年

嘉禎二年

仁治三年

政事。又置家令。以平盛綱・尾藤景綱爲之。申禁地頭侵擾。不得與京官抗。置京師篝卒。鎌倉將士帶衞府官而不衞。衞而後期者。皆納直縣官。貞永元年。泰時與三善康連議。立式目五十條。以資聽斷。與評定衆十二人誓曰。吾曹爲天下司直。所挾偏私者。國神殛之。又令諸吏斷獄。輕罪止其身。毋有羅織。盜竊者。倍而贖之。武田信光與海野幸氏爭界。幸氏直。泰時予之。或曰。信光啣公。泰時曰。嚮和田氏請宥胤長。而先人流之。和田氏不能爭也。顧公私如何耳。畏怨而不決。何取於執權乎。信光聞之。自懼。效書誓無他。泰時以示諸將。終爲恒例。嘉禎二年。泰時進從四位下。仁治三年。六月卒。年六十。泰時爲人敦親族。常推叔父時房而下之。嘗在評定所。聞弟朝時第有寇。輒起赴援。平盛綱曰。是小事耳。公任重職。何自輕也。泰時曰。兄弟有難。何曰小事。以吾視之。與建保・承久二役奚擇。苟喪吾親。重職何爲。朝時書藏於家。曰。世世子孫。毋背武州裔也。泰時不以權勢自異。常與諸將。更直幕府。逮老不懈。當直之夕。不敢蓐也。每詣頼朝墳。拜于堂下。或曰。盍上。曰。將軍在時。吾未得登。豈死將軍乎。其進四位也。謂人曰。無

寬元二年

寶治元年

功進爵。恐不保終。吾將祈之神也。有僧說之曰。建一佛寺。可以治安。曰。糜財蠧民。何治安之有。遂逐其僧。泰時銳意求治。其參政府。先衆而入。躬執勤儉。以率將士。將士貸於富家者。自爲償息。尤貧者。幷償子本。遇有饑歲。發倉賑之。或設場。救濟流民。及其卒。天下惜之。子時氏先卒。時氏子經時。嗣爲執權。泰時常愛儒人。謂經時曰。爲政在文。不可專用武斷。經時長吏事。世稱有祖父風。遂襲其官。寬元二年。將軍賴經讓職於其子賴嗣。甫六歲。四年。經時有疾。亦傳執權於弟時賴。而卒。故朝時子光時。有寵於賴經。因勸圖時賴。欲自代之。兵士集府下。時賴遣吏卒。扼衢路。而以兵自衞。賴經使者來。不許見。光時削髮謝罪。流之伊豆。送賴經還京師。其近士三浦光村與爲護兵。至京師。辭還。嗚咽曰。臣必有以報君也。既歸鎌倉。潛徵兵其邑。勸其兄前若狹守泰村反。泰村不果。泰村。義村子也。時義村已卒。泰村威權仍盛。族黨最廣。時賴外祖安達景盛。削髮在高野。寶治元年。四月。景盛來府下。數往時賴家。已而謂其子義景・孫泰盛曰。汝輩不目三浦氏近狀乎。而頫首之也。五月。有榜于鶴岡祠前。曰。泰村將被誅。時賴因

往。攜修本作行。

事寄宿三浦氏。氏族悉集獻酒。迭出更入。時賴頗怪之。其夜。聞障內有鎧冑聲。決起曰。果然。麾一從者。徒步而歸。泰村驚惋不措。翌夜。時賴使人詗三浦諸第。皆蓄兵仗。時賴益有戒心。將士聞之。爭至。明日。泰村第有匿名書。曰。子將被誅。盍戒。泰村曰。是毒我者。取而毀之。使人謝時賴曰。聞道路之言。如鬬泰村者。家僕傳聞。爭來相衞。卽見尤怪。當速散去之。如事關他人。有須衆力。當率焉以奉援。時賴慰諭遣歸。大江季光妻。泰村妹也。來勸其兄決意反。亦不果。會時賴誓書至。令速罷兵。泰村大喜從之。使者出。其妻賀。進食。泰村一嘆未能下。聞門外大譟。安達氏兵來攻。泰村瞿眙。急防之。時賴於是遣弟時定。將兵援攻三浦氏。令金澤實時守幕府。實時。泰時弟實泰之子也。大江季光將往屬時賴。其妻慍曰。良人非士也。季光乃屬泰村。時賴令人火三浦氏北隣。泰村大敗。走入賴朝影堂。光村以八十騎據永福寺。以呼泰村。泰村不敢往。光村乃至堂中。諸軍圍之。於是。三浦氏宗族。列坐影前。光村慷慨曰。向從殿下密旨。則我族將專軍政。若州猶豫。以取此辱。引刀自剺其面。問曰。猶可識乎。遂自殺。殿下謂道家也。泰

寫本免下無於字。

建長元年

建長四年

奚。川越本作何。

與語。川越本作共語。

村泣曰。我四世積功於幕府。又以北條氏外戚。輔佐內外。乃不能免於禍耶。雖然。焉知非先君多殺之報哉。何遽北條氏之懟。與其族二百七十餘人皆死。諸三浦氏妻孥。皆釋之。後泰村女野本尼者。謀作亂。被殺。先是。時賴從祖父重時。鎮六波羅北方。時賴欲召之。泰村止之。建長元年。召至。竝執權。時賴爲相摸守。四年。道家暴卒。賴嗣又圖時賴。遣長久連等。誘諸將士。佐佐木氏信縛送之於時賴。時賴乃廢賴嗣。送還京師。迎後嵯峨帝皇子宗尊親王。爲鎌倉主。成政子志也。時賴循守泰時式目。內外稱治。而其自奉。多人所不堪。大佛宣時。時房孫也。嘗詣時賴。時已深夜。時賴手一壺酒曰。欲與子共之。顧安所得肴。照紙燭索于庋。覩楪有殘醬。取而佐酒。其儉薄如此。其用人不拘門地。嘗擢靑砥藤綱。藤綱。微者也。少好學。師僧行印。遭年旱。時賴聚僧施之。又親祈于三島祠。其束載之牛。沒于水。藤綱在傍。叱曰。汝亦倣北條公薦事耶。衆問其說。曰。方旱牛而有知。盍沒于田。今之施僧。不甄其貪廉。廉者寧餓不來。徒飽貪者耳。是奚異牛之沒于水也。時賴聞之。召見與語。大說之。竟擢爲引付衆。有公文者。與北條氏封

康元元年

弘長三年

文永三年

人爭畔而訟。衆皆畏時賴。曲公文。獨藤綱直之。公文德之。欲有所報。夜苞錢。投其後圃而去。藤綱大怒曰。相摸公司天下之直。直公文。乃直相摸公。公宜見報。是何奸也。郵還其錢。嘗夜行。遺十錢於水中。乃買炬照水撈之。炬直五十錢。或曰。得不償失。藤綱曰。五十錢。吾失人得。十錢誰得之者。我取六十錢。以益於世。不亦大得乎。藤綱自儉而喜施。日食一脯。布衣袴褶。刀室不漆。時賴欲加之祿。曰。神見夢於我曰。汝願治者。增藤綱祿。藤綱固辭。時賴曰。何辭。曰神曰。增藤綱祿。增之則神曰。斬藤綱首。斬之乎。時賴又從容問其所欲。藤綱乃陳鎌倉及諸州吏姦狀曰。管子稱階前千里。門外萬里。是也。乃罰其尤姦者。世以此稱時賴得人云。康元元年。時賴有疾。削髮。先是。時賴學禪於宋僧道隆。爲造建長寺。又造最明寺。於是。老於最明寺。長子時宗猶幼。以重時子長時執權。弘長三年。時賴卒。臨卒作偈曰。業鏡高懸。三十七年。一槌破碎。大道坦然。蓋享年三十七也。時宗年十三。敍從五位下。任左馬權頭。外舅安達泰盛參與軍政。文永三年。將軍宗尊稱疾不出。僧良基入禱之。而不徵藥。府下頗有物議。兵士四至。良基出

文永七年

奔。幕府近臣稍稍出。留侍者五人而已。宗尊竟還京師。立其子惟康代之。七年。長時卒。時宗執權。時宗庶兄時輔。與長時弟義宗。俱鎮六波羅。時輔居常怏怏。

文永九年

愧降於弟。九年。二月。時宗令義宗擊時輔。殺之。聞其有異志也。時宗爲人强毅不撓。幼善射。弘長中。大射於極樂寺第。將軍欲觀小笠懸。顧命諸士無敢應者。時賴曰。太郎能之。太郎。時宗幼字也。召而上場。時年十一。跨馬出。一發而中。萬衆齊呼。時賴曰。此兒必任負荷。當是時。宋氏爲胡元所滅。諸隣國皆服於元。獨我邦不通使聘。元主忽必烈。令韓人致書於我曰。不服則尋兵。朝廷欲答之。下鎌倉議。時宗以其書辭無禮。執爲不可。元主復遣使者趙良弼來。時宗令太宰

文永十一年

府逐之。凡元使至。前後六反。皆拒不納。十一年。十月。元兵可一萬。來攻對馬。地頭宗助國死之。轉至壹岐。守護代平景隆死之。事報六波羅。令鎮西諸將赴拒。少貳景資力戰。射殪虜將劉復亨。虜兵亂奔。而元主必欲遂初志。後宇多天皇

建治元年

建治元年。元使者杜世忠·何文著等九輩。至長門。留不去。欲必得我報。時宗致之鎌倉。斬于龍口。以上總介北條實政爲鎮西探題。遣東兵衞京師。西兵衞者。

弘安二年

弘安四年　川越本標註云。一無艦字。鏁。川越本・插修本竝作鎖同。

弘安七年

正應二年

悉從實政。益築太宰府水城。省冗費。充兵備。弘安二年。元使周福等。復至宰府。復斬之。元主聞我再誅使者。則憤恚。大發舟師。合漢・胡・韓兵凡十餘萬人。以范文虎將之。入寇。四年。七月。抵水城。舳艫相銜。實政將草野七郎。潛以兵艦二艘。邀擊于志賀島。斬首虜二十餘級。虜列大艦。鐵鏁聯之。彀弩其上。我兵不得近。河野通有奮前。矢中其左肘。通有益前。仆檣架虜艦。登之。擒虜將王冠者。安達次郎・大友藏人踵進。虜終不能上岸。收據鷹島。時宗遣宇都宮貞綱。將兵援實政。未到。閏月。大風雷。虜艦敗壞。少貳景資等因奮擊。鏖虜兵。伏尸蔽海。海可步而行。虜兵十萬。脫歸者纔三人。元不復窺我邊。時宗之力也。七年。時宗卒。子貞時甫十四。繼執權。襲父官爵。安達泰盛以外祖益專。太宰府之捷。其子弟與有力焉。威望日盛。與內管領平賴綱爭權。內管領。卽家令也。泰盛子宗景。性狂易。謂其曾祖實賴朝子也。遂改姓源氏。賴綱因譖之曰。彼更姓。冀爲將軍也。十一月。貞時發兵。夷滅安達氏。人以爲三浦氏之報也。賴綱獨執政。後賴綱亦圖反。其長子宗綱。告之貞時。誅賴綱。流宗綱。正應二年。九月。府下騷擾。貞時廢惟康。

深草。正本作二深艸一。下同。
永仁元年
永仁四年
正安三年
延慶元年
應長元年
慕。正本作レ景。
奸。川越本・拙修本竝作レ奸通。
應長五年
文保元年
元亨二年

倒二載之輿一。送二還京師一。東人曰。將軍被レ流二京師一也。乃請二後深草帝三子久明一爲二將軍一。永仁元年。置二長門探題一。四年。僧良基誂二故源範頼裔吉見義世一謀レ亂。捕誅レ之。正安三年。貞時削レ髮而老。使三時頼孫師時・政村子時村竝代執レ權。師時從弟宗方爭レ權。矯レ命。先殺二時村一。遂欲レ殺二師時一。貞時怒。命二宣時子宗宣一誅レ之。延慶元年。廢二久明一。立二其長子守邦一代レ之。應長元年。貞時・師時相繼而卒。貞時留二意於政治一。慕二時頼之風一。初時政・義時以來。數遣レ使分二曹行郡國一。問二吏民冤枉一。至二於時頼・貞時一。發二間使一。被二緇衣一四出。多レ所二摘發一。吏不レ得レ欺也。而間使又稍稍成レ奸。時頼・貞時。終親出按レ之云。貞時既卒。長子高時甫九歲。宗宣及時村孫熈時竝執レ權。無レ幾皆卒。長時姪基時。及實時孫金澤貞顯代レ之。高時舅安達時顯。泰盛之弟也。內管領長崎圓喜。賴綱之甥也。以二貞時遺命一共輔二高時一。五年。遂立二高時一執レ權。文保元年。高時爲二相摸守一。高時性頑率。委二政於時顯・圓喜一。二人協レ心。修二泰時舊規一。既而圓喜老。子高資代レ之。高資性多欲。黜陟予奪。一以レ賄成。元亨二年。陸奥人安藤堯勢(タカナリ)。與二族季長一爭レ邑而訟。皆賂二高資一。高資兩納レ之。不レ決。二人怒。據レ邑反。承久以

庭。拙修本作廷。

有誅之有。川越本標註云。一作見。

座。川越本・拙修本竝作坐。

泰家。拙修本・作時家。

傚。川越本・拙修本竝作倣。下同。

正中二年

堀川。正本作堀河。下同。

來。士之叛北條氏者始於此。北條氏遣兵討之。不克。高時不以爲意。日夕飮宴。一日。見狗鬬于庭。喜之。遂令吏民貢獒。獒數千。分附諸將養視。輿載往來。遇獒不下者有誅。獒羣鬬哮噉。如爭戶者狀。高時又喜田樂。樂師亦數千。纏頭費。每以萬數。一夕。高時獨醉舞。有十餘倡。來歌以助之。姬人闚之。倡皆天狗。歌曰。不見天王寺妖靈星乎。歌終而去。獸跡滿座。高時醒。無所見。已而有疾。高資勸其削髮讓職於貞顯。高時弟泰家。慍其不讓己。亦削髮。高時病起。欲誅貞顯。貞顯自髡謝之。諸將爭傚之。圓顱滿朝。高時頗不平高資。密令長崎高賴誅之。高資覺。捕高賴流之。內外憤怨。攝津渡部氏・大和越智氏。皆起兵。高時命吏擊之。又不克。正中二年。高時流中納言藤原資朝于佐渡。以其圖北條氏也。初北條氏定承久之亂。立後堀川帝。帝傳位於太子。是爲四條帝。帝崩。朝議欲立順德皇子。泰時思土御門帝不與亂謀也。遣安達義景立其皇子。義景途還曰。有如順德皇子立。則奚爲。曰。廢之。遂入京師。立後嵯峨帝。帝二子後深草・龜山。相繼昇位。後嵯峨特愛龜山。遺詔時賴曰。龜山之後。永承皇統。乃以長講堂領爲後深

正中元年
正中二年

陪。正本作倍非。

草湯沐邑。後深草上皇欲倚時宗力以得政柄。時宗不敢從。已而龜山傳位於太子。是爲後宇多帝。上皇憤恨。欲削髮。時宗乃以上皇皇子。爲後宇多儲貳。是爲伏見帝。伏見帝立三年。有賊淺原爲頼。夜入宮中謀逆。不成自殺。六波羅檢之。事連龜山上皇。上皇賜書於貞時。誓無他。帝密敕貞時曰。龜山之在位。憤承久事。陰有所圖。而不敢發。立其後。非卿利也。貞時乃立帝皇子。是爲後伏見帝。後宇多上皇遣使責貞時。貞時乃廢帝。立後宇多皇子。是爲後二條帝。因定議。後深草・龜山二統。每十年更立。先是。時頼分藤原氏爲五派。更任攝籙。貞時之議天位。蓋傚之也。及帝崩。立後伏見之弟。是爲花園帝。朝議欲立後二條皇子邦良承其後。龜山上皇特屬意於後宇多次子。遣使諭貞時。立之。是爲後醍醐帝。邦良爲其太子。帝憤北條氏以陪臣世主廢立也。陰謀滅之。覗高時失政。竊喜之。令資朝及右少辨俊基等誘致美濃源氏土岐頼兼・多治見國長等。事覺。或告之於六波羅北方北條範貞。會攝津民作亂。範貞因召四十八所篝卒。得三千人。以襲頼兼・國長殺之。是時。正中元年。九月也。明年。五月。高時遣兵收致

嘉曆元年

座。正本作坐。

元弘元年

資朝・俊基。按問之。不服。遂謀廢立。帝因賜誓書。高時奉還其書。釋俊基。遂流資朝也。嘉曆元年。邦良薨。帝初欲廢邦良立皇長子尊良。高時不可。至是。又欲立三子護良。遣使申後嵯峨遺命。高時執貞時議。立後伏見帝子量仁。爲東宮。帝怒。與護良謀。誘諸寺僧徒。因以護良爲山門座主。召僧圓觀等。呪詛北條氏。元弘元年。事覺。捕圓觀等。鞫而得實。再執俊基。後伏見法皇亦使人來具告帝陰謀。高時乃大聚諸將吏。問計。衆莫敢言。高資曰。主上・親王流之。公卿黨者斬之。如此而已。勿再貽悔也。二階堂貞藤諫曰。北條氏世尊王室。惠下民。所以執國命幾乎百六十年也。今已執公卿。又欲遷帝王。如天道何。苟使我而無覺。朝廷何能爲。高資睥睨貞藤曰。迂腐之論。何陳於今日。公獨不知承久故事乎。高時從之。八月。遣貞藤等。以三千騎入京師。基時子仲時・政村曾孫時益。方鎭南北。得貞藤與計事。事泄。帝逃之南都。仲時・時益遣兵索宮中。不獲帝。則奉兩上皇・太子于六波羅北方。僧豪譽來。告帝在叡山。則遣近江守護將兵攻之。不利。已而南都僧來。告帝在笠置山。二帥乃使近江兵備叡山。而遣檢斷糟谷宗秋・隅

元弘二年

赤坂。正本作赤阪。下同。

元弘三年

摩耶。川越本・拙修本並作摩邪。

田通倫等圍笠置。城固不拔。高時遣大佛貞直・金澤貞冬。將數萬騎助攻。未至。陶山義高・小見山氏眞。率五十餘人。夜乘風雨。縋城而入。縱火呼譟。外兵應之。城即陷。帝逃走。追獲。拘之六波羅南方。高時遣貞藤及安達高景。立量仁即位。是爲光嚴帝。令貞直引兵攻官軍將楠正成。走之。二年。請光嚴帝詔。徙帝于隱岐。千葉貞胤・小山秀朝・佐佐木高氏。將兵護送。已而楠正成復起兵。皇子護良・赤松則村繼起。據千窟・赤坂・吉野・白旗諸城。高時遣義子阿曾時治。與貞藤・高直・高資。以五萬騎赴攻。三年。二月。時治攻赤坂。人見恩阿・本間資貞先登。資貞子甫十八。隨父死。城終陷。閏月。貞藤亦陷吉野。與時治俱援高直。圍千窟。不能下。三月。六波羅二帥。徵山陽兵。兵降於則村。爲守三石。則村進據摩耶山。二帥又徵四國兵。伊豫豪族亦應官軍。二帥遣近江兵攻則村。大敗。於是。數警隱岐守護。備帝逃逸。而帝果逃歸伯耆。二帥再遣萬人攻則村。又敗。則村與藤原宗鎭。縱火來攻。遣宗秋・通倫。以兵二萬拒之桂川。則村子則祐。亂流來擊。我兵又大敗。時已夜。新帝・兩上皇入六波羅。二帥大出兵於七條磧。陶山高通・河野通

高氏。捕修本作尊氏。下同。

帥。正本作師。

盛。巷戰走則村。則村退走。扼八幡・山崎。運路梗塞。二帥遣兵擊之。陷伏敗還。而山徒亦以護良令來攻。二帥遣獷騎。擊走僧兵。因啗以利。又使近江守護佐佐木時信備之。高通・通盛。又敗則村于京南。而官軍將源忠顯大兵來攻。二帥悉中乘陣。時信以五千人擊走忠顯。而結城親光遽降官軍。士卒多逃。二帥告急於鎌倉。使者相踵。四月。高時遣名越高家・足利高氏等西上。半守京師。半攻行在。高家。朝時五世孫也。與則村戰狐川。被鮮甲挺前。中矢死。高氏傍觀不戰。下馬張飲。遂降官軍。合兵攻京師。京師兵三萬。大半吏胥。不習戰。二帥乃深溝固壘守之。擊卻忠顯。已而城兵大潰。餘千餘人。二帥聽宗秋議。夜奉兩上皇・新帝・太子。空城東走。土兵環起而射。太子以下四走。矢中新主肘。時益死之。天明。又遇敵數百。擊破而過。明日。至番馬驛。遇土兵數千人。奉龜山皇子守良。夾路而陣。宗秋擊破其前鋒。而兵疲矢盡。走入佛寺。與仲時謀。欲據近江一城。時近江守護殿而後。待之不至。仲時曰。是亦叛矣。乃謂其兵曰。獻吾首於官軍。是我所以報諸君之勞也。乃自殺。宗秋以下四百餘人從死。新主・兩上皇。被收入京師。

高時未之知也。獨聞高氏叛則恐。發上野・下野等六國兵。附弟泰家西上。因徵糧於諸邑。次至新田義貞邑。義貞斬其吏。高時大怒。乃專北向其鋒。遣金澤貞將・櫻田貞國。分道攻義貞。貞國與義貞戰于入間河。殺傷相當。退次久米河。明日又戰。不利。退次分陪。高時遣泰家援之。黎明。令兵三千人齊射。而全軍從之。大破義貞軍。既勝、驕不設備。會、三浦義勝叛屬義貞。合兵來襲。泰家駭走。橫溝某・安保某。還鬪死之。而小山・千葉二族皆叛。貞將與戰。敗走、諸軍敗歸鎌倉。則六波羅敗聞至矣、內外失色。間一日。義貞三道來攻。高時乃遣基時・貞直・守時。守時。長時孫。而足利高氏妻兄也。拒于囊坂。大敗。曰。吾被猜疑。不若速死。乃自殺、貞直拒極樂寺坂。敗退。家臣本間某。獲罪家居。是日出戰、斬敵將大館宗氏。獻首貞直而自殺。貞直感激。冒敵陣死。基時與義貞相持于假粧坂。而義貞還兵。自稻村崎入。縱火府中。高時以千餘人。逃于東勝寺。先是。貞將戰死。基時・國時・鹽飽聖遠父子。皆自殺。三道軍皆潰。安東聖秀自極樂寺軍還、則府第已灰矣、憤激曰。百年之跡。何無一死節尸乎。下馬將死。其從女爲義貞妻。贈書招降

裹。正本作裡。

之。畢秀作色。謂使者曰。吾姪。士家女。何爲此無恥之言。而義貞亦不呵止之也。
以書握刀。割腹而死。義貞軍進入府中。無復抗者。獨長崎高資子高重力戰。敵
四而萃之。高重左右衝突。所向皆披。還見高時曰。事已至此。公自爲圖。雖然。臣
猶欲一快戰。公且待之。乃乘其愛馬。與百餘騎。撤幟裹刃。雜入新田氏軍。狙擊
義貞。垂及而覺。敵兵圍之。高重乃大呼奮擊。馬上掀敵一將。投數步外。敵軍辟
易。高重走。至東勝寺。則高時以下方訣飮。屬觴高重。高重三酹。傳之攝津道準。
而自屠抉腸出之。道準笑曰。好下物也。因滿酌盡半。以傳諏訪直性（チキシヤウ）。而死。直性
與長崎圓喜皆死。高時乃自殺。從死者凡六千八百餘人。高時有二子。曰萬壽・
龜壽。萬壽之母之兄五大院宗繁。受高時遺託。爲匿萬壽。義貞購求高時遺胤。
宗繁欲斬送萬壽。而憚物議。乃給萬壽曰。敵且來捕。宜逃伊豆。萬壽從之。宗繁
走告義貞。追獲斬之。義貞疾宗繁所爲。將誅之。宗繁亡匿。無舍者。道餓死。初泰
家密諭諏訪盛高曰。萬壽既託宗繁矣。汝奉龜壽。以爲後圖。雖家兄自招禍。而
天豈遽忘我祖宗德哉。時高時逃葛西谷。而龜壽猶孩。從在母所。盛高往。言於

三百。拙修本作二百。

少貳。正本作小貳。

重時。正本作茂時。憲法作憲房。川越本標註云。今據後卷改之。以从梅松論太平記諸書。

衆婢曰。速付次郎我。公欲訣之。聞太郎已死。次郎亦終難免耳。衆婢皆泣。盛高佯怒。取之而去。走信濃。匿於諏訪祠官賴重家。泰家既遣盛高。欲自脫走。爲重傷歸鄕者狀。臥畚中。以襤衣自覆。南部景家・伊達匡衡舁之。令二卒繫新田氏號。騎而先導。走陸奧。餘兵三百餘人。度其行遠。火第自殺。新田氏至。以爲泰家已死也。鎌倉與六波羅。間十五日。皆夷滅。長門探題時直。時房第五子也。爲土居氏・得能氏所攻。航而東走。聞高時死。欲還筑紫。筑紫探題北條英時。亦爲少貳貞經所攻殺。時直因貞經降。宥死歸邑。尋病死。淡河時治。時房孫也。初屯越前。扼北陸道。已而越中守護名越時有戰死。平泉僧兵來攻時治。時治與妻子。皆自殺。時直・時治之亡。與鎌倉・六波羅皆同月。是月。大佛高直・二階堂貞藤・長崎高資等。解千窟圍。退保南都。七月。謀犯京師。官軍來攻。高直等削髮而降。斬于阿彌陀峯。以貞藤嘗諫高時。特宥死歸邑。尋謀反見誅。明年。赤橋重時・僧憲法。及本間・澁谷・規矩・絲田氏等竝起。皆敗死。而泰家自陸奧潛來京師。依藤原公宗。公宗。公經裔。與北條氏有舊。相倶窺伺朝廷。時朝廷失政。天下士民。皆思

二十。正本作廿。

延元二年

延元三年

北條氏。泰家於是薙髮。更名時興。時龜壽在信濃。亦更名時行。約期攻京師。事覺。公宗被誅。時興逃亡。不知所終。而時行與諏訪賴重。招聚黨。旬日得五萬人。東攻足利直義於鎌倉。走之。尊氏自京師來討。時行遣名越時基。將三萬人逆擊。臨發大風破屋。時基更卜日。兼行戰于橋本。後軍多亡者。且戰且退。阻相摸河而陣。水方漲。時基不備。足利氏夜濟。時基大敗。與三百人走歸。賴重使時行脫走。而與四十餘人。剝面自殺。足利氏至。謂時行既死也。時行起兵。二旬而敗。世目之曰二十日前代。時行之起也。名越時兼亦起北國。及時行敗。爲加賀將士所攻滅。延元二年。時行遣使詣吉野行在。上言曰。臣父伏天誅。臣不敢怨。所怨者足利尊氏。世受恩於臣家。而卒背之。今又困天子。臣願討尊氏。以贖父罪。詔許之。尋以五千人發伊豆。從官軍將源顯家。擊走足利義詮于鎌倉。退至美濃。與上杉憲顯等。戰于青野原。轉戰至和泉。及顯家敗。終赴行宮。任左馬權頭。三年。從宗良親王。至遠江。擊破今川範氏兵于匹馬驛。從親王。投井伊高顯。亦不知所終。

疎。川越本作疏。同。取。正本作受。

覩。川越本・拙修本竝作觀。

外史氏曰。北條氏之於源氏。則藤原氏之於王家也。皆不用寸兵尺鐵。而簒其國於袵席之上。何其易也。蓋人情莫不知親其宗。而顧謂不如妻黨之可倚也。於是。削弱兄弟。疎斥親族。以爲爲子孫除患害。而不悟其自剪伐以資異姓。可不哀哉。源氏之成國也。固懸殊王家。而其謬計出王家所未爲。故其取禍有更烈者。而北條氏之陰謀狡智。乃非藤原氏所及也。鬭其骨肉。剪其手足。潛收默竊其權。而如己未嘗措手。及其得權。亦有所翼戴。而不敢自居。辭其名而取其實。舍其利而操其柄。使天下不能議己。子孫守其遺謀。而加以周密。終使帝王之廢立。攝籙之進退。盡取決於己。而如己無所關。不得已而爲之措置。是北條氏家法。所以能長持天下權衡焉。而至於盡心民事。前後武族所罕覩也。蓋自知其悖逆人神所不容。惴惴焉計以此贖之。而泰時其最者矣。世之論者。於泰時無所間然已。余謂承久之事。泰時其罪之魁也。何哉。使泰時之賢。果如所傳乎。則既定禍難。擁大兵於輦下。諸大處分。莫不由己。其於朝廷與幕府。往復之際。豈無所以善處之。已可以理導。又可以勢禁。是之不思。而陷其父於大惡。雖

他。正本作佗。

太。拙修本作大。

有善政。寧贖其罪耶。是知舊史所稱泰時勸其父詣闕納降。不聽。臨發。問遇親征則何爲。曰。降之。否則決前。皆史氏爲之文過耳。不足信也。至其立後嵯峨。亦出恩仇之私。論者謂之天命正理。亦過褒矣。然北條氏七世。其可以人理論者。獨有泰時。其他如義時輩。皆蛇虺鬼蜮。又曷足責歟。或傳。義時誅深見某者。而近其子。卒爲所殺。噫。是其或然也。昔平清盛源義仲。竝稱兵抗上皇。皆除讒人而已。不敢遂其幽囚之計也。然猶不免誅滅。如義時者。眞無前逆賊。而得脫叛名於世。天其假手其臣僕斃之也。及其子孫。遇新田氏之斧鉞。抉其巢穴。殲其醜類。天網恢恢。疎而不漏。豈不信哉。外史氏曰。時宗之禦元虜。保我天子之國。足以償父祖之罪矣。虜蓋以其所以恫喝趙宋者。來擬於我。我卻其使不納。未有曲直也。及彼以兵來脅。剪屠我邊疆。則曲在於彼。彼使再來。不可不執而戮之。折彼凶威。定我民志。奪其所挾而決死待之。可謂深中機宜矣。否則我幾何而不爲趙宋也。其後唯菊池氏之待明。庶幾接武。足利氏屈膝外嚮。不足言已。豐臣氏能不辱國體。勝足利氏萬萬。然至與明戰。張皇太甚。內自困敝。雖攻守

異勢。川越本・拙修本竝作二勢異一。

經。川越本作レ輕。

爲。川越本・拙修本竝作レ焉。上屬。

異レ勢。不レ及二北條氏一遠矣。北條氏之策。守則土著。不レ煩二徵發一。軍須不レ擾二經費一。委二任將帥一。不二自中掣一レ之。其戰則憑レ陸誘レ寇。走舸逆戰。短兵急接。皆可二以爲一後世之法一也。吾嘗觀二鎮西士人所レ傳元寇圖卷一。虜盛以二砲皷一臨レ我。而我兵揮レ刀奮前。虜不レ暇レ發焉。蓋是時。我未レ有二火器相敵一。吾是以知。兵之勝敗在レ人不レ在レ器。我長技自有レ在。爲レ可レ恃也。

日本外史卷之四終

余。川越本・拙修本竝作予。歎。正本作嘆。

測。拙修本作側非。

憑。正本作馮。州。川越本・拙修本竝作洲。

日本外史　卷之五

新田氏前記

楠氏

北畠氏　菊池氏　名和氏
兒島氏　土居氏　得能氏

外史氏曰。余修將門之史。至於平治・承久之際。未嘗不舍筆而歎也。嗚呼。世道之變。名實之不相讐。一至於此歟。古之所謂武臣者。勤王云爾。如源氏・平氏。莫不皆然。至於平治之後。乘綱維之弛。以逞鴟梟之欲。有暴悍無忌者焉。有雄猜匪測者焉。雖所爲不同。而其蔑王憲營私利。一耳。然猶有可言。曰。王族也。將家也。至於北條氏。以將門屬隷。而坐制朝廷。天下之事。不復忍言也。且夫承久之事。孰曲孰直。筆而傳之者。皆出北條氏盛時。今安考信焉。況君臣之際。寧可較曲直也。乃指斥憑怒。極其凌辱。視萬乘之尊。不啻如孤豚。嗚呼。八州生民。誰不

忸。擱修本作狃。

仇。擱修本作休。

被先王之遺澤。當時所謂武士者。忸其豢養。供其使嗾。雖名位族望。遠出其右者。奔走驅馳。甘爲之役之不暇。氣類所召。習以爲常。豈可勝言哉。卽稱爲公卿者。平時趨蹌朝廷之上。取天子之爵秩。以驕天下。而及於此際。未嘗畫一策。以救危難。袖手傍觀。以聽其所爲。是曷尤於武人耶。雖時勢有所未可。君德有所未洽。以致乎此禍。而亦臣子之罪矣。自是以來。百餘年間。廢立黜陟。一仰其處分。而朝廷蹙蹙如被束縛。至於窺其顏色。以爲憂喜。何其甚也。余聞後鳥羽上皇之徙隱岐也。因石窟縛屋。纔庇風雨。十有九年。乃崩。蓋父子三帝。隔絕千里。各居窮海。終天不得相見。是其心何嘗一日忘北條氏哉。則元弘之事。萬不可已也。而其勤王之功。余以楠氏爲第一。微楠氏。則西狩之駕。吾見其與承久歸一轍而止而已。何哉。彼北條氏雖失於政。其權力有亙甚焉。藉累世之威。而加積弱之餘。百萬虎狼。隨其指呼。炰咻中國。莫之或攖。天下方以承久爲戒。重踵屛息。莫敢言勤王之事。而楠公獨以眇眇之軀。唱義其間。當其衝路。挫其爪牙。以鼓舞四方義士之氣。使之一時踵起。殄戮元惡於斧鉞之下。報列聖之深仇。

世。川越本・拙修本並作朝。
倡。川越本・拙修本並作唱。
鳥。川越本・拙修本並作焉。

雪累世之大恥。天下萬姓。再得仰日月之光。雖曰屬皇運之泰。而非公爲之倡。焉能至此。是鳥知非天生斯人。以匡濟世道哉。後之論者。或有比之唐張巡者。巡藉全盛之唐室。拒狂胡之偏師。有二顏爲之先。有許遠爲之助。而不過遮蔽江淮。守城致死。以公視之。勢之難易。功之大小。豈可同日而語也。要之。位不滿其器。莫能展其才。而終能以躬殉國。靖獻先王。餘烈所及。不獨其子孫。自公卿自將士。各執弓箭。以勤王事。概皆聞楠氏之風而起者也。嗚呼。如楠氏者。眞可謂不愧武臣之名矣。余故敍楠氏之事。以繼源平氏云。

楠氏。本姓橘氏。出於敏達天皇。天皇曾孫曰諸兄。爲左大臣。賜姓橘。橘氏後裔。或降在民間。其居河內者。以楠爲氏。楠氏始著於後醍醐天皇之時云。天皇於後鳥羽爲玄孫。後鳥羽二子順德・土御門二帝。並爲北條氏所徙。以崩。後嵯峨帝以土御門之皇子。爲北條氏所立。而常痛先帝之蒙塵。欲竢時報之。而後深草・龜山相繼卽位。皆帝之子也。帝謂後深草優柔。不足與有爲。而愛龜山有英氣。可以繼其志。故遺詔。龜山之後。永承皇統。故後宇多以龜山太子立卽位。而

建。川越本・拙修本竝作定。

藤原俊基。川越本・拙修本竝作源俊基。川越本標註云。諸本衍源字。當刪。俊基亦藤原氏。非源氏。下文作殺藤原俊基。

歡。川越本・拙修本竝作驩。

北條氏立後深草之皇子。又立其皇孫。承其後。後宇多上皇遣大納言藤原定房。責其再違遺詔。乃立上皇皇子。實後二條帝。遂建兩統更立之議。及帝崩。又立後伏見之弟。時後宇多次子尊治。幼有英質。龜山上皇奇之。遣定房諭北條氏而立之。是爲後醍醐天皇。當天皇之時。北條高時失政。其家宰長崎高資等恣權。將士離心。多背叛者。天皇陰謀乘是時討滅之。乃勵精求治。置記錄所。親聽訟訴。與大納言藤原資朝・右少辨藤原俊基等謀。稍延攬豪傑。置酒款語。破禮節。結歡心。目曰無禮講。美濃人土岐頼兼・多治見國長與焉。頼兼族頼春。娶齋藤利行女。利行。六波羅府吏也。一夕。頼春偶與妻語。泣下。妻問何泣。頼春告實。妻走告其父。父告之六波羅。府發兵襲頼兼・國長。二人力鬬不克。自殺。高時聞之。遣兵來執資朝・俊基。帝因賜誓書。事得寢。乃釋俊基。流資朝。而帝志益銳。與皇子護良謀。收結南都・叡山僧徒。高時又覺之。捕僧圓觀等。再執俊基。遂與宰高資定議。欲廢帝如承久故事。遣二階堂貞藤。潛兵西上。夜至六波羅。府將北條仲時・北條時益。得高時書。未發封也。帝諜知之。乃用護良計。御籃輿。逃之

宸。拙修本作震。
當有。拙修本作當存。
禍。正本作祠。
禱。川越本作祈。
座。川越本・拙修本竝作坐。

元弘元年

南都。使大納言藤原師賢服袞衣。詐稱帝赴叡山。僧徒大喜來聚。一夕得萬人。而仲時・時益。謂帝猶在宮中也。遣兵索之。不獲。則收大納言藤原宣房等四人而去。以萬人攻叡山。護良等擊卻之。而僧徒知帝非眞。悉散去。當是時。帝在笠置山。仲時・時益聞之。遣兵來攻。未至。帝下詔四方。赴難。莫復應命者。帝憂迫。適夢。紫宸殿南有大樹。樹下設虛位。二童子來。垂泣白曰。天下無地容陛下。獨有此座而已。既覺。自念。文。木從南楠。當有姓楠人。出扶朕以定禍難。因召山僧訪之曰。地方豪傑。豈有姓楠者乎。對曰。金剛山之西。有楠正成者焉。正成之父。嘗憂無子。與其妻禱於志貴山而生焉。少字多聞。長以材武名。嘗平土寇。以功爲兵衞尉。帝曰。是也。使中納言藤原藤房往召正成。正成即決意赴之。從藤房詣行在。帝使藤房言曰。討賊之事。朕一以託汝。因命座問計。正成感激。對曰。天誅乘時。何賊不殲。東夷有勇無智。如較於勇。擧六十州兵。不足以當武藏・相摸。較於智乎。則臣有策焉。雖然。勝敗常也。不可以少挫折變其志。陛下苟聞正成未死也。則毋復勞宸慮。乃拜辭還。實元弘元年。八月也。正成於是城于赤坂。將以

櫻山。拙修本作櫻田。高氏。正本・拙修本並作尊氏。二百。拙修本作三百。

奉乘輿焉。而賊兵已圍行在。三河人足助重範善拒。備後人櫻山茲俊起兵應之。高時乃遣北條貞直・足利高氏等六十三將。以武藏・相摸等五州兵十餘萬騎西上。未至而笠置陷。重範被擒。錦織俊政・石川義純死之。帝與藤房。奉神器逃。於是。貞直等諸軍。徑赴赤坂城。城纔成。取農粟充糧焉。兵僅五百人。正成分其三百。以弟正孝・族和田正遠將之。出城草山而竢東軍。東軍至。望見其城。可方百餘步。乃憫笑曰。此可隻手撅耳。爭下馬。肉薄攻之。正成令士卒齊射。立斃千餘人。東兵沮卻。卸甲且息。而伏兵自左右起。正成以二百騎闢門突出。三面合擊。東軍大驚擾亂。棄器械而走。旦日。東軍分爲二。一備伏。一圍城。正成豫築複垣。繩懸其外垣。敵蟻附焉。乃斷繩。敵與垣俱墜。乃投大石巨材。殺七百餘人。居四五日。東軍修攻具。蒙楯而進。鐵鉤鉤垣。垣殆崩。正成令城兵人執長柄杓。沃沸湯。敵焦爛而退。東兵於是築營環城。爲持久計。而城內餘五日食。正成謂衆曰。吾先天下擧大事。固不圖生。雖然。天子在焉。吾未可以死也。吾今佯死。敵則去。去則復起。使彼疲奔命。是全軀以亡敵之術也。衆曰。善。乃鑿坑塡尸。以薪

元弘二年

成。川越本・拙修本竝作從。

蔽之。乘風雨。夜稍稍逃出。入金剛山。留一人。誡曰。度我遠而擧火。火起、敵爭上城。見坑中積尸。謂正成既死也。引兵東去。使湯淺定佛代守其城。櫻山氏兵聞之潰散。茲俊自殺。賊執帝于宇治。奉于平等院。遂欲徙之六波羅。帝令備行幸儀。乃往。賊乃立後伏見帝子量仁。卽位。實光嚴帝。請帝傳神器。弗聽。請帝削髮。又弗聽。每旦沐浴。拜皇祖如常禮。賊畏憚之。僧良忠謀奪帝。不成。二年。二月。高時徙帝于隱岐。其禮比承久頗厚。參議源忠顯・嬪藤原氏從。而賊將佐佐木高氏等。以兵三千護送。由山陽道。兒島高德又謀奪之。復不成。

兒島氏。本三宅氏。世居備前兒島。兒島範長者。爲備後守。子高德稱備後三郎。帝之在笠置也。範長・高德欲赴援。聞笠置陷楠氏敗。乃止。已而聞帝西遷。高德謂其衆曰。吾聞。志士仁人。有殺身以成仁。見義不爲。無勇也。盍要奪駕以擧義。衆奮從之。伏舟坂山而待。久之不至、遣人候之。曰、駕向山陰道。乃間道至杉坂。則已過矣。衆乃散去。高德悵恨不能去、乃變服尾駕而行數日。欲一見帝有所言。而不得間。於是。夜入帝館。白櫻樹而書之曰。天莫空勾踐。時非無范蠡。且日。

護兵聚視。不能讀也。乃奏之。帝熟視之。欣然。心知有勤王者也。」帝至隱岐。居國府島。高時遂令隱岐守護佐佐木淸高將兵監護焉。又流藤房以下公卿六人。殺藤原俊基等四人。藤原資朝在佐渡。其子國光自京師赴省父。父已爲本間三郎者所殺。國光夜斬三郎而去。高時遂流皇子尊良・宗良・恒良。殺恒性。獨第三子兵部卿護良。逃奔吉野。於是。四方無復勤王之師矣。」四月。正成出金剛山。以五百騎。攻赤坂城。城將湯淺定佛徵糧於紀伊。正成遮奪之。充苞以甲。使三百人荷至城下。別分兵追之。城兵望見。謂敵且奪我糧也。開門納之。三百人取甲於苞而甲。吶喊起鬭。正成奪門而入。定佛不知所爲。乃降。正成幷其兵。將七百騎。徇河內・和泉。悉下之。比及渡部。得二千人。進陣于天王寺。」北條氏自徙天子。謂天下無復足虞也。及正成起。則大驚。六波羅二帥。遣隅田通倫・高橋宗康。將五千騎擊之。正成分兵爲四隊。伏其三隊。而以羸兵一隊。扼渡部橋而陣。敵望見易之。輒競渡。羸兵佯走。敵追北過天王寺。陷於伏。急麾兵卻。我兵疾擊乘之。敵兵卻走。不可復制。爭橋而溺者無數。京師爲之謠曰。渡部之川。墜橋決田。

勵。川越本•拙修本竝作厲。

二帥愧之。更命宇都宮公綱。以紀清兩黨五百騎代赴。正成族和田某請逆戰。曰。我已勝五千。何有於五百。正成默然。良久曰。勝敗之機。在離同。不在衆寡。公綱素負勇名。而以寡兵承敗。其將士同心於死。可知也。我藉使克之。能無失亡。吾受大任。前途甚遠。而首傷我士。後誰爲我用者。吾將不戰而屈之也。遂拔營而去。公綱代營焉。既夜。望四面皆炬火。漸多漸近。乃不釋甲而待者。三晝夜。兩黨懼。請歸曰。楠氏兵日加也。公綱乃引歸。正成復軍天王寺。數出耀兵。令軍中。禁鹵掠。遠近歸心。多來屬者。正成威振京畿。寺舊藏有上宮太子讖文。正成請僧發視之。文有曰。當人皇九十五代。天下一亂而主不安。此時東魚來呑四海。日沒西天三百七十日。西鳥來食東魚。海內歸一三年。如獼猴者。掠天下三十餘年。大凶變歸一元。正成指而諭衆曰。所謂九十五代。非今上耶。東魚乃高時。而西鳥所食。則終歸族滅耳。日沒西天三百七十日。上之復辟。蓋在明春。諸君勗之。衆皆奮勵。當是時。皇子護良起兵據吉野。又諭赤松則村勤王。八月。則村起兵播磨。於是京畿警聞。交至鎌倉。高時乃檄東北三道。大發兵。以子時治。

元弘三年

族高直・大臣貞藤將之。而宰高資監焉。西擊正成等。正成相金剛山之千窟。城之。城挾山帶壑。周回一里。高數百仭。中有五泉。雖旱不涸。造槽蓄之。養以黃土。雨則引屋溜於槽。乃使別將守赤坂。而自徙金剛山。」三年。二月。東兵自三道上。分爲三軍。攻金剛山及吉野・赤坂。赤坂城兵力拒。殺傷過當。賊絕其水道。城遂陷。吉野受圍七日。乃陷。吉野赤坂既陷。關東三軍皆萃于金剛山。而西南諸道兵應高時徵者。亦會焉。稱八十萬。合勢攻正成。正成以千餘人拒之。賊兵四面仰攻。呼聲動天地。正成令士卒。投大石。隨亂射之。無復虛箭。軍監高資令十二史記死傷。三晝夜不閣筆。乃令諸軍勿復薄城。時大旱。賊火箭射城。正成以機注水。使不能焚。賊將高直議曰。蕞爾山巓。不容有水。得非乘夜出汲乎。前攻赤坂。絕水而克。此計可襲也。遣名越某。將三千人。柵守東溪。久之。毋出汲者。正成瞰其倦怠。夜出兵。擊走之。奪其幟而還。旦日。樹之壁上。呼曰。此名越公所贈。有公徽號焉。我無所用。願奉還之。名越慚恚。擧族薄城。城上豫橫懸大木。及敵薄而發之。因射斃四千餘人。賊益畏憚。休戰。築長圍環守。城兵困之。正成乃作藁

弗。川越本作不。

人數十。被以甲冑。夜列城下。兵伏其後。乘曉霧大闃。賊相告曰。城兵窮蹙。出戰也。擧軍競進。我兵頗發矢。輒退入城。而敵集於藁人。則巨石已碎其頭。立死五百餘人。賊不敢復薄城也。三月。高時遣使者。督促諸將進攻。諸將合議。命工造雲梯。長二十丈、跨塹架壁。鋭兵六千。欲緣乘城。正成令投大炬。唧筒注油。以燒雲梯。烟燄噴起。賊兵前後喧騰。梯遂中斷。陷塹焚死者數千人、諸道豪傑望正成之風。多應官軍者。護良又命大和土寇。絶敵糧道。敵兵多逃亡、敵中有新田義貞。請護良令。稱疾東歸。謀攻鎌倉。於是。六波羅二帥。又遣宇都宮公綱。以千餘人來援、急攻拔柵。襲城址。正成應機拒之。敵竟弗能拔。北條氏以天下多勤王者。慮帝逃出。戒佐佐木清高。益嚴防備。而清高族義綱守中門。竊謀脫帝。未敢發。一夜。宮女傳帝旨。賜酒守兵。義綱因白曰。上未聞之乎。楠正成據金剛山。擧義兵。高時以百萬兵攻之。三閱月不能拔也、播磨・備前・伊豫將士。竝起應之。或謀迎駕。或窺京師。是皇運將回之秋也。而如聞。高時兒懼。陰謀不良。上宜急艤千波港。幸出雲・伯耆之間。臣佯追而從之。事必濟矣。帝不輒信。因賜其宮女

途。川越本作塗。攝修本作土。

登。川越本作上。

以察之。義綱志益固。帝乃令先往出雲。誘其族人來迎。義綱往。爲族鹽冶高貞所拘留。帝以其久不返。遂決意。夜僞稱嬪御。與源忠顯徒行逃出。叩一民家。問港所在。主人熟視帝狀貌。知非常人也。乃負帝至港。託諸舟人。舟人亦有感喜色。忠顯告以實。揚帆而南。天明。顧見數十艘。近則清高也。舟人伏帝與忠顯於船底。覆以鯗魚。而坐其上。清高來索。舟人曰。何索。曰。先帝逃矣。舟人曰。果有是事。嚮京裝者二人。乘船發港。因指曰。在彼。清高赴之。帝遂達名和港。依名和氏。名和氏。本村上氏。世居伯耆名和。承久之役。有名和行秋者焉。與孫行高從官軍。事敗奪邑。行高四子。長高・長重・長生・氏高。皆有武幹。帝至名和港。令忠顯登岸。問途人豪族可倚者。答以長高。忠顯乃踵其家。家方宴。忠顯直入傳詔。長高未答。長重進曰。人之所重。名而已矣。今忝受帝者自托。事無成否。皆足以揚大名於天下。長高乃決意。計奉帝于船上山。令長重等五人擐甲走迎帝。跪御舟傍。帝欣然。長重被薦于甲背。負帝登山。藉木葉進食。長高欲移倉粟于山。募村民。能運一擔者。賞錢五百。一日致五千餘石。乃盡燒其宅。率百五十騎。以護行

太田。正本作大田。

拙修本等字在下高德之下。

在。因樹植柵。列屛爲垣。氏高造布旗數百。煤印近國諸豪章識。張之山上。明日。清高以兵三千。自山前後來攻、望見旗章。不敢進。我兵蔽林而射。射殺一將。敵八百騎乃來降。清高在山後。未之知也。更兵急攻。會、日且入。大雷雨。長重・長生。乘而疾擊。擠賊于谷。鏖千餘人。清高單舸逃去。帝授長高左衞門尉。兼伯耆守。賜名長年。子弟拜官有差。義綱・高貞以千餘騎至。山陰・山陽豪族。來屬數十姓。而兒島高德從備前往。帝令高德等從源忠顯攻六波羅。長年子義高。初應高時徵。圍金剛山。聞長年應官軍。拔歸。亦從忠顯。忠顯行收兵。得三萬人。遇但馬守護太田守延擁皇子恒良來會。合兵軍于峰堂。僧良忠軍男山。赤松則村軍山崎。皆奉兵部卿護良令。與叡山僧徒約。將戮力入京師。而忠顯欲專功。獨進敗走。守延死之。高德・義高。留而力戰。忠顯在峰堂。恇怯不安。欲卻軍避敵。使使召還高德等。高德切諫止之。自以三百騎守七條橋。備敵夜襲。夜半顧望峰堂。炬火稍熸。乃怪而還。遇丹後人荻野朝忠。曰。大將逃矣。高德往視其營。則錦幟仆地。鎧裝狼藉。高德取錦幟。追及朝忠。收潰兵。守高山寺。高時聞金剛山久不

高氏。正本作尊氏。
名越。川越本・拙修本並作北條。

拔。遣足利高氏・名越高家助攻。率萬騎至京師。忠顯・則村。破殺高家。高氏家聲素著。得新帝密旨。欲犯行在。意持兩端。比及丹波。聞高家敗死。乃歸官軍。返攻京師。將士競附之。獨高德不欲附與朝忠別由若狹路入京師。五月。從諸將圍六波羅。結城親光出降。忠顯恐金剛山賊兵解圍來救也。急攻之。伯耆・出雲兵。聯車數十輛。積以屋材。傅城火之。城兵逃亡相踵。二帥遂東走。死近江。而金剛山之圍始解矣。捷報伯耆。天皇議還闕。親筮之。遇師之蒙。曰。大君有命。開國承家。小人勿用。乃決議。二十三日。車駕發名和氏。長年帶劍侍右。百官戎服。至播磨。得新田氏捷報。高時已伏誅矣。正成乃以七千騎迎謁于兵庫。天皇親勞之曰。今日之事。皆汝忠戰所致。正成曰。不賴陛下威靈。臣安得脫重圍再親天日哉。詔使正成先驅。歸闕。廢新帝而復位。於是。大索賊餘黨。詔以藤原師基爲太宰帥。討鎭西探題北條英時。未發。菊池氏與少貳氏・大友氏。並馳使報鎭西之捷。

菊池氏。本藤原氏。其先政則者。防元寇有功。及子則隆。賜肥後菊池郡。世襲。後

川越本標註云。一無發字。

六千。寫本作二千。

十餘世曰武時。是歲。三月。武時與少貳貞經・大友貞宗謀應官軍。謀泄。北條英時在太宰府。召武時。武時欲先發。使使少貳・大友約期。貞宗依違不答。貞經亦聞京師官軍數失利也。遂斬其使。送首於英時。武時大怒曰。吾誤矣。與此奴輩謀事。奴輩不在。吾寧不能戰乎。乃以百餘騎發。過櫛田祠前。馬俄不前。武時曰。何物牛鬼。敢沮義兵。顧射其龕。馬輒前。前攻英時。戰譙門外。克之。前逼內城。英時將自殺。會貞經・貞宗以六千騎來救。武時乃遣歸長子武重。自與次子四人進戰。死之。已而貞經・貞宗。聞京師平。金剛山圍解則懼。合議攻陷探題府。殺英時。長門探題府。亦爲土居・得能氏所攻陷。

土居・得能氏。皆出於河野氏。河野與兒島同姓。世著於伊豫。承久時。河野通信者。死王事。其庶子分爲兩家。曰土居。曰得能。及元弘時。有土居通治・得能通言。皆勇毅好義。是歲。二月。竝起兵應官軍。略地土佐。長門探題北條時直。以兵艦三百來攻。通治・通言。逆戰星岡。大敗之。四國兵多來屬焉。乃艤于今治。欲東攻六波羅。聞金剛山圍解。車駕歸闕。則往兵庫謁焉。時直既爲二人所敗。走歸英

正慶二年

建武元年

焉。川越本・拙修本竝作烏。

時英時已死。則從少貳・島津氏而降。於是。天下大定。而金剛山潰兵聚般若寺。猶數萬人。正成與源定平。將兵攻之。時治・高直・貞藤・高資・公綱等六十人率衆降。皆處斬。獨公綱以特旨宥罪。建武元年。帝論賞戰功。以正成爲攝津・河內守護。名和長年爲因幡・伯耆守護。正成任檢非違使左衞門尉。特與長年竝直決斷所。聽斷訟獄。令天下休兵務農。武人領邑。安堵如故。帝以京師之復。爲足利氏之功也。歸闕之日。首超擢之。至是。又管四大國。尊氏猶缺望。陰有異心。帝以高時邑自奉。以泰家邑賜皇子護良。以貞直邑賜三位局。三位局。卽嬪藤原氏。有殊寵。內謁漸行。時諸皇子皆復故。而恒良爲藤原氏所生。又生成良・義良。意害護良。尊氏潛與合謀。遂構陷之。當是時。帝寖倦政。足利氏資望獨盛。新田氏亞之。正成以下充驅使而已。是歲。春。北條憲法作亂。據飯盛山。赤橋重時起伊豫。正成討憲法。土居・得能氏討重時。纔平之。而帝游宴自如。益徵珍異。鹽冶高貞獻千里馬。帝出觀之。以爲祥瑞也。藤原藤房諫曰。天馬毋用於平世。近日賞罰無信。工役繁興。文臣內訕。武臣外怨。而姦雄窺覦其間。天馬之出。焉知非

建武二年

延元元年

亂兆哉。帝變色入。藤房驟諫。弗聽。遂舍官遁去。帝驚。使追之。不及。二年。春。藤原公宗結北條氏餘黨。陰謀大逆。名和長年等。奉詔誅之。夏。北條時行等作亂關東。攻陷鎌倉。帝命尊氏往平之。尊氏遂據鎌倉反。帝震怒。冬。遂詔菊池武重等諸將。從新田義貞東伐尊氏。正成與名和長年居守京師。直義拒箱根之險。武重時爲肥後守。以其兵先登。仰攻卻敵。追北陣山腹。諸軍乃繼進。而別軍攻竹下。敗退。大友貞宗・鹽冶高貞叛降足利氏。諸軍崩潰。武重以四百騎扶義貞而西。赤松則村等竝起應尊氏。帝賜天馬於使者。召還義貞。天馬途斃。延元元年。正月。尊氏・直義。入犯京師。正成以兵五千守宇治。名和長年與源忠顯・結城親光。以二千守勢多。皆受制於新田氏。新田氏先失大渡・山崎之守。尊氏乃入京師。結城親光佯降。欲刺尊氏。不成而死。帝幸叡山。正成聞之。徑赴行在。名和長年欲一視宮闕而行。還入京師。賊軍塡塞。長年十七戰而至大內。則諸殿已爲賊兵所毀。長年下馬向闕。伏泣久之。終赴行在。信濃人敕使河原某在大渡。未知帝所之。謂其二子曰。吾亡朝之臣。何顏事逆臣哉。亦還京師。自殺于羅城門。

賊焚宮闕。進據園城寺。以逼叡山。山徒英憲・祐覺等。贊拒守之計。祐覺又受詔。以舟七百艘。泛湖。迎北畠氏兵入援。

北畠氏。姓源。出於具平親王。世爲名卿。及元弘時。有顯家焉。帝復位。以從三位參議。拜陸奧守。與父親房奉義良親王。出鎭東邊。結城宗廣世居陸奧。與其子親光。先歸官軍。於是受命副顯家。顯家年甫十七。固辭。乃詔曰。文武不可岐。貴戚掌軍。古之制也。顯家赴任。東邊無虞。尋任鎭守府將軍。及帝討足利尊氏。詔顯家會軍。顯家至鎌倉。則尊氏業已西矣。顯家幷程追之。東北兵爭附顯家。凡五萬人。至近江。攻六角氏賴觀音寺城。拔之。斬首五百級。遂至叡山。諸將因會議戰。或欲速襲之。正成等然之。卽夜顯家與諸將攻破園城寺。新田義貞遂復京師。而夜爲賊所返襲。敗還。尊氏復入。當是時。諸道賊軍。悉聚京師。凡數十萬人。而官軍不滿十萬。諸將分將之。復攻京師。兵各可二萬。正成將五百騎。軍于糺林(タヾスノモリ)。縱火于出雲路。尊氏令上杉憲顯・足利高經等。以東國騎兵五萬。來衝擊之。正成豫造栖數百。鈕而聯之。自蔽以射。賊卻。輒縱騎乘之。賊辟易逃走。顯家・

川越本・拙修本竝無皆字。

累累。正本作壘壘。

義貞。遂擊走尊氏。而日暮。義貞欲留陣京中。正成往說之曰。今日我軍克。而少所獲。以寡兵屯京中。鹵掠四散。盍懲前日之敗。使敵復振。後難爲力也。我且引還。養銳再擧。以驅敵於數百里外。是全勝之策也。義貞然之。乃皆退陣坂本。尊氏收諸軍。復入京師。正成素蓄一卒善泣者。旦日。敎其卒與僧數人。行物色原隰。賊兵問故。輒泣曰。昨日之戰。七將皆沒。將獲尸葬之。尊氏聞而大喜曰。彼戰勝而退。有以也。乃索義貞・正成首。獲稍肖者。梟之。以示於衆。其夜。正成遣卒數千。執炬北走。累累不絕。尊氏軍望見。謂官軍喪其將領而潰去也。急分其兵。四出要擊。在者不復設備。正成與諸將合兵夜發。昧爽。直薄尊氏軍。縱火鼓譟。尊氏軍大潰而走。委甲蔽野。官軍不甚追。賊前者顧後者。以爲追兵也。往往自殺。死亡大半。二月。尊氏・直義。走于湊川。官軍追擊。與直義戰于豐島。勝敗未決。正成後至。遶出敵後。直義不戰而走。會、土居通治・得能通言。以舟師來援。擊破賊先鋒大友貞宗兵。復擊走直義。尊氏終令赤松則村守播磨。而航海走鎭西。菊池武敏。武重弟也。時在肥後。聞少貳賴尙發兵迎尊氏也。將三千人追之。至水

舟坂。正本作舟阪。

木渡。賴尚已濟。餘衆待舟。武敏擊殲之。遂攻少貳貞經于內山。斬之。遂與尊氏戰于韛濱(タタラハマ)。有叛降者。武敏敗。歸菊池城。城尋陷。武敏逃匿山中。於是。九國悉附尊氏。尊氏之西也。正成欲窮追之。義貞遷延。及三月乃發。攻赤松則村于白旗城。城固不拔。義貞弟義助說之曰。楠氏據金剛山。北條氏擧天下兵攻之。不克。竭力一城。而顧失天下。君盍監焉。聞尊氏已幷九國。且東上。君宜分兵圍城。而急拔舟坂。以徇山陽。義貞乃令義助攻舟坂。舟坂賊兵。據險不下。初尊氏犯闕。山陽皆應之。獨兒島高德以孤軍攻福山城。不克。其兵連叛。乃逃三石山。及聞義助攻舟坂則喜。遣間使告曰。三石之南有間道。可以出舟坂之背。吾起兵于熊山。使賊分兵。公則一軍由間道來攻之。必拔舟坂。舟坂拔。則西國無不服者矣。義助大喜。與約期。先期一夜。高德與父範長上熊山。倉卒不及聚族人。兵僅二百。天明。舟坂賊。果分三千人。七道來攻。高德防戰重傷。終奮擊走賊兵。而義助潛軍出賊後。遂拔舟坂。遣一將據福山。赤松則村馳使。告尊氏曰。白旗城陷。則公雖有衆。莫所用之。尊氏乃大擧東上。水陸竝進。福山城陷。義助引兵退。

川越本標註云。據太平記等書。陣西川尻者。乃範長・高德。非賊兵也。此未知其所原。
往。川越本・拙修本竝作行。
奏。川越本作答。

菊池武重殿之。賊舟師上陸。陣西川尻。高德聞之。欲合於義助。踰山而東。創劇。範長託之僧寺。以八十餘人東走。會、義貞已釋白旗關。赤松氏兵三百騎見範長過。呼曰。敗卒盍釋甲降。範長笑曰。嚮尊氏百方招我。我輒毀其書投火。今曷降汝輩哉。潰其陣出。賊傳呼敗卒過。士兵羣起。範長悉亡其兵。所餘者六人。曰。悔我不擧族來。乃伏刃死。賊軍乘勝而進。義貞軍兵庫。飛書告急。朝廷震動。時北畠顯家已歸鎭。京師兵寡。帝命正成。往援義貞。正成奏曰。尊氏新擧九國而來。其鋒甚銳。我以疲兵格鬭。無他奇道。其敗必矣。爲今計者。陛下復幸叡山。召還義貞。縱賊入京師。而臣歸河內。絕其糧道。則賊兵日散。我兵日聚。於是。夾而攻之。可一戰而破也。義貞之計。蓋亦出此。顧慮人言耳。戰道非一。要歸於勝。願朝廷再計之。諸公卿皆然之。獨參議藤原清忠不可曰。賊雖衆盛。不過如前役。王師有天命。宜防之外也。帝從之。正成退。謂其子弟曰。事已至此。何必抗議。五月十六日。與弟正季・子正行等。辭闕而西。至櫻井驛。正行時年十一矣。正成遣歸之河內。誡之曰。汝雖幼已過十歲。猶能記吾言。今日之役。天下安危所決。意

吾不復見汝也。汝聞吾已戰死矣。則天下盡歸足利氏。可知也。愼勿計較禍福。嚮利忘義。以廢乃父之忠。苟使我之族隷而有一人存者。則率以守金剛山舊址。以身殉國。有死無他。汝所以報我。莫大於此。因以帝所嘗賜寶刀授之。訣別。正行請從共死。正成叱之起。正行揮涕而去。正成乃至兵庫。慰勉義貞。訣飲終夜。當是時。尊氏將水軍。直義將陸軍。陸軍稱五十萬。正成率手兵七百。陣于湊川以當之。義貞以三萬騎陣于和田崎。以扞水軍。水軍先鋒過而東。義貞拔軍循之。而尊氏全軍已上和田崎矣。正成顧謂正季曰。我腹背受敵。不可遁也。先破前者。而後接背者。如何。正季曰。然。於是。兄弟並突入陸軍。七離七遭。欲獲直義。直義馬傷而墜。我兵垂及。有一敵將。遮鬭而逸之。尊氏亦分兵來援。包我軍後。正成兄弟回馬當之。血戰十六合。盡亡其騎。所餘七十三騎。猶可以潰圍。而正成心不欲生。乃走入湊川北民舍。坐釋鎧。身被十一創。顧謂正季曰。死而何爲。曰。願七生人間。以殺國賊。正成欣然曰。是獲吾心。耦刺而死。正成年四十三。宗族十六人。從士五十餘人。悉死之。菊池武重在義貞軍。使弟武吉來視湊川

墜。正本作隤。

武吉。川越本。

拙修本竝作武朝。川越本標註云。按武朝之死。係太平記正文。然武朝是武政之子。武光之孫。於武時為曾孫。其病死乃見後。非武重之弟也。日本史據菊池系圖及武朝申狀。改作武吉。武吉是武時第七子。武重之弟。武光之兄。嬉。川越本・拙修本竝作嘻。

戰狀。會正成且死。不忍去。亦死之。義貞敗退。尊氏入京師。送正成首於河內。一家聚哭。正行起入室。其母尾而闚之。則執父所授刀。將自殺。母徑入。奪刀而泣曰。汝何惑焉。乃父之遣歸汝。豈教汝自殺也。汝啣遺命。歸來告我。而汝先忘之。惡能任王事。正行大悟。自是。以討國賊復父讐為志。常與兒童嬉戲。為馳逐狀。曰。追足利也。為斬首狀。曰。獲尊氏元也。楠氏族黨。多死湊川。而河內・紀伊之間。猶有義故存者。皆思戴正行。當是時。天子避賊於叡山。名和・菊池・土居・得能氏。皆從義貞扞禦。源忠顯戰沒。官軍遂出攻京師。路人指名和長年曰。正成・忠顯等既死。獨有此人。及戰大敗。長年退至大宮巷。自閉後門。與二百人力戰死。冬。尊氏佯降。請帝還闕。菊池武重等從之。皇子宗良走遠江。懷良走大和。義貞以詔奉皇太子恒良。及尊良親王之北國。土居通治・得能通言等從之。通言與族通縄殿。會大雪。至鹽津。迷失道。適値賊兵。將士凍飢。不能操兵。三百人皆植刀于地。伏之。自貫而死。通治與諸將守金崎城。城陷。力戰自殺。尊良薨。太子被虜。入京師。帝之還闕也。尊氏已擁立新帝之弟。是為北朝光明帝。請帝傳神器焉。

中將。拙修本作少將。川越本標註云。按中將舊誤作少將。今改之。

通卿。拙修本作通鄕。下同。

延元二年

延元三年

帝弗聽。尊氏囚帝于花山院。殺從行者僧祐覺等。拘執其餘。獨三條景繁得侍。景繁潛進計。逃幸大和。帝夜服婦人衣。由壞牆出。扶上馬。景繁荷神器從。夜方黑。逢赤電照路。比曉。達穴生。遣景繁諭吉野僧宗信。宗信嘗助將軍護良者。於是。先衆來迎。正行聞而大喜。與從弟和田正朝等。馳赴之。護駕入吉野。河內・紀伊將士。相踵來衞。官軍復振。帝思正成死王事。追贈正三位・左近衞中將。敍正行正四位下。爲帶刀。遂襲父官。任檢非違使・左衞門尉。兼河內守。於是。建行宮于吉野。號令四方。先是。菊池武重從帝被拘。候守者懈。逃歸據菊池。帝因拜皇子懷良。爲征西將軍。赴菊池。大館氏明亦逃如伊豫。土居通治子通卿・得能通言子彈正。迎而起兵。北畠顯家弟顯信。亦起兵於伊勢。而顯家討國內叛者。據靈山(リヤウセン)。明年。秋。顯家欲入援行在。得結城宗廣等兵。奉義良親王。軍白河關。兵來屬者數萬人。進與尊氏子義詮。相拒利根川。齋藤實永亂流先渡。全軍繼之。水激於西岸。賊兵漂溺。敗走。顯家追北。攻義詮於鎌倉。走之。三年。春。與宗良親王合兵。偕赴京師。賊兵大起擁後。顯家囘戰于青野原。破之。聞尊氏遣高師泰來

安倍野又作阿部野。川越本作安部野。
少。川越本・拙修本並作不。
篠。正本作筱。
延元四年

迎。乃轉出伊勢。師泰尾擊。顯家囘戰于雲津川。破之。至南都。結城宗廣曰。避敵於行宮。不若擣賊於王城。顯家從之。逢賊兵逆擊。顯家敗走。乃使兩親王赴行宮。自收敗兵。軍安倍野。五月。高師直來襲。顯家與二十餘騎。衝圍而死。名和義高死之。宗廣走歸吉野。師直遂圍顯信於男山。顯信善拒。出擊少利。賊縱火登城。城兵擊走之。已而糧竭。潰圍走河內。帝初遣廷臣。將兵救顯信。又詔北國將士援之。義貞欲驟赴援。兒島高德從在軍中。說曰。前日之敗。以賊絕我糧道。今無若遣數千人據叡山。取糧北陸。而時出擾京師。是深根固蔕之策也。請貽書山徒焉。義貞從之。山徒背之。義貞遣義助赴之。望男山火。逡巡而去。尋義貞戰死。結城宗廣請及顯家餘威未盡。收東邊兵。帝令宗良親王先發。至遠江。待之。遂以顯信襲兄官職。與親房及宗廣。奉義良親王。海路赴任。遇颶於天龍洋。舟四散。親房抵常陸。宗廣至安濃津。顯信與義良親王抵篠島。宗廣病死。四年。三月。顯信奉親王歸吉野。先是。皇太子及成良親王。皆爲尊氏所鴆弑。乃立義良爲皇太子。八月。帝獲疾大漸。乃遺詔曰。朕憾不滅國賊平天下。雖埋骨於此。魂

既。川越本作已。

興國元年

陳。川越本作陣。

遣。川越本標註云。一作還。

興國四年

魄常望北闕。後人其體朕志。竭力討賊。不者。非吾子孫。非吾臣屬。按劍而崩。」帝既崩。羣臣氣沮。欲逃散。僧宗信力言止之。已而正行與正朝。率兵二千來衞、衆情大安。於是。相與俱奉太子。拜神器。即位。是爲後村上天皇。頒先帝遺詔於四方。」興國元年。春。土居通卿・得能彈正等。奏請得一將帥。會、新田義助戰敗。與兒島高德等。來詣吉野。因詔義助赴伊豫。無幾何。病死。高德等逃歸備前。五月。賊將細川賴春來攻河江。通卿・彈正、推金谷經氏爲將。舟師赴救。値賊海上。戰不利。轉攻取鞆城。據之。拒賊十餘日。聞賴春已陷河江。將攻世田。勸經氏救之。選死士三百。選凶日而發。與賊七千戰於千町原。盡亡其卒。與經氏等十七騎。潰圍走備後。自是。西南官軍不振。」是歲。北畠顯信居白河。親房居小田。賊將高師冬以大兵來攻。親房請援於結城親朝。親朝。宗廣子也。宗廣臨死遺言討賊。而親朝送款於尊氏。以故不輒援。數月。城將出降。親房走保關城。親房從子顯時。保大寶城。賊陳二城間。父子數出力戰。而城且陷。親房間使告顯信。使率親朝子弟來救。親朝擁之不遣。四年。春。親房手書切諭。親朝弗聽。遂降賊。親房走歸

正平二年

陳。川越本・拙修本竝作陣。

川越本標註云。一無帥字。川越本・拙修本竝擊上有南字。

吉野。自是。東北官軍不振。顯信留居陸奥。於是。四方勤王之師。所在耗散。而足利氏勢威擅天下。正行在金剛山。漸保聚義故。時出兵攝津。縱火挑賊。正平二年。秋。尊氏令細川顯氏將三千騎來攻。未至金剛山七里。止舍。聞正行且攻箭尾城也。欲竢其離山。而絶其後。正行諜知之。以七百人。行火聚落。爲向箭尾而還。伏于譽田林。敵望火起。輒趨山下。亂隊疾馳。過林。遇伏起。大駭敗走。退守天王寺。山名時氏以六千騎來援。軍于住吉。正行曰。先破時氏。則顯氏不戰而走。分兵二千爲五隊。進向住吉。時氏分兵當之。正行視北軍塵起曰。敵陳四處。而衆倍於我。我不可分兵也。乃復合五隊爲一。疾行擊時氏麾下。時氏被創。走歸顯氏。顯氏軍亂走。過渡部。溺者無數。京畿震駭。正行援溺卒五百人。與衣甲。禮而遣之。多願留仕者。正行遂進逼京師。尊氏大懼。乃發二十餘州兵。以高師直統諸將帥。以擊正行。正行與弟正時。率諸宗族。詣行宮。因中納言藤原隆資。上言曰。先臣正成。嘗以微力挫强賊。以安先帝宸憂。及天下再亂。逆賊四襲。遂致命於湊川。臣時年十一。命歸河內。囑以收合餘燼。報復國讐。臣年已壯矣。而稟

效。川越本作致。

泣。川越本・拙修本竝作涙。

正平三年

承者三。正本作承者二。

性羸弱。常念。不及今力戰。以有待之身。罹無虞之疾。上爲不忠之臣。下爲不孝之子。而今賊渠帥大擧來犯。是眞臣效命之秋也。非臣獲彼首。則授臣首於彼。臣生死決於今日。切希得一拜天顏而行。隆資入奏。帝揭簾臨視將士。前正行。勞之曰。曩日兩捷。大殺賊勢。甚慰朕心。朕深嘉汝世忠。今賊悉銳而來。眞安危之決矣。雖然。兵之進退。貴於從宜。朕以汝爲股肱。汝其自愛。正行俯伏。垂泣而出。辭訣後醍醐帝廟。題族黨百四十三人姓名於廟壁。然後上途。帝使隆資援之。明年。正月。北軍至四條畷。分爲五隊。四隊在前。左右相向。而師直中軍遙居其後。兵凡八萬騎。正行使隆資綴賊前軍。而自將三千騎。直指其中軍。賊前隊馳而遮之。正行以先鋒擊破而過。賊隊又至。與我後軍戰。我後軍終敗走。正行不顧。以三百騎直前。賊將細川清氏・仁木頼章等。更進遮鬪。正行盡破之。乃聚其騎。馬皆重傷。乃舍馬。踞隴而餉。賊衆環視。不敢迫。開其走路。皆合於中軍。正行餉畢。起謂衆曰。必與師直決死。進衝其中堅。我兵殊死戰。無不一以當百。賊軍披靡。正行進逼師直。師直臣僞稱師直死。正行大喜。抛首于空。而手承者三。

勿。掘修本作弗。

正平四年

正平五年

正平六年

軍士有告其實者。正行投頭于地。蹴且罵曰。唉。汝亦無雙國賊矣。已而曰。其勇可嘉也。自斷袖裹首。置隴上。復進索師直。望見其幟。欲追之。正朝曰。彼騎我步。不可及也。不若佯走誘之。乃與殘兵五十餘人。負楯以北。師直不肯追。令其裨將以數百騎尾擊之。正行大呼返戰。追走復逼師直。相去數步。而我兵自晨至晡。三十餘合。力索莫能起。正行注目於師直。勉衆前進。敵連射之。正行身被箭如蝟。乃呼曰。已矣。勿爲賊所獲。與正時相刺。北向而斃。年二十二。餘兵皆白刃駢斃。和田賢秀。正朝弟也。獨混敵卒。伺擊師直。楠氏卒湯淺者。降在賊軍。識見賢秀。從後斬之。賢秀瞋眼視湯淺。湯淺懼。後獲疾死。正朝欲還奏狀。有一賊。呼曰。忍獨亡乎。正朝笑而返之。賊輒走。如此者數。賊數騎至。正朝遂死。於是百四十三人悉死之。賊軍進犯行宮。帝逃入穴生。賊縱火索之。正行弟左衛門尉正儀。出兵於石川。與高師泰相持。師直則不敢深入。引兵而去。四年。畠山國清來代師泰。正儀益堅守。五年。足利直義與尊氏有隙。乃來降。朝議納爲大將。國清等附之。六年。詔正儀助直義。擊尊氏京師。走之。已而直義叛去。遂走關東。尊氏

正平七年

三帝。據修本作二帝。川越本標註云。作一非。

欲往擊之。而恐楠氏窺後也。則使子義詮佯降。請帝歸闕。帝知其情。亦佯許之。尊氏乃東。七年。正月。正儀與族和田正忠等。將兵七千。奉乘輿軍于男山。兒島高德時削髮。來在吉野。奉密詔。往促東北諸將。拜宗良親王爲征東將軍。使竝來援。北畠顯能。顯信弟也。爲伊勢守。擧兵數千。先來援。自鳥羽入。正儀・正忠將五千人。夜涉桂川。至大宮。黎明。賊將細川顯氏來迎。我兵鬪擊。斬其從子八郎。細川賴春繼至。巷戰。正儀接栖爲梯。升屋下射。賊兵卻。縱騎乘之。賴春馬驚而墜。正忠兵槍刺殺之。義詮遂走近江。帝使人取北朝三帝。置軍中。當是時。將軍宗良率新田氏族。擊尊氏於武藏。不利。義詮得兵三萬。返陣東山。顯能三退其陣。賊軍進攻男山。帝召正儀・正忠等拒戰。正忠年十六。入奏曰。建武以來。臣族類大半爲此賊所殺。今日之戰。公討國賊。私復家仇。不斬其一將。不復還謁。與正儀合兵三千。據荒坂。細川清氏・土岐康貞。以六千騎仰攻。康貞有驍名。先衆而進。正忠揮薙刀斬之。乃還謁。遂與正儀距更科。不利。左兵衞督藤原康長。夜襲敗賊營。而賊圍男山益密。正儀・正忠受詔還河內。聚兵夾攻。會正忠疾作。暴

正平八年

正平十年

正平十三年

既。川越本作已。

正平十四年

卒。正儀未發。賊急犯行在。帝擐甲上馬。潰圍南走。賊兵追之甚急。藤原隆資以下三百餘人死之。箭及御鎧。藤原康長力戰。得達吉野。委神鏡於路。名和長生收之而還。將軍宗良及新田・桃井氏自東北。土居・得能氏自西南。並入援。聞男山陷。皆還。是役也。賊將山名時氏有功而無賞。怒而來降。足利直冬亦降。請攻京師。詔令諸將助攻。十一月。正儀等擊賊將佐佐木秀綱于渡部。敗之。八年。六月。諸軍攻京師。正儀以弓手五百挑戰。時氏繼之。遂擊走義詮。時氏等以兵寡引還。十年。直冬・時氏復發兵擊尊氏。走之。正儀・時氏與義詮戰于播磨。糧盡引還。是歲。將軍宗良與仁科・足助諸族起兵。少應者。北畠顯信爲結城氏所攻。走歸吉野。遂西走依菊池武光。武光亦武重弟也。及武重死。嗣統其衆。屢討賊黨大友・少貳氏。十三年。武光討一色直氏于筑前。大克之。大友氏時・少貳賴尙等。皆降武光。時尊氏既死。義詮遣兵助氏時・賴尙。擊武光。武光方討畠山國久于日向。氏時據高崎。絕其歸途。武光不顧。進攻國久。走之。乃還。氏時不敢要擊。十四年。賴尙以兵六萬來攻。武光發八千人。奉將軍懷良。夾筑後河而陣。武光以

正平十五年

銳兵先涉。賴向卻。保大原。武光夜遣子武政等潛兵。因河水亂軍聲以襲之。獲賴尚二子。因大戰。懷良被創。北畠顯信等死之。武光身先士卒。馬傷冑裂。斬一敵將。奪其馬與冑。復進。竟大破之。西南官軍復振。賊將畠山國清。建議大舉滅楠氏。以奪官軍根本。正儀與和泉守和田正武詣行宮。奏曰。聞國清舉關東之甲。已至京師矣。而臣知其莫能爲也。兵道有三。曰天時・地利・人和。明歲。大將軍星在西。而彼自東來。違天時也。我所居。負山帶河。形勢深阻。毋論千窟之闉。爾後敵五來。皆敗。違地利也。國清借公營私。爲等儕所嫉。違人和也。三者皆違。雖有百萬。何能爲。請徙御金剛山。臣等拒石川。使別將出龍門。時出輕兵。出沒散合。使敵不知我所在。東兵慓悍。氣屈而退。退卽追之。必大克。帝從之。明年。春。正儀等修平岩・箭尾・龍泉三城。益樓堞。張形勢。而自居于赤坂。義詮・國清合兵三十萬入犯。軍于筒山。以逼楠氏。以一軍自龍門入。大納言藤原隆俊擊克之。賊更兵來攻。隆俊大敗走。帝遣將軍興良援之。興良叛。應義詮。燒行宮。據銀嵩(カネガタケ)。帝令前關白藤原師基討。走之。龍泉城將措疑兵而退。賊不敢迫。至五十餘日。乃

正平十五年

攻取之。遂攻陷平岩・箭尾。合軍圍赤坂。正儀欲退守金剛山。正武曰。子知鼠乎。見人則竄。世將笑曰。南人抗天下。而鼠鬪而已。何不一戰以挫賊鋒。然後退。爲未晩也。乃選三百人。約以暗號。夜出斫結城氏營。大戰。不克而入。令衆唱號坐作。有四敵卒雜焉。捕斬之。乃與正儀退入金剛山。賊軍引還。正儀・正武。出絕渡部橋。攻譽田城。國清復來攻。又退入山。會國清與仁木義長相惡。賊中大騷。我兵爭起。國清東歸。正儀攻水速城。拔之。官軍乘勝。連下諸城。義長來降。」帝北幸住吉。詔征東將軍宗良發兵入援。以岐蘇早雪不果。」十五年。征西將軍懷良與菊池武光。以兵三千。出宰府。少貳賴尙・大友氏時。與松浦黨謀。夾攻武光。武光縱反間。因襲松浦軍。敗之。賴尙等亦走。」去歲之役。賊將赤松光範有功。而佐佐木道譽譖之。奪其攝津守護。國人憤怨。正儀・正武伺知之。九月。以兵五百。出軍于天神林。佐佐木秀詮與弟氏詮。以千餘騎渡神崎橋。正儀等使人行呼曰。南軍自西來矣。秀詮聞之。回馬西嚮。徑田單列而行。正儀遣輕卒三百。夾射之。賊兵爭徑欲還。正儀・正武。薄擊走之。斬秀詮・氏詮。溺水者二百餘人。正儀援之。給

細川。正本作山名。川越本標註云。山名誤。

繞。川越本・拙修本竝作遶。

正平十九年

衣遺跡。細川清氏亦與道譽惡。遂來降。奏曰。義詮兵。西拒山名時氏。東拒仁木義長。臣請乘虛復京師。帝諮之正儀。正儀對曰。王師嘗攻京師。五得而五失。今苟欲得之。臣一人力可辨。何假清氏爲。獨病復失之耳。行宮君臣。皆戀故都。遂令正儀與清氏共攻京師。義詮不戰而走。未幾。義長敗。時氏退。而義詮軍振。欲犯行宮絕我軍後。我軍留京師二十六日而還。清氏戰死讚岐。四國悉叛。」

正儀・正武議曰。近日之勢。不可坐視。須一戰以振諸國官軍氣也。八月。以騎八百・士兵數千。軍神崎・株瀨二處。賊分兵阻水拒之。正儀等張篝火其營。而潛兵涉三國渡。繞出賊背。賊謂北軍來援也。天明。顧視其旗皆菊水。菊水者。楠氏號也。而大驚潰去。正儀・正武。進拔赤松氏一城。火兵庫而還。」

於是。北畠顯能與仁木義長。竝略伊勢。菊池武光略筑紫。義詮遣足利氏經。充鎭西探題。武光使弟武義・族重經將兵逆擊之。武義傷走。重經更進。斬少貳賴資。武光繼至。軍于豐後府。擊走氏經。十九年。大內弘世以周防・長門叛。降義詮。幷厚東氏邑。厚東怒。降於武光。與弘世戰豐後。走之。」

已而武光病卒。子武政襲肥後守。山名時氏・仁木義

正平二十三年
建德二年
文中二年
文中三年
天授四年
天授六年
弘和二年
元中九年
九年。拙修本
作二七年一。

長亦降義詮。官軍不振。二十三年。天皇崩。皇太子寛成卽位。是爲長慶天皇。天皇建德二年。賊將細川賴之。大擧入寇。和田正武率楠氏族。堅守諸城。賊軍引還。文中二年。細川氏春復入寇。大納言藤原隆俊死之。天皇讓位於皇太弟熙成。是爲後龜山天皇。天皇幼聰敏。人冀興復。而楠氏衰。國勢日削。義詮旣死。子義滿嗣。勢益張。我將士多叛降北朝。紀伊諸城陷。三年。關東賊兵。屢攻征東將軍宗良於信濃。宗良不能拒。走歸吉野。東北無復官軍。征西將軍懷良猶依菊池氏。保守一隅。先是。明主朱元璋使使來征西府。以其書辭無禮。卻不納。明主更貽書於北朝。北朝納之。以征西府梗其往來。遣今川貞世。充探題來攻。菊池武政與其子武朝。相繼拒戰。屢克之。已而懷良與武政・武朝。前後皆病卒。西南無復官軍。於是。義滿專圖楠氏。天授四年。遣山名氏清等入寇。楠氏族橋本正時・神宮正種等力拒。不克而退。六年。和田正武病卒。弘和二年。正儀亦卒。當是時。官軍所保。獨金剛山一城而已。元中九年。義滿使畠山義深將數千騎來攻金剛山。四絕糧道。城兵僅數十人。飢不能戰。賊急薄之。城兵逃走。匿十津川。自

孽。正本作蘗。禪位。川越本拙修本並作崩。川越本標註云。按義弘揚兵後十三年。爲應永十九年。是歲。後小松讓位於稱光。耳。後二十一年。後花園永亨五年市崩。此言後小松崩誤。拙修本稱光下有帝字。後。川越本・拙修本並作乂。于。川越本・拙修本並作於。

正成築城焉。凡六十年。乃爲賊兵所陷。義滿乃使大內義弘來講和議。約傳神器於北朝。則兩統更立。遂許之。是年。冬。遂備法駕。發吉野。御于大覺寺。以父子禮。授神器于後小松帝。後七年。義弘揚兵於和泉。擊足利氏。楠正秀以兵百餘屬之。正秀者。蓋正儀子也。菊池氏・北畠氏餘孽亦來屬焉。戰敗散歸。後十三年。後小松禪位。後龜山皇子當立。足利氏乃立後小松皇子。是爲稱光帝。楠氏及北畠氏並訴之。欲如約。足利氏弗聽。則並起兵。足利氏約帝後當傳於南朝皇子。乃止兵。及稱光崩。無嗣。足利氏復索北朝皇族立之。後龜山天皇之子曰小倉者。自京師走伊勢。依北畠氏起兵。戰敗講和。歸京師。削髮入萬壽寺。後十餘年。歲癸亥。足利氏內亂。楠二郎收南國兵。得三百人。奉萬壽寺金藏主者爲主。分兵爲二隊。二郎自將一隊。而越智某將一隊。夜入大內。取三神器。內侍鏡爲東門衞士所奪。寶劍遺于清水寺側。獨擁神璽。據叡山中堂。足利氏管領畠山基國。遣兵來攻。二郎與越智皆戰死。金藏主自殺。二郎者。不詳其所出也。二郎殘兵。以神璽奉後醍醐帝曾孫某。保吉野。歲戊寅。赤松氏遺臣二人詐來仕。弑

川越本光國下有私字。

從川越本・拙修本竝作隨。

皇曾孫。從者追殺一人。其一人遂奪璽而去。先是。後村上天皇子泰成生圓胤。爲圓滿院僧正。蓄髮更名義有。癸亥之難。楠二郎之弟某。奉義有起兵。據八幡。迎擊畠山氏兵。大破之。細川氏來攻。楠氏不利。退入紀伊。據湯淺城。歲丙寅。畠山氏將遊佐來攻。楠氏又擊破之。丁卯。冬。游佐復聚兵來攻。城終陷。義有遇害。楠某死之。楠氏之事。終於此。毋復所覩。名和・兒島・土居・得能氏。蓋先楠氏而亡。後楠氏而存者。菊池・北畠氏。菊池氏數世。至義宗者乃亡。北畠氏十餘世。至具敎者乃亡。此二氏者。自楠氏衰。皆降足利氏。或曰。楠正儀亦降足利氏。蓋有深謀焉。史乘散佚。不可考信。要之。正成宗族。與後醍醐皇統相爲終始。楠氏亡而後二百餘年。權中納言源光國。立石于湊川。題曰。嗚呼忠臣楠氏之墓。

外史氏曰。余數往來攝播間。訪所謂櫻井驛者。得之山崎路。一小村耳。過者或不省其爲驛址。蓋經足利・織・豐數氏。世故變移。道里驛程。從輒改耳。余於是低回不能去。顧望金剛山巖立雲際。想見公擧義之秋。及其子孫據以扞護王室。也。觀公詣行在。對天子。曰。臣而未死。賊不患不滅。夫以一兵衛尉。而居然以天

偏。諸本作編。
因。正本作自。

下之重自任。豈非感激値遇。以身許國哉。故能以赤手障江河。回天日於既墜。何其壯也。公聚北條氏精鋭於一城之下。而使新田・足利之屬擣其空虛。以殪其渠魁。帝之復辟。疇爵任職。宜以公爲首。而纔能與結城・名和輩比肩。其失於擧措。足以知中興之無成矣。及足利氏叛。朝廷方倚新田氏爲重。公特充偏裨。供其驅使。亦以其門地有不若焉爾。然京師大捷。殆致掃殄者。非因公之策耶。嚮使帝以其所任新田氏者。以任於公乎。曷至使犬羊狐鼠之賊蹂踐吾朝廷哉。然觀其臨死戒子。又曰吾死。天下悉歸足利氏。夫知天下之不可爲。而猶留其子孫。以衞天子。其設心。雖古大臣。何以遠過。故子孫能守其遺訓。護正統天子於彈丸黑子之地。以防四海寇賊者。及三朝五十餘年之久。擧一門之肝腦。而竭諸國家之難。至其澌盡灰滅。而後足利氏始得大成其志於天下。蓋朝廷不能大任楠氏。而楠氏所以自任。莫以加焉。世之論中興諸將。倘視其資望大小。而不深揆其實。亦與當時之見等耳。不有楠氏。雖有三器。將安託焉。以繫四方望哉。笠置夢兆。於是益驗。而南風不競。俱傷共亡。終古莫以恤其勞。悲夫。抑

正閏雖殊。卒歸於一。能煕鴻號於無窮。使公有知。亦可以瞑矣。而其大節巍然。與山河並存。足以維持世道人心於萬古之下。比之姦雄迭起。僅傳數百年者。其得失果何如哉。

日本外史 卷之五 終

日本外史 卷之六

新田氏正記

新田氏

外史氏曰。新田・足利二氏。皆出於八幡公。其門閥固不相下也。而新田氏爲嫡宗。舊志皆以足利氏承源氏之統。號曰將軍者。以成敗之跡軒輊之耳。然二家聲威有優劣者。有由來矣。蓋二家之所同祖者義國。義國以八幡公之子。而謫於上野。所謂新田郡。其所食也。二子義重・義康。義康依其外家田原氏。居足利郡。終得分食其半。而義重繼有新田。又襲義國官爵。則義重之爲嫡宗明矣。然及源賴朝起。義重與之有隙。以大炊助終其身。子孫不過曰上野一武族。而義康遭遇事變。頓進官爵。又與源義朝同娶於熱田。故子孫受賴朝親暱。又世結婚於北條氏。互相倚賴。著于鎌倉。後醍醐帝之末起事。蓋稔聞足利氏之爲強

志。川越本作史。

跡。川越本・拙修本並作迹。下同。

于。川越本作於。

宗也。是以及聞其倒戈。遽許寵爵。其褻玩朝廷。覬覦非望。帝有以啟之。而新田氏之功勞遠出其上者。則待二家交訟之口。然後知之。及尊氏叛逆。乃命義貞宗族以防之。而其勢既成。不可復遏。可勝歎哉。世或謂。義貞族望不及尊氏。故不能獨立。而倚朝廷以爲重。余以爲不然。朝廷倚新田氏。非新田氏倚朝廷也。新田氏將帥材武。部屬精勁。非足利氏所企及。而數奇敗衂。終至消亡者。無他故也。天下厭苦朝政。而謳歌武治。故利尊氏之營私。而不便義貞之奉公。不得已而從之。勉强而赴戰。雜以衣纓之偏裨。畿甸之召募。掣肘牽累。動不如意。爲之將帥者。豈不難哉。嚮使義貞亦出足利氏所爲。則介冑之族。將雲合霧集而歸之。而足利氏焉能加之。天下之事。皆可圖也。何至困踣如此哉。是其禍福利害。雖三尺童子。亦能知之。義貞寧有不知。而終不改其節者。豈非以己任王家倚賴。不忍倍畔也耶。否則源氏之統。其歸新田氏久矣。是寧可以成敗論也。且夫將門之有統。非必如帝室也。況足利氏之所謂將軍者。始於其第三世。如其父·其祖。皆非受命於正統之朝也。受命於正統之朝。而爲將軍者。乃護良·成良

偏。川越本·拙修本並作編。
禍。正本作禍。

付見焉。川越本作附見焉云。拙修本作付焉云。

大。正本作太。

治承

二親王。而非必有其實。至於中興總戎之寄。固屬義貞云。余之列敍兩家也。以此。然新田氏起義。由於護良親王。而足利氏謀逆。亦以此爲首。故付見焉。

新田氏出於源義家。義家第三子曰義國。敍從五位下。任式部大輔。嘗入朝。途遇右大臣藤原實能。實能從者叱辟之。墮馬。義國隸士怒。焚實能宅。義國坐謫上野。生二子義重・義康。義重食新田郡。義康食足利郡。治承中。平氏失政。源氏競起。義重集兵。據寺尾城。源賴朝起於鎌倉。招之不答。及賴朝定關東。與義康子義兼等。竝往歸焉。賴朝欲娶義重女爲妾。又不肯。遂與有隙。及奏請諸源官爵。義重纔得襲父爵。任大炊助。有七子。其第二義包爲嗣。義包生義房。義房生政氏。政氏生基氏。基氏生朝氏。凡六世。皆襲邑新田。遂以爲氏。旗用白。旗號中黑。脇屋・里見・大館・堀口・鳥山・羽川・山名・桃井・一井・金谷・細谷・江田・大井田・德川・世良田諸族。皆新田氏自出。分處上野・越後。而皆役屬於北條氏。北條高時之遷後醍醐天皇於隱岐也。楠氏起兵于金剛山。高時遣關東將士攻之。朝氏有子。曰義貞。亦在遣中焉。已而城固不拔。東兵多逃亡。義貞召其家宰舟田義昌。

購。正本作贖。

元弘二年

竟。川越本作遂。

語之曰。源平相制。竝護王家。自古之爲然。吾雖無似。忝列源氏冑裔。特以時勢。爲北條氏所驅使。遂敵官軍。豈其本心也。吾視高時近狀。亡滅非遠。吾欲歸我國擧義兵。上以除宸憂。下以興家聲。而非有所受命不可。安得大塔宮令旨。則吾事成矣。大塔宮者。帝第三子護良也。護良初疾北條氏專權。與帝密謀討滅之。敍二品。任兵部卿。充山門座主。號尊雲。居大塔。世因稱大塔宮。及謀泄。東兵來執帝。護良先謀知之。敎帝逃笠置山。而自與弟宗良將兵。邀擊破賊。已而兵潰。與宗良分路走。匿南都般若寺。笠置旣陷。宗良就擒。賊遣兵圍寺。護良潛經函中而免。遂與從士九人。爲道士裝。負笈南走。至十津川。依土豪戶野兵衞。蓄髮娶兵衞族女。賊聞之。購其頭千金。護良逃入吉野山。明年。五月。起兵吉野。據寺爲城。又遣從士赤松則祐。諭其父則村。起兵播磨。已而賊將二階堂貞藤等。大兵來攻。護良親戰不支。城遂陷。從士村上義光僞稱護良死。護良竟匿高野山谷間。指使山寇以助楠氏。又奪賊糧餉。義貞頗知其蹤跡。而未詳所在也。故謀於義昌。義昌乃使三十人爲山寇狀。而自爲亡卒。鬪于山下。山上寇見之。下

河。川越本作川。

元弘三年 三年。拙修本作二年。川越本標註云。按元弘三年舊誤作元亨二年。今改之。

援。義昌生得之。縱其一人。通意於護良。護良素知新田氏名族。大喜。卽爲令與之。權用詔辭。義貞感喜出意外。翌日。稱病東歸。與子義顯・弟脇屋義助等。謀討高時。高時未之覺也。以金剛山久不拔。官軍竝起。益調發兵食。新田素多豪戶。因課六十萬錢。限以五日。縱吏卒催迫。義貞曰。奴輩亡狀。敢蹈藉我地。遣兵捕其吏。梟首里門。高時聞而大怒。下令擊新田氏。新田氏會議。或曰。距利根河。或曰。赴越後。依其宗族。義助進而言曰。二者皆非計也。坐待強敵。情見形屈。則我兵內潰。一敗塗地。使人曰新田氏戕使者而誅死。死一也。寧死於王事。今雖匹馬單兵。出徇於國中。衆附則進攻鎌倉。不則戰死。孰與坐取誅殺乎。衆以爲然。乃起兵。大館宗氏・堀口貞滿・岩松經家・里見義氏・江田行義等百五十騎。推義貞爲將。竪旗于邑生品祠前。以擧義焉。實元弘三年五月八日也。義貞拜讀詔書畢。進陣于笠懸野。比日暮。利根河側塵起。有兵至。可二千騎。衆謂敵來矣。漸近則越後宗族來援也。義貞驚喜曰。諸君來何速。何以知吾擧義。大井田經隆伏鞍而對曰。今旦。羽黑僧賢來。徇國中。是以馳至。在遠境者。明日當至。僧賢。經

川越本・拙修本並無入字。

朝。拙修本作旦。

隆弟。善走者也。明日。越後全兵及甲斐・信濃諸源。以五千騎至。乃合兵進入武藏。近國將士。不期而會者。一日二萬人。軍于入間河北。高時聞義貞起事。不以爲意也。發兵十一萬。以族貞國・貞將將之。前後來擊。貞國抵河南。望見新田氏軍甚盛。乃不敢進。而義貞已亂流而至。大戰于武藏野。兩軍皆東國驍兵。素習騎戰。地亦平曠。射戰罷。即相馳突。凡三十餘合。乃交退。旦日。又戰于久米河。每戰。鎌倉兵死傷輒倍。高時使弟泰家以生兵數萬來援。夜抵其軍。義貞不察。使晨又戰。不利而退。泰家益輕新田氏曰。敵中必有斬致義貞者。皆釋甲飲酒。相摸人三浦義勝。心素嚮義貞。率兵六千來屬之。義貞禮而詢計焉。義勝曰。方今。天下分崩。勝敗互變。而天命所歸。終有在焉。公幸并僕兵。可以一戰。義貞曰。以疲兵當新勝之衆。若何。曰。戰勝而將驕卒懈者敗。泰家之謂也。敗兆已備。不足畏耳。詰朝之事。僕請爲公先焉。旦日。卷旗徐進。敵相指語曰。嚮聞三浦氏應徵而至。是也。俄而義貞等翼而進。三面掩擊。泰家軍大敗。貞將一軍。與小山・千葉氏戰于鶴水。亦大敗。皆走入鎌倉。八州豪傑響應。爭歸義貞。義貞進至關戶。兵

拜。拙修本作岸。

刀。正本作力誤。

諫。拙修本作說。

甚易。拙修本作易甚。

建武元年

凡十二萬騎。分爲三軍。三道攻鎌倉。大館宗氏・江田行義。自極樂寺。堀口貞滿・大島守之。自兒囊坂。義貞・義助自率諸將。自假粧坂。縱火五十餘所而進。鎌倉震駭。而北條氏見兵猶十餘萬。分距三道。義貞・貞滿進入山內。而宗氏戰死。其兵皆卻。義貞以選兵二萬。乘夜赴之。則敵大兵據海岸。樹柵。兵艦列其南。以備傍射。義貞下馬。免冑向海。拜曰。天子爲逆臣所遷。越在西海。臣義貞不忍坐視。提兵討賊。伏願海神眷臣忠義。退潮以開道。因釋所佩金裝刀。投之海中。比曉。潮大退。兵艦皆漂去。義貞大喜。麾衆而進。諸軍從之。直入府中。乘風縱火。烟燄漲天。義貞縱兵鏖戰。高時擧族遂伏誅。自擧兵至此。蓋十五日矣。義貞因居鎌倉。誅餘黨。撫新附。威振關東。先是。天子在伯耆。聞京師平。將還闕。或諫曰。雖京師平。金剛山攻兵。猶滿畿內。且諺曰。八州敵海內。鎌倉敵八州。承久之役。誅伊賀光季甚易。而與東兵鬭。乃取敗衂。今天下十得一二耳。宜暫居此。以視東國之變。諸公卿皆然之。帝不聽而發。至兵庫。得義貞捷書。上下大喜。詔以義貞爲左馬助。義助爲兵庫助。賜使者爵。建武元年。擧族入朝。義貞敍從四位上。任左

兵衞督。兼播磨守。領上野守護。義助任兵部少輔。充武者所頭人。領駿河守護。
義顯領越後守護。並宿衞京師。足利尊氏者。義兼遠孫也。地望素著。佐攻京師。
首豪寵爵。官祿皆遠出新田氏之上。遂陰蓄異圖。而忌義貞及皇子護良。初帝
之歸闕。護良居志貴山。近畿兵爭歸之。將率以入朝。而不果。帝使參議藤原清
忠就言曰。天下既定。汝將何爲。盍削髮復舊。護良對曰。高時雖伏誅。餘黨未殲。
宜嚴武備以絶覬覦。且陛下之德。微臣之謀。以致有今日。而足利尊氏攘爲己
功。彼觀其志。有不可測者。不及其力微而除之。復生一高時也。臣聞。佛有二道。
曰攝受。曰折伏。願陛下任臣以戎事。臣將爲陛下折伏焉。帝不懌。勉從之。拜爲
征夷大將軍。而不許誅尊氏。護良具騶從入朝。赤松則村爲先驅焉。尊氏深嫉
之。乃結於帝寵姬藤原氏。陰謀排陷焉。而護良不察。輒欲除尊氏。多蓄死士。密
徴兵。尊氏得其檄。上變。告大將軍反。欲廢帝立其子興良爲帝。藤原氏自傍贊
之。帝怒。十月。伏甲召護良執之。囚于宮中。護良憤怨因所識宮人上書曰。臣以
罪纍。敢訴冤枉。唯陛下憫察之。臣夙憤武臣專恣。釋法服。被戎衣。寧受世譏。而

績。拙修本作積誤。

建武二年

頭。川越本・拙修本竝作頸。齧。作嚙。川越本標註云。遂據上一無尊氏二字。

爲君父忘軀。在廷臣子。莫敢效力。而臣獨張空拳。以抗强敵。賊之耳目。集於臣身。購臣以萬戶。臣晝伏夜行。匿山谷。踐霜雪。殆死而復生者數。焦思運籌。遂得底誅夷之績。而不圖獲罪於此。仰將訴天。日月弗照。不孝之子。俯將哭地。山川弗載。無禮之臣。父子義絕。乾坤共棄。臣不敢復有望於世也。儻宥死刑。削籍歸佛。臣終身毋悔。抑申生死而晉國亂。扶蘇刑而秦世傾。聖明盍延古以鑒今焉。涕隕心惛。不終所欲言。書入。莫敢奏達者。諸從護良終始者。皆被誅。赤松則村亦褫其守護職。十一月。敕附護良於足利直義。徙之鎌倉。穿窖于二階堂谷。幽之。縱一宮人侍焉。二年。七月。北條時行作亂。襲鎌倉。直義敗走。臨走。召淵邊義博曰。時行不足患。可患者兵部卿。宜乘此時除之。義博往窺窖中。護良方焚燭誦經。顧而蹶起曰。汝欲殺我耶。前奪其刀。義博斫其膝。踣之。跨胸刺吭。護良縮頭齧其鋒。鋒折。拔貳刀刺心二。乃絕。年二十八。義博欲以首示直義。見其不瞑而含鋒。棄去。所侍宮人收葬之。將歸奏狀。而帝已命尊氏東伐時行。尊氏遂據鎌倉。自稱將軍。奪新田氏邑在關東者。以分予將士。抗疏罪狀義貞。義貞乃上

兵。川越本・捌修本竝作強。

書曰。嚮者。當天下大亂。乘輿播遷。楠正成等豪傑竝起。相共勤王。而足利尊氏。首鼠兩端。觀望勝敗。自非賊軍失利。蓋不肯降也。功微賞多。遂冀非望。害臣之忠義。欲詭言陷之。臣以五月八日。起兵上野。彼以其七日。佐攻六波羅。而曰臣聞京師復。乃肯起兵。以欺罔天聽。其罪一也。臣以五月廿二日。率諸軍。誅高時。而彼之兒子。率從士百餘人。以六月三日。入鎌倉。而曰臣賴其兒子以成功。其罪二也。彼在輦下。擅誅親王之卒。其罪三也。征夷之任在兵部卿親王。而彼輒掠其號。其罪四也。矯稱管領。務張威福。其罪五也。中興之業。雖因天運。抑兵部卿之謀策居多。而彼百方讒構。遂抵流謫。其罪六也。陛下心期兵部卿之自艾。而彼修私仇。辱之牢狴。其罪七矣。直義乘亂。遂傳刃於兵部卿。大逆無道。其罪八矣。此八罪者。天地所不容。措而不論。百敗將隨而至。後噬臍無及。願陛下照鑒之。速下明詔。以誅伐尊氏兄弟。廷議疑未決。會護良侍婢至奏狀。而尊氏反迹。遂暴於天下。十一月。乃下詔討尊氏。徵兵六萬。陛授節刀於義貞。以總諸將。奉皇子尊良。自海道進。忠房親王以一軍。自山道進。義貞常掄精兵七千。爲中

堅。而栗生顯友・篠塚伊賀・畑時能・亘忠景・由良具滋・長濱顯寛等十六騎。最精悍。善彀撃。同其徽號。進退與俱。義貞至於矢矧河。河東皆足利氏兵。義貞召顯寛視津。還報曰、津有三處。然前岸峻絕、敵攢鏃守之。不若誘敵使渡。而蹙之水也。義貞從之。賊分兵左右渡。戰且卻。終縱萬騎。自中渡。犯義貞。義貞乃以中堅迫擊破之。賊退。陣鷲坂。又進擊破之。足利直義以二萬騎來援。盛兵手越河。義貞望之曰。敗卒在後。必先走。餘衆不能支也。戰而逮夜、夜遣彍騎。循間道。薄射其後隊。後隊擾走。諸營遂大潰。走返鎌倉。尊氏大窘。欲削髮出降。未果也。義貞引降附數萬。至伊豆府。遲山道軍者數日。賊軍復振。凡數十萬人。直義出距箱根。十二月十二日。義貞令義助奉皇子向竹下。而自攻箱根。上高覽視將士。將士皆奮戰。直義兵沮靡。殆不能支。而尊氏以十餘萬出竹下。竹下官軍七千人。其隸皇子者。先進先走。義助以手兵代之。格鬬交退。其子義治。年甫十三。與三騎陷賊中。撤號被髮。與賊偕退。義助還營。不見義治。復進索之。直冒賊軍。軍潰走。義治知父來救也。佯呼賊兵。盍返戰。二賊從之。比及我軍。義治目從騎。斬其賊。

精。川越本・拙修本竝作驍。

迫。拙修本作自。

上高。川越本作登高。

三騎。川越本・拙修本竝作兩騎。川越本標註云。按太平記諸書。義治與三騎陷賊中。非兩騎也。蓋涉下文二賊而誤。

返。川越本作反。

谷。拙修本作治。

延元元年

歸獻義助。義助大喜。乃退息。遣鹽谷高貞等更進。高貞等叛。降賊。亂射官軍。義助夜退。欲合於義貞。義貞方克直義。竢明旦進。舟田義昌在前軍。聞直義陣中傳呼將軍捷也。乃巡視我諸營。帷幕儼在。而無復一人。走告之義貞。義貞默然。曰。是或降或逃也。吾少退。扼其逃者復戰。乃下山而西。兵僅五百人。聞尊氏兵數十萬充牣伊豆府。粟生顯友・篠塚伊賀。據鞍顧衆曰。一騎當千。諸君之謂矣。乃先衆而前。賊爭薄義貞。伊賀蹴而仆之。立斬九人。餘賊不敢薄。義貞行收散兵。得二千人。至天龍河。造浮橋。濟軍。軍悉濟。義貞乃與義昌濟。有叛者。潛絕其紅。僕牽馬前。輒陷。義昌曰。誰援之者。顯友重鎧沒水。兩手提人馬。達前岸。時橋陷丈餘。義貞・義昌相挈而跳。既濟。或議撤橋沮追兵。義貞曰。我且爲之。彼寧不能爲哉。存橋而去。屯矢矧驛。兵多道亡。宇都宮公綱。勸其退阻洲股。義貞從之。朝廷亦以近畿皆叛。四窺京師。急召還義貞。義貞乃還京師。部署諸將。自以萬人守大渡。義助與權中納言藤原公泰・僧文觀等。以七千人守山崎。江田行義以五千備應援。延元元年。正月。行義擊丹後賊兵于峯堂。走之。而尊氏已將數

槍。正本作鎗。下同。

十萬抵大渡。義貞豫撤橋板。截桁不殊。樹柵水中。令兵呼于岸曰。丹後之兵。我已殲之矣。公盍亦來決死。賊兵怒。造筏以渡。遇柵而止。我軍亂射。賊紛擾。筏壞而溺者數百人。又令呼于橋曰。舟筏毋益。請由此來。賊千餘人爭進。桁斷。皆溺。尊氏遂休戰不進、已而賊兵二萬來攻山崎。公泰・文觀隸士爭降賊。賊即入。義貞聞山崎軍破。賊兵指闕。則馳援義助。將與倶奉帝於叡山。賊將細川定禪。將兵六萬尾之。義顯以三千騎不告而返。射戰久之。度義貞已至闕。則大呼衝敵。大友氏泰・宇都宮公綱。新降在賊中。識義顯。欲必獲之。義顯奮戰八合。被大創數十。流血淋漓。還至紫宸殿前。帝親臨勞之。遂與義貞・義助倶扈乘輿。赴叡山。細川定禪來據園城寺。相持未戰。會、陸奥守源顯家入援。新田氏族在東國者。相率從之。大館氏明。宗氏子也。從至近江。攻拔一城。遂來會於義貞。顯家欲休馬而後戰。氏明曰。我馬遠來。休則足重。不可輒用。不若今夜直襲園城寺。出其不意。義貞然之。即夜出兵唐崎。黎明與諸將將騎六萬。圍園城寺。賊自門中叢槍拒之。亘忠景奪其十六槍。畑時能擧足蹋門扇。倒之。我軍入而縱火。走定禪。

阻。川越本・拙修本竝作汎。

復。川越本作又。

將。拙修本作軍。

斬首七千餘級。顯家乃退。義貞亦欲收兵。舟田經政扣馬。說曰。兵利在乘勢。賊兵一敗。魄褫氣阻。我因躡之。乘勝連進。可以終獲其渠魁也。義貞曰。然。卽率三萬騎追之。遇險逼擊。遇夷遙射。賊不得返戰。伏尸狼藉。餘衆走歸京師。令於尊氏軍。義貞進上華頂山。望尊氏軍。尊氏軍充塞京師。不知其幾千萬也。義貞計。以寡當衆。不可徒戰而勝。乃令我兵略相識面者。每五十爲伍。卷旗撤號。爲敗卒狀。混入彼軍。待戰而起。部二千騎遣之。已而兩軍接戰。六十餘合。我軍每勝。以至日暮。所遣二千騎。在賊軍中。揚旗竝起。賊軍大驚擾亂。自相擊刺。遂大潰奔。我軍乘勝追之。短兵急接。尊氏迫蹙。欲自刃者三。義貞自桂河還陣京師。其兵四散鹵掠。在者亦疲。賊軍返襲。不支而退。舟田義昌等戰死之。會、山道兵失戰期者還至。諸將復議戰。夜下山陣。旦日。楠正成・源顯家。分路進戰。尊氏親與顯家。戰于四條。義貞・義助。建旗五十旒。橫擊之。馳出其背。賊軍呼曰。中黑至矣。輒崩駭。義貞獨變服入賊中。索尊氏。不獲。分兵追之。日暮乃退。還軍坂下。誘尊氏還京師。而間日襲擊之。尊氏大敗。走攝津。義貞率諸將追擊。又大敗之。尊氏

斑。正本作班。

狼狽航海。諸軍爭舟而溺者數千人。委棄鎧仗海濱。二月。乘輿還闕。義貞振旅而還。詔遷義貞左近衛中將。義助右衛門佐。時新附兵萬餘。纔用足利氏旗號重畫者。皆墨抹其中。爲中黑。淡濃可辨。京師傳以爲笑。已而足利氏保聚西土。勢復大振。赤松則村・石橋和義。及菅某等。竝起應之。三月。詔義貞。管領山陽・山陰十六國。西伐。會有疾。遣江田行義・大館氏明。將二千騎先發。遇赤松則村兵于書寫山下。擊走之。義貞疾愈。將五萬騎出。次鹿子河。幷降附萬人。進至斑鳩驛。且攻則村白旗城。城壁未成。則村請降。義貞喜。爲請於朝。比朝旨至。壁成。則村乃不降。義貞大怒曰。吾寧禽之而後前行。合軍圍之。城險不下。義助諫之。乃分二萬人附義助。進攻石橋和義。和義據三石。距舟坂。義助得兒島高德鄉導。乃留一軍于舟坂。而一軍銜枚縛馬舌。自間道出舟坂之背。賊顧而驚駭。義助夾擊。拔舟坂。遂攻三石城。遣江田行義攻菅氏菩提城。遣大井田經隆孫氏經。以二千人進。據福山城。城未修。而尊氏・直義。擧九國兵而來。城兵欲避之。氏經不肯。五月。直義將兵數萬圍之。氏經出擊。潰圍東走。合於義助。義助馳使告義

貞。義貞答曰。敵海陸竝進。卽扞陸者。則海者直犯闕矣。吾欲退屯兵庫。令扞海陸。於是。白旗・三石・菩提三城圍皆解。義貞先至鹿子河。河水方漲。衆以敵逼於後。請將帥先濟。義貞曰。敵來則背水決戰。吾殿而濟耳。乃令創病者先濟。明日水減。而義助・行義亦至。遂濟至兵庫。則其兵亡者過半。帝遣楠正成來援。義貞迎問曰。朝議如何。曰。吾欲召還公奉駕叡山。不聽也。義貞曰。驅敗卒當銳師。吾知其必敗耳。顧去歲敗於關東。今復未拔一城。何以復命。吾故欲決死一戰。正成曰。進退從宜。是謂良將。公且徐計之。且前殪高時。後攘尊氏。公武多矣。衆言何足恤哉。義貞色釋。且曰。尊氏兵艦。蔽海而至。而直義來自須磨。旌旗彌天。義貞令正成拒直義。令義助・氏明拒尊氏。而自居其後。相持未戰。我軍有一騎。挾弓立岸。呼曰。將軍西來。必載津妓。置酒高會。請進一物佐酒。注箭而竢。適有鶚攫魚而擧。乃馳而射之。斷其隻翼。墮敵舟中。兩軍讙呼。尊氏使入問其名。答曰。東人或識。請投刺焉。復發一箭。軼三百步。貫船舷。尊氏視其箭。彫於笴曰。相摸人本間資氏。敵中傳觀。資氏揚扇。呼曰。方今。戰國一矢可愛。願見返賜。賊中有

于。川越本作於。

答射者。箭不達岸。我軍齊笑。射者慚憤。以三百人上岸。義助擊殲之。賊先鋒七百艘。過而東。將自西宮上。新田氏軍三萬。欲先往拒之。循岸而馳。騎者如走。舟者如追。而兵庫無人矣。賊後隊六千艘。盡上兵庫。楠正成戰沒。乃與其陸軍合。以蹋義貞。義貞曰。吾覘西宮旗幟。支賊耳。自兵庫來者。乃其渠魁。吾所願擊。乃還背生田林而陣。迎戰。終不利走。義貞自殿。數返擊。馬殪而徒。上丘待救。敵環射之。義貞揮二刀。截十六箭。小山田高家望見還救。授其馬而留死。初高家從軍。刈民麥。法當斬。義貞使人視其營。則鎧馬鮮而無粒粟。義貞曰。吾罪也。士不可亡。法不可亂。乃爲償田主。而賜粟於高家。高家感愧。故死之。義貞因得脫。自丹波。以殘兵六千。歸京師。上下失色。天子復幸叡山。六月。尊氏入京師。使高師重等來攻。分陣三百餘所。義貞・義助。以諸將距東坂。使公卿・僧徒守西坂。賊乃先攻西坂。二卿戰死。僧徒力不支。告急於義貞。義貞與紀・清兩黨赴援。擠賊于谷。殺數千人。因陣于大嶽。賊又攻東坂。義助擊卻之。賊更欲攻西坂。以熊野兵五百爲前鋒。皆被黑甲。自雲母坂上。本間資氏・相馬忠重。在義貞側。瞰而笑曰。

戒。川越本・拙修本並作誡。
挾。川越本・拙修本並作夾。
擒。川越本作禽。

今日之事。不復煩諸君。下百餘步。相命各射一賊。貫甲穿冑。賊不敢前。二人顧我軍曰。戰且合矣。爲吾立的。吾將習射。我軍植畫月扇。二人相戒勿射月。乃發。兩箭挾月。乃解箙鼓弦。自名於敵曰。盍受吾箭試甲堅脆。賊懼。不戰而卻。會、山徒光澄叛。夜啟賊兵。紀・淸兩黨覺而鏖之。初我軍約。有急撞鐘相報。一日。有羣猿撞鐘。諸營皆警。賊兵以爲官軍下擊。乃大騷。官軍遂開諸門。一時並下。縱火賊營。擊大走之。生擒高師重。義貞附山僧。斬梟其首。賊兵四潰。既而又聚。官軍猶謂賊兵寡也。出攻之。尊氏挾光嚴帝。據東寺爲城。出兵京師。要擊官軍。官軍敗還。七月。藤原師基。以北兵三千入援。諸將議曰。前日之戰。取路京中。所以敗也。不若由內野磧二道赴之。已而有叛者。泄其議。尊氏乃以大兵邀擊焉。官軍復敗還。天子乃賜邑於叡山僧徒。以獎激之。令招南都。南都輒應之。畿內兵聞之。所在相聚。各請將帥。四塞糧道。賊窮困。至粥鎧馬。遂大出鹵掠。義貞於是議出戰。遣四國兵。列炬于阿彌陀峯。約諸將帥齊進。天子親臨勞軍。剪所御紅裳。分賜之。以爲笠識。義貞臨發自曰。勝敗天也。不可逆睹。今日之戰。所不送箭尊

氏營者。毋復生還矣。已而北白河失火。藤原隆資以爲戰合也。先期自八幡入。敗走。南都兵亦失期不至。義貞以二萬騎行破賊軍。終抵東寺。執弓注矢。呼尊氏語之曰。天下擾亂久矣。雖曰皇統之爭。抑由公與義貞而已。與其爲一身苦萬民。寧各以單騎決鬪。決雌雄。請送一箭。箭軼門樓。入尊氏帳中。尊氏不出。時諸公卿軍。及四國兵。皆爲賊所破。賊兵悉萃於義貞。義貞返擊。奮戰破之。至五條。賊復四合。義貞額中流矢。流血被面。乃令其騎皆西其馬首。欲決死。紅笠識者八百騎。來救之。擁義貞潰圍歸山門。於是諸將帥皆棄守走歸。八月。足利高經·佐佐木高氏等。絕我糧食。九月。遣兵擊高氏。敗歸。我軍多逃亡。尊氏佯乞降。請帝歸闕。密使人致款。帝信而聽之。尊氏又陰招諸將。諸將多應之。十月。左衛門督藤原實世。使人來告義貞營曰。尊氏納款。車駕赴其營。公知之乎。義貞時延見將士。得報不信。曰。是使者誤聽耳。美濃守堀口貞滿曰。今旦。氏明·行義。無故赴中堂。吾固怪之。請往詗焉。馳至行在。則乘輿方駕矣。貞滿揖進。攀其轅。泣曰。臣聞道路之說。未知信否。今乃信矣。不審義貞有何罪。而陛下乃回其聖眷。

族。川越本作黨。

以庇反賊耶。當元弘初。義貞奉辭伐罪。殪元兇於旬日。以除宸憂。雖古忠臣。恐不能過。自尊氏反以來。又擧族勤王。爲陛下數冒萬死。宗族死義者八千餘人。而賊勢滋熾。王師失利者。豈盡戰之罪哉。蓋天未眷聖德焉耳。今日西駕之轅。竟不可還乎。則召義貞以下族屬見在者五十餘人。賜死於御前。然後發。帝憮然。頃焉。義貞與義助・義顯。率三千人入列階下。色慍而禮恭。上前義貞兄弟。慰諭之曰。當尊氏反。卿爲其同宗。乃挺歸義。支傾扶廢。終始不渝。朕深嘉之。欲仗卿宗族。以鎭平四海。天運未會。兵疲勢蹙。是以權講和議。以待時焉耳。本宜謀及。而慮於漏泄。欲臨期相告。顧貞滿未之察也。然由其言。亦有所省。朕聞。越前地方多歸順者。又有前所遣將士。卿宜赴彼經略北陸。以圖恢復。以朕還京師。恐卿得賊名。今特以太子相附。卿視之猶朕。軍國之事。無小大。當由卿處分。朕已爲卿忍恥。卿亦爲朕努力。言畢垂涙。將士皆泣。莫能仰視。於是。遂令義貞奉皇太子赴越前。義貞即夜造日吉祠。納寶刀。禱曰。神鑒吾忠義。使吾行無恙。得發兵滅賊。即不得然。猶使子孫有再起者。明日。奉東宮及皇子尊良北行。擧族

門。正本作闕。

從之。獨大館氏明・江田行義。及宇都宮公綱・本間資氏等。從乘輿入京師。尊氏囚帝及從者。殺資氏。以報兵庫雲母坂之役。義貞以七千騎至鹽津。聞足利高經大兵塞途。轉由木芽嶺行。會大雪。士卒凍餒。燎弓箭。相抱取煖。土居・得能氏。遇賊兵自殺。千葉氏舉其衆叛。降於賊。義貞行三日。纔至敦賀。河島維頼・氣比氏治。迎入金崎。遣義顯・義助於越後。至杣山。杣山城主瓜生保厚待之。而高經詐傳詔旨討新田氏。檄至。保信之。閉門自守。其弟僧義鑑來謁曰。臣兄愚魯。輕信賊計。雖然。苟曉是非。終歸順耳。臣願得擁戴一公子。候時乃起。義助察其無他。遂以其子式部少輔義治託之。而引兵還金崎。兵道亡。有二百騎。會今莊淨慶聚兵塞道。淨慶父嘗屬我軍者。義助乃令由良光氏往說之。淨慶答曰。臣去就與父異。不得不沮。願得部下一名士以藉口。光氏歸報。義顯曰。諸君從我至此。情同父子。寧我代士。莫士代我。往更告之。弗聽則齊戰死耳。光氏往告焉。淨慶不決。光氏下馬。坐曰。將帥身係天下輕重。猶欲以身代吾輩。吾其可不致命。拔刀將自殺。淨慶感歎。遽止之曰。吾寧當罪耳。開道跪伏。義助・義顯。撫勞而過。

于。川越本作於。

琳。正本作淋。

其兵又亡。在者僅十六騎。而聞敵以三萬騎圍金崎。欲衝圍入城。衆難之。栗生顯友出策、夜使衆解衣帶。挂之樹爲旗幟狀。以張疑兵。武田與一傷右手。約木刀于腕。顯友亡副刀。斫木爲梃、乘曉薄敵。呼曰、杣山援兵至矣。敵駭顧。義貞因出擊走之。納義助・義顯。於是。相與奉東宮皇子於船。置酒奏樂。以慰藉之。尊氏又遣高師泰等。將兵六萬。海陸來攻。城負山臨海。城兵拒戰。日斃千餘人。十一月。城兵望見海上。有人泅者。望城而來。至則亘忠景也。結詔書于髻。進之。蓋天皇逃於吉野。建行宮。詔義貞攻京師也。義貞等大喜。時瓜生保屬賊軍。在城下。而其諸弟起杣山。以應義貞。保將拔還。思得同志者。宇都宮泰藤・天野政貞。與保隣營。一日有客。問二人曰。重畫中黑孰美。泰藤曰。中黑哉。三鱗廢而重畫興。代重畫者。非中黑乎。三鱗者。北條氏徽號也。政貞曰。然。保聞而竊喜。滚與二人款、因告其志。二人同之。時高師泰四設關。以符出入。保詐請以百五十人歸邑取蔌。吏給符如其言。保削符。改書三百人。與泰藤・政貞俱出關。入杣山。義鑑及三弟源琳・重・照。皆大喜。推義治爲將。舉旗招兵。兵聚千餘。扼守北道。師泰聞之。

傍。川越本作旁。

延元二年

遣六千騎來擊。保悉焚聚落。故遣湯尾一驛以誘敵。敵至。宿驛中。保與泰藤遣輕兵。夜襲敗之。聞足利高經引兵歸國府。又要擊破之。傍近望風。爭附義治。義治有不豫色。義鑑曰。郎君可喜而憂。何也。曰。思金崎城守之苦焉爾。義鑑泣下。泰藤・政貞隔牆聞之曰。此子有心腸如此。吾曹曷可不出力。明年。正月。推里見時成爲將。以五千騎救金崎。師泰遣兵二萬逆戰。諸將敗走。時成爲賊所圍。保・義鑑挺身赴援。其三弟欲從之。義鑑叱曰。吾兄弟皆死。誰翼式部君者。三弟乃止。時成・保・義鑑皆死。餘衆走歸杣山。保有老母。酌酒獻義治曰。兒輩不力。乃亡里見公。然使兒輩盡還。則妾心云何。今二兒致命。足慰妾心耳。將士爲之奮激。然力不能再舉。金崎城中。日望杣山援。不至。已而糧竭。義貞・義助殺所愛馬。以食士卒。將士皆勸其出赴杣山。以計夾攻。義貞・義助從之。三月。以河島維頼爲鄕導。乘夜出城。潛入杣山城。城兵大喜。日議援金崎。而賊兵乘暇來聚。至十萬騎。杣山兵僅五百人。甲馬不備。逗撓二旬。金崎兵食馬。馬盡。無可食者。賊候知之。四面齊登。城兵力竭不能戰。外城既破。由良具滋・長濱顯寬。入見義顯曰。事

齊晴。川越本。拙修本竝作齊時。川越本標註云。據日本史義顯傳。齊時是氏治之兄。又氏治傳。以舟載太子。爲氏治子齊晴。

押。川越本。拙修本竝作柳。

已至此。脫東宮而留死。臣等請拒戰。君徐爲計。率五十人出。割死尸。相共食之。力拒前門。義顯謂皇子尊良曰。臣將種。不可不死。殿下與臣異。勿遽自殘。皇子笑曰。吾視卿死。豈可獨生。因問義顯自殺之方如何。義顯曰。視臣所爲。卽拔刀。自樹左脇。劃至其右。奉刀於皇子而伏。皇子取刀。血滑不可握。握以衣袖。自刃而死。藤原行房・里見時義・武田與一・氣比氏治等。皆殉死之。氣比齊晴有膂力。善泅。舟載太子。無楫櫓。施紐于舟。執之而游。游千餘步。至蕪木（カブラキ）浦。託土人。使奉之杣山。而歸死于金崎。具滋・顯寬謂事畢矣。開門冒陣。進薄師泰。賊認其疲羸。觀輒殺之。凡城兵八百。降者十二人而已。其餘皆死。栗生顯友・船田經政等四人。匿岩穴免焉。太子匿蕪木浦。浦人叛。告之賊。賊取太子。問義貞兄弟所在。太子紿曰。昨自殺矣。其兵火之。賊乃押送太子於尊氏。傳義顯首。而不問義貞。義貞在杣山。常欲一戰雪恥。以爲行宮聲援。間招聚義故。夏。大館氏明自京師逃伊豫。江田行義逃丹波。金谷經氏逃播磨。竝起兵。義貞次子德壽在上野。聞源顯家西上。聚兵應之。欲先發攻鎌倉。及顯家至。合兵攻拔之。於是。歸義貞者頗

延元三年

細川。正本作細河。

多。尊氏聞義貞未死也。冬。遣足利高經。擧北陸兵來擊。據越前府。出兵交戰。義貞遣畑時能。糾加賀兵。攻拔大聖寺城。遣義助及細谷秀國。入越前。築三砦。與高經相持。明年。二月。雪釋。義助欲益築城逼敵。率百餘騎。相地於鯖江。遇賊將細川孝基以五百騎奄至。義助擊走之。因擧火招援。義貞來援。高經又以數千騎來。夾水而陣。我兵亂流大戰。擊破高經。高經走。保足羽。賊望風解走者三十餘城。義貞因據國府。事聞京師。尊氏・直義怒曰。太子紿我至此。遂鴆殺之。當是時。官軍頗振。德壽從顯家至美濃。堀口貞滿亦附之。皆願與義貞合軍。以入京師。而顯家欲獨專其功。遂引兵回出南都。時叡山僧徒又多望義貞來。而義貞欲必拔足羽而後西。是時。顯家敗死和泉。其弟顯信。與德壽等據男山。帝手書諭義貞援男山。時大井田氏經等。發越後兵。擊破普門・富樫二氏。七月。進至越前。義貞幷其兵。將攻高經。而詔書適至。義貞感奮曰。自有源平氏。未聞得天子親書詔者也。因欲直赴援。用兒島高德策。自以兵三千備高經。以二萬附義助。至敦賀。聞男山陷。引還。於是。合兵專攻高經。高經誘平泉寺僧兵。修藤島以下

援。川越本•拙修本竝作救。

七寨守之。義貞在河合城。夢己爲龍臥地。高經駭走。衆以爲吉夢。或曰、龍爲陽物。方陰而見。是凶兆也。是月二日。義貞以諸軍攻足羽。至燈明寺前。分兵爲七隊。以當七寨。藤島兵擾動。我兵因疾攻。不能拔。義貞望見、遽以五十餘騎赴之。遇賊兵三百于田中。矢下如雨。我兵無楯。以身蔽義貞。中野宗昌勸義貞獨身遁逃。義貞曰。失士而獨免。非吾志也。鞭馬且進。馬被箭殪。義貞欲起。有白羽箭中其眉間。乃拔刀自刎而死。年三十八。賊未知其何人也。見宗昌等環尸自殺。又撿尸。得錦囊書。書辭曰。討賊之役。朕一煩卿。蓋帝手書。乃知其義貞也。時日暮。我軍無赴援者。已而見數騎還河合也。以爲義貞各自退還。義助還。至河合。求義貞。不在。久而知實。將士惶惑。有叛者。夜將火城者三。天明。撿其兵。則二千而已。義助乃走歸國府。使河島維頼保三峯。畑時能保湊城。瓜生照保杣山。照歸。遇藤原氏于淺津橋。藤原氏者。中納言行房妹。而義貞夫人也。初爲勾當内侍。延元初。義貞夜入直。見其彈箏。心慕焉。帝聞而憐之。召義貞賜酒。因賜内侍爲妻、伉儷甚篤。義貞之受詔北行。置之於近江。居二歲。迎致杣山。既至。聞義貞

往。川越本・拙修本竝作行。

師。拙修本作帥。

師治。川越本・拙修本竝作師重。川越本標註云。日本史時能・高經二傳。竝師重

在足羽。轉赴之。途遇照。照下馬。跪輿前曰。夫人安往。公已戰沒矣。夫人大慟殆絕。歸杣山。欲執喪于義貞舊居。以敵來逼。遂歸京師。是時。義貞首傳至京師。足利氏君臣相慶。終梟之。藤原氏聞之。即夜削髮。遂匿西山終身。藤原氏無子。義顯・義興・義宗。皆產於東國。義顯先義貞殉難。義興妾出。故義宗代義顯爲嗣。六歲爲左兵衛佐。兼武藏守。義興。即德壽。男山之陷。走歸吉野。帝壯其貌曰。汝興乃父家者。因賜名義興。授右兵衛佐。義貞沒而二旬。令義興與北條時行從皇子宗良赴東國。遇颶相失。漂至武藏。於是。與義宗皆匿東國。義助・義治在北國。七月。義助稍收敗軍。與畑時能・由良光氏・一井氏政等。各居諸城。而會河合。以兵六千攻足羽。時能先往。夜薄城挑戰。足利高經火城而走。是歲。帝崩。後村上天皇即位。十二月。詔義助代義貞統師。義助聞先帝臨崩特眷眷新田氏也。方思報效焉。而尊氏發七國兵來攻。諸城悉陷。義助走美濃。獨畑時能以殘兵二十七人據鷹巢城。城甚險固。賊不能拔。足利高經・高治。師合兵圍之。結三十七營。互進迭攻。時能幼喜角觝。材武絕人。姪僧快舜善戰。僕惡八郎。缺脣而有力。

作師治。師重者。叡山之役爲義貞所誅殺。見前。
畜。拙修本作蓄。

是。川越本・拙修本並作此。

興國元年

又畜一狗。名犬獅子。三人者夜出襲賊。每向一營。輒使狗先往。賊有備則吠。不則搖尾還報。三人者乃斫營入。大呼奮擊。賊輒委甲走。各潛賂時能曰。願勿襲我營。時能驍名震敵中。呼曰畑將軍。會、一井氏政來入城。共守。時能乃留氏政于城。而自以十六人夜出伊地山。高經以爲平泉僧徒來援城兵也。將三千騎邀擊。時能鮮甲鐵馬。躍出曰。畑將軍在此。高經陣動。時能馳而乘之。高經潰走。而快舜被七創。卽日死。時能甲隙皆創。飛鏃沒肩。病三日死。自是北國無復官軍矣。賊乃攻義助於根尾城。城陷。義助以族從數十人。微服投尾張氏。留十餘日。道伊賀・伊勢。而至于行宮。帝延見。泣而勞之。詔加一級。且賞從者。藤原實世竊言曰。是何異乎維盛敗歸而加爵哉。藤原隆資折之曰。義助之敗。非其罪也。近日。北國將士不由大將。而取裁於南山。南山臣僚。以服微勞。而得邑於北國。將權以輕。士心以驕。而義助受其敗。豈其罪也。主上察之。乃有是命。猶秦穆勞孟明耳。子何失喩。實世不能答。帝遂拜義助刑部卿。興國元年。三月。伊豫官軍請得將帥。朝議擬義助。而海陸皆敵。會、備前人飽浦信胤應官軍。道乃開。於是。

追。拙修本作迫。

義助以兵五百發。四月。至伊豫國府。遇大館氏明。氏明初逃京師。詣行宮。得爲伊豫守護。與土居・得能氏。保守諸城。及得義助。軍益振。議者皆謂。西南可復也。五月。義助疾作。七日而卒。將士祕喪。而賊已知之。來攻河江城。金谷經氏統伊豫兵救之。大戰海上。會風起。我船漂去。賊船達岸。我兵欲冒風返之。經氏曰。我軍數奇至此。返不必利。唯當前至山陽。取一城據之。乃上備後。攻鞆城。拔而據之。山陽賊兵來戰。未決。聞賊將細川賴春圍氏明于世田城。經氏乃將數百人赴救。與賊兵數千戰。敗。率殘兵歸備後。賴春乃以萬騎攻世田。三旬。城內食竭。氏明以下悉自殺。篠塚伊賀在城中。開門。提鐵梃而出。呼曰。吾新田公親兵篠塚也。盍殺我以得賞。賊皆披靡。乃徐行而去。賊不敢追躡。至今治浦。見賊空船。獨有舟人。篠塚游而達之。跳入船。自名曰。送吾於隱岐。手拔錨樹桅。登船屋鼾睡。舟人畏怖。送至隱岐。以終焉。篠塚有女。仕皇太后。曰伊賀局。後嫁楠正儀。勇力類父云。義貞・義助既死。足利氏無復忌憚。兒島高德在備前。招新田義治於上野。謀起兵。不克。乃間入京師。欲襲尊氏。又不克。義治走。匿東國。與從兄義興・

正平六年

三十。寫本作二三百。
軍。川越本・拙修本並作陣。

義宗。皆潛圖復父仇。窺釁未發也。正平六年。尊氏與直義有隙。使長子義詮守京師。而自東擊直義。殺之。入居鎌倉。立次子基氏。管領東國。義詮僞請降。帝許之。兒島高德。與由良信阿至自行宮。諭旨於新田氏曰。天子納義詮降。北還京師。其實乘虛行誅也。尊氏在彼。公等圖之。機不可失矣。因進義宗左近衞少將。義宗乃徇東國。義貞・義助遺臣。奮起來從。得數萬人。直義故黨石堂義房・三浦高通等。又爲內應。約戰酣起刺尊氏。尊氏覺而逐之。而義宗等未知也。閏正月。勒兵于武藏野。義興居左。義治居右。義宗自將中軍在其後。尊氏兵十餘萬。義興先合。義治次之。殺傷相當。敵將饗場某。率六千騎更進。義宗麾兒玉黨。擊走饗場。饗場走。入尊氏陣。尊氏陣大亂。義宗直前。指其牙旗。大呼曰。吾今日爲天下討賊。爲一家復仇。奮擊破之。追北。馳者三十餘里。至石濱。尊氏欲自殺。其兵返戰死之。尊氏得間。濟達前岸。收兵三萬。壓水而軍。而義宗騎能屬者五百人。時已昏黑。無來助者。義宗切齒而止。乃還求義興・義治。義興・義治見白旗兵三萬北走。以爲尊氏也。合兵追之。降者屬路。二人駐馬揖之者數。其兵不顧而前。

憲顯。擷修本作憲政。

義治。擷修本作義宗。

留從者僅三百。遇伏兵數千圍之。二人苦戰而出。甲冑皆破。刀刃如鋸。身各被數創。亡百餘騎。乃議曰。我既與武藏守相失。以此寡羸將安歸也。不若遇基氏決死。衆然之。進至關戶。會石堂・三浦氏以五千騎西行。幷其兵襲鎌倉。基氏悉甲出拒。義興鬪於海濱。斬三騎。馳貫賊陣。左韁斷委地。乃挾刀于脇。俯結之。賊羣至。擊其項及背。義興不爲動。結畢應賊。賊驚走。遂與義治合擊走基氏。仍據鎌倉。義宗時據碓氷嶺。越後・信濃兵二萬。奉皇子宗良來會。上杉憲顯等。又屬焉。尊氏收兵八萬。欲復鎌倉。聞義宗軍復振。乃先攻碓氷。碓氷地負山帶川。便於據守。而義宗年少氣銳。數出戰於平地。敵更兵交進。自午至酉。義宗終敗走。上嶺而陣。既夜。足利氏軍擧炬。布滿山澤。顧視我軍。炬如爝火。義宗驚曰。晝日所失亡。未至如此。得非有逃者。前有勁敵。後有鄉士。衆疑我退走也。乃自釋鎧卸鞍。以示不走。衆稍定。夜半。上杉氏望見炬火數千復屬賊軍。則遽走信濃。於是。走者相踵。義宗不得獨留。比曉。退入越後。八州兵盡附尊氏。還向鎌倉。義興・義治欲迎戰決死。將士諫止。乃走信濃。義宗既歸越後。聞帝猶在行宮。欲赴援

川越本標註云。一無居字。

枘。正本作柄。誤。

之。收兵七千。入越中。桃井・吉良・石堂・小山・宇都宮諸族皆應之。奉皇子宗良西上。途聞行宮已陷。乃解歸。是役也。赤松則祐亦就行宮降。請奉將軍興良。興良。故護良子也。材武類父。則祐思護良舊恩。欲擁據播磨。以爲聲援。帝許之。及則祐敗叛去。興良拘於京師。但馬人本莊某奪之。與則祐戰。敗死。興良走。歸吉野。後十餘年。赤松氏範屬官軍。復奉興良爲主。已而叛。應義詮。帝遣兵。擊走氏範。興良奔南都。不知所終。人譏其辱護良也。義宗與義興・義治。俱匿越後。居數年。武藏・上野將士連署。來請一人。奉戴擧義。義宗・義治皆疑。不敢往。義興奮而往。足利基氏。發兵來捕。國人相倶匿之。或以兵鬪。義興輒潰圍逃。不可蹤跡。基氏患之。我故將竹澤良衡。與族江戶堯寬叛。降基氏。基氏宰畠山國淸。囑二人圖義興。乃爲獲罪亡來。索義興仕之。啗以美姬。漸得狎近。因詐之曰。鎌倉可襲。義興遣衆先往。與親信繼之。路由矢口渡。堯寬敎舟人鑿舟腹而枘之。載至中流。拔枘。泅去。伏兵夾河起。舟將沒。井伊直秀手掀義興。義興瞋眼曰。悔陷豎子計。剚腹死。直秀與世良田・由良・大島等。皆自刃。土肥・市川等。啣刀而泅。與堯寬鬪。

正平十三年
正平二十二年
正平二十三年
建德元年
元中二年
元中九年
與。川越本・拙修本竝作共。

殺傷十餘人而死。時正平十三年。十月也。基氏重賞二人。尭寛赴邑。復由矢口。天俄雷雨、顧覩義興追己、墮馬。疾作死、鎌倉人又夢義興來襲也。矢口民立祠祀義興。義興既死、義宗・義治仍在越後。二十二年、足利義詮死。子義滿猶幼。明年。七月。義宗・義治。起兵越後・上野。與足利氏將上杉能憲戰。不克。義宗死之。義治走出羽。建德元年。正月。義治收兵。出武藏・上野。與上杉朝房戰。復不克。走匿信濃。不知所終。義宗子貞方爲相摸守。義治子義隆爲刑部少輔。後龜山天皇元中二年。二人竝匿信濃浪合。潛集宗族。足利氏滿管領鎌倉。遣兵鏖之。貞方・義隆脫走。入陸奧。九年。天皇納足利義滿劫和。北入京師。義滿購天下。索新田氏族。先是。小山義政據小山城。爲新田氏。爲氏滿所攻破。死。義政子稺狗復起兵、據男體城。年餘。城陷。走入陸奧。依田村清包。於是。相與擧義。推貞方・義隆爲將。軍于白河。氏滿將十一州兵來擊。吾衆潰。貞方・義隆復逃走、是歲。丙子也。歲癸未。義隆匿箱根山中。竹下人安藤某。告之鎌倉。來捕、義隆鬪死、歲庚寅、貞方在鎌倉。陰糾合義故。事覺。爲千葉兼胤所捕、斬于七里濱。新田宗統於是而絕。

蓄。拙修本作畜。

而其支族匿參河者。歲再周庚寅。而後大興。事詳于末編。

外史氏曰。余見義貞手記者。蓋其未擧事時。語家子弟武門法戒。淺近而已。然有言曰。爲將者。奉上撫下。決志而行。聽運於天。勿尤人也。義貞成於元弘。而敗於延元。亦時運有可不可耶。將上之人有負之耶。至叡山之事。可謂負之甚矣。帝蓋前此未嘗而議事。至此亦嘗試兩端。僥倖孰成。以是待將帥。惡濟時艱哉。吾嘗咎義貞之東伐。不按兵持重。俟奥兵擾其內而後應之。懸軍長驅。一敗成賊勢。及賊西奔。則不捲甲窮追。頓兵堅城。以致賊再燃。是緩急兩失機也。然當時主聰壅蔽。國論苟媮者如此。蓋雖有善謀。難於輒行。則不可亶罪其戰也。是故爲官則敗。爲私則成。寧敗而忠義。不成而姦賊。義貞之志。亦可悲矣。吾居平安。每覩東山岡阜起伏。指義貞力戰處。仰觀叡山。又念其拜辭北行時也。帝及南遷。蓋深悔此擧。下哀痛詔。而已無及矣。噫。君臣際會難矣。可不慨歎歟。假令義貞有霸心。當其初克鎌倉。北條氏餘燼未滅。而足利氏反跡已形。義貞以此爲請。坐鎭舊府。蓄力養威。與護良親王。東西合謀。請淸君側。朝廷不敢不聽。使

翼。正本作翊。

川越本標註云。令一作命。

覩。川越本・拙修本並作視。

尊氏或挾天子以臨我。其逆節漸長。天子終不能堪。必將引我以自援。猶後白河之近疎義仲。而遠款賴朝耳。是新田氏上計也。不然。當其始授鉞。進據信濃・上野。連之奧羽。俯瞰八州。扼賊之吭。而拊其背。賊形格勢禁。必不棄我以犯闕。是又其次也。及其辭叡山。則事不可爲矣。然得擁太子。進退自如。爲赴越前。而潛歸上野。勢或可達。收合舊部。奪賊巢窟。據以爲根本。進則成恢復。退則圖翼戴。又可以展其才。而得其志。計不出於此。以無根之兵。奔走東西。而謀與戰皆不由己。宜其困屈無所成也。雖然。奉令周旋。銳意勤王。不暇占便利。所以爲義貞也。觀其死時猶佩錦囊詔書。見其報國之志。百敗不挫。至今凜有生氣。而老賊之骨。朽腐已久。十三世之室町。徒見市塵迷離。索其斷礎。不復可識矣。義貞之聽運於天。其以此耶。余嘗謂。新田・足利之兵爭。猶朱李之於唐季。義貞忠勇勝於克用。而義興等。英邁不讓存勗。存勗覆滅汴梁。而義興等不克報室町者。亦非有所牽制故歟。抑我東北形勝。同於河北・太原。而新田氏不能據有也。然義貞祈山靈。以其子孫再起滅賊。又猶遜佶烈祝天。願生眞主安天下也。世稱。

趙藝祖應祝而生。我二百年後。代足利氏而興者。實出於新田遠裔。亦烏知非應義貞之祈哉。則天運果有復時。勝敗之數。未可以歲月較也。

日本外史 卷之六 終

往。拙修本作行。

日本外史　卷之七

足利氏正記

足利氏上

足利氏出於源義家。義家在京師。其子義國。以事謫關東。居上野。生二子義重・義康。義康食下野足利郡。因氏焉。爲檢非違使左衞門尉。保元之亂。從源義朝於京師。衞守大內。捕平家弘。補藏人。聽昇殿。生三子義清・義長・義兼。義兼雄偉而循謹。其二兄皆爲源義仲將。西與平氏戰水島。死之。而義兼從征夷大將軍源賴朝于鎌倉。最見親待。從擊平氏筑紫。又從擊藤原氏陸奧。陸奧再亂。義兼統諸將往討之。賴朝因定天下。奏授之上總介。使北條時政以女妻之。生義氏。義氏數助北條氏。靖其家難。爲正四位下左馬頭。義氏生泰氏。泰氏生賴氏。賴氏生家時。家時生貞氏。皆居足利。旗用白。旗號重畫。細川・畠山・仁木・岩松・桃井・

大。正本作太。川越本標註云。源氏系圖・公卿補任。竝少輔作大輔。

元弘元年

元弘二年

吉良・今川・斯波・石橋・澁川・石堂・一色諸族。皆出於足利氏。足利氏世與北條氏婚。更相倚賴。然家時・貞氏自負門地。恥立人下。思竢時滅之。貞氏娶上杉氏。生二子。曰高氏。曰直義。高氏稱又太郎。任治部大輔。直義任兵部少輔。高氏爲嫡嗣。娶赤橋守時妹。生子千壽。赤橋。北條氏族也。元弘元年。後醍醐天皇起兵。據笠置山。討北條高時。高時乃遣高氏・直義等。往攻之。高氏兄弟。時丁外憂。强起而西。城陷。乃返。二年。高時流天皇于隱岐。立光嚴帝。已而帝歸伯耆。官軍竝起。攻六波羅府。府帥北條仲時・北條時益。數戰不利。高時遣高氏及名越高家赴援。高氏有疾。不欲往。强之再三。高氏大慍。乃答使者曰。當不日發矣。因陰謂其親信曰。彼舊爲我家臣隸。時遷勢變。乃至僕役我。我欲以今日歸官軍。以與我家。如何。上杉憲房・細川和氏等。皆贊成之。高氏乃欲挈家行。或說高時曰。源氏失天下兵權久矣。今日之勢。焉知其無異圖。宜質其孥。且要其誓。高時然之。以溫言來請焉。高氏患之。謀於直義。直義曰。公欲誅無道。神豈不右焉。要盟。神所不饗也。宜留親信護孺子。而夫人則屬赤橋氏。當無所憂。公第聽彼所言。亟成

卽。川越本作乃。

元弘三年 川越本・拙修本並無三年二字。川越本標註云。按。四月上。當有三年二字。

大事。高氏從之。高時祖道。取一白旗。授高氏曰。是自八幡公。傳至右大將。而我家受之者。請以爲贐。八幡公謂義家。右大將。謂賴朝也。高氏受之。心竊喜焉。乃率直義以下宗族三十二人。兵三千而西。至三河。告謀於其故黨吉良貞義。貞義曰。臣固將言焉。高氏意益決。抵京師。卽密使使伯耆。請降帝。素聞其家聲。則大悅。賜使者以邑。敕曰。諸國官軍。汝其帥之。以滅國賊。賊滅之後。賞當從所請。已而名越高家後至。與官軍將源忠顯・赤松則村戰于狐川。敗死。高氏方張宴于桂川西。指一佛舍。問其名。或答曰。勝持寺。高氏哂曰。吾將勝而持之矣。乃聲言往攻行在。遂上馬。行入丹波。三年。四月二十七日。至篠村。建旗于八幡廟前。州人久下時重。以二百騎先至。旗號一番字。高氏見之。問故。對曰。右大將之起。臣祖重光先衆而至。右大將親書賜焉。遂以爲號。高氏大喜曰。我家之嘉兆也。五月七日。高氏引兵。南攻六波羅。自祈戰勝。納一矢於廟。直義以下宗族皆倣之。矢積成堆。乃發。沿道兵皆附之。比入京師。凡五萬人。軍于神祇官址。府帥遣兵二萬來拒。我軍擊大破之。與忠顯・則村合兵。圍府。細川和氏說曰。圍之者。固

郤。川越本作御。

建武元年

痍。正本作夷。

彼志。而損我兵也。不若誘而走之。高氏乃闕其一角。果多逃降者。府帥遂奉新帝走。死近江。高氏乃奏捷於行在。帝乃還闕。廢新主而復位。即日。以高氏敍從四位下。任左兵衞督。聽昇殿。直義敍正五位下。任左馬頭。以甲士五千。扈乘輿後。於是。高氏遣細川和氏與弟賴春。將兵往定關東。先是。千壽逃歸下野。聞新田義貞起兵。往從之。義貞。義重遠孫也。北條高時伏誅。鎌倉平。義貞閱源氏故器。得白旗。旗號重畫。新田氏號中黑。故不可用。和氏聞之。以其有足利氏之號。就而求之。義貞不與也。和氏乃大稱高氏在京師。得寵遇狀。以搖將士。將士稍稍去義貞。就千壽。新田氏於是與足利氏有郤。而帝方寵高氏。進從三位參議。賜御諱尊字。改名尊氏。十二月。遣皇子成良。鎭鎌倉。直義執權焉。建武元年。延論戰功。尊氏爲首。管武藏・常陸・下總守護。直義管遠江守護。時關東承大亂之後。人心未定。直義修北條氏舊政。招散亡。撫瘡痍。遠近歸心焉。而京師之政。務改其舊。徵守護・地頭食邑二十分一。以修大內。又造交鈔。民不便之。朝廷臣僚。異時爲武人所輕侮者。至是。競驅役武人。武人效力於興復者。奉狀冀賞。羣聚

牾。川越本作捂。下同。

誅。拙修本作討。

建武二年

自。正本作親。

闕下。有司不能甄別。月餘。乃定十餘人。而內敕已以北條氏邑。分給於妃藤原氏・皇子護良等。其餘。悉散賜京官・內臣・歌童・舞妓。六十餘州。無復遺地。當是時。朝議內旨。相爲抵牾。往往數人。同爭一邑。許食邑如故者。旋被沒收。赤松則村授播磨守護。已而褫之。僅食佐用一莊。時有綸旨翻覆之譏。諸武人私相語曰。如是而不止。我輩皆奴虜矣。安得戴一將種。執天下權。尊氏聲望素著。衆屬意焉。皇子護良爲大將軍。心深疾尊氏。尊氏之初定京師也。護良將殿良忠。不戢其下。尊氏捕十餘人。梟之。護良怒。欲誅尊氏。帝不聽。護良耽聲色。又喜客。客多姦豪。酗而殺人。又私徵兵圖尊氏。尊氏得其徵兵書。上焉。誣以謀反。帝乃使人執護良。流於鎌倉。直義迎而幽之。是歲。北條氏餘黨本間・澁谷作亂。直義遣兵擊夷之。二年。北條時行起兵。數攻鎌倉。直義迎擊不利。遂奉成良西走。使人陰害護良。報急京師。尊氏請自將東伐。被許。又請任征夷將軍。管領關東。不許。曰。竢事平議之。尊氏怒。不告而發。諸武人奮躍。爭起從之。至矢矧驛。合於直義。自海道進。與時行兵。七遇七捷。遂入鎌倉。時行兵奔潰。詔敍尊氏從二位。敍義詮

赴。拙修本作趣。下同。

從五位下。義詮。千壽也。又詔。趣其西歸。直義說尊氏曰。朝廷與義貞皆忌公。公免而至此。天也。何再赴虎口為。尊氏從之。於是。自稱征夷將軍・關東管領。曰。帝所許也。開府于源賴朝故基。賞有功。納降附。收新田氏邑在關東者。割予將士。將士爭附之。京師傳言。尊氏反。帝使人往詗焉。而細川和氏齎尊氏劾新田氏書至。曰。嚮當東藩之為逆。臣尊氏以身為倡首。奮臂一戰。決勝瞬息。義貞舉事於不得已。及聞臣定京畿。乃以討賊為名。三戰不克。纔為守計。臣長男義詮起下野。遠邇爭歸。義貞憑之。以得克賊。遂攘其功。敢要重賞。是國之蠹也。今臣勞苦於外。而內有讒諛之臣。是非趙高專秦。章邯降楚之謂乎。願得明詔。以誅義貞。義貞聞之。亦收足利氏邑在其管內者。上書告護良遭害狀。時直義密徵諸道兵。西國得其檄。上之。十一月。遂詔。削奪尊氏・直義官爵。遣皇子尊良來討。義貞為副焉。當是時。諸國兵士赴關東者。與歸京師者。東西旁午。道路如織。直義以下將校。盡戎裝入見。請邀擊官軍。尊氏默然。良久曰。我官位顯達。得伸宿憤。雖由微功。豈非君恩。恩可背乎。今之所以觸宸怒。曰。戕親王也。曰。徵兵也。二者

愕。川越本・拙修本竝作咢。川越本標註云。按族當作弟。

十二月。川越本作二十一月。

東。拙修本作官。

非尊氏所爲。詳訴其冤。猶得霽威。卽不被許。有削髮遁世而已。諸君好自爲計。尊氏終不能西向關弓矣。作色而入。諸將愕眙。居二日。有來告。曰。義貞至三河矣。上杉憲房・其子憲顯・細川和氏・其族賴春等。竝謂直義曰。將軍所言。非無理也。然天下武士。翹足思亂。一聞將軍起。則雲合景附矣。將軍豈不辨禍福乎。今曠日彌久。使敵過要害。悔莫及焉。直義乃使諸將先發。再戰皆敗。直義自以二萬騎赴援。亦敗。十二月。諸將還。詣尊氏第。第門閉矣。衆亂敲之。有一人出。曰。將軍逃建長寺。欲削髮。我曹百方止之。切髻而未剔也。將士大沮。憲房義子重能。僞作官檄十餘紙。曰。尊氏族類。罪惡深重。雖遁世晦迹。而勿得宥釋。直義持至建長寺。泣曰。獲之敵死尸中。尊氏熟視。大息曰。誠如是乎。則吾亦當從諸君。執弓箭。與義貞決死也。乃釋法衣。穿錦袍而出。諸軍大喜。驩呼。皆自切髻。以亂其狀。將逃降者。四面來還。一日號三十萬。直義先將六萬。拒義貞于箱根。東軍稍卻。尊氏聞之。以十八萬騎繼進。曰。拒其面不若出其背。引兵出竹下。竹下官軍呼譟而進。赤松貞範等爲我先鋒。望其陣曰。是京兵耳。乃聯鋒馳下。官軍敗走。

朝。攝修本作廟。
莫。川越本作無。
延元元年
粟。正本作栗。誤。

尊氏追北。至伊豆府。義貞西走。乃使義詮守鎌倉。而合軍追躡之。京畿震駭。帝遽榜朝堂。能拒賊者。有重賞。莫復應者。延元元年。正月。尊氏攻義貞于大渡。我軍多溺。先是。赤松則村叛。應尊氏。徇下山陽。細川和氏從弟定禪・顯氏。竝在讃岐。徇下南海。至是。定禪等與赤松範資合兵。攻山崎。尊氏聞之。遣貞範助攻。破之。義貞顧而敗走。奉乘輿。據叡山。尊氏乃入京師。範資・貞範。皆則村子也。於是。尊氏誘園城寺。下之。遣定禪據焉。以逼叡山。會、北畠顯家擧陸奧兵。入援行在。定禪連請益兵。尊氏不以爲意。旦日。定禪敗還。義貞追至。陣于東山。尊氏指語將士曰。聞義貞喜平地騎戰。今負山不出者。意其兵寡。使我不識兵數耳。遣一將嘗之。不利卻。尊氏乃親進。會、敵兵雜入我軍。軍遂亂走。及日暮。敵亦引去。細川定禪謂其兵曰。敗由於我。我欲一雪其恥。料敵兵皆疲。不疲者出掠。可以襲也。以兵三百夜返。縱火其前。自後襲之。義貞果不備。敗走。定禪追擊。獲其將領數十人。尊氏復入京師。已而官軍復來攻。我軍不利。陸奧兵二萬騎。火粟田口而來。尊氏望之曰。彼其北畠氏也。吾自當之。進鬭于四條。義貞軍大至。我軍顧

川。正本作河。

以吾。川越本作以我。

之。遂敗走。止戰于桂川。鏖其一隊。官軍乃引還。尊氏復入。謬聞義貞等死。其兵逃走也。分兵要之。官軍乘虛來攻。尊氏敗走丹波。二月。尊氏赴兵庫。熊野道有者。在軍中。與廢主臣僚相識。尊氏召而謂之曰。吾之數敗。非戰之罪也。以吾負賊名焉爾。吾始欲擁立一皇胤。以其悉在叡山。不可如何。吾意。廢帝抑鬱不得志久矣。汝安爲我得其詔旨。吾將使兩主爭位。以成吾事也。道有諾而去。赤松則村請尊氏入保摩耶城。或曰。是失天下之望也。今見兵猶足以取京師。乃屬兵於直義東上。戰于豐島。敗還。會大友貞宗・大內弘世等以兵艦來援。迎擊官軍于湊川。又大敗。則村又說尊氏曰。師不可用。公宜留諸將于中國及南海。而身赴鎭西。以圖再舉。尊氏從之。與書則村。呼之爲父。以深結納之。於是。尊氏與直義。乘貞宗舟而西。諸將士多降義貞。義貞頗驕怠。耽溺女色。不復窮追尊氏。尊氏得達赤間關。三月。菊池武敏起兵應官軍。攻殺少貳貞經。貞經遺囑其子賴尙曰。吾爲三浦義明也。汝體吾志。愼仕將軍。賴尙引兵迎尊氏。尊氏問貞經死否。賴尙恐沮軍氣也。答曰。訛傳耳。因導至宗像(ムナカタ)氏。會武敏來攻。尊氏上香椎(カシヒ)

祠。以望其軍。可四五萬騎。而顧我兵僅五百人。鎧馬不具。曰。吾死矣。乃進陣赤坂。遣直義先進。賴尚曰。彼鬭士不過三百。其餘聞將軍至。皆將降也。進戰于鞴濱。仁木義長・細川顯氏等。奮搏敵兵。剝鎧奪馬而進。會、北風起。沙石皆走。敵兵沮卻。直義憑風縱擊。追至博多。武敏以全軍返戰。直義自慮不支。馳使尊氏。截衣袖遺之。爲訣。曰。公亟走長門。直義將留死於此。尊氏得報曰。吾弟如死。吾何生爲。親將赴援。松浦氏・神田氏謂。大兵至矣。擧其衆來降。合擊大破武敏軍。追至太宰府。於是。聞貞經定死。尊氏・直義爲之擧哀。尊氏乃遣一色賴行・仁木義長。攻陷菊池・八代諸城。鎭西皆服。而中國・南海諸將。又竝起應之。義長兄賴章・與久下時重等據丹波。赤松則村據播磨。石橋和義據備前。於是。義貞攻則村白旗城。城壁未成。則村詐遣之書曰。元弘之初。臣數挫强賊。而賞出於降虜下。故背此嚮彼。豈其志也。願得州守護。以圖報效。義貞喜。爲請詔旨。往反旬餘。詔至而壁成。則村還詔書不受曰。守護已獲之於將軍矣。何以此翻覆綸旨爲。義貞大恚。合兵六萬。圍則村。使弟義助攻石橋和義。和義・則村。皆堅守不下。遣使

太。正本作大。

街。拙修本作衢。

坐。川越本・拙修本並作座。

告急於尊氏。五月。尊氏使賴行・義長守鎭西。而率諸軍發太宰府。至嚴島。會、僧賢俊奉廢帝書至。尊氏大喜。令諸將立錦旗。遠近競附。兵艦凡七千餘艘。進至鞆津。以少貳賴尙策。附二十萬人於直義。上陸拔福山。義貞遽釋圍而走。備前・丹波・美作官軍。望風解去。尊氏至室津。赤松則村出圍迎謁。收敵所遺旗幟百餘于城下。以獻尊氏。視其旗號。多故部屬。曰。避害焉耳。今將來歸。已而來降者果多。而陸軍亦會。夾擊楠氏兵于兵庫。鏖之。合軍擊義貞。義貞走歸。復奉乘輿據叡山。法皇・廢帝・廢帝弟豐仁親王。皆託疾不從。往依尊氏。尊氏據東寺爲城。六月。遣軍仰攻叡山。不利。義貞追入京師。尊氏伏兵于街巷。而出羸兵。且戰且卻。誘敵入京中。伏起。大戰。義貞敗走。又聞義貞計夾攻也。乃遣兵邀擊。走之。義貞誘興福寺僧徒。令畿內・南海兵絕我糧道。乃遣細川定禪・今川範國。擊走南海兵。七月。義貞以數不得志。計四面來攻。藤原隆資先至。攻南門。我兵盡北出拒義貞。獨高師直與弟師泰在焉。出戰而敗。敵焚門樓。城內惶擾。尊氏方誦經自若。土岐賴氏侍坐。曰。惡源太如在。於拒之何有。惡源太。其子賴直也。適賴直

眉。拙修本作肩。

山門。川越本。拙修本竝作叡山。下同。

入見賴氏喜。問曰。北面之戰未乎。曰。不知也。適在三條。望東寺煙揚。乃還耳。師直曰。敵至南門。煩公出拒。賴直諾而出。尊氏呼返之。賜之寶刀。賴直拜而受之。自北門出於敵左。下馬而射。敵兵亂潰。乃上馬。騎而馳之。手斫六人。師直等復出援擊。遂走隆資。而義貞已至北門。請與尊氏各獨身決鬭。尊氏奮然起曰。亟開門。吾非敢敵官家。獨欲與義貞決耳。上杉重能諫曰。彼窮而出於此。將軍何自輕也。會土岐賴遠破大宮敵。乘勝踵義貞軍後。義貞大敗。傷其左眉。走歸叡山。足利氏於是議奉廢帝復位。衆以元弘事。以爲不祥也。八月。乃立豐仁親王。是爲光明帝。號用建武。後改曆應。尊氏爲權大納言。直義爲左馬頭。九月。議以利啗興福寺。令足利高經以越前兵。小笠原貞宗以信濃兵。竝絕東北糧道。又命佐佐木高氏援貞宗。擊新田義助兵。走之。山門援絕食竭。於是。尊氏陰獻誓書焉。曰。臣初被讒獲罪。削髮待命。而義貞義助假公義。修私怨。以至於此。陛下苟諒臣志。廻駕來還。則當歸政朝廷。諸廷臣安堵如故。帝遽納之。義貞聞而弗懌。帝使義貞奉太子赴越前。而命駕還闕。直義將兵迎之。乃爲新主請劍璽。帝

延元二年

逆。川越本・拙修本並作遂。

延元三年

傳僞器。乃褫文臣官爵。執武臣。寘帝于花山院。請其詔下越前。足利高經因幷州兵。圍義貞于金崎。又遣高師泰助攻之。既而帝逃走。不知所之。内外驚騷。尊氏曰。是吉祥善事也。使帝猶在監護。無期亦不可襲承久・元弘之爲。而今乃如是。豈非善事乎。度其必在畿內。任其所底。而徐圖之可也。二年。瓜生保自杣山援金崎。師泰令今川頼國逆擊。破而殺之。金崎益困。義貞出走杣山。或說師泰曰。聞城兵不浴馬。得非糧竭食馬也。於是師泰・高經凌城齊登。城兵果飢羸。不能戰。皆自殺。太子就虜。後遭害。時帝在吉野。建行宮焉。自是天下稱京師曰北朝。吉野曰南朝。義貞復起杣山。高經拒之。義貞少子義興與北畠顯家。起兵關東。義詮在鎌倉。遣細川和氏・上杉憲顯等。拒利根川。敗還。冬。顯家以十餘萬騎逼鎌倉。鎌倉兵可一萬。諸將欲避匿安房・上總間。義詮時十一歲。叱諸將曰。勝敗兵之常也。卽怖敵。不若不將。義詮在此。望衆而逃。天下謂之何。我兵雖寡。猶可一戰。不免則死。免乃避匿。尾敵而西。與家君夾擊之耳。諸將皆奮。分兵爲四。逆戰不克。奉義詮逃匿。顯家等西上。諸將乃起尾之。明年。正月。至美濃。土岐頼

遠・桃井直常。與顯家戰。復不克。顯家焚掠而進。京師諸將。議拒宇治・勢多。高師泰曰。自古未有拒於此而克者也。何者。攻者勢伸於千里之外。拒者力縮於咫尺之內。焉爾。不若邀擊之畿外。尊氏曰。善。附師泰以萬人。赴美濃。背黑血川而陣。顯家避之。取路伊勢。二月。師泰追擊之雲津。破之。顯家入南都。將攻京師。高師直薦桃井直常。往擊。直常與兄直信。受命卽發。奮擊走顯家。顯家弟顯信。收敗軍。據男山。諸將視直常不獲賞。無赴攻者。師直助直常攻之。不能下。四月。師直聞顯家在和泉。慮其與楠氏合也。分兵而南。擊殺之安倍野。五月。帝遙命義貞救男山。義貞與高經相持。使義助以二萬騎赴山門。七月。尊氏急召還師直。師直夜遣諜。燒男山積聚。顯信遂棄守走。義助望火退去。於是。義貞・義助合三萬騎。攻高經足羽城。城兵不滿三百。高經曰。守不可克。走不可達。寧守而死焉。城主朝倉廣景贊之。乃修塹壘。處之藤島。平泉僧徒來告曰。叡山與我爭藤島。今公附之於我。則願效力焉。高經許之。新田氏兵攻藤島。僧兵力拒。高經使細川孝基・鹿草公相以三百人救之。途與敵兵遇。蔽楯亂射。斃其一將氏家重國。

安倍。正本作安部。

眉。拙修本作肩。

延元四年

興國元年

持其首歸。高經視之曰。何背左中將之酷也。果然。則左眉當有箭瘢。命洗而瘢覩。驗其尸。齎帝詔書。驗其二刀。鏤曰鬼切・鬼丸。乃知其義貞也。收尸葬之。獻首於尊氏。徇梟獄門。北朝於是陞尊氏正二位。任征夷大將軍。四年。遣諸將援高經。走新田義助。殺畑時能。北陸盡平。義助走美濃。土岐賴遠攻走之。興國元年。義助病。卒於伊豫。細川賴春攻拔諸城。悉殺其族黨。於是。官軍諸將大半死亡。其將士相率來降。而尊氏之業。終如初志。尊氏使直義與高師直並執政。謂之曰。吾慕右大將之信賞必罰。而憾其多疑刻刑也。汝副我意。勿猜且吝於功臣焉。宿仇勁敵。降輒納之。當是時。氏族最富貴者四十三人。割地賞功。徵發軍糧。雖朝貴之邑不避也。至朝貴務學東人言貌。以計免侮謾。初尊氏之立光明帝。時人爲之語曰。王無一戰之功。而受帝位於將軍。光嚴上皇嘗出行。途遇土岐賴遠。前驅叱下馬。曰。院也。賴遠時被酒。怒曰。院耶。犬耶。誰能下我者。環射其輿而去。蓋院・犬國音相近也。直義聞之。誅殺賴遠。使姪賴康承家。時人復相謂曰。院且下之。卽遇將軍。當手行耶。天下方服足利氏恩威。稍屬無事。而連年饑疫。

冥。川越本標註云。一作共。

孽。拙修本作蘖。

興國三年　川越本。拙修本竝三年之上有興國二字。

興國四年

正平三年

正平四年

多災異。僧疎石進說曰。是先帝憤怒所致。宜興寺以修冥福。時帝既崩行宮。後村上天皇卽位。故稱先帝也。尊氏・直義以爲然。興寺于龜山殿址。自興國至正平。七歲乃成。名曰天龍。以疎石爲主。親臨慶之。大設法會。又爲文祭先帝。敍其舊恩。然行宮君臣。及新田・楠・北畠・菊池氏遺孽。伏匿諸國者。欲必報足利氏。三年。高師直從弟師冬。攻北畠親房於陸奧。四年。親房走歸行宮。新田義治匿京師。謀襲尊氏。不成。正平三年。正月。楠正行起兵河內。遣細川顯氏・山名時氏。戰于攝津。敗還。更遣高師直。率諸將擊之。四年。師直與正行戰四條畷。縣某擊其前。武田信氏擊其後。佐佐木高氏等繼之。大破正行。正行決前。將士散走。上山高元者。以常服從。在師直麾下。會正行突入。高元急取師直副甲。左右叱止之。師直曰。毋也。彼能代我死者。我何惜一甲焉。高元感激、僞稱師直死。師直因得免。竟斃正行。進焚行宮。使師泰築壘于石川。以攻楠正儀。是歲。北朝太子受禪。是爲崇光帝。師直兄弟。屢立功專橫。時方大亂。親王公卿多流離者。師直乃略其子女爲妾。妾有數十。嘗讒殺鹽冶高貞。欲奪其妻。師泰嘗與別第。發菅原氏

齋。正本作齊。

墳墓。聞參議菅原在登出怨言。密使人刺之。世莫敢言。上杉重能・畠山直宗、嫉其權勢。計輔直義以排之。直義方學禪於疎石。疎石弟子妙吉。最所崇信。人爭事之。獨師直兄弟輕侮之。重能・直宗因結妙吉。妙吉從容說直義曰。自古家之安危。由宰之賢否。君獨不聞趙高離間骨肉乎。公速誅師直。代以上杉・畠山。以輔郎君。郎君謂直義幼子也。直義又養尊氏庶長子直冬。任左兵衞佐。於是。出爲中國探題。居鞆津。按驗守吏功罪。而二高過惡益著。八月。直義與重能・直宗。及粟飯原清胤・齋藤利康等謀。伏甲而召師直。師直至直義三條第。清胤意中變。目師直使去。師直覺。輒起出。其夜清胤與利康就告其謀。師直乃聚族黨自衞。召師泰於石川。乃使畠山國清代守而還。直義聞之。使人逆說之曰。我欲以子代乃兄。師泰曰。剪枝及根。尊意可知。臣將而答之。率騎三千。卒七千人持一楯。即日。入京師。師直令赤松則村扼杉・舟二坂。以備直冬。尊氏驚。使使召直義。直義入尊氏東洞院第。其兵稍稍去。歸師直。留者不滿千人。且日。二高以兵數萬來闔之。尊氏使人出責問之。答曰。欲執讒人耳、麾兵逼攻。尊氏怒。欲親出戰。

輔。拙修本作捕。

正平五年

正平六年

走。川越本・拙修本並作奔。

直義捉之曰。且聽其所言。何遽與家僕爭。尊氏從之。師直乃解圍而去、遣兵捕妙吉。弗獲。流重能・直宗於越前。召義詮執政。以其弟基氏代居鎌倉。師冬與上杉憲顯輔焉。擯直義。居錦小路第。人莫敢往。獨僧玄慧時問之而已。尋削髮以堅二高之意。二高密使人殺重能・直宗。及直冬。直冬逃於肥後。少貳賴尙以女妻之。三角某起兵於石見。以應直冬。五年。二高往擊之。會、土岐賴明叛。尊氏乃召還師直。佐義詮。擊賴明虜之。義詮任參議。兼左近衞中將。師泰攻拔石見五城。終圍三角。未能下。而鎭西悉附直冬。師直勸尊氏親征。以示嚮背。尊氏從之。師直又欲殺直義而行。直義卽夜出奔南都。不內。走倚越智某。終降於南朝。石堂義房・其子賴房。畠山國淸・上杉顯能皆降焉。顯能。重能子也。明年。直義入據男山。桃井直常素怨師直不賞己也。以越中兵入。據叡山。約攻義詮。義詮西走。遇尊氏・師直還自備前。合兵擊直常。走之。而將士多叛。旦日。義詮走丹波。尊氏・師直走播磨。直義遣賴房來攻尊氏。會、師泰至自石見。尊氏幷其兵。逆擊賴房。時赤松則村已死。子則祐保白旗城。不出。直義又遣國淸援賴房。戰于御影濱。

飭。正本作飾。

尊氏大敗。入松岡城。城狹隘。兵士塡咽。師直逐雜卒出之。衆怒而散。將士亦出亡。在者僅五百人。尊氏・師直釋甲且自殺。訣飲至夜半。會亡將饗場氏直敲門來報。曰。臣潛就國淸謀媾。國淸曰。錦小路公固願之矣。因出示男山來書。書辭信然。尊氏喜。挺身歸京師。二高不知所出。欲削髮降。藥師寺公義勸其戰死。不聽。二高欲奔四國。聞細川顯氏擧四國應直義。則欲航海東投師冬。會甲斐人來告。上杉憲顯與義子能憲起上野。應直義擊師冬。師冬終走甲斐。爲諏訪氏所攻殺。二高愕然。遂削髮。被笠蔽面。東走。欲追及尊氏。上杉顯能兵故遮其間。使不相及。比濟武庫川。三浦某叱師直曰。何物比丘。敢爾蔽面。奪笠覩面曰。是也。薙刀斫之。師泰望見欲走。吉江某槍刺之。師直子師夏等皆被殺於是。尊氏自播磨。義詮自丹波。直義自男山。皆入京師。置酒會宴。然寡語而罷。直義素飭情要譽。多歸之者。上杉顯能以擅殺師直爲尊氏所逐。而畠山・石堂・桃井氏乘勢驕肆。與仁木・細川・土岐・佐佐木氏相惡。時訛言。每夜有勒兵於郊者。二黨交爲警備。少納言藤原有範。以儒學爲直義所親信。以太公望自比。說直義曰。參

且。拙修本作旦。

幾。川越本・拙修本並作何。

正平七年

議淫亂。軼於商紂。公修周文之德。誰不嚮服。直義意益驕。七月。直常・義房。又說曰。聞仁木頼章等各歸其國。赤松則祐與南朝通。皆以將軍父子意而圖公也。公宜速赴北國。連臣邑越中・甲斐以自固。直義遽出奔。將士率從之。京師空虛。義詮大懼。且抵尊氏第。請備其返襲。尊氏曰。有命在天。何足虞也。吟嘯自如。八月。聞直義在敦賀。以萬人赴討。九月。直義兵六萬。來陣八相山。迭有勝敗。細川顯氏・畠山國清。勸直義媾和。不聽。二人怒。降尊氏。十月。直義自越前走。赴鎌倉。尊氏患之。乃因赤松氏。請和南朝。留義詮守京師。而自將東伐。遠江以東盡附直義。尊氏以三千人保薩埵山。直義陣伊豆府。遣上杉憲顯・石堂義房等。將數十萬。迎擊尊氏。十二月。宇都宮氏綱發下野兵應尊氏。遇桃井直常于利根川。戰而克之。進至足柄山麓。炬火彌野。直義兵望見輒潰。仁木義長以三百騎追擊。至伊豆。憲顯走信濃。直義與義房匿于北條。尊氏遣義長等。執直義。入鎌倉。基氏切救解之。不聽。基氏出奔安房。尊氏使人召還之。無幾。直義暴卒。尊氏留鎮關東。七年。二月。楠氏・北畠氏。以兵數千人。奉帝襲京師。細川顯氏敗走。細川

破。川越本作敗。

賴春死之。義詮與百餘人。至勢多橋。橋已斷。欲自殺。會我某泅至前岸。取舟濟之。依佐佐木・土岐氏。北朝二上皇・一帝皆被虜。新田義興・義治。亦奉宗良親王。起兵東國。來攻鎌倉。稱十餘萬。諸將以兵寡。復議避之安房上總。尊氏曰。關東諸國。聞我逃鎌倉。則必率歸於敵。不如逆擊也。乃使基氏留守。而自將五百騎發。行收兵至武藏。得數萬騎。饗場氏直爲先鋒。與義興弟義宗戰。其兵皆少壯。銳進敗走。入尊氏軍。尊氏軍亂。遂大敗。走至石濱。近士二十餘騎返戰死之。仁木義長伏兵擊義興等。大破之。初石堂義房・三浦高通叛。爲內應。約戰酣起刺尊氏。義房語之其子義基。義基告之尊氏。義房・高通出奔。於是。與義興合七千人。反襲鎌倉。基氏出戰。不克。走歸尊氏于石濱。諸將士稍稍來集。凡八萬餘人。而上杉憲顯自信濃叛。附義宗。合二萬騎。陣碓氷。尊氏曰。先破衆者。寡者自走。進攻義宗。走之。義興等亦散走。京畿將士聞尊氏捷。則率歸義詮。義詮得兵三萬。入京師。官軍退。保男山。三月。義詮與細川顯氏・赤松則祐會。絕官軍糧道。圍男山數日。會山名時氏。與子師義。亦率山陰兵來助。攻奪淀口。四月。諸將齊進。

正平八年

攻北畠顯能于園殿、楠正儀于更科。破之。五月。終陷男山。帝南走。八月。義詮立崇光太弟。初光明之立也。後醍醐天皇以僞器授之。二月之亂。其器又毀。於是。公卿議無劍璽而卽位不可。關白藤原良基曰。尊氏爲劍。良基爲璽、何不可。遂立。是爲後光嚴院。當是時。政在於義詮。義詮寵佐佐木道譽。道譽。卽高氏。信綱五世孫也。初勸尊氏滅北條氏。數困新田氏。及直義・直冬叛。不爲變志。屢拯義詮之危。以故寵幸用事。子秀綱・弟氏賴等。皆被親信。山名時氏負功、欲得邑於若狹。使子師義就道譽請之曰。將軍所約也。道譽方宴。不顧。師義立至日暮。乃忿曰。我寧須汝乎。馳歸伯耆。與時氏俱應官軍。吉良滿貞・石堂賴房。嘗黨直義。赤松氏範。與兄則祐惡、皆起應之。八年。六月。同時入京師。義詮移北帝于叡山。而自陣鴨河東。道譽先敗。細川淸氏獨止戰。義詮召還之。已而山徒又通款於敵。義詮走近江。新田氏餘黨堀口貞祐。率土寇要擊。秀綱死之。行至鹽津。土寇復起。兵潰。淸氏下馬。負北帝。東走。達垂氷。尊氏已定關東。留基氏鎭之。佐以畠山國淸。而西與義詮遇。與共入京師。而時氏兵日逃亡、走歸伯耆。時氏乃曰、衆

之不歸我。我知其由也。乃索直冬。直冬自直義死。匿于長門。於是。時氏擁戴之。
歸者果多。足利高經・桃井直常。皆來送款。高經之克新田義貞也。得其二刀。尊
氏欲取之。曰。源氏之寶也。宜傳之宗家。高經靳之。紿曰。嚮託於長崎道場。罹災

正平九年

矣。取他刀二。燒而獻之。尊氏怒。擯斥高經。高經怨望。終歸直冬。九年。冬。直冬等

正平十年

竝起。東攻京師。義詮與道譽出拒播磨。明年。正月。直冬・時氏自丹波入。仁木賴
章新爲執事。不敢要擊。尊氏奉駕走近江。六角氏賴・仁木義長等來援之。而細
川賴之以四國兵入援。賴之。賴春子也。於是。義詮陣于神南山。時氏・師義與楠
氏兵還攻神南山。諸將拒戰。大敗。師義覘四目旗號曰。彼非道譽乎。麾卒逼擊。
赤松則祐侍義詮。呼騎兵扇之。憑高馳下。師義被傷走。尊氏在叡山。聞神南之
捷。進陣東山。遣義長・淸氏與高經・直常戰。終攻直冬于東寺。義詮軍山崎。賴章
軍嵐山。絕其糧道。直冬遂走界浦。卜戰于八幡廟。巫曰。神意不右抗父者。諸將

正平十三年

乃解去。尊氏迎駕歸京師。三上皇亦至自吉野。十三年。四月。尊氏患癰薨。年五
十四。北朝贈從一位左大臣。以義詮襲征夷大將軍。基氏爲左馬頭。官軍乘足

代。拙修本作伐。

正平十四年

正平十五年

利氏之喪。所在竝起。鎮西探題一色直氏。爲菊池武光所敗。義詮遣細川繁氏代之。道病死。少貳賴尙・大友氏時。數擊武光。而新田義興謀襲鎌倉。基氏使畠山國淸誘殺義興。親觀兵於入間河。關東大伏。國淸說基氏曰。故將軍捐世。天下疑兩公之相忌也。臣請得將兵南定吉野。以解新將軍之意。基氏然之。發八州兵。附國淸西上。十四年。冬。國淸入京師。明年。正月。義詮率諸將。出軍尼崎。國淸進軍筒山。使弟義深別攻龍門。敗歸。又使弟義熙代攻。拔之。赤松氏範約爲內應。不成。來奔。諸將亦拔三城。遂攻楠氏赤坂。走之。楠氏奉帝匿金剛山。五月。義詮凱旋。國淸之入京師。視仁木義長專橫。深嫉之。乃密謂諸將曰。是役。實圖義長也。彼日陣西宮。未嘗進戰。聞敗則喜。聞捷則憂。吾請從諸公誅姦臣。時細川淸氏等。素與義長有隙。亦同之。七月。楠氏出兵攝津。國淸・淸氏卽赴之。議返擊義長。義長聞之。遣子弟拒諸路。而自以兵守義詮。佐佐木道譽夜潛自側門入。見義詮曰。諸將所圖。而將軍右之。何也。然諸將意亦不可測也。今臣與義長議事於外。將軍以其間出逃西山。義詮乃稱疾作就寢。義長罷出。會、道譽來與

語。至夜半。道譽去。義長入臥內。自事。無答者。乃大索之。不得。其兵潰散。遂走歸伊勢。官軍乘弊竝起。衆歸罪於國清。國清懼。東歸。路經義長邑僅免而歸。義長使弟義住與石堂賴・房陣葛木山。義詮令六角氏賴・土岐直氏擊降義住。遂討義長。義長遂降官軍。十六年。山名氏遙應義長。攻取美作。楠氏攻取攝津。殺佐佐木秀詮。秀詮。道譽孫也。初赤松範資爲攝津守護。傳之子光範。道譽譖而奪之。又欲奪加賀於富樫氏。予之於其壻斯波氏。因細川清氏廷爭之。乃止。清氏。和氏子也。時爲執事。赤松則祐亦娶道譽女。清氏欲得則祐管內一邑。以賞其戰士。道譽不許。清氏嘗設宴。請義詮。道譽更爲高會請焉。義詮顧如佐佐木氏。以故兩家相惡。清氏冠其子于八幡祠。命名八幡。源氏故事也。義詮猜之。會、有僧善禱者。自鎌倉來。一日。造佐佐木氏。從容語次及清氏託願書之事。道譽索觀其書。不復返與。明日。袖適伊勢氏。請上義詮。伊勢。足利氏之司傳宣者也。伊勢視其書。咒義詮・基氏。而自代之也。伊勢心疑之。未上也。義詮偶有疾。道譽入而視之。問曰。見清氏書耶。義詮曰。未也。召伊勢而上之。義詮因檢八幡祠。又

正平十七年

得清氏願書。與前書同。於是。陰謀誅之。後數日。清氏詣天龍寺。多率甲士。義詮以爲謀泄。夜遽走新熊野。撤橋而守。清氏大驚。使人訴其寃。不答。乃歸其邑若狹。留弟將氏。以明無異志。不聽。十月。義詮遣兵討清氏。清氏南走。因石堂賴房降官軍。畠山國清亦叛基氏。國清之西也。關東將士多亡歸者。國清盡收其邑。將士連署訴之基氏。基氏誚國清。國清懼。走伊豆。弟義深走信濃。並起兵。應官軍。清氏奏。足利氏兵東拒義長。西拒時氏。臣請乘其虛。克復京師。詔許之。十二月。清氏・賴房等北上。諸將不敢邀擊。義詮與道譽挾北帝。走近江。義詮子春王猶幼。爲從者所抱。走南禪寺。僧良芳匿之衣被中。送致赤松則祐。則祐奉之白旗城。而引兵入援。遣弟氏範襲行宮。姪範實與足利高經等。從義詮於近江。凡一萬餘騎。而無附清氏者。十七年。正月。清氏遁去。義詮乃歸京師。初道譽將走。洒掃其第。大壺貯酒。留二僧。誡曰。來者犒之。已而楠正儀來。僧迎犒之。清氏欲毀其第。正儀不肯。留鎧刀。謝而去。時人稱。道譽老手。博得正儀鎧刀。傳以爲笑。清氏走讃岐。圖再擧。山名師義出兵爲援。義詮令細川賴之擊清氏。今川貞世

新開。揖修本作新關。

擊師義。師義糧盡而走。清氏與弟氏春等據白峰。官軍將中院氏據西長尾。遠近競起應之。賴之方在備中。七月。航歸歌津。先遣其母說清氏曰。公蒙讒而逃。僕亮其心。雖然。自棄舊勳。割離親戚。公亦何忍也。今苟改圖。則聽公自新。邑土如故。僕爲公保之。清氏問答累日。中國兵追附賴之。城壘全成。乃絕清氏。召其將新開直行曰。彼主我客。客利速戰。汝向長尾。使彼分兵。而潛歸與吾夾攻清氏。清氏慓悍。獨身輕出。一戰可擒。直行乃以兵五百。行縱火向長尾。清氏曰。長尾陷。則敵出我背。不可不救。遣氏春以千餘騎赴救。直行射戰至暮。列炬而潛還。黎明。與賴之攻白峯。呼譟挑戰。清氏輕甲馳出。馬負箭殪。與兩騎搏而死。氏春覺直行去。追之。途望白峯。皆賴之旗幟矣。乃走和泉。長尾不攻而陷。四國盡定。而國清・義深又降於基氏。基氏將誅之。國清西走。降官軍。不許。終餓死。義深脫走。後降義詮。於是。降者相踵。大內弘世久屬官軍。略取周防・長門。乃舉二國來降。十九年。山名時氏・仁木義長・石堂賴房・吉良滿貞等皆降。義詮皆宥其罪。基氏亦思上杉憲顯之育己也。招之信濃。授以越後守護。逐舊守護清禪可。禪

徵。正本作召。

正平二十一年

正平二十二年

可拒憲顯。不克走下野。已而基氏召憲顯於鎌倉。禪可又要擊之。基氏怒。自將討之。大戰于苦林。破之。禪可遁走。乃以憲顯執事。以代畠山國清。細川清氏之敗。衆推斯波氏。因代執事焉。氏因。高經子。道譽壻也。高經短氏因。薦後妻子義將執事。而己決之。高經及覩北條氏盛時。衆期其治平。已而所爲多失人望。初尊氏・直義賦文武邑入五十分一。充軍興費。高經倍之。如建武故事。衆怨之。義詮造坊門第。課諸將助工。赤松則祐功緩。高經罰奪其邑一所。造五條橋。道譽董役。徵京師戸租。久而不成。高經捐私金立成之。後高經宴諸將於幕府。道譽乃託事不會。而私張伎樂于大原。高經卿之。會道譽不納賦二歲。因奪其攝津守護。道譽終與則祐等。共譖高經。義詮卽密徵兵備之。高經入見。訴冤。義詮慰解。遣歸越前。二十一年。十月。遣山名時氏・畠山義深等。攻高經父子。二十二年。七月。高經病死。義將降。高經既死。義詮欲以道譽執事。基氏薦細川賴之代之。更稱執事。曰管領。十二月。義詮有疾。使幼子春王監政。是爲義滿。義詮遂薨。義詮官至正二位大納言。是歲。夏。基氏亦病卒。基氏官至從三位左兵衛督。基氏

川越本・拙修本並義滿之上有二十二年四字。川越本標註云。二十二年四字複出。按二十二年一(拙修本)作二十三年。下二十三年作二十四年。皆誤。

擇。正本作撰。

擊。川越本・拙修本並作巾。

慝。川越本・拙修本並作偖。

正平二十三年 二十三年。拙修本作二十四年。

建德二年

材武。爲義詮鎭關東。使不失尊氏舊業。時論惜之。其子金王嗣立。是爲氏滿。義滿立。甫十歲。細川頼之爲管領焉。初義詮臨終撫義滿。謂頼之曰。予汝一子。又指頼之。謂義滿曰。予汝一父。頼之既以遺託輔幼主。内外望治。乃擇方正之士。文武備具者。侍其左右。又擇滑稽者數人。削髮穿大袴。佩長刀。大擊日以童坊。出入府中。爲將士弄客。將士中有便佞者。頼之輒使其所善衆呼之曰有髮童坊。以斬辱之。吏相懲戒。士風大革。頼之又作五箴。授將士曰。毋偏愛憎。毋修恩仇。毋枉是非。毋僥倖。毋私慝。又使今川・小笠原・伊勢三氏。草將府禮式。擬尊氏・義詮所下文書。其出於高氏・佐佐木氏宣達者。漸收奪之。世稱基氏善知人。義詮善任人云。基氏臨終。亦託氏滿於上杉憲顯曰。謹奉京師約束。莫或倍畔。氏滿少於義滿一歲。憲顯盡心輔翼。關東倚安焉。二十三年。義滿冠。頼之爲賓焉。義滿遂襲征夷大將軍。是歲。上杉憲顯病卒。養子能憲代爲執事。先是。有平一揆者。叛據河越。憲顯奉氏滿討滅之。宇都宮氏叛。又擊平之。及能憲代執事。新田義宗等起兵。能憲與弟憲春。擊獲義宗。建德二年。菊池武敏起兵肥後。頼之

文中元年
文中二年
天授四年
天授五年
天授六年
弘和元年
弘和三年

以今川貞世爲鎭西探題。令大內義弘助焉。以備之。又命弟賴元。助南朝降將。以攻吉野。」文中元年。北朝太子受禪。是爲後圓融帝。」二年。遣細川氏春攻吉野。獲藤原隆俊。是歲。直冬自石見來降。」義滿起第于室町。稱花御所。造四足門。天授四年。徙居焉。」五年。義滿出軍于東大寺。遣山名義理・山名氏淸南侵。拔土丸城。益召兵於近江・美濃。美濃土岐康行叛。因又召兵於鎌倉討之。是時。憲春爲鎌倉執事。遣其弟憲方。將兵而西。會康行降。乃止。而氏滿聞將士多怨望義滿者也。竊有異謀。謀寖泄。義滿招還南師。潛賜手書於憲春。諫氏滿。氏滿弗聽。憲春憂懣。自殺。氏滿驚悔。謀遂解。以憲方爲執事。」上杉・細川二氏。久執權於東西。義滿漸長。頗忌賴之。近臣從而惡之。四月。義滿集兵於幕府。遣使者。就賴之第。罷職就國。以斯波義將代爲管領。賴之卽日上途。尋削髮。號常久。作詩曰。人生五十愧無功。花木春過夏已中。滿室蒼蠅掃難去。起尋禪榻臥淸風。已而義滿思其勳勞。命總管南海焉。」六年。山名氏淸大破官軍于南海。弘和元年。又大破之。南海盡定。獨吉野隸南朝而已。」是歲。北朝太子受禪。是爲後小松帝。」三年。帝

元中四年

元中五年

元中六年

元中七年

寖。川越本・撊修本竝作浸。

元中八年

幸室町第。元中四年。帝冠義滿理髮。攝政藤原良基加冠。以爲恒例。良基歷仕六朝。中立自全。最與義滿親善。五年。義滿遊紀伊及駿河。圖東南也。六年。又欲圖西海。游嚴島。召見賴之。命具舟赴鎭西。遇風而還。至讚岐。乃屛人與語。久之。賴之感涕而出。義滿遂歸京師。當是時。四方漸定。諸宿將如赤松則祐・佐佐木道譽。前後死亡。其嗣皆孱。獨山名氏聲威甚熾。初山名時氏叛。略取五州。降。因爲其守護焉。八子師義・義理・時義・氏清・氏冬・義數・高義・氏重。皆顯於世。富最諸將。世相語曰。欲大其家。莫善於叛。及義理・氏清又攻取南海。凡山名氏所管跨十州。世呼曰六分一氏。謂六分海內而有其一也。義滿惡之。常陰計誅鋤之。時義承師義後。其二子。時熙・氏幸。分襲但馬・伯耆守護。師義子滿幸寖。譖之。欲奪其國。七年。義滿命氏清與滿幸赴討時熙・氏幸。氏清臨發。請曰。彼降而可赦。則臣先諭之使來。不必赴討也。義滿曰。降不赦也。乃往。擊走之。義滿因分賜二州於氏清・滿幸。又令細川賴之討平備中。八年。春。召賴之京師。以其養子賴元爲管領。而賴之決事焉。會時熙・氏幸來訴寃。義滿欲許之。十月。氏清請義滿於宇

幷。拙修本作斥。

乃。正本作迺。下同。

治別第。觀紅樹。先期一夕。氏清發和泉北上。將視具也。滿幸邀之淀。告曰。如聞幕議復時熙・氏幸舊領。詰朝之會。將面命之也。公宜稱疾辭會。氏清怒曰。何與去歲言相反也。被輕侮如此。何拜趨之爲。乃使人要義滿於途。曰。臣俄獲疾。不能迎候。義滿已至宇治。廻駕而歸。一行驚異。滿幸娶氏清女。尤見親愛。所言皆聽。自在京師。而總管四州。管內有上皇邑。奪而幷之。義滿數下敎還納。滿幸佯迎上皇使。而陰誡邑人逐之。義滿大怒。命滿幸罷就國。曰。汝宿衞無益。宜去據汝國。十一月。滿幸歸丹後。京師指目快之。滿幸慚恚。潛往界城。說氏清曰。近日之政。公謂之何。去歲使吾曹討時熙・氏幸。而今歲赦之。將反討吾曹。是非剪枝絕根之計乎。今闔族戮力。以擧大事。在京諸將。誰能敵我。苟得取京師。附者必多。如土岐・富樫諸族。方懷怨望。必先衆來屬。公速揚兵。以除細川氏。爲辭。事無不成矣。氏清素有異志。自負材武。土岐康行之叛也。義滿卽討平之。氏清聞而笑曰。康行易與耳。至如乃公自不然也。於是。遂納滿幸言。合謀約期而別。各自集兵。欲夾攻幕府。幕府未之覺也。議曰。氏清亡狀。不可不譴責。而事端於復邑。

遊佐。正本作游佐。下同。
川越本・拙修本竝京師上有於是二字。
衆。正本作眾。
前。川越本作進。
街。拙修本作衢。

邑不果復。則是予奪聽於下也。於是果復時熙・氏幸之邑。遂議討氏清。氏清聞之。故使使謝前日之罪者再三。義滿徵誓書宥之。事卒解。十二月。丹後人上變。告滿幸反。幕府未信。畠山基國將遊佐某。又白河內告氏清大修戰具將發。基國。義深子也。已而氏冬出奔男山。義理又舉紀伊兵北嚮。京師大擾。義滿以書諭義理。義理不聽。於是義滿乃親臨古山滿藤第。會諸將議戰。以視其嚮背。諸將皆至。衆議不決。或曰。審聽彼輩所訴以舍之。必無事矣。義滿曰。氏清蓄異志日久。今日之擧。非必有所訴。卽今日舍之。明日復反。吾聞。彼輕易諸君曰。幕府諸將誰能敵我。吾爲諸君恥之。不可不誅也。意彼必謂我據東山叡岳也。吾乃親出陣東寺。而諸君盛兵於內野。彼見內野軍。必來衝焉。則鼓螺相應。夾而擊之可一戰而殲也。衆皆然之。一色詮範前曰。臣敢獻異議。夫元帥在後。諸將前進。是戰之宜也。前議反之。且東寺・內野。地勢隔絕。難於策應。不如諸將陣內野。屯一隊于東寺。而以臣第爲牙營。則彼必悉銳赴我中軍。其雋可獲也。彼卽自東洞院北上乎。則諸將迭出。要之街巷中。東寺兵尾擊其後。可以鏖之。義滿曰。

褰。正本作搴。
疏。正本作疎。下同。
毋。川越本・拙修本並作無。
繞。川越本・拙修本並作遶。
千餘騎。川越本標註云。一作二千騎餘。

詮。明早。遣今川泰範・六角滿高以八百騎據東寺。而自與弟滿詮率三千騎出陣于詮範堀川第。烏帽直垂。帶刀而不甲。討家僕之禮也。諸將皆偏甲。以次而前。細川賴之・細川賴元・畠山基國・赤松義則。備其西北。佐佐木高詮・斯波義重備其西南。以大內義弘爲先鋒。兵凡五千餘。環內野而陣。初氏清・滿幸期是月二十七日入京師。而遊佐某褰河內岳山。以要氏清兵。兵後期二日。至男山。氏清在男山。召其宰小林時直。謂曰。吾爲新田氏支族。卽代足利氏。誰爲不可。吾得爲將軍。以汝執事。時直流涕曰。臣欲諫止此擧。而久被疏斥。乃今日得見耳。今諸將之富。誰如君家者。背恩擧事。神豈右之。卽獲克乎。諸將安能爲我下。臣惑嚮背焉。獨有前死而已。若夫執事職。則命之他人。氏清退。囑義數曰。時直意色甚決。汝與之耦。毋使浪死。義數意亦欲速死。唯唯而退。滿幸臣大足某。亦諫滿幸。滿幸不聽。卽夜氏清以二千騎浮橋濟淀。使氏冬以三百騎繞鳥羽路會軍。而滿幸千餘騎。濟梅津。欲自後應之。已而滿幸夜迷失道。氏冬軍又無鄉導。徑淖中。相驚而退。氏清待報不至。乃遣義數・時直先進。呼譟逼義弘。義弘陣大

宮。謂其兵曰。我曹數樹功於鎭西。至戰上國。今日爲始。汝等勗之。縱射手二百。而三百騎下馬。栖進。接戰數合。死傷相當。義數・時直顧馳義滿軍。義弘曰。使敵隻騎過我營而北。我之罪也。走而遮之。手揮薙刀。斬時直。義數得間北馳。踰垣而墜。爲牙兵所獲。義弘馳赴中軍。上言曰。臣殊死戰。而氏清大兵繼至。請賜援兵。將軍喪臣。誰繼臣者。義滿視其鎧馬朱殷。壯之。手賜佩刀曰。更以此一戰。因麾義則赴援。滿幸至梅津。聞大宮戰已酣。則疾進。與賴之・基國戰。高詮來援。擊土屋黨。殲之。斬大足。而基國等兵不利。義滿親赴援之。大呼曰。盍速梟豎子。諸將爭進。滿幸遂敗走。義數・滿幸既敗。敗卒走。報之於氏清。氏清乃與氏冬合而進。義則逆戰。其弟滿則死之。山名時熙以事端起自己也。力戰當氏清。悉亡其兵。走歸於義弘。義弘・義則交馳。使乞援於義滿。義滿顧左右。無可遣者。詮範以軍吏在麾下。自請而往。勝敗未決。於是義滿建牙旗而進。氏清兵望見曰。將軍至矣。乃潰奔。詮範與子滿範注目氏清。前鬭。遂斬之。及其義兒辰房（トキフサ）。辰房。氏重子也。氏清首至麾下。義滿顧謂衆曰。諸君視謀反逆者終如何也。時十二月晦

元中九年

明德

對。川越本作答。

口也。明年。正月。割山名氏地。賞諸將。賜和泉・紀伊於義弘。隱岐・出雲於高詮。美作於義則。丹波於賴元。山城於基國。賜詮範以今富莊。義則。則祐子。高詮。道譽曾孫也。時北朝年號明德。謂之明德之役。滿幸之走也。有詬而止之者。爲不聞而逃。二月。歸伯耆。使其將鹽冶師高守出雲。高詮將吏來誘以利。師高答曰。山名氏所以至此者。失義於足利氏也。吾亦不欲失義於山名氏。吾父分自與吾異。將出應命。幸善視之。乃諭其父出降。送至城下。既訣而自殺。曰。吾不忍與父鬭。城乃陷。其兵走報滿幸。滿幸聞氏冬在因幡。又走歸之。氏冬素有降志。欲迎擊滿幸以藉口。滿幸終削髮逃鎮西。後氏清五歲而被獲誅。氏清有二子。滿氏・時淸。初以父命逃。欲歸滿幸。而不相遇。亦削髮南走。欲見其母。母慍不見。伏刃死。二子走歸義理。義理乞降。義滿不許。令義弘之國。紀伊人盡附義弘。義理航海逃。氏冬乞降。陳其初無叛志。特許之。於是。事即定。三月。義滿欲率諸將賀捷于男山。細川賴之疾篤。義滿止行。使賴元問其所欲言。賴之對曰。近者山名氏族。動蔑教命。臣常憂之。今既獲焉。天下誰復爲將軍之患者。臣可以瞑也。乃卒。

義滿親臨其喪。垂泣送之。爲手寫佛經。又設法會于內野。弔陣亡將士。初氏滿聞氏清叛。發兵。將西上爲其黨援。聞其敗死。乃止。先是。新田氏餘黨小山義政。殺宇都宮基綱。氏滿遣上杉憲方。攻降義政。義政復叛。氏滿自將擊殺之。其孤稚狗又起兵於陸奧。復攻殺之。其黨田村則義・小田五郎者。亦起兵。遣上杉朝宗擊夷之。獲新田氏遺孽二人。送京師斬之。義滿乃加封氏滿。以陸奧・出羽。今川貞世等。亦擊平少貳冬資等。於是四方大定。獨楠氏遺孽。保守大和・河內之間。以爲吉野藩蔽。義滿使畠山義深・大內義弘圖之。義深盡拔楠氏城壘。吉野孤立。義弘乃以義滿意。奏請南朝。講和弭兵。駕還京師。授器於北朝。則自今以後。兩統更立。猶北條氏時。帝許之。乘輿北還。義滿以北朝意。欲用來降禮。帝欲用禪讓禮。物議洶洶。六角滿高謂義滿曰。器在彼。彼乃眞天皇矣。君第聽之。滿高。義滿弟。爲六角氏賴子者也。義滿乃迎駕。御于大覺寺。閏五月五日。後小松天皇受神器於後龜山天皇。後龜山。卽後醍醐皇孫也。自後醍醐南遷。凡五十有七年。而北朝五帝。改元者。自曆應至明德。十有七。天下以足利氏故。概奉其

川越本・拙修本竝無於字。

五月。川越本・拙修本竝作十月。

應永元年
應永二年
應永四年
令。川越本作使。
應永六年

正朔。至是。與南朝合。物情翕服焉。後小松天皇應永元年。義滿請讓征夷大將軍於長子義持。二年。義滿削髮。號道義。營北山別業。使諸將助役。起金閣。四年。徙焉。義持居室町第。而內外之事。取決於北山。十一月。氏滿卒。子滿兼襲關東管領。當是時。足利氏威及外國。朝鮮數遣使者鄭夢周等。造今川貞世。請修隣好。是歲。使者遂來京師。義滿令大內義弘接待之。義弘嘗說貞世曰。方今之勢。弱者被誅。强者免禍。公盍與我及大友氏連兵以自强。貞世不聽。義弘反與斯波義時等。倶譖貞世。義滿乃更貞世約束。九國皆危疑。菊池・大村氏竝起兵。義弘擊平之。兵力益强。陰與滿兼合謀。東西相援。以圖義滿。六年。滿兼密招貞世。貞世封其書。上義滿。義滿召義弘。義弘不來。十月。義弘遂帥周防・長門諸國兵。至界城。土岐詮直起美濃。京極某起近江。山名氏淸二子起丹後。竝應義弘。而滿兼亦出陣武藏府。宣言援義滿。義滿於是急召貞世曰。吾愧見公也。時幕府兵寡。土岐賴益・六角滿高等。往討美濃・近江。在者皆不堪戰。義弘曰。氏淸唯攻京師。自疲兵馬。所以敗也。因爲守計。修塹壘。起樓櫓。自巡視曰。雖有百萬衆。不

此。川越本作是。

能拔已。義滿先遣僧中津詰起兵之由。義弘對曰。吾自十六歲在鎮西。大小二十八戰。夷氏淸。歸南朝。功勞匪尠。昨年之役。介弟又沒。而幕下不恤其孤也。且聞有削國之議。密命少貳・菊池誅我。而頻頻召我。我不能無疑。吾已與鎌倉公約。將入諫幕下虐政也。中津歸報。義滿笑曰。奴輩自負其强。不知乃公實使然焉。乃自率管領以下諸將。出陣東寺。遂進至男山。近畿將士來集者三萬餘騎。以細川賴元等十一將將之。往攻界城。城甚堅固。義滿令諸將息戰築長圍。至十二月。乃縱火四面而進。樓櫓皆倒。大戰良久。義弘走出。誤入管領畠山基國軍。基國子滿家與鬬。斬之。義滿乃賜紀伊於滿家。賴元子滿元有功。賜之和泉。謂之應永之役。土岐詮直等皆平。初詮直之舅曰康行。康行者。賴康子也。天授中。襲美濃守護。其弟滿貞在京師。欲奪兄職。譖曰。詮直謀反。康行助之。義滿遣滿貞及從弟賴益。往討降之。宥康行。逐詮直。以故詮直遂死於叛。近畿既平。滿兼乃引兵還鎌倉。義滿諜知其謀。或因問貞世曰。貞世子弟留守遠江者與謀焉。彼曩被命。不即來者以此。貞世懼。走歸遠江。義滿怒。欲討貞世以及滿兼。滿

應永七年

拙修本元璋下有二數字。

託。川越本・拙修本竝作托。

應永八年

應永九年

兼執事上杉朝宗・百方講和。義滿乃賜滿兼以足利莊。凡與謀者皆釋不問。貞世退居藤澤。上杉憲定使人謂貞世曰。子之退居。適足以招疑耳。貞世乃歸遠江。憲定。憲方子也。已而義滿思其功勞。召至京師。待之如初。踰歲而卒。貞世頗涉書史。著書譏切時政。往往有中云。初貞世父範國仕尊氏。爲駿河・遠江守護。命貞世襲領。貞世不受。使兄範氏領駿河。襲至姪氏家・姪孫泰範。及義滿時。乃割駿河數郡。加賜貞世。泰範意貞世所請。與義弘俱譖之。至是。義滿終令貞世養子仲秋襲領遠江。如細川賴元故事。七年。大內義弘子持盛來降。以其嘗諫父宥之。削其封之半。義滿性豪侈。而數平亂逆。志益驕。待將帥甚倨。朝臣往來其家者。或以家隸遇之。其削髮之歲。適叡山。儀準法皇御幸。又喜土木。創寶幢・相國諸禪寺。定爲五山。置僧錄司。僧中津・妙葩・祖阿・周信等。皆見厚遇。先是。我西南不逞之徒。侵擾外國。義詮時。元主令韓人來請。爲戢之。元亡。明興。明主元璋亦數託僧來請。八年。五月。義滿私遣祖阿。通好於明。參議菅原秀長草書。書辭甚恭。九年。明主使僧道彝齋書及冠服。封義滿爲日本國王。義滿受之。至足

應永十五年

利氏中世。使聘往來。皆以王稱。義滿又多內嬖。生少子義嗣。愛之。欲廢義持。未果。先是。帝再幸室町第。十五年。三月。請幸北山。義滿自被法服。攜義嗣奉迎。拜義嗣爲五位左馬頭。遷四位少將。四月。冠于宮中。儀準親王。自是嫡庶不相善。識者譏之。然尊氏義詮之世。諸將狃恩。叛服無常。自氏淸義弘伏誅。無不畏服者。世稱義滿生歲戊戌。字皆從戈。故能以戈戟平天下也。

日本外史 卷之七 終

日本外史 卷之八

足利氏正記

足利氏中

應永十六年

川越本標註云。一無終字。遂作後。作。川越本作爲。

五月。義滿薨。義滿初敍從五位下。任左馬頭。累遷從一位左大臣。兼右近衛大將・右馬寮御監。終至太政大臣。准三宮。初久我氏爲源氏長者。充淳和・奬學兩院別當。至義滿時。乃屬之於足利氏。終足利氏之世。其官爵敍任。例概如此。而至太政大臣者。止於義滿。義滿之薨。詔贈太上皇號。義持惶懼。辭不受。明主謚義滿。曰恭獻王。義持受之。明年。六月。滿兼卒。初氏滿至從三位左兵衛督。而滿兼以從四位下左兵衛佐終。遂以爲例。滿兼二子。持氏・持仲。持氏爲嗣。先是。宇都宮氏廣作亂。斯波持詮爲陸奥探題。擊斬之。獻首鎌倉。滿兼賜持詮以氏廣邑。以賞之。伊達政宗作亂。滿兼遣執事上杉氏憲。擊平之。

應永十八年

十八年。飛驒國司藤

飛驒。正本作飛彈。下同。

應永十九年

應永二十年

應永二十一年

應永二十二年

川越本標註云。吉良岐爲二家。稱兩吉良。故充七數。又按吉良上疑脫兩字。

原尹綱兵起。義持遣京極高數。擊平之。十九年。帝讓位於皇太子。是爲稱光帝。諸南朝遺臣。請立後龜山後。如約足利氏議。立南朝皇胤者。非我家之志也。終不聽其請。於是。諸國兵起。二十年。伊達氏・懸田氏起於陸奧。持氏令畠山國詮攻之。二十一年。北畠氏・關氏起於伊勢。義持令土岐賴益攻之。明年皆平。當此之時。關東兵力倍於京師。而天子廢立。公卿易置。則京師專之。威權無比。世俗呼曰公方。初義滿定幕府官政。武衞・細川・畠山氏。更爲管領。謂之三管。山名・一色・京極・赤松氏。更爲侍所別當。謂之四職。武衞。卽斯波氏。京極。卽佐佐木氏也。武田・小笠原氏。更司弓馬・禮式。吉良・今川・澁川氏。更爲武者頭。伊勢氏爲奏者。謂之七頭。關東亦擬之。自稱曰公方。故上杉憲房之後。世居鎌倉山內。憲房兄重顯。其後世居扇谷。稱兩上杉。更爲管領。而故氏滿弟滿直。管陸奧・出羽。號曰三管。千葉・小山・長沼・結城・佐竹・小田・那須・宇都宮八族。曰八館。當持氏之時。上杉氏憲執事。持氏與之有隙。氏憲辭職。以上杉憲基代之。憲基。憲定子。憲房玄孫也。氏憲。重顯玄孫也。持氏叔父曰滿隆。頗有聲望。養姪滿仲爲子。氏憲說滿

應永二十三年

川越本標註云。佐介一作山內。

奔。川越本作走。

應永二十四年

應永二十五年

隆曰。公方耽溺酒色。不可統師。而憲基爲政。又有偏私。匡邪靖難。非君而誰。君若擧事。臣請輔之。乃矯義持敎令。密招將士。將士競附。二十三年。十二月。氏憲將兵。奉滿隆・滿仲。以圍持氏。持氏大驚。遽騎馬而走。入憲基佐介第。憲基令族氏定拒之。衆寡不敵。持氏夜出西走。從士多爲追兵所殺。至藤澤道場。氏定自刃。憲基奔越後。諸敗軍聞持氏在伊豆國淸寺。皆來集焉。狩野介某。黨於氏憲。來攻破之。持氏走駿河。依今川範忠。告急於京師。京師方流言。大納言義嗣以不得立。竊懷觖望。與氏憲通謀。欲伐義持。義持迫義嗣使削髮。幽之于相國寺。下敎關東將士。令救持氏。憲基起兵越後。江戶氏・豐島氏・二階堂氏。並起兵武藏。以討氏憲。氏憲遣兵攻之。敗歸。氏憲壻岩松持國。起兵上野。以應氏憲。二十四年。正月。氏憲與持國夾攻武藏。勝而平之。既而持國驕恣。將士離心。氏憲終敗歸。而附持氏者日衆。持氏乃以今川氏・大森氏・葛山氏兵。攻鎌倉。復之。滿隆・滿仲・氏憲。及氏憲宰長尾氏春等。皆自殺于雪下僧舍。持國聚殘兵。與持氏將舞木宮內戰。兵敗被擒。明年。義嗣暴卒。二十九年。佐竹某叛持氏。持氏與戰于

應永二十九年

應永三十年

應永三十一年
辯。正本作辨。

應永三十二年
卒。拙修本作薨。

應永三十四年

正長元年
川越本標註云。至上諸本脫官字。當補。

比企谷。斬之。小栗滿重・宇都宮持綱。又叛據結城。持氏令上杉氏・小山氏擊之。明年。持氏自將攻結城。拔之。斬滿重・持綱。京師援軍至駿河。聞事平而歸。持氏凱旋。至武藏府。聞義持庇故氏憲孤子某也。怨之有貳心。欲移兵西上。三十一年。三月。義持遣僧服西堂。至武藏。諭持氏弭兵。持氏不聽。西堂往來辯說。請義持・持氏約爲父子。至九月和成。持氏乃歸鎌倉。義持性媮惰。時會京畿無事。以游宴爲事。使三管・四職更治具招請。先是一歲。讓軍職於長子義量。而自削髮稱道詮。三十二年。義量卒。義持再聽政。寵赤松持貞。持貞。貞範孫也。初貞範弟則祐。以功領播磨・備前・美作。以傳於子義則。三十四年義則卒。四子。則友・滿祐・祐之・義雅。則友夭。滿祐爲嗣。襲領三州。義持欲削其所領予之持貞。滿祐怒。自焚其第。奔歸播磨。義持遣細川持元・山名滿熙。往擊之。諸將多與滿祐連姻。不欲往。十月。連署訴持貞亡狀。義持不得已。令持貞自裁。而赦滿祐。歸京師。義持疾作。正長元年。正月。薨。至內大臣右近衞大將從一位。初義持有六弟。懲義嗣之禍。皆以爲僧。及義持疾篤。無嗣子。幕議。或欲擇其一人爲嗣。或屬意於持氏。

川越本標註云。幕一作衆。

永享元年

永享二年

拙修本二年上有永享二字。

持氏亦冀立。管領畠山滿家建議。不若質之神也。自赴石淸水祠。鬮之。得義圓。義圓者。義持第三弟。爲青蓮院僧正。於是。蓄髮。及義持薨。入室町爲喪主。三月。敍爵。以其髮猶短。裹頭以見諸將。更名義宣。後更義敎。七月。稱光帝崩。義敎迎崇光帝曾孫於伏見。立之。初崇光南遷。後光嚴以太弟卽位。崇光還居伏見。欲立其子榮仁。囑之於細川頼之。頼之不奉詔。立後圓融。以至於帝。伏見氏日微。上皇憫之。下宣。以榮仁子貞成爲無品親王。中外皆稱。有如宮車晏駕。親王必立也。帝聞之弗懌。貞成削髮以示意焉。貞成子曰彥仁。及帝有疾。上皇與義敎決議。令管領滿家迎彥仁立之。是爲後花園帝。後龜山皇子冀立。而不得。怒。奔伊勢。明年。北畠氏・越智氏。竝起兵。義敎令土岐持數攻北畠氏。破之。以皇子歸。寘之嵯峨。令畠山持國攻越智氏於高島城。未能下。是歲。改元永享。朝議謂。正長之號。於王室將家。皆爲凶也。而持氏慍不得爲將軍。猶私用正長。曰。吾何屈於還俗將軍乎。義敎亦自知天下多不服己者。鋭意爲政。待諸將不假辭色。軍國之事。多所釐革。二年。徙鎭西豪傑。以充京師。又欲圖東南。三年。遊伊勢及紀

永享三年
永享四年
永享八年
永享九年
永享十年
君。拙修本作若。

伊。四年。遊駿河。館今川範政。宣言觀岳。是時。越智氏猶據高島城。城固不拔者數歲。義教益遣兵攻之。義教學武技。從小笠原政康受射。八年。政康與村上頼清鬪于信濃。頼清輒敗。乞援於鎌倉。持氏欲援之。憲基子憲實爲執事。諫曰。彼非我管國也。何關我事哉。且我援頼清。則將軍必援政康。是以兄弟之邦。開天下之爭也。持氏憚憲實權力。勉從之。上杉憲直・一色直兼。有寵於持氏。因間憲實。明年。四月。持氏令憲直・直兼託援頼清。徵兵於武藏。欲誅憲實。府下騷擾。兵士大集於山內。持氏懼。自往山內。面諭憲實。歸罪於憲直。逐之。憲直逃入藤澤寺。事輒釋。十年。持氏冠其子賢王。欲行禮于鶴岡祠。如遠祖義家故事。憲實又爭曰。冠于室町。受將軍偏諱。禮也。自先公至公三世。以爲恒焉。今君乃變之。不可。持氏曰。還俗將軍何足以冠吾子哉。冠吾子者。非今上。則伏見・龜山二王而已。遂冠祠前。命名義久。諸將皆入賀之。獨憲實稱疾不入賀。持氏怒。欲發兵攻憲實。憲實乃奔上野。據平井城。明日。持氏卽遣一色時永。將兵往討憲實。遂留三浦時高。輔義久。守鎌倉。而自將出陣武藏府。憲實告急於義教。義教奏。請討

永亨十一年

往。拙修本作徂。

永亨十二年

持氏一行詔。副以敎書。使故上杉氏憲二子持房・敎朝齎之。以徇東北三道。東海・東山兵。從持房。自箱根進。北陸兵。從敎朝。直赴平井。合於憲實而南下。陣于分陪。持氏分兵拒之。九月。持房等。與持氏兵。戰于箱根。不利。又戰于早川尻。破之。進逼鎌倉。十月。三浦時高叛持氏。攻義久。義久與祖叔父滿貞。走匿扇谷。梁田某。名塚某。力戰死之。其他將士皆率歸憲實。持氏窮蹙。十一月。持氏遂削髮乞降。憲實使長尾芳傳徙持氏于永安寺。置兵監守。迫憲直・直兼使自殺。盡殺其從士。自與關東將士連署。請義敎宥持氏死。使者十餘反。義敎竟弗聽。十一年。正月。憲實以義敎令遣兵。令諸軍圍永安寺。持氏縱火寺塔。與其妻俱自殺。義久・滿貞皆死。持氏少子二人。曰春王・安王。皆髫齓。爲乳母長尾氏所挈。逋走日光山。義敎遣使鎌倉。勞諸將。以憲實管領東國。憲實恐負殺君之名也。自往永安寺。伏謝于持氏影前。抽刀將自殺。爲從者所止。不果。乃削髮。退居國淸寺。使弟淸方與敎朝同行管領事。四索持氏餘黨。十二年。正月。春王・安王潛遣使。諭結城氏朝曰。請假子之力。擊上杉氏。以復父仇。氏朝謂其將士曰。吾被佐公

川越本標註云。一無若字。

不。川越本作弗。

勵。川越本・拙修本竝作厲。

可。拙修本作然。

等。川越本・拙修本竝作輩。

嘉吉元年

恩眷。而不能救其死。今兩郎君託我以大事。是武人之榮也。吾其可不出力生死以之。乃令其子光久迎致二孤。因大聚宗族。修結城・古河二城。分兵守之。持氏遺臣。一色・野田・大井・吉見諸族。竝起應之。事聞京師。義教授旗於持房。赴鎌倉。再發東國兵。以助淸方。七月。淸方將諸軍。圍結城。氏朝力拒。數破上杉氏軍。義教益發兵。又起憲實視師。憲實辭。不聽。憲實乃率東北三道兵。攻氏朝。氏朝勉勵士卒。嬰城固守。憲實等不能拔也。當是時。越智氏城已陷。而北畠氏復起兵。義教使人就講和焉。曰。吾定關東。然後剪滅之。義教季弟爲僧。曰義昭。後龜山皇子在嵯峨大覺寺者。義昭與之親善。於是。義昭說皇子曰。東西兵亂。皇子欲復舊業。是時爲可。北畠氏雖既和。聞皇子起。必復起兵。土岐・一色等。皆怨將軍。其來附必矣。又密使人約菊池・大村諸族起兵。遂爲聲援。菊池答曰。結城不下二歲者。天下必動搖。可以乘而起也。義昭乃閉門蓄髮。義教怪其久不出。廉問知實。乃遣兵且捕之。義昭逃亡。不知所之。乃圖其形索諸國。購以千金。嘉吉元年。三月。義教詣伊勢神祠。疑北畠氏匿義昭。親詗察之也。四月。結城・古河皆

陷。氏朝父子戰死。城兵悉死之、以脫二孤。二孤逃走。爲上杉氏兵所獲。獨持氏季子永壽王。走信濃。氏朝季子成朝。走常陸。上杉氏兵檻二孤而西。五月、薩摩人亦獲義昭首而東。先至京師。首壞敗不可辨。義敎召義昭所昵童子、視之。童子曰。果僧正。則其二齒缺矣。驗之果然。義敎大喜。乃遣使者。迎二孤。戮于途。遇之垂氷。護將長尾某。乃入道傍佛寺。進浴二孤。二孤亦知其意。正坐受刃。春王年十三、安王年十一。首至京師。義敎召其乳母。問持氏子猶在乎。乳母不答。嚙舌而死。初尊氏與直義謀曰。義詮不武。難以寄重任。宜令基氏領關東。以鎭護之。乃立基氏輔義詮。曰子子孫孫相輔。勿相背也。然義滿・義持皆有滅鎌倉之志。至義敎乃能成之云。基氏之家既敗。而義詮之家亦自是亂矣。義敎爲人猜暴。以盛氣馭下。既滅關東。意益驕。自謂爲父祖所不能爲。天下無復足畏者。先是、義敎襲職而三歲。侍女三人有罪賜死。赤松滿祐女與焉。或曰。滿祐怨望。有異心。義敎聞而囚之。滿祐逃奔播磨。遣兵攻之。滿祐力窮。削髮出降。宥之。其七歲、遣一色義貫・土岐持賴。攻越智氏。義敎嬖姬小辨者。其家與一色氏有怨。因

短。川越本・拙修本竝作矮。

讒義貫通款越智氏。義教卽命武田信榮。就軍中誅義貫。夷其族。又疑持賴。命細川持常殺之。諸將士人人自危。而滿祐最疑懼。滿祐之與持貞爭也。及持貞死。遂幷其邑。持貞兄子貞村。幼喪父。邑除。義教見其美姿容。收爲近侍。甚寵之曰。家兄庇其庶。吾則庇其嫡。自有別也。因疏斥滿祐。滿祐形貌矮陋。義教戲呼之。曰三尺入道。滿祐嘗侍宴。醉舞。謠曰。軀短勿侮。三國之主。義教愈憎之。義教畜猴。每滿祐入。輒使人放猴爬其面。滿祐拔刀斬之。心深怨義教。而不形顏色。時幕府多怪。有狐夜鳴屋上。宿直者或闞空室中。見有偶人數十爲鵜飼。鵜飼者。散樂曲名也。忽而不見。義教略不加意。貞村已壯。寵之不衰。遂欲割滿祐邑予之。將就其第諭意。從容謂滿祐曰。聞汝園之梟乳矣。可一觀否。滿祐佯喜。請期。期六月廿四日。滿祐從子曰教祐。爲幕府近臣。微聞削邑之議。以告滿祐。滿祐大恚。於是。召長子教康・家臣渥美等議曰。吾宗積功於將家。將家遇我。亡狀非一。我伏受其制。何所底止乎。吾欲先發行大事。汝等爲我努力。教康等贊之。乃伏甲三百於第中。而請義教。義教卽往。置隨兵于門外。獨與朝貴諸將入。置

斫。川越本作斬。

川越本標註云。信貫。或作信賢。或作信繁。

酒高會。觀散樂。樂至鵜飼。時已薄暮。第中有呼曰。廏馬逸矣。因急闔門。門闔而甲發。義教將起。教康・教祐耦進。執其左右手。伏之曰。今日之事。公自取之。渥美自屏後出。揮刀斫其首。一坐拔刀起。起者輙見殺。相殺者又數十人。斯波義廉・大內持世。被創。越垣而逃、隨兵皆潰、滿祐既弑義教。欲待府兵來討戰死。而諸將士悉聚幕府。惶惑不知所出。且日。滿祐乃以三百騎。出京師。至攝津中島邑。葬義教首于崇禪寺。而西歸播磨。據白旗城。自是幕府以鵜飼為凶。不列樂府也。義教官至左大臣右近衞大將從一位。薨年四十八。七月。持世創劇。卒。八月。畠山持國。滿家子也。與管領細川持之等議。立義教子義勝為嗣。甫八歲天子詔義勝討滿祐。乃遣細川持常・赤松貞村・武田信貫。自播磨。山名持豐・山名教之、山名教清自美作。兵凡五萬人。滿祐聞貞村來。大喜曰。豎子來。吾所願也。乃遣兵逆擊于蟹坂。大敗之。持常與滿祐有姻。自以一軍居前。故逗撓不進。九月。持豐進至法華山。山太險、滿祐兵扼守其隘。懸巨材而竢。持豐患之、夜使士兵數千人持一炬上其傍山。滿祐兵謂我冒嶮而入也。走而拒之、守隘之兵減。持

譟。正本作躁。下同。

內。川越本作納。下同。

是。川越本作此。

嘉吉三年

文安二年

豐則收牛數百頭。縛藁爲人。跨牛背。驅赴敵軍。精兵數百。鼓譟從之。曉自隘口
進。滿祐兵以藁人爲敵。悉發其懸材。牛死而兵入。滿祐兵驚潰。持豐進入播磨。
連陷諸砦。先衆至白旗城。城兵逃降略盡。滿祐與渥美等皆自殺。乃以三國分
賜持豐等。持豐。時熙孫也。教康走北畠氏。不內而死。教祐走少貳嘉賴。嘉賴內
之。大內教世。持盛孫也。奉命擊破之。嘉賴・教祐竝走對馬。乃賞賜嘉賴邑於教
世。自明德・應永二役。山名・大內氏皆微。至是復興。三年。義勝卒。義勝幼喜騎馬。
卒墮馬死。官止於四位左中將。義勝母。卽小辨。讒殺一色義貫者。世稱義貫爲
祟云。畠山持國爲管領。議立義勝同母弟義成。甫八歲。後改名義政。文安二年。
關東將士相與共請立故持氏子永壽爲鎌倉主。以故憲實子龍稚執事。永壽
初走信濃。依母黨大井持光。上杉氏不之知也。憲實旣削髮。又與攻結城。心甚
愧之。及結城陷。則以其二子爲僧。攜而西奔。以自晦匿。猶有一子。在伊豆。是爲
龍稚。自持氏亡。關東不靖。長尾昌賢建議。欲立持氏胤子。以慰藉衆心。乃索獲
永壽。請之京師。京師議許之。賜永壽名成氏。賜龍稚名憲忠。旣而結城成朝來

川越本標註云。箯輿一作筆輿。

享德三年

享德。川越本・拙修本並作亭德。

自陸奥。仕成氏。成氏與之謀。欲修怨於上杉氏。寶德二年。謀泄。成氏走江島。憲忠追戰于海濱。將士和解之。奉成氏歸鎌倉。事纔得釋。而京師比年多虞。南國兵乘隙並起。赤松教祐在朝鮮。聞亂而還。欲復其家。發覺被誅。初赤松氏亡。畠山持國謂功臣之後不當絶也。欲令故滿則子則重奉祀。曰。滿則死明德之役。而則重不與嘉吉之逆。是宜立也。赤松氏遺臣因擁則重起播磨。山名持豐聞之曰。吾樹功受封。賊黨敢欲奪之。乃將兵發但馬。擊殺則重。持國不平。持國父子擁立三將軍。官至從三位。頗驕恣。其朝政府。或乘箯輿從騎士。其下亦多犯法者。藤原兼良・藤原房嗣。皆冀關白。交賂於持國。其威權如此。而持豐與之抗衡。持豐削髮曰宗全。以女妻細川勝元。勝元。滿元孫也。勝元自父持元・伯父持之。與畠山氏更爲管領。以故深結持豐。以傾持國。持國無子。養姪政長爲嫡嗣。任尾張守。已而生男義就。爲右衛門佐。持國愛之。欲廢政長。其家長遊佐某。數擊南兵有功。持國因命遊佐輔義就。遊佐同僚神保某。嫉遊佐權勢。欲立政長而排遊佐。乃教政長自託於持豐・勝元。享德三年。四月。持國請義政立義就。欲

磯谷。正本作礒谷。下同。

錄。拙修本作祿。

康正元年

赭字。正本皆作赫。

誅政長。政長走匿於勝元家。使神保等依持豐。八月。畠山氏將士率屬政長。京師大騷。幕府召諸將自衞。獨持豐・勝元不往。其夜。有人縱火於持國第。持國奔入伯父滿則第。義就奔。依山名敎之。敎之不內。則入遊佐家。遊佐家又火。終奔河內。持國遂匿建仁寺。於是。勝元攜政長。入謁幕府。白義政曰。近日之事。臣僕磯谷所爲也。九月。誅磯谷以謝。而政長竟得立焉。遣兵擁持國而歸。踰歲。持國卒。義政聞焚持國第者持豐所爲也。十一月。召諸將。命誅持豐。勝元俄拔其衆赴東山。擧族從之。幕府兵寡。勝元乃爲請赦持豐。持豐又謝。獻誓書。事輒釋。乃罷持豐之國。細川成之。乘間請錄赤松氏之裔。義政許之。成之。持常子也。康正元年。夏。召赤松敎祐弟則尙。賜之播磨。持豐怒。逆擊則尙。殺之。因怒曰。則尙之立。勝元何不沮止之。乃欲使之剚刃婦翁腹耶。勝元無子。養持豐子爲嗣。已而生子。則廢之。持豐因是恨勝元也。無幾何。持豐被赦歸京師。勢威益熾。持豐長身赭面。人呼曰赭入道。時赤松氏遺臣。所在伏匿。憚持豐不敢有爲。有石見者焉。仕內大臣藤原實量。常思復赤松氏。從容語實量以其志曰。細川氏・山名氏。

數。正本作歎。

長祿元年

政則。拙修本作政村。下同。

是。川越本作此。

長祿三年

內有釁隙。臣以爲以此時附細川氏。則志或成矣。因出示尊氏與則村書。實量視書。歎曰。其祖爲將軍之父。其孫爲將軍之仇。仇讎之責。汝何以償。石見曰。今將軍立之歲。南人犯闕奪璽。璽今在吉野。臣請往收復之。乃令舊僚中村某等往吉野。佯仕南朝皇子。長祿元年。中村終得殺南朝皇子取璽還獻。義政議賞其功。勝元贊之。賜邑於赤松政則。政則父性存。義雅子也。於滿祐爲姪。嘉吉之變。猶幼。依建仁寺僧龍澤而免。後生政則。甫五歲。於是。賜加賀之半。持豐怒。使刺客刺殺石見。當是時。三管領。細川氏獨盛。四職。山名氏獨盛。而伊勢氏權勢甲於七頭。先是。斯波義將・義重・義淳義繼。父子相襲。亨德中。義繼夭。無子。以族義敏爲嗣。義敏者。義將弟義種之曾孫也。斯波氏家有三老。曰甲斐・織田・朝倉。三老常不喜義敏。相共竊罵之曰。新主人何無禮於舊家臣也。因伊勢貞親請廢之。貞親娶甲斐氏。則右之。爲請義政。義政欲兩和解之。三老不肯。乃諭義敏。讓其子松王而自退。三年。義敏致仕。貞親乃請立義廉。許之。義廉者。義種孫也。義敏失望。走依大內教弘。伊勢氏。世掌出納。甚有權。而至義政時尤甚。義政妻

障。川越本・拙修本並作郭。
什。川越本作十。
凋。拙修本作彫。

寬正元年

寬正三年

寬正四年

嶽。正本作岳。下同。
四年。川越本・拙修本並作二。四月。寫本。四年下有四月二字。

曰。富子。藤原重政女也。有寵。所言莫不聽從。內謁公行。號令抵牾。而伊勢氏專權於中間。義政獨事游宴而已。義政喜奢侈。高倉第障子。一間直二萬錢。其他稱之。以故征賦什倍前代。前代借畿內富商之金。率一歲不過數次。至義政時。則一月或八九次。故事每將府有大儀。課諸將助其費。率十歲一擧。義政五歲九擧。天下凋弊。近江士人熊谷某好學。密上書幕府。極諫義政。義政怒曰。其言則然。而非其人矣。命貞親奪熊谷邑。逐之。先是。畠山政長・義就。相鬩河內。義政兩救之。入京師。寬正元年。九月。義政命貞親逐義就。義就曰。吾顧無罪。將軍豈信讒乎。乃奔河內。義政命政長攻之。陷若江城。細川勝元請援政長。三年。勝元令族成之爲假管領。將二十餘州兵赴援。義就以數百人據嶽山・金胎寺二城。擊卻京軍。而金胎寺竟陷。四年。三月。京軍圍嶽山。山名是豐以備後兵先登。與義就戰。七勝七敗。城兵疲而卻。是豐曰。我宗全子也。不拔城不已。城兵不敢出。義就揮刀。身先士卒。是豐曰。義就勇士。眞吾敵也。戰至日暮乃交解。四年。嶽山陷。義就欲自殺。湯淺二郎代死。義就脫走。入高野。政長攻之。又走吉野。政長凱

寛正五年

寛正六年

囑。川越本・拙修本竝作屬。

川越本標註云。貞藎或作眞藎。

旋。是豐歸。語父以義就勇。持豐心奇之。五年。皇太子受禪。是爲後土御門帝。義政亦倦政。欲辭職。而歲三十未有子也。弟義尋削髮爲淨土寺門主。義政欲讓職於義尋。義尋固辭曰。近日人情。反覆可畏。義政使人言曰。子豈有所顧慮耶。吾如他日舉男。就襁褓即爲僧耳。必不子廢也。子第速來代我。義尋乃蓄髮。徙今出川第。更名義視。將士赴謁。勝元執事焉。已而義政殊無讓職之意。六年。十一月。富子生男義尚。內外慶賀。富子不忍以爲僧也。日夜啼泣。願立爲嗣。欲得一强援。念諸將有威力者。曰。無若赭入道者。密作書囑持豐曰。吾欲立孺子。而義視業已爲嗣。勝元輔之。不可撼也。願公爲吾圖之。持豐素恨勝元。欲立義尚而己執事焉也。乃許諾之。因請赦義就入京師。以援己。持豐又以女許嫁斯波義廉。時義敏在周防。其妹爲伊勢貞親妾。有寵。其子松王爲僧貞藎弟子。於是妾與貞藎。日請復義敏。貞親遂以赦旨召義敏。入京師。禁義廉朝從。收其第宅。義廉走告之持豐。持豐大怒。欲自往其第以拒公使。家臣垣屋・大田垣等。交諫曰。以私姻背公命。其若之何。君盍以其適武衛者。轉適公方乎。是轉禍爲福也。君

讐。川越本作仇。

撰修本共上有與字。

不聽臣等。臣等當薙髮染衣住高野・粉川而已。不忍視君及禍也。持豐笑曰。吾加箭於奴輩。何不可之有。赤松滿祐之弑普光公也。細川・六角・武田諸人。往者如雲。大敗於蟹坂。踏趾不進。然而自但馬口入。一戰梟逆賊首。以報將軍仇者。誰乎。然未幾何。召賊餘孽。奪我功田予之。吾聞。父讐不與共戴天。田夫野人猶知此義。今不疾父讐。而疾報讐者。欲奪此以予彼。如此公方眞可賴也。饒令吾背公命。而若輩謹愼以納媚焉。何必高野・粉川之之。因拂衣而入。大聲罵曰。大姓有可罰者。當告管領。諮諸將。以決其議。貞親一豎子。敢進退三職。欲使武衛之家亦踵畠山氏之禍。禍敗之至。眞不可測。今日在彼。明日在我。我必往。與義廉共生死耳。於是。山名氏家臣。咸決意修兵。京師訛言。今出川氏亦右義廉。義視懼。乃走入勝元第。有人告貞親曰。細川・山名。奉命來討。四月。貞親東奔伊勢。義敏北奔越前。諸將連署、請誅貞親曰。貞親不伏誅。則羣臣不復能朝從。義政不得已聽之。使人諭解義視。於是。持豐復請赦義就。義政許之。持豐喜。使使報義就。義就在熊野。得報卽發。九月。入河內。政長部將守若江城。怖棄城走。義就

盡定河內。十一月。入京師。謁幕府。徑詣謝持豐。極歡而出。或夜書義就門曰。右衞門佐。拜戴二物。御所之盃。山名之足。義就謂勝元・政長之黨所為也。明年。改元應仁。故事每歲首。管領以下更饗將軍。是時。政長為管領。正月。二日。政長治具請義政。義政不往。政長驚曰。吾勤仕異等。饒使不蒙褒賞。何遽至被疏斥。蓋宗全義就讒言所致也。義就聞之。大喜曰。彼已為將軍所疏斥。當往驅逐之。政長家宰神保長誠。請政長修守備。十五日。持豐饗義政。畢。聚義就・義廉等諸將。圍幕府而請曰。義就既被赦。當移住本第。而勝元右政長。以梗公命。請詰問之。義政乃遣使問勝元。勝元曰。臣將自往答矣。使者還報。幕府戒嚴。兵聚細川氏者可一萬。義就等亦聚兵於幕府。義政出令曰。政長・義就。獨身決戰。諸將毋得援。持豐怒曰。三日請之。一朝失之。如何。義就曰。獨身決戰。吾所願已。且日僕當以手兵赴攻。諸君傍觀勝敗何如。於是。諸將皆奉令。勝元弗肯。義政令細川教春往諭勝元曰。不奉令者叛也。勝元歎息久之。乃答曰。賴春死國難。賴之輔幼主。以至於臣六七世。未嘗倍叛也。今寧背友誼。不忍被叛名。當謹奉令耳。長誠

服。正本作伏。

鬭之。謂政長曰。右京大夫已不援我。我孤立矣。義就自幕府來。諸將豈無潛援之者。本第平夷。不可拒守。爲今計者。宜據上御靈林。南負相國寺。西依大夫第。戰卽不利。大夫豈坐視乎。且大夫家老安富元綱與臣親善。卽使大夫不援。而元綱必來也。政長然之。乃燒其第。以六千人出。從士以爲奔也。行道亡。比至御靈林。裁二千人而已。義就曰。兵利在乘勝。是不可失矣。十八日。侵晨赴之。時方雪。兵凍不輒前。政長兵亂射。斃數百人。而義廉等潛來助義就。政長苦戰。細川氏閽門。不敢出援。長誠使人言元綱曰。自旦戰至暮。我兵疲矣。不敢望援兵。特請惠一尊酒。將與主公訣飲自裁。元綱不答。政長夜縱火祠宇。穿林而逃。義就入。覘守下有三尸。曰。尾張守死矣。乃凱旋。持豐大喜。散遣其兵。世嗤勝元不援政長也。謠曰。細川宜改洲股川。害尾張者是此川。勝元愧之。閉門不出。叔父持賢數激怒之。時勝元第在東。持豐第在西。以夾室町府。義視往來二人間。和解之。勝元陽服從之。持豐意益驕。不復設備。勝元窺之。潛發兵諸國。勝元自發其所管攝津・丹後・土佐・讚岐之兵。族政之。以阿波・三河。師春以備中。元春以和泉。

國信。拙修本作國長。

敎之。正本・拙修本作敎幸。下同。

義統。正本・拙修本作義純。下同。

政春。以淡路。斯波義敏。以越中。畠山政長。以紀伊・河內。京極持清。以隱岐・出雲・飛驒・近江。赤松政則。以播磨・備前・美作。武田國信。以安藝・若狹。竝屬勝元兵。凡十六萬餘人。議曰。幕府門前有一色義直第。與西陣相接。而爲之守。我今遣一將。陣實相院。以隔絕之。則義直必怖而走。我可以取幕府也。五月。二十四日。遣武田國信等陣焉。義直果走。勝元乃入幕府。請將軍牙旗。樹之四足門。又迎義視。置府中。令將士屯諸街巷。以討持豐。持豐聞之曰。悔爲豎子所先。於是。亦發兵。持豐自發其所管但馬・播磨・因幡之兵。族敎之。以伯耆・備前。敎清。以美作・石見。斯波義廉。以越前・尾張・遠江。畠山義就。以大和・河內・紀伊。畠山義統。以能登。六角高賴。以近江。一色義直。以丹波・伊勢・土佐。土岐成賴。以美濃。竝屬持豐兵。凡十一萬餘人。山名是豐。與勝元約爲父子。以故獨屬東陣。西陣遣垣屋攻實相院。遣大田垣守東面前壘。京師人民。負擔奔竄。後二日。細川氏兵攻前壘。發火箭。燒而走之。持豐遣義廉・敎之。攻師春大宮第。師春乞援於勝元。勝元乃遣持清。將萬人。過戾橋。未陣。義廉將鹿草・朝倉等。呼譟薄之。持清兵卻。遂大奔。爭

未。川越本・拙修本竝作不。

敎春。拙修本作政春。

橋而墜者數千人。政則曰、備中守孤軍嬰壁。不援之者。非士也。勒三百騎。自猪熊巷赴援、擊走義廉兵。拔師春。入政之村雲第。山名氏兵躡之。縱火第外。戰烟燄中。如此者兩晝夜。伏尸塡塞街衢。六月。東西陣交解而退。東陣據相國寺。西陣據武衞氏。相持未戰。西陣兵漸加。大內政弘素黨西陣。與河野氏。合兵三萬來援。東陣、遣政則拒之於攝津。遣政國・國信。攻武衞壘。欲及政弘未至拔之。迭攻二十日。未能拔而政弘已至。擊政則。政則走至五條。不得入。乃東走岩倉山。西陣望見其炬火。遣兵三道要擊。皆敗卻。政則經神樂岡。自御靈口入東陣。東陣流言。將軍近臣有通款西陣者。常泄密謀。所以取敗。八月。勝元與家臣議。以甲六千扼守諸門。使敎春請逐番衆十二人。義政聽之。近臣皆怒曰。上意所注在西。西勝則笑、東勝則顰。何獨吾儕。吾儕選於衆中。特受放逐之命。亦足以死矣、爭結束將鬬。當是時。勝元迎上皇・天皇于幕府。政長特敍三位。護輿至門。門中喧騷。輿止門外者。自午至亥。藤原公春・吉良義信。以義政旨諭近臣。近臣乃出奔西陣。而輿乃入。蓋勝元計。義政如不右己。則挾天子以戰也。持豐亦計。擁

身。正本作進。

猶。川越本作如。

下京之敵以出敵東而取三寶院相國寺以塞御靈口也。九月。令義就・政弘・成賴・高賴・義直赴攻。五將臨發。誓持豐曰。此行不取相國寺者。無復生還。乃各將萬人。攻三寶院。武田國信弟基綱。與其父信賢。以二千人守之。力拒終日。兵皆散亡。基綱獨開院門偏扉。以身當敵。敵不敢逼。畠山氏驍卒野老源三有膂力。挺身搏之。基綱叱曰。試受吾刀。乃擊其冑。刀折。基綱大號奔逸。莫敢遏者。源三頭碎死。西陣兵既取三寶院。進攻淨華院。逐守將京極持淸。焚近衞・鷹司以下三十七第。遂向相國寺。勝元。令安富元綱等三千騎守相國寺。別出兵於一條。而寺僧陰通款於西陣。擧火爲應。扞一條者。駭顧引還。西陣五將追至寺門。元綱兄弟以手兵拒總門。與政弘・成賴確鬭七合。殺傷大當。自晨至昏。西陣兵終不能入。已而東門失守。西陣兵坌入。元綱兄弟咄嗟馳之。箭洞胸死。政弘・成賴既取相國寺。收所獲首級。載之以車八輛。以送致西陣。因屯相國寺址。政之來謂勝元曰。敵屯相國寺。我猶釜中魚也。急遣一將擊走之。勝元曰。吾亦思此。而諸將士各有所守。與敵相拒。不可拔足。誰赴援者。秋庭某進曰。畠山公其人也。

川越本標註云。東勝或作東作。
在。正本作往。
保。川越本標註云。一作僕。
川越本標註云。應仁記成賴作高賴。

勝元曰。然。召政長。語之故。曰。事急矣。煩公一行。果勝。則當今忠勳誰出公右者。政長對曰。僕雖無似。辱受此命。不敢不往。顧御靈林之役。多亡士卒。在者僅二千而已。若之何。勝元有慚色。政之乃令其部將東勝某援政長。政長於是出四足門。觀者相語曰。以此寡兵。恐不能克。政長據鞍而言曰。諸君勿憂。政長在焉。雖有百萬敵。保能破之。即得克乎。今日之事。僕專任其功。諸君幸證之。乃進望敵陣。指問其候騎曰。彼山門前者爲誰。曰。成賴。山門後者誰。曰。義直。其南者誰。曰。衞門佐氏。神保長誠說政長曰。敵兵衆盛如彼。君厚集其兵。合力衝突之。彼必縱兵圍我。我可以破其一面也。政長從之。乃蒙楯而前。比薄敵。乃捨楯。直衝門前陣。陣大潰。卻入門後。門後兵沓蹙。不能揮槍。義就謂其將甲斐莊某曰。彼其尾張守也。我前軍槍鋒不整。必敗。亟勒隊。吾將代進。言未畢。門後兵大敗奔。壓義就軍。軍不得戰而退。東陣復取相國寺。政長名震兩陣間。於是。兩陣皆戰疲。交綏。以相國寺爲界。高壘浚塹。爲持久計。當是時。伊勢貞親在鈴鹿關。聞京師亂。乃歸依勝元。勝元以其不善持豐。欲置爲己黨。爲請復其舊職。以伺察府

恐。拙修本作怨。

自不安。正本作不自安。

應仁二年

蜚。川越本・拙修本並作飛。

二位。拙修本作三位。

文明元年

川越本標註云。忠高舊作高志。誤。今據他書正之。

川。正本・拙修本並作河。

狛。拙修本作柏。

中應敵者。義視素惡貞親。恐其離間兄弟。意自不安。竊謀逃奔。遂間行。至北畠教親營。與俱奔伊勢。二年。四月。義政以書招還之。義視狐疑不應。勝元・政長・政則等連署請之。乃還。九月。入幕府。會有蜚語。勝元謀廢立。義政疑懼。勝元聞之。乃陰計走義視於西陣。十一月。令武田信賢擁義視冒雨上叡山。持豐聞之喜。遣兵迎之。奉于武衞氏。時義視爲正二位權大納言。十二月。詔削其官爵。大納言藤原教忠等七人留在禁內。遂奔西陣。亦削其籍。勝元復爲管領。政則爲侍所司。政則家老浦上某。爲所司代。自是。兩陣如將軍兄弟爭者。文明元年。三月。勝元遣部下兵。夜縱火西陣。入至持豐營。持豐提薙刀出。親戰庭中。從兵四集。殺安富某等十餘人。餘兵走歸。四月。義政分予丹後于信賢・政國二人。遣吏入國。山名氏吏拒戰。迭有勝敗。五月。多賀忠高率近江兵。入援東陣。聞西陣黨六角龜壽起近江。則引還。勝元乃令國信城北白川。屬之叡山。以通近江商賈。又令是豐城天王山。塞西陣糧道。持豐令義就屯勝龍寺拒之。又令政弘城狛野。以其家臣二尾某留守焉。二尾叛。應東陣。會少貳嘉賴子教賴歸自對馬。謀復

文明二年
文明三年
文明四年
文明五年

其國。西陲大亂。政弘走。歸周防。西陣失勢。赤松氏將中村某。亦略播磨・備前・美作。盡復其國。二年。十二月。上皇崩于幕府。三年。正月。葬上皇。葬儀不備。義政徒步奉送。四年。勝元以將軍旨說畠山義統。義統降。義政賜之越中・能登。以通北國糧道。西陣益失勢。逃降相屬。五年。三月。持豐病卒。西陣猶不解去。勝元欲乘喪擊之。五月。勝元亦病卒。子政元嗣。勝元與持豐構難。未決勝敗而死。然政權終歸細川氏。

日本外史卷之八終

日本外史　卷之九

足利氏正記

足利氏下

文明九年

文明十一年

兩陣皆喪首領。猶屹然相對。十二月。義政讓軍職於義尙。甫九歲。畠山政長爲管領。七日而辭。以族義統代之。賞東陣功也。九年。十一月。西陣諸將各解歸國。義視往依土岐氏。東陣亦解。自應仁元年至此。凡十有一歲。西陣兵士。交出焚掠。文武第宅。蕩爲荒野。關白兼良以下諸公卿。散走四方。或遭戕害。歷朝典籍。概罹兵燹。而義政宴詠自若。發使者赴朝鮮。求勘合印信。以購海外珍寶。十一年。遂退居東山。起銀閣。以擬義滿金閣。不以爭亂加意。諸國强臣。往往乘亂奪國。葬上皇之歲。斯波氏家臣甲斐某弑其君。奪越前。以應西陣。朝倉敏景誅殺甲斐。義政賜之越前。於是。織田氏乃奪尾張。義政不問也。自是。天下武人不

文明十年

復朝足利氏、山名氏。及其黨與諸將。散在諸國。往往漸就衰滅。而細川氏與上杉氏。張於東西者如故。上杉憲忠之與成氏和也。義政亦使使者諭解之。而君臣猶相嫌隙。後四歲。成氏與結城成朝謀。伏力士於門側。而召憲忠。憲忠至。入門。力士撃殺之。上杉氏族皆怒。叛成氏。明年。長尾昌賢請京師。立憲忠弟房顯爲管領。與扇谷上杉定正共攻成氏。轉戰武藏・相摸間。房顯築壘于五十子。兵結不解者三歲矣、房顯・定正請京師曰。願得戴一將種以討成氏。義政乃使其弟削髪爲香嚴院主者蓄髪。命名政知。遣之關東。關東將士。多歸心於成氏。少附政知者。於是。政知留在伊豆堀越、房顯既卒。子顯定嗣、顯定與定正奉政知。數攻成氏。成氏走、據古河城。城負常陸。右下野。左下總、千葉・小山・結城・宇都宮諸族。爲之羽翼。顯定・定正攻之。十一歲而陷。成氏奔千葉。後七歲。與上杉氏媾。得復古河。請和義政。義政聽之。實文明十年也。顯定於是在上野平井。管領八州。八州推稱山內公、扇谷上杉定正在相摸大場。其臣太田持資有才略、削髪稱道灌。道灌精築城之術。築江戶・河越二城居焉。與父道眞協心。大播恩威。八

川越本標註云。忌一作疎。

文明十八年

長享元年

延德元年

延德二年

州將士。漸背山內歸扇谷。顯定患之。數擊定正。不得志。顯定陰計除道灌以斷定正手足。乃縱反間。盛稱道灌材武得士心。非爲定正下者。定正稍忌之。十八年。定正招道灌賜酒。酒酣命浴。使人檎刺殺之。子資安與道眞。共降顯定。顯定大喜曰。定正陷我計中。不足復圖。長享元年。將兵發平井。擊定正。定正遣使古河。乞援於成氏。成氏使子政氏將兵援定正。討顯定。是年。九月。義尙自將討六角高賴。以其背命不來也。十月。高賴逃甲賀山。義尙留陣鈎里。義尙幼喜文學。與藤原兼良問答政事。兼良爲錄其語。曰樵談治要。又習騎射。在鈎里踰年。講左氏春秋于幕中。曰。吾不滅此賊。不復還京師。延德元年。三月。疾作。薨于陣中。官至內大臣右近衞大將從一位。薨年二十五。內外惜之。義尙晩更名義熙。義熙無子。義政召義視於美濃。養其子義材爲嗣。義材後更名義尹。終更義植。二年。正月。義政薨。官至左大臣右近衞大將從一位。准三宮。明年。義視薨于京師。政知卒于伊豆。政知有子。曰茶茶。政知愛後妻子義通。疎茶茶。茶茶怨望。遂弑政知。義通走。依今川氏親。氏親遣其將伊勢長氏誅茶茶。長氏遂取伊豆。遂竄

太田。正本作大田。

國。揣修本作江。

明應元年

明應二年

川越本標註云。尙長或作尙順。

相摸。是時。上杉定正方克顯定。居鉢形城。兵威頗振。不復敬成氏。小田原城主大森實賴以書諫之曰。扇谷支庶也。所以能抗山內者。太田道灌之力也。今既喪道灌。兵力衰削。而偶克勁敵。眞僥倖耳。乃輕蔑君長。重喪將士之心。禍至無日矣。定正弗能悛。長氏遣使。通好於扇谷氏。與今川氏俱助定正。以擊顯定。兩上杉氏終自是衰矣。義通之走今川氏。今川氏護送之於京師。細川政元爲管領。請義植。寓義通於天龍寺。將行爲僧也。義植既襲職。近國諸士盡來賀之。獨六角高賴不至。義植曰。吾將繼義父之志也。明應元年。九月。義植親將討高賴。攻拔觀音寺城。高賴復逃甲賀山。義植凱旋。當是時。畠山政長爲管領。政長以宿將。負其威望。輕侮諸將。諸將不平。畠山義豐義就子也。訴政長驕橫。據譽田城。擧兵。二年。三月。政長奉義植討之。四月。義植陣于正覺寺。數攻譽田。不能下。義豐知細川政元與政長爭權相忌也。陰遣使。說細川氏家老三好之長。之長子之慶。勸政元援義豐。合兵圍正覺寺。義植脫走。政長子尙長走紀伊。政長曰。吾可以死也。與其臣丹下某等訣飮。自殺。政元歸京師。議將軍繼嗣。前關白藤

于。川越本作於。

明應六年

明應九年

文龜元年

永正元年

永正三年

永正四年

原政基。與故政知有姻。因說政元曰。義通在天龍寺。未削髮。當立。政元然之。乃會諸將。言曰。東山公嘗約養堀越氏之子矣。今將軍黨於政長。自亂國家。不可以統師。諸將莫敢異議。乃立義通。甫十五。更名義高。後更義澄。閏月。政元聞義植匿在筒井。尙長在高屋。遣兵攻之。捕義植。幽于家臣物部氏。禁人出入。縱一僧侍焉。六月。義植逃出。奔越中。終赴周防。依大內政弘。政弘卒。子義興計起兵復義植。政元養子高國。以事怨政元。叛通大內氏。於是。細川氏分黨。京畿大擾。兩上杉氏亦鬭于關東。概無虛歲。六年。成氏卒。子政氏嗣。政氏與定正子朝良。數攻顯定。已而和之。當是時。海內武人迭相爭奪。不復知有天子・將軍。九年。九月。帝崩。置柩於黑戶。四十餘日乃葬。十一月。太子卽位。是爲後柏原天皇。天皇文龜元年。義澄・義植各自聚兵。義澄奏請削義植官爵。永正元年。政氏與子高基有郤。構兵。初政氏有三子。高基・義明・基賴。政氏欲廢高基。高基擧兵攻政氏。上杉顯定和解之。使政氏退老。高基立。義明奔陸奧。基賴奔下野。是時。伊勢氏勢漸强大。兩上杉氏連和以拒之。三年。顯定弟房義。爲其臣長尾爲景所殺。四

年。細川政元爲賊所殺。三好長輝誅其賊。政元素好鬼神說。不近婦人。以故無子。養藤原政基子澄之。又養族政春子高國。皆不中意。更養族元勝子澄元。初賴之之後。世爲管領。曰上館。二弟詮春・滿之。世領讚岐・阿波。曰下館。猶關東有兩上杉氏。政春。詮春之後也。元勝滿之之後也。澄元猶幼。在阿波。三好之慶子長輝輔之。藥師寺與次・香西又六。竝爲政元家宰。議曰。管領言行無常。不能久也。澄元爲嗣。長輝執權。則我輩不能出其下。不若速行大事。擁立澄之。乃賂政元近士福井・戶倉等。伺察政元。是年。六月。政元齋戒。夜入浴室。戶倉就而刃之。近士波波伯部走救。亦爲所刃。不殊。奔阿波。香西等乃迎澄之於丹波。立之。義澄不能制。七月。三好長輝發兵。擁澄元入京師。香西城嵐山。據之。出兵拒百百橋。波波伯部爲長輝先鋒。遇戶倉。鬬而斬之。澄之與香西・藥師寺皆死。長輝請義澄。以澄元爲管領。而自執政事。後剃髮稱希雲。希雲之先。曰小笠原長淸。長淸子長房爲阿波守護。自信濃徙焉。居三好鄕。及細川氏領四國。屬部下。爲重臣。至是始著。而細川氏始衰矣。大內義興聞變。舉山陰・山陽・西海兵。奉義植

永正五年 木澤。川越本・摂修本竝作赤澤。川越本標註云。赤澤疑當作木澤。赤澤是爲政元敵。何長者事。見應仁後記。

永正六年

永正七年

永正十年

而東。細川高國亦擧兵應之。義澄懼。與書高國講和。高國不聽。五年。三月。義澄奔近江。依六角定賴。澄元與長輝奔阿波。四月。義植・義興至界浦。先是。畠山尙長與其臣木澤某等。攻殺畠山義豐。數與政元戰。至是。以兵來屬義植。義植・義興入京師。長輝出兵攝津。與六角氏兵夾攻京師。大敗。自殺于知恩寺。六月。詔。奪義澄官爵。還予之義植。義植以義興爲管領。六年。十月。夜有盜入幕府。欲刺義植。義植拔刀。手斬四人。身又被九創。謂義澄所使也。於是。遣兵。索義澄於近江。弗獲。七年。義植自將攻六角定賴。敗歸。是年。六月。杉上顯定討長尾爲景。欲爲房義復仇。戰于信濃高梨。敗死。顯定無子。養政氏子顯實。又養憲實子憲總。及其死。諸家臣逐顯實。立憲總爲管領。八月。細川政賢將南海・東國兵。入攻義植。政賢。持賢孫也。義植以大內義興策。避之丹波。誘政賢入京師。已而聚兵南歸。與政賢。戰于船岡山。大敗之。奏義興功。敍從三位。如畠山政長・赤松政則故事。是月。義澄薨于近江嶽山。官至參議從三位。有二子。長曰義晴。季曰義維。託義晴於赤松義村。託義維於細川澄元。義村。政則子也。十年。義植復攻六角氏。

永正十五年　永正十七年　大永元年　大永六年　大永七年

敗歸。十五年。大內義興西歸周防。以久居京師費用不支也。細川高國代爲管領。專政。十七年。正月。澄元聞義興去。則與三好元長發兵至攝津。元長。長輝孫也。高國敗。走近江。五月。高國與六角定頼合兵。入京師。元長大敗。被虜。澄元走播磨。遂歸阿波。病卒。元長逃歸阿波。高國益專橫。義植厭之。欲以畠山尚長子植長代爲管領。高國聞怒。大永元年。三月。義植爲高國所逼。出奔淡路。後二歲薨。官至權大納言從二位。高國迎義晴於播磨。詔。奪義植職。予之義晴。依高國請也。是年。朝廷始行即位禮。本願寺僧獻其資。因敕以僧准門跡。六年。帝崩。太子即位。是爲後奈良天皇。高國信讒。殺其臣香西光重。京師亂。義晴奔坂下。遂赴近江朽木。依佐佐木植綱。三好元長在阿波。聞之。乃奉澄元子聰明五郎。擧兵入京師。高國乞援於近江・若狹・越前諸將。朝倉孝景來援高國。七年。二月。元長至京師。高國陣桂川東。孝景陣鳥羽。元長爲三軍。與高國夾水而陣。上軍濟上流。下軍濟下流。高國陣左右顧而動。元長則以中軍爲圓陣。亂中流。衝高國陣。陣合以圍之。上軍下軍皆濟。內外夾擊。高國大敗。棄旗走。元長軍追之。部伍

享祿元年　享。川越本・拙修本竝作亨。下同。

享祿二年

享祿四年

天文元年

頗亂。孝景乃橫擊。破元長。元長走歸阿波。三月。元長大擧至界浦。連下諸城。獨伊丹未下。高國遣兵救之。自陣東寺。畠山義宣。義豐子也。起兵應三好氏。與丹波香西氏。皆約攻高國。高國度不可支。乃講和。元長佯聽之。享祿元年。諸援高國者。皆解歸國。元長乃欲攻高國。高國大懼。出奔。歷抵北畠・六角・朝倉・尼子氏。皆弗納。終往備前。依浦上村宗。村宗方殺其君赤松義村。欲列爲諸侯。如朝倉氏比也。乃與高國相結託。時元長加冠於聰明五郎。名曰晴元。居於界城。元長輔佐之。元長叔父政長。稱宗三。嫉元長專權。與晴元所寵木澤長政・柳本彈正相結。倶譖元長。長政。畠山義宣家臣也。柳本。香西氏族也。二年。柳本攻伊丹。元長與伊丹城將有姻。欲援之。柳本奔牧方。晴元令柳本將兵攻陷伊丹。元長怨望。自歸阿波。高國聞元長不在。乃發兵攻晴元。晴元意悔。召元長自援。十一月。高國與村宗合兵。來攻晴元。赤松氏遺臣不服村宗者。擁赤松晴政。通款於晴元。四年。春。元長發兵助晴元。六月。大戰于天王寺側。殺村宗。走高國。高國走尼崎。匿于染戸甕中。元長兵索獲。殺之。播磨力人島村奮戰死。天文元年。正月。元

天文二年

天文七年
川越本・拙修
本並七年上
有天文二字。

天文十四年

長殺柳本子某于京師。以報伊丹之怨。晴元大怒。元長削髮謝之。稱海雲。晴元意猶不釋。密使三好宗三・木澤長政圖之。晴元族持隆諫曰。彼有大功。殺之不義。弗聽。遂遣宗三・長政。誘本願寺僧徒。圍海雲于顯本寺。海雲使其妻攜子長慶逃阿波。而自殺。長政終弑其君義宣。二年。本願寺僧徒與晴元有郤。攻取界城。晴元奔淡路。木澤長政誘京師法華徒。攻復界城。四月。晴元率阿波兵。歸助長政。僧徒城大坂據之。晴元攻之。不能拔。和弭兵。乃入京師。迎義晴於朽木。自爲管領。義晴之在朽木也。高基自古河使使來請冠其子。受將軍偏諱。如故事。因命曰晴氏。上杉憲總已死。子憲寬爲管領。與伊勢氏綱爭武藏。高基爲晴氏娶氏綱女。欲假其力以報宿仇。高基弟義明在陸奧。享祿中。上總守護武田豐三與原氏鬭。千葉氏援原氏。豐三不克。豐三乃迎義明爲主。遠近爭附之。遂攻滅原氏。義明居于御弓。稱御弓御所。常思定關東以興基氏舊業。高基意害之。勸伊勢氏滅御弓。七年。伊勢氏大擧來攻義明。義明與弟基賴將兵迎之。義明馳突。敵軍皆靡。乃留俟後騎。中飛箭死。基賴復走下野。伊勢氏盡幷其地。十四

川越本標註云。其臣一作家臣。

天文十五年

川越本標註云。之虎或作之康。

天文十八年

川越本無以字。

天文十九年

年。上杉憲政與上杉朝定合兵。攻伊勢氏。憲政憲寛子。朝定朝興子也。於是。憲政朝定竝遣使。乞援於晴氏。晴氏遲疑。其臣交勸往。乃往。與兩上杉氏。俱圍河越。踰歲。伊勢氏康大破兩上杉氏軍。晴氏逃歸古河。十五年。義晴欲冠其子。時京畿騷擾。不可行禮。乃攜赴坂下。冠于日吉祠官家。命名義藤。遂改義輝。讓之軍職。六角高賴爲假管領。賓之。當是時。細川晴元在京師。玉井某擁故細川高國義子氏綱。遊佐長敎擁故畠山植長弟政國。竝起于攝津・河內。與大坂僧徒。連兵北鄕。晴元遣三好宗三等拒戰。不克。乃召三好長慶。長慶時年十九。掌細川持隆兵。有勇名。以父故怨晴元。不輒應命。其弟之虎諫之。乃航海至兵庫。入越水城。宗三迎之。合兵擊氏綱・政國。迭有勝敗。宗三營讒殺元長。至是。又讒長慶。長慶怨之。十八年。長慶與遊佐長敎連和。以攻宗三于一藏城。宗三乞援於晴元。晴元發京師。入榎南城。六角定賴與晴元有姻。出兵助之。長慶曰。吾以義榮爲將軍。氏綱爲管領。何患之有。義榮者。義維子也。六月。長慶與其弟十河一存。攻拔榎南。宗三走。死江口。晴元走坂下。十九年。三月。晴元聞長慶且來襲也。

天文二十年
天文二十一年
遜。正本作孫。

城于如意岳。以奉義晴。義晴病薨于穴太山中。義晴官至權大納言右近衛大將從三位。晴元・定賴奉義輝徙寶泉寺。十一月。長慶入京師。陣阿彌陀峰。分兵屯三井寺。縱火大津。義輝又徙朽木。晴元陣志賀。二十年。正月。晴元迎擊長慶兵。大敗。二十一年。六角定賴使其子義賢抵長慶講和。曰。將軍遜於公。越在畿外數年。公武多矣。不亟講和。恐天下有議公者也。長慶曰。臣不敢犯將軍。特怨右京大夫右宗三耳。今宗三既死。使大夫削髮。立氏綱代之。以及大夫子信良。則臣請謹戢兵矣。和議卽成。晴元削髮奔丹波。二月。義輝攜信良歸京師。長慶入謁于相國寺。立氏綱爲管領。置信良于越水城。其實質之也。於是。三好氏代細川氏。領京畿諸政。留家臣松永久秀護幕府。而引兵南歸阿波。久秀。西岡賈人。以慧黠爲長慶所親任。先是。伊勢氏康攻上杉憲政平井。城陷。八州將士。捕憲政子龍稚。以降氏康。山內上杉氏於是終滅。先是。扇谷上杉氏亦爲氏康所滅。憲政奔越後。依長尾景虎。盡以其姓氏官號授之。景虎。爲景子也。長尾氏於是冒上杉氏。因管領關東。晴氏請和於氏康。立伊勢氏所生子義氏。而自老。氏

川越本・拙修本並無爲字。

天文二十二年

弘治元年

弘治三年

永祿元年

永祿三年

永祿四年

永祿五年

康置義氏于鎌倉。後請京師。任爲左馬頭。二十二年。五月。三好實休弑其君持隆。奪其妻。實休。卽之虎也。義輝苦三好氏專恣。召還晴元。晴元糾合舊臣。入焚三好氏第宅。長慶聞之大怒。八月。長慶率兵二萬。入京師。將攻義輝堀川第。義輝・晴元復奔近江。長慶移軍攻丹波。陷諸城。又攻播磨。弘治元年。播磨皆降。三年。帝崩。太子立。是爲正親町天皇。永祿元年。五月。義輝・晴元陣坂下。出兵北白川。與長慶兵戰。將士死者百餘人。六角義賢來援。復講和。十一月。義輝歸京師。長慶入謁。囚晴元于芥川城。踰歲卒。氏綱在淀城。後五歲卒。當是時。細川・上杉二家俱瀕衰亡。而三好氏・長尾氏代之。並興。三年。長尾景虎來京師。三好長慶導謁義輝。義輝班景虎于長慶之上。景虎密啓義輝曰。長慶輕蔑將軍。臣請擊殺之。以除將軍患也。義輝危而不許。四年。三月。長慶饗義輝于其子義長新第。松永久秀董其事。五年。三月。三好實休與畠山高政戰于久米田。敗死。高政。政國子也。初高政助長慶有功。已而與六角義賢謀滅三好氏。連年構兵。及獲實休。兵益振。長慶使子義長・弟冬康・叔父康長・政康。與松永久秀等。攻高政。取高

永祿六年

永祿七年

永祿八年

屋城。時長慶老病。恍惚不知人。委政於久秀。久秀忌義長才望。陰計除之。六年。八月。久秀遂毒殺義長于芥川。以十河一存子義繼代爲長慶嫡嗣。七年。五月。又讒冬康於長慶。長慶召冬康於飯盛城。殺之。七月。長慶死。政康・康長。及岩成左通。稱三好三黨。久秀與之謀祕喪。又謀廢義輝立義榮。義榮冀望將軍。數示意於長慶。長慶弗肯。是年。冬。義輝修二條武衞第。課畿內。特稅攝津戶金貳分。物情囂然。義榮乃以其情告三黨。三黨與久秀議而肯之。八年。四月。義輝已徙新第。門扉未成。三黨相謂曰。時不可失也。五月。三黨與久秀及其子久通等。率千餘人。人佩一竹枝爲號。宣言詣淸水寺。以入京師。又謀紓其備而逼之也。佯奉訴狀。因幕府近臣進士晴舍納之義輝。義輝母慶壽。謂義輝曰。劫而訴者。師直・宗全故事爾。今亦當且聽其請以計無事。晴舍往復再三。而賊已傅幕府。自四面闖而入。一府中大驚。宿直者。一色秋成・上野輝淸・高師宣・彥部晴直・細川隆是・武田信景・杉原晴盛等三十餘人。聯鋒突出。肉薄與賊鬬。斬數十人。晴舍曰。悔爲賊誑。使君疑我。乃自刃而死。當是時。府兵在京師者。聞變聚于三樹里。

或曰。速救之。或曰。衆寡不敵。救毋益也。治部藤通。其弟福阿彌與沼田某奮曰。吾有死而已。提槍馳至府門。呼曰。吾欲與將軍共死。願使得入。賊不許。乃佩竹枝。混賊而入。則義輝方會衆訣飲。憫三人者。欲使脫去。曰。汝出招不來者。三人者辭曰。命之他人。義輝爲絕命辭。書之姬人衣袖。曰。足利氏運命窮於此矣。出傳家寶刀十餘口。更取出鬪。刀皆缺折。因發庫。盡散其珍寶于庭。賊爭攫之。義輝與三十餘人。從而蹂躪之。殺傷過當。而我兵終皆死之。義輝猶奮戰。賊不敢逼。賊池田某。自扉陰跳出。刈義輝足踣之。賊堆集。仆障於其上。攢槍弑之。遂殺其姬。脫夫人近衞氏。慶壽大慟曰。將軍死矣。老婦何生爲。縱火自燒殺。池田傷目于障。後終盲爲廢人。行乞于市。京師人指以爲弑逆之報也。於是。三黨擁義繼。據高屋城。以迎義榮。六月。義榮發阿波。至攝津。十二月。入普門寺城。敍爵任官。三黨專功有得色。義繼惡之。十年。三月。義繼逃歸於久秀。久秀據多門城。與畠山高政合兵攻康長。康長陣東大寺。十月。久秀焚而走之。義輝薨。年三十。官至參議從四位下。初義輝有二弟。曰。覺慶。爲南都一乘院主。曰。周暠。習禪于鹿

川越本標註云。徑一作經。其冒。拙修本作冒其。惟政。拙修本作惟盛。

苑寺。義輝之被弑也。賊使平田某詐誘周暠曰。公來。將奉以爲將軍也。周暠信之。往渡夷川。平田自後斫殺周暠。從人四散。獨小四郎者。甫十六。拔刀與平田鬭而斬之。賊又遣兵守覺慶。斥其從者。獨縱細川藤孝給仕焉。藤孝。故賴之弟。賴有九世胤也。父曰元常。養大和守三淵宗薰子。是爲藤孝。或傳。藤孝。義澄遺腹子。爲宗薰所育者也。長多材能。覺慶與之密謀。乃以其策佯稱疾。徵醫。藤孝進醫米田宗賢。宗賢宿直數日。託覺慶疾瘥。夜賜酒於守兵。守兵皆醉臥。宗賢乃扶覺慶。奔近江。遇險。輒負覺慶而過。頃焉。藤孝又至。徑甲賀山。至矢島。館于和田秀盛家。賊守者既覺。四追之。不度其冒險。以故不能獲也。上野淸信・和田惟政等十餘人。聞覺慶在矢島。來從之。覺慶養髮。更名義昭。明年。使藤孝就六角義賢議事。義賢與其子義弼不善。國內騷擾。以故辭不奉命。已而久秀等聞義昭在近江。使義弼圖義昭。義昭覺之。乃與藤孝等十餘人。夜航湖走若狹。依武田義統。義統義昭妹壻也。以國小辭。乃赴越前。依朝倉義景。義景奉之于敦賀。敦賀有寇。又徙一乘谷。義昭知義景不足託大事。訪察近國諸將。欲得一人

永祿十一年

焉。莫若織田信長者。先是。美濃土岐氏。爲家臣齋藤某所簒。織田信長。以尾張兵克今川氏。幷三河・遠江。終誅殺齋藤。幷美濃。威名四聞。十一年。六月。義昭潛遣藤孝・清信。就信長諭意。信長大喜。迎義昭。義昭乃發越前。義景固請止之。不肯。七月。至美濃。入岐阜城。與信長議西上。使使諭六角義賢。義賢不聽。八月。義昭與信長將兵。攻義賢走之。終入京師。九月。攻攝津・河內。義榮已患癰薨。義榮官至左馬頭。當是時。三黨或奔或降。義繼・久秀爭媚事信長。信長分畿內地予之。藤孝・惟政等皆拜邑。十月。詔以義昭爲征夷大將軍。義昭褒信長成功。賜重畫徽號。呼曰父。用尊氏遇赤松則村故事也。義昭以京師兵燹。假居細川氏綱

永祿十二年

舊宅。遂徙本國寺。十二年。正月。三黨伺信長不在京師。乃聚萬餘人。圍本國寺。野村越中等善拒。攝津・河內諸將入援。伊丹親興擊賊。破走之。義昭乃徙居二

元龜元年

條城。元龜元年。義昭與信長合兵。擊三好餘黨于攝津。不利。六角・朝倉・淺井氏

元龜三年

竝起。蹙信長于大津。義昭下敎和解之。三年。六月。遊佐長敎弑其君畠山昭高。昭高。高政弟。長敎所立也。織田氏討長敎。誅之。三好義繼・松永久秀。後皆爲信

天正元年
三淵。拙修本作三浦。

弑。川越本・拙修本竝作殺。
天正十三年

天正十六年
慶長二年

長所誅。信長大樹恩威。故擧義昭短。以示上下。義昭憤懣。欲除信長。引上杉景虎及關東諸將以自援。天正元年二月。寨于石山・堅田。起兵討信長。爲信長所攻破。佯和而罷。七月。義昭令三淵某。及廷臣二人守二條。而自據宇治槇島。信長將兵來攻。細川藤孝迎降之。信長攻下二條。三淵死之。三淵。藤孝弟也。信長遂攻破槇島。使其將羽柴秀吉徙義昭于河內若江。織田氏於是遂代足利氏。義昭後流寓和泉・紀伊・播磨。終依毛利氏。居鞆津。信長遣秀吉。攻毛利氏。自將繼之。途爲其下所弑。而羽柴氏遂代織田氏。十三年。秀吉自冀爲征夷大將軍。故事。征夷大將軍非源氏不可拜。秀吉因是欲冒足利氏。請義昭曰。公養吾爲子。吾封公以大國。安富尊榮以終其身也。如何。義昭賤之。斥而不許。曰。吾雖命窮矣。猶八幡公・等持公之苗胤也。計安逸而汙祖先。吾則恥之。秀吉不能强焉。十六年。義昭削髮。慶長二年。八月。義昭薨。官至權大納言從三位。及此詔贈准三宮。義氏亦卒于關東。卒而無後者九歲。羽柴氏東伐。求足利氏後。得基賴孫國朝。立爲義氏之後。居下野喜連川。給五千石。呼喜連川公方。義榮之後居阿

波平島。呼平島公方。初義榮之父義維。爲義植所養。生義種。義種以後世賓于阿波。此兩家。與細川・上杉二氏。皆存至今。其居平島者。世稱又太郎。仍尊氏故事也。居喜連川者。世任左兵衛督。仍直義・基氏故事也。而喜連川在足利氏故國。及德川氏定天下。特以賓禮遇之。

外史氏曰。源氏者。攘王土以摟王臣者也。足利氏者。奪王土以役王臣者也。故論足利氏之罪。浮於源氏。而源氏再傳而亡。足利氏乃得延之十三世者。蓋源氏剪除宗族。孤立自斃。而足利氏封建子弟舊臣。足以相維持。故不遽滅焉耳。然其封建也。不知制本末輕重之勢。是以纔能僞定一時。而反者如蝟毛而起。至其中葉以後。天下禽奔獸遁。而不可復制也。夫源氏將士。其强鷙桀黠。不減足利氏時也。而奔走馳驅。無一人彎弓東向者。何哉。無他。其力微弱易制。而進退易置之權。常在於我也。至於足利氏。與之以土地之饒。授之以人民之富。其勢足以爲亂。而又襲之子孫。牢不可拔。豈可莫以預防其變哉。然而漫然割與。動使一姓得踞三四州。甚者。居天下六分之一。而莫之能制。至於其封鎌倉。與

掣。川越本・揣修本竝作製。
非。
簒。川越本作盜。

室町如二君焉。遂致其子孫猜疑相圖。而終之鎌倉爲上杉氏所覆。室町爲細川氏所弱。皆所謂尾大不掉。末大必折者也。然其爲之者有故焉、彼其計奪王家中興之業。故濫賞侈封、務充其欲。不復計其後。以苟取天下。天下已集矣。而不可裁抑。一有所間。裂眦而起。無足怪者。充彼之欲。以濟我之私。彼知我私。而以其功邀於我。我何以制之哉。蓋足利氏。以土地人民餌天下之豪傑。而不能掣之。幷其餌而失之。亦可哀矣、故彼急於取天下。而爲苟且攫竊之計者。未有不貽禍於子孫者。足利氏宗族君臣。更相屠戮。十三世之久、而殆無寧日者。豈非由其簒奪之報也哉。後之爲人臣者、亦可以知懼矣、或曰。將家禮制。概成於義滿之時。而有可憾者。夫行天子事。而謂之將軍。已爲不稱。而爲之下者。受封將家。而班爵王朝。又爲不順。使義滿有學有術。參酌古今。創立官爵、已下天子一等。除王朝公卿之外。天下萬姓。盡爲其臣。豈不善哉。外史氏曰、噫。是助足利氏爲虐者也。夫天下有名有實、昔我王家統馭海內。食租衣稅、而以爵秩酬功勞。當是時。名實之權。竝在朝廷。及於其後。有盜其名而敗者。平將門是也。有竊

下是也。川越本・拙修本竝作是已。追捕。拙修本作追討。

新皇。正本作親皇。

其實而成者。源頼朝是也。有欲幷有其名實而兩失之者。則足利氏是也。夫將門未定八州。而先擬帝皇。天誅不旋踵。頼朝乃請守護之設。分取天下兵食。而其號則不過曰追捕使。若曰旣充其腹。何必華其服。及尊氏奪中興之業。尺地一民。莫非其有。而朝廷徒擁虛器。不徒分取之也。然名分所在。不可踰越。故擁戴北朝天子。而己以上將宰天下。猶源氏之故焉。至於義滿。驕侈跋扈。僭擬乘輿。通信外國。稱日本國王。分舊臣門族。以倣攝籙・清華。豈非欲幷有名實哉。朝廷擬其贈號。以太上天皇。雖無稽之甚。貽笑千古。而義滿素心所蓄。亦可以見矣。其早世不終志。可不謂我邦之幸也。而或者憾之。何哉。昔者。孔子愛告朔之餼羊。王室旣喪其實矣。頼有其名耳。而今又欲擧而褫之。是助足利氏爲虐者也。晉以侯而宰周之天下。霍氏以大將軍而宰漢之天下。自古有之。是亦可矣。不必別撰名號以稱其實也。且夫自公侯至輿儓。以次相僕役。而莫非王臣者。何爲不順哉。饒令新建爵號。猶平新皇之爲耳。豈能如千歲因襲之名。在民耳目。足以服其心邪。假使足利氏如或者之說。吾知其不能一日居也。余謂。足利

川越本標註云。何以謂之。一作何也。

川越本。拙修本竝豈上有是所謂兩失名實也之八字。

氏之欲幷有名實也。於其自處。已爲失義。而於其事上御下之際。又有失計焉者。何以謂之。夫我已有其實。而貽天子以虛器。是擁虛器者耳。何必介介然扶北而擠南。唯夫扶北而擠南。是故天下翕然。莫或寧一。而其分舊臣・門族也。所謂三管領。皆據大封者也。既與之以土地人民之富。而又假之以官號之崇。授之以權柄之要。是奚異傅虎以翼歟。應仁之亂。是其所由起焉。而終致上將亦擁虛器。同於王室。其極也。幷其位號而喪之矣。豈非計之失者哉。

日本外史卷之九終

日本外史　卷之十

足利氏後記

後北條氏

外史氏曰。制馭天下。莫善於形勢。苟失形勢。不致分裂者鮮矣。昔在文武。因山海形便。以分七道。而王畿居中。桓武定鼎平安。四方環嚮。蓋亦盛矣。然王政之衰。方隅稍有竊據不可制者。雖或速就討滅。而天下之勢。漸勢分裂。以馴致鎌倉之霸。自是以還。關東形勢。常雄天下。而京畿莫之能勝。余嘗歷遊東西。考其山河所起伏。以爲我邦地脈自東北而來。漸西漸小。譬之人身。陸奥・出羽其首也。甲斐・信濃其脊也。關東八州。及東海諸國。其胸腹。而京畿其腰臀也。至山陽・南海以西。則股耳。脛耳。故居其腰臀。可以制其股脛。不可以制其腹脊。且平安四戰之地。天下有事。必先被兵。不如鎌倉之獨以一面西制中原也。至於元弘

王家之敗。川越本・拙修本並作王室之禍。

之時。能一擧取北條氏者。由海內怨畔。禍起其腹心。非能以西勝東也。方其盛時。以鎌倉爲根本。而置府於京師・筑紫。其制天下。如臂使指。而足利氏反其所爲。舍彼居此。謬矣。然亦有不得已也。彼慮於南朝。不能遠居鎌倉。故鎮以子弟。藩屏室町。而適啓爭端。又因其內訌覆之。而室町遂自是亂矣。是其不能制馭四方。以襲王家之敗者。非失形勢故哉。及其季世。七道豪傑更相呑噬。至元龜・天正之間。海內裂爲八九。其最大者四氏。曰北條氏。曰武田氏。曰上杉氏。曰毛利氏。毛利氏起於安藝。而幷山陽・山陰十三州。疆土尤廣。其次爲北條氏。北條氏取伊豆據之。遂幷關東八州。武田氏起於甲斐。幷信濃・飛驒・駿河・上野。上杉氏起於越後。幷越中・能登・加賀。以及莊內・會津。皆爭務耕戰。帶甲數萬。積粟如山。龍驤虎視。角立東西。莫不有包擧宇內之心。夫北條氏據天下之胸腹。而不能一出其兵以窺中原者。武田・上杉據其脊。以橫塞其衝也。而二氏勢力相敵。相持不決。又不暇圖其西。毛利氏疆土雖廣。以其股脛。向其腰臂。固不能抗衡中原也。織田氏介立四氏之中。先其西而後其東。避强擊弱。舍險取夷。是以用

遞。描修本作遽。

力少而成功速。豐臣氏亦因其遺謀。遂得以致合一焉。織田豐臣之於形勢。如有察焉。而至其所居。與足利氏未嘗有大異同也。其所以既合又裂不能久馭天下者。亦出於此耶。夫織田豐臣代足利氏者也。而其所有土地山河。不能大過四氏。或大過之。而不能及其久也。要之。此四氏者。乘時衰亂。各奮智勇。以雄據一方。一方之民。倚以享一日之安。不可與他小國庸主徒糜爛其民而莫所成者同日語矣。則其於天下非無功德。又不得目以足利氏之叛臣也。若曰四氏所據孰非王土。則時勢之變遞至於此。非一日之故。非所以咎於四氏也。至其經營一方。謀臣猛將之跡。有足紀者。吾故列敍之。詳其盛衰興壞之由。使有國家者有所鑒焉。而於天下形勢分合之際。又足以覽歟。

後北條氏。舊稱伊勢氏。伊勢氏。出於平維衡。維衡生正度。正度生季衡。及正衡。正衡實太政大臣淸盛之曾祖。季衡任上總介。子孫世居伊勢。其十一世孫貞行。除伊勢守。仕足利義滿。爲奏者。掌出納。子貞國。孫貞親。相繼任其職。甚有威權。貞親弟貞藤。除備中守。娶尾張人横井某女。生男于任處。稱新九郎。及長。命

應仁

聰。拙修本作總。誤。

因機制變。川越本・拙修本並作相機乘變。

文明八年

大導寺。正本作大道寺。下同。

猶。拙修本作獨。

名曰長氏。爲足利義視近士。應仁中。從奔伊勢。及義視還京師。長氏獨留不從。當是時。足利氏權臣。山名氏・細川氏。各樹私黨。鬭于京師。將軍義政不能制也。長氏聰明有大志。陰散財結豪傑。一日。謂衆曰。天下之事可知已。成功名取富貴。舍今而何。顧關東八州。地勢高隆。士馬精強。自古稱用武之地。而永享以來無復定主。苟得割據于此。天下可圖也。吾欲與諸君偕東。因機制變。謀有所樹立。諸君豈有意乎。衆奮從之。後土御門天皇文明八年。長氏與荒木兵庫・多目權平・山中才四郞・荒川又四郞・大導寺太郞・有竹兵衞六人。仗劍東行。」終至駿河。依今川義忠。義忠。其姉夫也。會、義忠卒。子氏親猶幼。將士分離。各自爭鬭。長氏姉抱氏親。逃于山中。上杉政憲・上杉定正。以足利政知之命。發兵定駿河。長氏迎而說之曰。國內將士無叛者。特以主幼國疑故樹黨耳。今二公辱臨於此。欲定今川氏。僕雖無似。願宣公意。以戢將士。有不聽者。二公幸爲討之。政憲等曰。諾。長氏會將士誓焉。然後入山。奉氏親母子。歸入府第。政知兵乃引去。將士皆以長氏爲功。使居八幡山城。政知者。義政弟也。」初義政父義敎。爲將軍。其族

永享

于。川越本作於。

長享二年

延德三年

堀越。正本作二堀越一非。

持氏世管領關東。永亨中。持氏爲其權臣上杉氏所滅。蓋義敎之志也。上杉氏有兩宗。曰山内。曰扇谷。兩宗請京師。奉政知爲主。然關東將士思持氏。不肯奉命。乃索持氏孤子成氏。立之。成氏既長。討上杉氏。不克。走保古河。號古河公方。山内族據上野平井。扇谷族據相摸大場。皆陽尊政知。戴以爲君。置之伊豆。伊豆。山内氏管國也。給政知以田。居于堀越。稱堀越御所。長享二年。長氏徙居高國寺城。陰窺伊豆。而未得間焉。乃修政令。輕賦稅。又出其所蓄。假貸遠近。收以薄息。遠近賴之。每朔望。相率來謁。謁數者。或免其債。故士民稍稍來居城下。漸成聚落。長氏以荒木・多目等。爲之首領。立七隊。而服事政知。政知有二子。其長子曰茶茶。前妻出也。爲繼母所讒。囚之數年。茶茶憤怨。伺守者懈。出戕其繼母。遂聚其黨。弑政知。殺其大臣外山・秋山等。而自立。長氏聞之。乃佯稱有疾。浴伊豆溫泉。以詗之。曰。伊豆可取也。歸聚衆議。衆咸曰。吾輩願新九郎君爲一國主。久矣。敢不效力。延德三年。四月。長氏勒七隊。幷今川氏援兵。凡五百人。夜濟黃瀨川。旦抵堀越氏。縱火攻之。賊走。自殺于成就院。伊豆人民。畏其兵威。負擔奔

拊循。川越本作撫循。拙修本作撫㨨。

川越本標註云。壓一作饜。

韮山。拙修本作薤山。下同。

寶。長氏號令嚴明。秋毫不犯。榜于路曰。吾所以來者。誅賊子而已。非有所暴掠。其各安。乃堵。以竢我令。敢逃者。蹈其稼。火其家。時大疫。疫者不能奔。往往偃臥于家。長氏與以醫藥。拊循之。民更相告言。多來歸者。其豪族佐藤某。先衆屬長氏。長氏授以大見鄉地頭職。復其先邑。載印信焉。關戶某者。據深根城。以抗長氏。長氏移兵攻殺之。長氏恩威大行於國內。國內將士舊屬上杉氏者。聞之。無不率歸長氏。長氏以三十日略伊豆。以堀越氏邑自奉。其餘無所取。乃會父老豪傑。諭之曰。吾聞。人主視民猶子。民視人主猶父。是古之道也。及世之澆季。武人貪殘。剝民以自逞。而至肯而困壓。吾甚憫之。吾以羈旅之人。來司牧是邦。吾爲汝爲君。汝爲吾爲民。生相爲君民。是豈偶然哉。吾獨願我民之富足也。自今著令。減租稅五分之一。除諸雜課。諸將吏違令虐民者。聽其民來訴。衆皆悅服。爭欲爲之用。長氏既主伊豆。居韮山城。長氏外家橫井氏。北條氏疏屬也。至是。韮山有北條氏者。其嗣絕。乃養長氏。以女妻之。長氏又爲長子氏綱。娶其孫女。以爲北條伊勢同出於平姓。遂自稱北條氏。用三鱗徽號。削髮號早雲。早雲曰

明應二年

明應三年
陳。川越本・拙修本竝作陣。

明應四年

永正元年

永正二年

計復北條氏故業。以成其宿志。祈于三島神祠。夢有大杉二株。一鼠齧其根。仆之。化爲虎。既覺。召卜人占之。卜人曰。公生歲次子。子爲鼠神。是公克兩上杉之兆也。早雲心竊喜焉。當是時。上杉定正・上杉顯定。更相怨郤。兵結不解。早雲聞之曰。可以成吾事矣。明應二年。使使定正。請助攻顯定。定正喜。許之。其部將大森實頼爲小田原城主。謂定正曰。早雲梟雄也。無故親我。其意不測。然彼以好來。亦不可拒。宜以禮答焉。而重爲之備。定正略不加意。三年十月。早雲與定正。偕出兵高見原。與顯定夾荒川而陳。定正進而亂流。墮馬死。其子朝良走歸。保河越。早雲亦歸韮山。時實頼已死。子藤頼嗣。猶弱。早雲欲取其城。而難箱根之險。未發也。四年九月。早雲使人言藤頼曰。吾獵韮山。其獸逃箱根。願公以箱根假我。我得縱獵取焉。藤頼許之。早雲率兵百餘人。被獵衣裳。踰箱根。先縱牛數十頭。鼓螺隨之。憑高馳下。直入城內。藤頼惶駭。不知所爲。出奔三浦。早雲遂取小田原。遂取大場。永正元年九月。上杉顯定來攻朝良。朝良求援于早雲。早雲與今川氏親往援之。戰于立河原。二年。朝良遣使言顯定曰。吾聞兩虎相鬬。一

永正九年川越本。拙修本・寫本皆九年上有永正二字。

邀戰。川越本作邀擊。

我父以下六字。川越本・拙修本・寫本皆作我祖實爲之。而爲吾父所殺。川越本標註云。按祖疑當作父。而爲吾父所殺

狗乘隙。我族構兵數世。國內費弊。而早雲窺其後。荐食關東。吾與公莫乃爲兩虎乎。顯定然之。乃與朝良和。已而顯定與長尾氏戰信濃。敗死。子憲總嗣。定正・顯定前後死亡。而早雲勢益張。相摸人松田賴重等皆來降。獨三浦義同不服焉。義同者。上杉高救子也。爲三浦時高所養。時高後生子。欲殺義同。義同奔。依大森氏。假其兵。襲時高。弑之。據新井城。略取傍近。早雲欲討滅之。外示柔弱。不與爭也。義同立其子義意。而自居于岡崎城。九年。早雲遽發兵。襲岡崎。拔之。義同徙居住吉。與早雲戰連年。早雲終大破之于鎌倉。追擊至秋屋之隘。義同據險止戰。早雲乃引兵踰佐原山。出其背。義同走。入新井城。早雲隨而攻之。城險食多。久而不拔。乃築長圍。圍之數年。是時。上杉朝良死。其子朝興在江戶。聞新井急。將兵來援。早雲兵七千人。乃留其二千當城。而自以五千邀戰于甘繩。破走之。城內益困。大森・佐保田等說義同曰。宜奔上總依丸谷氏。丸谷氏。義意妻父也。義同曰。持氏之死。我父實爲之。而吾亦有弑父之罪。積惡之報。焉往而逃乎。早雲諜知之。十五年。七月。鼓衆疾攻。城陷。誅義同父子。盡略相摸。十六年。早

六字衍。又按而字不必刪。連下吾亦爲句。

永正十五年

永正十六年 川越本標註云。吾一作者屬上句。

二十一。川越本作三十一。

大永四年 數爲。拙修本作數以。

天文六年

雲病。卒于韮山。年八十八。子氏綱立。氏綱容貌岸傑。善用兵。早雲之興業。氏綱力居多。早雲臨終。遺言氏綱等曰。吾欲滅上杉氏幷關東八州而未成其志。子孫繼任其事。毋敢或懈。今我邑土不多。散吾所積財物。養四方之士。足以支二世矣。三世之後。莫復所事於財也。苟兩上杉而相釁隙。吾子孫可以坐大矣。吾視上杉氏。其家法日衰。亡滅非遠。雖然。彼大族也。不可輒取。曠日彌久。以俟其弊。譬之癰疽。其毒之封。必三十許年乃成。及其成。則潰裂而毋救也。且立法訓二十一條。以頒將士。氏綱守父遺訓。益修攻戰具。平定相摸。進與上杉朝興爭武藏。大永四年。氏綱遂拔江戶城。朝興走。據河越。氏綱數攻之。未能下。乃遣使平井。約夾攻河越。憲總按兵。兩無所援。而朝興數爲氏綱所敗。氏綱又與足利高基婚。高基者。成氏孫也。欲藉伊勢氏力以報上杉氏。則爲其子晴氏娶氏綱女。氏綱於是暴上杉氏累世不臣之罪。以諭關東將士。天文六年。四月。朝興卒。遺言子朝定。益圖相摸。卒而未三月。朝定修深大寺城。以挑氏綱。氏綱將兵。直赴河越。去城五十餘町而陣。朝定返兵自救。時七月。十五夕。月光滿野。兩軍交

縱。氏綱終大破朝定。取河越。朝定走松山。松山城主難波田某迎而內之。稍收敗軍。出陣城外。氏綱又擊。大破之。是役也。相摸人平岩重吉。虜朝定叔父朝成。氏綱隊將山岡某來奪朝成。效之麾下。重吉後至。爭功不決。氏綱乃密記二人鐙馬。而處朝成于山角某。囚于河越。山角善視之。時置酒款語。嘗從容談鎌倉舊事。山角曰。僕聞之故老。右大將之東征也。陸奧勇將由利八郎。爲宇佐美實政所虜。而天野則景爭之。右大將令梶原景時・畠山重忠更質之八郎。八郎前默而後對。以重忠有禮也。勇士之不可犯以非禮也。如此。朝成聞之慨然。山角曰。談偶涉觸犯。幸勿爲罪。朝成曰。噫。僕猶八郎也。嚮者之役。吾盡亡士卒。單騎走。黑甲赤馬者。追呼我。我回轡而鬭。皆墮馬。吾搏伏之。將拔刀。其人奮起居我上。而數人繼至。吾終爲所虜矣。山角以告氏綱。氏綱曰。黑甲赤馬者。重吉也。乃賞重吉。氏綱賞罰明覈。常類於此。氏綱威聲。益布遠近。武藏・下總諸城。往往降附。獨足利高基弟義明。在下總御弓。與氏綱爭強。義明初與高基相惡。亡依里見義弘。略其傍地。兵力稍張。高基害之。請氏綱圖之。先是。義明・義弘以兵艦數

天文七年

天文九年

天文十年

川越本變上無其字。

百艘。抵鎌倉。毀鶴岡祠。抄掠寶物。氏綱曰。吾將代神行罰也。將兵赴擊。卻之。七年。再發兵攻御弓。義弘擧安房・上總兵。來救義明。十月。氏綱與義明・義弘戰于鴻臺。大破之。走義弘。獲義明。斬首二千餘級。九年。再造鶴岡祠。關東士民。望氏綱風。歸者日衆。畿內・西國商賈。亦往往避亂來寓。小田原日益殷實。聲氣與上國相通。東國道士。嵗詣大峰者。過界浦。見鳥銃于市。持歸獻之氏綱。關東之有鳥銃。自伊勢氏始。後益召致銃工。及根來寺僧善銃者。以助兵威。十年。氏綱病卒。年五十五。嫡子氏康立。年甫十六。當是時。上杉朝定勢力削蹙。獨上杉憲政雄長東北。憲政。憲總孫也。今川氏親子義元。與甲斐國主武田信虎。皆通好於憲政。憲政驕惰。其嬖臣菅野信方・上原兵庫。專其政。政多偏私。憲政獨耽游宴。蓄舞妓數十人。國內成風。不復問武事。常微伊勢氏曰。彼小家耳。何能爲。老臣長尾意玄獨以爲患。先是。本間某・井俣某。以卒長有戰功。憲政之嗣立也。令管內。禁射鹿。菅野・上原犯禁。吏不敢告。本間・井俣邑其傍。相雜射獵。乃爲人所告。失邑屏居。意玄乃召之授計。遣佯仕氏康。以伺察之。二人赴小田原。因多目

氏請曰。山內公疏忠近佞。臣等獲罪至此。縱令得免。不願仕也。願得仕君公。多目頗疑之。且收充行伍。居歲餘。二人乃亡。歸平井。具狀告意玄曰。臣等熟視氏康爲人。沈毅不測。剛柔兼濟。時而讀書。時而自用刀槍。能等禮節。威重自持。而錄功不略下賤。其用士。無老無少。皆適其器。其子弟雖非嫡嗣。皆給俸充用。有功則進之。故其下畏而愛之。人人自奮。願爲效死。而上杉氏將士。皆陰通款。其不通者九人而已。早雲遺言。兩上杉之亡。在我三世後。其相隙則吾家之慶也。意玄以二人所言告憲政。因與朝定和。令國內禁奢華。講武備。錄將士子弟。乃復二人邑。菅野・上原嫉之。與其族黨謀。上書於憲政曰。早雲。伊勢丐兒也。倚今川氏之力。以攘伊豆。小國賤人之裔。何足爲慮。而我諸老過畏怖之。甚可笑也。天下右族。西有大內。東有山內。山內公號令。遠及陸奧・出羽。麾下將帥富三倍小田原者。可得五六人。而瞿瞿然丐兒子孫是怖。遣間諜詗消息。獨不顧鄰近之嗤乎。本間・井俣背旨獲罪。而遽復用之。世謂上杉氏無人也。臣聞氏康喜歌詠。比頑童。不知武事。其將堪事者。獨根來法師耳。其下常相恐曰。管領命駕矣。

勿。川越本・拙修本並作毋。

天文十三年

北條氏立虀粉矣。關東將士。馴服我公威德。非一日。何必借人力爲。與扇谷和。所損甚多。君勿聽焉。憲政大喜曰。意玄誑我。游嬉如初。將士通款氏康者。爲二人所告。則大懼。賂菅野・上原。以求解免。菅野・上原說憲政斥二人。從而毒殺之。又納諸家臣賂。建議曰。名族之嗣弱者。宜各分邑於其家宰。則戴恩者衆矣。憲政聽之。又擧高野僧善弓者。祿之。曰何遽下根來法師也。憲政歲入漸減。其兵漸弱。而欲親往擊滅氏康。旣命駕。而旋止者再三。東人自是稱猶豫者。曰管領命駕也。十三年。今川氏親使使與憲政約。發兵臨伊勢氏境上。圍長窪城。氏康親將且援之。會使者至自河越。曰。兩上杉氏連和。合兵將來圍焉。氏康還赴河越。不見敵。乃聚諸將。議曰。河越當兩上杉之衝。是必爭之地也。以一勇將守焉。吾可以致敵而大克之。衆推北條綱成。綱成。本福島氏。世爲今川氏將。守遠江土方城。父正成爲武田氏所殺。綱成猶幼。出奔相摸。氏綱愛之。賜北條氏及其偏諱。常爲軍鋒。其旗黃色。書八幡二字。爲號。其戰也。每馳突敵陣。連呼勝矣。所嚮無不勝。當是時。黃八幡之名聞八州。於是氏康授之三千騎。令守河越而還。

天文十四年

違。正本作移。

嚮。正本作鄉。

越。川越本標註云。一作踰。

長窪圍亦解。十四年。兩上杉氏大擧來攻。曰。此行必剪滅小田原。至河越。圍城數重。意期必取。綱成固守不下。上杉氏使使古河。請晴氏來助。氏康又以爲請。晴氏欲其兩解。依違答之。上杉氏臣難波田某・小野某。往說晴氏曰。公以北條可親乎。曰。然。曰。早雲・氏綱擅興甲兵。掠取伊豆・相摸。遂及武藏・下總邊傍。使公困蹙至此。其志不至盡取關東已爲公方則不已也。彼今日亡上杉。明日必及古河。今之尊公者。乃挾以營其私焉耳。且北條之親於君也。新也。上杉之仕於君也。舊也。去舊就新。君何惑焉。今河越城當陷不陷。所患關東將士觀望兩端。其心不一耳。君苟進大旆。辱臨軍陣。則衆知所嚮背。戮力決前。必擧河越。河越擧。則乘勢席卷。拔小田原。滅北條氏。復君於鎌倉。而駢首仕之。如往昔矣。願公熟計之。晴氏曰。善。乃盡其士衆至河越。上杉氏大喜。號令諸將。攻擊越歲。四絕其饟道。氏康聞之曰。吾必赴援。獨恐城兵之不竢我而決死也。誰能往告我計者。綱成弟辨千代。年甫十八。從在氏康左右。進請曰。此事至要。臣請往焉。卽爲敵所捕。拷掠百端。至死無言矣。氏康乃謂之曰。

疆。正本・川越本並作彊。非。

一戰。川越本・拙修本並作一擧。

天文十五年

九灯。川越本

往語乃兄。善爲吾守。吾克兩上杉。不出數月矣。女毋遽出決死也。辨千代乃往。著上杉氏號。單騎入城。當是時。氏康兵四守疆上諸城。在者裁八千餘人。乃自將赴援。憲政・朝定幷晴氏兵。凡八萬騎。氏康計驕而襲之也。佯請和解。憲政等不聽。氏康出至入間河南。上杉氏兵來迎。氏康不戰而走。入小田原。問諜者曰。敵中云何。對曰。敵皆笑曰。豎子走矣。居五六日。又出至河南。敵來。又走。又問諜者。諜者曰。敵曰。豎子不能復出。卽出。走耳。莫復顧也。氏康曰。可矣。夜勒兵。親誓之曰。吾聞。戰道衆不必勝。寡不必敗。顧士心和否如何而已。古曰。怯於小敵。而勇於大敵。吾數與上杉氏戰。以我一人。當敵十人。以寡敵衆。何必始於今日哉。勝敗之決。在此一戰。汝將士其一心協力。唯吾所嚮是視。令其兵皆尙白布於鎧上。約之曰。遇不白者。輒斫。勿取其首。令畢。乃引兵渡河。夜半。直衝上杉氏軍。軍大驚擾亂。我兵縱横奮擊。莫不一當百。殺傷二萬餘人。虜朝定。走晴氏・憲政。八州豪傑。卽夜降氏康者。九十餘姓。時十五年。四月二十日也。是夜。難波田・小野皆死。本間某單騎止戰。本間軀幹魁偉。累九灯于竿。以爲背旗。曰。吾以燭闇

作九燈。下同。
天明。川越本・
拙修本並作
翌日。

天文二十年

主之闔也。與我將大導寺某鬬。授之九灯曰。吾毋復用此也。子用爲標。好仕北條公。乃死。大導寺自是以九灯爲記幟云。天明。上杉氏麾下諸將。聞氏康兵寡。則大悔憤。欲乘其疲再戰。返至河越。則氏康已入松山城矣。諸將聚議不決。綱成自城內瞰之。開門突出。身先士卒。呼曰。勝矣。敵軍相驚曰。黃八幡也。卽敗走。綱成往松山。見氏康。賀戰捷。氏康慰勞之。論功行賞。撫納降附。威振關東。關東諸國皆爭通好焉。於是。憲政獨有上野。寵菅野・上原。不襃。將士益離心。二十年。氏康率八州兵。往擊憲政。七月。攻平井城。拔之。憲政出奔越後。依長尾輝虎。其老臣藤田・小幡・三川・成田等六人。以憲政子龍稺來降。氏康命神尾某。誅龍稺。燒夷平井城。兩上杉氏於是皆亡。而東國盡歸於伊勢氏。獨足利晴氏率其餘黨。不與氏康通。氏康乃移書讓之曰。臣父氏綱。與先公結婚姻。竭心翼戴。莫有貳心。以御弓氏之强武。氏綱啣密旨。不日滅之。遠近稱其勳勞。而未幾何。將見誅其子孫。臣未知其說。河越之役。憲政促君之親臨也。臣乃白曰。不敢請援。請兩無所援。君已聽之矣。而又惑於讒臣。翻援憲政。臣又白曰。苟宥城兵死。則獻

鑒。川越本作監。

天文二十三年

弘治元年

弘治二年

永祿二年

都宇宮。川越本作宇津宮。

永祿三年

城而退。君又聽之。而攻擊不已。往事如此。其曲其直。天將鑒之。氏康不復能戴君矣。二十三年。十月。將兵攻陷古河城。執晴氏。放之波多野。已而釋之。老於關宿。立其子義氏。居于鎌倉葛西谷。弘治元年。氏康使使入奏京師曰。晴氏悖亂。不能統關東將士。臣謹與諸將士議。立其子義氏代之。遂爲請其官爵。詔授左馬頭。以氏康爲左京大夫。敍從五位下。長尾輝虎計擊氏康。亦詣京師。請將軍足利義輝。自冒上杉氏。太田資正爲輝虎。誂諸將曰。關東將士。自古屬源氏。北條。平氏也。胡爲附之。室町將軍已以輝虎爲管領。公等宜決嚮背焉。於是。將士多送款輝虎。輝虎數入上野。氏康遣兵拒之。更有勝敗。二年。里見義弘又通輝虎。以兵艦八十艘。上三浦城島。氏康戍將梶原某・富永某。擊卻之。追戰海中。大獲而還。永祿二年。下總將士應輝虎。欲攻關宿取晴氏。結城晴朝來拒之。初晴朝與小山・佐竹・宇都宮三族戰。氏康遣兵援晴朝。晴朝德之。故爲之守。已而聞三族應輝虎攻結城。則辭還。三年。正月。輝虎率騎卒十一萬。來攻小田原。氏康議曰。輝虎慓悍無前。而智慮短促。不能持久。且以威力劫諸將。諸將必有不服

奪。拙修本作擊。

永祿五年

永祿六年

登。川越本作上。

者。吾厚集我兵。不與抗力。縱其猖獗。坐待其變。不損我兵。而彼將自潰矣。是兵法所謂。避其鋭氣。擊其惰歸。不戰而屈人兵者也。乃盡召八州將士。舍其城邑。來保守小田原。三月。輝虎率諸軍。至城下。氏康不肯出戰。輝虎攻之。不能拔。忍城主成田長康。憤輝虎無禮也。不告而去。將士稍稍亡去。皆叛輝虎。歸氏康。輝虎大驚。卻走。氏康令沿途士民奪其輜重。輝虎狼狽。走歸越後。而東國歸伊勢氏者如故。先是。今川義元。其子氏眞。與武田晴信合兵。數臨境上。以爭我富士河東之地。氏康與嫡子氏政。俱會戰焉。不決。乃講和。氏康以女妻氏眞。爲氏政娶晴信女。十二月。氏康授國於氏政而老。五年。與晴信合兵。復取松山。松山者。太田資正屬城也。資正憾輝虎之不終功也。遣使說里見義弘。六年。義弘出兵下總。與資正合。欲襲江戸城。城將遠山某諜知之。急修守備。而馳使報氏康。氏康・氏政將兵。發小田原。與義弘夾鴻臺而陣。其夜。候騎報曰。義弘兵卻。我先鋒遠山某富永某。進濟搦木瀨。平旦。引兵登臺上。敵將正木某。伏臺傍二里許。卒起要擊。我兵大敗。二將力戰死。餘兵大走。敵追至氏政陣。氏政麾兵。橫擊卻之。

休。拙修本作レ伏。

永祿十年

永祿十一年

之下也字。拙修本作レ夜。下屬。

辯。正本作レ辨。富士河。川越本作二富士川一。

氏康已濟レ水。得二敗聞一。召二諸將一曰。吾欲下爲二二將一雪上レ恥。何如。氏政曰。曩者遣二一卒一。雜レ敵入二其陣一。還報曰。義弘在二臺上一。撿二二將首一。意色甚驕。曰。敵喪二其良一。度已退去。吾且日濟レ水。追レ北殲レ之。乃釋レ甲休レ兵。是其可レ襲也。氏康曰。然。乃勒二二軍一。氏康・氏政自爲二先鋒一。會、日且レ暮。大霧。咫尺不レ可レ辨。二軍自二臺南北一。鼓譟而登。聲震二天地一。義弘軍大驚。潰走。氏康乘二愛馬一。名二賀美一。提二白秘薙刀一。手斫二三十騎一。氏政等擒二正木以下十八將一。斬首五千級。義弘・資正僅以レ身免。於レ是。上總・安房諸城多望レ風降。四隣益畏焉。十年。十月。氏康與二晴信一合二兵五萬一。攻二長尾輝虎于廐橋一。縱二火城下一。至二其門一還。以報二小田原之役一。輝虎不二敢出一。輝虎數窺二河越一。不レ得レ志。氏康有二妾子三郎一。輝虎欲レ養レ之爲レ子。以成二和議一。氏康聽レ之。於レ是。諸國無レ事。及二今川義元死一。氏眞承二其後一。而淫縱。不レ親二國政一。晴信其母之弟也。陰謀レ奪二其國一。十一年。十二月。晴信擧レ兵。襲二氏眞一。氏眞逃二走遠江一。晴信不二敢追一。留二居府中一。恐下我兵救上レ之也。乃遣二辯士寺島甫安一來說曰。請分二駿河一。富士河以西屬二武田氏一。富士河以東屬二北條氏一。氏康・氏政怒曰。晴信規レ利以滅レ親。是豺狼也。今川氏。吾祖宗所レ寄レ跡。且爲二姻戚一。

永祿十二年

吾必復氏眞矣。乃執甫安。囚于伊豆。以兵四萬餘騎赴援。十二年。正月。陣薩陲山。晴信陣興津。相持不戰。至四月。晴信度終不可支。夜拔其軍。間道逃去。氏眞乃來奔。氏康・氏政分兵守諸城。爲氏眞修府中城。六月。晴信來入伊豆。軍于鳴島。會大雨。我兵夜襲其營。晴信驚。棄其牙旗而走。而關東將士。多通晴信者。九月。晴信發二軍。來襲小田原。時我兵大半戍駿河。小田原兵寡。十月。晴信來至城下。聲言詣鶴岡神祠。以告戰捷。氏康・氏政欲待其入鎌倉。而斷後殲之。令兵勿出。晴信乃引軍歸甲斐。氏政弟氏輝等。要之三增山。擊破其先鋒。而衆寡不敵。我兵遂敗走。氏輝獨身止戰。其臣大石某。謂之曰。是非公死處。臣請代公死。進而死之。氏輝得間馳走。馬中箭斃。其臣師岡某。授其馬。免之。氏康・氏政將兵追晴信。未至嶺三里。而敗報至。乃班軍。而戍駿河者舍守赴難。十一月。晴信復擧國兵。入駿河。諸城解走。獨北條綱重在蒲原。堅守不下。晴信知其不可力取。引兵而去。綱重出追之。晴信分兵。直入其城。綱重戰死之。晴信陷府中。盡取駿河。氏康乃給氏眞以早川邑。而遣氏政及松田憲秀等。擊晴信。

元龜元年

元龜元年。九月。

川越本標註云。當一作嘗。

天正五年

天正六年

川越本標註云。諸一作許。

天正七年

天正八年

氏政與晴信相拒伊豆。聞氏康疾作。乃還。十月。氏康卒。年五十六。氏康攻擊四方。往往以身當敵。有大創數十。而常用心於政治。講源賴朝故事。察吏之貪廉而黜陟之。關東諸國倚而安焉。嘗與晴信會。晴信問河越戰略。氏康曰。是非吾功也。綱成等忠勇所致耳。其不矜如此。故其士民皆以廉讓相尙。趨君事如歸。及其卒也。無不哀慕。氏政勇敢類氏康。而器略不及。氏康既卒。甲斐將士欲乘喪攻氏政。晴信方西擊織田氏。以故不聽。遂講和議。氏政已無西顧之憂。乃專經營東國。天正五年。夏。擊里見義高。破之。義高請和。獻其子義賴。常陸國主佐竹義重。亦效質子。氏政於是授國於嫡子氏直而老。氏政・氏直。皆襲氏康官爵。晴信既卒。子勝賴數出兵。與織田氏・德川氏爭。大敗衄。乃以重幣來請和。且請娶氏政妹。氏政許之。自是武田氏遂爲我屬國。六年。輝虎卒。二子景虎・景勝爭國構兵。景虎。卽氏政弟三郎也。氏政爲景虎請援於勝賴。勝賴諾之。景勝厚賂勝賴嬖臣。勝賴變意。遣兵助景勝。攻殺景虎。氏政大怒。與勝賴絕。織田信長既定畿內。來約夾攻勝賴。氏政許之。七年。九月。與勝賴相持于三島。八年。戰于浮

天正十年
奔。川越本・拙修本竝作走。
使。拙修本作不。

島原。十年。三月。信長與子信忠。擊勝賴。入甲斐。氏政・氏直。將兵三萬。臨境上。勝賴困蹙。欲死。敎夫人奔小田原。夫人不聽。與俱自殺。信長既定甲斐・信濃。令我德川公居駿河。令其將瀧川一益守西上野。居廏橋城。十年。六月。信長爲其下所弑。一益將西歸。鉢形城主北條氏邦。使告氏直。而出陣金窪。與一益戰不利。一益兵乘勝而進。氏直先鋒。設伏而佯走。一益陷伏。我兵前後擊之。斬首二千級。時甲斐・信濃大亂。德川氏・上杉氏爭之。氏政又令氏直率兵數萬會戰。不決。乃與共和。定西上野而還。當是時。伊勢氏盡定八州。沃野千里。鑄山煮海。小田原繁華。爲關東都會第一。然氏政漸驕侈。用人不別忠佞。初氏政之爲世子。從氏康略上野。與武田晴信合兵軍松山。時方仲夏。有刈麥馱過軍前者。氏政見之。指問左右何物。左右曰。麥也。氏政曰。盍炊以供賓。晴信哂曰。吾今而後知北條氏大國也。郎君大國公子。故爲是言耳。夫麥者。擊之。簸之。礱之。晞而舂之者再。然後浸之。而炊之。今郎君乃欲直炊之。左右竊笑之。氏政不通下情如此。以故國政日弊。老臣松田憲秀弄權柄。士民多被冤枉者。嘗有一僧。過觀城門榜

天正十一年

天正十四年

新六。拙修本作六郎。下同。

居。川越本作去。

令曰。北條氏將亡矣。或走告之市尹。市尹召偕。問曰。聞汝謂北條氏將亡。信乎。曰。信。曰。何以謂之。曰。吾三十年前。過觀榜令。令四五條而已。今則三倍焉。夫德薄則政滯。政滯則令煩。令煩則衆離。衆離則君孤立矣。君已孤立。不亡而何待。市尹以告氏政。氏政不爲意。獨委任憲秀。十一年。七月。氏直娶德川氏。信長既遇害。而其將豐臣秀吉代爲政於畿內。挾天子以令海內。德川氏・上杉氏皆附之。秀吉屢使使來說曰。盍來朝京師。十四年。八月。氏政遣弟氏規赴京師。不肯親往。如是者再三。氏政曰。秀吉欲以口舌取八州。盍以弓箭取焉。秀吉怒。使使請戰。於是。氏政乃修城壘。蓄糧仗。八州將士。皆留其部下守城砦。而自聚于小田原。憲秀陰送款於秀吉。初憲秀子新六。守戶倉城。與武田勝賴戰。數不利。氏直聞之。罵曰。新六怯夫。多亡我士。新六聞之慙恚。叛降勝賴。及勝賴亡。新六來歸。當誅。憲秀爲乞哀。乃宥死一等。屛居其邑。至是。新六又勸憲秀。因敵將堀秀政通款焉。秀吉啗之以伊豆・相摸。令爲內應。氏政・氏直不之知也。與憲秀議。遣親族諸將。分守要害。美濃守氏規守韮山。陸奧守氏輝守竹浦。左衞門大夫氏

板。川越本・拙修本並作阪。下同。

天正十八年

主。川越本作守。

勝守山中。氏勝。綱成孫也。間宮康俊・朝倉重高爲副。與舊守松田秀植。倶守焉。氏政賜刀於康俊・重高曰。勉之。康俊曰。臣以死從事。重高退謂同僚曰。北條氏之滅。在於是役也。山中之城。板築不備。而命守焉。是棄我輩於敵也。吾視十餘年來政。多失道者。事可知矣。諸君謹之。十八年。三月。秀吉發兵二十五萬。自將來攻。德川氏爲其先鋒。二十九日。圍山中城。城兵力戰。斬敵將一柳直末。而敵衆已凌城齊登。康俊・秀植死之。氏勝・重高遁走。德川氏軍至酒匂。四月。竹浦及湯本守兵皆潰。西軍來圍小田原。氏直聞諸城失守。議曰。秀吉兵雖衆。而以威力相持。其心必不一。我兵雖寡。而五世君臣也。我欲要秀吉于險。一戰決雌雄。憲秀沮之曰。彼遠來。糧饟不繼。我堅壁淨野。不戰而屈之。是先公已試之策也。何必行危僥倖。氏直乃止。憲秀潛使人告秀吉曰。城西北有石垣山。以爲牙營。則城內情狀。無所遁隱。秀吉從之。一城大驚。已而上杉景勝與前田利家。以北陸兵來攻上野・松枝。城主大導寺政繁。出拒于坂本。不戰而走。遂降。爲其先導。下廏橋・松山・沼田・箕輪・河越諸城。進圍鉢形城。城主氏郡在小田原。留守將士。

岩槻。正本作岩築。

八王子。正本作八王寺。

堅拒不下。西軍別將二人。以秀吉命。徇下野・上總・下總。下之。氏勝逃在其邑廿繩。氏政・氏直召之。氏勝答曰。臣何顏見君乎。當死於此。或譖其有貳心。氏政怒。會、德川氏招降氏勝。氏勝遂降之。五月。氏政弟氏房。出襲蒲生氏營。不利。西軍別將陷氏房邑岩槻。留守妹尾兼延死之。秀吉更遣別將三人。攻館林城。城帶大澤。敵造浮梁濟之。城兵死守不降。秀吉取氏勝書諭之。乃降。六月。西軍合兵。攻忍城。謂城可灌也。募士人。起堤防。城主成田長康在小田原。留守知其不可灌也。陰出其人。應募以收錢。既就引水。城不漸一板。而敵阻水不得近。數日隄潰。西軍死者數百人。景勝・利家下鉢形。圍八王子城。城屬氏輝。其留守橫地監物遁之。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實。相謂曰。吾約奥州以死守。其可食言乎。與數百人殊死戰。利家在高處。望見壯之。問降將。知其姓名。使往降之。至則自殺矣。及事平。德川氏收用家範二子昭守・信吉。信吉稱備前守。爲水戸傳者也。當是時。里見・佐竹氏。及陸奥・出羽豪傑。皆降秀吉。秀吉擧天下兵。圍小田原。氏政・氏直勵衆堅守。出令曰。諸將士各守其所。毋妄相救。更番休止。休

者游息任意。又分麾下士六百人。晝夜巡警。秀吉合圍百餘日。終不能得一首級。氏規守韮山。秀吉以七將騎卒五萬攻之。氏規謂其衆曰。此地。我高祖所由而起。而吾受命守之。失一障壁。吾之恥也。衆皆奮激。其將朝比奈泰能等。數出力戰。西軍四面攻擊。死傷無算。乃築長圍。不敢迫。德川氏將小笠原某。以手兵傳壁。皆死。秀吉更將疾攻。陷其外城。氏規親督戰。卽日復之。八州城壘皆陷。獨小田原・韮山不下。」氏房在小田原。與敵將浮田秀家對壘。秀家以秀吉旨。遺酒於氏房曰。聊以慰城守之勞。氏房又遺物謝之曰。聊以慰攻戰之勞。秀家遂使」言於氏房曰。豐臣氏。與北條氏非有宿怨。偶爾構兵。半歲不決。徒使天下人膏鋒鏑。今誠議和弭兵則封以伊豆・相摸。氏房以告。氏政弗答。」時堀秀政既死。子秀治。以秀吉密書投憲秀。憲秀欲導敵兵入城。少子英春。爲氏直所寵。常侍左右。憲秀召而告之。英春號泣固諫。憲秀弗聽。而止英春不使復入。遂與秀治約。約既定。英春夜以鎧櫝自盛。入見氏直曰。君苟宥一人之死。則臣請告大事。誓而後告。氏直大愕。召憲秀。詰而囚之。英春請宥其死。弗聽。秀治踐約。至松田氏

壘下。待報三日。望見其旗幟皆變。乃去。秀吉百方誘降。使黑田孝高・羽柴勝雅因氏房說曰。方今北條氏之勢。如魚在釜中而烈火烹之。盍及今納降。取二國以存先祀。氏房妻子。囚于岩槻。亦以書乞哀。氏房心折勸氏政降。氏政曰。吾承父祖業。主於八州。爭武而失之。吾不必憾也。納降計存。死且不能。已而成田長康等。亦送款於西軍。親臣宿將。互相疑阻。交勸和議。七月。秀吉使德川公諭氏規曰。子之武已多矣。今和議將成。子猶何守。宜來贊其議。答曰。氏規習於戰。不習於和。未能應命。德川公請氏直書諭之。氏規不得已。撤守備。約封土事。自小田原西門入。則氏直已自南門出。蓋秀吉以陰謀間疏其父子。故氏直惶惑。不竢約而出也。於是氏直就德川氏陣。請曰。願宥氏政以下。則亟致城矣。德川氏以有姻戚之嫌。敎之因羽柴勝雅以告秀吉。秀吉曰。吾當依其所請。獨其封土以二總代伊豆・相摸。氏規聞之。恚曰。吾悔爲老賊所誑。將歸韮山復修守備。氏直弗許。乃誅憲秀。致城於德川氏。出城內士民。限以三日。氏政與弟氏輝出在醫師安棲宅。秀吉憚氏政剛武。又變約。遣使者五輩。就其舍。令自殺。使者至。難

氏朝。拙修本作氏長。岩留。拙修本作岩槻。川越本標註云。岩留舊作岩槻。誤。今據他書正之。同時封岩槻者高力清長。非氏勝也。掛川。正本作川懸。聽。川越本作聞。

言之。氏政・氏輝察其色。請間沐浴。作絶命辭。自裁。氏規將殉之。監吏奪刀不得死。秀吉宥氏直。令率氏規・氏房・氏邦・英春等數十人入高野山。給以萬石。明年。氏直病卒。年二十一。英春去仕前田氏。自長氏國于相摸。至是五世。九十餘年。乃滅。後秀吉思氏規忠勇。以爲狹山城主。食萬石。其後氏盛・氏信・氏宗・氏治・氏朝。父子相襲。歷事豐臣氏・德川氏。氏勝降德川氏。爲岩留城主。食萬石。關原之役。守岡崎。慶長中卒。養保科正直子氏重。大坂之役。氏重在先鋒。後數徙封。終爲掛川城主。病卒。無嗣。國除。

外史氏曰。余聞早雲嘗召儒士。說黃石公三略。其首有言曰。主將之法。務攬英雄之心。早雲聽之曰。止矣。吾既得之矣。不復使說。嗚呼。有以夫。其以流寓漂泊之人。據有八州。以開五世之基也。夫足利氏墮其綱維。權臣內鬩。海內戰爭。所以然者。無他故焉。天下英雄。各以其心爲心。而主將不能收攬之焉耳。早雲蓋早有見於此。以爲天下之事可知已。故仗一劍之任。周流天下。以求用武之地。一得其地。雲蒸龍變。莫之或拒。夫以兩上杉氏百年故家・財賦之富・兵馬之雄。

川越本標註云。上杉下一無氏字。

而早雲以赤手圖之。奚異錐鑿山哉。乃能戰勝攻取。制其死命者。果何所恃而然歟。亦以其結納英雄得其驩心。兵寡而志一。地狹而力合。如同舟濟江。不期而救。以此臨敵。雖橫行天下無難。而況於兩上杉氏乎。氏綱・氏康。所以纘緒業致強大者。亦由此道也。至於氏政・氏直。已代兩上杉。以擅八州之富強。意滿志侈。不復用心於此。上下漸遠。君民不親。欲恃區區之法令。以制馭其下。而不知其下之心既已去之矣。將何恃以抗天下勁敵耶。然豐臣太閤以不世出之略。加之以我東照公。左提右挈。率天下之猛將精兵。往問其罪。其勢力足以震撼天地。而合圍半歲。纔能舉之者。非以其父祖之收攬人心。有固結不可解也哉。

日本外史　卷之十　終

付。川越本作附。

日本外史 卷之十一

足利氏後記

武田氏
上杉氏

武田氏。源義光裔也。義光子義清。稱武田冠者。從父受射。傳伯父義家之旗。及無楯之甲。世居甲斐。義清孫信義。及子信光等。從源賴朝起。數有戰功。與逸見・小笠原氏。分領甲斐。賴朝移小笠原氏於信濃。以加藤氏代之。以及足利氏之時。信光後十餘世。曰信滿。上杉禪秀之亂。信滿以與之連婚。爲逸見所讒。自殺。二子。信重・信長。信重與族父信元。逃爲僧。信長依加藤氏。與逸見鬭。足利持氏伐而降之。欲以其邑盡付逸見。將軍義持不肯。賜之於信元。信元死。子幼。其將跡部專國。招信重爲假主。結城之役。信重有功。新充守護。乃誅跡部。逸見・加藤

天文五年

皆臣屬焉。信重後五世。曰信虎。與駿河豪傑久島某戰而勝之。以是日生男。因名勝千代。長曰晴信。沈毅多權變。信虎愛少子信繁。欲廢晴信。晴信故爲癡騃狀。以自晦。與信繁角材技。輒出其下。或佯墮馬。爲人扶起。諸將皆侮晴信。晴信獨與駿河國主今川義元相結託。義元。其女兄夫也。天文五年。義元爲奏請。以晴信爲嫡嗣。加首服。任大膳大夫。兼信濃守。十一月。信虎出兵信濃。攻海口城。城主平賀源心善戰。信虎以兵八千攻之。踰月不能拔。會、大雪。諸將議曰。時已窮臘。請班師。敵亦必不尾也。信虎從之。晴信請自殿。信虎笑曰。敵必不尾而請殿。如二郎。必不然也。晴信固請。以兵三百殿。後大軍數里。止舍。親警其兵曰。勿釋甲。勿卸鞍。食於馬而後食。五更即發。唯吾所嚮是視。兵皆竊嗤之曰。風雪如此。何警爲。五更。晴信即發。還向海口。與三百騎冒雪馳。昧爽抵城。源心已散遣其兵。獨與百人留守。晴信分兵爲三。自以一隊入城。二隊揚幟城外。應之。城兵不測其衆寡。不戰而潰。乃斬源心。以其首歸獻。一軍大驚。信虎不賞曰。舍城而歸。怯也。諸將心服晴信。而不敢稱其功。晴信仍有慍色。信虎狂暴。賞罰無常。國

天文七年

走。拙修本作去。
寖。正本作浸。

天文十一年

人苦之。晴信陰與老臣飯富兵部・板垣信形謀。益結今川義元。義元素病信虎強亢。欲助晴信而擅其國。信虎不覺也。七年。五月。信虎欲逐晴信於駿河。因託之於飯富氏。而自適駿河。計之義元。義元留信虎不返。而晴信自立於甲斐。諸宿將莫不頫首聽命。」而鄰國聞變。欲乘其隙。信濃士民多去。附村上義淸。六月。諏訪城主諏訪賴茂・深志(フカシ)城主小笠原長時。合兵一萬來攻。晴信令騎將原加賀留守。而自以六千人出。拒韮崎。加賀聚府中農商。得五千人。人執一紙旗。鼓譟而出。敵乃退走。」晴信寖驕恣。耽宴樂。喜詩賦。不視國政。羣臣莫敢諫。板垣信形稱病。潛延一僧善詩者於家。學詩數句。乃出侍宴。請賦詩。晴信不信。强請而可。立就五題。晴信大喜曰。汝何遽能如此。信形因大諫曰。先君唯無道。故爲君所逐。今君復如此。得不復有如君者乎。晴信感悟。遂厲精爲政。」十一年。三月。義淸・長時・賴茂與木曾義高。擧信濃兵來攻。諸將皆懼。晴信曰。四人合從。議必不一。可一戰而破也。乃佯浚溝高壘。四人以爲怯。進入境內。晴信夜發。乘霧雨逼擊。大敗之。四人再擧至平澤。又擊破之。自是。連年相攻。晴信每勝。」晴信擧山本

勘助。勘助。三河人。眇目痿躄。嘗學兵於尾形某。以干今川氏。駿河舊臣皆侮易
之。義元不奇也。勘助寄食數年。板垣信形聞其名。薦之晴信。晴信召見與語。大

天文十三年

悅之。卽日與二百貫邑。賜名晴行。十一月。晴信以晴行計取信濃九城。十三年。
以信形計誘殺諏訪賴茂。而納其女爲妾。明年。生男勝賴。稱四郎。晴信有長男

天文十四年

義信。以爲嫡嗣。使勝賴承賴茂後。十四年。五月。與小笠原長時及伊奈氏戰于

天文十五年

鹽尻嶺。破之。十五年。三月。攻戶石城。村上義清將兵六千來援。我先鋒甘利備
前・橫田備中等皆敗死。我軍將潰。晴行說曰。敵鋒不可遏。使之右顧則克。晴信
曰。我兵且不從令。曷能使敵如我意。晴行請假後隊兵。左旋而出。義清軍右顧。
晴信軍氣復振。進擊破之。晴行以功食八百貫邑。乃往駿河謝前嗤笑者。交口
稱譽。義元悔之。上杉氏將士聞甲斐兵弊於戶石。以二萬騎踰碓氷嶺。晴信遣
信形拒焉。而自繼之。九月。擊破上杉氏軍。眞田幸隆及子昌幸皆有功。晴信又

天文十六年

用幸隆計。誘殺村上義清精兵五百。十六年。八月。晴信取志賀城。義清出軍上
田原。板垣信形將前軍。戰勝不備。義清窺其怠。悉甲襲殺之。晴信赴援。義清率

天文十八年

天文十九年

宗尊。拙修本作宗良。

永正三年

死士。突入其麾下。與接刃。墮馬。終大敗。十八年。八月。晴信略地上野。又與小笠原長時。戰于諏訪原。走之。十九年。三月。復略上野。聞長時復出而還。時今川義元與相摸國主北條氏康婚。爲氏康來請晴信曰。氏康與上杉氏戰。將取上野。願君勿先焉。晴信乃與氏康・義元連和。是歲。晴信削髮稱信玄。信玄引鏡自視曰。吾貌類不動佛。乃使畫史爲己像。執劍及索曰。我死。四鄰襲入。視吾像。不敢加無禮也。信玄連攻村上義淸。又攻高梨・須田・島津氏。二十二年。盡略河中島四郡地。義淸等不能支。相共計以爲可敵信玄者。唯上杉謙信。乃往投之。

上杉氏。本長尾氏。平良文裔也。良文後十世。曰景政。居鎌倉。稱權五郎。以勇著東國。大庭氏・梶原氏。皆出於景政。景政後五世。曰景弘。始稱長尾氏。長尾氏嗣絕。養上杉藤景爲嗣。藤景。本藤原氏。藤原重房從皇子宗尊適東國。食丹波上杉邑。因氏焉。子孫爲足利氏外戚。管領東國。藤景。其庶曾孫也。後臣屬於上杉氏。散處越後・上野・伊豆諸國。自藤景而後十二世・曰爲景。爲景輔上杉房能于越後。後以事相隙。擧兵鬭。房能終死于雨溝。時永正三年也。房能兄顯定爲管

永正六年
永正七年
天文十一年　正本。無族字。
胎田。川越本作昭田。下同。

領。六年。顯定與子憲總。率上野兵。來討爲景。爲景敗。走越中西濱。顯定留徇越後。越後士民。不服顯定。推高梨某爲將。去歸爲景。七年。六月。爲景與高梨合兵。擊憲總于椎屋。破之。憲總走保妻有莊。隨而圍之。顯定赴援。戰于長森。敗死。憲總走。歸上野。爲景乃立上杉氏庶孽定實。妻以其女。置之上條城。奉之。而己居越中府內。徇越後。盡下之。長尾氏始大。天文十一年。一向賊起加賀。與州豪族椎名泰種・神保良衡連兵。叛爲景。爲景自往擊之。至栴檀野。賊將江波某佯降。設穽于路。迎爲景。陷而殺之。爲景有四男。長晴景。次景康。次景房。季曰景虎。景虎。幼字虎千代。爲繼妻出。甫八歲。精悍有膽略。爲景不愛也。逐之橡尾。欲以爲僧。景虎不肯學僧事。及爲景死。諸將多屬意景虎。而大臣胎田常陸者。自爲景時。有權寵。利晴景庸暗。與二子黑田秀忠・金津某。及三條城主長尾俊景。謀立晴景。殺景康等。景房出走。追殺之貳城門中。景虎時年十三。亦走。門者爲匿之簀牀下。逮夜。發而出之。則熟眠矣。喚起潛出。入春日山寺。寺僧挈之逃橡尾。匿乳母夫本莊慶秀家。慶秀與宇佐美定行。盡心保護。定行者。上杉氏世將。好讀

他。正本作它。栴。拙修本作旃。

天文十三年

天文十四年

天文十五年

天文十六年

天文十八年

天文十九年

書。通天文・兵法。謂景虎可輔也。深相結託。既而景虎聞賊搜索已不置也。則出避之。同從士十四人。爲行脚僧狀。行縢穿鞋而出。上米山。瞰視府內曰。吾他日起兵復國。必陣于此。遂至栴檀野。泣且拜曰。兒必夷滅仇敵。以慰冤魂。於是。經歷北陸・東山諸國。周視山川城池形勢。圖寫齎歸。有告賊以景虎所在。遣甲來捕。景虎與慶秀・定行謀。起兵。修橡尾城據之。聽命於上杉定實。十三年。春。俊景・秀忠將兵來攻。景虎防戰。大破之。斬俊景。走秀忠。十四年。遣神餘昌綱赴京師。請討賊詔旨。十五年。賊數來攻。景虎每戰輒勝。十六年。晴景遣族政景。大擧來攻。定行欲出戰。景虎上城望之曰。敵遠來無輜重。非久留者。竢其將引去。擊之可也。夜半。政景果卻。景虎以三千騎。開門出。戰于下濱。走之。及米山。景虎按兵止。敵過嶺。鼓衆追擊。又大破之。定行謂諸將曰。諸君知主公按兵止故乎。曰不知也。曰。敵迫險。急之則返擊。聽其過嶺。乘高下擊。敵不能支。主公年少。臨機制變如此。豈我輩所企及哉。於是。政景降。晴景窮蹙自殺。十八年。國人請景虎入府內。胎田等猶據三條不下。十九年。景虎攻三條拔之。誅胎田。賊以餘兵保新

天文二十年

天文二十一年

五。摑修本作吾謨。掠。川越本・摑修本竝作凌。

天文二十二年

山・黑瀧二城。欲遂攻之。會、上杉定實卒。不果。二十年。遣將高梨貞賴。攻拔新山。誅黑田秀忠。宇佐美定行拔黑瀧。誅金津。越後盡定。二十一年。諸將士共欲推景虎爲主。景虎曰。吾迫於上下之意。與兄抗兵。不料其自死。而吾主越後。世謂吾簒也。今國內略定。別擇主可也。吾逃爲僧。以明吾志。遂削髮。號曰謙信。將赴高野山。諸將士連署。請其止治國。謙信曰。置君。將用其令也。不用令。無君可也。自今吾所令。莫敢或違。則吾肯止耳。乃與諸將誓而入。明日。出令。收專命大臣十六人。賜死于林泉寺。諸將股栗。五月。任彈正少弼。敍從五位下。謙信曰。坐受官爵。非人臣義也。二十二年。二月。假路諸國。率兵二千。經北陸。入京師。先詣闕遂謁將軍義輝。五月。歸。村上義淸與高梨政賴・須田親滿・島津規久等。自信濃來投。請謁謙信。言曰。僕等爲武田信玄所侵掠。容身無地。側聞公威名。願賜一下手救援。謙信曰。諸君豈爲人下者。而來託於我。是知我也。我今略定內亂。念賀越吾父讐。常欲屠此二國。遂樹幟京畿。是吾素志耳。雖然。遇知我者。而不爲出力。非丈夫也。因問義淸曰。信玄用兵何如。曰。信玄行軍。不貪程頓。每戰要勝

枉。正本作枉。

於後。謙信曰。彼要後勝。意在拓地也。吾則不然。遇敵輒戰。要不枉其鋒耳。於是。下令國內。以十月十二日。治兵小田濱。將八千騎。入信濃。放火武田氏屬城。十一月。朔。進陣河中島。信玄聞之。請援於今川氏。將步騎二萬。出雨宮渡。使山本晴行等四人覘之。返報曰。北軍鋭甚。君宜厚集其陣。不戰屈之。信玄從之。兩軍夾水而陣。謙信挑戰。信玄不出。相持二十七日。謙信遣使者言曰。吾聞公用兵所嚮無留陣。而何獨不與我決乎。我於公非有怨仇。特爲義清輩。敢問。公何以奪彼地。公不欲與吾戰。則還地於彼。不欲還地。則與吾戰。信玄答曰。公庇義清。眞爲高義。雖然。晴信而未死。公不能成志也。公欲戰則自公始。謙信曰。諾。乃決議。約詰朝會戰。卽夜。傳發。以七隊合爲圓陣。平明。度橋而進。信玄勒十四隊迎戰。自卯至未。爭橋相逐。勝敗不決。謙信分兵渡上流。出甲斐軍後。甲斐軍顧之退去。横田源助・板垣三郎等。及駿河七將皆死。而越後兵亦多死傷。引兵歸。先是。謙信數出兵越中。而未得志。是歲。使使招降能登國主畠山義則。以女兒妻之。取其弟義春子養之。稱彌五郎。實質之也。是時。所管佐渡及莊內・會津盜起。

天文二十三年

巖。川越本・拙修本竝作レ嵒。
通。

持。川越本標註云。一作レ操。

遣レ兵擊平レ之。」二十三年。五月。信玄與二小笠原長時一戰二于桔梗原一。勝而降レ之。長時終出二奔京師一。」信玄以レ女爲二北條氏康婦一。爲二長子義信一娶二今川義元女一。於レ是。二國相共翼二武田氏一。以扞二謙信一。而信濃客將樂巖寺・布下・和田等。陰通二謙信一。謙信出レ兵清野。縱二火鼠子驛一。聞二客將事覺被一レ誅。乃還。」八月。謙信復以二八千騎一入二信濃一。曰。吾此行。必與二信玄一親戰。決二雌雄一耳。進渡二犀川一陣。既望。信玄以二二萬人一出。與レ之對。閉レ壘不レ出。間日。謙信使二村上義淸等夜伏一レ兵。而曉出二采樵者一。近二甲斐壘一。甲斐兵出追レ之。陷レ伏皆死。諸隊隨出。乃大戰。終日十七合。迭有二勝敗一。信玄潛下レ令。張二絙犀川一而渡。伏二旗幟一。徑二蘆葦中一。直襲二謙信麾下一。麾下潰走。信玄乘レ勝而進。宇佐美定行等。以二手兵一橫擊。破レ之。擠二之於河一。信玄與二數十騎一走。有二一騎黃襖騮馬。以二白布一裹レ面。拔二大刀一來。呼曰。信玄何在。信玄躍レ馬亂レ河。將レ逃。騎亦亂レ河。罵曰。豎子在レ此乎。擧レ刀擊レ之。信玄不レ暇レ拔レ刀。以二所レ持麾扇一扞レ之。扇折。又擊斫二其肩一。甲斐從士欲レ救レ之。水駛。不レ可レ近。隊將原大隅槍刺二其騎一。不レ中。擧レ槍打レ之。中二馬首一。馬驚。跳入二湍中一。信玄纔免。武田信繁聞二信玄危一。返レ之。呼レ騎索レ戰。戰死レ之。是日。兩軍死傷大

弘治元年

弘治二年

正本。軍下無二北字。

當。而信玄被創、夜收兵退。後獲越後捕虜。言嚮騎乃謙信也。弘治元年。四月。信玄攻降木曾義高。以女妻之。二年。信玄取伊奈郡。於是。盡定信濃。以高坂昌宣。守貝津城。以備謙信。謙信爲武田氏强敵第一。諸將因榮昌宣也。三月。信玄・謙信復對壘河中。信玄與山本晴行等謀曰。我分兵遶出越後軍後。鼓譟逼之。而以本軍夾擊。必大得志。乃令信濃客將保科彈正等。以兵六千。夜度戸神山。時月黑。迷失道。不能達。謙信見甲斐軍夜襲。人馬有聲也。潛起擐甲。傳令。擧八千騎出。五鼓詣信玄牙營。會、天大霧。謙信自霧中直斫營而入。營驚潰。斬山本晴行等六將。而天明矣。客將兵達上杉氏營。營無隻騎。顧聞河中戰聲如雷。則還。渡筑摩河。出北軍後。甲斐軍望見。乃還。夾擊北軍。北軍敗走。追逼之犀川。北軍輪轉返戰。包追兵。將鏖之。甲斐後軍、横擊救之。北軍乃倒隊而退。宇佐美定行植幟渡口護之。盡濟。甲斐兵疲。不復追擊。八月。謙信復出河中。使村上義淸等營舊戰處。而自進過河。背水陣。信玄知其志在必死。不敢出戰。其候騎報曰。北軍積薪如山。信玄令諸將曰。敵中夜有火擧。愼勿進擊。進擊者族。及暮。候騎又

伏。正本作覆。

永祿元年

報曰。北軍掃營。荷擔將去。諸將爭請追擊。信玄曰。謙信豈迫暮掃營者。擊之必敗。其夜。北軍火起。甲斐軍不動。天明。望見北軍蹤行首。嚴陣而待。諸將乃服信玄。信玄謀設伏兩山間。挑戰佯敗。誘敵入山。瞰射殲之。乃夜設伏。而明縱馬入北軍中。出輕卒追之。謙信不出。信玄慮兵老有變。乘夜退入上野原。謙信擧軍追擊。信玄返戰。殺傷相當。交收兵歸。甲斐・越後兵連不解。兩國士民患之。皆願講和。今川義元爲周旋之。謙信將有事於關東及越中。於是和成。永祿元年。三月。謙信自將入越中。越中・加賀將士交請降。許之。先是。上杉憲政數與北條氏康戰。每戰輒敗。關東盡屬氏康。憲政欲請援於謙信。是歲秋。憲政走。入越後。求見謙信。謂之曰。吾管領八州。十二世於此。卒爲一氏康傾覆。求四鄰可報氏康者。獨有公與晴信。而晴信・氏康方親。吾是以捐怨以歸公。公能爲我復仇。謙信曰。敢不竭力。當是時。謙信未得志於信濃。加賀・越中亦未服。而許於憲政者。欲以掩爲景之惡也。乃築館北川以寘之。憲政與謙信約爲父子。謙信於是稱上杉氏。又授以其職號。謙信辭曰。事成受之。未晩也。於是。會將士議。使人諜北條

永祿二年

永祿三年

永祿四年

氏。聞氏康每戰用奇。曰。彼用奇。吾用正也。十月。將兵入上野。陷廐橋・沼田等五城。復平井據之。發使京師。告東伐事。且請攝家一人爲關東主。而己輔之。如北條氏故事。二年。四月。再入京師。營于坂本。五月。朔。詣闕。天子賜酒。侑以寶劍。名五虎。請前關白前嗣東下。見許。又謁將軍。命管領關東。比三管領。許乘篋輿。執朱柄麾。賜己偏諱。改名輝虎。三年。五月。謙信自將攻和田城。未下。遣長尾政景。侵武藏。九月。前嗣來館于至德寺。於是。謙信發二萬騎。陣泉福寺。北條氏康大擧禦之。本莊繁長以所部爲先鋒。接戰。相摸軍卻。諸隊繼進。謙信以麾下。自中路進。與氏康戰。大破之。關東豪傑響應。乃報捷越後。迎憲政。居之廐橋牙城。而自居其郭。四年。正月。關東將士。賀正廐橋。遣兵攻古河。拔關宿・河越諸城。三月。謙信部七十六將。兵凡十一萬。進入相摸。太田三樂・小幡憲重等居前。建牙于高麗山下。北條氏遣死士。狙擊謙信。謙信覺捕之。縱還。遂圍小田原。氏康不敢出。謙信脫冑。穿白布幘。騎白馬。執朱柄麾。馳入諸隊。指揮軍事。關東將士竊指目語曰。此公視吾曹如蟲蟻。寧可終戴乎。當是時。信玄在輕井澤。飯富兵部說

座。川越本作坐。

曰。謙信威歛如此。北條氏必亡。則我亦危矣。君宜及小田原未陷。引兵出三增嶺。直當越後中軍。得勝大善。即不勝。亦足以伸義天下。信玄曰。不可。謙信用兵迅速。得之天資。而無老成之計。關東將士。必不能堪。終當歸氏康。汝暫待之。宇佐美定行說謙信曰。城堅。我深入久頓。恐有變。宜及今收兵。從之。新發田治長年少。爲近習。自請爲殿。氏康不敢尾擊。乃入鎌倉。詣鶴岡祠。觀源氏・北條氏舊圖。索故物小八葉車。載前嗣。而謙信騎從焉。關東將士。擁衛前後。小幡憲村操刀從。千葉國胤・小山政朝。門閥最高。爭座次。不決。訴於謙信。謙信判曰。在八州之士。千葉氏可爲首。小山氏不可爲尾。二人不能爭。忍城主成田長泰。稱源賴義故事。立馬祠前以待。從士曳長泰下馬。拳之。長泰慚恚奔歸。諸將叛歸者相繼。謙信還。至武藏府。長泰與北條氏兵尾擊之。謙信令委棄輜重於道。敵爭取之。因蹂躪而過。入平井。四月。以憲政歸越後。六月。關東諸將復附氏康。來攻平井。謙信聞報即發。潛軍由梭師谷出。比曉擊北條氏軍。待前軍戰半。自以牙兵旁出、橫擊中堅。使別將遠出其背。氏康敗走。復白井・廐橋諸城而歸。謙信之攻

筑。摺修本作築。

小田原也。北條氏使使請信玄北侵越後。以牽其勢。信玄乃令高坂昌宣焚掠疆上。謙信大怒。四年。八月。復出信濃。壘于西條山。堰水爲池。以備貝津敵。信玄與義信將二萬騎。來陣雨宮渡。以絶其歸路。越後將士說曰。利在速戰。謙信不肯。居三日。信玄收兵。入貝津。以瞰謙信。謙信自若也。信玄謀曰。謙信蓋竢吾變。不動其軍也。吾伏兵河中。而別軍自貝津直往攻西條。則謙信無勝敗。必引兵北歸。而吾承敝鏖戰。謙信可擒也。越後諜者報曰。甲斐軍出貝津南行矣。謙信召諸將問計。直江實綱曰。彼國內有變。故乘夜引去耳。當邀擊之。宇佐美定行・齋藤朝信曰。不然。彼蓋爲二軍。欲及吾踰河夾擊之也。語未畢。諜者又報曰。甲斐軍渡廣瀨。上河中陣矣。謙信謂二人曰。如汝言。吾將出其意外也。乃置疑兵山上。而全軍啣枚。縛馬舌。涉雨宮渡。遇武田氏斥騎十七人。盡斬之。進壓信玄軍而陣。使本莊繁長・色部長實等將二千騎。陣筑摩河岸。甲斐別軍已向西條山。信玄俟報至曉。曉未辨人色。見謙信牙旗在前。將士皆失色。越後軍鼓而進。聲震地。信玄不暇易其陣。以弓銃力拒。謙信常憾向所信玄而不遂也。欲必

餐。正本作飧。
復。川越本・拙修本竝作又。
救。川越本作援。

永祿五年

決死。自抽牙兵。前逼信玄麾下。麾下潰亂。赴犀川。荒川伊豆逼擊信玄。信玄脫走。謙信追之。義信以二千騎。尾謙信後。甘糟景茂等。擊走義信。謙信既克。休止傳餐。義信復以殘兵返襲。敗之。斬越後將志田義時以下數十人。謙信執槍親鬭。本莊繁長等來救。復擊走義信。或說。貝津敵夜出乘我疲。宜急收兵。謙信不背。背犀川陣。次善光寺三日。遣使信玄。欲再決戰。甲斐將士又有請焉者。信玄皆弗聽。五年。三月。北條氏康請信玄。合兵攻松山。松山。太田三樂屬城也。三樂與長尾謙忠在廏橋。令上杉憲政庶子憲勝守之。告急於謙信。甲斐卒將甘利氏臣有米倉丹後者。束竹爲楯。以扞銃丸。諸隊倣之。遂陷松山。降憲勝。而謙信方至廏橋。問三樂曰。松山何如。曰。陷矣。謙信大怒。瞋目按刀而跽曰。汝以怯夫守城。使吾不及事。是辱我武也。吾寧與汝死。三樂慴伏。不知所出。乃上松山糧仗籍。及憲勝質子二人。謙信左手捽二人髮。而右手斬之。收刀復問曰。敵軍幾何。曰。五萬人。將帥誰某。曰。信玄・義信・氏康・氏政。謙信笑曰。與吾敵者二人而已。如氏政・義信。吾直以刀背一擊足矣。抑近地有敵城可攻乎。曰。私市。城距此十

永祿六年

里許。謙信曰。可攻也。卽親將赴攻。三樂從之。綴舟濟刀根川。既濟。毀舟。過信玄・氏康軍前。遣使言曰。二公攻松山。而僕不及援。僕深愧之。不敢徒歸。今往攻私市。二公幸見要。不答。乃傅城。四面齊登。一晝夜拔之。斬城將小田朝眞。鏖三千人。以志田春義代守。還。遣使二氏軍曰。僕拔城而還。猶可以一戰。二公豈有意乎。甲斐軍鼓譟。謙信免冑下馬。徐行而還。至廏橋。召長尾謙忠曰。三樂從我。汝何不從。拔刀斬謙忠。屠其衆二千。使北莊丹後代守。然後歸。氏康謂信玄曰。公何以不戰。曰。吾與公敵一謙信。雖勝可愧也。信玄從容與氏康語。因問之曰。河越之戰。公以一軍克兩上杉氏。願得聞其詳。氏康曰。公在焉。僕何敢言。信玄固請曰。欲使兒聞之。氏康乃談其戰略。信玄稱善。還至其營。謂馬場信房曰。氏康手段。吾得之矣。六年。信玄出兵上野。取蓑輪・松枝諸城。又略飛驒。降其豪族江間常陸。而白谷氏納款於謙信。謙信於是與信玄分領飛驒。謙信自將入越中。拔松倉・小出。獲嘗殺爲景者江波氏。合其族十六人盡誅之。梟首栴檀野。祭告爲景。是歲。謙信入上野。取伊勢崎。四月。入下總。攻臼井。與北條氏援軍戰。走之。

諫。拙修本作謀。

河中島。正本作川中島。

先是。常陸小田氏治屬謙信。已而歸款北條氏。謙信怒。七年正月。朔。冒雪。發越後。入常陸。攻陷小田城。二月。攻佐野昌綱於上野。五月。北條氏康來援。逆擊走之。降昌綱。會、足利氏使者來。傳敕旨。諭上杉・武田・北條三家。講和息兵。八月。謙信自巡視信濃境上。信玄亦出對營。兩家諸將交說其君曰。君以四郡故。與强敵構兵十二年。多喪士卒。祇爲四鄰之幸。無爲也。二人然之。乃約。各撰一力人使鬪。勝者取河中。上杉氏力士鬪勝。信玄乃獨取貝津一城。其餘盡屬謙信。謙信乃復村上義淸・高梨政賴等。按其故邑。謙信築精舍于春日山。號不識庵。盡牌將士殉難者。自弔祭之。先是。謙信使長尾政景守上田。備信玄。已而忌之。有告其謀叛者。乃召諸親信。密議誅之。宇佐美定行諫曰。政景叛狀未著。誅之。恐招騷擾。上田要害。折入武田氏。君又負殺姉夫之名。謙信不聽。使定行圖之。定行乃歸其邑野尻。招政景。觀漁湖中。以漏船迎載。捉政景同溺。宣言私憾相殺。因沒入定行邑。而陰祿其子。收養政景子景勝。令鐵安朝代守上田。河中島之役。謙信爲武田義信所襲敗。曰。吾乃輸小兒。本莊繁長・長尾藤景。有救援之功。

永祿八年

永祿九年

勝長。川越本・拙修本並作秀勝。按秀勝信長之第四子。

又竊笑之。謙信惡之。誅藤景。繁長自危。叛。據其邑。遣兵討之。作距堙圍守、數年而降。義信勇敢善戰。將士歸心。信玄忌之。恐其倣己也。勝賴以庶子陰有奪嫡之志。乃與飯富兵部之弟昌景謀。使人誣告義信教兵部就軍陣圖信玄。昌景證之。信玄囚義信。盡誅其親信。賜兵部死。屬其部兵於昌景。改氏山縣。終令義信自殺。歸義信妻於駿河。今川氏始惡於武田氏。武田氏既不慮上杉氏。而其兵西出矣。初信玄・謙信共欲伸武於中原。而兵結不解。未暇及焉。謙信之再入京師也。三好長慶權勢方熾。家臣松永久秀專政。其吏徒途遇謙信。不禮。謙信命從士斬之。因密啓將軍義輝。請除長慶・久秀。義輝雖不能決。心倚賴之。久秀等頗聞之。懼。八年。義輝密使使召謙信。久秀等大懼。欲及其未來行大事。遂弑義輝。義輝弟義昭逃走近江。九年。以書來。託謙信以興復。議不輒成。義昭遂依織田信長於美濃。信長擁義昭入京師。遂略定近畿。頓致强大。顧恐謙信・信玄議其後。又自知非二人敵也。乃傾意結信玄。以控謙信。使幣相踵於甲斐。信玄知其意。動輒敗約。欲西其兵。信長患之。乃送其季子勝長爲質。以女妻勝賴。生

娶。川越本作取。

永祿十一年

信勝。及義信死。立信勝爲嫡嗣。而勝頼護之。信勝母死。信長又請爲其子信忠娶信玄女。信玄與織田氏婚。遂與今川氏絶。先是。今川義元與信長戰。敗死。其子氏眞暗弱。任嬖臣三浦義鎭。國人不服。我德川公嘗屬今川氏。亦去屬織田氏。兵力日强。是時。信虎猶在。流寓信濃。使人言於信玄曰。駿河亂。將爲德川氏所有。汝宜先取之。信玄不答。信玄國不濱海。仰鹽於東海。氏眞與北條氏康謀。陰閉其鹽。甲斐大困。謙信聞之。寄書信玄曰。聞氏康・氏眞困君以鹽。不勇不義。我與公爭。所爭在弓箭。不在米鹽。請自今以往。取鹽於我國。多寡唯命。乃命賈人平價給之。信玄使間者伺駿河。曰。可取也。陰招國人。約爲内應。十一年。十二月。引兵南入駿河。軍八幡坂。氏眞擧兵拒淸見寺。軍潰。走歸府中。遂走掛川。信玄欲隨攻之。而慮氏康來救。乃止軍府中。取諸降附任子。送致甲斐。聞庵原某嘗與山本晴行交。召問要地可城者。以久能及興津答。乃城之。氏康果以大兵來。爭駿河。以復氏眞爲名。信玄留兵守府中。而自軍興津。氏康軍薩埵山。相持未戰。信玄曰。氏康數與兩上杉戰。用兵遲緩。易與也。因飮將士酒。問曰。猶寒乎。

軍。川越本作兵。

永祿十二年

曰。寒。信玄曰。我陣平地。飲酒而猶寒。彼陣山上。寒可知矣。必下在其麓也。令人伺其陣。陣果無人。乃奪其糧仗還。後數挑戰。不決。至四月。信玄問計諸將。馬場信房曰。臣嘗見啄木啄蟲。欲出蟲於前。先啄其後。信玄默然。曰。然、夜收軍歸。氏眞遂走相摸。三浦義鎮爲德川氏所誅。十二年。六月。信玄出駿河。遂入伊豆。軍鳴島。會大雨。流潦侵陣。引還。於是。氏康兵專防西面。在小田原者甚寡。信玄謀知。議攻之、高坂昌宣諫曰、彼已懲謙信。講戰守必悉。君深入之。一有蹉跌。前功悉廢。而謙信將乘其後。不聽。九月、下兵八王子。攻敵城邑不下者。過而南。入小田原。縱火城下。十月。引還。遇北條氏二萬兵三增嶺。召諸將。命內藤昌豐掌輜重。昌豐辭。信玄曰。前謙信唯失輜重。故敗於小田原。是重職也。設八伏。及兵交。夾擊破之。歸謂昌宣曰。何如。昌宣曰。是僥倖耳。信玄嘉其忠讜。相摸兵戍駿河者。聞難棄守還救。信玄瞰之。十一月。急出駿河。拔九城。獨蒲原不下、信玄宣言赴府中。伏兵城傍山中而西。敵空城追之。伏起。取城。遂陷府中及諸城。與德川氏劃大井河爲界、織田信長以書來請曰。松平家康。僕所最眷顧者。公幸指教

元龜元年

之。家康介弟在今川氏。公宜取以爲質。關東・北陸諸國。皆使使賀戰捷。於是。信玄國傅南海。謙信國傅北海。以横絕海內。北條氏在其東。織田氏在其西。織田氏求援於信玄。北條氏求援於謙信。而謙信未之肯也。是歲。春。謙信攻陷武藏・下野諸城。秋入越中。攻神保長純。會畠山義則不能治其下。能登亂。遣上杉義春治之。立義則子義隆而還。當是時。謙信連略加賀・越中。而時出關東。兵行神速。敵不能測。每懸軍橫行八州。八州諸城聞其來。震慴不敢出。聞其還上三國嶺。然後相告解嚴。如雷雨過者。元龜元年。佐野昌綱族據飯盛城。與昌綱鬬。北條氏政以四萬騎助攻之。昌綱告急於謙信。正月。謙信卽發。晝夜兼行。聞氏政將分其兵當己。而急攻拔城也。謂諸將曰。僥令我戰勝氏政。而不救城陷。無益。吾當獨身入城堅守。汝等推義春爲將繼進。乃獨與八十騎。過氏政陣前而入城。謙信穿黑綿衣。不被鎧。提十字槍騎行。敵軍指目曰。謙信也。而大驚。不敢遮擊。諸將尋至。北條氏軍潰走。謙信遂屠飯盛。徇下野・下總。入廄橋。北條氏康聞氏政敗。將二萬騎出援。陣河越相持。三月。使使請和。質其季子三郎。謙信與諸

縻。拙修本作糜。

將議。聽之。會見于富田大中寺。攜三郎歸。授其故名曰景虎。」四月。氏康入駿河。攻深澤。不下。又請謙信出兵上野・信濃間。以縻信玄。信玄自將出拒。交綏而退。」十一月。德川氏質子遁去。於是。信玄與德川氏絕。而織田氏聘問益厚。時氏康病卒。氏政請和信玄。將士皆說勿許。乘喪擊之。盡取其地。雖謙信不能支也。信玄曰。吾夙欲出兵東海。竝海而西。建旗鼓于京師。則吾雖死不憾矣。前有醫人診我脈。謂當罹篤疾。吾經營關東。而中道疾作。志不可成也。信長乘吾輩不西。以家康當我西面。而陰助之。其計可憎。我欲與氏政和。西治信長。十二月。遂納氏政質。使逐氏眞。氏眞走。倚德川氏。時信長與義昭相隙。義昭以書諭信玄・謙信來圖之。」

元龜二年

二年。二月。信玄引兵東出。至遠江。攻高天神城。四月。入三河。陷八城。德川氏出援。覘甲斐陣嚴整不可犯。不敢接戰。信長聞義昭招謙信・信玄。懼甚。乃益媚事信玄。以書謝曰。家康密邇貴國。恐有違失。僕當訓督之。幸勿見尤。信玄答曰。老夫不知也。德川氏發兩使。通好於謙信。載誓書。請夾擊信玄。村上義清子國淸寓越後。力贊成之。

元龜三年

三年。四月。謙信將萬人出信濃。縱火長沼。以遙爲

天正元年

川越本・拙修本並無二月二字。

德川氏聲援。勝賴在伊奈。聞警。以兵八百赴拒。謙信曰。彼敢以寡兵當我。不愧信玄兒。吾成其勇也。引兵而還。入越中。夷椎名・神保氏。十月。信玄計謙信阻雪不能出。則復出遠江。拔二股城。信長潛遣兵援德川氏。十二月。信玄進軍三形原。以薄濱松城。縱火城下。挑戰。城兵不出。信玄佯退。城兵大出。上原能登謂小山田昌行曰。德川氏之陣單。織田氏之旗動。可敗也。昌行以告信玄。信玄乃返旆。昌行與勝賴及山縣昌景・馬場信房爲先鋒。昌行・昌景先合而卻。勝賴・信房承之。衝其麾下。信玄乃遣米倉丹後自間道橫擊。大破之。諸將請遂攻濱松。高坂昌宣曰。不可。我攻之二旬不拔。信長必大擧來援。相持數月。而謙信出信濃。則我不得不還救。信長則曰。我能卻武田氏矣。是損威名也。信玄乃退。次刑部。是役。獲織田氏將平手汎秀。送其首於信長。讓而絕之。信長猶分疏不已。天正元年。正月。信玄拔野田城。疾作而歸。信長請將軍義昭。諭信玄弭兵。信玄辭之。訴信長五罪。二月。使秋山晴近誘降岩村城。城將妻。信長之姑也。晴近奪而納之。京畿將士多來送款者。三月。信玄疾愈。復發。曰。此行必入京師也。三月。部兵

昏。川越本・拙修本並作惛。

三萬出美濃。信長以萬人出拒。山縣昌景以八百騎馳之。信長不戰而走、乞和益力。信玄不聽。轉入三河。次平谷。四月。疾復作。自度不起。召諸將處後事。使勝賴攝衆。以竢信勝長。誡之曰。汝愼勿佳兵以亡我國。吾死。天下獨有一謙信而已。汝請援以國託之。彼一受汝託。必不與隣國合以侵汝也。言畢昏迷。已而呼山縣昌景曰。明日樹汝旗于瀨田。乃卒。年五十三。諸將以遺命祕喪、以信玄弟信綱貌肖信玄。輿載之歸。曰。信玄有疾歸國。以昏夜延見四方使者。信玄又豫具空頭花押數百紙。以備書問。以故無來犯者。信玄。居常略涉書志。嘗以孫子語書其旗曰。不動如山。侵掠如火。其靜如林。其疾如風。馬場信房問曰。風雖疾哉。非倏起倏止者乎。信玄曰。兵鋒貴疾耳。苟止矣。則吾以麾下繼之。信房曰。君要第二合之勝也。其君臣講究武事。皆此類也。四隣傾聞信玄死。北條氏政馳使。告之謙信。謙信方食。舍箸而歎曰。失吾好敵手矣。世復有此英雄男子乎。因潸然流涕者久之。甲斐宿將馬場信房・山縣昌景・內藤昌豐・高坂昌宣四人。交說勝賴。請和謙信。勝賴不聽。勝賴性剛愎自用。長坂調閑・跡部勝資。自信玄時

命。川越本作使。

天正二年

川越本・拙修本竝兄下有也字。

城。川越本・拙修本竝作將。

弑。川越本作殺。

已被近幸。勝頼益寵之。勝頼欲出兵美濃。四將交言不可。調閑・勝資勸之出。會、三河軍圍長篠。乃止。五月。勝頼遣信房援長篠。敵設伏而燔柴。爲燒營遁以誘我。將士欲追之。信房曰。其烟白。非燒營也。令騎往踐之。果有伏乃退次黑瀨。城陷而歸。昌景向濱松。亦不利歸。二年。二月。勝頼出美濃。陷諸砦。五月。攻陷高天神。歸。宴將士。昌宣・昌豐相謂曰。武田氏之滅。兆於此宴矣。昌宣説曰。君狃勝不戢。構怨四鄰。非長久計。宜還地二氏。與之連和。稍取東國。厚集其勢。二變阻而止。已而二變勸勝頼出遠江。濟天龍河。遇敵不戰而還。還至伊奈。信虎在焉。年已八十。乃欲載歸。視其狂暴如故。乃止。四鄰覘甲斐兵數不競。知信玄定死。稍窺之。自信玄之死也。信長專意於謙信。卑辭厚禮。事之猶事信玄。以其妹嫁神保長純。長純。上杉義春之兄。屬謙信者。信長因陽結謙信。而陰圖之也。又陰以計招上杉氏諸城。歸款於己。謙信書詰其反覆。信長答書陳疏。謙信不聽。會、畠山義隆將。遊佐彈正等毒弑義隆。以七尾城降信長。七月。謙信將兵三萬西伐。攻長純木船城。拔之。遂入加賀。屠金澤。移兵攻七尾。以義春爲將。努力復取能

登。遊佐等乞援信長。信長方攻長島。不能來。九月。城陷。誅遊佐等。乃休兵二日。屬十三夕。月色明朗。謙信置酒軍中。會諸將士。酒酣。自作詩曰。霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山幷得能州景。遮莫家鄉憶遠征。令將士善歌詩者皆和之。遂爲政國中而歸。信長遣大兵來援。聞城陷引去。信長猶使使謝罪於謙信。是歲。信長招降三河將奧平信昌。令守長篠。以備甲斐。三年。四月。三河計吏大賀某陰送款甲斐。約爲內應。勝頼往陣楡城。聞大賀謀覺被誅。乃還。五月。勝頼以萬人附昌宣。留拒越後。自以一萬五千圍長篠。軍道虛寺。令叔父信實守鳶巢壘。德川氏乞援於信長。信長不敢出。使者三反。不許。使者請曰。不援則納遠江於武田氏。爲之先驅。以取尾張。且信玄已死。公何怖之甚也。信長乃自將來援。兵凡七萬。猶憚甲斐騎兵衝突。植柵三層。守以萬銃。勝頼欲戰。信房・昌景・昌豐等皆諫曰。敵衆新來。其氣銳。不若且避之。不則疾攻城。雖損我兵。猶可拔而歸也。二嬖曰。一戰夷兩敵。在於今日。勿聽老怯計。信房曰。今日之戰。老怯者必死。若公等。乃遁走耳。勝頼遂留室賀行俊・小山田昌行圍城。而自進濟河陣。

視。摑修本作賜。誤。

旦日。敵問道襲鳶巢。信實敗死。我陣顧而動。敵衆挑戰。昌景爲左先鋒。進犯敵柵。中丸死。信房爲右先鋒。與眞田則幸・土屋直村破柵而進。則幸・直村亦中丸死。室賀行俊來請曰。鬪可解否。勝賴曰。可。言未畢。諸軍大潰。信房使人馳白勝賴曰。君速去。臣請留死之。與八十騎止戰。盡亡其騎。自登高邱。顧視勝賴已遠矣。乃號於敵曰。我馬場美濃也。宜斬以受重賞。敵叢刺之。死。二變先遁。昌宣豫慮軍敗也。以兵八千。迎於境上以歸。因大諫。請與北條氏婚以拒二氏。勝賴從之。信長既大捷。謂甲斐不足患。所患獨謙信。乃大城安土。移焉。以備北道。柴田勝家爲其最驍將。因守越前。居北莊。八月。謙信將兵入加賀。攻松任城。城將蕪木高秀乞援於信長。信長將五萬人。來陣御幸塚。勝家爲先鋒。謙信疾攻拔城。斬高秀。齎其首。贈信長曰。頃攻本城。和公遠來見援。幸甚。然城將已授首。請此奉贈。公當有一戰以弔之。明早將相見。信長許諾。而乘夜退軍。設八伏以竢。諸將請追擊。謙信曰。信長豈徒歸者。亦引還。是歲。勝賴使使請和謙信。欲報織田氏。謙信許之。徵其質子。不肯。會德川氏攻二股。城將依田幸成固守不下。乃攻

天正四年

遣。川越本・拙修本竝作使。

天正五年

陷諏訪原。遂攻小山。勝賴曰。彼謂我不能復出乎。乃募兵二萬援之。敵解圍去。十二月。幸成死。德川氏復來攻。幸成子信蕃拒之。勝賴命棄城退。岩村又陷。信長手刃其姑。是月。勝賴迎北條氏女成婚。昌宣退謂人曰。今夕吾始得高枕矣。四年。春。勝賴出兵遠江。與德川氏相持橫須賀。勝賴欲戰。昌宣諫曰。長篠之役。多失老將。獨有臣存。今又欲殺之乎。勝賴乃退。城相良而歸。越後將士說謙信曰。甲斐兵新敗。可乘也。謙信曰。我與信玄數十戰。不能取。及其死。侮弱子。乘敗取之。何以對天下。三月。謙信入越中。取蓮沼。獲椎名泰種。殺之。令別將入飛驒。夷江馬氏。遂自入加賀。攻小松。織田氏將前田利家等來援。以先鋒擊破之。使川田長親守越中。柿崎景家守能登而還。信長患謙信西向。日夜謀所以禦之。柿崎景家遣人。市馬上國。信長喜曰。可以間也。乃給直十倍。自書謝。更索佳鷹。景家貪其直。數給鷹。後有告其通款。終被殺。信長陰招能登人長重連・加賀人松任彥紹。誘一向賊北向。五年。重連聚兵。據穴水城。小松・安宅・大道山諸城。竝起應之。當是時。筒井順慶・松永久秀等據大和。遙送款謙信。請其西上。又西約

奔。川越本作走。
踢隊。川越本・拙修本竝作踢墮。

毛利氏。東西夾攻信長。九月。謙信自將攻穴水。拔之。斬重連。遂攻小松・安宅。信長遣柴田勝家・前田利家等五將。將兵四萬八千來援。而己亦潛來助之。謙信攻拔三城。進至石動橋。距織田氏軍十里而陣。使使約明曉會戰。信長復乘夜而逃。謙信大笑曰。信長巧於奔者也。使其猶在。當盡踢墜之水耳。遂進攻金澤。陷之。入越前。行攻織田氏壘寨。盡驅其守兵。焚掠而進。烟塵蔽天。信長退保北莊。遂退入長濱。謙信以天寒雪下。又聞久秀等已敗死。欲班軍。乃遺書信長曰。信玄既死。公則委四郎於家康。而自居安土。蓋備謙信也。公數與畿內敵樂戰。未觀北人技倆耳。請期明春三月十五日。聊舉八州之卒西上。與公相見。公勿視謙信同皮履都人士。時京師人喜穿皮履。故云。使使齎書。因贈越後布二千端。信長延見使者。言曰。爲吾還報越後公。信長何敢與公角。公來。將盡脫刀劍。獨挿扇於腰。單騎迎謁。先導以入都。公義人也。信長所辛苦經營。必不見奪也。使者復命。謙信哂曰。信長姦雄。甘言以怠我耳。聞長篠之役。渠以柵與銃困甲斐四郎。明年。復必以此擬我。我豈墮其計哉。十月。歸越後。間日傳檄。大發管內

天正六年

弗。川越本・拙修本並作不。

天正七年

八國兵。期以三月五日。加賀以西兵。沿道附從。京畿大震。信長使使告之勝賴。請捐前故修舊好。曰。謙信西上。我與家康拒之北道。願公直指越後。事克。則其地唯公所取。勝賴不答。六年。三月。北陸諸國兵。應檄雲集。謙信自臨簡閱。中約束。將發。先發二日。疾作。二日。遂卒。年四十九。卒後。信玄五年矣。直江兼續・本莊繁長等諸大臣。相共謀曰。三郎。非上杉氏胤。胤乃景勝。且親姪。宜立。立三郎。北條氏必因以幷呑北陸。吾輩皆爲之臣僕。於是遣上杉義春。矯命。急迎景勝於上田。來入內城。分親信守諸門。景虎在外城。日夜相鬩。弓銃交發。織田氏細作在越後者。走歸告信長。信長大喜。撫掌曰。天下大定矣。乃命佐久間信盛入加賀。前田利家入能登。佐佐成政入越中。各自略取之。景勝・景虎兵結不解。以故不能拒。景虎終敗。走歸上杉憲政于北川。戶定城主北莊丹後聞變馳至。說景勝曰。兩郎君宜各領四州。共拒信長。不則彼乘釁來侵。先公所百戰而取者。一旦附之敵人。豈不可惜。景勝弗聽。北莊怒。去助景虎。數破景勝兵。因軍善光寺。景勝母在上田。肩輿來入城。召諸將士。面勗之。保謙信遺業。將士感激力守。七

天正八年

年。正月。景勝夜潛兵襲景虎軍後。大破之。北莊脫走。景勝將荻田主馬識之。追而刺之。於是。諸城多歸景勝。景虎走保鮫尾。北條氏政聞之。遣兵萬餘援景虎。又請援於武田氏。勝賴出軍飯山。景勝與戰不利。齋藤朝信說景勝。以東上野啗勝賴。先以金萬兩。又厚賂其二嬖。二嬖交說勝賴曰。景虎。君之舅也。雖然。援之而克。則北條氏連屬東北。將及於君矣。是與得東上野・金萬兩孰利。勝賴乃與景勝和。合兵攻景虎。景虎與憲政皆自殺。相摸兵引去。氏政大怒。與勝賴絕。與織田氏・德川氏約。夾攻勝賴。七月。勝賴以其妹妻景勝。撤貝津之戍。移於沼津。數出兵上野及駿河。時高坂昌宣既死。莫復諫者。而二嬖益橫。德川氏世子信康居岡崎。其母關口氏有罪廢居。與甲斐醫人滅慶通。使滅慶來送款。約爲內應。勝賴許之。事覺。母子皆被殺。九月。勝賴次沼津。氏政以兵四萬軍三島。十月。德川氏踰險入駿河。縱火由井。勝賴使別將當氏政而西。二嬖故遲其行。至則去矣。八年。六月。德川氏攻高天神。十月。城且陷。城將岡部與行請援勝賴。裨將橫田尹松使言曰。城深在敵地。君不宜來。臣等分當守城死。卽得免。走歸亦

不難也。將士皆贊其言。勝賴曰。坐不援無以藉口。乃出徇上野。攻膳城。肉薄拔之。九年。二月。與氏政相持于伊豆。氏政將松田憲秀送款勝賴。勝賴欲戰。二嬖止之。三月。高天神陷。與行被獲。尹松力戰脫歸。勝賴欲賞之。曰。脫歸被賞。在君爲僭。在臣爲冒。固辭不受。勝賴疆土日削。二嬖勸其請和信長。小山田昌辰曰。晚矣。長其侮耳。不聽。還織田氏質子。請和。信長答書辭甚倨。穴山信良又說勝賴曰。先公威震四鄰。故所居不設城池。然聞氏康・信長通好謙信。則築岩殿・久能・吾妻三城以備之。謙信不屑從約。以故無事耳。今鄰國無復如謙信者。安可不備。勝賴然之。乃城于韮崎。號曰新府。信良欲娶勝賴女爲婦。武田信豐賂二嬖。乃適信豐焉。信良啣之。終通款織田氏。諸公族諸將亦多送款者。木曾義昌爲勝賴妹壻。苦其誅求。陰降信長。請導其兵。有來告之者。二嬖斥爲虛言。已而事覺。十年。正月。勝賴欲討義昌。阿部忠高曰。其地險狹。不可輒往。臣請先往。說紓其計。而君兵稍從其後。可也。二嬖沮之。遂命信豐將五千人。冒雪赴討。遇義昌鳥居嶺。大敗歸。二月。勝賴將兵二萬。出陣諏訪。遣諸將分守要害。而信長已

遣長子信忠。引兵十餘萬。自木曾入。瀧川一益・川尻鎭吉等爲前部。德川氏・北條氏各大擧應之。下條信氏棄瀧澤走。小笠原信嶺以松尾降。信忠入至桔梗原。勝賴召諸將于諏訪。衆議不決。城昌茂進而請曰。方今之勢。不可一日猶豫。臣與尹松。得假五千兵。爲先鋒。昌幸・昌辰等以餘兵繼進。敵不復設柵如長篠之役。我必克之。勝賴問之二嬖。二嬖曰。少年者所言。不可用也。阿部忠高曰。臣遣間覘敵。敵深入客地。離而不整。可襲也。我夜合兵疾進。挫其前部。以破其膽。二嬖不許。已而信良叛。降德川氏。駿河諸城皆解走。獨田中守將依田信蕃不下。先是。德川氏數攻信蕃。不得志。至是。使人說降之。對曰。吾知守城而已。不知外事。乃使信良以書諭之。三月。信蕃出歸甲斐。德川氏招以厚祿。辭曰。吾赴國難。未暇謀家。諏訪軍潰。在者僅三千。勝賴乃走。歸新府。信忠合兵圍高遠。城將仁科信盛與小山田昌辰固守。信忠使辯士入說曰。孤城抗大敵。虀粉可待。苟出降。以爲將。增其邑。昌辰曰。吾報先公。正在今日。若何爲者。敢來誘我乎。執使者。截其耳鼻。放還之。信忠怒。以信嶺爲導。疾攻。昌辰力戰。數出狙擊信忠。不克。

徙。正本作從。

城遂陷。與信盛及渡邊某皆死之。於是。敵兵四面來薄。而新府城壁未全。勝賴欲徙避之。嫡子信勝慷慨曰。事已至此。何之而免乎。當焚旗與無楯。徐自裁而已。勝賴未答。小山田義國欲誘執勝賴。以市織田氏也。說曰。臣邑岩殿險可保。眞田昌幸曰。弗若臣邑吾妻險有積粟。請以死奉君。勝賴乃令昌幸先歸。二壁曰。昌幸新。義國故。去故就新。奈何。勝賴遂徙岩殿。令義國先歸待已。於是焚殺諸叛臣質三百人。召死節者質十人。須與金各百兩。散遣之。收其重器。以殘兵五百赴岩殿。顧望二府。君臣相顧泣下。至柏尾。待義國來迎。七日不至。走入駒飼民家。卽夜。義國使人襲取其質。乃絕關拒勝賴。勝賴不知所出。乃走入天目山。兵僅四十人。土屋昌恒・秋山光次牽其馬。阿部忠高・溫井常陸擔槍從之。小宮山友信單騎來從。友信初數諫勝賴。請除二壁。又與小山田將監者爭事。並訴。將監厚結二壁。勝賴遂廢錮友信。友信於是赴難。追及於田野。就昌恒言曰。君嘗擯我。而我赴君難。是傷君之明也。然不赴缺我義。與缺我義。寧傷君明耳。因問調閑何在。曰。昨逃矣。問勝資。曰。亦逃。問將監。曰。逃已十日矣。友信曰。唉。吾

奔。正本作犇。

知有今日久矣。勝賴俛首而已。已而山僧與村民謀。導敵索勝賴。勝賴乃使其配北條氏奔相摸。對曰。妾何顏見阿兄乎。又使信勝間道奔陸奧。信勝曰。大人宜奔耳。兒辱家嗣。義當死于此。勝賴曰。然則吾與汝共死。顧汝未行撰甲禮。當行禮而死。乃請秋山光次爲賓。被信勝以無楯。比禮畢。敵兵奄至。衆飢不能起。勝賴以白布約髮。拔刀親戰。信勝以槍。昌恒以弓翼之。卻敵三次。山縣氏卒辻某聚叛人。自後山瞰射。我兵皆斃。昌恒矢盡。且拔刀。敵叢槍擬之。勝賴走救昌恒。爲敵刺喉及腋。死。年三十七。信勝亦死。年十六。昌恒・友信・光次等皆死之。武田氏滅。織田氏入甲斐。懸令曰。氏族將士出降者復邑。勝賴祖叔父信就・信光・叔父信綱・信龍・弟信貞・從弟信豐。及二嬖・義國等。相率出降。皆爲所誅。獨穴山信良。得領甲斐一郡。上野諸將。非武田氏世臣者。盡隸於瀧川一益。信濃諸將。隸於森長可。與柴田勝家等。相爲猗角。以圖上杉氏。時北陸訛言。信長兵大敗於甲斐。土寇群起。景勝遣兵助之。與勝家等戰于越中。勝家憚越後兵。拒以塹柵。其他諸將侮景勝。出柵外戰。輒見擊破。瀧川一益聞之。遣兵入越後。五月。景

羽柴。正本・拙修本並作豐臣。

天正十二年

勝迎擊一益兵三國嶺。大破之。自將入越中。拔魚津。轉入信濃。與森長可戰。勝家等復取魚津。五月。穴山信良與德川氏俱入京師。六月。信長爲其將明智光秀所弑。信良走歸。途遇盜被殺。一益・長可・勝家聞變皆西走。而武田氏故地大亂。諏訪賴忠・小笠原貞慶・村上國清。皆舉兵。欲復先業。景勝自將兵七千助之。七月。景勝入貝津。北條氏・德川氏。各以數萬人來爭。眞田昌幸・高坂源吾。初屬景勝。已而通北條氏。曰。臣爲內應。景勝可獲。景勝覺之。執誅源吾。北條氏不知。以昌幸爲前導。濟筑摩川。以待源吾報。景勝送源吾首請戰。北條氏懼引去。已而德川氏盡取甲斐・信濃。景勝定河中四郡而歸。景勝幼有武幹。心誓報謙信恩。以償政景罪。謙信嘗欲誅深澤九鬼者。景勝時年十四。手斬二人。謙信賞賜政景舊邑。數從軍有功。謙信卒而三年。克景虎。將士盡伏。獨柴田因幡者。據新發田不下。景勝常有所內顧。以故不能專營外事。織田氏將筑前守羽柴秀吉。誅明智光秀。略定京畿。與柴田勝家戰。勝而殺之。取加賀・能登。十二年。遣使來通好曰。吾欲攻佐佐成政。以取越中。願子勿救。景勝曰。吾素與成政仇。而越中

天正十三年

天正十四年

天正十五年

天正十七年

本吾地。吾欲先取之耳。乃自將兵入越中。十月。攻宮崎城。一鼓拔之。謂使者曰。越後男子用武如此。返語筑前守。吾於越中。欲取卽取。而不取者。以讓子也。十三年。四月。秀吉攻降成政。取越中。五月。秀吉獨率石田三成等三十人。來入越後。自稱使者。至薄氷城。見城將須賀。告以實。欲面見景勝計事。須賀以兵守之。而馳告景勝。請執殺之。景勝不許曰。彼身司天下權。而踰險入敵國者。蓋恃前約。以吾必不食言也。殺之不義。卽日。與直江兼續等六十餘人見秀吉。秀吉屛人與語。獨兼續與三成得侍。已而別去。七月。上田城主眞田昌幸畔德川氏。復屬景勝。送質乞援。景勝遣須田某・本莊某等。將信濃兵六千赴援。兵少利。景勝欲大擧繼之。德川氏兵引去。十二月。秀吉又使使厚贈越後君臣。促其入朝。十四年。五月。景勝入朝。秀吉供帳路次。爲奏敍正四位上。任參議。七月。歸國。是歲。陷新發田。盡定越後。十五年。定佐渡莊內。十七年。景勝又入京師。進從三位。遷中納言。直江兼續爲四位侍從。藤田・泉澤・安田三臣皆敍四位。兼續自父實綱常參謀議。爲仇人刺死。無子。謙信命近士樋口與六爲嗣。是爲兼續。多文武材

天正十八年

文祿元年

耶。川越本・拙修本竝作邪。

文祿二年

慶長二年

慶長三年

慶長四年

慶長五年

能。事景勝。尤見寵任。十八年。秀吉東伐北條氏。景勝與前田利家自東山道進。下數十城。北條氏滅。又與利家徇陸奧・出羽。文祿元年。從秀吉伐朝鮮。陣那古耶。二年。景勝將兵入朝鮮。築釜山城而歸。是時。上杉氏所領。歲入可三百萬石。秀吉心畏惡景勝之能。又度謙信久訓其國。國人皆戴景勝。欲徙其封。嘗從容問之曰。卿國歲入幾何。景勝恐被削。不以實對。曰。七八十萬石耳。秀吉佯驚曰。何少也。因徙之會津。食百二十萬石。賜兼續以米澤地三十萬石。賜越後于堀秀治。景勝大悔之。是歲。慶長二年也。三年。秀吉有疾。嗣子秀賴猶幼。乃以景勝與德川・前田・毛利・浮田氏竝稱五大老。與爲盟約。秀吉薨。德川公威權獨熾。四年。石田三成與直江兼續謀。勸景勝擧兵。曰。群牧共願推公。爲諸將載書示之。因密定議。七月。與佐竹義宣皆就國。城香指原。修壘寨。峙糧餉。誘陸奧・出羽土兵齊起。又使人招越後遺民。遺民競起應之。堀氏不能制。五年。正月。使藤田信吉賀正於大坂。德川公厚賜之。信吉歸。驟諫景勝。兼續欲殺之。三月。信吉挈家奔歸德川氏。德川氏使伊奈圖書來諭景勝西上。景勝不聽。數德川氏背盟十

罪。德川公終決意東伐。令前田・佐竹・伊達・最上氏四面來擊。伊達氏國會津東境。先衆而至。其將伊達成實・片倉景綱。將兵來侵。景勝遣兵擊卻之。七月。德川公統將帥百餘人。至小山。景勝軍長沼。分兵守險以待之。石田三成乃矯秀賴命。與毛利・浮田・島津・小西諸將倶擧兵。至美濃。八月。德川公使庶長子秀康以萬人守宇都宮。而自引兵西上。直江兼續請悉兵躡之。景勝弗聽。會秀康來請戰。景勝答曰。先人用軍。未嘗乘人危。吾不敢違也。且公年少。非我敵。吾待內府還。決戰耳。糧仗如缺乏。當相給焉。乃收歸會津。德川公之西也。命諸將曰。景勝勁敵也。愼勿與爭鋒。是以四鄰環守。不敢來犯。九月。景勝以兵四萬附兼續。令攻最上義光于山形。義光設二十五砦待之。請援於伊達政宗。政宗發兵二萬赴之。兼續拔二十一砦。進攻長谷城。起樓櫓。鑿地道。晝夜攻擊。城將志村高治善拒。景勝又遣中村式部攻上山城。不利。義光・政宗合兵來援。兼續軍中有傳呼曰。上國軍敗矣。已而使者至自會津。傳三成敗聞。命班師。兼續曰。聞變而退。怯也。乃使人入城告故。且曰。鼓衆齊登。陷其外城而還。義光・政宗與高治尾擊

慶長六年

河。正本作川。

伏見。正本作伏水。

慶長十九年

南。川越本標註云。或作西。

之。兼續返戰二十餘次。而至米澤。政宗進攻福島。本莊繁長守城。擊卻之。六年。二月。政宗又來侵。繁長又擊卻之。政宗轉濟逢隈河。攻梁川。城將須田大炊設四伏而與戰。破之。四月。政宗留兵備須田。而還攻本莊。本莊出拒松川。侮敵不備。政宗乘曉而濟。擊敗之。本莊走入福島。須田聞之。濟逢隈河。破其兵。遂襲政宗軍後。與本莊夾擊走之。景勝乃自將而出。政宗驚舍其軍。獨與十餘騎間道走白石。德川公既克石田氏。天下歸之。景勝因秀康謝罪。德川公使人來促其西上。景勝卽治行。將士皆危而止之。景勝曰。吾豈可再負乎。七月。至伏見。謁見。八月。國除。獨食米澤三十萬石。宥兼續罪。賜五萬石。慶長十九年。十一月。大坂兵起。德川公率諸將攻之。景勝與佐竹義宣爲先鋒。二十四日。至大坂。景勝將杉原常陸。尙水干衣於鎧表。衆指而異之曰。彼越後宿將也。是其軍禮乎。杉原聞笑曰。吾鎧太敝惡。故尙此耳。景勝陣鴫野。義宣陣今福。間日竝進。破敵柵。景勝命植柵設塹于大和河南。令隊將鐵某將銃手五百守之。將士竊言曰。此非戰場。不知何用。日午。城兵大出。義宣兵不利。銃手齊發。敵兵乃卻。已而城兵七

三將。寫本作二將。

又市。正本作又壹。

元和元年

元和九年

隊出鵜野。我先鋒須田大炊與戰。敗走。杉原常陸與安田上總・長尾權四郎進擊。斬其三將。德川公聞鵜野戰急。令堀尾氏・丹羽氏來代景勝。景勝以槍手三百自環爲陣。憑椅不動。使者十餘輩來傳敎旨。皆不得入。景勝厲聲曰。吾在戰塲。雖有敎命。不能退一步。麾兵益進。遂破城兵。城兵入柵。景勝銃手又驅柵內兵入城。不使復出。須田愧敗。與五騎馳入敵中。人得一首級而還。德川公軍監小栗又市具狀以聞。退語同僚曰。今日戰既解。猶有宜進擊之機。吾言之景勝。辭以日暮。可憾。德川公聞之。叱曰。景勝武事。若曹敢得誹議之。次日。巡視諸營。至上杉氏。親慰勞之。遂賜功狀於杉原・長尾・安田・須田・鐵・島津等。杉原伏謝曰。臣等何力之有焉。先寡君家範猶存。臣等奉以周旋焉耳。退謂人曰。吾從先公。數與武田氏戰。若今日之戰。乃兒戲耳。何足戴功狀乎。元和元年。五月。再攻大坂。景勝以特命留守京師。陣八幡。凡兩役所用軍監。選練兵事者。傳命諸營。多甲斐舊臣。而眞田昌幸子幸村在城中。戰守最可觀。世以爲出武田氏遺法也。

九年。三月。景勝病卒。年六十九。子定勝。孫綱勝。相繼襲官秩。綱勝夭。以外甥吉

子養。拙修本作養子。

辯。正本拙修本並作辨。

綜。拙修本作蹤。非。

名。拙修本作兵。

治。正本作冶。下同。

良義英子綱憲爲嗣。削十五萬石。上杉義春。本畠山氏。爲謙信子養。後以爲上條城主。承故上杉定實後。佐景勝。擊景虎。最有功。德川公命復畠山氏。削髮號入庵。老於京市。大坂冬役。召之二條城。問上杉氏行軍法。諸侯伯皆侍焉。義春爲人短小而善辯。陳己嘗從謙信所聞見。音辭如流。公稱善。諸將皆織田・豐臣以來老兵豪傑。而毋敢出聲者。後病眼盲。使人讀近代史乘聽之。至武田・上杉氏事。往往指其謬僞云。宇佐美定行之孤定興。數潛從軍。欲立功自贖。景勝以其父故。不許也。流寓諸國。及關原事作。赴難會津。及徙封。終隱越後。終身。其子勝興仕紀伊。亦於越後事跡。有所綜覈。初武田・上杉二家。並務耕戰。以名法治國。政貴嚴刻。而上杉氏作事率仗信義。是其所以獨存至今也。然世言兵法。並稱二家云。

外史氏曰。世傳二家兵書。有出後人假託者。不可盡信。特言兵於我邦。期乎二公者。不可不知其由也。夫勇悍趫捷。重恥輕死。我國俗所自有。我先王又養之以恩。結之以信。所以撫摩鍊冶之。經數百千年。闔國之民。親其上。死其長。如手

私利。川越本標註云。一作私門。

愈。正本作逾。

概。川越本標註云。一作皆。

足之扞頭目。以能震懾四鄰。雖魏・唐之强大。不能加焉者。恃此俗也。及至通唐氏。乃舍此學彼。斷樸爲文、鍥强爲弱、平時奔競、有急遁逃。幾乎擧朝皆婦人矣。而先王遺民勇而輕死者、皆爲將門所收。以此奪王權。營私利。無所爲而不成。承久・建武之事。輒皆爲然。故先王所以自衞。後王所以自累。均此兵也。顧用捨何如耳。降至戰國。此兵各爲群雄所分領。日淬月厲。愈用愈勁、而其撫摩鍊冶。教之而後戰者。莫武田・上杉過焉。故我邦兵之精。極於此時。而二家又精之精者矣。且源平以還。其兵皆散而自戰、將勇卒鋭者勝。非必有束伍結陣坐作進退之法。有之。始於二家。二家兵法。傳爲我邦極則者。由此焉爾。然源氏・足利氏・每自東國起。其兵習騎戰。而足利氏居京畿。不恤馬政。織田・豐臣・德川。竝起侯甸。少騎多步、卽如二家。雖較多騎。亦以其國險不便騎。騎率徒取致遠。至戰概舍馬步鬪。故騎戰遂廢、又用火器與長槍。以爲軍鋒。而弓矢之用稍衰。是又我邦兵體變遷。不可不知也。此時兵農雖別。往往收漁獵者爲弓銃手。收盜賊爲間諜。以補隊伍、充斥候。二家皆是。二家之陣。大約弓銃手居前。長槍步卒次之。

川越本標註云。自上一無或字。傍上一有之字。

弗。川越本・拙修本竝作不。

川越本標註云。確疑格。

昔者。拙修本無者字。

騎士次之。牙旗鼓螺居中。左右拒夾之。輜重居後。游兵居外。每戰。交發弓銃。長槍從之。士下馬以進。或自卒傍出。或自中跳盪而出。戰酣。或以麾下乘之。雖變化無準。概以此爲常。一時竝同此法。而群雄環視。獨畏二家。幸其噬搏弗解。不敢觸犯云。夫孫武・吳起不同世而生。饒使同世生。借人之兵。以施己之法。不能大展其力。確鬪決勝敗也。今二公挾孫・吳之能。擅趙・魏之甲。而比肩接踵於一時。可謂希世之遇矣。後之言兵者。觀二公相與之跡。識其形勢機權之大。然後參之其書。辨別眞僞。其法可得而詳論。余是以合敍二家焉。昔者吾父嘗行過甲斐。甲斐民。飲食必稱館君。館君。信玄也。以信玄之悖逆。而能抗强敵數十年。而不相下。豈非以其敎民有素哉。謙信之事。多世所不傳。余幷考畠山氏・宇佐美氏說。又與米澤人士交游。爲余言如此。

日本外史 卷之十一終

日本外史 卷之十二

足利氏後記

毛利氏

毛利氏。出於大江廣元。廣元十一世祖。曰本主。姓土師氏。爲備中介。本主生音人。音人歷仕仁明・淸和之間。至從三位左大辨。賜姓大枝氏。後更大江。與菅原氏竝掌學政。音人生千古。千古之後七世。曰匡房。有文武才略。敎源義家以陣法。匡房曾孫爲廣元。廣元佐源頼朝于關東。使之霸天下。以其薦爲安藝介。遷因幡守。至正四位下大膳大夫。兼陸奧守。源氏・北條氏之際。爲幕府元老。數定大難。有五子。長子親廣。承久之役屬官軍。不知所終。第三子曰季光。爲左近衞將監。食相摸毛利莊。因氏焉。娶三浦氏。死於其難。季光子經光。出鎌倉。居越後南莊。經光子時親。復起爲六波羅評定衆。足利尊氏滅六波羅。加賜時親以安

武田氏・吉川氏。拙修本作武川氏・吉良氏。

凞房。川越本標註云。一作凞元。

永正八年

見。拙修本。作視。

藝吉田。及河内利田。時親生貞親。貞親生親茂。親茂有三子。師親・匡時・直衡。皆隸新田義顯。義顯爲足利氏將高師泰所滅。貞親以下猶屬官軍。獨師親去屬師泰。師泰之攻石見。敵阻劫川。師親與高橋某。先衆亂流。拔三城。以功盡食吉田邑。及師泰敗。屬山名時氏。迎親茂及二弟。共居焉。足利氏令武田氏・吉川氏攻降之。師親生廣房。廣房生光房。光房子熈房。嘉吉之役。攻蟹坂。有功。熈房子豐元。應仁之役。與小早川氏守相國寺。有功。豐元生弘元。弘元之子曰興元。次曰松壽。松壽幼有器量。其保嘗抱之濟水而躓。溺。保惶懼謝罪。松壽曰。行道而躓。常也。庸何傷。比髫齔。詣嚴島神祠。既歸問從者曰。汝輩何祈。曰。祈郎君主安藝也。松壽曰。汝盍祈吾主天下。夫願主天下者。能主一方。願主一方者。能主一國。今願主一國矣。其所成可知已。聞者奇之。興元既爲嫡嗣。松壽出養於丹比氏。永正八年。加首服。名元就。稱少輔次郎。居猿掛城。食邑七十五貫。養士卒三百。會、明使者來聘京師。路經吉田。善相者朱良範從焉。元就往見良範。良範曰。公兼漢祖・唐宗之相。必宣威於四方。元就心自負焉。元就爲人隆準肉角。音吐

永正十四年

永正十七年

大永三年

甚洪。在麾下。號令士卒。聲聞於諸隊。十四年。安藝守護武田元繁。據佐東銀山。矯將軍命。攻略國內。十月。攻有田城。城屬吉川經基。經基與興元善。是時皆在京師。元繁柵于中堰。使熊谷元直守焉。別遣千騎。焚猿掛城下。元就以二百人出戰。不利。吉田兵聞急來援。元就乃分兵五百。備元繁援路。而以千人疾攻元直。破而斬之。元繁遣兵來援。不及。乃留一將當有田。自將四千騎來戰。元就令吉田將志道廣好潛兵出敵背。夾擊破之。元繁挺前濟水。我兵射洞其胸。其兵皆潰走。乃報捷京師。大內義興爲足利氏管領。爲請褒賞元就。元就遂幷領武田氏邑八千餘貫。經基妻以其孫女。元繁子光和。猶據銀山不下。十七年。興元卒。子幸松嗣。外祖父高橋久光與元就竝輔之。大永三年。久光父子。與備後三吉某戰而死。元就赴援。撫其遺臣。幷其邑萬餘貫。六月。出雲國主尼子經久。攻大內氏將藏田信房于鏡山。元就奉幸松爲先鋒。陰誘信房叔父某。某斬信房出降。被誅。經久。本六角氏。其祖父持久。爲伯父高詮幹國事。至於經久。滅鹽冶某。取富田城。轉略山陰諸國。南出兵。侵大內氏。大內氏世居周防山口。爲太宰

大永四年

大永七年

享祿二年

天文四年　東。拙修本作西。

大貮雄長關西。是時。大内義興在京師。聞變馳歸。自是連年攻戰。石見・安藝豪族。介立其間。嚮背無常。獨毛利・吉川・武田氏。常附經久。七月。幸松病卒。無嗣。家臣聚議。選於群叔。以元就爲嗣。八月。元就入吉田。元就弟就勝。與坂某・渡邊某。謀殺元就。元就覺之。襲殺就勝及坂・渡邊。坂者。桂廣澄兄。志道廣好弟也。乃使人諭廣澄・廣好曰。吾不以坂故疑汝也。廣好拜謝。廣澄弗信。自殺。其子元澄。聚族據城。元就單騎往諭。降之。四年。五月。大内義興。使其子義隆。與其將陶持長將二萬人。攻安藝諸城屬尼子氏者。七月。尼子經久遣兵援之。敗績。八月。元就以部兵四千。夜斫大内氏營。破之。持長解去。七年。元就入京師。任右馬頭。爲幕府相伴衆。享祿二年。熊谷信直以事怨武田光和。以高松城來歸元就。光和怒。攻之。不利。憂憤死。香川光景亦以八木城屬元就。將攻銀山。銀山餘衆。終奔若狹。天文四年。元就率光景・信直等二千騎。東略備後。攻高野城。城將乞援於播磨赤松晴政。未至。元就急攻拔之。幷其兵。又徇下數城。先是。尼子經久逐子興久。殺之。立孫晴久。晴久遇元就亡狀。大内義興病卒於享祿元年。遺言義隆曰。

宍戶。川越本作完戶。吾。川越本作我。

北兵。川越本作北軍。

天文十年

元就與晴久有郤。宜以是時奪爲我援。愼勿失其驩心。吾嘗德彼。彼豈不記之。陶持長奉遺命。百方通好。元就終應之。攻下國內諸城屬晴久者。晴久大怒。欲親來討之。經久曰。元就材武。善用兵。未可以力取也。不若先定備後・石見。以形勝制之。經久弟義勝亦諫止之。晴久皆弗聽。吉田城東北有胄山。元就患敵陣山上以瞰城也。會出雲間來入。元就覺之。乃讒曰。敵陣胄山。吾與宍戶隆家夾擊之。陣三猪口。則非吾利也。隆家。元就女壻。守五龍城者也。間者走報晴久。九月。晴久將騎卒五萬。來陣于三猪口。助武田氏餘黨復銀山。四近將帥怖晴久兵威。不敢援我。獨宍戶・竹原・小早川諸族。遣兵數百入城。城兵凡三千人。北軍焚掠。城兵輒出擊。走之。晴久叔父國久。部屬精勁。稱新宮黨。忿北兵數衄。以萬騎來挑戰。元就設二伏而出戰。敵覩我寡單。縱兵而進。路狹。不得齊進。伏兵夾擊。破之。晴久乃作三柵于宮崎以逼城。大內義隆遣陶隆房等。將兵來援。陣天神山。十年。正月。元就請隆房備晴久。而自與長子隆元攻宮崎。元就進破二柵。隆房與尼子義勝戰于三猪坂。義勝死。晴久夜遁。城兵尾擊。多斬獲。銀山兵聞

天文十二年

土肥。川越本作土居。

之亦通。十二年。正月。義隆大擧攻富田。元就以兵二千從。與周防將秋山某夾川陣。四月。河水大漲。城兵急攻秋山。元就曰。吾祖騎渡劫川。況此一衣帶水乎。亂流援擊。走之。七月。義隆敗走。元就整隊。徐退南還。是役也。吉川興經。與北軍將十餘人叛。晴久導周防兵。已而復附之。義隆以故敗。

吉川氏。出於駿河人吉川友兼。友兼誅梶原景時。子孫以功食安藝大朝。後十二世。爲興經。興經嬖大鹽某。其下皆怨。殺大鹽。廢興經。議曰。毛利右馬與先公婚。其子皆先公外孫。可養以爲嗣。乃請元就次子元春。入新莊城。奉以爲主。元春弟隆景。亦出爲小早川氏後。

小早川氏之先。出於伊豆人土肥實平。實平仕源氏。食安藝豐田。後十六世。曰正平。正平子繁平。幼失明。其族黨議。請養隆景。妻以正平女。居沼田城。於是。吉川・小早川並爲毛利氏羽翼。人呼曰兩川。元春稱治部少輔。豪爽善用兵。隆景稱左衞門佐。美姿儀。沈斷有謀慮。皆類元就。元就以元春未有伉儷。使兒玉就忠密問其意所嚮。元春曰。吾欲得熊谷信直女。就忠曰。郎君得無謬聞其美乎。

天文十七年

詠。正本作咏。

青景。拙修本作音景。

天文二十年

彼女醜惡無匹。君必悔之。元春哂曰。然。吾素知其醜也。抑古名將多以女色失其勇。所以人不取而吾取之。人不取而吾取之。信直必感喜。爲吾出死力。此問將卒。孰出信直右者。吾與之聯鋒。以爲家君之先。所向無不摧破耳。就忠慚服。告元就娶之。信直果大喜。毛利氏兵鋒益鋭。十七年。元就携隆元・元春・隆景。赴山口。義隆養內藤興盛女。妻於隆元。使陶隆房與元春約爲兄弟。義隆性文弱。山口多廷臣避亂者。而明人常互市焉。義隆耽詠歌。學梵譯。不復問武事。陶持長嘗憂之。持長子義淸。幼聰敏。常誹義隆曰。是墮落沙門。流竄公卿耳。持長視其有不臣之志。藥殺之。更養妹壻問田某子。是爲隆房。隆房悍厲。頗得士心。持長已死。隆房與義隆嬖臣相良武任有郤。結杉重政・青景隆時・內藤興盛。謀殺武任。武任怖而遁逃。冷泉隆豐勸義隆速誅隆房。不聽。隆房佯乞骸骨。歸其邑若山。日謀反逆。家臣深野康澄・宮川房勝。引持長遺囑大諫。弗聽。二臣交刺死。二十年。八月。隆房遂反。攻山口。義隆走法泉寺。其兵皆潰。前關白藤原尹房爲講和。隆房不肯。義隆航赴筑紫。阻風。還入大寧寺。賊兵來圍。九月。義隆自殺。隆

全薑。正本・拙修本竝作全美。

天文二十一年　内。拙修本作乃。

天文二十二年

豐等死之。義隆子義尊。及尹房以下公卿十餘人。皆爲所殺。隆房更名晴賢。削髮號全薑。迎豐後國主大友義鎭弟義長爲主。曰重政・隆時妬武任。勸吾行大事。乃發兵誅二人。初晴賢之圖難。使人來說元就黨己。啗以佐東郡。元就卻之。義隆臨終遺書。囑元就曰。吾不幸爲賊臣所弑。呑恨入地。非卿誰能復我仇。元就覽書。流涕曰。吾受大貳恩眷。雖無所囑。猶欲爲復仇。況有是乎。諸將曰。彼凶焰方熾。未可與爭衡。宜內養威力。外示柔弱。觀釁而動。元就從之。二十一年。秋。元就攻拔槌山・志和諸城。是歲。備後江田隆貫叛。歸尼子氏。元就攻之。至泉橋。尼子國久將數萬騎來救隆貫。元春以部兵二千。擊走之。會霖雨川漲。國久・隆貫退入山內。元就亦歸。備中人三村家親來屬。二十二年。以家親爲鄕導。攻穗田爲資。降之。初我將井上元兼。以豪宗不奉法令。竊言曰。主公欲誅陶氏。陶氏嘗救我。恩可背乎。元就以計族誅之。於是會諸族屬。議討晴賢之計。隆景進曰。宜請之天子。仗大義討之。則人心所嚮。無不克矣。元就曰。善。乃上書曰。太宰大貳義隆。承父祖遺業。存心於王室。而爲賊臣晴賢者所弑。臣元就奮微力。圖討

天文二十三年

伐。未得成其功。伏冀得討晴賢一行詔。糾合徒屬。以靖西陲。初朝廷聞晴賢作難。命將軍・管領西伐。莫敢奉詔。及元就書至。卽制可之。元就得詔感喜。移書遠近。津和城主吉見正賴。世與陶氏讐。首應之。晴賢怒。攻津和。元就遣兵援之。二十三年五月。元就與諸子。將兵西出。取銀山・草津・櫻尾諸城。遇陶氏兵于折敷畑。擊破之。陶氏骨鯁將有江良與房。守琥珀城。元就縱反間。言與房送款。晴賢族誅與房。遂檄周防・長門・豐前・筑後・石見。發兵東下。元就聞之。與諸子密謀曰。彼兵不下三萬。必首攻櫻尾・草津。我悉衆援之。不過五千人。勢力懸絕。與戰平地。不可克也。爲今計者。宜城嚴島。誘而殲之。

弘治元年

弘治元年。五月。城于島之有浦。諸宿將皆諫其不可。元就弗聽。諸將皆相言曰。此公常不拒諫。今何乃爾。六月。城成。命己斐・新里二氏。以兵數百守之。使草津・櫻尾・仁保諸城互爲策應。旣而聲言。吾悔不聽老將言。嚴島地形。難守難援。卽爲敵有。諸城從陷。吾計莫失於此。九月。晴賢留其子長房于若山。而自統騎卒二萬・戰艦千餘艘。至岩國。議戰所嚮。大和興武曰。先拔櫻尾。則諸城不攻而陷。弘中隆包曰。請分兵。一攻櫻尾。一

塔岡。川越本・拙修本並作塔岡。下同。

于。正本作之。

備其援路。彼不敢出。出則與之相持。而遣輕兵擣吉田。彼進退失據。不血刃而可取。晴賢曰。吾欲先取嚴島。城脆將孱。而不便於援。聞元就甚悔之。吾取以爲根據。分兵攻諸城。是萬全策也。隆包曰。彼眞悔之。必不宣言。宣言者。得非以餌我乎。晴賢猶豫未決。故櫻尾城主降在賊軍中。與己妻・新里相識。元就令二人貽書。指陳順逆。綦晴賢罪惡。極其醜詆。晴賢覽之大怒。元就又令桂元澄詐送款。約俟元就渡海赴援。翻城爲內應。晴賢乃決意攻嚴島。十月。建牙塔岡。燒民舍布陣。舟艦櫛比。喊聲震海。城兵嬰壁堅守。賊有鳥銃七口。櫓楯不支。積土豚扞之。晴賢遺書元就曰。公爲先大貳欲見加誅。不敢逃避。聊以水陸軍三萬。陣于嚴島。公能來乎。元就聚將士示之。將士皆有懼色。元就笑曰。使賊所言信。則吾大克矣。衆問故。曰。其地迫狹。彼側肩蹹足。不便進退。兵愈衆而鋒愈鈍。我以死士數千衝之。克可必也。乃使宍戶隆家留守吉田。而自率精兵三千餘人。南行至草津。與晴賢隔河而陣。國內諸豪意其必敗。多稱病不從。初伊豫有能島・來島二族。閑水戰。晴賢・元就並招之。二族以三百艘來屬元就。元就勞之。往問

火立山。正本作大立山。
灯。川越本・拙修本竝作烽。
舟。川越本・拙修本竝作船。

城中消息。賊四鑿地道。樓櫓殆覆。以大索維持之。元就移陣火立山。晦日、盡返老弱輜重于草津。累累不絕。賊望見以爲我收兵也。於是。元就令諸將士。人以二條布約袖、佩一日糧。約暗號。比暮上船。會、大風雨。士卒震怖。請俟風定。元就曰。天助我也。令皆滅篝火。揭一灯于牙船。諸軍認之。破浪而渡。既濟。返舟北岸。以示必死。遂上博尾崎。直出塔岡背。隆景別率伊豫船兵。出其面。賊恃風雨。無警邏者。穿賊艦而入。賊或誰何。浦宗勝大聲答曰。筑前兵應徵來矣。辟船而達。稍稍上岸。兩隊皆陣。天將明矣。元就令吹螺鼓譟。乘高下擊。賊諸軍大驚。爭萃其牙營。營塡咽。自相擊刺。元就大呼曰。進。諸將士破柵而入。賊兵終大潰。晴賢咄嗟過走者。不能過也。賊爭舟而遁。溺死數千人。晴賢肥大不便行步。從者扶掖至海岸。求舟。不復覩一隻。遂自殺。隆包以殘兵百餘棲嵓洞中。元就惜其才。使人說降之。不肯而死。已而獲晴賢首。元就嚴建旗鼓。奮鞭指其首曰。弑逆之報。乃嬰天誅。今何如也。諸軍揚凱。元就留嚴島十一日。引兵返小瀉。葬晴賢首于洞雲寺。元就既誅晴賢。威震關西。周防人相驚曰。毛利軍至矣。陶長房敎義

岩國。正本作嵒國。下同。玖珂。川越本・掴修本竝作玖河。

弘治三年　三年。掴修本作二年。二月。正本作三月。川越本標註云。按。皆非。

右田。掴修本作石田。

逆。川越本・掴修本竝作迎。

長乞援於大友氏。大友氏弗敢應。十二月。元就進陣岩國。遣隆景徇玖珂郡。至上關。杉重輔爲内應。攻殺長房。將士相疑。皆送款元就。元就聞尼子晴久窺備後・石見。未肯深入也。乃招降備後豪族山内隆通。又命元春守石見。而自引軍向山口。陶氏故黨以萬人拒煤間城。隆元攻之。城帶泥淖。我兵不利。三年。二月。元就將萬騎發岩國。令士卒人持簀與席。以傳城下。投簀於淖。布席其上。踐以登城。鏖殺其兵。山口騷擾。悉甲拒右田岳。元就與隆元。合兵二萬。攻降之。使一將守之而進。吉見正頼來會焉。義長怖走勝山。於是元就整諸軍入山口。内藤隆春等迎降。元就遣六千騎。扼長府・下關。以絕大友氏援路。而令福原貞俊攻勝山。殺義長及晴賢季子鶴壽。周防・長門士民。雲集山口。豐前・筑後諸城。又多逆降者。元就盡除弊政。免租賦。分邑賞諸將。置戍于下關・門司・三尾・鶴峯四處。四月。凱旋安藝。是時。晴久入備後。數攻隆通。不能下。轉向石見。不敢入而去。十一月。陶氏餘黨起。攻鶴峯。元就將萬人往平之。轉攻周防故將益田藤包于三角城。元春・隆景説曰。藤包勇智不下正頼。而與之有郤。宜兩存之。使相鈐制。乃

蘖。正本作孽。

永祿元年

永祿三年

拙修本金下有物字。

永祿五年

招降藤包。元就於是盡取大內氏地。遂圖尼子氏。而患尼子國久強悍。謀除之。尼子經久娶吉川經基女。而元就亦爲其孫女壻。是以託姻戚。數通使幣於國久。晴久頗疑之。義勝之死。其子經貞猶幼。國久攝其邑。及長不返與。經貞啣之。於是。元就令死囚懷書入出雲。殺之道上。行人聚觀。取其書。乃元就與國久約內應者也。晴久獲書大驚。召經貞。問曰。聞新宮黨陰通安藝。汝豈知之乎。經貞媒蘖之曰。臣數見其密使往來。晴久乃伏甲。要殺國久父子。殲其黨。北兵自是弱矣。永祿元年。二月。元就使元春陣出羽。與尼子氏將小笠原長雄・本莊常光戰。未決。神邊城主杉原盛重來援破之。五月。元就攻降長雄。晴久來救。不及。三年。二月。攻取松山。八月。誘降常光。定石見。是歲。正月。天子行卽位禮。元就獻金助資焉。詔。以元就敍從四位下。任大膳大夫。賜菊桐章。尋遷陸奧守。而隆元代之。十月。入出雲。軍于赤穴。迎降者十餘族。常光爲先鋒。縱火岩坂。常光負功汰虐。元就與元春・隆景謀曰。彼服可用。而叛不可制。已叛於尼子。何有於我。不若速除。十一月。襲殺之。降將因是多叛。五年。十月。元就由白潟入城于洗合山。去

持。正本・拙修本竝作據。

永祿六年

撤。川越本・拙修本竝作徹。川越本標註云。隆實或作元實。

軍。拙修本作單。誤。

富田七里。建爲本營。築連珠砦。以漸逼富田。迎京師公卿・文儒。講書於軍中。以示持久之意。因幡山名氏。伯耆南條氏。嘗爲尼子氏所逐。元就復之。使收其義故。以助攻尼子氏。山名祐豐亦以伯耆來屬。十二月。晴久病卒。其子義久嗣。大友義鎭與義久通好。數攻門司。乃遣隆元・隆景。以萬餘人赴援。取神田城。留天野隆重守之。隆元留屯岩國。六年。二月。義鎭以二萬人攻神田。不能下。會、天使二人至自京師。令我與義鎭和弭兵。隆元乃爲其子輝元。約娶義鎭女。又令與義久和。元就疏不可和者十條。辭之。七月。隆元撤守歸覲。過吉田。將士勸入城休息。隆元曰。家君衰老。櫛風沐雨。吾何忍休乎。八月。至舟木。和智隆實要而饗之。疾作。卒。年四十一。隆元性仁孝。元就嘗罹疾。祈以身代之。其在岩國。大友氏陰招周防・長門將士。將士皆不忍叛焉。元就得訃。慮軍氣沮。出令曰。欲弔亡兒者力戰。自將攻白鹿城。城將松田兵部能拒。乃使銀山礦卒鑿地道。城兵亦鑿而迎之。鬬于穴中。城兵遂塞穴而卻。乃截其汲路。松田盛米于斗。灌注馬足。我軍士視之。以爲水不乏也。九月。義久聞白鹿急。遣弟倫久。將萬騎援之。欲動我

永祿七年

永祿八年

十二。拙修本作三十。

永祿九年

兵決戰。平旦來挑戰。元就不應。日晡。倫久將去。元就乃鼓而進。敵敗走。先是。元就遣香川光景。助三村家親。略備中。滅吉田氏。七年。三月。入伯耆。幷南條行松氏兵。絕富田糧道。會、行松死。杉原盛重受命。攝其家事。初盛重爲杉原忠興家臣。忠興據神邊。拒我兵。終降。及其死。元就命盛重爲之嗣。盛重嘗製陣法。以弓翼槍。與富田兵戰湖上。再克之。又收盜賊爲兵。有佐田某焉。妙於間諜。故盛重善知敵情。數有功。後徙八橋城。八年。二月。隆元子輝元。與元春子元長共來洗合。四月。熊谷信直擁元長。進擊走龜井安綱。八月。盛重拔江美。九月。家親拔大江。元就乃起石原・龍山等十二寨。以環富田。謀竭其糧也。置關四外。榜曰。必殲之。毋使一人遁。已而度糧盡。則撤關更榜曰。降者釋之。城兵逃降相踵。當是時。義久寵臣大塚某。與義久嬖姬相結。以讒諸將通款於我。九年。正月。卯山久信被誅。諸將皆懼出降。獨河副・森脇等三百人不降。元就有疾。招降義久。七月。義久遂致城降。寘之安藝長田。元就圍富田。前後七年而降之。擇其守將。衆推天野隆重。乃命隆重守焉。振旅而還。元就既幷大內・尼子二氏地。定山陰・山陽十

永祿十一年

永祿十二年

拙修本無二十二年三字。川越本標註云。四月上十二年三字。舊誤在下文六月入出雲上。今據陰德太平記等書。移置此。

盛。拙修本作盗。誤。

三州。命元春掌山陰。隆景掌山陽。遂令二將略地於南海・西海。當是時。南海有長曾我部・宇都宮・河野氏。西海有大友・島津・龍造寺氏。十一年。宇都宮豐綱攻河野通直。通直來乞援。二月。元春・隆景將兵數萬。入伊豫。拔二城。圍豐綱于大津。長曾我部元親將萬人。來援豐綱。軍于柳原。乃令宍戸隆家當之。而諸軍攻降豐綱。元親引去。元春・隆景以六旬定伊豫。還。誅和智隆實于嚴島。以隆元之死有蹤跡也。當是時。筑紫豪傑高橋・宗像・秋月諸族。皆屬元就。大友義鎮數攻之。十一月。元春・隆景與元長。將五萬人赴援。拔三岳。十二年。四月。遂圍立華城。義鎮方攻龍造寺隆信于佐賀。聞之。與隆信和。五月。使其二將將兵七萬援立華。我軍作塹壘。再戰破之。元就擕輝元往長門。遂爲聲援。尼子氏遺臣山中幸盛・立原之綱等。在京師聞之。索故尼子誠久子爲僧者。爲主。更名勝久。糾但馬海賊。入隱岐。六月。入出雲。取新山・末次。攻富田。天野隆重有兵三百。佯降。誘其兵二千于城下。擊破之。七月。敵設伏而誘隆重。隆重諜知。雨射伏中。又破之。元就聞浮田氏應勝久。遣香川光景定美作。命元春・隆景疾攻下立華。送致城兵

之綱。川越本標註云。或作久綱。拙修本・寫本竝六月上有十二年三字。川越本標註云。按陰德太平記等書。輝弘政弘子。於義興爲義弟。逸史作義隆季父。爲是。西國太平記作義興孫。蓋誤。

元龜元年

元龜二年 寫本無二年二字。

戒。川越本・拙修本竝作誡。

于西軍。西軍猶與我相持。九月。故大內義興庶兄輝弘。寓大友氏。借兵五千。海路入周防。攻鵜峯。元就命班外師。十月。置戍班師。以吉見正賴爲殿而退。至若松渡。取士人質。使具船以濟。乃令戍兵致城而還。遣兵援鵜峯。遂輝弘殺之。元龜元年。正月。元春・隆景將兵一萬五千。輔輝元攻勝久。恐其城守也。宣言兵寡。將・納糧富田而還。山中幸盛聞之。悉甲五千。出于布辨山。我兵擊大破之。元春攻末次。夜列炬其面。而自背襲之。勝久・幸盛走新山。諸城連陷。八月。元就患病。輝元・隆景歸省之。二年。六月。疾篤。輝元請遺言。元就曰。汝視二叔猶我。勿違其言。則可以守我業矣。吾復何言。遂卒。元就善歌詠。有遺集若干卷。嘗酒酣。慨然言曰。凡英雄以身繫天下治亂者。求友於千載之上。卽同世而生。志合則天下治。志不合則天下亂。嘗問左右曰。吾於前世人主。可比於誰。有一儒士。對曰。可比周文武。元就笑曰。吾乃今知不若文武也。文武之臣。豈有面諛如汝者哉。元就得一州則擇守將。輒戒之曰。吾聞。侮其人者。不有其士。汝服膺此言。故新附士民少倍畔者。元春得訃哭泣。謂將士曰。葬奠之任。隆景在焉。吾當勦敵以慰

元龜三年

天正元年

天正二年

奔。正本・拙修本竝作走。

天正三年

靈魂。是時。幸盛在末石。元春乃稱攻大山僧徒。而急還攻末石。幸盛出降。僞疾。自廁中逃。八月。元春攻新山。走勝久。勝久匿京師。幸盛爲盜但馬・因幡間。遂與勝久偕歸於織田信長。初信長起尾張。略取近畿。武田信玄・上杉謙信。割據其東。皆通使於元就。欲夾攻信長。謙信特勸將軍義輝。召致元就。元就罹疾不答。三年。二月。元春・隆景遣使答之。天正元年。信長攻將軍義昭。輝元與二叔議。遣安國寺僧惠瓊。爲和解之。義昭免。走紀伊。二年。正月。尼子勝久借織田氏兵。入因幡。陷鳥取城。城本屬山名豐國。爲武田氏所奪。豐國欲復之。因黨勝久。其部將大坪一之諫之。不聽。一之乃來奔。八月。元春・隆景大擧入伯耆。降豐國。逐勝久。義昭之奔紀伊。遂西依浮田直家。直家弗禮。乃來備後。自託於輝元。輝元謀於二叔。遂與織田氏絕。計納義昭於京師。先是。三村家親爲盜所殺。蓋直家所使也。直家爲浦上氏將。終簒其備前・美作。浦上宗景。與家親子元親。皆請我兵討直家。直家懼。亦因僧惠瓊。請滅二氏。約以備中賂我。元親族親成告元親通織田氏。宍戶隆家勸隆景討之。三年。夏。圍元親于松山。滅之。元親宗家穗田氏。

天正五年

前爲直家所滅。於是。使元就第五子元淸爲穗田氏後。居中山城。以鎭備中。信長方攻一向僧徒于大坂。大坂來乞援。元春・隆景遣兵援之。又餽糧船六百。以兵艦三百護送之。七月。至木津川。能島・來島氏。與織田氏水軍戰。破之。奪其二大艦。納糧而還。先是。讃岐香川氏。淡路菅氏。皆來屬我。五年。香川氏與國人戰。來乞援。七月。遣穗田元淸・浦宗勝赴之。破土佐援師。宗勝還。掠播磨海濱。與國人黑田孝高戰而還。孝高導織田氏將羽柴秀吉。攻別所氏于三木。尼子勝久爲先鋒。出山陽道。取上月城。城屬浮田直家。直家乞援於隆景。欲復之。當是時。丹波・但馬豪傑使使請元春來襲京師。元春遣兒玉春種。先往諭之。會隆景書至。欲與俱赴上月。元春答曰。卿合直家兵。可得四萬。不必須我。我收管內。亦可得三萬。留其五千備大友氏。以其餘援丹波・但馬兵。上愛宕山。以瞰京師。信長與吾相持。不能援上月。上月陷。則荒木村重・別所長治必助我以逐秀吉。於是。卿輔輝元。直入大坂。與我夾攻京師。以納將軍。隆景曰。是危道也。村重意未可必。而兄弟相離。夾之而東。恐變起其間。先戮力陷上月。然後分道東上。爲未晚

川越本・拙修本竝無入字。謀之。川越本・拙修本竝作之謀。二三萬。拙修本作十三萬。川越本標註云。二三萬。舊誤作十三萬。今據他書訂之。

也。因教輝元召元春。元春從之。六年二月。元春・隆景合兵。圍上月。直家稱疾。出其兵一萬五千會師。四月。秀吉與村重合兵四萬來援。陣高倉山。我軍作塹柵自守。杉原氏間夜入秀吉陣。獲首級者數。東軍懼。五月。信長欲自來援。先遣長子信忠及諸將援秀吉。兵凡十萬人。元長請元春曰。信長自來。則兵衆合一。不可敵。今秀吉・村重等爭功不和。天雨月黑。宜夜襲之也。元春使謀之隆景。隆景曰。舉信長全兵。不過二十萬。東備武田・上杉。西備大坂・雜賀。減六七萬焉。而見在此者十萬。即自來二三萬而已。我以七萬當之。何必恐也。且我自北路襲。地形不便。自南路襲。浮田氏心難測。皆非萬全之策。不若固壁毋戰。彼兵衆而糧不繼。將自去矣。乃止。六年。美作・出雲兵。與東兵鬬于熊川。秀吉自中軍遣二萬騎出援。元長與弟元氏・廣家。以萬人亂流逆戰。東軍皆騎兵。馳突而來。元長令士卒曰。跪。東兵不能入。逡巡而退。元長令曰。起。如此者再三。追北二十餘町。荒木氏不敢援東兵。浮田氏不敢援西兵。西兵深入。難於退。天野隆重引手兵。上高岡而陣。西兵乃引還。秀吉知我不可力爭。請信長棄城而去。城陷。勝久自殺。

川越本標註云。白上一有因字。

天正七年

山中幸盛復降。殺之甲部川上。直家已潛通信長。於是。稱疾愈來見元長白元春曰。直家有異圖。兒請卽席誅之。杉原盛重又請之。隆景曰。彼無證。而我啓釁。縱得誅之。其國人皆立嗣以抗我。無爲也。乃止。已而直家因惠瓊請二帥乘勢徇播磨。將軍義昭亦促之。元春・隆景乃進。陣黑澤山。直家享二帥于八幡山。欲伏甲擒之。直家弟忠家潛來告之。元春・隆景乃使人言直家曰。聞公欲以我兄弟首獻織田氏。我兄弟竝輔少主。未能順尊意。必欲獲之。請以旗鼓。所不敢辭也。旦日。分路西歸。直家不敢追。十月。荒木村重叛信長。據兵庫・華隈諸城。與別所長治。皆乞援於我。我方患浮田氏。又聞南條元續通東軍。未暇赴援。獨餽糧助之。築丹生・淡河二城。西達三木。東達華隈。七年。二月。秀吉遣弟秀長。夜襲取丹生。淡河定範穿塹。布渠荅以待。秀長至。梗不得進。定範募得牝馬數十匹。驅入敵軍。軍馬爭牝相踶。什伍大亂。定範縱兵乘之。擊走秀長。其從子說曰。秀吉必忿而來。窮而走。不若勝而退。乃收入三木。秀吉來。不見敵而去。是歲。二帥輔輝元東伐。取美作五城。直家不敢出。四月。南條元續叛。通東軍。其族山田直重

爲レ三。川越本標註云。三一作レ二。

天正八年

圍。拙修本作レ取。

天正九年

諫レ之。元續弗レ聽。欲レ殺レ之。直重來奔。八月。直家攻二升形・祝山（ハフリヤマ）二城一。不レ能レ下。元春將レ兵赴援。聞二其去一。轉攻二元續種石城一。杉原盛重爲二先鋒一。與二敵將南條信正一夾二長瀨川一陣。分レ兵爲レ三。渡レ川大戰。斬二信正一。元春乃環二種石一砦レ之。元續出戰。輒敗。十一月。元春・隆景復輔二輝元一東伐。拔二備中忍山一。十二月。我餽二饟三木一者。襲殺二敵壘將谷衞好一。長治出レ兵應レ之。大敗。淡河定範死レ之。八年。春。三木陷。長治自殺。直家以二秀吉命一。城二于八濱一。以二二弟忠家・恭家一守焉。二月。隆景遣二元清一攻レ之。殺二恭家一。四月。秀吉侵二但馬・因幡一。陷二鹿野城一。取二山名氏質一。元春赴援。不レ及。七月。荒木村重來奔。是月。秀吉圍二山名豐國鳥取城一。縛二質城外一。以レ槍擬レ之。以誘二降之一。城兵曰。我數叛二毛利氏一。而不レ被レ誅。今可二復叛一乎。秀吉怒。殺レ質。次至二豐國女一。豐國遂降。秀吉削二其邑一而去。城兵皆叛二豐國一。豐國奔二播磨一。城兵請二我一將一。遣二吉川經家一守レ之。又城二于丸山一。九年。七月。秀吉以二數萬騎一。圍二鳥取・丸山一。絕二其糧道一。吉岡質休在二吉岡城一。夜襲二敵營一。又迎二擊敵兵一。走レ之。奪二秀吉馬標一。獻二之輝元一。秀吉遣レ使。招二降丸山城一。城將斬二其使者一。投二尸城外一。秀吉大怒。攻レ之益急。輝元欲レ援レ之。而國兵四二戍疆上一。在者甚

天正十年

板。正本作版。

寡。隆景至富田。召募數日、未進。元春曰、鳥取吾管內也。吾不可以待。九月、以六千人馳至伯耆。則城已陷矣。秀吉欲誅國人免經家。經家弗聽。與丸山・鳥取將領皆自殺。以免其兵。元春得報。切齒曰、吾猶往為經家一戰。將發。又有報曰、秀吉入伯耆矣。乃留陣于馬山。十月。秀吉至。稱八萬騎。陣種石城後。下視馬山。馬山左右湖山。後迫大川。纔通一橋。人人無不震怖。元春命絕橋。毀舟楫。自絕走路。三澤為虎・益田藤包私議曰、敵衆新勝。不若避其銳而再舉。請入說之。乃與偕謁元春。元春方釋甲而坐曰、天大雪。諸君且留飲。因圍爐命酒。醉而鼾睡。二人不敢說。元長・廣家以父命巡視諸陣。穿塹植柵曰、敵明日必來。比曉、敵數千騎。納糧於種石。元春遣銃手。斃其一將。敵繼出者萬餘。元長・廣家以二千人馳之。秀吉急收其兵。南條元續請曰、盍一戰擒之。秀吉哂弗答。明日。引兵而去。元長請尾擊之。元春弗許。」十年。正月。元春欲復因幡。二月。將兵攻大崎。時杉原盛重既死。其子元盛先登。元春遂復二城。攻鳥取。四月。秀吉將兵八萬。入備中。攻高松城。引甲部川灌之。守將清水高治募城內染戶。收板數百枚。造舟出戰。隆

率。川越本・拙修本並作卒。
當。拙修本作留。
日幡。拙修本作白幡。
再。拙修本作其。

景聞急。乞援於元春。元春即欲發。山陰將士皆曰。上月之役。佐公率我師自援。馬山之役。留富田不來。今鳥取幾復。何棄此赴彼爲。元春曰。隆景不來馬山。必有以也。吾坐視其危。獨如宗家何。諸君不欲往。吾寧獨身赴之。與隆景共死。將士皆謝。願從。乃留杉原元盛當鳥取城。而南會隆景。合兵四萬。軍于廟山。輝元陣其西三里。相持未戰。五月。日幡城叛。隆景遣兵攻之。走東將木村隼人。秀吉不敢出援。加茂城亦叛。納東兵。元長・廣家以萬人赴之。秀吉復收兵。我兵數獲利。而高松旦夕將沒。元春聞信長將自來也。欲一戰。隆景曰。阿兄何自輕。乃傚一隊將之爲乎。元春曰。家君以一夜克陶氏。以七年滅尼子氏。蓋小敵宜緩困之。而大敵宜急挫之也。我以北兵。夜襲其北。而卿應其南。必克之。浮田氏觀望。不戰走耳。隆景曰。然。會、軍中流言三澤爲虎通款秀吉。六月。三日。二帥與元長。密會廟山絕頂。議曰。諸將意皆不可測。爲今之計。宜柵于牙營。迎敵決戰。既罷。元長徑詣爲虎。迫其膝坐。曰。聞卿與秀吉通款。信乎。信則斫吾頭以送秀吉。爲虎惶駭曰。是出讒口耳。乃獻誓書。衆情稍定。終期再明襲秀吉。僧惠瓊素歸心

於秀吉。爲講和議。秀吉曰。苟使高治自殺。則我可以藉手而去。惠瓊以告二帥。二帥弗背。明日。惠瓊自入城諭高治。高治曰。我一死可以和兩國。何敢不死。乃與兄月清・軍監末近。乘舟出城。自裁舟中。以出城兵。惠瓊還報。二帥爲之發哀。遂爲盟約。割地講和。南界甲部河。北界馬山。送輝元季父元綱爲質。秀吉送森高政答之。即日。東軍解去。元長在山頂視之曰。彼無故講和。必有內變。既而有告曰。信長爲明智光秀所弑。元長曰。果然。吾不與盟。請追擊之。秀吉可生擒也。浮田直家亦請爲援。二帥曰。乘喪背盟。不義莫大焉。終弗許。後秀吉遺我將士款書數通。有三澤氏臣雲波書。爲虎乃誅之。輝元既與秀吉和。猶領八州。歲入百二十萬石。七月。隱岐經清弑其叔父清家。初清家代兄領隱岐。養兄子經清。出己子甚五。質于吉田。經清欲通款信長。清家弗聽。及信長死。經清誘殺之以滅口。因啓。清家通敵。臣誅之。元春不信。甚五訴冤。請自復仇。許之。隱岐士民爲內應。終誅殺經清。八月。山田重直誘殺南條氏精兵數百。九月。伯耆人相驚曰。秀吉戰死上國。重直且來襲矣。元續怖。走入京師。其子小鴨元清亦走。秀吉笑

快快。正本作鞅鞅。

天正十一年

天正十三年

曰。元春設蜚語。不戰而走之耳。元春之智、元續之怯、皆無雙者也。因請元春復之。秀吉誅明智光秀。遂代織田氏。居大坂。元春羞屈下之也、居常快快不樂。讓家元長而老。十一年。九月。隆景遣弟秀包。及廣家赴大坂。尋去歲之盟、秀吉悅秀包有姿容。留之。先是。杉原景盛殺兄元盛。誣以叛。事覺、七月、隆景遣三弟元秋・元政・元康。攻殺景盛。以其弟次郎承杉原氏後。十三年。四月、秀吉伐南海。令隆景・元長入伊豫。元長稱疾歸、廣家代之。七月。定伊豫。秀吉徙河野通信于三原。令隆景代領其國。賜僧惠瓊。來島某各萬石。十月。隆景・元長如大坂。秀吉令諸將郊迎曰。向使兩川變約。則吾豈得至此。因饗之。時秀吉將伐島津氏。囑元長。請元春爲先鋒。約封之筑前。元春羞爲秀吉所驅使。弗背、是歲。秀吉奏請。以輝元敍從四位下。任侍從。遣黑田孝高促元春。元春不起。輝元曰、公爲我一出。元春不得已。乃與隆景俱發。攻拔小倉城。將移陣松山。疽發背不得行。隆景與孝高攻拔閨津。下障子岳。進攻賀春岳。元春瘥。將發。黑田氏饗之、供鮭。瘡復劇。乃遺囑二子以後事。言不及私。終卒。年五十七。元長使廣家奉喪歸安藝。而自

天正十五年

居。川越本作去。

經信。川越本・拙修本並作繼信。

天正十六年

從隆景。降賀春守將高橋種元。十五年。三月。豐臣秀長至。合我兵入日向。抵耳川。進圍高城。島津家久夜襲其營。秀長畏其兵慓悍。不敢出。元長欲逆戰。弗許。秀吉至。龍造寺氏以下皆降。五月。島津氏請和。秀吉徙隆景于筑前。治名島。賜秀包筑後三郡。治來目。元長道病。六月。遂卒。元長倔强類父。爲秀吉所畏惡。常有退居之志。見於歌詠。遺命立廣家。黑田孝高素悅廣家色美。與之親善。爲言秀吉立之。襲食隱岐。廣家初名經信。於是。改今名。是歲冬。肥後・豐前盜起。隆景・廣家受命。討而平之。筑前士民。稔聞隆景賢聲。人人相慶。隆景務潤其禁網。漸修治敎。倣下野足利學校。建黌舍。釋奠先聖。時亂離日久。人始聞絃誦之聲。十六年。輝元任參議。隆景・廣家・秀包皆爲四位侍從。九月。秀吉養浮田秀家女。妻廣家。初廣家父兄皆死於西海之役。秀吉曰。吾許之以筑前。會其死。不果。當以西海一州。恤其孤。石田三成・大谷吉隆。說秀吉曰。輝元所領已跨中國。而隆景・秀包各領一國。備前浮田氏素與之惡。以爲可使相禁也。而亦婚於吉川。吉川今又受封矣。天下無事則已。苟有事。則關以西皆歸毛利氏。爲今之計。莫若就

天正十八年

天正十九年
文祿元年

是。川越本作此。

文祿二年

輝元封內割予一二州。是名賜封。而實分其勢也。秀吉然之。乃令輝元以出雲・伯耆數郡加賜廣家。治富田。十八年。秀吉東伐北條氏。使輝元守京師。隆景守淸洲。廣家守岡崎。北條氏不降。召隆景謀之。對曰。先人圍富田。休攻戰。示持久。多縱反間。使其君臣相疑。索其妻孥而招降之。秀吉曰。吾師之也。遂以其計平北條氏。先是。輝元患吉田隘狹。城于己斐。十九年。成。徙焉。更名廣島。文祿元年。秀吉發兵伐朝鮮。毛利・吉川・小早川氏爲後隊。諸將在朝鮮。連署稟事。隆景花押點畫甚繁。福島正則傍觀。謂之曰。押字宜疏。不宜密。不然。則臨死作遺狀。不能速成也。隆景笑曰。大丈夫當橫尸原野。何以遺狀爲。正則有愧色。當是時。浮田秀家・石田三成等諸將。在國都。小西行長爲先鋒。進據平壤。平壤以南至國都。城砦相屬。二年。正月。明將李如松率大兵來援朝鮮。陷平壤。行長敗走。大友義統亦棄城走。秀包與黑田長政。將兵迎行長。殿而退。如松乘勝南下。秀家等令諸城砦皆解。還萃於國都。隆景守開城。獨不肯還。曰。諸君皆去。吾當獨留。吾受命外征。固不期生。吾老矣。願與明人一戰。使明人知日本有小早川隆景者

候。正本作侯。誤。

也。卽敗死。喪一老翁。何損於國哉。秀家等促之再三。隆景不得已而還。與秀包・元康。及立花宗茂三將。合兵二萬。未至國都三十里而陣。數日。候騎報曰。如松兵既至碧蹄驛。蓋十餘萬騎矣。隆景曰。足以試我武矣。乃分兵爲六隊。迎戰。前軍二隊不利卻。隆景揮槍大呼而進。士卒皆奮。莫不一當百。三將自左右夾擊之。明軍遂大敗。如松墮馬。隆景將井上某鏦之。不中。與其將李有聲鬭而斬之。如松僅以身免。逐北至臨津。斬首萬餘級。而我兵死者僅百餘人。如松入開城。視其所失亡。痛哭徹曉。遂退軍三次。明軍大阻。明之乞和於我。本於此戰也。四月。和成。國都諸將欲撤還。恐虜兵追躡。群議不決。隆景倚柱而睡。石田三成喚起問計。隆景曰。縱火焚城。更殿而退。何虞之有。從之。全軍而還。六月。輝元義子秀元濟海。與諸將俱攻晉州。拔之。秀元。元淸子也。其幼。元春・隆景目之。相語曰。何酷肖先君也。時秀吉欲以其外甥秀秋爲毛利氏後。或以告隆景。隆景素知秀吉畏忌己。且不屑受其封。欲返致之。及聞是言。竊度曰。不可使他人汨我宗家。且秀秋妄庸人。養之。是養禍也。吾寧任其弊。已而秀吉從容問之曰。參議齡

強而無嗣。何如。隆景卒對曰。既養穗田氏子矣。秀吉憮然曰。吾未之知也。隆景使人馳告輝元。使立秀元。遂請秀秋爲己子。秀吉喜許之。乃讓與之筑前。而自老于三原。秀吉始伐韓之年。自肥前航歸大坂。過大浦。舟人謀逆。故觸舟于礁。殆溺。秀元以走舸救之。秀吉梟舟人。挈秀元入京師。奏爲四位侍從。報其德也。遂有外征之命。年甫十五。

慶長二年

慶長二年。輝元。隆景竝爲從三位中納言。與秀家皆修淀河隄。秀元襲輝元官爵。爲秀吉女壻。是年。復伐朝鮮。以秀秋・秀元統諸將。六月。隆景病卒。年六十二。隆景爲秀吉所重。參其大計。而持己愼密。讒間不入。秀吉嘗欲徙封毛利氏于九州。隆景辭曰。八州已多。況增一乎。恐不能勝也。且先人所百戰而取。不忍棄之。秀吉乃止。及退老。以諷吟自適。以至於沒。十二月。明兵圍我將加藤清正于蔚山。

慶長三年

注。川越本・拙修本竝作往。

三年。正月。秀秋・秀元赴援。廣家謂其騎曰。明兵衆而不整。汝注視其後軍。今將走也。既而果走。廣家以千餘騎先追之。明騎將吳惟忠・茅國器返戰。廣家縱橫奮擊。二將皆奔逃。清正望見之曰。彼以蒲穗爲背幟者誰。左右對曰。吉川也。清正曰。勇哉。恨其幟之不較著也。當贈吾號。乃手

幟。拙修本作旗。

慶長五年

正本侯上無諸字。

取其背幟馬藺贈之。廣家驍名益著。秀吉欲大賞之。僧惠瓊素惡於吉川氏。乃與石田三成俱廢沮其議。八月。秀吉薨。子秀賴嗣。毛利氏・德川・前田・上杉・浮田氏。並稱五大老。共輔翼之。三成等離間諸老。五年。二月。輝元饗德川公于其第。修好交盟。四月。德川公伐上杉氏。輝元遣廣家・惠瓊。將兵助之。三成使惠瓊言輝元曰。德川氏將不利嗣君。嗣君憂焉。將倚公之力以討之。輝元乃將兵四萬。守大坂。增田長盛副之。三成自引兵。進入美濃。秀元諫輝元曰。秀賴幼騃。何辨臧否。大人愼勿惑其言。且君與德川盟。未幾背之可乎。不聽。秀元曰。然則大人擁秀賴以東伐。兒請爲先鋒焉。則諸將從德川者。皆來屬我。我勝必矣。坐守此地。非計也。又不聽。命與廣家陣瀬田。徇伊勢。攻拔津城。聞東西之軍會美濃。則北屯南宮山。惠瓊與長曾我部盛親・長束正家陣山下。兵凡三萬。秀秋會西軍。首送款於德川氏。約爲內應。廣家亦與福原越後定議。勸秀元送款。秀元曰。吾家受託於幼弱人。棄之歸强國。非義也。且無家君之命。安可自肆乎。廣家曰。豐臣氏恩澤諸侯。且叛歸東軍。況於我家乎。宜速決去就。是利納言也。秀元未決。

粟屋。拙修本作栗屋。吾。川越本作我。

拙修本無下將字。

廣家密因黑田長政納款。送福原某・粟屋某爲質、長政使之率衆來屬、擊西軍以爲信。秀元曰。我山下軍。非從吾降者。吾亦不忍擊之、唯當按甲不動。輝元在大坂。聞京極高次以大津應東軍。遣元康・秀包。與立花宗茂等攻之。使人入說曰。諸將爲嗣君擧義。公嗣君姻戚、何獨不從、高次不肯曰。今日之事。毛利與德川爭雌雄耳。嗣君何關焉。於是。攻擊益急。高次遂致城而去。諸將將遂會美濃。當是時。西軍竢輝元。東軍竢德川公。相持未戰。九月。德川公至。而輝元未至。三成等。遂聚議于大垣。推浮田秀家爲將。以秀元爲先鋒。正家・惠瓊往參其議。還報。廣家怒曰。宰相代納言統師。不能爲秀家前驅。已而三成自來。請曰。毛利・浮田。分將前後。豈有輕重乎。廣家終不聽。三成曰。然則公止軍於此。見我擧烽。則直襲東軍後。明日。兩軍皆陣關原。德川公猶疑我意。分兵當南宮。而進陣桃配野。惠瓊來見秀元勗之、秀元曰。軍事委廣家矣。惠瓊曰。公太閤養子。不可斯須忘秀賴。何得此推諉之言乎、秀元曰、吾必如約、惠瓊去秀元使人謂廣家曰、東軍諸將。其質皆在大坂。棄而不顧。吾亦欲棄福原輩以應西軍。如何、廣家不肯。

川越本・拙修本並木津下有川字。

已而兩軍大戰。石田氏陣烽起。正家促秀元。秀元欲應之。廣家與宍戶元繼爲先鋒。其兵皆免冑而坐。秀元不得進。乃託傳餐。故失戰期。世人傳笑。遂謂不得已之計。曰宰相傳餐。是時。秀秋在松尾山。觀望兩端。德川氏促之。乃自後襲西軍。其家老松野主馬怒曰。主公何爲此不義之擧。小早川氏所未嘗有也。終不肯戰。西軍大敗。我山下軍不戰而潰。廣家因長政謝德川氏曰。秀元宜速謁。顧輝元在大坂。不敢先也。乃下山西歸。長政與福島正則。欲止秀元爲質。馳出其前路。設帳。要而饗之。秀元有膂力。佯醉。拗正則手曰。近日見公於大坂矣。奮袂而去。二人不敢止。立花宗茂至草津。得關原敗聞。返至大坂。欲助輝元城守。輝元不聽。秀包亦返至。宗茂欲與俱歸東軍。秀包曰。吾從納言者也。乃入大坂。以疾歸安藝。尋卒。輝元避城。居于木津別第。削髮稱宗瑞。請降德川公。德川公與其親信井伊直政密議曰。毛利氏右族。不可遽加讓削。而廣島其治所也。不奪此。莫以正典刑焉。議未決。會輝元使者來。曰。生死唯命。若垂大仁。得領周防・長門。望外之幸也。德川公大喜。許之。盡收其餘六州。惠瓊匿伊吹山。出依秀元。聞

慶長十三年
慶長十九年
元和元年
寬永元年
土井。正本作土炊。
寬永二年
寬永八年

其通東軍。去匿鞍馬。聞吉川氏來索。又出匿本願寺子院。近江僧樂鎭。素與之惡。以告東將奥平信昌。信昌遣兵捕之。從者輿載。走東寺。追兵已迫。從者度不可脫。隔輿刺之。返鬪皆死。惠瓊未殊。遂就縛。十月。朔。與石田・小西・長束等。皆梟首京師。輝元徙長門。治于萩城。食三十萬石。不與公役。送其子秀就爲質。」輝元既養秀元。而生秀就及就隆。德川氏欲分長門于秀元。秀元辭之。退居長府。以攝國政。會、其室卒。德川公養松平康元女。繼之。十三年。又以其孫女妻秀就。秀就時爲四位侍從。十九年。冬。德川公攻大坂。留二壻于江戶。秀元因水野忠元。請曰。既辱姻婭。猶何見疑。願爲先鋒效力。許之。兵解。歸國。元和元年。夏。兵再起。秀元先西道諸將至大坂。斬首三百級。有賞。秀就取海道。阻風後至。無罰。」寬永元年。秀元在江戶。輝元使使告之曰。我以二國新封。養十州舊臣。上下共困。不得給公役。念受封無益。欲返致二國。汝善計之。使我家不至滅亡。秀元大驚、因土井利勝。白之台德公。公令秀元計之。秀元撿二國田。得七十八萬石。輝元聞之大喜。」二年。輝元卒。次年。秀就爲左近衞少將。」八年。秀元還政於秀就。大歛公

四家。川越本・拙修本竝作五家。

有。拙修本作使。

毆。正本作歐。

曰。秀元成童爲外征元帥。門望皆隆。眞我老友也。數延與語。子孫仍居長府。食五萬石。就隆居周防德山。亦食五萬石。秀元次子元知。居長門清末。食一萬石。豐臣氏質森高政。以森與毛利國音相近。遂冒毛利氏。居豐後佐伯。食六萬石。關原之役在大坂。削四萬石。此四家。與宗家皆存至今。宗家世任侍從。遷少將。而從四位下大膳大夫爲其常銜。襲廣元・元就故事也。吉川氏以存宗家之功。世食岩國六萬石。秀秋以內應之功。食備前・美作。松野主馬羞食其祿。去匿京師。無何。秀秋卒。無嗣。國除。小早川氏遂不祀。元春臨終遺書。戒輝元曰。往日。吾兄弟竝爲先鋒。推子爲元帥。今天下已有主矣。子愼勿自視如往日。隆景之將沒也。亦戒之曰。天下將亂。子第退守。勿進取。使我家有雄貲如先君者則可。否而爭權於天下。是自速禍也。輝元忘二叔言。毛利氏以故削黜云。

外史氏曰。余安藝人也。俯仰其都邑城池。輒懷毛利氏盛時。每觀嚴島。亦未嘗不想見元就之鏖賊也。夫室町之時。天下紛紛。日事兵爭。如群兒鬪暗中。喧豗毆擊。一仆一起。誰知其曲直。孟子所謂無義戰者。是已。唯元就之於陶賊。與北

早雲。正本作宗雲。

順。川越本作從。

智。正本作知。

傑。川越本・拙修本竝作雄。

條早雲之於堀越。羽柴秀吉之於明智。其事皆可稱道。故其功效皆致如此。而元就最其難者也。夫亂臣賊子。人得討之。然戰國之俗。唯見利而不聞義。如陶賊之事。四隣牧伯熟視。莫敢齟齬。甚至相率歸之以爲倚賴。獨元就以微力圖誅討。而又請之天子。名正言順。義旗所指。無堅不破。如揭炬暗室。衆目駭觀。足以伸大義於天下。使天下響應歸之。而何十三州之足圖也哉。大凡英雄成事。皆以爲其智略所致。而其事之合義。有能服人心者。而不自知也。後之追論者。亦徒視其成敗。謂盡成於其智慮。而不知天下之事有出智慮所不及。況當夫危疑之際。機會之來。間不容髮。苟以區區計算要之萬全。吾見其終身而不及事耳。故彼治世之論。不可以揣亂世英雄也。吾論元就。不言其智略。而言其果斷。不言其果斷。而言其事之合義。至於請之天子。又義之大者矣。且觀其效貢賦。助擧朝儀。則存心王室。非一日也。昔者。孫堅以英傑之姿。志嚮漢室。奮討强賊。出身不顧。又有策・權之子。遂能據有江東。以魏武之勢。而不能取焉。毛利氏之以關西抗織田氏。庶幾類之矣。元春之善戰也類策。而隆景之善謀也類權。

皆絶人之才。而戮力協心。臣事輝元。使之不失舊業。是其義最爲不可及焉。輝元雖無孫皓之虐。而不量力度德。而爭衡於中原。宜乎其削弱也。然其封土屹然。猶雄西陲者。豈非由元就父子之高義哉。

日本外史卷之十二終

是。川越本作此。

十九。川越本・拙修本竝作十八。

日本外史　卷之十三

德川氏前記

織田氏上

外史氏曰、封建之成勢於我邦也、其來遠矣。在昔王家、郡縣七道。治以守介。田以口分。四徵租調。而朝之職位、皆有田。有食封。有功田。其食封。多者不過三千戶。功田四等。世襲之者。止於大功。當是時。未有封建之勢也。自相門世權。所在封戶日多。不輸之地。不課之民。半於天下。後三條帝欲矯其弊。而不能遂。自是以後。各國莊園。居其十九。守介所治僅一焉。甚則國司終不赴任。而權延其地方豪族武人以自代。謂之目代。而至源氏起。國司置守護。莊園置地頭。分領糧粟。以備盜賊。則嚮所謂目代之類者。碁峙六十州。而封建之勢始矣。北條氏因其遺制。守護之任。猶得考課易置。如古之國司。然往往因襲。傳之子孫。漸成封

建之勢。而至建武中興之時。朝廷欲以特恩收武臣之心。以新田・足利諸族。充諸國守護。概以一姓連二三州。雖名爲守護。其實封建之也。及足利氏叛。奪其成績。而與之其子弟功臣。仍稱守護。而世襲之。土地兵馬。儼然諸侯。而封建之勢成矣。足利氏初務以大封啗將士。得以撓朝廷之權。既得天下。而勢不可削。及其政既衰。其權臣構難京師。而所謂諸侯。群起爲之黨援。又互相吞滅。益成強大。而最後織田氏。以其陪臣崛起而幷之。部下皆一時英豪。攻擊四出。取城略地者。因而賞之。其志在於盡鋤天下故國。而以其功臣代之。未成而踣。而豐臣氏以其將校踵起。見織田氏所志甚難而不成也。是以舊國之降附者。存而撫之。大者或蟠踞八九州。而不加殺削。是以得速致於混一。而沒而未幾。海內分崩。由此觀之。封建之勢始於源氏。而成於足利氏。足利氏未享其利。而不勝其弊。織田・豐臣承其弊。而不知裁之之術。蓋皆有待於我德川氏也。夫有外諸侯。有內功臣。內功臣之封。不能抗外諸侯。然後足以親戴衛護其內。而折衝禦侮其外。否則功臣亦與諸侯等耳。無戴我之心。而有爭我之意。是織田氏所以

元曆　原。川越本・拙修本竝作源。詳。正本作原。

被禍也。雖能存外諸侯。而不知斷長補短。使勢力略敵。又不知大封宗族。據其扼塞。犬牙相制。以鎮壓其邪心。是豐臣氏所以絶嗣也。織田氏唯難於取之。故重於分之。豐臣氏。唯易於取之。故輕於分之。輕之與重之。其情雖異。其不能收天下英雄之心一耳。故曰。二氏承封建之弊。而不知裁之之術也。至我德川氏。鑑二氏之失。而秉其衷。矯之以漸。權其內外輕重之際。以維持於萬世。封建之勢。於是一定而不可復撼焉。唐柳宗元論封建曰。勢也。余曰。封建。勢也。制勢。人也。彼生郡縣之世。而揣利弊於千載之上。使其目我邦之今日。以爲何如哉。蓋德川氏之致太平。雖由參遠勳舊之力。而新附將帥之功與焉。今之外藩列國。成邦於足利氏以前者。如島津・佐竹・伊達・上杉・毛利・鍋島。是已。其餘皆由二氏興家者。雖慶長庚子以後定賜封土。與之更始。而猶彼漢侯王之於陳項。唐將相之於周隋。不原其前代。其建置本末不可得而詳也。余故先敍二氏。而論其勢之所從來如此。

織田氏。出於平重盛。重盛次子曰資盛。元曆中。平氏與源氏戰于西海。大敗。擧

天文十一年

族死亡。資盛有孤兒。其母懷之。匿于近江津田鄕。鄕長悅其母色。納之。兒從育其家。會、越前織田莊祝人數入京師。每過鄕長宿焉。嘗謂之曰、吾老無子。願得公一子養之。鄕長乃與以平氏孤兒。兒終冒織田氏。名親眞。稱權大夫。子孫世爲祝人。及足利氏定天下。越前・尾張爲斯波氏管國。斯波義重嘗出遊。見織田祝人之子美之。載歸。以爲近臣。義重有大吏六人。其一人有罪放流。乃以織田氏代之。於是織田氏終爲斯波氏重臣。徙於尾張。自親眞而後十五世。曰敏定。敏定之時、斯波義敏。與族義廉爭立。敏定居間講和。請義敏養義廉子義良。而自輔之。居清洲城。尾張凡八郡。分爲上下。各四郡。敏定領下四郡。使族信安居岩倉城。領上四郡。敏定生敏信。敏信生常祐。相繼居清洲。敏定庶子信定。稱彈正忠。信定子曰信秀。稱備後守。信秀以支庶降居勝幡城。與族二人並爲宗家吏。分治四郡。信秀嗜武喜士。士多歸之。時齋藤氏在美濃。今川氏在駿河。與織田氏日相攻擊。信秀徙居古渡城。天文十一年。八月。今川義元將兵來攻。軍于小豆坂。信秀逆戰。衆寡不敵。日暮將退。敵兵尾擊甚急。信秀弟信光。與死士六

天文十六年

天文十七年

歲。正本作年。

天文二十年

人返戰。卻之。」十六年。九月。信秀從常祐攻齋藤秀龍于稻葉山。縱火城下。將還。秀龍出戰。我兵大敗。常祐以下八人皆死之。十一月。秀龍遂攻大垣城。信秀卽赴援。擊走秀龍。秀龍者。山城西岡人。善歌謠。東游美濃。仕土岐賴藝將長井某。遂殺長井。直仕賴藝。終爲其重臣。稱山城守。削髮更名道三。遂逐賴藝。十七年。賴藝來奔。信秀善遇之。因招美濃將士。將士多應者。八月。信秀往討秀龍。縱火多藝口。秀龍請和。信秀以比年兵興。上下疲弊。遂許之。秀龍乃復賴藝。以女妻信秀子信長。」是歲。信秀徙末盛城。」二十年。三月。信秀患疫卒。」信秀有十二男四女。庶長子信廣。其次爲信長。信長幼字吉法師。信秀自居古渡。別城那古野。置吉法師焉。令林通勝・平手政秀等傅之。甫十三。加首服于古渡。命名信長。字三郎。明年。信長始將兵。入三河。攻今川氏屬城吉良・大濱。縱火而還。信長幼跌蕩。喜武事。被服奇偉。喜帶大刀。其出行街市。或憑人肩。餡餅菓。傍若無人。常調馬。習弓銃。學泅。聚近士。令以竹槍鬭曰。槍利於長。乃造二丈槍。及嗣立。稱上總介。次弟信行。稱勘十郎。嘗爲信秀設法會。信長與信行偕往。拜位前。觀者甚衆。信

天文二十二年

傍。正本作旁。下同。

拙修本中下有而字。

長先進。攫香投鑪內。一拜而出。信行整容拈香。拜伏久之。觀者竊譽信行。有西海僧。在衆中。相信長曰。此子乃英雄也。然信長放縱日甚。平手政秀驟諫之。政秀之子有名馬。信長請之。辭弗肯獻。信長怒。遂惡政秀。不聽其言。政秀憂懣曰。吾受保傅之託。而不能匡救焉。何以視息於人間哉。二十二年。正月。政秀遂自殺。信長驚悔。自咎。屏居不出。爲建佛院。名曰政秀寺。忌日必詣。輒自矢曰。吾徒悔無益。當改過勵行。立大功於天下。以償前失耳。於是益講武事。警備隣國。齋藤秀龍。以其婦翁。欲一見。四月。會于富田正德寺。秀龍豫使將士盛服列坐。欲延信長過其前。以試其動止也。至期秀龍微行。潛道傍民舍。以覘信長過。信長爲茶筅髻。著濶袖。穿虎皮袴。佩繩緱刀及大瓢。健士八百人弓銃。朱幹槍。各五百。從其前後。秀龍以爲信長麤野。命其行人。以草具供之。信長至寺。入屏風中。結髮更衣而出。儀容閑雅。雖從者皆驚。秀龍使其二宰春日・堀田出迎。信長不與言。過群士前。上堂倚柱而坐。頃焉。秀龍出。信長如不見者。堀田進曰。是山城守也。信長乃顧秀龍曰。適在道傍民舍中所見者。何酷類公也。乃接見之。於是。

天文二十三年

川尻。川越本・拙修本竝作河尻。

秀高。川越本作秀孝。

那古野。正本作那古屋。下同。

弘治元年

弘治二年

秀龍復命。具酒饌如儀。既畢。自送信長者數里。既別。目送久之曰。吁乎。美濃一國。吾終不得不爲之贄幣也。信長時年二十。先是。常祐死于戰。其遺臣織田三位・坂井大膳・河尻左馬等。擁常祐子彥五郎。與信秀・信長構兵。斯波義統者。義良孫也。居清洲城中。竊右信長。彥五郎等覺之。不自安。二十三年。七月。坂井・川尻等襲義統。弑之。毛利秀高以義統孤兒脫走。來那古野。信長奉之于天王坊。謂將士曰。清洲。我宗家也。而弑我累世之主。不可不誅。乃遣柴田勝家等七將。攻清洲。與三位・左馬戰于城外。斬之。大膳使人乞援於守山城主織田信光。信光陰謀之信長。信長使佯許之。弘治元年。四月。大膳延信光於城內。自與兄大炊來見。信光率兵而往。及見大炊。立拔刀斬之。大膳出奔。信長馳至。圍彥五郎。數其弑逆。誅之。終取清洲。徙居焉。令信光居那古野。食河東郡。已而信光家內變。爲其下所害。信長以林通勝爲那古野留守。通勝患信長慓悍。與弟光春・柴田勝家。謀弑之而立信行。信長覺之。二年。五月。信長獨與四弟信時。卒往那古野。詗之。光春耳語通勝曰。是天幸也。宜速行大事。通勝不忍。信長還。砦于名塚。

造酒。拙修本作酒造。

已。拙修本作也。

永祿元年

永祿二年

令佐久間大學守之。八月。勝家・光春各將千騎急攻名塚。名塚告急於清洲。信長卽率見兵七百。赴援、使織田造酒丞等當勝家。而自與光春戰。我兵不利。隊將森可成謂信長曰。今日之戰、我軍克矣。信長問何以知之。曰。光春有驕色。信長欲馳。可成曰。少竢之。已而光春愈乘勝縱其麾下兵。可成曰。可以馳矣。信長乃馳、擊破之。手揮槍殺光春。遂轉赴勝家軍。大呼曰。我已獲光春矣。勿使勝家逸。勝家大怖。終走。歸末盛城。信長母六角氏。愛信行。與之俱居末盛。於是。六角氏令信行作誓書。勝家・通勝皆被僧服。來謝其罪。信長謂通勝曰。是吾之罪已。吾前背德忤諫。使平手自殺。汝自今代平手匡我。乃遣守那古野如故。信行仍不悛。城龍泉寺。欲與岩倉兵合。略取東郡。令其將都築藏人招聚兵士。勝家數諫。信行疏斥之。永祿元年。正月。信行襲諸將士。不及勝家。勝家怒、夜來清洲。告信行反。信長乃稱疾。使村井貞勝告六角氏。欲讓家於信行。六角氏悅。告信行。信行卽至。將入信長臥內。信長豫伏力士三人斬之。不成。信行走出。池田信輝要擊于廊下。斃之。二年。四月。齋藤秀龍欲廢長子義龍立少子某。義龍誘殺

期。正本作非。

永祿三年

旦。正本作且。

少子。與秀龍鬬。遂弑之。信長將兵援秀龍。不及。還。義龍躡之。信長自殿而退。會、岩倉城主遙援義龍。以兵三千軍丹原野。時我見兵僅八十三騎。乃驅清洲市人。伐竹爲槍。列于軍後。敵以爲大兵來也。乃退去。七月。信長與犬山城主織田信清。合兵三千。攻岩倉。岩倉兵出。戰于浮野。信長令弓銃手橫擊走之。追至城下而還。信長南行。信清北行。城兵視信清兵寡也。出尾之。信長還援。夾擊大破之。遂圍城。三月。拔之。於是。信長盡取尾張。獨智多一郡屬今川氏。先是。鳴海城將山口某畔。附今川氏。又取大高・沓懸二城。更城于村木。信長攻下村木。又攻笠寺城。城將戶部某。驍勇不可下。信長收兵而歸。以戶部善書。令侍史學之。期年而得。乃贋作戶部通織田氏書。令森可成僞爲賈人。齎赴駿河。上之義元。義元怒。召戶部殺之。又殺山口父子。義元既定駿河・遠江・三河。將大舉攻尾張。信長修諸城壘。令佐久間大學守鷲津。飯尾定宗守丸根。與大高・笠寺兵數戰。不決。三年。五月。義元自將三國兵四萬五千來攻。十八日。大學・定宗馳使清洲告曰。義元昨日至沓懸。今夜將運糧大高。而旦攻兩城也。信長召將士。言曰。我欲

我。川越本作吾。

赴救。如何。林通勝等說曰、敵衆垂五萬。而我兵不過三千。宜避其來銳。據本城待之。信長曰。不可。吾視天下英雄。恃其地利。以失事機。自取滅亡者。不爲少矣。先君有言。隣國之來犯。苟有遲疑。我將士且變志。當亟出迎戰。吾不敢背先君之敎。明日將一戰決勝敗也。與吾同志者努力。諸將莫敢諫者。信長因命酒與飲、酒酣天明。信長自起舞。謠古謠曰。人世五十年。乃如夢與幻。有生斯有死。壯士將何恨。舞畢、卽被甲上馬。單騎擧鞭而出。騎能屬者十餘人。比及熱田祠。得千人。自祈戰勝。陰使祠官鳴甲于龕中。信長顧軍士曰。神助我也。乃取山路。行收諸城兵。兵凡三千騎。東望見兩城火起。將士逡巡。信長益鞭其馬而進。林通勝・柴田勝家・池田信輝・毛利秀高。扣馬諫曰。彼大衆新勝。以寡兵犯之。立覆沒矣、信長勵聲。曰、汝輩且聞我言。吾非妄意進犯敵也。敵納糧大高。終夜不息。今亦拔兩城。其兵罷極。而義元侮我。不復設備。吾乘是時。出其不意。可一戰而擒也、梁田出羽進贊其計曰、敵拔兩城。未更其陣。中軍必在後。我直襲之。義元可獲矣。信長乃伏旗鼓。循山而馳。至於桶峽。瞰視義元營。信長欲下馬接戰。森可

是。川越本作此。

左。川越本標註云。一作右。

川越本無而字。

磯貝。正本作礒貝。

成曰。衆寡不敵。宜騎而突之。信長曰。善。乃馬上揮槍。先衆馳下。會大雷霧雨昏黑。我兵鼓譟。斫營而入。敵衆大驚擾亂。不知所出。服部小平太進入幕中。薄義元。義元拔刀擊其膝。毛利秀高鏦義元。斬其首而出。駿河軍遂大潰。信長追擊。斬其精騎二千餘級。乃賽熱田而還。士女夾路迎觀。信長揭義元首于馬前。凱旋清洲。大高・沓懸諸城皆解走。信長以此名聞天下。當是時。足利氏大衰。三好氏・松永氏。專京畿之政。而七道將士各據其國。迭相爭奪。信長慨然有戡定天下之志。初尾張人道家某。與京師人立入宗繼者相識。宗繼爲左京亮。自父祖居京郊。多田業。供御乏絕。每取給焉。嘗說中納言藤原惟房曰。方今天下大亂。宮闕頹敝。供御之邑。盡爲武人所占。而以臣視之。其勢非得天下豪傑。不足以定天下之亂。聞尾張有織田信長者。年甫二十。割據東國之咽喉。能以少摧衆。是其人必有絕世之才。君盍奏請綸旨。囑信長以撥亂反正之事。惟房畏憚內外。不敢決。宗繼再入說之曰。事如漏泄。臣獨任其責。帝探鬮鏡室。決計。五年十月。惟房宣言天子感異夢。將奉幣于熱田祠。乃使宗繼及磯貝久次齎密旨。赴

永祿四年

尾張。因錫信長以御用合香。館道家氏。信長獵歸。過道家。道家告以故。信長乃沐浴更衣。出見宗繼。宗繼宣達敕旨。信長謂宗繼曰。吾聞。天子天下之君。宜自我共職焉。而今反辱使命。加以寵貺。吾何以堪之。當藉天威以夷凶徒。不日入朝竭力圖報。因自調食。以享二使。召森可成・柴田勝家・丹羽長秀・木下秀吉・瀧川一益・菅谷長賴・堀秀政。諭以敕旨。於是。日夜議西上之策。刈谷城主水野信元說曰。三河德川氏。舊屬今川。公宜結納之。委之東事。而西而以圖天下。信長從之。甲斐國主武田信玄國富兵强。信長厚贈遺之。約爲婚姻。以順適其意。而西圖齋藤氏。齋藤秀龍之未死也。有二驍將。信長計除之。乃乘夜外出者數。夫人齋藤氏疑其有所私。頗有妬色。信長曰。吾非有他心。乃欲成祕計耳、夫人問其計。曰。不可與女言也。固問。信長乃誑之曰。美濃二將。陰通款於我。圖舅氏。曰。事成則擧燧。吾每夜出望之。未擧也。夫人憂恐。密爲書告之秀龍。秀龍驚。卽誅其二將。齋藤氏兵力遂自是削弱矣。義龍既弑秀龍。傳子龍興。龍興暗弱。其將士多歸心於信長。四年。五月。信長將兵千五百。出西美濃。洲股城將長井某・日

根野某。以六千騎迎之。覘我兵寡。徑渉而來。信長分兵爲三隊。以一隊自衞。一隊躡其前。一隊橫擊之。斬二將。於是。城于九條・洲股。令織田勘解由守九條。木

永祿五年

下秀吉守洲股。五年。五月。齋藤龍興在井口城。謂其將士曰。洲股河漲。信長未能來。吾欲以此時攻九條。乃率其將稻葉・牧村等。攻九條。九條告急信長。信長卽赴援。至河側。不可渡。信長曰。吾寧溺死。豈可坐視不救乎。乃鞭馬亂流而渡。全兵從之。時既夜。九條城將爲先鋒。擊走牧村。與稻葉鬭而死。池田信輝・佐佐成政。識稻葉聲。交刺于暗中。斃之。讓其首不取。柴田勝家取之。獻曰。信輝・成政讓首不取。臣謹獻焉。信長褒賞三士。凱而歸。終徙居小牧城。以迫美濃。遣丹羽

永祿七年

長秀。攻下二城。龍興將稻葉通朝・氏家經國・伊賀範俊。諫龍興失政。弗聽。七年。八月。三將送款於信長。信長許之。乃聲言攻三河。以聚兵。兵既聚。乃率而西行。上瑞龍山。以瞰井口。縱火疾攻。城兵惶駭而降。乃逐龍興。三將來謁曰。君來何速也。信長既定尾張・美濃。徙居于井口。更名岐阜。會有獻佳鷹二者。信長卻之

永祿十年

曰。吾方有事四方。未暇遊獵。吾定天下。然後受。爲未晩也。十年。十月。天子復使

尾濃。川越本作美濃。

永祿十一年

立入宗繼齎詔來。詔信長曰。朕顧四方。莫如卿武。曩降密敕。囑以征討。卿存心王室。不憚跋涉。聞已平尾・濃。奮庸宣威。朕深嘉之。宜益廸果毅。以副朕望。因錫戰袍一領。信長召村井貞勝讀詔。領旨。感激。受其袍曰。臣督師詣闕之日。當服以拜賜耳。先是。三好氏弑將軍足利義輝。義輝弟義昭。走依六角義賢。欲借其力靖難。三好康長・三好政康・岩成左通。稱三好三黨。專京師政。陰令義賢圖義昭。義昭懼。走依武田義統。義統辭。又依朝倉義景。義景諾而不果。又喪其愛子。志氣頓沮。義昭流寓於外三歲。聞信長威名。欲往託焉。使卜人太華筮之。遇臨之節。曰。知臨。大君之宜。吉。是之謂柔任於剛。任於剛。則不勞而治也。義昭決意。十一年。七月。遂使使來諭信長。信長方計西上。卽諾之。遣將吏迎之。館于立正寺。義昭見信長。託以興復。信長答曰。是在信長度內耳。幕下臨此。當築館以奉之。然信長爲幕下定京師。不出兩月矣。莫以館爲也。八月。五日。大會將士于岐阜。謂之曰。吾將有事於京畿。汝衆。各修兵備。以竢我令。乃盡散遣之。自率數十騎。至澤山。使使六角義賢。說以順逆。義賢及子義弼。業已與三好三黨。三黨聞

救。川越本標註云。一作援。

三日。川越本標註云。一作二日。

信長助義昭。則益啗義賢。義弼以利。曰竭力以拒信長。曠日彌久。我以大軍爲後援也。信長在澤山十日。使者三反。義賢竟弗聽。信長乃歸美濃。索近江地圖。與諸將計畫之。下令管內曰。以九月五日會于岐阜。會者凡三萬人。七日。信長將諸軍而西。義賢・義弼。居觀音寺城。修箕作・和田山等十八城。以和田山當美濃之衝。最固其壘壁。守以精兵。欲待我軍攻之。而首尾相救。信長諜知其計。乃使美濃三將備和田山。而宣言向觀音寺。因引兵襲箕作。城兵出戰。木下秀吉・丹羽長秀等爲先鋒。故緩攻之。漸至城下。則奮擊突入。卒拔之。和田山城望風解去。義賢・義弼夜棄城遁。信長三日下十八城。自入觀音寺。爲政國中。招聚逃亡。使人迎義昭。相見于守山。明日。濟湖陣于園城寺。湖山之間。無非兵者。三好三黨驚懼。棄京師去。於是信長整諸軍入京師。天子使藤原惟房迎勞之粟田口。信長稽首。謂惟房曰。臣屢辱過寵。不勝悚懼。幸爲臣謝。立入宗繼又從惟房至。信長指所服戰袍。謂之曰。是嚮所賜也。於是使義昭居清水寺。而自陣東福寺。自出美濃至此。蓋十有二日矣。京師士民。固聞信長威武。慮其暴掠。相驚曰。

川越本・拙修本並不下有致字。

志貴。拙修本作志賀。

信長至矣。皆荷擔而走。及信長至。號令嚴明。秋毫不犯。使菅谷長頼巡行街市。織田氏養卒。有與賈人爭價者。輒執縛之樹。以視行道者。於是。士民相告而歸。物情大安。信長聞三黨據山城・攝津・河内諸城。卽日。遣柴田勝家・森可成等。將萬人。涉桂川。攻岩成左通于青龍寺。明日。自以五萬騎繼之。左通望見大懼。以城降。乃以左通爲先導。攻三好政康于芥川。篠原長房于越水。二城皆潰。乃奉義昭於越水。而自入芥川。十月。自攻池田勝政于池田。勝政善拒。我兵縱火奮戰。奪關而入。勝政終降。獻質子五人。乃宥之。加賜二千貫邑。高槻・茨木諸城。聞之皆降。三好康長等棄河内。走歸阿波。信長告成事於義昭。於是。使信長自擇邑。信長辭。不取。請分之幕府功臣。先是。伊丹親興・畠山高政・三好義繼・松永久秀。數與三黨戰。先送款于美濃。以故分河内于高政義繼。分攝津于親興・勝政。及和田惟政。令久秀居志貴城。以定大和。攻筒井順慶。順慶降。信長自置吏于界浦大津。乃歸京師。陣清水寺。當是時。京畿將士執謁信長。軍門如市。朝廷論信長功。敍從四位下。任左兵衛督。信長辭曰。臣以天之道。得克強賊。敢攘以爲

不。拙修本作弗。

永祿十二年

役。拙修本作復。

迫。川越本作逼。

功。以辱顯爵。乃敍從五位下。任彈正忠。義昭私以信長爲管領。賜號副將軍。皆辭不受。義昭賀成事。欲張散樂十三曲于其第。信長諫曰。方今凶賊纔服。四方未平。此非優游之秋也。且諸軍士多思歸者。宜如式而止也。乃省爲五曲。即日。釋兵。撤畿內關寨。以便行旅。遠近悅服。義昭病信長有功無賞也。爲書褒之。呼信長曰父。信長乃歸岐阜。十二年。正月。三黨與齋藤龍興等。圍義昭于本國寺。信長聞警。單騎赴援。至則已平。諸國兵後至者。五萬。信長初令畿內豪戶。納金于足利氏。獨界浦不奉命。又資三黨。信長宣言居界浦。浦人號哭乞哀。乃使上贖金二萬貫。就二條武衞陣故址。拓修幕府。四月。成。使義昭居焉。以備寇賊。於是。信長召村井貞勝・島田秀滿・僧日乘等。諭之曰。應仁以來。天下大亂。王室衰微。宮闕墜廢。凡居王土爲王臣者。誰不嗟悼。信長夙有修擧之志。兵亂倥偬。延而至此。今畿內粗定。當修禁內以安帝座。雖然。亂後興役。不可急迫。恐擾民情。宜以漸成之。乃留木下秀吉守京師。而歸。遂略近畿諸國。七月。遣兵。以伊丹親興・池田勝政爲先鋒。略但馬。攻山名氏。八月。自將兵五萬。略伊勢。攻北畠具敎

元龜元年

于大河内。旬餘。具教將柘植某送款信長。殺具教以啓我兵。信長縛柘植。數之曰。汝爲人臣。弑其君。以降敵。不可容也。乃斬以徇。以次子信雄。爲北畠氏後。居大河内。食十萬石。三子信孝。爲神戸氏後。居神戸城。弟信包。居上野城。各食五萬石。信雄幼字茶筅。信孝幼字三七。皆庶出也。」十一月。信長徑入京師。戒皇宮工事。」是歲。置赤黒母衣各十騎。以將士子弟材武者充之。」元龜元年。二月。入京師。四月。張散樂于將軍新第。大會德川氏以下諸將領。義昭爲奏。請進信長官爵。信長固辭。以朝倉義景拒命。自往討之。至敦賀。攻手筒城。一晝夜拔而屠之。進攻金崎。降守將朝倉景恒。以爲先導。欲遂定國内。會、淺井長政招六角氏餘黨。與義景約。夾擊信長。長政爲小谷城主。信長妹壻也。信長得報。不信。警聞益至。信長乃欲自若狹入京師。恐義景追躡。木下秀吉自請留備。信長壯而許之。令諸將人出三四十騎。以助秀吉。而引兵西。德川公爲殿。至朽木谷。朽木元綱被甲率兵而迎。信長疑其有異心。松永久秀曰。臣請往質之。卽有他故。刃之而死。乃馳往諭元綱。元綱脫甲撤兵。以饗信長。送至京師。秀吉亦至。信長乃爲義

釜川。插修本作谷川。

昭徽京畿將士之質。割近江地。令森可成守志賀宇佐山。柴田勝家守長光寺。佐久間信盛守長原。木下秀吉守長濱。而歸美濃。聞敵兵要于鯰江・市原。乃以蒲生賢秀等。爲鄕導。由千種路歸。六角義賢使善銃者杉谷善住伏山木中。狙信長過。連發二丸。中其衣袖。從兵愕。欲索之。信長不許。金森長近密與信長易衣。乘其輿而歸。終達岐阜。六月。六角義賢糾合土寇。出野洲川。勝家・信盛邀撃破之。加賜各三萬貫。淺井長政・朝倉義景。壘于比長（タケクラベ）・刈安（カリヤス）。令近江驍將堀某・樋口某守釜川城。信長欲誘降之。美濃人竹中重治。爲信長說二將曰。子守城者。欲何爲。曰。欲立功。曰。立功以爲何人乎。曰。爲淺井・朝倉氏。曰。織田君爲天子・將軍起義兵。而二氏不助焉。欲乘其危圖之。是天下所切齒。而子爲之立功。爲士者固如此乎。二將乃因重治降。各獻質子。信長以爲先導。自將繼之。諸壘皆解走。乃攻長政于小谷城。城甚險。森可成・坂井政尙等。與城兵戰于雲雀山。破之。信長引諸軍。上虎姬山（トラゴゼンヤマ）。議攻城策。佐久間信盛進曰。拔之不難。恐損我兵。主君以身任天下。何必乎此。信長乃焚城四面而還。令佐佐成政・梁田出羽・中條將

滿。川越本作盈。

急下於。川越本作于。

監爲殿。柴田勝家曰。此輩兵不滿千。盍命臣若信盛。信長曰。否。大兵敗於險地。不可復收。故命此三人。且吾自留號令之。卿等先去。乃自引近臣二百騎。返助三人。三人辭之。迭殿而退。城兵尾擊。三人且戰且卻。遂全軍而歸。遂攻橫山城。城將告急於長政。長政乞援於義景。義景使族景健先往。令兵二萬餘騎。軍于大寄山。我兵望之。攻城益急。長政・景健議曰。吾待朝倉公而戰。恐城不守也。宜急救之。今信長陣龍鼻。距此五十町。直馳赴之。人馬皆疲。吾且日移陣于三田。乘曉襲其中軍。彼必驚擾。莫不敗矣。淺井半助進曰。臣嘗游美濃。爲稻葉氏客。視信長將略。非驚擾者也。公計恐不中耳。遠藤某奮曰。彼何足畏。公第進戰。吾雜敵兵。與信長決耳。議乃決。信長夜望大寄山。顧呼宿直諸將曰。柴田・木下・佐久間在乎。皆答曰。在。信長乃召而前之。指示曰。北軍炬火徹宵。是將乘曉襲我也。乃下令。勒軍爲十三隊。坂井政尙・池田信輝等爲先鋒。以當長政。德川公獨將其兵。當朝倉氏。稻葉通朝助之。乃留丹羽長秀備城兵。而引兵西向。天明。遇北軍于姉川。北軍大驚。政尙・信輝進戰。不利。信長使氏家經國・伊賀經俊擊其

堙レ濠薄レ陣。正本作二湮レ壕薄一レ埤。

坂下。川越本作二坂本一。

警。川越本標註云。一作レ驚。

横。通朝顧而助レ之。大破二長政。而景健亦大敗走。獲二其驍將遠藤・眞柄等十餘人一。斬首三千餘級。横山以下諸城。皆解走。秀吉欲下乘レ勝取二小谷。信長不レ許。使下母衣騎傳レ令收レ軍。親論二賞戰功將士一。遂攻二磯野員正于澤山。置レ戍而西。獻二捷京師。遂歸二岐阜一。八月。三好三黨與二齋藤龍興一糾二兵一萬。據二野田・福島。信長自將討レ之。九月。陣二天滿林。義昭陣二中島。堙レ濠薄レ陣。而一向僧賊以二大坂一應レ賊。信長曰。彼長袖者。何能爲。遣二佐佐成政赴拒。而自繼レ之。成政等冒二矢石一進。將領多死。我兵潰走。賊軍乘レ之。前田利家揮レ槍大呼。手殪二數十人。賊辟易而去。利家幼爲二信長近士一。忤レ旨被レ逐。私從レ軍。先登獲二首級一者數。信長乃復レ之。擢爲二尾張荒子城主。至レ是力戰。以全二信長軍。信長軍方困二於三城間。淺井長政・朝倉義景時レ之也。合二兵三萬一。軍二比叡衢。將レ焚二坂下一。宇佐山城將森可成出拒。死レ之。信長弟信治。及尾藤某・道家某。皆死。北軍遂攻二宇佐山。留後・武藤等能拒。北軍乃過二大津。縱二火醍醐・山科一。信長聞レ警曰。吾藉得レ拔二三城。使二奴輩蹂二躪京師。則我之恥也。乃令二攝津・河内諸將備二三城。而還救レ之。三城兵大起。尾レ之。奪二舟於江口渡。諸軍患レ之。信長自視二于

親。川越本作自。
元龜二年

岸曰。水淺。可渡也。乃亂流皆濟。整軍徐退。敵不敢逼。遂達京師。且曰。向北軍。北軍驚上叡山陣。信長陣志賀宇佐山。分兵攻叡山。每夜襲擊。而使人說其僧徒曰。汝等能捨彼而助我。則他日使汝寺封如故。否則中立不倚。莫有所助。二者不聽。他日必縱火赭山。鏖殺僧徒。不釋一人。僧徒弗聽。十月。信長遣菅谷長賴·佐佐成政。言於北軍曰。吾與公等相持曠日。若士卒勞倦何。請一戰以決勝敗。長政等不答。六角義賢糾近江土兵。將夾攻信長。木下秀吉自橫山。丹羽長秀自澤山來援。行破土兵。至於志賀。信長登樓望之。驚以爲義賢至。至則秀吉·長秀也。二人以首級謁曰。北人深入至此。自送死耳。請獨擊之。莫使一騎還。信長大喜。長政等請和。不許。六角義賢來降。十一月。堅田人猪飼甚介等屬信長。請得一將。坂井政尙自請而往。北軍來爭。政尙力戰死之。會、大雪。北軍慮歸路梗。數請和。弗許。乃請之義昭。義昭親來信長營。言之。信長乃聽之。各解兵歸國。二年。二月。磯野秀昌以澤山降長秀。五月。淺井長政以二萬騎攻箕浦。秀吉赴援。擊卻之。先是。一向賊起於長島。攻信長弟信·興于小木江。殺之。五月。信長入長

川越本標註云。按諸書。信長時下小川・金森二城。常樂寺特其頓軍地耳。
勢多。正本作勢田。
敢或。拙修本作或敢。

元龜三年

島。縱火而退。賊乘風雨。迫險要擊。氏家・經國死之。八月。以柴田勝家爲先鋒。入近江。出小谷・山本之間。縱火而退。兩城兵八千出躡之。勝家返戰三次。敵不復出。信長再發。攻拔新村。下小川・常樂寺。九月。陣勢多。命諸將縱火焚叡山。諸將皆失色。佐久間信盛等諫曰。自桓武帝創建此寺。幾千年于此。爲王城之鎭。莫敢或犯者。今而滅之。其如之何。信長曰。吾除國賊耳。汝輩何阻我耶。吾欲定四海。興王道之衰。勞筋骨。輕軀命。未嘗一日安居。去歲略攝津。兩城將陷。長政・義景擧兵窺我後。吾舍兩城而還。棲之山上。將殲之也。遣人諭僧徒。陳說禍福。而彼竟不服。務右凶徒。以梗王師。此非國賊乎。今而不行芟除。乃貽患於天下也。且聞彼犯其律。茹葷蓄妻。束閣誦呪。安在其鎭王城也。圍而燔之。勿使有遺類。諸將乃服。明日。圍叡山。燔中堂及二十一社。僧徒婦女。無老少皆斬之。以志賀郡賜明智光秀。城坂下使居之。歸岐阜。令丹羽長秀誅高宮某于澤山。以其通大坂也。是歲。皇宮成。信長貸金于京畿豪戶。令每月納息縣官。以充供御。且爲計畫廷臣家計。興廢繼絕。三年。三月。縱火小谷・山本城下。徙軍志賀。攻木戶・田

敢或。拙修本作或敢。

中二城。置戍焉。遂入京師。陣妙覺寺。義昭使信長置第于武者小路。固辭不許。乃令村井貞勝董役。不日而成。細川昭元・岩成左通來降。大坂僧徒亦贈物納款焉。三好義繼・松永久秀。私與畠山氏鬪。築城交野。信長素疾二人。欲因事誅之。於是。遣兵攻交野城。兵夜遁。久秀竟降。七月。信長長子信忠。幼字奇妙。始被鎧。從信長。攻淺井長政于小谷。令木下秀吉別攻山本。聞朝倉義景來援。壘於虎姬山。待之。義景以二萬騎至。信長曰。及其未陣襲之。莫使安營也。將士乘夜更襲之。北人患之。多來降者。會義昭使來諭弭兵。乃令秀吉守虎姬山。宮部某守宮部壘。鑿山開道。以便往來。當是時。長政・義景。與越後國主長尾謙信通好。以抗信長。而武田信玄亦以甲斐・信濃兵西出。信長遣佐久間信盛・平手汎秀。援德川氏。拒信玄於東海。不利。汎秀死。義昭時與信長惡。欲乘是時圖之。先是。信長病義昭多失行。上書諫曰。幕下之入京師也。信長首請朝參。勿敢或怠。幕下諾之。後乃違焉。夫光源公怠於王事。天譴立至。信長竊爲幕下懼之。忠臣亡賞。而佞夫得官。以虐下民。下民何罪。罪人納金。即便宥之。僞稱叡山賦稅。以掠

蓄。川越本作畜。

天正元年

民財。或陽責征課。而陰蠲之。以賈私恩。此皆非幕下所宜爲。朝議欲改元龜之號。而幕下特愛費用。不果從。遠近有惡御所之目。信長竊爲幕下羞之。信長築二條城。以備寇賊。而欲舍徙他所。糶城內粟。以蓄金銀。諸國將士。多貴金賤粟。遺其武備。以爲遯隱之計。皆倣幕下之爲也。信長所納紀綱之僕。無罪奪俸。來乞哀者數。請而不得復。信長無面目以對此輩。且聞下教諸國。徵馬及金。囊白。凡百需索宜囑信長。信長將立辨之。今陰有此教。信長惑焉。信長志欲與幕下協心戮力。撥亂略以興王政。豈有他哉。願幕下勿信讒言。以保終吉。斥佞進忠。恢弘先業也。至如儒人。最宜親近之。以鑑古今興衰。信長生長兵亂之間。嘗於文學。自度處事多違故典。所以常懷愧恥也。妄疏所見。唯幕下留意焉。義昭弗納。遂相嫌隙。天正元年。義昭潛發使諭信玄及謙信。約夾攻信長。又諭安藝國主毛利輝元。以爲後據。信長使村井貞勝請和義昭。義昭不聽。二月。義昭自城于石山・堅田。以山岡・磯貝・渡部等守之。徵發兵食。信長聞之曰。吾終不得不用兵。遣柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・蜂屋頼高。渡勢多。招石山兵。降之。勝家乃

留備京師而長秀等攻堅田。拔之。三月。信長自將至大津。細川藤孝・荒木村重迎降。乃進入京師。觀兵請和。義昭弗聽。乃圍二條城。義昭窮蹙。使人出言曰。自今後。盡聽卿所言。信長拜謝。行成而還。至守山。遣諸將攻六角義弼于鯰江。召丹羽長秀。耳語曰。室町氏必再舉。再舉必阻勢多・矢橋。汝伐澤山木。造兵艦十餘艘。乃歸岐阜。尾張人有梶川某者。喜博奕。爲衆所擯。信長愛其勇。與以善馬曰。緩急以此樹功。梶川感喜而退。七月。義昭再舉兵。留伊勢某・三淵某。與廷臣二名。守二條。而自據槇島。阻宇治河爲固。報至岐阜。信長卽起。直馳至澤山。乘其兵艦。夜濟朝妻渡。旦日。達坂下。直入京師。縱火呼譟。烟焰漲天。義昭兵拒勢多・矢橋者。返顧而潰。京師人大驚曰。織田公豈飛來耶。信長疾攻二條。陷之。斬三淵。城兵皆降。以爲先鋒。向槇島。自陣柳山。遣稻葉通朝・伊賀範俊等。將二萬人。渡平等院。佐久間信盛・木下秀吉等。將五萬人。渡五箇莊。於是。梶川某騎信長所賜馬。曉出河岸。大呼自名。亂流而渡。通朝麾兵從之。與信盛・秀吉。合擊奪柵。縱火而入。信長在柳山。左右望烟起。相謂曰。我軍方渡矣。誰先登者。信長曰。

村重。拙修本作重政。

必梶川也。槇島既破。義昭請降。信長令信盛・秀吉處置之。二人乃奉義昭徙于若江。令細川昭元守槇島。通朝來白曰。臣爲梶川所先。意甚憾焉。然恐其單進致死也。故繼之。信長并賞二人。於是。織田氏遂代足利氏。出令京師。蠲戶租。免徭役。賑窮民。旌節孝。以村井貞勝爲所司代。收兵而還。遂以兵艦攻拔木戶・田中二城。賜之明智光秀。令秀吉・藤孝攻淀城。斬岩成左通。令荒木村重攻和田惟政于芥川城。村重素以雄豪聞。部兵皆驍。義昭之變。首應信長。迎謁于大津。面貌甚偉。會有獻饅頭者。信長拔佩刀。貫饅頭于鋒。以啗村重。村重進。開口受之。信長笑曰。好男子。攝津十三郡。任汝剪取之。於是。命攻惟政。榜賞格曰。獲主將者予萬金。獲偏裨者千金。獲士卒者百金。村重將中川清秀熟視之。以罣勾其首條。觀者無測其意。既而惟政曉出城。雜士卒。修守備。清秀伏濠側。跳出斬其首。信長乃賞清秀以萬金。以池田勝政觀望不至。逐之高野。以和田・池田氏邑盡賜村重。八月。歸岐阜。居三日。淺井氏將阿閉某來降。信長復發。下月瀨城。軍于山田。淺井氏兵守燒尾。朝倉氏兵守大嶽。與山田相持。信長遣勝家・信盛。

驅。川越本・拙修本竝作馳。亡。正本作乏。

陣于高月。絕越前援路。朝倉義景聞之。以二萬騎來。軍于田邊。信長又遣稻葉通朝。助勝家。燒尾守將因阿閉納款。以導我兵。我兵遂圍大嶽。夜冒風雨疾攻。守將乃降。信長令信忠守虎姬山。不破光治守大嶽。而進下丁野。遣使高月。戒諸將曰。今夜北軍必走。宜尾擊鏖之。諸將皆莫信。且應曰。諾。夜半義景果焚營而遁。信長大呼。起曰。敵走矣。與左右五十騎馳出。有先馳者。信長誰何之。答曰。利家・成政。其他十餘人。皆迭對。信長戲曰。吾欲先登。爲諸君所先。乃聯轡疾驅。及敵于刀根山。斬其偏裨二十三人。雜兵二千。金松某執甲首以謁。跣而蹀血。信長勞之。手取芒鞋一兩。賜之曰。吾每臨戰。懸之刀欛。以備闕亡。今而有用矣。信長兩日下十四城。留敦賀。三日。徵降將質子。進軍龍門寺。義景棄一乘谷。匿大野。勝家・通朝等。分兵搜索。平泉僧徒懼。請鄉導。通朝貨土人。得義景所在。誘降其族景鏡。景鏡迫義景使自殺。信長誅黨類。撫降附。爲政國中。使人齎義景首梟之京師。以降將前波長俊。爲越前假守。明智光秀等。監之。引兵還虎姬山。淺井長政。與父久政保守兩城。信長遣秀吉。登粒羅岡。絕兩城之間。使久政・

長政自殺。以其地賜秀吉。九月。遣勝家攻鯰江。降六角義弼。獲杉谷善住。生埋之地。以竹鋸鋸其首。十一月。入朝。遣佐久間信盛。攻殺三好義繼。於是。淺井・朝倉・六角・三好氏皆滅。

日本外史卷之十三終

日本外史　卷之十四

德川氏前記

織田氏下

天正二年
屬。川越本・拙修本竝作囑。
勿。川越本・拙修本竝作莫。

天正二年。正月。元日。近畿將士盡賀正于岐阜。信長賜之酒。酒三行。謂衆曰。我有佳肴。請侑飲焉。令左右取一函來。置之坐上。衆屬目焉。信長觴柴田勝家。而手開其蓋。則義景・長政首也。塗以金粉。諸將皆笑曰。有此好下物。何辭滿酌也。信長曰。吾經略京畿。爲二患所礙。數年矣。卿等爲吾積勞累苦。以得致誅斃。因各賜刀劍。極驩而罷。佐佐成政留而白曰。臣無似。從諸將之後。叨被洪恩。不知所報。唯願君不自足焉。遂定四方也。信長大悅。握成政手。入室內。與談政治。侍史武井夕菴自傍贊之曰。不圖成政能爲此言。君勿忽焉。信長厚賜二人。二月。甲斐兵侵東美濃。圍明地城。信長與信忠出拒之。城內有叛者。城陷。乃修高野・

還。正本作歸。

遠利二城。令河尻鎮吉・池田信輝守之。時武田信玄既死。長尾謙信猶存。信長與武田氏絶。通好於長尾氏。厚贈之。三月。信長入朝。寓于相國寺。詔敍從三位。任參議。以足利義政故事。奏乞東大寺所藏名香。自至多門城。遣使令截香一寸八分。而三分之。自取其一。分賜其二於諸將。四月。還京師。大坂賊出要之。擊破而過。五月。還岐阜。六月。武田勝頼出兵遠江。圍高天神城。徳川氏使使請援。信長・信忠將兵至荒井。會城陷。還至吉田。徳川公來謝曰。藉公餘威。得以保國至此。信長勞之曰。卿爲我守東面。以拒武田氏。使吾毋東顧之患。吾得以速定京畿。卿之功也。乃令左右四人擔二革囊。盛以黃金。以賜之曰。薄以酬將士之勞。乃還。七月。征長島。信長之滅淺井・朝倉氏。遂攻長島。屠二城。置戍而還。遇雨。賊據險夾射。林新三郎殿戰死之。信長怒曰。以草賊故。多亡吾良。吾必覆其巢窟。殲其醜類。以弔死者。已而長島應武田氏。信長覺之。益怒。於是。與信忠將兵數萬。三道赴討。信雄與瀧川一益・九鬼嘉隆。以舟師會之。行破賊兵而進。賊入保五城。八月。大鳥居城賊夜乘風雨遁。柴田勝家等追擊。殲男女二千人。截其

天正三年

新隍。川越本・拙修本竝作新湟。

耳鼻。盛之一船。送致長島篠橋城降。九月。長島賊出城乘船而去。我弓銃手豫伏隄側。擊鏖之。餘衆可八百。突入我中軍。信長叔父信次・庶兄信廣・弟秀成・從弟信成。迎戰死之。賊奔大坂。遂燔殺三城男女二萬人。臭聞數里。乃以長島賜瀧川一益。食北伊勢五郡。三年。正月。命吏四人。巡近畿諸國。修橋道。蠲關征。三月。信長入朝。檢廷臣采田。其賣於人者。爲償還之。四月。信長聞大坂納長島逋逃。又糾合三好氏遺黨。以遙應武田氏也。乃引兵南伐。下新隍・高尾二城而還。五月。武田勝賴大擧出三河。圍長篠城。德川氏復使使請援。信長・信忠以騎卒五萬赴之。戒其軍曰。人持杙與絙。乃詣熱田祠。祈戰勝。至岡崎。値城將奧平信昌使者。曰。城兵日夜望大旆來也。信長慰勞遣歸。而縱反間曰。信長方患京畿・北國。不能來援。勝賴大喜。分兵備城。築壘于鳶巢山。留一將守之。而自進二十餘町。濟瀧澤川而陣。信長至設樂鄉。令將士議戰。德川氏部將酒井忠次進曰。臣請今夜間道遶出敵背。襲鳶巢壘。縱火敵營。以褫其氣。而大軍乘之。莫不勝矣。信長佯罵曰。咄。田舍兒何知。諸將皆退。信長使人陰招忠次曰。汝計可用。吾

前。擱修本作先。
三千。擱修本作二千。

恐其漏泄。故佯叱之耳。汝宜速發。顧如毋鄕導何。忠次曰。臣卽爲鄕導。請賜監吏。信長乃遣金森長近等四人從之。當是時。信長陣極樂寺。信忠陣新御堂。勒兵爲十五隊。德川公爲右先鋒。居前。佐久間信盛・木下秀吉・瀧川一益。爲左先鋒。少卻。信長下令。爲柵于軍前。用杙與繩。立成。乃抽諸隊銃手。得三千。以佐佐成政・前田利家等司之。曰。勝賴恃勇無謀。而其兵喜騎戰。吾阻之以柵。而銃斃之。彼卽馳至。勿遽發銃。及其已逼。每千迭發。二十一日。昧爽。鳶巢火起。敵軍顧而擾動。信長自率司銃五人。出柵十町。發巨銃于敵中。挑戰而退。敵四將更進。逼我右先鋒。轉犯左先鋒。銃丸亂發。敵兵阻靡。敵三將敢死繼進。直犯左先鋒。破柵一層。我銃乃齊發。右先鋒以槍橫擊之。成政馳白信長曰。敵中軍旗幟搖動。信長令先鋒縱兵乘之。敵軍敗走。乃令諸軍。鼓譟齊進。敵軍大潰。逐走追北。斬首一萬三千級。擠餘兵於川。獲其宗族將領二十餘人。勝賴僅以身免。三河諸城。屬武田氏者皆解走。信長收軍。不敢窮追。德川公來謝軍門曰。今日之役。不知所謝。信長曰。卿兵最力戰。以得此捷耳。德川公因請乘勢遂入甲斐。前田

沿。正本作沼。

利家・木下秀吉。亦以爲言。信長不可曰。我兵疲矣。吾且養力再擧。乃振旅而還。賽熱田。修其祠宇。歸美濃。於是。令信忠攻岩村城。越前假守前波長俊失政。朝倉景健等。與一向賊作亂。據龍門・虎杖・木理・火燧・水津・河野諸城。以遙應大坂。八月。信長・信忠乃統公族諸將兵凡八萬。北伐至敦賀。會大雨。信長潛召木下秀吉曰。敵必不設備。汝潛以舟師取河野浦。擊其不意。遂破龍門。則木理諸城不攻自破矣。乃以明智光秀等助之。夜發敦賀。已而河野・龍門火起。木理諸城顧視之。皆棄守潰走。諸將邀擊大敗之。柴田勝家等。拔鳥羽城。入加賀。金森長近等自德山口入。屠三城。而丹波・若狹將士。以兵艦數千艘來會。縱火沿海。信長乃進。踰木理嶺。至龍門。景健斬賊帥下間和泉等。乞降。弗許。誅之。景健從士三人。伏刃殉之。信長恤三人妻孥。分兵索賊黨。斬獲五萬人。進略加賀。加賀・越前十餘日而定。九月。信長還至北莊。大論戰功。令梁田出羽守・檜屋・大聖寺二城。以鎮加賀。分越前三郡。賜前田利家・佐佐成政。及金森・原・不破・武藤等。以其餘八郡。盡賜柴田勝家。城北莊・足羽。使居焉。身自經畫之。因敕勝家曰。越前。北

間。正本・拙修本作閑。

河尻。正本作川尻。

陸之要扼。而當長尾氏之衝。吾選於諸將以命汝。汝其勉之。夫守國之道。不當徒恃勇武。當恩威竝施。以服民心。乃申條制曰。毋厚賦斂。毋征關市。毋侮士民。毋偏訟獄。毋遺武備。毋喜游田。皇人之邑。爲亂賊所掠者。當據印券還付。國內間地。歸我倉廩者。以待功勞之士。不當徒費。凡我所令。有不便者。輒來爭之。我將改焉。因命不破・佐佐・前田等。與勝家相檢察。以爲國政。然後班師岐阜。十月。入朝。廷臣二名來迎于澤山。詔聽昇殿。超拜右大臣。信長固辭。卽任權大納言。兼右近衞大將。信長從弓部百人入拜謝。因賜宴於御前。東西諸國。交使使賀之。大坂僧徒乞降。獻珍玩。許之。會美濃使者至。告武田勝賴來援岩村。信長馳還赴之。先是。岩村城將出戰。信忠擊卻之。城將遂出降。而信長至。磔城將以徇。以河尻鎮吉爲岩村城主。勝賴聞之引去。朝廷嘉信忠功。擬以高爵。信長固辭。乃除秋田城介。信長因奏請曰。臣將校爲臣效力。使臣奏功。今臣父子獨辱顯爵。而不及此輩。臣意竊愧之。於是。以木下秀吉除筑前守。明智光秀除日向守。塙直正除備中守。河尻鎮吉除肥前守。先是。西海豪姓多絕而無嗣。信長欲使

天正四年

固。正本・拙修本並作堅。

諸功臣繼之。乃命各冒其姓。明智光秀冒惟任氏。塙直正冒原田氏。梁田出羽冒別喜氏。丹羽長秀冒惟住氏。秀吉羨丹羽・柴田氏威名。請稱羽柴氏。信長謂信忠及諸將曰。我他日得混一海內。則使汝輩實稱其名也。當是時。織田氏之國。橫塞天下衢路。以東國鷹馬贈遺西國。以西國虎豹皮贈遺東國。得贈遺者。各以爲信長已略有其地也。四年。正月。信長欲徙治于近江安土山。以備長尾氏。惟住長秀董役。課畿內及尾張・美濃・若狹・越前十一州之卒。起天主閣。閣凡七層。高七丈。布邸第于山下。令信忠居岐阜。以備武田氏。是歲。信忠敍從四位下。尋進上。四月。信長入朝。詔使修二條城址以爲館焉。數年而成。不敢自館。請獻之皇太子居焉。時大坂復叛。與武田・長尾・毛利氏相結。信長遣細川藤孝・荒木村重・惟任光秀・原田直正・筒井順慶。將兵三萬赴討。令佐久間信盛等守天王寺壘。賊壘于木津・難波。舟船往來。信長戒諸將曰。必取木津。直正率降將三好康長。及根來寺兵。攻之。難波賊以銃手要之田中。先鋒敗走。直正戰死之。五月。賊遂以萬餘人圍天王寺。信盛與光秀・順慶等固守拒之。梶川彌三郎從在

乃公。正本作廼公。

天正五年

佐野。川越本・掛修本竝作左野。

城內。數出力戰。時溝壁未成。乃刺殺牛馬。張其皮代壁。以扞矢石。信長聞急。方浴。浴衣上馬。與百餘騎赴援。至若江。兵聚者三千。分爲三隊。命先鋒於村重。村重辭。信長曰。然則乃公爲之耳。乃自雜輕卒。指麾而進。敵矢丸如雨。信長傷足。怒而益進。城兵望見其旗。大喜。開門出戰。夾擊破賊兵。賊兵猶布陣不退。信長欲再戰。諸將諫曰。衆寡不可敵。竢我兵盡來。然後戰。信長叱曰。機可失乎。合兵爲二隊。復擊大破之。追北至大坂城門。斬首二千餘級。乃整軍以備敵返襲。築壘十所。以環大坂。凱旋若江。六月。歸安土。休兵二十日。就役。七月。天主閣成。十一月。入朝。詔進正三位。拜內大臣。固辭。不許。十二月。獵尾張・三河。五年。正月。入朝。二月。紀伊賊雜賀孫一作亂。應大坂。信長招降賊將雜賀三緘・根來杉房。以爲鄉導。率諸軍南伐。自二道入。拔貝塚及中野。三月。孫一降。請攻大坂自效。許之。置戍于佐野而還。四月。能登・越中賊起。長尾氏不能制。信長聞之。招降能登人長重連等。乘機略地。七月。長尾謙信來攻重連。重連弟連龍來告急。乃遣羽柴秀吉等。助柴田勝家赴救。秀吉不告而還。信長譴不許見。八月。松永久秀叛。

可。拙修本作レ大。

鐺。拙修本作レ鑄。

應大坂。初久秀之降也。信長不許曰。彼智勇有餘。而奸佞無比。飢則伏。飽則起。彼已亂足利氏。亦欲亂我家乎。佐久間信盛曰。彼事暗主。乃能如此爾。得主公駕馭之。何能爲也。宜且撫納之。以示天下廣可也。從之。德川公嘗謁信長。見一老人侍側。問其爲誰。信長笑曰。此松永彈正者也。此夫爲人所難能者三。弑公方。一也。叛三好氏。二也。燔大佛殿。三也。久秀俯伏流汗。意不自安。久秀有茶鐺。名平蛛。信長欲得之。久秀靳不獻。於是與諸將俱戍大坂。遂叛去。據志貴城。信長遣侍史楠友閑。往問其意。久秀弗答。九月。乃令信忠將數萬騎討之。細川藤孝・惟任光秀・筒井順慶等。別攻其屬城片岡。藤孝二子。忠興・興正。猶幼。先登獲首級。諸軍從之。遂拔之。與信忠合。圍志貴。久秀潛遣使。與雜賀・大坂約期夾攻。使者誤入佐久間信盛營。信盛捕獻之。信忠喜曰。是天授也。乃令死士二百僞雜賀援兵。夜至城門。門開而入。比及二城。信忠鼓衆齊登。二百人呼譟應之。信忠遂入。燬久秀于天主閣。久秀縱火抱所愛茶鐺。自燒殺。其子久通以下皆被捕誅。信忠入朝。廷臣傳詔。敍從三位。任左近衛中將。聽昇殿。信忠稽首曰。天恩

天正六年
饋。川越本作餽。

隆渥。無物可比。雖然。臣不敢輒受。請告之信長。然後奉受。强之。不肯。使者還報。天子動容嘉賞。聽其所言。信長答書曰。久秀老猾。汝一擧斃之。汝功多矣。宜奉詔也。信忠乃入朝拜謝。觀安土而歸岐阜。是役也。筒井順慶最有功。信長賜之大和。十一月。信長入朝。進從二位。轉右大臣。信長略定畿内。獨大坂未服。毛利氏前納足利義昭。終與我絕。又援大坂。爲餽糧食。備前浮田氏屬毛利氏。東窺播磨。播磨人赤松義祐・別所長治・小寺政職・黑田宗圓。皆求援於我。宗圓子孝高爲使者。因羽柴秀吉以通信長。信長諗秀吉之敗於北陸也。於是。命西征大將。使略山陽・山陰。以償其罪。秀吉感奮。戰播磨有功。十二月。信長獵三河。命菅谷長賴留守安土。以名刀寶器授之。戒曰。秀吉來則與之。既歸而秀吉至。六年。正月。饗信忠及秀吉等十二人于茗室。親饋之。終率以登天主閣。曰。所以就此城者。卿等力也。又遣秀吉西征。四月。辭兩職。時長尾謙信已死。信長乃令北陸降將齋藤氏・神保氏。與飛驒國主姉小路氏。并力以定越中。遣惟任光秀略丹波。細川藤孝略丹後。五月。毛利輝元發大兵。至熊川。秀吉告急。信長欲自赴援。

蘖。正本作孽。

弗。川越本作不。

諸將止之曰。臣等先往。詳其地形險易。然後迎駕。乃令荒木村重赴援。又遣信忠・信雄・信孝・信包。率諸將繼之。六月。京師大水。信長入朝。秀吉來謁。具白軍狀。信長命之曰。敵兵多食足。我軍與之曠日持久。特疲力耳。不若引兵按定播磨。待時進取。秀吉乃去。傳令於諸將。信忠還兵。攻下神吉・志方諸城。令秀吉守之。以攻三木城。三木與大坂海路相通。信長乃命九鬼嘉隆。以大艦數十艘。自伊勢廻紀伊。擊破雜賀賊船。奪三十餘艘。以傳界浦。九月。信長入朝。南巡大坂。獵于阿部野。十月。召嘉隆習水戰。觀之。自是三木・大坂援路遂絕。荒木氏士人有糶於大坂者。監吏以告曰。村重與大坂有私。信長不信。曰。村重微者也。吾擢以爲攝津守護。何苦而反。毋乃訛傳耶。明智光秀嫉村重以新進聲績出己右也。力媒蘖之。信長使人詰村重。村重驚愕。欲面陳謝之。家臣皆諫。弗聽而往。光秀馳書。止之於途。曰。主公怒弗可犯。足下何自投虎口爲。村重乃還。據伊丹城叛。應毛利氏。欲與三木城夾攻秀吉。十一月。信長自將討村重。信忠以下皆從。至郡山。高槻城主高山友祥・茨木城主中川淸秀皆屬村重。信長聞友祥崇天主

天正七年

二月。摑修本作二十月。

教也。召教主伴天連者。使諭友祥。友祥乃降。信長自脫衣衣之。賜芥川郡。淸秀聞之。亦降。進至昆陽。屠兵庫。秀吉來說村重改圖。村重弗聽。十二月。圍伊丹。不克。信長恐其損兵。築長圍。令池田信輝・瀧川一益・蒲生氏鄉等守之而還。七年。二月。入朝。三月。與信忠俱如伊丹。慰勞諸將。遊箕尾。八月。大賚于三木・伊丹・天王寺屯戍將士。九月。信長復如伊丹。村重留族人守城而夜逃。如華隈尼崎。求援於毛利氏。毛利氏辭以海路梗塞。十月。一益密招城兵中西某。諭之曰。而主怯恇。棄若輩去。若爲怯主致死。曷若降織田公以樹功名哉。中西乃與卒長五人。謀啓我兵。我兵乃入。留守者請釋其孥。則往說村重。使致尼崎・華隈二城也。乃質其孥而遣之。二城拒弗納。乃散走。信長命磔其孥于尼崎西北。以示二城兵。十二月。徇荒木氏族三十餘人于京師。誅之。以攝津賜池田信輝。令與其二子之助・輝政俱攻華隈。終拔之。是歲。令羽柴秀吉分兵。助惟任光秀攻丹波。招降國主秦秀治。秀治不肯降。光秀送母爲質。秀治乃降。光秀誘執之。押送安土。磔殺之。丹波人聞之。磔光秀母。信長以丹波賜光秀。居龜山城。八年。正月。三木

送母。摑修本作遣母。

天正八年

千。拙修本作十。

林。川越本・拙修本竝作森。

城將別所長治致城自殺。信長以三木加賜於中川清秀。以女妻其子。令秀吉攻但馬。降其國主山名宗仙。浮田氏既降。與毛利氏相拒兒島。大坂連失強援。勢力日衰。天子遣廷臣三輩。就諭降之。信長亦使楠友閑往焉。於是。僧光佐聚徒屬議之。其老下間刑部等皆贊其降曰。我有宜降者四。我與織田氏交兵十一歲矣。諸國門徒竝起應我。而皆被誅殺。不知其幾千萬也。可不憫乎。一宜降也。本城諸將久在圍中。粉骨虀身。藉不能賞之。猶息其肩。二宜降也。織田氏用武所當者破。所擊者服。若別所・荒木・秦氏。莫不絕其根殲其類。我雖因地利憑人和。以至於今日。而竟亦如此矣。是非自絕滅我敎乎。三宜降也。天子之詔。不可不奉。四宜降矣。且夫天下英雄豪傑抗衡織田氏者。孰若我耐久乎。我武多矣。誰得嗤我。光佐從之。請盟。信長使青山虎菘蒞焉。賜光佐以下金。有差。四月。光佐散遣其衆。自遜于紀伊鷺林。留子光壽。以七月致城。信長使矢部善七受之。門徒陰說光壽曰。信長爲人詐而忍。我一旦失據。恐陷其計矣。光壽乃再修守備。光佐懼。使人止之。弗肯。信長聞之。怒曰。我終不得不剪滅之。遣兵陷勝曼・尼

宥。正本作背。

川越本・拙修本並信盛下有及字。

川越本・拙修本並至下有于字。

崎二壘。光壽惶恐謝罪。信長曰。我徐圖之耳。乃宥之。七月。光壽致大坂而去。八月。信長入朝。自宇治舟行。至大坂。巡視城郭。以書數佐久間信盛・其子正勝曰。汝父子戍天王寺五年。翫寇殖利。不事進取。夫羽柴秀吉以二歲定三國。惟任光秀定丹波。池田信輝二兒。以幼齡拔華隈。柴田勝家聞此數人樹功。自愧不如也。力戰以定加賀。獨汝父子無尺寸功。不養士卒。而蓄金錢。不論賞罰。而品茗飮。是胡爲也。前朝倉之敗也。汝懈不肯追。吾以麾下獨進。汝乃曰。雖爾懈矣。若信盛者。焉可復得。審如所言。則五歲之戍。何不一戰。自吾執弓箭。未嘗敗也。前使汝援家康以拒信玄。家康有所指教。汝不肯從。乃餧平手於敵。貽吾羞辱。何顏返見吾乎。吾以四方未平。含忍至今。汝終不悛。日累罪戾。吾不復能用汝。汝猶悔過引咎。欲立功自贖乎。不則宜削髮而去。吾不忍置汝於法也。使人齎書往視之。曰。吾所言非。則直爭之。信盛・正勝弗能答。削髮遁于高野。部將皆散。獨山口重政從之。初水野信元爲信盛所讒殺。至是得白。信長乃召信元弟忠重。復其邑。信長自大坂至京師。乃流林通勝・伊賀範俊。以通勝嘗謀逆。範俊嘗

謀叛也後二歲信盛死于高野。信長憐之、召正勝祿之、使仕信忠。九年、二月。信長率諸子入朝。二月。柴田勝家以謙信既死。北陸稍定。乃來謁獻金銀及土物。信長褒其成功。親饗之。初織田氏有傳家茶鐺。名姥口。勝家嘗請之。信長曰。先君臨終。授之我曰。愛護勿失。必得有大勳勞者予之。汝勉之。至是。勝家請曰。臣藉君威靈。定越前・加賀。不足稱勳勞。雖然。四方漸平。臣等莫復可以樹功也。願以是時。得前所請者。信長欣然。出而賜之。是月。信長大閱馬京師。爲埒于皇宮東。請天子蒞視焉。四方將士皆會。會、長尾景勝窺虛使越中。至于小出。而加賀賊起應之。是時。越中守將佐佐成政與降將神保某。來在安土。信長得警報。令成政等馳還拒之。柴田勝家義兒佐久間盛政在加賀尾山。擊賊殲之。走景勝。成政至則事已平。乃進、悉定越中。信長以越中賜成政。先是。前田利家定能登。以能登・加賀增賜之。於是。細川藤孝定丹後。誘殺其國主一色義定。以丹後賜之。八月。使信雄與筒井順慶定伊賀。分賜伊賀于信雄・信包。乃令秀吉大擧以伐毛利氏。十月。拔鳥取城。定因幡。織田氏既代足利氏。定近畿二十餘國。法令

誅。川越本標註云。一作課。

天正十年

巖峻。雖竊一錢者處斬、姦盜屛息。路不拾遺。行旅委橐而睡。當是時。大坂以下强賊已屬攘除。而西有毛利氏。東有長尾・武田二氏。與我接境。未服從也。德川氏數攻武田氏。克之。北條氏以關東八州求內屬。東北豪傑皆使使獻方物。武田勝頼大懼。是歲。十一月。勝頼送致勝長。勝長。信長季子。質於甲斐者也。信濃人木曾義昌。因美濃人苗木某言於信忠曰。臣不勝勝頼誅求、願爲前導。以伐甲斐。信忠告之信長。信長曰。吾欲伐甲斐。未有釁可乘。今得此報。我事成矣。雖然。吾聞。木曾地險隘。人心不可測。宜徵其質子。然後踐其地。信忠乃徵義昌任子。十二月。輸粟二萬石于吉良。誡德川氏曰。明春將有事於甲斐。十年。二月。信忠既收義昌任子。將五萬騎。入木曾。信長自將步騎七萬繼之、德川氏以三萬餘騎自駿河。北條氏以三萬騎自相摸。金森長近以三千騎自飛驒。竝進應之。信忠以瀧川一益・川尻鎭吉爲先鋒。入伊奈。伊奈人降、導鎭吉兵納之。我兵進陷松尾・飯田・小山三城。木曾義昌擊破甲斐前軍于鳥居嶺。獻捷於信忠。信忠遣兵五千助之。自進陣桔梗原。復進陣飯田。陷大島城。甲斐・信濃士民、素苦勝

賴弊政。爭先來降。信忠留兵守大島。而進陣飯島。勝賴在諏訪。走歸甲斐。信忠乃圍高遠城。城當衝要。守將仁科信盛・小山田昌辰等力戰。不可下。三月、信忠使諸將攻其前。而自攻其後。淩城而登。獲信盛・昌辰以下將領十七人。斬首二千餘級。齎信盛首。獻信長于呂久川。梟之路左。信忠進陷高島・深志二城。遂入甲斐。勝賴以下已逃匿山谷。信忠陣古府。誅其留者。遣弟勝長及森可成子長可。徇上野。下之。聞勝賴在天目山。遣瀧川一益圍之。獲勝賴及其子信勝。齎首獻信長于波合。信長大喜曰。出師三十日。乃定四國。獲其巨魁。此兒眞大奇也。以信秀所傳佩刀賜之。使人梟勝賴首于京師。曰。乃父一生以入京爲志。吾使豎子繼其志也。於是信長進陣諏訪。兵聚諏訪者。凡十餘萬。下令於甲斐・信濃・駿河・上野。撫納降附。收武田氏姦臣數十人。數其罪誅之。北條氏獻黃金粱米。以賀戰捷。德川公既定駿河。來謁于諏訪。信忠亦來會焉。信長與之謀。大論功行賞。賜駿河于德川公。甲斐于川尻鎭吉。上野于瀧川一益。信濃四郡于森長可。岩村地五萬石于長可弟蘭丸。諸降將穴山信良・眞田昌幸等。因舊邑而增

損之。四月。信長巡視二府。革武田氏弊政。使諸將罷歸。而自入駿河。觀富士岳。德川氏除道供帳。信長賜之吉良粟二萬石。曰。今無用矣。以賞將士。乃西歸。遣命瀧川一益曰。吾以汝爲關東管領。凡關八州以至陸奧・出羽。皆汝處分之。所不能獨決者。諜之家康。賜之名馬曰。宜騎焉以入封也。因命柴田勝家等與一益相爲應援。以圖長尾氏。遂經尾張。歸安土。以南海未定。命信孝與織田信澄・丹羽長秀・蜂屋賴隆等南征。曰。事平分賜四國。五月。信孝等軍于大坂。信澄。信行子也。十五日。德川公與穴山信良入謝。信長待之甚渥。令惟任光秀饗之。且日。得羽柴秀吉書。曰。秀吉圍高松城。吉川元春・小早川隆景。擁毛利輝元。將數萬騎來援。請得援軍。信長曰。彼舉其巢穴而來。是自速覆滅也。吾自往掃殄之。梟元春・隆景首。乘勢遂定九州耳。乃遣堀秀政。馳諭秀吉曰。汝與之相持。勿使歸入。於是。大徵兵。命池田信輝・細川忠興・高山友祥・中川清秀。爲前鋒先發。光秀亦與焉。初光秀以土岐氏疏屬流寓諸國。無所遇。終于信長。信長擢爲坂下城主。終賜丹波。信長待將士。不設禮節。嘲謔嫚罵以爲常。而光秀爲人文深。

來援。川越本・拙修本並作來救。

前。川越本作先。

弗。川越本作不。
釂。川越本・拙修本並作嚼。
玩。川越本・拙修本並作翫。
寐。拙修本作寢。

喜自修飾、以材藝自高。先是、稻葉通朝家臣齋藤・那須有罪、去仕光秀。通朝訴之信長。信長令光秀還致那須。賜齋藤死。光秀弗奉命。信長怒。召光秀罵詈之。嘗飲將士酒。光秀逃酒。信長親追。捉而伏之。騎其項。拔刀擬曰。不飲酒則飲此。光秀素不勝飲。強釂一觥。信長乃掖光秀。手擊其頭曰、好禿顱。可以代鼓。光秀慚憤。自揣信長欲殺己。故形於言動。信長寵森蘭丸。嘗陳珍玩。謂之曰。汝所欲得。吾輒予之。蘭丸曰。臣所欲得。不在於此。近江志賀郡。先臣可成舊領也。願得還賜、幸甚。非所敢望也。信長曰、暫竢之。三歲後當充汝願。光秀在屛後。聞之。自疑曰。志賀今屬我。我之被誅。其在三歲後乎。既而信長命光秀。以蘭丸爲女壻。欲令予之志賀也。光秀復不奉命。至是。受命饗德川氏。盛治帳具。周旋甚勤。俄而有出征之命。他人來代之。光秀大恚曰、使我徒勞。悉投其具於湖中而去。於是。遂有反心。而信長不之覺也。乃令津田益信。及蒲生賢秀等守安土。而自以近臣百餘人入京師。館于本能寺。信忠與弟勝長等。館于妙覺寺。光秀之發安土也。治行于坂下。遂入丹波。詣愛宕山祠。拈鬮再三。夜宿祠下。寢而不寐。數有

苞。正本作レ包。

沍。川越本・拙修本並作レ反。

弦。正本作レ絃。

嘆聲。從者問何故嘆。光秀叱曰。非汝輩所知也。其明。會于西坊。爲連歌。或供粽焉。光秀不脱苞而食、卒然問傍人曰。本能寺湟深幾尺。衆異之。既罷、歸龜山。六月。朔。光秀召從子光春。及其將齋藤利三等五人。謂之曰。汝等能爲我死乎。則有一事可與議。議苟不合。則速斫吾頭。五人相目不能答。光春曰。臣等業已委質矣、誼必問也、抑所議者何事。光秀曰。吾殆爲右府所殺者數矣、因具語以故。曰。今事已迫矣。吾將先發之。五人欲諫止之、視光秀意色既決不可諫、乃贊成其謀。光秀使五人納誓效質。於是、悉丹波兵。卽發、宣言奉命西援秀吉、夜度大江山。至老坂。右折則走備中道也。光秀乃左馬首而馳。士卒驚異。既涉桂川。光秀乃舉鞭東指、颺言曰。吾敵在本能寺矣、衆始知其反也。昧爽。圍本能寺、呼譟而入。弓銃交發、信長在臥内、驚起曰、反者誰。令蘭丸出視其旗幟。返報曰、惟任光秀也、信長曰。豎子敢爾、乃手弓而出、蘭丸以下宿直者、皆肉薄拒戰。信長親射斃數人。弦絶。執槍而鬭。傷右肱。乃走入。揮姬妾使逃去。縱火自殺。年四十九。蘭丸。及二弟坊丸・力丸。及金森長則・高橋寅松・矢代勝介・伴正林等百餘人。皆

力戰死之。光秀索信長首。不得。意甚懼。齋藤利三得其衣焦爛者示之。光秀猶不安。大索之。信忠聞變大愕。馳赴之。途望見本能寺烟起。村井貞勝來跪路左。報曰。右府已遇弑矣。君宜急保二條第。信忠從之。使貞勝徙皇太子于禁內。而入保之。衆或議曰。及賊未來。馳歸安土。建我旗鼓。則數萬騎立至矣。討賊復仇。一擧可辨。信忠曰。彼既謀此大事。豈有不置兵塞路者乎。與其暴尸於路。寧自裁于此。衆以爲然。日中。賊合二萬餘騎來圍。吾兵僅二三百人。連鋒奮擊。相逐于庭。猪子兵介・小澤六郎。在于逆旅。聞警赴之。主人止之。弗聽而入。梶原松千代。亦欲入援。其家僕又右衞門止之而代入。信忠褒之。賜長刀。斃數十人而死。賊患我兵力戰。乃遣弓銃手。登近衞第屋上。瞰而亂發。我兵死傷略盡。信忠乃割腹而死。毛利秀高・福富貞次・菅谷正頼・齋藤新五。皆死之。其餘從兵無一人逃者。初安藤範俊家臣松野平助。有材名。範俊敗。信長祿之。於是。宿于八幡祠。不及於難。齋藤利三素與之善。以書招之。平助佯應。欲窺隙刺光秀。光秀覺其意。不敢親近。平助乃自殺。光秀大索織田氏臣僚在京師者。殺之。獨前田玄以

帶信忠遺命。逃至岐阜。抱信忠子三法師。走入清洲。信長起尾張。常以平定四方爲志。不喜虛美。廷臣或勸爲征夷大將軍。信長曰。吾何遽襲室町故號爲。然將士有功。輒急賞之。獎用公廉。政無偏私。獄內贖金。悉以爲修橋道之資。尤憎浮屠氏。嘗有一僧。自稱得神通。惑民景附。信長召見詰問。使人捉其兩手。而親舉刀斫其頭。曰。猶得神通乎。柴田勝家獻一向賊首級。信長有喜色。楠友閑在側。諫曰。誰非天下之民乎。因極論仁暴是非。信長嘉納之。然時承室町氏媮惰之後。以刑殺立威。所得之地。必誅其主。以予家臣。性亦猜忍。追咎諸將舊惡。若光秀者。皆不自安。所以不終其志也。光秀既定京師。欲取安土。即日。馳至瀨田。遺書於城主山岡景隆。景隆斬使者。燒橋而逃。光秀發卒修橋。初安土城中聞變。未得確報。物情恟然。日暮。有數騎。馳歸自京師。士民要路問之。騎曰。兩公薨矣。城中大擾。蒲生賢秀欲鎭衆拒守。衆一夜四五驚。諸將士多逃亡者。賢秀乃令其子氏鄕具輿馬數百。迎夫人以下。逃于其邑日野。姬人或勸賢秀取天主貨寶而火之。毋以予賊也。賢秀曰。先君所盡心經營。不忍燒也。光秀其或燒之。

獎。正本作奬。

屠。川越本作圖。

于。川越本・拙修本竝作於。

修。川越本・拙
修本竝作脩。

即取焉以自殖。豈能久乎。今吾取其貨。人謂之何。使木村某守之而去。保守日野。光秀至。與其將士分取貨寶。會天使來勞之。光秀意益驕。遣使招其女壻細川忠興。忠興逐其使者。招其友人筒井順慶。順慶不至。光秀乃懼。入京師。務行惠政。以收人心。復適安土。欲攻賢秀。賢秀遣使伊賀。求援於信雄。信雄危疑不發。賢秀乃送質爲信。信雄乃出。次椎山。光秀不敢動。會伊賀盜起。信雄以故不能進。信孝初在大坂。奉信長密旨。宣言修艦於紀伊。因急襲鷲森。幾殺光佐。而變報至。信孝與信澄・長秀議。解圍而退。至大坂。信澄亦光秀壻也。叛應光秀。據其子城。信孝・長秀迫之。使自殺。欲遂誅光秀。而兵潰不可收。會羽柴秀吉以數萬騎至自備中。信孝大喜。乃會議于尼崎。諸將爭先不決。乃因信長在時之法。次以城邑前後。高山友祥爲先鋒。中川清秀次之。池田信輝・丹羽長秀又次之。信孝自將四千人在其後。秀吉爲後拒。討光秀于山崎。大破之。光秀伏誅。明智光春守安土。聞敗。燒城。走坂下。殺其妻子。自殺。齋藤利三等皆被捕誅。清秀俗字瀨兵衞。山崎之役。戰最力。信孝下馬握其手曰。吾子力戰。吾不忘德。秀吉自

輿中呼曰。瀬兵勞矣。清秀曰。筑前守氣貌已呑天下矣。信輝・秀吉等。收信長尸于本能寺。葬之。遂之清洲。謁三法師。柴田勝家・佐佐成政。與長尾景勝相持越中。拔魚津。聞變。收兵。入討光秀。至柳瀬。得捷聞。直之清洲。瀧川一益在廄橋城。是月七日。得變聞。部下將士說曰。變故之際。人心不測。且祕之。更取諸客將質。然後託事西上。一益曰。是豈可終祕乎。不若自我發之。乃急傳令。召諸客將。告變事曰。事已至此。吾在此地與否。在諸君所計。吾且還諸君質。客將皆相謂曰。管領推誠遇我輩。我輩誓不相負。乃請重納質。一益謝而遣歸之。明日。變報四至。北條氏直欲乘變擊一益。一益乃率部下八千人。軍于鉋川。諸客將以萬騎來援。擊走敵一將。氏直以全軍繼至。一益使言於客將曰。諸君惠然一戰。可以休矣。一益請代進。乃進戰。不利。其將篠岡某等二百人止死。一益歸廄橋。盡返質子。徑信濃而西。遣使告沿道城主。眞田昌幸・木曾義昌皆送質。出兵護送。達於尾張。河尻鎭吉在甲斐。甲斐亂。會、德川氏使者至。鎭吉疑其有異、殺之。鎭吉亦爲國人所殺。森長可在信濃。挾諸質子。馳入美濃。盡斬之。前田利家定能登。

天正十一年

川越本・拙修本竝先子下有而字。

丹羽長秀定若狹。皆收兵、與秀吉會議于清洲。以三法師爲信長嫡長孫。立爲嗣。更名秀信。居安土。奉以近江三十萬石。其餘分領之。以俟秀信長。信雄領尾張。信孝領美濃。勝家領長濱。長秀素有若狹。幷領志賀・高島。信輝幷領兵庫・尼崎。而秀吉領播磨・丹波・但馬・因幡。秀吉與勝家・長秀・信輝。更置吏於京師。已而專決於秀吉。秀吉國最富兵最强。矜貴自持。而秀信幼孩。信雄暗弱。皆不能制馭之。信孝有英氣。曰。我家遭遇變故。而我家奴輩。舍長立幼。以爭攫遺地。且吾與信雄同年生。特以月日少後。故有兄弟之名耳。吾有復讐之功。秀吉乃攘而沒之。其簒竊之勢已成矣。不速誅之。後不復可制。乃密與勝家・一益謀討秀吉。又使人說長秀。長秀不肯。秀吉聞之。乃結信雄。急發兵。攻信孝于岐阜。岐阜兵寡。長秀勸信孝。出其母及乳母爲質。和之。十一年。正月。信雄攻信孝黨北畠具親于篠山。陷之。遂與秀吉俱攻一益于長島。二月。勝家出軍于柳瀨。秀吉自赴當之。四月。信孝復起兵。應於勝家・一益。秀吉殺信孝母于安土城下。乳母有子幸田某。在岐阜。母遺之書曰。臣致身於君。大義也。親先子死。常道也。汝事三七

循。拙修本作揗。

君。行其大義。以常道自釋。勿以我故懷貳心也。秀吉招幸田。不至。乃磔殺乳母。秀吉遂圍岐阜。信孝戰敗。幸田兄弟力戰死之。當是時。長秀以下諸將皆屬秀吉。爲之拒勝家。勝家令佐久間盛政襲殺中川清秀。收兵速歸。盛政狃勝不歸。秀吉令堀尾吉晴。及降將稻葉通朝・氏家行廣等。備信孝。而馳擊盛政。擒之。勝家曰、盛政不用我言。果取此敗。吾自往決戰。乃撿其兵。兵已逃亡。在者僅三千。諸將皆勸退。勝家曰。吾嘗以少擊衆、獲勝者數。諸君何捉我也。家臣毛受勝介曰。往時君所將。皆濃尾驍卒、今領北兵。非素拊循。所以逃亡。摧敗之餘。何堪折衝。臣請假君背幟。僞稱君死。君逃入北莊。徐自爲計。勝家從之。秀吉縱兵追擊。遇其背幟。大驚急整隊圍之。勝介大呼曰。柴田勝家死于此。與其兄皆力戰死。勝家得間走。過府中。入見前田利家曰。子爲我出力。不知所謝。吾命窮至此。復何言也。吾飢矣。請供飯焉。利家供之。勝家食畢。借善馬而出。利家欲從之。勝家揮之曰。子與秀吉善。毋以我爲也。終歸北莊。諭其將領與敵有姻者。皆遣之。願留者九人。秀吉至。圍城數重。勝家夜宴將士于天主閣。慷慨曰。吾欲報先君之

權六。川越本・拙修本竝作勝政。川越本標註云。按勝政二字誤。當作權六。見于後卷。勝政稱三左衞門。盛政弟。冒母姓。戰死賤岳。

天正十二年

重吉。川越本・拙修本竝作重善。

恩。終爲猴面藤吉所困。豈非天哉。其妻。信長之妹也。勝家使之逃去。妻泣曰。妾自去秋出岐阜。業已委身於良人矣。今日之事。固期於心。何必逃也。於是。夫妻訣飲。徹曉。終伏刃駢死。侍臣文荷者。縱火于閣。殉之。當是時。信雄圍岐阜城。兵潰。信孝出奔内海。信雄使人迫之自殺。五月。秀吉斬佐久間盛政・柴田權六于京師。盛政素號武。每戰用鐵棓。躬自陷陣。人呼曰鬼盛政。臨刑言曰。我悔不聽修理言。苟聽修理言。則使秀吉如我也。修理。勝家也。六月。一益降秀吉。秀吉放之近江。使信雄取其地。以長秀助己。使之取柴田氏地。池田・堀・森氏。皆有分地。既而秀吉欲激信雄除之。設飛語曰。羽柴將不利北畠氏。十二年。正月。諸將賀正於安土。皆過見信雄。獨秀吉至大津而不入。信雄怒。諸將和解之。盟于三井寺。信雄將岡田重吉・津川義冬・淺井多宮・瀧川雄利。皆驍勇。秀吉先盟招四人。誘以厚利。三人聽之。獨雄利佯聽。臨盟告信雄。信雄驚。馳歸長島。遂議討秀吉。三人以爲不可。信雄曰。吾誅猴奴。易易耳。汝輩何得阻我。三人稱疾不出。三月。信雄伏甲。召三人誅之。分攻其邑。拔松島。予之雄利。求援於德川公。德川公之

既。川越本作已。

來安土也。信長令之游界府。聞信長遭害。走歸其國。於是。發兵助信雄。信雄又招池田信輝。及其二壻森長可・堀秀政。秀吉亦誘信輝。信輝子輝政質于長島。信雄還之曰。先考待卿最厚。卿必不負我。我持其質。是疑卿也。信輝既收其質。乃應秀吉。誂瀧川一益。亦應秀吉。聚兵據木造。以復舊封。織田信包・蒲生氏郷・關萬徹。皆應。一益攻嶺城。城將佐久間正勝。與部將山口重政等。固守拒之。敵聞援兵至。解圍去。正勝乃還長島。又守蟹江。信雄在清洲。與德川公合兵二萬。軍于小牧。秀吉以十二萬人軍犬山。四月。秀吉令信輝・長可襲三河。信雄與德川公邀擊。獲二將。秀吉亦令筒井定次・九鬼嘉隆攻松島。月餘。雄利與德川氏將服部正成。固守拒之。以定次講和。致城而卻。秀吉拔嶺・神戶・利井・竹鼻數城。退軍于大垣。六月。信雄使正勝城萱生。一益乃誘降蟹江留守前田種利。種利二子長種・定利。守前田・下市二壘。山口重政守大野壘。二子皆降。遂招重政曰。汝母在蟹江。不聽則殺之。重政答曰。吾知受命守城。不知其他。豈傚公等人面獸行乎。一益與嘉隆。迫以兵艦。重政投炬燒而走之。敵轉赴下市。又擊走之。信

奔。川越本・拙修本竝作ㇾ走。

饋。川越本・拙修本竝作ㇾ餽。

夫。川越本作ㇾ父。下同。

天正十三年

雄與徳川公來援。拔前田・下市。走長種。斬定利。大賞重政。遂圍盤江。七月。一益斬種利以降。信雄宥其死。乃走歸木造。城將富田知信。疑而弗納。一益乃奔京師。後死於北陸。八月。秀吉又入尾張。令萬徹・氏鄉攻伊勢諸城。佐佐成政起兵于外山。以遙應信雄。攻前田利家。不克。十一月。秀吉以八萬人入伊勢。信雄出而對陣。秀吉使人請和。信雄許之。盟于桑名城下。秀吉陽尊信雄。執臣禮如故。信雄大喜。成政未之知也。欲就徳川公協謀。以圖秀吉。乃稱疾屏居。潛與壯士百餘人。冒雪入信濃。留侍臣於外山。饋食稟啓如常。誡之曰。度我往還。不過二十日。利家必不能覺。即覺治兵。則我已歸至矣。於是。乘橇兼行。所經皆山谷。絕無人烟。得一樵家。入之。樵夫大愕。以爲鬼物。從者曰。吾輩自越中赴深志者。汝爲鄉導。吾重賞汝。樵夫乃燒柴燎之。導至下諏訪。使健步告徳川氏。徳川氏乃遣人馬迎之。十二月。至遠江。說曰。願公舉五國兵。吾亦舉越中。兩雄戮力。鼓行而西。必禽秀吉。徳川氏以其言爲倨。且知北地不便出援。乃辭之。成政遂適尾張。勸信雄再舉兵。信雄不肯。成政失意而歸。信雄敍從三位。任參議。十三年。進

與。川越本作共。

天正十五年

天正十八年

屑。川越本標註云。一作肯。

文祿元年

召。川越本標註云。一作令。

正三位。遷大納言。初丹羽長秀以秀吉爲有忠功也。枉意助之。於是。視其勢出織田氏上。則大悔恨。託疾自殺。其子長重猶弱。舊臣相與謀。欲擧兵繼長秀志。謀頗漏。八月。秀吉北攻成政。成政逆戰不克。降。秀吉乃予越中于前田利家。予越前于堀秀政。返長重以若狹。十五年。秀吉以長重犯軍法。奪若狹。擯爲松任城主。給五萬石。家臣成田某憤懣。謂其同僚曰。吾欲擧事。誰與我者。衆莫敢答。成田罵曰。皆非人也。秀吉聞之。使人殺成田。是歲。秀吉予成政以肥後。肥後盜起。秀吉怒。明年。閏五月。成政自赴大坂。謝之。秀吉使人迎之尼崎。賜死。信雄陞從二位內大臣。秀吉以其據咽喉地。欲徙之。未果。十八年。秀吉伐北條氏。信雄以兵一萬五千助之。攻韮山。及事平。秀吉封德川氏于關東八州。欲以其舊國五州致於信雄。信雄辭曰。尾張・伊勢。吾故地也。得仍居焉足矣。敢膺大封。秀吉怒其不屑受己封也。乃奪二州。予之己甥秀次。逐信雄于出羽秋田。明年。徙之伊豫。山口重政等。皆事德川氏。文祿元年。秀吉召信雄。至大坂。予其子秀雄以大野五萬石。信雄退居伏見。剃髮稱常眞。常眞之弟次丸。自信長在時。爲秀吉

文祿四年

弗。川越本作不。

慶長三年

慶長五年

所養、更名秀勝、封之丹波。爲左近衞少將。四年、秀勝卒。無嗣、國除。是歲、蒲生氏鄉卒。氏鄉幼英敏。信長識拔之。予十餘萬石。以女妻之、秀吉又任以方面、累加封至百萬石。鎭會津。已而悔之。石田三成因譖其有異心、毒之、疾作、不起、孤子秀行嗣、秀吉聞其寡婦織田氏美、欲取之。織田氏弗肯。秀吉脅之。家臣交勸其往。織田氏削髮。以死自矢。秀吉怒。慶長三年。託事、削其八十二萬石。徙之宇都宮。當是時。秀信年已長。爲中納言。秀吉徙之岐阜。食邑如故。秀吉薨。子秀賴嗣。德川公攝天下政。上杉景勝與石田三成。謀除公。五年。六月。德川公率諸將攻上杉氏。秀信佚遊奢侈。國用窮竭。以故不能從軍。七月。石田三成擧兵關西。追躡德川公。使人脅秀信曰。岐阜當東下之衝。不從則虀粉矣。秀信疑懼。欲附三成。老臣木造具康諫曰。公以右府嫡孫。顧役於豐臣氏家奴乎。秀信猶豫不決。具康等請謀之於前田玄以。玄以是時爲京師所司代。秀信乃遣之。玄以曰。速東嚮。具康馳還。未至。近習爭勸其應西軍。三成又遣黃金百枚。啗以大封。秀信終與三成盟于澤山。具康至。嘆恨。因又請誘殺三成。弗聽。終爲西軍守岐阜。尾

慶長十九年
譖。川越本・拙修本竝作讒。
吾。川越本作我。

張・美濃諸城。因是多屬西軍。既而東軍還至清洲。秀信出兵拒木曾川。具康曰。我兵寡。請堅壁待後援。弗聽。東軍濟川來戰。追北傅城。秀信分兵守外城。具康曰。寡兵不可分。請專守內城。又弗聽。城遂陷。具康力戰被創。秀信降。逃于高野。數歲卒。東將福島正則使人勞問具康。既而前田氏欲聘之。延以厚祿。辭曰。福島公已知臣矣。遂就正則。爲其國老。信雄在伏見。德川公之東征。秀雄以疾不從。三成誂信雄。信雄辭以無兵。乃約給金千枚以募兵。曰。事成復封尾張。信雄乃應之。請金。乃予銀千枚。信雄曰。尾張可知矣。召秀雄謀之。秀雄力諫而止。秀雄卒。無嗣。德川氏收其封。而不問信雄。信雄徙居京師。遂徙大坂。以與秀賴母有中表之親也。初信長妹適淺井長政。生三女。再適柴田勝家。勝家臨死。使人匿三女于一乘谷。秀吉收而育之。皆有容色。秀吉自取其長女。次女嫁京極高次。三女嫁少將秀勝。秀勝卒。更爲德川氏婦。長女專秀吉寵。生秀賴。母子共居大坂。乃迎信雄。居天滿第。十九年。秀賴傅片桐且元使關東而歸。或譖之於淺井氏。淺井氏乃延信雄。使人說之曰。且元與關東通謀。圖吾母子。吾將待其歸

萬。拙修本作方。

元和元年

伏甲誅之。遂擧兵也。內兄爲我將信雄驚曰。是大事也。且彼叛狀未見。請熟思之。淺井氏聞之弗懌。曰再請不從。當先除此翁以防漏泄。一侍女與信雄有故。捧茗而出。附其耳告之。淺井氏使再請。信雄佯諾曰。事已至此。吾豈固辭。吾之少也。亦將一萬。指揮之方。固所慣熟。今雖老矣。猶能得當方面。淺井氏大喜。使歸竢報。信雄歸第。謂其下曰。吾豈可再背德川之德哉。乃走京師。使人馳要且元。警之。且元以故得免。信長弟長益。屬秀吉。食大和二萬石。爲從四位下侍從。削髮稱有樂。以淺井氏外叔在大坂。與大野治長等並輔秀賴。以拒東軍。城中倚賴焉。及和議起。先納質於東。勸淺井氏成和。和成。長益乃赴駿府。請曰。僕在圍中。欲拔歸東軍。而和適成。以得有今日。僕無復所願。獨願於京師界府之間。得一隊地。以爲終老之計。德川公優旨慰藉。元和元年。兵再起。長益與少子尙長。出奔京師。遂赴關東。遇德川公于尾張。悉告城中虛實。其長子長正稱雲生寺。猶在大坂。請爲元帥。衆不許之。長正曰。吾信長從子而秀賴從父也。乃爲元帥。何爲不可。今如此。復何望哉。亦出奔京師。及事平。德川氏分長益地。賜芝村

川越本標註云。識者以下二十二字。一作世以爲重盛・信長勤王之澤也。

凌。川越本作淩。

于長正。柳本于尚長。無幾何。長益卒。賜信雄以大和宇多郡五萬石。卒于寬永七年。第五子信友嗣。第四子信良。及兄秀雄國除。召至關東。賜上野小幡。食二萬石。信友之後有故削二萬石。徙于丹波柏原。信良之後有故削一萬石。徙于出羽高畠。此四家竝立以至於今。位不過從四位下。然豐臣氏既亡。而織田氏之祀。永與德川氏俱存。識者以爲其流澤遠出重盛之忠孝。近由信長之功德也。

外史氏曰。往時平安故老。有及覩元龜間事。言其時宮闕墮廢。群兒入頹垣中。摶土爲戲。及織田公來。始有可觀云。夫應仁以還。海內分裂。輦轂之下。每爲兵馬馳逐之場。非右府。誰能闢除草萊。以再造王室哉。及朝廷疇其功。擬以征夷之拜。則辭不受。蓋將家與王室。俱極衰頹。名重實輕。不猶所謂大將軍告身僅直一醉者耶。右府志在混同海宇。不欲遽冒虛名。爾視之彼假關東管領以誇鄰國者。其器量固有間焉。抑朝廷名器。不足輕重天下豪傑。至於如此。挾焉以令天下。天下未必聳動也。而右府爲之扶植經紀。懃懃不置。是其高義雖謂凌

噬。川越本・拙修本並作囓。

才。川越本・拙修本並作材。

閱。拙修本作闕。

牽。拙修本作率。

齊桓而駕晉文。可也。當是之時。群雄之割據方隅者。環視傍觀而莫能出於此。其日夜所務。以代眠食者。曰戰而已矣。而其所謂戰。徒較勝負於銖兩之間。挐攫搏噬。以爭尋常。如武田・上杉・北條・毛利。概無不然。獨右府以超世之才。籠蓋而取之。其視武田上杉。猶我藩籬。使其相持不決。日費其財賦。月敝其甲兵。適足以隔閱我東面。而我得以專力經略畿甸。畿甸已定。西面以臨毛利氏。如拉枯摧朽耳。於是我疆土益大。兵力益強。以強大之我。加費敝之敵。上杉・武田固不能支我。而北條氏孤立矣。則東國皆可圖也。是其成算。夙定於胸中。奚必較區區勝敗哉。猶夫奕棊也。天下群雄。方守角依傍。而右府獨以全局制其勝。可不謂之超世之才歟。然定數百年分裂之世。如治盤根錯節。必以鋤靡斬斷見功。其間必有大矯拂人心者。而取之甚難者。持之必太急。待將帥御臣民。不能無猜忍刻厲之病。所以中道遭禍。亦勢之必至。不足深咎也。昔周世宗以英明之資。而抱混一之志。不牽衆言。厲精進取。雖半途而沒。而能開趙宋之業。右府之迹。蓋似之矣。而豐臣氏以右府將校。繼其成緒。能就其志。而至於尊王之義。

・經營四方之略。無一不師右府者。卽德川氏之興。亦不能不因此。以致王室・將家竝見今日之盛。佐成大業。藩屛四方者。概係右府所置焉。則謂之右府之業。亦何不可。譬之築室。治其蕪穢。鏟其高卑。而又爲之鳩其材木。使後人加之繩墨斧斤。成而居之。嗚呼其勞寧可沒也。

日本外史卷之十四　終

日本外史　卷之十五

德川氏前記

豐臣氏上

豐臣氏。出於尾張。尾張愛智郡有中邑。邑多銀杏樹。因或呼銀杏村。享祿・天文之際。村民有彌助者焉。彌助無子。與其妻祈之於天。妻夢日輪入其懷。已而有身。天文五年。正月。朔。生一男兒。因名曰日吉。日吉生而英異。八歲失父。其母挈日吉。轉寄食邑人。邑人患之。同閭有筑阿彌者。爲國主織田信秀之僕。以疾歸耕。邑人爲議。納爲繼父。生一男一女。乃託日吉于邑傍光明寺。欲使爲僧。日吉機敏而不曉誦梵。每聞人談武事。輒傾聽之。慨然歎曰。僧乞丐徒耳。大丈夫生於亂世。安學乞丐爲。於是。游嬉任意。與人諍。輒毆擊之。欲使僧厭苦己。僧遂議逐歸其家。日吉恐繼父怒己也。大言曰。果逐我。我且焚寺悉擊殺群僧。僧頗懼。

付。川越本・拙修本竝作附。

此。川越本作斯。寫本無此字。

乃託事辭謝。予衣物。禮而歸之。日吉時甫十歲。父素貧、不能共存。復遣爲人奴。所至皆數月而去、轉徙於尾張・美濃間。比二十歲。遂如遠江。爲士豪松下之綱家奴。之綱愛其才幹。每事使之。命名與助。之綱一日從容問曰。汝尾張人也。知織田氏所用鎧何樣耶。與助對曰。天下之鎧皆桶皮。尾張獨用胴圓。施縢右脇。屈伸如意。之綱曰。吾欲得胴圓一領。汝爲吾往買來。卽付黃金六兩遣之。與助行自計曰、吾攘此金。以資仕進。苟得意。他日償之易耳。小節不足拘也。乃入尾張。就其叔父謀焉。叔父可之。因勸仕織田氏。當是時。信秀既沒。信長嗣立、攻略四疆。與助亦以爲非信長無足與成功名者。於是。用其金。辨刀劍衣服。自造姓名。曰木下藤吉。瞯信長出。跪謁道側曰。臣父筑阿彌、嘗爲君先公奴。臣幼流寓他方。不能自達君門。願君復收臣爲奴。信長熟視、笑曰。汝面類猴。其心必捷矣。乃收爲奴。常挈鞋以從。以其筑阿彌子也。呼曰小筑。藤吉奉仕甚勤。依託近臣。給其使令。信長嘗侵晨獨出。從者未屬。而藤吉輒從之。如此者數。信長寖親近之。其明年。信長所居清洲城。壁壞可百步。命吏發卒補之。彌月不成。藤吉從過

永祿二年
永祿三年

舍之。川越本・拙修本竝作舍諸。

城下。仰視而歎曰、噫、危矣。因獨語久之。信長微聞之、呼藤吉、面詰曰。小筑、汝欲何言。藤吉畏憚左右。不敢答。信長佯怒。拉其手近之。藤吉乃曰。方今君國。東有今川・武田。西有齋藤・淺井・六角。日窺我隙。然而弛備如此、有司爲君謀不忠。信長默然。既而歸舍。召藤吉曰。使汝司工事。則汝能速竣之乎。藤吉曰。能。信長曰。吾今日命汝司工事矣。藤吉拜謝。徑詣吏。告曰。主公命僕司工事。願諭徒屬。使聽僕令。吏意憎之。曰。子好爲之。吾不復管也。藤吉乃盡會役徒。以君命賜之酒食。乃分爲十隊。以一隊充十步。身自奬勵督促之。兩日而成。信長適獵歸。見而大驚曰。猴奴乃能如此。因加俸升爲吏。是歲。永祿二年也。三年。藤吉又上言曰。清洲城乏水。徙小牧便。信長已欲之。而憚勞費未果。且惡人知乏水也。乃叱曰。猴奴何知。敢進妄言。罪當死。凡藤吉言事。輒見叱斥。衆目笑之曰。彼面皮何厚也。藤吉不以爲意。獨欲深結於信長。信長之士。前田利家・淺野長勝。與藤吉善。淺野養中邑人杉原某二女。利家悅其長女。欲娶之。女不肯。強之不已。淺野患之。藤吉權謂利家曰。子舍之。吾已通之矣。利家笑曰。吾未之知也。苟然。子盍速

永祿六年

婚媾。吾爲子媒焉。藤吉亦不甚辭。遂因柴田勝家請信長。見允。藤吉家貧。成婚之夕。夫妻布藁于簀而坐。以瓦缸敗盞相酬。妻知其非常人也。事之甚謹。後淺野養近江人安井長政者爲子。妻以其少女。於是。淺野・加藤・福島・小出諸人。皆以外戚屬藤吉。六年。夏。信長閱兵河洲。戲以藤吉爲將。藤吉部勒指麾之。如老兵法者。其九月。信長出舍洲股。近臣福富某。失其刀笄。意藤吉。藤吉急赴津島市。密懸金購之。有一卒。來鬻刀笄。藤吉驗之。乃盜刀笄者也。即執縛之。候信長還。攜卒要謁。俯伏垂泣。信長問故。藤吉具對曰。臣唯貧。故爲人所意。信長憫之。爲償其懸金。遂賜以百貫邑。信長方行儉富國。患薪炭費多。命藤吉司之。費省十七。因試之數事。皆效。然未使將兵也。藤吉私制一旗。集少年自從。信長覩之。怒其妄。命斫其旗。藤吉意色自如。信長已克今川氏。定尾張。西攻齋藤氏於美濃。踰洲股河用兵。數不得志。因會諸將。謀築壘于河西。以一將守之。諸將人人自危。莫敢當者。信長密謀之藤吉。藤吉對曰。孤壘斗入敵地。我兵必不欲往。即往。不諳其地形險易。一敗莫復往者。不若因其土人用之。臣嘗寓美濃。與其豪

俠大盜相識。宜誘爲我用。因屈指擧其姓名。得蜂須賀小六・稻田大炊・梶原隼人・青山新七以下六十餘人。其黨屬千二百人。信長曰。吾亦聞有此輩矣。誰將此者。曰。臣願當之。信長許之。九年。九月。發卒築壘。敵將守近邑者。以八千人出而阻之。我兵且戰且築。數日而成。於是授藤吉以甲士五百。戒而遣之。藤吉乃招聚所識者。壘兵凡三千。敵欲誘出而陷之。以輕卒挑戰。藤吉不肯出。卽夜。聚其衆議曰。敵必疲矣。且以我爲怯。不復設備。可襲而破也。乃令小六等。以數十人襲敵城。戒曰。莫使敵尾入我壘。大炊曰。公勿憂。開門。可容二三人以待之。臣請殿焉。藤吉曰。前言以主公意爾。不行危道。莫以爲大功。自固而棄士。吾所不爲也。公等勉之。衆踊躍而出。頃之。邑中火起。大譟。藤吉又遣兵援之。衆大獲而至。乃效首虜於信長。信長賜藤吉一旗。就壘傍賜三千貫。命名曰秀吉。美濃豪傑大澤某。據宇留間城。爲信長所患。秀吉以計降之。擕謁信長。信長大喜。其夜。密召秀吉曰。大澤叛服不可必。不若速殺之。對曰。叛則誅之耳。今而殺之。無復來者。不聽。秀吉歸舍。不佩刀。而召大澤曰。吾於子之身。有所不安。子第速亡。

乃。正本作レ卽。

永祿十一年

永祿十二年

弗。川越本作レ不。

元龜元年

朝倉。正本作二淺倉一。

元龜二年

吾爲レ子留爲レ質。大澤乃亡去。諸豪傑聞レ之。多願レ屬二秀吉一。竹中重治者。好二奇計一。從二齋藤氏一不レ見レ遇。亦來屬焉。十一年。從二信長一。擊二六角義賢一。爲二先鋒一。與二諸將一攻二箕作城一。拔レ之。信長擁二立將軍足利義昭于京師一。三好氏兵屢犯レ之。十二年。義昭謂二信長一曰。爲レ吾置二一將智勇兼備者一。以鎭二京師一。信長曰。諾。將擇以進。衆意擬二柴田勝家・丹羽長秀・佐久間信盛三人一。至レ命發。則木下藤吉也。衆大驚。秀吉既拜レ命。卽日。詣二足利氏一。而謁二義昭一。裁二決京師事一。無レ不二立辨一。三好氏不二敢犯一。衆妬レ之。譖二其自用太過一。信長斥弗レ納。尋修二大內一。以二秀吉及村井貞勝一。監レ工焉。八月。從擊二伊勢一。攻二淺香城一。先登。元龜元年。四月。從擊二朝倉義景于越前一。爲二先鋒一。拔二手筒城一。會、淺井長政發レ兵斷レ後。信長欲レ班レ軍。恐二義景尾擊一。曰。誰留拒二義景一者。衆不二敢答一。秀吉進曰。願レ命レ臣。乃以二三千人一留。當二義景一。義景不二肯出一。遂引レ兵而西。三河國主德川公。以二客將一殿二信長軍一。秀吉與レ之合レ兵。行擊二土寇一。達二于京師一。以レ功食二愛智川三萬石一。木村・生駒・前野諸人屬レ之。六月。從擊二淺井・朝倉二氏于姉川一。因守二横山一。九月。淺井長政・朝倉義景合レ兵。圍二信長于大津一。秀吉赴援。圍解而歸。二年。五月。淺井長政

元龜三年

天正元年

天正三年

瓢。正本作瓠。下同。

次郎。川越本作二郎。

發兵。攻鎌羽城。城距橫山頗遠。秀吉以輕兵馳遶山背。立旗於城後。敵驚潰走。八月。從攻淺井氏山本城。三年。七月。又攻之。朝倉義景來救。逆擊破之。天正元年。以信長命。廢將軍義昭。徙之若江。淀城爲義昭守不下。往說降之。八月。朝倉氏滅。秀吉攻拔小谷。獲淺井長政父子。秀吉拒二氏有年。使信長無北顧之憂。得以經營畿內。以功食淺井氏故地十八萬石。明年。城于長濱。居焉。三年。五月。信長援德川氏。與武田勝賴戰于長篠。秀吉爲左先鋒。有功。八月。朝倉餘黨大起越前。信長攻之。至敦賀。秀吉受命。以舟師遠出敵後。上岸毀舟。襲河野取之。遂拔龍門。諸城皆潰。是歲。除筑前守。更氏羽柴。秀吉以桐爲號。以金瓢爲馬表。每一捷。加一瓢。曰。吾必積至千矣。因稱千瓢。織田氏之出軍也。桐號瓢表。敵望而避之。前後加封。總二十二萬石。秀吉私與其謀臣議曰。主公外優裕而內猜吝。吾受大封。必不能保終。因從容白信長曰。臣敢請養次郎爲子。讓之以臣祿。信長喜。因問曰。汝祿如何。曰。君命臣西征者。西國二三州。可指日而取。取輒獻君。臣請其餘耳。信長乃以其少子秀勝。爲秀吉養子。當是時。毛利輝元割據山

天正五年　拙修本五年上有天正二字。
征西。正本・拙修本並作西征。
既。川越本作已。
宍粟。拙修本作兵粟。

陽・山陰十餘州。浮田直家以備前・美作附之。播磨人赤松義祐・別所長治・小寺政職等。恐被其兵。送款於織田氏。政職使者黑田孝高有器略。因秀吉說毛利氏可擊狀。曰。臣請爲之鄕導。秀吉具語之信長。信長終決意西征。五年。以秀吉爲征西大將。使取播磨以自封。十月。秀吉入辭。信長授以記幟。曰。功成。則擧中國予汝。汝遂進取九州。若其援師。當依請遣之。秀吉拜而對曰。君不以臣鄙陋。舍勳舊諸將。而命大任於臣。臣敢不竭力。臣辱記幟之貺。是君使臣得專制也。討叛撫服。臨機制變。以定中國。在臣度內耳。君之近臣森・矢部・福富諸人。積功累勞。未有所報。中國既定。願以封此輩。臣則直進。乘勢遂下九州。九州下。則願賜其一歲之入。蓄糧仗。造舟艦。濟海入朝鮮。君欲賞臣功。願以朝鮮爲請。臣乃用朝鮮之兵。以入於明。庶幾倚君威靈。席卷明國。合三國爲一。是臣之宿志也。信長笑曰。秀吉又復大言乎。遂許便宜從事。於是。秀吉將兵數千。入播磨。至于御著。政職中悔。走歸毛利氏。黑田孝高與其父宗圓居姬路。迎說秀吉曰。臣所居形勝之地也。君宜據爲根本。西面以圖毛利氏。秀吉從之。予孝高以宍粟郡。

天正六年
六月。川越本・拙修本並作正月。

師。川越本作軍。
堺。川越本・拙修本並作界。下同。

十一月。秀吉將兵。攻佐用。拔之。進取上月。浮田直家在岡山。發兵來援。孝高逆戰。秀吉赴援。令隊將堀尾吉晴進擊。我兵少卻。秀吉自後呼曰。今日始與中國兒戰。勿貽濃尾之羞。我兵奮前。擊走直家兵。遂拔上月而還。已而直家襲而復之。六年。六月。秀吉大城姬路。故出雲國主尼子勝久以兵來屬。取上月。以乏糧退還。城復爲直家有。二月。秀吉赴攻。盡焚殺其兵。以城予勝久。三月。別所長治叛。附毛利氏。聚族黨八千。據三木城。城甚險。而野口・志方・神吉・櫛橋等諸寨皆應之。秀吉按地圖。議曰。彼欲與我攻三木而襲其後也。吾當反其計以制勝矣。乃攻野口。下之。四月。毛利氏族將吉川元春・小早川隆景。與直家合兵七萬。攻上月。秀吉留兵備三木。而自赴援之。陣于高倉山。信長使攝津守荒木村重等來助。五月。更遣其三子信忠・信雄・信孝來援。相持不戰。秀吉以爲敵兵衆食足。未可勝。即勝。非吾功也。乃請信長班師。陣于書寫山。攻拔神吉・志方。八月。秀吉將二萬人。攻三木。直家知秀吉終不可抗。欲送款焉。會堺港藥商子小西彌九郎者。養於岡山賈人。其生父老於京師。秀吉微時。數館其家。與彌九郎親善。直

家因用充使者。赴三木。秀吉爲請信長。許之、伯耆國主南條元續亦以國降。而荒木村重爲明智光秀所讒、得罪。叛、應毛利氏。十一月。信長自將討村重。秀吉往見信長曰。臣識村重非叛者也。是必有故。臣請說降之。乃輕裝赴伊丹、而諭村重。村重謝曰。織田公豈終釋然於我哉。秀吉泣。別而出。伊丹人請殺之、村重曰。彼肯輕身來此、殺之不義。秀吉更遣黑田孝高說之。村重囚之。孝高不屈、秀吉乃歸三木。休戰、築長圍困之。長治與村重通。自間道潛出、城于淡河・丹生。五

天正七年

爲應援。七年。正月、長治出襲秀吉。秀吉與異父弟秀長、逆擊大破之。斬其銳兵八百。二月、秀吉以風雨夜襲取丹生。使秀長以五百騎攻淡河。不利。守將亦收入三木。乃命加藤光泰。築寨以絕其糧道。九月、村重棄伊丹走。保華隈。孝高乃得歸。先是。竹中重治死。孝高獨爲謀主。村重與長治。皆告急於毛利氏。毛利氏不能援、獨送糧食。襲破平田寨。長治引兵出取其糧。秀吉以麾下邀擊于大村。近士脇坂安治、斬敵驍將魚住源吾。秀吉因大破之。獲別所氏族十人。徙壘逼

天正八年

城。八年。春。遂陷之。使長治自殺。以免城兵。於是盡定播磨。乃令浮田直家以

豐國。正本作豐邦。下同。

天正九年

川越本標註云。按鵠山蓋據逸史。然陰德太平記作高山。詳其文意。似非地名。秀吉譜・太閤記並作鐙島。

天正十年

備前・美作兵。西圖毛利氏。城于兒島。小早川隆景數攻之。乃遣淺野長政。率舟師赴援。擊走之。時山名氏據但馬・因幡。屬毛利氏。於是秀吉自將。擊山名祐豐于但馬。攻竹田城。四月。擊山名豐國于因幡。因幡質子在鹿野城。秀吉攻而取之。七月。再入但馬。拔諸城。山名祐豐以出石城降。遂定但馬。再入因幡。至鳥取城。縛所取質子於城外。諭降之。豐國乃出降。而城兵未下。乃引兵還。九年。春。令海賈齎金數千兩。赴因幡。索粟。倍價糴之。因幡人大喜。爭糶。七月。秀吉乃以兵五萬。攻鳥取。使秀長攻丸山。二城食乏。我牙兵加藤清正等。日夜攻擊。清正。杉原氏戚屬也。襁褓喪父母。秀吉妻取育之。是役。甫十八。與城兵戰。多獲首級。十月。吉川元春發兵來救。未至而城陷。秀吉進入伯耆。助南條元續。軍于鵠山。與元春相持。天已寒。定因幡。使降將宮部繼潤守之。而還。秀吉以五歲定五國。十二月。赴安土。卽夜。謁信長。信長呼而前之。撫其面曰。汝面目非復昔日藤吉。明日我且以客禮饗汝矣。旦日。秀吉獻寶刀一・鞍馬百・土物五千。布旅藏地。信長自城樓視之。欣然謂左右曰。此大膽藤吉所獻者乎。饗而遣之。十年。正月。直家

病卒。秀吉爲請立其子秀家。宮部繼潤使人來告吉川元春欲攻鳥取。秀吉曰。彼攻之於北。吾將救之於南也。乃引兵入淡路。二十日定之。四月。將六萬人。入備中。攻宮地。下之。遂攻冠山。加藤清正先登。浮田氏兵繼之。冠山兵盡走高松城。秀吉隨圍城。城傍平田多池沼。而甲部河在其西。秀吉登山熟視曰。是可灌也。五月。自移營于蛙鼻岡。築亘防於城南。引河水灌之。使淺野某以舟載大礮。擊碎城樓。於是。吉川元春乃舍因幡而來救。與小早川隆景合兵陣于庚山。輝元在其後。秀吉分二萬人當之。益築防使峻。城兵結棵而坐。元春・隆景數挑戰。秀吉固壘不出。因謀曰。吾連取數國。今又舉毛利氏。則功大而身危。不若請主公於此。而爲之先鋒。乃馳使白信長曰。城陷在旦夕。而毛利大舉來援。請出大旆。分軍爲二。一以當城。一以擊援師。不出一歲。而中國可舉。信長大喜。使堀秀政先往。乃命明智光秀・筒井順慶・池田信輝・中川清秀・高山友祥等。率兵三萬五千。援秀吉。而自以百餘人入京師。館于本能寺。將親繼之也。初光秀以事怨望。至是。亦不欲往。信長迫而遣之。使歸丹波治兵而西。當是時。高松城不漸水

事。拙修本作喪。

數尺。東西之軍相去可百步。毛利氏聞東軍大擧且至。遂使使議和。秀吉未之許也。六月。有人稱京師使者。馳入軍門。秀吉覽之。所知宗仁者變報也。曰。光秀反。以丹波兵攻右府于本能寺。弑之。右府者。信長也。秀吉大驚。而未宣言。明日。率數十騎。巡視隄防。是日。城陷。城將自殺。而毛利氏猶張軍不去。明日。遣使者來治前議。秀吉卻之曰。當俟明日議之。明日。使者復至。秀吉自度事終泄。不若自我發之。乃具告使者以變故。使返報曰。事已至此。公等猶與我和乎。若欲擊我。則莫今日若也。公等徐計之。使者返報。輝元大喜。謀於諸將。諸將皆曰。我與信長和。非與秀吉和。今信長死。彼軍情沮廢。危疑崩起。我乘是時掩擊之。必獲秀吉。是天幸我家也。不可失矣。隆景曰。吾所見異於此。信長之死。非天幸我家。乃幸於秀吉也。何則應仁以來。七道分離。爭亂相踵。至今日而極矣。天將生一豪傑以掃蕩天下。吾視秀吉擧動。得非是乎。信長既死。其子弟將佐。孰出秀吉右者。夫和議發於外。而變故起於內。使常人處之。必深祕其事。速成前議。今正告不隱。任吾從違。其量豈可測哉。吾使人候視其陣。不異平日。今與之戰。我曲

言。川越本・拙修本竝作謂。

浩。正本作洪。

國。拙修本作內。

彼直讐我必深。敢死來戰。能保必獲之乎。苟不獲之。使其脫歸。冀日雲蒸龍變。我無遺類矣。以吾計之。莫如從前約。彼遭際禍難。多我不違約。必厚遇我。功名富貴將與我共。是我與彼同慶幸也。輝元然之。乃送質成和。且弔之。於是。秀吉欲還討光秀。因乞毛利氏。假弓銃各五百。旗三十。騎士一隊。輝元如其言。秀吉會諸將士。垂泣言之曰。吾受右府之恩。無物可比。汝輩所知也。今日致死復仇。非吾而誰。天下之事。在此一舉。汝輩其爲我勉之。乃引兵上途。兼程疾行。至於尼崎。當是時。光秀既弒信長。及信忠。遂進陷安土。收其寶貨而西。屯于京師。施行政令。復引兵適安土。織田氏公族將帥。皆觀望相伎。莫敢先發。秀吉既至尼崎。發哀。斷髮毀形。使人周告諸將曰。明智光秀蔑棄浩恩。敢行大逆。天地所不容。人神所共憤也。秀吉義不與光秀共戴天。悉發領國之兵。自將至此。願與諸公俱一戰。必梟豎子。以弔先君之靈。於是。諸將帥盡會尼崎。初光秀之發難也。與其衆謀曰。方今柴田勝家當上杉氏。瀧川一益當北條氏。羽柴秀吉當毛利氏。而丹羽長秀佐信孝。將赴四國。我出空虛之地。得以成大事。天下不足圖也。

至是。聞秀吉在攝津。大驚。使其從子光春守安土。而自至洞嶺。十二日。遂入淀城。秀吉遣使告光秀曰。明日會戰于山崎。光秀諾之。乃聚將士。其將齋藤利三在洞嶺。諫曰。秀吉大衆新來。其鋒甚鋭。戰必無利。不如且避之。退入坂下。以爲後圖。光秀怒曰。天下視右府。如鬼神。而吾一擊獲之。天下誰能敵我。汝速來戰。何畏藤吉也。利三不得已來會。遂以兵一萬六千。分爲六隊。夜半。冒雨渡桂川。至山崎。筒井順慶擧大和兵萬人。軍洞嶺。爲其後援。黎明。秀吉統諸將而至。高山友祥爲先鋒。中川清秀・池田信輝・丹羽長秀・織田信孝。以次相屬。兵各數千。秀吉自將騎卒二萬。居其後。已而兩軍皆陣。秀吉北瞻天王山。指謂左右曰。今日之戰。使敵先獲此。非吾利也。言未畢。賊旗幟登焉。乃命堀尾吉晴往奪之。吉晴應聲而起。單騎馳赴之。則賊兵先上者已千餘人矣。吉晴顧其兵。能屬者十五六騎。弓銃手二十人。進躡其後。賊弓銃在前。不可用。吉晴全兵。與堀秀政皆至。大呼奮擊。賊兵遂棄山走。吉晴等代陣焉。友祥爲先鋒。關山崎南門。不聽他隊先進。聞天王山軍聲起。乃開門而進。與賊左陣大戰。殺傷相當。清秀踰坂

而進、賊左陣不能進。信輝亦濟川。衝其右陣。合擊大破之。斬其三將、洞嶺軍觀望勝敗。不戰而走。秀吉追北。直逼光秀。光秀怒。欲親戰。比田某叩其馬曰、敵鋒不可犯、請且入勝龍城。光秀惶惑曰。勝龍安在。比田騎而前導。我兵充塞前後。比田等戰且走、纔得達城。上閣而望。則我兵已圍城數重。城兵稍稍散亡。所餘僅百人。即夜。光秀與十餘騎潰圍北出。馳向坂下。至于小栗棲。土兵四起。自林中以槍刺其肋。墜馬死。秀吉既破光秀軍。收信長尸于灰燼中。殯之。進陣于園城寺。聞光秀子光慶在龜山。遣兵攻之。斬光慶。又聞從子光春在安土。令堀秀政將萬人伐之。會光春于大津。擊破之。光春騎渡湖水。入坂下。手刃光秀妻孥。火城自殺、齋藤利三亦被捕伏誅。而光秀首至。秀吉乃奏捷朝廷。徇光秀首京師。梟于本能寺。去信長薨日十有三日矣。遂留幕于山崎寶寺。誅支黨。納降附。當是時。秀吉威震畿內。四方兵士。來聚山崎者。凡六七萬人。天子嘉其功。詔敍從四位下。任右近衞中將。秀吉辭。不敢拜。秀吉以信長繼嗣未定。與諸將領。會于清洲。議事。八月。瀧川一益・柴田勝家。皆引兵會焉。議。信雄冒北畠氏。信孝冒

帥。川越本・拙修本竝作率。

神戸氏。皆信長庶子。不宜立。乃以信忠遺命。立其長子秀信。爲嗣。居安土焉。而信雄攝之。柴田・丹羽・池田氏。與羽柴氏。更置吏于京師。信雄以下。各分遺地領之。秀吉自略定播磨・但馬・因幡・丹波諸州。至是。皆爲其有。則不復受分地。諸將乃使浮田秀家。及丹後國主細川藤孝附庸之。長濱爲秀吉舊領。勝家以其南出便地。奪之。勝家威望。最於諸將。號曰鬼柴田。是日。踞而飲酒。以謾言挑秀吉。長秀附秀吉耳。語曰。子欲定國家。卽斬勝家。秀吉哂而不答。諸將視耳目非是。促罷其宴。信雄歸近江。信孝歸美濃。勝家歸越前。一益歸伊勢。長秀歸若狹。秀吉與池田信輝歸攝津。勝家聞秀吉在長濱。不敢北。秀吉乃遣義子秀勝爲質。勝家拉而北行。尋而還之。初秀吉自長濱徙姬路。未移其家。本能寺之變。阿閉長之・京極高次。欲取長濱應光秀。家皆亡匿於伊吹山。長之取其貲財。從光秀。戰山崎。敗走而死。於是。秀吉族長之。降高次。而歸山崎。十月。詔敍從五位下。任左近衞少將。秀吉拜命。因請追贈信長爵位。告公族諸將。葬于大德寺。無來會者。秀吉自爲喪主。使弟秀長帥卒萬人監護之。既而三氏皆罷其吏。一決於秀

川越本標註云。守馬下一有初勝家愛姪佐久間盛政之强武。專任焉。斥疎於勝豐二十一字。素作以故二字。

天正十一年

循。拙修本作揗。

吉。秀吉又與信雄協心。以佐秀信。勝家嫉忌之。信孝亦與信雄爭權相惡。於是。信孝遂與勝家・一益。及佐佐成政・氏家行廣・稻葉通朝等。俱圖秀吉及信雄。約期並起。信雄諜之秀吉。秀吉曰。越前多雪。彼今未能出兵。請及此時伐美濃。乃與池田・丹羽・筒井・細川諸將。合五萬人。攻岐阜。行廣・通朝皆降。信孝佯請和。丹羽長秀贊之。和成。秀吉乃取其質子。歸山崎。勝家欲出援之。阻雪不能出。視冰雪輒憤怒。乃遣人說長秀。連兵西向。長秀弗肯。一益以書教勝家曰。不若佯和。及來歲雪解。出其不意。夾攻之。勝家然之。使前田利家等五輩來山崎。請釋憾協心。共輔幼主。秀吉許之。使者還報。勝家兵備稍懈。秀吉既遣使者。謂左右曰。彼欲怠我而來襲焉爾。吾且破其膽。十一月。引兵至長濱。勝家義子勝豐守焉。勝豐素與勝家有隙。秀吉招降之。復取長濱。益築城堡。備其糧仗。以拒越前衝路。十二月。還獻遺秀信及諸將。遇勝家所親在京畿者。故仇視之。十一年。正月。朔。歸姬路。撫循士民。頒賞賜酺。七日。入朝京師。遂至安土。議及雪未解取一益。及雪已解圖勝家。乃徵內外將士。會于草津。部兵七萬爲三隊。三道入伊勢。一

萬徹。正本作萬鐵。

吾。川越本標註云。一作若。

益在長島。分拒諸城。秀吉留兵備之。而進至桑名。縱火城下。退而爲營。誡其衆曰。瀧川亦老於兵者。今夜必來。一益謂其下曰。我已分兵。在者甚寡。以寡擊衆。不如夜襲。卽夜。潛兵赴秀吉陣。視其有備。乃去。閏月。秀吉攻下龜山。納之信雄。令蒲生氏鄕・關萬徹攻嶺城。嶺城未下。勝家聞之。發兵南出。二月。令佐久間盛政將步騎二萬。出陣柳瀨。前田利長爲先鋒。縱火關原。而退陣于木本。秀吉乃留氏鄕以下七將。以當一益。而自引諸軍。赴柳瀨。自與老兵十餘騎。上山。望北軍。曰。是不可以速戰勝也。乃勒兵爲十三隊。據湖山形勢。築連珠砦。而自屯長濱。三月。勝家悉引兵至柳瀨。我兵堅壁不出。丹羽長秀來而助之。四月。信孝復擧兵。應於勝家・一益。其十七日。秀吉以其軍南攻信孝。至大垣。盛政欲進擊諸壘。勝家不許。是時。柴田勝豐養疾在京師。其部下山路將監者叛。降北軍。在盛政營。衆中謂盛政曰。聞神戶君擧兵應我。而秀吉往擊之。子豈得不赴援哉。盛政曰。固也。道路阻絕。敵充塞其間。我將如之何。將監進附其耳。語曰。敵諸壘皆固。獨中川淸秀之壘。在賤岳之麓。去我尤遠。而其備不固。吾潛兵趨之。出其不

余。正本作餘。

導。川越本作道。

意。必獲志矣。秀吉在大垣。不能速來。子急擊勿失。盛政大悅。十九日。往告勝家。勝家曰。可也。吾與利家。留當諸壘。汝則往擊。擊而勝。速還。愼勿留也。盛政乃與從弟勝政。將萬人。乘夜至余吾湖東。循湖而馳。比曉。至岳麓。中川氏卒。方飲馬于湖。盛政先鋒執斬之。其一人逃返。告急。清秀與高山友祥。以數千人出戰。盛政謂其部將曰。長篠之戰。火鷲巢而捷。是可倣也。遣人燒其壘下營。我軍顧而敗。友祥走。依秀長。秀長等惶急。不敢援。清秀苦戰終死。盛政既勝。因留不還。勝家召還之。盛政答以日傾兵疲。當竢明還。勝家曰。直路不過一里。何不亟還。盛政笑曰。老怯過慮。何足爲意。使者五反。而日已暮矣。當是時。秀吉欲攻岐阜。會大雨。呂久河漲。未濟。午時報至。秀吉方食。問使者曰。盛政退未。曰未。秀吉乃投箸而起。拔刀踴躍曰。吾得大勝矣。卽命駛卒五十人先往。募沿道民曰。吾將赴賤岳。炬火導我。酒食餉我。遂令堀尾吉晴留當岐阜。而自提輕兵一萬五千。舉鞭疾馳。及藤川而昏黑。山谷皆炬。餉者爭至。兵皆立食。秀吉行且呼曰。記其里閭。吾將凱旋賞之。北軍相驚曰。濃路諸山多炬火。秀吉來矣。盛政大駭。將乘暗

糟屋。川越本作糟谷。核山。拙修本作挾山。

拔軍而北。適月已出。我軍覩之。進躡其後。盛政留銃隊殿之。引兵上岳北陣。勝政在麓。欲與之合。而金瓢馬表已在岳南。銃丸亂發。勝政兵立死者二百餘人。其陣稍亂。秀吉顧左右。縱兵乘之。加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟屋武則・片桐且元。爭先奮擊。多所斬獲。諸軍從進。遂大破之。擒勝政。進蹙盛政。又大破之。斬首五千級。遂進赴勝家。勝家在核山。聞賤岳軍大衄。危之。已而敗卒交至。勝家曰。盛政果敗我事矣。遂北走。過見前田利家于府中。請其馬。馳入北莊。秀吉追走。至府中。單騎打城門。連呼利家俗字曰。又左又左。利家乃出迎之。以其兵從。諸城望風解走。旦日。秀吉至北莊。自上其後山。令堀秀政縱火。乘烟迫城。或縛盛政及勝家義子權六。獻麾下。秀吉視之城中。勝家遂自燒殺。秀吉見城中火起。則引兵北徇加賀・能登。盡下之。信孝出走自殺。一益降。於是。秀吉還軍坂下。六月。敍從四位下。任參議。七月。大賞戰功。予北莊于丹羽長秀。大垣于池田信輝。澤山于堀秀政。金山于森長可。賜近臣七人秩各五千石。世呼曰賤岳七槍。於是。近畿粗定。山陽・山陰將士來尋去歲之盟。上杉氏・

天正十二年

川越本標註云。按諸書。秀次・長可井爲信輝壻。以秀政爲監。此曰

德川氏皆使使賀戰捷。秀吉有霸天下之志。謂京師狹迫。不便漕運。且無列邸第之地。大坂北帶大河。西控海水。地勢宏壯。可以管攝七道。十一月。遂起十餘州卒。城大坂。成而徙焉。信雄視秀吉威權日隆。心不能平。其下有三驍將。秀吉厚遇之。秀雄疑其有私。十二年。三月。殺三將。與秀吉絕。乞援於德川氏。池田信輝・森長可・堀秀政。皆爲秀吉拒信雄。信雄將瀧川雄利。初送質於秀吉。秀吉屬之脇坂安治。於是雄利詐奪還之。據其邑上野。安治怒。以從者二十人。人伊賀。夜募士兵。襲上野城。拔之。走雄利。秀吉令安治留定伊賀。信輝・長可亦拔犬山。守之。秀吉遣尾藤知定。監二人軍。曰。彼必負勇浪戰。汝往制之。遂欲親將而東。會南海盜起。乃令中村一氏等當南面。浮田秀家當西面。丹羽長秀・前田利家當北面。而自將東下。至犬山。德川氏・北畠氏。合兵陣小牧。對壘未戰。秀吉遣書請戰。德川氏不肯。四月。信輝自請間道擣三河。秀吉不答。明日復請。乃許之。信輝率二壻秀政・長可以往。曰。親戚赴軍。無他證左。秀吉乃令三好秀次助之。秀次。秀吉妹子也。臨發。誡信輝曰。宜寨于篠木・柏井。募士兵縱火東三河。勿侮敵

秀政・長可爲壻秀次爲監誤。

十月。拙修本作十一月。川越本標註云。按十月舊誤作十一月。

輕進。恃勝不備。既遣之。自徙陣樂田。信輝・長可進拔岩崎。或走告德川公。公與信雄伺其懈。襲擊于長湫。殺之。其將佐曰。秀吉敏軍機。今必來矣。乃收兵退。秀吉得敗聞。奮袂起曰。敵亂次而來。吾迎而疾擊。可以鏖之。急抽精兵二萬。自將赴長湫。聞敵退入小幡。欲隨攻之。稻葉通朝諫以日暮兵疲。乃止。下令曰。旦日攻擒二帥。三河將士爭請襲秀吉陣。德川公不肯曰。秀吉勇略不世出。其可狃而輕之乎。夜退還小牧。秀吉亦還樂田。五月。留諸將守樂田。引兵攻拔利井・嶺・神戸・松島・竹鼻諸城。六月。以竹鼻予一柳直末。令森長可弟忠政襲兄邑。封蒲生氏鄉于松島。食十二萬石。統攝傍近諸城。秀吉自陣大垣。往來伊勢・尾張間。修諸城砦。遣脇坂安治徇志摩。移大和國主筒井定次于伊賀。以大和賜弟秀長。以志摩賜九鬼嘉隆。十月。陣羽津。信雄陣桑名。其君臣内相猜疑。軍中數驚。秀吉乃謂富田知信・津田信季曰。我爲先君復仇。務鎭定國家。而諸郎聽細說。遽欲誅我。我不得已。起與之較。神戸君既不良死。我至今悼焉。爲我謝北畠君。盍捐細故與共富貴。二人往告之信雄。信雄許之。相見于矢田河原。和成。德川

末森。川越本作末盛。

天正十三年

公使使賀之。公尋送其子秀康爲質。秀吉之東也。南海盜數攻岸和田。土佐國主長曾我部元親。略定四國。發兵援之。窺大坂。中村一氏守岸和田。擊卻之。佐佐成政又以越中應北畠氏。將兵萬餘。攻末森城。城屬前田利家。城將奥村永福與其妻。奬勵士卒固守。利家赴救。大破成政。成政求援於德川公。公辭之。十一月。秀吉進從三位。任大納言。十三年。二月。進正二位。陞內大臣。於是。議用兵於南海・北陸。欲先定南海。南海賊根來・雜賀最强。聞羽柴氏且來。築三寨于千石濠。悉銳守之。三月。秀吉將兵十萬南伐。令秀次備三寨。而直指根來寺。寨兵以弓銃要之。秀次縱騎傍擊。遂合兵鬪寨。我軍發火箭。中賊硝櫃。賊悉焚死。諸寨皆解走。秀吉則以生兵六萬。急襲根來。焚之。遂攻下雜賀。引紀伊川。灌太田壘。磔其魁首五十人。進下熊野・高野。撤諸關寨。以紀伊・和泉加賜秀長。以近江賜秀次。四月。歸大坂。秀吉遂以書諭長曾我部元親。當獻伊豫・讚岐。來朝天子。否則有罰。元親弗聽。五月。秀吉令秀長・秀次以舟師六萬往討之。自阿波入。又令浮田秀家自讚岐。小早川隆景自伊豫。並攻元親。元親將兵拒羽津。秀次攻

一存。正本作存保。

趨。川越本、拙修本並作驟。川越本・拙修本並無諸字。

和氣。秀長攻一宮。皆降之。合攻木津。又降之。諸城解走。仙石秀久前受封淡路。七月。以其兵拔屋島。秀家・隆景亦陷數城。諸軍刻期萃于羽津。元親乃乞降送質。遂入朝。秀吉讓曰。來何晚也。乃奪其三國。賜阿波于蜂須賀家政。讚岐于仙石秀久・十河一存。伊豫于小早川隆景・來島康親。以伊豫正木賜加藤嘉明。以淡路洲本賜脇坂安治。南海盡定。初秀吉起微賤。無姓氏。始稱平氏。中稱藤原氏。於是。欲爲征夷大將軍。右大臣藤原晴季素與秀吉善。爲之謀曰。故事。大將軍非源氏不可。公稱藤原氏。宜爲關白。秀吉曰。關白何物。晴季曰。位亞天子。統御百官。秀吉大喜。時藤原昭實爲關白。晴季諷辭其官。以秀吉代之。朝廷重違其意。遂詔許之。秀吉具趨從。入朝謝恩。奏請授子弟將士以官爵。秀吉羞冒他姓。請賜新姓。曰豐臣。置吏五人。奉行政令。淺野長政・石田三成・增田長盛掌諸訟獄。長束正家。掌錢穀。前田玄以。掌僧祝。長政任彈正少弼。後封甲斐。玄以稱德善院。任法印。嘗爲織田氏吏。後封篠山。正家任大藏少輔。嘗爲丹羽氏吏。後封水口。三成任治部少輔。後封澤山。長盛任右衛門尉。後封郡山。秀吉戒五人

能登・加賀。川越本作加賀・能登。

曰。大事會議決之。小事不必然。勿使有留滯。勿納賄賂。勿挾恩仇。訟獄之事。無貧富貴賤。一切從事。當是時。豐臣氏歲入二百萬石。府庫稱之曰。吾不可獨自封殖。遂下令。分金五千枚。銀三萬枚於諸將士。償其軍費。設場于京師第門。一日悉散之。八月。自將騎卒十萬北伐。北畠信雄以尾張・伊勢兵。前田利家以能登・加賀兵。皆會焉。佐佐成政據富山。築三十餘壘于栗殼嶺。秀吉張疑兵當之。而航海直襲富山。成政惶駭。削髮出降。乃加賜越中于利家子利長。以丹羽氏有罪。奪越前。割其半予堀秀政。令村上・溝口二氏屬之。以鎮北陸。而越後國主上杉景勝未來。秀吉既勝成政。則與石田三成等十餘騎。踰險直入越後。謂其彊上吏曰。吾秀吉也。汝主已通使於我。我故來見。欲面議事。吏馳使告景勝。景勝大驚。遂來盟。秀吉屏左右與語。既畢西還。使金森長近略飛驒。攻其國司姉小路賴綱。滅之。因封長近焉。先是。信濃豪族眞田昌幸來送款。納子幸村爲質。昌幸自父幸隆屬武田氏。及武田氏亡。屬德川氏。領上田。攻北條氏。取沼田。德川氏與北條氏婚。令昌幸還致沼田。答曰。公之所賜上田。掌大之地耳。至沼田。

拙修本元長下無日字。

天正十四年

我以吾兵力取之。焉得予他人哉。德川公怒。率步騎七千來攻。閏月。上杉景勝以秀吉旨發兵。援昌幸。昌幸延之內城。而自居外城。植柵城內。伏兵城外。而出羸卒誘敵。敵進入城。柵內銃發。敵陣亂。二城夾擊破之。敵走出。伏起。又破之。昌幸子信幸亦迎擊北條氏兵于沼田。破之。九月。景勝自將來援。敵軍退去。小笠原貞慶亦因昌幸。送款。與景勝。竝連衡於豐臣氏。以圖關東。德川氏・北條氏。懼而約從。十一月。德川氏將石川數正來奔。其國大擾。秀吉乃謂信雄曰。吾既定中州。東西未服。近日將西伐。宜先與德川和以拒北條也。子爲我圖之。信雄乃遣二使。諭德川公。公恐其有變。不敢來。是歲。毛利氏。遣小早川隆景・吉川元長來大坂。元長。元春子也。秀吉善待之。曰。天主閣新成。當使卿等一觀。乃自從一侍女。導隆景・元長及其從者數十人。上閣。指示遠近山海。因謂元長曰。吾予乃叔以伊豫。乃翁未有所予。吾數與乃翁治兵。常恨不相見以談往日戰略。明年。吾將伐九州。煩乃翁爲先鋒。事平。予之筑前也。十四年。二月。內野第成。命名聚樂。秀吉將請天子幸焉。率諸侯朝之也。是歲。又建方廣寺。以木造大佛。高十六

丈。輿卒數萬人。四方工人畫集。四月。以其妹妻德川公。五月。上杉景勝入覲。先是。豐後國主大友義鎭亦入覲。初島津義久自薩摩起。蠶食九國。義鎭與肥前國主龍造寺政家。歲被其兵。竝乞援於秀吉。筑城主高橋鎭種・立花城主戶次宗茂。皆來送款焉。於是。秀吉將西伐。下敎列國。竝固守以竢。七月。義久遣弟義弘・家久。略二筑。降秋月氏・筑紫氏。乃攻鎭種。鎭種自殺。宗茂固守。來使告急。秀吉乃遣黑田孝高。趣毛利輝元・吉川元春・小早川隆景。九月。又遣加藤嘉明・脇坂安治。趣長曾我部元親・十河存保。皆發兵西向。遂遣書義久曰。關白問。何以不朝貢。何以坐取官爵。何以縱出兵攻略隣國。使仙石秀久齎書往。因誡秀久曰。彼若不服。且勿與戰。退以竢我。秀久至。義久投書於地曰。我族國於此十四世矣。促朝貢者。獨有近衞氏。猴冠者。敢欲屈致我乎。秀久憤恚。以大友氏兵。進擊家久。元親・存保從之。元親子信親。與存保皆敗死。元親走伊豫。秀久走豐後。嘉明・安治力戰而退。義久遂大擧入豐後。下十六城。大友義鎭既死。其子義統出戰。大敗。事聞。秀吉怒。奪秀久邑。予之尾藤知定。終議西伐。益促德川公入朝。

公。川越本標註云。一作氏。

國下於。川越本・拙修本竝作于。

至。川越本作到。

天正十五年

十月。公從萬餘人而發。秀吉母・曰大廳。往問女于岡崎。以安其國人。德川公至京師。秀吉從數人。就其館。握手款語。遂呼酒。召其諸將。談小牧之戰。盡歡而出。十一月。德川公入謁于聚樂第。畢禮而去。先是。皇太子殂。是月。天皇禪位于皇太孫。皇太孫卽位。是爲後陽成天皇。十二月。天皇詔以秀吉爲太政大臣。關白職如故。於是。秀吉奏請曰。臣徵島津義久入朝。義久不奉命。臣請自將伐之。乃命越中・尾張以西三十七國發兵。以明年二月。會大坂。命石田三成・大谷吉隆・長束正家。掌糧餉。小西隆佐・建部壽德。掌漕運。先赴小倉。具三十萬人糧。二萬匹馬芻。使可支一歲。十五年二月。兵會大坂者。十五萬人。秀吉下令。禁鹵掠。止鬪諍。又置吏于沿道驛舍。使軍行莫蹇滯。乃遣秀長。將前軍先發。三月。朔。秀吉自將諸軍。發京師。水陸俱下。義久既逐大友義統。居豐後府內。發兵四出。聞豐臣氏前軍至豐前。乃使家久守耳川。引兵而退。秀長至耳川。諸將先濟。家久夜襲南條・宮部氏營。南條敗。宮部擊卻之。明日。秀長乃濟。敵遂退保高城。既而又退。二十五日。秀吉至赤間關。留增田長盛。守關戶城。丸毛某・城戶某。守門司城。

利家。川越本・拙修本竝作利長。下同。

遁。川越本作逃。

太平。拙修本作大平。巷。正本作港。

徵國人質子。濟海入豐前。廿八日。陣于馬岳。分兵竝進。時秋月種實招島津氏兵。據岩石城。城跨豐前・筑前之間。以險固聞。秀吉遣義子秀勝攻之。令蒲生氏鄉・前田利家輔之。自以麾下登杉原山。四月。氏鄉攻其南。利家攻其北。城兵能拒。氏鄉先入其郛。秀吉自山上望見其徽號。自脫其袍。使人齎馳賜之曰。被此以登內城。氏鄉感激。身先士卒。會風大起。縱火焚城。城卽陷。秀吉乃進至小熊。種實遁走。使子種長以城降。秀吉悉收其地。進軍高良山。龍造寺政家以肥前兵來會焉。肥後諸城皆解走。薩摩驍將新納忠元・伊集院忠棟守合子城。走保八代。與島津征久合兵堅守。秀吉以兵艦攻之。忠元等夜遁。秀吉入其城。謂諸將曰。吾征誅僻遠之國。苟期於鏖盡。勢有所不可。且見吾狹也。宜從優容。速成大功。乃榜于衢路曰。名門故家脅從於敵者。及豪俠大盜聚徒結黨者。一切皆宥。聽其自新。令初下。軍門如市。秀吉進入薩摩。降島津忠良。五月。進至千代河。河接海港。前所發漕船盡湊焉。乃命水軍將加藤嘉明・脇坂安治・九鬼嘉隆。造浮梁。濟軍。建牙于太平寺。環布軍營。塡池澤。夷丘阜。方二里餘。中開門巷。縱橫

川越本標註云。丘或作兵。或作降。

麑。川越本・拙修本竝作鹿兒。

六月。川越本・拙修本竝作七月。

復。寫本作覆。

四達。遠近望風而潰。乃遣水軍三將。攻桂忠昉于平佐。脇坂安治先登。忠昉降。於是。秀長以日向故主伊東祐丘爲先鋒。以五萬人自日向入。前田利長與淺野彈正。以龍造寺政家爲先鋒。以五萬人自大隅入。家久以佐土原降。義弘退陣求麻。諸軍合而南下。臨於麑島。島津氏將佐交勸義久乞降。乃遣伊集院忠棟。因秀長謝罪。秀吉曰。吾初欲誅不庭之臣。使無遺類。吾聞島津氏源右大將之遠裔也。四百歲名族。一日滅之。吾亦不忍也。其宥之。義久大喜。削髮被僧衣。從近臣五六人。詣太平寺降。秀吉延見。以溫言慰藉之。命以義弘爲嗣。琉球國馳使修貢獻。六月。凱旋。至太宰府。盡收九州質子。大論功罪。令島津氏因故土。領薩摩・大隅・日向。削其侵地。賜肥後于佐佐成政。筑前于小早川隆景。豐前于黑田孝高・森勝信。筑後于毛利秀包・立花宗茂。而大友義統・高橋統增・伊東祐丘・龍造寺政家皆復舊領。差有增損。使政家族鍋島直茂攝國事。及政家夭。乃立直茂。耳川之事。尾藤知定敎秀長不即救。因奪其讃岐。後以賜生駒親正。丹羽長重犯軍法。因奪其若狹。賜之淺野氏。削阿蘇大宮司邑。徙彥山僧徒。大村

土。正本作士。

天正十六年

座。正本作坐。

氏私舍西蠻妖賊。奪其長崎邑。磔賊二十餘人于邑中。使鍋島氏監外國互市焉。禁天主敎。遂大修西海政令。七月。復命于京師。天皇遣使郊勞之。八月。德川公自來賀戰捷。是歲。西海諸侯皆就國。秀吉誡成政。善待土豪。勿擾國民。成政違敎。土民皆叛。踰年粗定。秀吉讓之賜死。以肥後分賜加藤清正・小西行長。清正爲主計頭。行長爲攝津守。行長。卽彌九郎也。秀吉謂二人曰。他日將有以用汝也。十六年。正月。秀吉遂奏請臨幸。時承大亂之後。典籍殘亡。乃令前田玄以與公卿雜議。用足利義滿・義敎故事。四月。十四日。天皇幸聚樂第。關白秀吉率文武百官扈從。扈從者。蓋新典也。遠近縱觀。父老或有流涕者曰。吾儕聞有行幸之儀久矣。今得親覩之。卽日。行享禮。使伶人奏五常太平諸樂。明日。秀吉早盛服出。侍于御座之右。盡召天下牧伯。使列於前。內大臣信雄・大納言家康・大納言秀長・中納言秀次・左近衞中將秀家・右近衞少將利家・侍從元親・侍從義統以下。以次而進。盟曰。奉戴皇恩。竭力王事。莫敢或怠。皇家之邑。莫敢或侵。侵者相共詰責之。戒囑子孫。莫敢或渝。關白所令。事無大小。莫敢或不奉。所違斯

家國。正本作國家。

天正十七年

盟者。六十六州神祇。大罰殛之。覆其家國。莫能享其祿。明日。宴諸牧伯。天皇賜歌。關白以下皆賡之。車駕駐五日。還宮。秀吉以京師戶稅。奉供御。以其戶租。爲上皇湯沐邑。以近江高島郡。充廷臣采田。凡金帛珍貴之獻。前後無算。九月。諭毛利氏。割其出雲・伯耆。予族吉川廣家。廣家。元春子。元長弟也。十月。大張茗燕于北野。十七年。五月。復分金銀各三十六萬五千兩于文武百官。是時。秀吉威令幾遍天下。東北豪傑。佐竹・里見・結城・那須・岩城・葦名・松前諸族。爭修使幣。秀吉禁其私鬪。使之朝覲。而獨北條氏政據關東八州。伊達政宗據陸奧・出羽。不肯降。天子幸聚樂之次月。秀吉遣富田知信・津田信季。赴相摸。諭氏政曰。吾子席五世之勢。擅有八州。而不修朝貢。不義。今天子新立。天下莫不嚮歸。吾子宜速入覲。氏政與子氏直議。不敢堅對。八月。氏政使使來請曰。眞田昌幸取我沼田。請令昌幸還之。然後入朝。諸將皆忿曰。氏政亡狀。請發兵討之。秀吉曰。未也。是年。七月。復使知信・信季就昌幸諭之。昌幸奉命。致沼田于北條氏。於是。二使遂往小田原。趣其入朝曰。不朝則有罰。氏政與其親族將領議曰。我與彼相距

遼遠。彼何輒來。且彼特能服畿內・西國耳。古稱關八州可敵天下。且箱根天險也。彼果來乎。我以八州勁兵。要諸箱根。彼何能爲。在昔平氏。發大軍來攻源氏。至富士川。聞鷩鴨起。遂恇悸而潰。關白亦如此爾。乃不禮使者。使者微聞其言。歸報秀吉。秀吉怒曰。氏政以吾比平維盛耶。吾將示之我技倆也。德川公數勸氏政入朝。不肯。是歲。伊達政宗滅葦名氏。幷會津四郡。滅二階堂氏。幷仙道七郡。佐竹・岩城諸族討之。皆敗。秀吉使使責讓政宗。命其入朝。政宗亦不肯。十月。眞田昌幸來告曰。沼田有那胡桃城。爲臣墳墓之地。北條氏將守沼田者。欲遂取之。臣曰。殿下命致沼田。未聞致那胡桃也。彼不聽。遂攻取之。敢告。秀吉大怒。遂奏請討氏政。氏政使者石卷康昌在京師。懼。陳謝之。秀吉不聽。押送康昌相摸。遺書氏政。絕之曰。秀吉起微賤。爲先右府所拔擢。攻城野戰。立功弓馬之間。既而遇變故。提兵東上。誅夷逆臣。以答右府恩眷。遂忝太政之任。佐天子以定亂逆。叛者伐。服者撫。七道豪傑。無不從我所麾。汝氏政。負險恃力。敢不修朝貢。狡詐貪婪。輕蔑天子之命。夫天地之際。一有違詔敕者。而漏於誅討。秀吉恥之。

修乃城池。勵乃甲兵。明年吾將操王節。率諸軍。以正汝氏政之罪。聿至相模。氏政不以爲意曰。彼欲以虛聲脅我。彼誠來。大擧則少食。小擧則少力。是易與耳。秀吉遂令駿河・越後以西四十五國發兵。以明年三月。會京師。其遠京師者便道直赴關東。命長束正家。運粟二十萬石至駿河。又出金一萬枚。糴於海道諸國。時海路久絶。民皆憚風濤之險。曰。海龍王爲祟。秀吉笑曰。吾受王命。討不庭。何物龍王。敢得阻我也。作檄授之。投海而進。使水軍三將與長曾我部元親護糧舶以東。十二月。德川公來請約束。氏直因公謝罪。請入朝。秀吉弗許。於是。會德川公以下將帥。開關東地圖。指畫部署。眞田昌幸素與德川公惡。時在下坐。不得窺圖。秀吉呼前之曰。吾以家康爲海道先鋒。以汝爲山道先鋒。昌幸感喜。退而謂人曰。得殿下一言。多於得百萬封矣。十八年正月。德川公送其嗣子爲質。秀吉賜之姓羽柴氏。名秀忠。遣歸之曰。卿以其與氏直有姻焉乎。吾何疑卿哉。德川公乃空海道諸城。除道供帳以待。二月。秀吉召毛利輝元守京師。弟秀長守大坂。令德川・北畠・前田・上杉諸將以其兵先發。三月朔。自戎服入朝。受節

直末。描修本作直乘。川越本標註云。按直末舊誤作直乘。

郛。川越本標註云。一作郭。

河。川越本作山。

刀于陛。拜辭。起出闕上馬。率騎卒十七萬而東。部伍整肅。鎧仗鮮明。使士民縱觀之。氏政盡召八州城主。集于小田原。遣親信將帥。拒箱根諸城。以兵數萬守其後。二十七日。秀吉至沼津。明日。自上出。候視敵城寨。卽夜。下令。令秀次以五萬攻山中。信雄以三萬攻韮山。而德川公以二萬五千直踰箱根。明日。諸將蓐食並發。秀次以中村一氏爲先鋒。令徙陣近城。城上銃丸雨注。一柳直末死之。一氏勵衆。攻破其郛。斬敵將間宮好高。進薄內城。其騎士渡部了攀堞而上。秀次乃麾軍齊登。走城將北條氏勝。信雄亦破韮山郛。德川公陷三城。至酒匂。戍兵皆潰。四月。秀吉率諸軍抵小田原。建牙于石垣山。夜令萬卒築城焉。糊紙于壁。望之如堊。城兵驚以爲神。秀吉攜德川公登城樓。下視曰。關東八州。在我目中。不日取以予卿耳。德川公拜曰。幸甚。秀吉附其耳語曰。卿亦居小田原乎。曰。然。秀吉曰。不可。我嘗觀地圖。自此迤東可二十里。有地曰江戶。襟帶河海。地潤土肥。卿宜居此。德川公曰。謹奉敎。於是。令諸軍圍城數重。水軍將士。又破沿海諸城而來會焉。上杉景勝・前田利家。將北陸兵三萬。以眞田昌幸爲先鋒。入上

野。大導寺政繁以松枝降。導入武藏下七城。攻鉢形。秀吉遣淺野彈正少弼・木村常陸介助之。二將別徇武藏。攻岩築。淺野氏嗣子幸長。稱左京大夫。甫十五。先登。遂拔之。二將遂徇上野。至二總・安房。一月下六十餘城。而小田原固守不下。有流言曰。德川・織田通款城中。衆情疑懼。秀吉即從近臣數人。與信雄俱飲于德川氏營。明日。與德川公俱飲于織田氏營。衆疑即釋。遂令諸軍休戰。築長圍。更番游息。徵海道妓樂。置酒高會。秀吉與德川公以下。造歌詞被之。讙呼連晝夜。以示據久之意。城兵大困。德川公初度大衆久屯。穀價必騰。私命其吏。多蓄糧餉。已而長束正家掌漕轉。米粟狼戾。乃服秀吉善用人也。當是時。豐臣氏軍。環城而陣者。幾三十萬。山陵林麓。莫非兵者。關以東望風降附。相馬・秋田・南部・津輕諸族。或執謁軍門。或使使納幣。項背相望。伊達政宗使人覘形勢。還報則大懼。乃肯修使幣。就德川氏乞降。德川公戒使者曰。不可不亟來謁。六月。政宗與百餘騎入下野。路塞不得通。還由越後・信濃。間行至箱根。請謁秀吉。秀吉問謁者曰。政宗狀貌如何。曰。齡可二十歲。眇而被髮。奇偉甚。秀吉不許輒見。使

人詰責之曰。吾受王命。經略天下。雖遐方絕域之人。莫不來歸。汝屈强東北。擁兵數萬。未嘗發一介之使。葦名義廣歸心王室。而汝擅攻之。是何故。政宗答曰。義廣納臣之叛將。結佐竹・岩城。以圖滅臣。臣欲討二本松氏以復父仇。又爲義廣所拒。故臣日夜攻擊。終得克之。臣在敵中。不知四方事。及殿下東伐。然後知天下有所歸也。是以來謁。秀吉又使言之曰。汝之所陳。果無僞也。則盡獻所侵會津・仙道之地耳。不則亟歸汝國。徐修守備。吾討滅北條氏。然後見汝於戎馬之間也。政宗曰。臣生死唯殿下之命。況邑土乎、致其侵地。乃入見、秀吉便服而坐、慰勞之。問曰。卿在陸奧幾戰。曰。三十餘戰、秀吉曰。是村巷小鬭耳。意未知部勒大兵之法也。因起。引政宗而出。下臨廣壑。秀吉在前。指示曰。彼畿內軍也。彼坂以西軍也。彼海道軍也。政宗唯唯。莫敢仰視。既罷。遣歸。諸將交勸留之不遣。曰。遣之。是猶縱虎於野已。秀吉哂曰。吾不用寸兵。而取五十四郡。非汝輩所知也。政宗退謂人曰。關白天威也。遂去之國。石田三成・大谷吉隆・長束正家等。於是。攻降館林。遂攻忍城。城將成田長康在小田原。其兵留守不下。秀吉令彈正

中。川越本・拙修本竝作內。

何如。川越本作如何。

少弼父子助攻。終降之。景勝・利家亦降鉢形以下諸城。幷降附五萬人。來謁。秀吉不甚賞。二人頗嗛之。秀吉謂近臣曰。二人非無功。然降輙受之。不足稱勤勞。或降或屠。恩威竝行。然後可賞耳。二人聞之復發。屠八王子城。還效首級。秀吉乃賞之。於是。八州諸城大半皆破。而其將士在小田原城內。我兵虜其父母妻子視之。將士逃降相踵。我侍史山中某。與成田長康善。秀吉命陰以書招之。長康乃送款。秀吉使德川公以其降書遺氏直。曰。子之將帥。皆有貳心。事已危迫。子盍早自爲計。氏直與氏政議。召長康。不至。乃環柵長康營。置兵監護。自是城中人人相疑。秀吉遣黑田孝高・羽柴勝雅入城。見氏政父子。說以禍福。氏政不肯。七月。氏直遂出。就德川氏營。乞降。德川氏避嫌不敢通。使之因勝雅。勝雅以告。秀吉許之。使氏政致城而出。因謂諸將曰。吾此行。欲誅不庭之臣。今而釋之。是失信天下也。吾欲誅氏政。而釋其餘。諸將曰。善。乃遣使者四輩。就氏政舍。賜死。秀吉覽其首。罵曰。汝輕蔑王命。敢笑侮我。今何如也。使石田三成齎之京師。梟于一條戾橋。氏規聞小田原既下。亦以韮山降。乃縱氏直・氏規等三十人于

高野。給俸百口。尋給萬石。乃擧北條氏故地八國。以賜德川氏。別以十萬石。爲其湯沐邑。擧德川氏故地五國。以賜信雄。信雄不肯受。秀吉怒曰。卿才不可爲民上。吾特以先右府之子也。欲厚封之。卿乃薄之乎。乃放之秋田。賜駿河于中村一氏。甲斐于加藤光泰。尾張及北伊勢五郡于秀次。三河于池田輝政・田中吉政。遠江于堀尾吉晴・山内一豐・有馬豐氏。信濃于森忠政・石川數正・仙石秀久。論關東諸豪功罪。黜陟之。執大導寺政繁。譙之曰。汝以北條氏舊將。而首降於我。我之功臣。乃北條氏之叛臣。叛臣。天下罪人。吾不能私釋焉。乃誅之于櫻田。遂引兵東下。至宇都宮。伊達政宗・南部信直等皆迎謁焉。八月。至白河。命淺野彈正少弼・大谷吉隆・石田三成。檢陸奧・出羽地。問諸謀臣曰。吾欲擇一將鎭撫東北。卿等皆陳所見。衆所對各異。秀吉曰。皆非也。非蒲生氏鄕無可者。賜氏鄕以會津・仙道十一郡。以葛西・大崎賜木村秀俊。政宗因故土賜米澤・長井。謂氏鄕曰。爲我守東門。因指授方略。戒德川・前田・上杉氏爲之應援。終整諸軍。凱旋至岡崎。吉川廣家受命守焉。則迎饗之。明日。以鞍馬三百餘匹送秀吉。秀吉

光泰。正本作光康。

匹。正本作疋。

天正十九年

擇黑馬騎焉。屏其徒御。獨吉川氏卒栗棲武格者爲之圉。行入尾張。秀吉指路傍聚落。謂武格曰。此名中邑。吾所生長也。吾欲一往觀。汝能從我乎。武格曰。謹諾。於是。秀吉騎入中邑。留武格于閭首而入。周馳街巷。出。遂召邑中父老。笑曰。吾藤吉也。父老皆惶恐俯伏。秀吉曰。比吾少時。邑閭甚整。戶口亦似滋息也。因賜之酒及物。與語舊故而去。九月。復命於京師。於是。東國盡定。而伊達政宗心懷觖望。陰誘士兵作亂。少弼豫度陸奧必亂。造十餘砦。留兵守之而西。大谷吉隆猶留。撿田甚急。十月。土兵四起。葛西・大崎亦苦秀俊之政。叛攻其城。秀俊走。保佐沼。告急於氏鄉。氏鄉卽發。會雪。橇行至井繩。察政宗有異心。遣人促使會師。政宗不得已。出次吉岡。氏鄉身往其陣。面議事。政宗大驚。氏鄉破賊二壘。乘勝而進。政宗稱疾不從。氏鄉行布陣以備之。進破名生壘。政宗追躡。覘其陣堅。不敢擊。氏鄉乃迎秀俊。置之名生。政宗數謝無他。氏鄉使立功自效。乃攻下宮崎城。賊黨悉潰。少弼時至駿河。聞亂卽還。十二月。氏鄉欲歸。而慮政宗有變。少弼乃令政宗納質。十九年。正月。氏鄉取其質還會津。秀吉得警報。遣秀次赴討。

從軍。川越本作從事。

使石田三成促德川公會師。聞氏鄉已定亂。則皆途還。閏月。氏鄉來京師上狀。秀吉奪木村氏封。予之氏鄉。氏鄉又獻政宗通賊手書。秀吉怒。馳使召政宗。政宗卽發。二月。至。曰。吾自分誅戮也。作貼金磔柱。使人揭前行。及詰問。陳謝甚辯。乃示其手書。政宗佯愕曰。其書甚肖。特華押有微異者。驗之果然。秀吉卽釋之。先是。南部氏族九戶政實叛。氏鄉與少弼攻而下之。是歲。五月。復叛。據福岡城。葛西・莊內應之。秀吉命秀次赴討。曰。必勦之。使莫復萌。命德川公助之。曰。命卿掌東北三道軍務。其便宜從軍。乃奏。以政宗爲四位侍從。與氏鄉俱爲先鋒。令少弼及堀尾吉晴監其軍。因密諭氏鄉曰。吾知政宗反計矣。顧彼膽略可愛。故釋不問。以安反側。事平。則奪其地予之汝耳。八月。秀次入陸奥。陣三迫。氏鄉・政宗攻下五城。上杉氏奉命會師。擊平莊內。諸將遂圍福岡。誘降政實以下魁首三十人。效之三迫。秀次斬以徇。焚殺其餘黨。以秀吉命。徙政宗于葛西・大崎。以其地加賜氏鄉。幷食百萬石。遂巡視國內。按據士民。課東邊諸侯築城大崎。以置政宗。然後歸。是歲。四月。大納言秀長卒。以秀次弟秀俊爲嗣。襲其封。十一月。

秀吉大獵于三河。初秀吉定關西。召松下之綱。賜邑于丹後。及定關東。更賜遠江・伊勢之一萬石。曰。償擴金也。

日本外史卷之十五終

日本外史　卷之十六

徳川氏前記

豐臣氏中

若。川越本標註云。一作君。下同。籍。正本・川越本並作藉。

秀吉之在關東也。遊於鎌倉。觀源頼朝塑像。進撫其背曰。若我友也。徒手取天下。唯有吾與若而已。然若承籍名族。不如吾起入奴也。吾欲遂略地至明。若以爲何如。初秀吉爲織田氏徇山陽。請攻韓及明。後常思成其志。明主嘗與足利氏修好。而韓兩屬其間。常奉朝貢於我。及足利氏衰。我西南海盜數侵明境。明韓皆與我絶。而海賈互市不絶。我對馬島。距韓甚邇。島主宗氏。世置吏于韓釜山浦。至豐臣氏時。明民或有來投者。秀吉聞明主朱翊鈞失政、武備不具。益思窺之。其定畿内。以橘康廣嘗諳韓事。擢爲使者。徵朝貢于韓。不得要領而還。秀吉疑其與韓有私。族誅之。及定西海。宗義智送款焉。秀吉命掌使事。將伐關東。

藩。川越本作蕃。

遂遣義智與僧玄蘇往韓。會琉球入貢。秀吉囑其國。求通於明。曰。明不聽我言。我當發兵伐之。琉球王尙寧告之明。明不聽。義智至韓。韓王李昖乃使其大臣黃允吉・金誠一。隨而入貢。秀吉既至自伐關東。見韓使者。乃命史作書以答之曰。日本豐臣秀吉。謹答朝鮮國王足下。吾邦諸道久屬分離。廢亂綱紀。阻格帝命。秀吉爲之憤激。被堅執銳。西討東伐。以數年之間。而定六十餘國。秀吉鄙人也。然當其在胎。母夢日入懷。占者曰。日光所臨莫不透徹。壯歲必耀武八表。是故戰必勝。攻必取。今海內既治。民富財足。帝京之盛。前古無比。夫人之居世。自古不滿百歲。安能鬱鬱久在此乎。吾欲假道貴國。超越山海。直入于明。使其四百州盡化我俗。以施王政於億萬斯年。是秀吉宿志也。凡海外諸藩後至者。皆在所不釋。貴國先修使幣。帝甚嘉之。秀吉入明之日。其率士卒會軍營。以爲我前導。因遣平調信・玄蘇與偕。韓王得書疑懼。誠一以爲虛喝。王使之私襲二人。探其情實。調信曰。我主欲通明。明不答禮。故欲伐之耳。貴國盍居間和解之。誠一依違。玄蘇厲聲言曰。今日之議。不得首鼠兩端。不欲講和。乃欲戰耳。因辭訣

川越本標註云。一無因字。

城。川越本・拙修本並作築。

那古耶。川越本拙修本並作那古邪。下同。

還。韓始懼。稍修邊備。明亦聞之。申嚴海防。天正十九年。夏。秀吉復遣義智責盻。在釜山。旬餘。不得報。怒而還。秀吉志益決。秀吉初無子。先是。姬人淺井氏生男鶴松。秀吉絕愛之。是歲。鶴松夭。乃悲哀累月。心忽忽不樂。因屢出遊以自遣。一日。登清水寺閣。西望。謂從者曰。大丈夫當用武萬里之外。何自悒鬱爲。乃還。大會諸將帥。謂之曰。吾藉諸君之力。平定海內。亦可以休矣。特諸醜夷有阻王化者。吾深羞之。吾欲以邦治委內府。而自將入朝鮮。以其兵爲先鋒。以入於明。彼拒我命。則擊滅之。遂自遼東直襲北京。奄有其國。多割土壤。以予諸君。使諸功臣皆厭其望。不亦快乎。我籌之已熟。事非甚難。諸君其能爲我出力耶。諸將帥愕眙相視。莫敢對者。浮田秀家進曰。殿下舉此無前之事。誰不努力者。衆莫敢異議。內府。謂秀次也。秀次時爲內大臣。敍正二位。於是。秀吉奏請。遣諸將之國。各具兵食。命九鬼嘉隆。造大艦數千艘。大廳聞秀吉赴海外。憂恐至廢寢食。乃議使秀家代往。而自出陣肥前。以爲策應。乃大城于那古耶。建爲行營。十二月。分朝鮮地圖于諸將。部署其所嚮。分西南四道兵。爲八軍。以嚮韓之八道。主計

文祿元年

頭加藤清正。將第一軍。攝津守小西行長。將第二軍。鍋島直茂・相良賴定。屬清正。宗義智・松浦鎮信・有馬義純。屬行長。兩軍迭爲先鋒。大友義統・黑田長政。將第三軍。島津義弘・毛利高政・伊東祐丘。將第四軍。福島正則・長曾我部元親。將第五軍。蜂須賀家政・生駒親正。將第六軍。小早川隆景・毛利秀包・立花宗茂。將第七軍。毛利輝元。將第八軍。別置水軍。以九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤嘉明・來島康親。將之。秀俊將藤堂高虎。率大和軍屬焉。水陸九軍。總十五萬人。織田秀信・中川秀政・石田三成・增田長盛・大谷吉隆・糟屋武則・片桐且元。與淺野左京大夫。將游軍六萬。以備應援。而秀吉自以秀俊。及德川公・前田利家・蒲生氏鄕・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等。畿內・東北三道將士十萬自衞。以明年三月盡會行營。秀吉乃上書乞骸骨。讓關白職于秀次。自稱太閤。於是。宗義智戒釜山吏卒。稍稍引還。韓人來窺其府。閴然無人。乃驚怪。修守備益急。文祿元年。正月。秀吉召加藤清正。賜之記幟曰。吾伐毛利氏時。先右府所賜也。召小西行長。賜之名馬曰。以驅突髯虜。清正素鄙行長。不相善。

於是。謂之曰。予用賜幟爲號。子號何用。行長對曰。我起藥商。當用藥囊耳。自是益相隙也。三月。二十八日。秀吉發京師。或曰。盍以善漢文者從。秀吉笑曰。吾此行。將使彼用我文耳。四月。至安藝。謁嚴島祠。投百錢。祝曰。吾而勝明。面者居多。乃投。皆面矣。衆大喜。蓋豫糊合兩錢也。遂至那古耶。諸軍會者。凡五十萬人。糧食稱之。於是。先遣水陸九軍。發大礟。鬨而揚帆。蔽海而渡。至于風本。阻風十日。風稍定。行長與義智素諳海路。潛拔其軍。不告衆先發。至豐崎。平明。諸將乃覺之。清正怒而發。風益甚。不得進。行長促舵師發豐崎。冒濤而進。十三日。達于釜山。釜山守將鄭撥出獵。聞警馳還。行長隨攻其城。立拔之。生擒鄭撥。遂分兵徇慶尚道。陷西生・多大二浦。斬多大守將尹興信。問其捕虜以要害城寨。曰。東北有東萊。距此三十里。行長謂其衆曰。諸君戰疲。當休。然使東萊爲備。吾力不能下。而諸將隨至。則奪功於人矣。宜急擊取之。衆奮從之。乃進攻東萊。半日拔之。斬首千餘級。守將宋象賢不屈。死。行長收葬之。進陷梁山。至鵲院。韓兵據險拒之。我兵攀山。廻出其背。韓兵顧而潰。韓巡察使金睟聞東萊急。自晉州來援。不

功。摑修本作切。

及。乃諭諸郡縣避我兵。清正後行長三日。至釜山。聞行長已前進。切齒曰。悔爲豎子所先。吾豈踐其跡乎。乃轉取別路。縱火慶州。走其守將。斬首千五百級。轉鬪而進。所向皆靡。秀家聞行長深入。謂其將佐曰。彼自我家起身。吾爭功而不援。使彼死於敵。不獨負太閤寄任之意也。乃踰次發舟。八軍相繼上陸。韓諸道競報警於國都。韓王命李鎰申砬爲大將。使金誠一拒慶尙右道。金功拒慶尙左道。行長方圍金海。黑田長政援至。刈禾塡塹以陷之。引兵出左右道之間。絕其應援。進陷尙州。鎰已至州城北。視城中火起。遣騎來候。行長望視之曰。我且奪其膽。潛使銃卒伏橋下。銃之墮馬。鎰軍動。行長以大衆出張二奇兵劫之。鎰駭走。歸申砬於忠州。砬收忠清道兵八千。欲守鳥嶺。聞尙州陷。不敢進。行長進至鳥嶺。視其險扼。使輕卒先行。周踐山谷。無敵。笑曰。朝鮮兵不要我于此。吾知其莫能爲也。乃踰嶺至丹月驛。分兵爲二。擊申砬于彈琴臺下。斬之。遂取忠州。而與清正會。諸將皆至。乃相見于城外。議進取其京畿。清正曰。攝津守多功矣。至攻國都。先鋒當見屬僕也。行長曰。吾與子竝受約束。子何擅更之。對曰。子之

不告而發。亦出約束乎。二人忿。欲鬪。諸將解之曰。大敵在前。何私鬪爲。鍋島直茂曰。太閤令二公迭爲先鋒。今盍分道往。聞道有二。自南者遠。自東者近。近者有漢江之險。唯二公所擇。清正曰。吾寧取險而近者矣。議乃定。行長間使人先馳之漢江。奪其南岸舟。清正遂發。遇韓使李應舜于途。捕之。初行長獲蔚山守將李彥誠。送書韓王招降之。使彥誠齎去。彥誠不敢白。及取尙州。乃獲應舜。予之太閤券書。使還責彥誠之報。且召李德馨。德馨嘗接我使人者也。韓王乃遣德馨乞降。途聞忠州陷。使應舜先往詗之。乃爲清正所捕。遂誅之也。德馨走去。韓已聞李鎰敗大怖。而猶屬望申砬。晦日。有騎馳入都門。民迎問。對曰。申總兵死矣。關白軍將來矣。都城大擾。王與世子夜駕。奔平壤。告急於明。遣王子徵兵諸道。留都元帥金命元。副元帥申恪。以舟師扼漢江。命元聞清正至。措疑兵遁。清正抵江。無舟可渡。立望北岸久之。笑曰。敵舟有梟。是無兵也。令善泅者往取其舟。以渡。五月四日。至都城南大門。有兵守門。視其旗幟。皆小西氏號也。蓋行長渡驪川。走敵將元豪。先一日自東大門入。王已遁矣。清正益怒。居十餘日。諸

楊州。拙修本作揚州。

返。川越本・拙修本竝作還。

龍仁。拙修本作龍江。是。川越本作此。

將皆至。秀家自居國都。使諸將各圖進取。金命元退守臨津。呼申恪。恪不從。獨屯楊州。命元怒恪違節度。請王誅之。會咸鏡南道兵使李渾來援恪。與浮田氏兵戰。大破之。而命元遂斬恪。王聞捷。遽赦之。不及。乃遣申硈及韓應寅。助命元守津北。我兩先鋒與長政合兵軍津南。相持十餘日。伏精兵而佯卻。硈欲追之。其裨將劉克良止之。不聽而渡。應寅亦濟。遇伏驚走。三將返擊。大破之。擒硈及克良。其兵死傷若溺者萬餘人。命元・應寅走歸平壤。我軍乃濟。至安城驛。乃探鬮定軍所向。行長得平安道。清正得咸鏡道。而長政得黃海道。皆引兵北入。而韓將李洸・尹國馨・金睟。以全羅・忠清・慶尙三道兵五萬騎。入援王城。至龍仁。見我兵壘山上。挑戰。我兵不出。已而瞰其懈出擊。大破之。當是時。自國都至釜山數十城。烽火相應。皆爲我兵所守。以與行營通聲息。秀吉乃遣石田三成・增田長盛・大谷吉隆。引游軍六萬赴援。伊達政宗亦請而往。三奉行入韓。宣令褒功。行長既徇平安。至大同江。遺書於平壤。復召李德馨。使平調信・玄蘇相見江中。招降之。議不諧。二人曰。若主第導我伐明。不則併夷滅之。乃還。六月。韓王留左

元鈞。正本作元均。

相尹斗壽・元帥金命元守平壤。而自走寧邊。欲入咸鏡。聞清正在焉。乃走義州。命右相柳成龍發兵益於命元。固守以竢明援兵。命元與行長等。夾江相持。伺我兵稍怠。夜遣精兵濟襲之。行長叱衆起。令義智絶其後。擊破韓兵。韓兵亂淺而走。行長曰。是可亂也。擧軍從之。斗壽・命元棄守走。行長入城。得韓積粟十餘萬石。使使還趣國都諸將。欲與倶西。曰。太閤志主伐明。今已取平壤。平壤以西莫復支者。自鴨緑江至明北京。不過百餘里。吾之全軍卷甲趨之。使彼不及備。可以得志矣。秀家與三奉行答曰。全羅・江原二道未定。我未可深入。我水軍將循全羅而北會于黃海。然後水陸竝進。是萬全之策也。乃分諸將守國都・平壤間諸城。大友義統守鳳山。黒田長政守白川。小早川隆景守開城。以備應援。行長日望水軍至。水軍諸將既發釜山。與慶尙右水使元鈞戰。破之。遂出全羅。藤堂高虎聞韓候船在唐島。以飛船赴之。奪其百餘艘。上島焚虜營。全羅水軍節度使李舜臣。以艨艟鬭艦數千艘在巨濟洋。諸將集飮于毛利勝信營。議進戰。脇坂安治曰。先以大船巨炮挑戰。然後奪其船。加藤嘉明曰。是劫而去之。非挑

而奪之。挑而奪之者。宜以小船示弱。及敵近決戰。不則太閤謂水軍將士不欲戰也。安治曰。此事至重。一敗則陸軍亦不能振。子胡猖狂乃爾。嘉明怒。高虎居間和解。勝信曰。諸公受命於千里海外。忠告不隱。務利公事。太閤多良臣如此。何憂於戰。因侑酒。酒數行。九鬼嘉隆曰。今夜三鼓解纜。旦日進戰。船之大小隨宜耳。嘉明潛起如廁。招其軍吏。先期而進。比曉。以走舸三艘直衝敵列艦。奪其二十艘。諸將繼進。舜臣卻。我軍追之。入洋中。舜臣乃縱左右翼。以巨熕擊碎我船。來島康親死之。安治苦戰。亡其衆而退。舜臣因屯閑山。以拒我水軍。我水軍是以不能合陸軍。陸軍亦未遂能進也。明主翊鈞聞秀吉兵入韓則恐。會其國西北邊有亂。大將李如松率諸軍屯寧夏。國都兵寡。明主召其大臣。問韓當援否。大臣曰。和窺明久矣。而明之屏在韓。韓先被和兵。而明不援。韓且折而入和。和・韓爲一。分利於明。合兵戮力。以出遼東。則勢如建瓴水于屋矣。顧韓民畏和兵。而心不服焉。我遣一將。助韓王以招聚之。因其力以捍禦東北。是名以明援韓。而其實以韓援明也。明何患於和哉。明主從之。遣其將祖承訓・史儒算。將援

川越本・拙修本並書下無於字。

糜。川越本作糜。

此。川越本・拙修本並作是。

韓。而下書於琉球・暹羅。爲倭和之勢。以糜秀吉。使其勿航海西北嚮而大廳有疾。謂秀吉已航海也。憂疑疾篤。秀吉聞之。馳歸覲之。至則已薨。當是時。承訓・儒算既入韓。二將皆遼東勇將。數與胡戰。有功。甚輕和人。和人前掠明疆者皆海盜。甲仗敝惡。明人狃見之。以爲豐臣氏兵亦如此也。於是。至嘉山。問韓人曰。平壤和兵無乃走乎。曰。否。承訓舉酒祝曰。天使我成大功也。進舍順安。營未定。行長偵知。夜遣輕卒劫其營。營亂。乃笑曰。此虜亦易與耳。明日。自往。與明軍戰于安定。旗幟偉麗。人馬皆被鬼頭獅面。明馬駭。行長麾兵蹂之。儒算下馬鬬。中丸斃。時霖雨。我兵迫明人於淖。擊鏖之。承訓挺身而走。行長因投書韓王曰。王盍導我伐明。明當我兵。猶羊群放一虎。王所知也。今遼東既無明隻騎。而我舟師十餘萬。又來自西海。未知大駕將復何逃也。當是時。韓猛將精兵多在咸鏡道。而爲清正所阻。不能來援韓王。清正之入咸鏡道也。虜安城民三人使先導。二人辭。清正立斬之。其一人懼。從之。至永興。聞二王子遁咸鏡北道。則大喜。留直茂・賴定守永興。而自以其輕兵日行數百里。至鐵嶺。踰而北。北道兵使韓克誠。

毋。川越本作莫。

北隣。揖修本作此隣。川越本標註云。北一作比。

以六鎭彍騎逆清正于海汀倉。北兵善射。憑平地馳突。我軍多步兵。不利卻。會日暮。收入倉內。韓兵沓至圍之。矢下如雨。清正排倉粟爲城。發銃拒之。應手斃千餘人。韓兵退。上鐵嶺而陣。欲待旦戰。清正夜分兵數千。環敵而伏。旦大霧。克誠將下嶺。而我兵四面齊起。大破之。追北至鏡城。又大破之。遂擒克誠。縱火焚城。聞二王子在會寧府。驅而赴之。府。韓極北也。行五十日至焉。府使鞠景仁懼。拘二王子。使人來乞降。且曰。府內食盡。王子不食三日。願賜之食。清正許之。欲自入城。將校皆諫曰。吾窺府內。虜人塡咽。我以寡兵入。恐有變也。清正曰。虜何能爲。吾已失王。不可又失王子。卽有變。吾與王子決死。毋憾也。乃與十餘騎入城。令饋者數十人。人執一器。隨而入。韓人危疑。張弓環清正。清正叱之。辯其無他。韓人不能解。清正自開襟當箭。取印於懷。印紙示之。韓人捨弓拜。於是清正拘王子及其大臣黃赫金・貴榮等。使人護送之鏡城。乃問景仁曰。朝鮮北境盡於此乎。對曰。然。曰。北隣何國。曰。兀良哈。清正乃以八千人進。入其境。攻一城拔之。既夜。下令曰。勿釋甲。夜半。胡騎大至。我兵力戰。走之。清正曰。虜不意我至。我

退。拙修本作還。

一捷足以報太閤矣。乃收其貨寶引兵南還。胡騎躡之。清正自殿而退。終至海濱。西南望得高山。韓捕虜曰。富士岳也。清正下馬。免冑而拜。謂其騎曰。自吾辭太閤。謂日西北行矣。今望岳於西南。覺吾行遼遠也。乃歸。二十日至鏡城。八月。韓王自義州遣李蕡・李元翼。來攻平壤者再。行長輒擊卻之。王亦聞清正已略定咸鏡。恐其與行長并力來襲也。益告急於明。明既得承訓敗聞。舉朝震驚。大司馬石星說明主曰。秀吉兵乘勝而遠鬭。未可與爭鋒。且寧夏未平。復有事於遼東。不若且議和以紓禍也。因薦沈惟敬。惟敬越人。慧黠有辯口。遊燕與燕倡家僕鄭四善。鄭四嘗在對馬。惟敬以故略知和事。徼幸富貴。其友袁茂嘗納女於星。星因知惟敬。召而與語。大悅。遂薦之。於是明主以惟敬爲遊擊將軍。多賚金帛。往說我軍。投書平壤。卑辭乞和。行長與宗義智見惟敬於城北。曰。明卽欲和。宜使使濟海。因徵數條。惟敬盡順其意。曰。歸取報。五十日復來。乃請界平壤西北十里。和韓俱不相踰。行長許而遣歸。告狀於秀家。於是。我兵在平壤者。不復西下。而韓兵竊發諸道。沈岱者。募兵朔寧。計復都城。秀家攻而斬之。鄭湛・邊

戎。川越本標註云。作伐。任。川越本・拙修本並作委。收。川越本標註云。一作伏。二十二。川越本標註云。一作三十二。管。拙修本作營。寨。拙修本作漢。宗應昌。拙修本作宋應昌。

應井。亦聚兵全州。筑紫廣門自慶尙入全羅。與湛・應井戰熊嶺。斬之。而全州未下。九月。應井弟應星敗石田三成于馬灘。元豪敗蜂須賀家政于龜尾浦。遂攻毛利高政于春川。高政伏兵擒豪。遂定江原。鍋島直茂・相良賴定在永興。取德原・咸興等七城。移守咸興。清正自鏡城以諸俘虜還。至蓮下。會韓兵二萬扼梁養山。清正擊破之、走其將梅天。直茂・賴定迎之。相見于橋中。賀其無恙。時已十月矣。清正返軍安邊。乃修金山・橋州諸城。相與協心。按據韓人。當是時。諸將稟事秀吉。使舸交於海中。是月。秀吉復奏請赴行營。天子詔曰。征戎之事。一任將佐。勿輕濟海。秀吉拜謝而行。十一月。直茂以三千人。與韓將李希得兵三萬戰于咸興北。走之。斬首千餘級。清正盡收咸鏡二十二管。遂議自北道長驅入遼東。未果。行長亦以惟敬過期不至。乃怒。下令軍中曰。皆修行具。吾將飲馬鴨綠江也。義州聞之荷擔而立。韓王飛書告明。明群臣議曰。惟敬說不可信。秀吉殊無退兵意。曩者以暑濕取敗。今天寒馬肥。宜出兵也。翊鈞猶豫未決。懸令。有能獻奇計復東藩者。購萬金。封伯爵。襄之子孫。莫敢應者。衆推少司馬宗應昌曰。

應昌去歲上書言秀吉必來。是知兵矣。翊鈞遂拜應昌爲都御史。經略東北。劉黃裳・袁黃爲贊畫。而選將兵者。李如松稱材武天下無雙。會其平寧夏而旋。則拜爲大將。率六將軍。東拒秀吉。期以十一月發北京。獨大司馬猶持前議。復遣惟敬至平壤。伺秀吉意。惟敬留平壤城中。與行長密定議以去。而如松等大兵已至遼東。惟敬要之於路曰。媾將成矣。和人約棄平壤界大同江而退。如松方銳意立功。弗懌惟敬言。欲執而斬之。應昌等說曰。宜舍此因忘敵而襲之。如松從之。率渡鴨綠。會、降虜爲我耳目者。爲韓相所摘發。皆就拘縛。以故不知明軍至。二年。正月。朔。如松至肅寧。使裨將查大受先往順安。大受使人來告曰。沈遊擊至。和議成矣。行長喜亦使一將以二十人會順安。大受誘與飲酒。伏起。二十人搏戰。亡其三人。走還平壤。行長大驚。丹波人內藤如安爲行長侍史。冒小西氏。稱飛驒守。於是。行長命如安往詰如松。如松慰解遣還。而六日。以諸軍薄平壤。行長與宗義智等。急修守備。馳使告急於鳳山。使者未歸。如松已以先鋒攻含毬門。我兵擊却之。其夜。出襲李如柏營。不利。其明。明軍大至。如松攻小西門。

煙。川越本作烟。

如柏攻大西門。吳惟忠・駱尙志攻北門。祖承訓攻南門。承訓欲立奇功償前敗。知我易韓人也。令其兵皆衒韓裝。故踏跙不進。行長以爲韓人也、專拒西北。白率銃手。擊卻如松。如松益用大礮火箭。毒煙蔽城。我兵殊死戰。承訓則脫韓裝。露明甲。鼓譟而登。行長驚、急分兵拒之。而西北卽陷。行長退保牡丹臺。明軍四面攀堞。我兵力拒、刀槍攢垂、堞如蝟毛。明兵死傷數千人。不能拔。退營城外。行長將木戶某說曰、鳳山兵不來援。吾以孤城抗大敵。終不可支。盍退合於諸將以圖再擧。行長然之。卽夜、潛率衆出城。至江。江氷方合。蹈而渡。至鳳山。大友義統已遁之國都。黑田長政在白川。聞敗。引兵迎行長。代殿而退。明軍不敢追躡。終至國都。韓人聞之。所在竝起。以應明軍。宗應昌等謀曰。秀吉將帥皆萃王城。而加藤淸正者。懸孤軍在咸鏡。聲聞不通。可虛喝而取也。使辯士馮仲纓以譯說淸正曰。和無故攻韓。韓告急於明。明皇帝大怒。遣大兵救韓。復平壤。復開城。遂復國都。擒浮田・小西。盡逐其兵。令琉球・暹羅諸國壓和境。而足下猶守韓。欲爲誰乎。皇帝聞足下高義。使使臣爲報告之。爲足下計。莫若速返韓王子。收軍

歸和。否則明軍四十萬。驅韓兵而東。直萃於安邊。足下雖欲服明。得乎。清正使侍史答之曰。清正知奉國命而戰。不知聽明命而和也。歸語明主。我有敝甲凋兵。近苦無事。貴國來伐。已聞命矣。而咸鏡之途險阨。騎不可比行。卒不得成列。兵之來。日一二萬而已。吾迎而擊之。日殺一萬。四十日殲之。日殺二萬。二十日殲之。既殲而西指。度遼破燕。奉大駕於海東。清正可以復命矣。仲纓走歸。當是時。明軍乘勝。鼓行而東。國都將吏令大同以東諸城撤守來會。諸城皆聽命。獨小早川隆景。與毛利秀包・立花宗茂。弗肯曰。吾輩竭力報國。固在今日。且明軍勝而驕。易與耳。三奉行促之甚急。乃退。未至王城三十里而軍。明軍進入開城。遂渡臨津。查大受爲其先鋒。値宗茂于礪石嶺。宗茂擊破之。斬百餘人。如松乃盡引其軍而至。隆景以三萬人。邀擊于碧蹄館。大戰良久。宗茂與秀包横擊之。如松初以火器襲平壤。一戰得志。謂和兵不足畏。乃輕進不具銃礮。以短兵接戰。我軍兵鋭刃利。縱横揮擊。人馬皆倒。莫敢當其鋒。我兵呼聲動天。遂大破明軍。斬首一萬。殆獲如松。追北至臨津。擠明兵于江。江水爲之不流。如松痛哭

食。拙修本作倉。

賂。川越本・拙修本並作賄。

徹夜。聚敗軍。退入坡州。韓將相請其再進。不肯。時天雨氷釋。如松託言。坡州多
泥。不可爲營、遂退入東坡。二月。猶雨。明馬多病斃。我兵縱火而進。如松退入開
城。遣人還明。稱疾請代。而韓人寇我者不襄。我兵在幸州者。亦爲韓將權慄所
敗。秀家等。乃使使召清正。清正平橘中寇。斬首虜三千餘級、與直茂・賴定。皆之
都城。明兵相驚曰、清正自北道繞襲平壤。扼我歸路。如松大懼、留諸將守臨津。
而自退入平壤。秀吉使毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等七將赴援。三月。攻晉
州。晉州城險、韓王之奔、置其重器。以精兵二萬守之。七將皆大敗。退入都城。都
城傍有龍山倉。我兵仰食焉、查大受・李如梅潛兵火倉。而金命元等軍臨津南、
絕我糧道。已而我與明軍皆大疫。三奉行以糧竭欲退守釜山、光泰曰、糧竭寧
食砂。國都不可棄也、清正亦爭之曰。吾以孤軍破強胡數萬。明韓兵何足爲意。
何不奪其糧。三成曰、公宜往奪。不得取助於人。清正曰、諾。即夜以手兵襲明軍。
奪糧而還。時如松使沈惟敬計和。惟敬赴北京。報曰、秀吉欲封日本國王、如足
利氏故事耳。因與石星定議。來韓都城。厚賂行長曰。太閤歸韓俘。則割慶尙・全

秀吉下乃。川越本作卽。

逼。川越本・拙修本並作迫。

分。拙修本作亦。

主。川越本・拙修本並作王。下同。

羅・忠淸三道封爲王。行長等素不學。不諳封王故事。以爲王於明之謂也。欲許之。已而知其非。惟敬巧彌縫之。淸正不可其議。行長與三奉行皆懷歸。乃報秀吉曰。明人欲尊殿下爲皇帝。秀吉乃許和。惟敬請解都城兵。諸將乃焚城。更殿而東。如松乃肯進。韓相柳成龍請尾擊之。乃遣李如柏等萬餘人覘我陣整。不敢逼。諸將至慶尙。起蔚山・東萊・金海・巨濟等十八屯。以竢秀吉令。明主以孫鑛代宋應昌。遣劉綎・吳惟忠等。分守星州・居昌諸城。而使謝用梓・沈一貫・沈惟敬來謁秀吉于行營。秀吉饗明使者。還之。遣小西如安與偕。放還淸正所俘二王子大臣以下。以大友義統不救行長。罰奪其封。遂令在韓諸將。屠晉州以償前敗。六月。諸將合兵圍晉州。城兵益熾。我軍塡濠。蒙竹楯仰攻。城上矢石如注。淸正造龜甲車。牛革包之。載以死士。穿城足。樓櫓崩折。淸正與黑田長政先登。諸將繼之。斬城將徐禮元・金千鎰等。鏖六萬餘人。夷城池而還。醃禮元首。獻之行營。仍屯故地。韓主大驚。訴之明。李如松令沈惟敬來見行長曰。公等許和。未十日。有晉州之事。何也。行長怒曰。汝請和。而明兵入韓者益衆。何也。惟敬語塞。去

孝高。拙修本作高孝。

乃。正本作廼。

踞。川越本・拙修本並作跪。

至北京。請石星召還如松以下。獨留劉綎・吳惟忠等萬人。明主疑如安。不敢納。舍之遼東。秀吉亦以如安久不還。意惟敬欺己。日夜謀議軍事。黑田孝高私語同僚曰。吾聞外征諸將有威無恩。所過無不殘滅。夷民逃匿。野毋青草。是得其地。果何益哉。且聞兩先鋒爭功相鬩。法令抵牾。衆莫知所從。而浮田宰相不能制之。夫浮田非統御之才也。能堪此任者。非德川則前田・若孝高而已。秀吉側聽而首肯之。已而大召諸將。會議行軍。曰。朝鮮之事。如今日狀。則何時定乎。乃公不可不自往也。吾留家康使守吾邦。無復所顧慮焉。今擧國內兵。雖少猶可得三十萬。因顧諸將曰。利家汝將五萬。曰。氏鄉汝亦將五萬。吾親將十五萬爲中軍。左右汝二人。掃蕩朝鮮。直入于明。疾具兵艦。吾意決矣。德川公怫然謂利家・氏鄉曰。二公擢于群中。榮孰大焉。僕少小事弓馬。今雖老矣。猶足以當一面。何居守爲。二公幸推輓之。彈正少弼進曰。德川公勿復言。臣視殿下近狀。彼爲野狐所憑爾。秀吉怫然。扣刀而踞曰。吾爲狐憑。有說乎。無說則死。少弼對曰。有說也。饒使無說。臣固不辭死。且如臣等頭。雖刎千百。何足惜乎。顧天下纔定。瘡

弗。川越本作不。

痍未愈。人人希休息無爲。而殿下乃興無故之軍。以殘暴異域。使我父子兄弟暴骸骨於海外。哭泣之聲四聞。加之漕轉賦役之相因。所在盡爲荒野。當是之時。殿下一擧趾。則六十州之寇賊。雷動風起。雖有德川公。安得鎭定之乎。是其所以願外征爾。臣恐殿下舟師未達釜山。而根本之地。已爲他人所據。是勢之最易覩者。使殿下有平昔之心。豈有不察於此。不察於此。故謂之狐憑耳。鄙語曰。鼈欲啖人。反啖於人。殿下之謂也。秀吉益怒曰。狐乎。鼈乎。吾且舍諸。以臣罵君。不可舍也。將拔刀斬之。利家・氏鄕進擁之曰。臣等在此。苟欲行誅戮。不必勞親手。因斜睨少弼曰。可去矣。少弼乃徐起還舍。待罪數日。有上變事者。肥後賊梅北擧兵。取佐敷城。秀吉大驚。急召少弼。謝曰。吾甚慚於汝也。命汝兒幸長爲大將。往定肥後。因命德川公。以其將本多忠勝助之。未發。肥後人斬梅北來獻。乃止。命少弼按定其國。滅韓戍卒。八月。淺井氏復生男。秀吉大喜。使前田利家攝軍事。而自歸大坂。命所生男幼字棄丸。長曰秀頼。韓王乃敢歸都城。清正喪其俘。心甚弗懌。又知和議必不成。十一月。進攻安康。大破之。虜尤畏清正。呼曰

文祿三年

撤。正本・川越本並作徹。

數日。拙修本作數月。

文祿四年

鬼上官。時韓野多戸。虎豹群至。我將士留戍者。因大獵之。殺獲無數。檻其尤大者以獻焉。三年。正月。大城于伏見。興卒二十五萬人。將帥萬石以上皆助役。三月。秀吉與秀次及德川・前田諸將。遊吉野。四月。浴有馬溫泉。是年。加藤光泰卒。初石田三成以韓都之議不合。隙光泰甚深。遂毒之也。嗣子貞泰猶幼。徙邑美濃。以甲斐賜淺野氏。當是時。韓戍未撤。韓主數促明定和。十月。明主召如安。石星命沿道供帳。十二月。至燕。星就拜於其館。待以王公禮。厚賂之。使曲成其媾。如安諾之。居數日。明主延見之。如安騎而入。至闕。衛士呵下之。如安昂然不下。入見明主。明主令諸將相大臣會于左闕。悉問秀吉意。如安所答。勉副星意。明乃定封王議。遣正使李宗誠・副使楊方亨。以沈惟敬為導。惟敬觖望。且難星曰。前約七事。今止封冊。事必不成。星弗聽。如安與三使皆發。四年。二月。蒲生氏鄉卒。幼子秀行嗣。尋徙之下野。以會津封上杉景勝。三月。伏見城成。秀吉徙居。以竢明使者。置淺井氏于淀。世呼淀君。淀君既生秀頼。而秀次無避位之意。以故秀吉城伏見。欲以讓秀次。而予秀頼以大坂也。秀次為人頑放。其留守聚樂。淫

虐曰甚。漁色不論貴賤。右大臣晴季女新寡。而有孤女。秀次幷取母子嬖之。上皇崩而數日。出獵手刃近臣。夜出戕行人。自樽上銃人爲戲。至欲剖孕婦。世呼曰殺生關白。以殺生與攝政音相近也。田中吉政爲其傅。數諫之。乃託事遠吉政。秀吉之再赴行營也。外議以爲秀次當代行。而殊無行意。黑田孝高說之曰。殿下之威靈可謂甚矣。文武之轂相擊于門。天下士民視其喜怒以爲慶弔。殿下知其故乎。秀次曰。吾爲關白故耳。曰。否。殿下不以太閤爲叔父。則能得爲關白乎。太閤年已六十。猶枕甲而眠。而殿下恬然獨縱嗜慾。何不自省乎。夫位極乎人臣。而望不厭於天下。怨之所萃。姦之所乘也。臣竊爲殿下危之。爲殿下計者。宜赴那古耶代統軍事。太閤已倦兵事。必喜許之。立功自固。誰得動之。願殿下熟思之。蒲生氏鄉亦勸其濟海。自請爲其先鋒。秀次皆弗納。有流言。關白謀反。秀吉弗問。及秀賴生。秀次自疑被廢。益不聊賴。石田三成・增田長盛與之有郤。希秀吉旨。數惡之。初常陸介木村重茲有寵於秀吉。而爲三成奪其寵。乃結於秀次。秀次自知取怨多也。每出遊輒具鎧伏。又厚贈諸侯伯而與之誓。三成・

川越本・拙修本竝姬上有及字。

芹川。拙修本作芥川。

長盛因證其有反形。七月。秀吉使三成・長盛。及前田玄以就詰問之。秀次大駭。獻誓書七通。秀吉意稍解。翌夜。重茲乘婦人車入聚樂。盡漏而出。三成偵知以告。比曉。秀次促德川氏嗣子。使朝參。欲因劫爲質。嗣子走歸伏見。毛利氏亦獻秀次所擬誓書。秀吉大怒。使使召秀次。秀次愛將吉田修理。請假萬人夜襲伏見。弗聽。遂赴謁。不許見。命放之高野。附僧興山監守焉。興山。南征時首納款者也。於是。奏請削秀次在身官爵。廢爲庶人。三成勸遂殺之。潛諷興山。促其自裁。秀吉遂遣福島正則就賜死。然冀興山乞其命也。正則還獻秀次首。秀吉愕然曰。山僧無情。三成請而梟之京師。併其妻兒姬妾三十餘人。皆斬之。瘞之一坎。名曰畜生塚。毀聚樂。徙諸邸第于伏見。召賞吉政。分秀次地。予福島正則以淸洲。誅夷木村重茲以下。重茲有遺腹子。曰重成。其母嘗乳養秀賴。以故秀吉召祿重成。任長門守。以隸於秀賴。三成既誅重茲。遂誣伊達・最上氏黨秀次。有匿名書曰。伊達・最上欲分豐臣而霸。秀吉笑曰。是怨家所爲耳。乃皆釋之。淺野左京大夫書記芹川藤助者。亡命歸三成。三成使僞作舊主通聚樂書。上之。因發

沒。川越本作投。

慶長元年

兵閭淺野氏。前田利家爲白其寃。秀吉捕鞫藤助。得實。乃還於淺野氏。磔之。先
是。大納言秀俊卒。秀俊亦昏暴。嘗觀蜻蝘瀑。命左右自投于湫。左右與之俱沒。
無嗣國除。以郡山予增田長盛。以藤堂高虎爲今治城主。當是時。明三使已入
韓境。疑懼不敢進。請我撤兵。諸將不得已。約戍于釜山。未肯濟海歸。李宗誠貴
族子。日夜思歸。惟敬因欲逐而代之。慶長元年。正月。小西行長歸告和成。惟敬
私從之。以地圖兵書蟒服。及燕代良馬三百匹。獻秀吉而去。怵宗誠曰。和敗矣。
秀吉兵將來執我輩。四月。宗誠遁去。楊方亨問計於惟敬。惟敬曰。有兩語。汝愼
記之。擧我大明。奉承日本而已。明主遂以方亨爲正使。惟敬副之。多出金帛資
惟敬。齎封册促往。因令韓發使。韓以和議未固。依違不從。獨使黃愼・朴弘長從
之。刻日發。五月。秀吉以秀頼朝見。詔敍秀頼從三位。任右近衞中將。六月。明・韓
使者濟海。我諸將乃留兵釜山而凱旋。行長嫉清正。清正惡於三成。而行長善
之。與俱譖之。清正至伏見。秀吉不許見。乃就增田長盛請申救。長盛曰。子宜謝
於治部。清正曰。吾死不能。乃歸第竢命。七月。京畿大風霾。地大震。伏見城壞。壓

死數百人。清正曰。吾寧犯罪。不可坐視。乃從卒二百。入省秀吉。秀吉與夫人席地而坐。目清正。呼其幼字曰。阿虎。若來何速。清正因前訴冤。畫地而語。陳其軍勞。秀吉顧謂夫人曰。彼肥哲丈夫。今至自朝鮮。何黧且悴也。乃命守其門。三成以下踵至。不得入。有傳命者。特納三成。清正大聲令其卒曰。使短小佞豎入。旦日。秀吉召見清正。推問海外戰狀。泣下曰。阿虎襁褓育於我。乃類我也。遂愛遇如故。時震仍不止。德川公夜率兵入衞。秀吉曰。不知皇宮何如。吾當與卿省焉。乃遽出。從者未屬。德川公以其兵擁之而行。道路昏黑。德川公從者。有掣其袖者。公不敢顧。秀吉談笑而行。脫刀授之曰。吾老矣。覺刀之重矣。以煩卿也。公不敢執。乃授井伊直政。已而秀吉從兵踵至。遂入朝。還。過方廣寺前。見大佛倒裂。罵曰。我爲若不憚勞費。將使若濟度衆生。今已身且不能保。何負我也。因呼弓射之。還。乃修伏見城。更作牙城于木幡山。八月。明・韓使者共至界浦。二十九日。造伏見。秀吉使柳川調信責韓使者曰。吾收兵。而汝國未獻三道。今又不使王子來謝再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。二使因行長謝。弗聽。九月。二

日。使毛利氏列兵仗。延明使者入城。諸將帥皆坐。頃之秀吉開幄而出。侍衞呼叱。二使慴伏。莫敢仰視。捧金印冕服。膝行而進。行長助之畢禮。三日。饗使者。旣罷。秀吉戴冕。被緋衣。使德川公以下七人各被其章服。召僧承兌讀冊書。行長私囑之曰。冊文與惟敬所說。或有齟齬者。子且諱之。承兌不敢聽。乃入。讀冊于秀吉之傍。至曰封爾爲日本國王。秀吉變色。立脫冕服抛之地。取冊書扯裂之。罵曰。吾掌握日本。欲王則王。何待髯虜之封哉。且吾而爲王。如天朝何。乃召行長。誚讓曰。汝敢欺罔我。以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者皆誅殺之。行長股栗。諉罪於三奉行。出書牘數通爲證。承兌亦救解之。事纔得止。而秀吉怒未釋。卽夜。命加藤清正・大谷吉隆・石田三成・增田長盛。逐明・韓使者。賜資糧遣歸。使謂之曰。若亟去。告而君。我將再遣兵屠而國也。遂下令西南四道。發兵十四萬人。以明年二月。悉會故行臺。柳川調信私囑黃愼曰。太閤意已決矣。速獻三道。使王子來謝。不則貴國復被禍矣。惟敬猶疑其虛喝。已而見沿道治兵狀。則大驚奔去。秀吉初養夫人姪秀秋爲子。出嗣小早川氏。於是。以爲大將。以浮田秀

慶長二年

家・毛利秀元副之。以黑田孝高充其參謀。以清正・行長充其先鋒。使行長立功自償。諸將皆前役所遣。已諳海外事宜。以故秀吉不復親出。自居伏見。遙授方略。置吏于那古耶。以司諸道糧運。二年。正月。明使者至明。佯報秀吉受封拜舞。和議全成。因私賫海外珍寶。號爲日本幣物。已而吳越將吏上變。告曰。秀吉先鋒加藤清正已擁二百艘。上機張矣。明主因詰方亨。得實。乃詣惟敬。惟敬慚謝。因曰。秀吉責韓而已矣。不久將去。明不信。乃戒東北守備。復大募兵。遣邢玠・楊鎬・麻貴・楊元・劉綎・董一元等。率而東下。諸將皆以智勇聞其國者也。我兩先鋒已濟海。并其戍兵。行長軍釜山。清正自機張攻梁山。陷之。軍于西生浦。韓人懲創前役。逃竄駭散。清正榜諭之曰。太閤命吏。責問朝鮮王。屯兵東邊。以竢其報。汝民各安其居。勿敢擾亂。二月。孝高奉秀秋至釜山。因山海之勢。列壘寨。聯舟艦。以爲根據之地。出令禁暴掠。而諸道望風潰奔。時韓地荒廢。無糧可因。我海運亦未達。諸將以故不輒進。聲言朝鮮獻三道如約。乃止不復深入。韓王使李元翼守鳥嶺。而自奔海州。告急於明。明君臣歸罪於石星。奪其官。且議曰。割地

韓犯。拙修本作犯韓。
登萊。拙修本作東萊。
媾。川越本・拙修本竝作講。
邢。正本作刑。下同。

之議。出於惟敬之託言。忠清。韓之府藏。全羅・慶尙。韓之門戶。皆其重地。而明之海路亦恃爲藩屛焉。今予之秀吉。秀吉以爲取韓犯明之資。彼之舟帆晨發夕至。天津・登萊。非明之有也。因宥惟敬。使往更爲說以强和兵。清正・行長使人返告韓不獻地。秀吉報曰。當俟韓穀熟。進入全羅以攻諸城。必攻破而後已。且戒行長等曰。前使我不得志者。全羅水軍也。此行必報之。惟敬在南原。明主數責其效。韓人亦指目之曰。是左右賣國反覆之臣也。罔明欺和。而使韓受其弊。惟敬大窘。又聞石星已下獄則恐。因度以爲行長主和。清正主戰。不若先退清正。因遺書清正曰。三國媾和。將歸無爲。而足下勸太閤敗之。明主命邢總督。以精銳七十萬。將首擊足下。足下速請和弭兵。不然。禍不旋踵。清正答書曰。吾每病朝鮮兵羸弱不足與較。今當明軍作一快戰。吾所願已。惟敬得書。不知所爲。乃因行長。欲投歸於我。行長許之。邢玠在遼東。聞之曰。彼入日本。必爲我腹心害者。乃令楊元伏三千人。要其走路。捕之。尋被誅。而我與明遂絕。明軍已至全羅。楊元在南原。陳愚衷在全州。韓將元鈞在閑山・唐島。水陸相援。以守全羅。七月。

令。川越本標註云一作命。

敗。川越本作破。

趍。拙修本作趨。

慄。拙修本作慓。

我水軍諸將議攻唐島。藤堂高虎・脇坂安治先發。韓以數百艘逆擊。高虎・安治親揮槍力戰。加藤嘉明後至。遇敵一大艦。艦上列卒。張弓持滿擬之。嘉明拔刀躍入其艦。敵不敢發。嘉明立斬數人。遂奪其艦。諸將因奮擊。大破之。元鈞收兵守閑山。而明將楊鎬・麻貴等繼至。韓令鈞進擣釜山。初鈞與李舜臣並將水軍。行長間使人告韓曰。清正首敗媾。吾深嫉之。今孤軍先濟。宜襲執之。韓王乃命鈞・舜臣。舜臣不肯。鈞劾其逗留。王召舜臣。下之獄。鈞於是獨將。及受此命。不得不自進。乃合水路諸軍赴釜山。行長聞之。八月。伏兵于加德。以舟兵逆擊于絕影島。會日暮風濤大起。我軍佯退。鈞縱兵冒濤而進。比至加德。飢渴。下舟取飲。伏兵起。行長還之。夾擊大敗鈞軍。鈞逃至巨濟。行長復夜襲之。遂斬鈞。乘勝西向。連陷南海・順天。自豆恥津上陸。而清正兵自西生浦。歷慶州入全羅。諸城望其旗曰。鬼上官至矣。不戰而潰。清正進與行長合。攻黃石城。陷之。守將郭趍・趙宗道等皆死。我軍乃二道並進。清正從雲峰。浮田秀家繼之。行長從密陽。毛利秀元繼之。兵各五萬。會於南原。韓元帥權慄軍雲峰。望清正軍。棄守而逃。我諸

息。拙修本作怠。

將使島津義弘・加藤嘉明絶全州援路。而合軍入南原。投書楊元約戰期。元高壘深塹。悉衆捍禦。諸將疾攻兩晝夜。已而退兵。窺城兵倦且息。則復進。伏卒一面。而三面塡塹。踏藉而登。元在帳中。裸跣走。其所率遼東突騎數千。爭門馳出。伏兵要之。奮刀斫馬足。適月明。明騎莫得脫者。韓將李福男等皆死。我軍進向全州。州民素苦陳愚衷徵求。及聞南原陷。皆遁走。明兵阻之。多爲韓人所傷。愚衷遂棄城走。會麻貴遣牛伯英等援南原。不及。與愚衷合兵。軍于公州。我諸將、因糧於全州。終議入國都。韓王聞水陸軍皆敗。謂島嶺之守無益也。使李元翼引兵徑出忠淸。以阻我軍鋒。復起李舜臣。統三道水軍。舜臣至錦島。與我將菅正陰遇于碧波亭下。以大艦乘潮來攻。正陰敗死。舜臣因與明水軍將陳璘軍古今島。以扼我水軍。而我陸軍一隊以秀元爲將。黑田長政爲先鋒。進迫國都。九月。軍于全義館。擊明將解生于稷山。明將楊登山・牛伯英來衝我陣。長政將後藤基次・栗山利安揮槍拒之。殺傷相當。登山・伯英退與生合。濟川斷橋。我兵絶流而渡。擊走之。明軍復大至。長政將母里友信・原種良等力戰。秀元亦至。擊

元繼。拙修本作元綱。下同。

御明軍。於是。明軍在國都者不敢出。我軍亦持重不進。天漸寒。十月。清正退守蔚山。行長退守順天。諸將連營。與釜山相爲聲援。明乃遣李如梅來取谷城。遂攻毛利秀包于星州。不能取。秀包亦以兵少退守求禮。十一月。邢玠入韓。聚議都城。以爲和。兵持重。若待秀吉親濟者。其志不在小。宜及今擊之。會、明諸道募兵皆至。乃分爲三。李如梅將左軍。高策將中軍。李芳春・解生將右軍。明三十三將與韓七將。分屬三軍。以楊鎬・麻貴統之。糧餉火器。皆極豐備。期以十二月進攻焉。我諸將聞之。益修城壘。清正巡視西生諸寨。而留裨將加藤清兵衛。與毛利氏援卒俱修蔚山。明諸將議曰。秀吉諸將清正最勇悍。先克清正。則餘從風解。乃聲向順天。以牽行長。而諸軍會慶州。留高策于彥陽。以絕釜山援路。而李如梅・解生等皆萃于蔚山。蔚山土木未竣。其役卒駭。明軍至。入告清兵衛。清兵衛出戰。陷伏大敗。入城嬰守。淺野左京大夫率毛利氏將太田政信・宍戶元繼等。將往蔚山監役。行至彥陽。與高策夾嶺而舍。未相知也。比曉。我斥兵上嶺。爲明先鋒所獲。我軍乃覺。政信・元繼說曰。衆寡懸絕。不若疾走入蔚山也。大夫曰。

幸長提兵至此。未覩明人之旗而逃。何面目復見太閤哉。公等欲走卽走。吾當死於此矣。乃遣其將太田・岡野・龜田・森島四人。率銃隊進。逆擊明先鋒。卻之。大夫在高阜。望見策軍踰嶺也。恐其戰沒。使人召還之。不肯。奮擊斃數百人而死之。獨龜田脫歸。獻所獲甲首。且曰。明兵之衆。望之無際。請君速退。大夫怒曰。吾豈聞衆而退哉。自揚徽號。麾衆而進。將士覩之。爭赴明軍。大夫身被十餘創。猶進不已。龜田力諫。使二從士回其轡。而以刀鞘鞭馬。馬奔蔚山。策兵追躡。岡田某・福永某返戰而死。清兵衞望見。出城迎入。元繼爲明軍所隔。自間路入島山。島山。蔚山別堡也。時楊鎬・李如梅等已破蔚山外郭。大夫代清正。率厲將士。嬰壁守之。明兵以大夫爲清正也。欲必獲之。攻擊甚急。大夫自放銃。無不命中。時開門突戰。殺傷過當。二城之間有川。李芳春・解生泛兵艦以絕之。城兵銃破其五艘。溺數千人。而敵勢不衰。麻貴・茅國器鼓衆攀壁。前者墜。後者登。晝夜不歇。城兵欲告急於清正。清正時在機張。相去三日程。敵衆充塞道路。大夫曰。誰可往者。近臣木村某奮請往。大夫壯之。予以善馬。已出門。明兵麕集。木村一騎馳

兜。正本・抽修本並作鍪。
郎。正本・抽修本作狼。
嚙。抽修本作囓。

突萬衆中。一日一夜達機張。見清正告急。清正大驚。投袂而起。左右或止之曰。蔚山以孤城當大敵之衝。而我寡兵援之。終不能保。不若棄之也。清正曰。彈正囑我曰。緩急幸援我兒。今倭之敵。何以立天下。乃率見兵五百人。人負糧食。登舟赴援。與明候船戰江中。走之。清正自蒙銀兜鍪。杖薙刀。立船首。指麾士卒。明・韓諸軍指曰。莫敢近者。遂入蔚山。鎬貴謂將士曰。清正定入城矣。猶檻虎而刺之也。明日。合諸軍蟻附而上。清正令士卒投大石巨材。擊卻之。即夜。與數百騎襲明軍。大獲而還。敵更起飛樓。以火筒佛郎機百道並攻。城壘震裂。清正與大夫堅守不屈。鎬・貴知其不可力取。乃下令休戰。合圍十晝夜。斷我汲道。城兵飢渴。皆嚙紙。煎壁土。刺馬飲其血。馬盡。乃飲溺。夜出城外。搜明人尸。取其所佩糗糧。牛炙食之。天大雪。士卒瘴瘃。有墮指者。而清正意氣自若。益修守具。用銃及紙礮。日斃明兵數百千人。鎬貴夜設伏。而曉焚營退走數里。以誘城兵。城兵欲追。清正不許曰。彼擧火以退。退不設殿。不以夜而以曉。是將誘我而殲之也。久之。明伏稍稍出。終復圍之。浮田氏卒有亡在明軍者。呼語城上人曰。楊經理願

媾和。欲與加藤公面議之。期城外百步相見。淸正欲往。大夫曰。敵情不可測。公受太閤命。爲一方重寄。勿輕出貽笑外國。雖然。不出示之怯也。度彼未識公面。僕請爲公代行。衆遂兩止之。故紓會期。以竢我援兵至。」黒田孝高在梁山。使使告釜山曰。蔚山急矣。卽陷。諸城隨之。不可不赴援。諸將然之。豐臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎・其子高良・脇坂安治等。將騎卒五萬。自彥陽・昌原分道赴援。而行長自海上會之。三年。正月。秀秋等至彥陽。擊破高策。與昌原軍皆赴蔚山。行長盛裝空艦。蔽海而至。楊鎬聞我軍自三面至。挺身先遁。麻貴・解生等乘夜解圍。長政使後藤基次晨出候軍。得一馬鞻于水涯。還報曰。是日本制。我兵已有騎渡者。不可後矣。長政卽馳躡明軍。藤堂高良等揮槍繼之。淸正與大夫乃開門合擊。敵衆崩駭。獨其將吳惟忠・茅國器殿而回戰。吉川廣家奮擊走之。明軍大走。遺棄糧仗蔽野。」諸將之救蔚山也。明候我空虛。一軍襲梁山。爲黒田孝高擊卻之。一軍襲釜山。浮田秀家使立花宗茂邀于般丹。燒而走之。」明主得蔚山敗聞。與其下議曰。是役也。謀之經年。傾

張芳監。正本作張芳藍。

海內力。加以全韓之兵。期於必克。今乃如此。罪當歸經理。乃罷楊鎬。以萬世德代之。與鄧子龍・張芳監・芳威等。率楚兵往助邢玠。秀吉得蔚山捷聞。賜手書於清正賞之。爲餽糧食。三月。秀吉攜秀賴及夫人以下。遊醍醐。命前田玄以掌供帳。務使豐盛。勿有遺憾。四月。遣使諭諸將。留秀秋・行長・清正。及島津義弘・黑田長政・左京大夫等十餘將。其餘盡罷歸。其留者。分爲四屯。秀秋守釜山。而蔚山在其右。清正守之。順天在其左。行長守之。泗川在其前。義弘守之。四城兵凡十萬。明兵亦可十萬。世德與邢玠議。令李如梅當義弘。劉綎當行長。麻貴當清正。陳璘以水軍出其後。已而召如梅。以董一元代之。相持未戰。是月。秀賴進從二位。爲權中納言。五月。秀吉有疾。六月。外師罷者至。乃召見慰勞。論其賞罰。七月。秀吉疾篤。召德川公諭之曰。外國未服。而吾罹此疾。吾死則難作。非卿莫以定之。吾今日以天下託卿。卿爲我努力。秀賴幼弱。亦煩卿保護。至其成長。當立與不當立。一在卿之心。德川公歔欷曰。殿下百歲之後。孰不奉嗣君者。雖然人心不測。殿下宜運其神算。以建萬世之安。家康不才。不敢當重任。曰。吾熟思之。莫

若卿者。卿勿避也。德川公固辭而退。秀吉遂召石田三成・增田長盛告之。二人諫曰。殿下百戰取天下。而一日予之他人。是胡爲也。今天下猛將謀臣。無不被殿下恩者。其於輔嗣君何有。於是。定大老奉行。奉行五人如故所置。德川公。及前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝。爲五大老。以中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴。爲三中老。小事決於奉行。大事決於大老。大老奉行或有不協。則中老居間和解之。使片桐且元・小出秀正傅秀頼。密囑二人曰。吾起人奴。至爲關白。孰非國恩哉。吾與明構兵。禍結弗解。吾深悔之。彼聞吾死。或大擧來報。國朝自古未嘗受外國侵辱。及我時受焉。吾深恥之。是吾所以託國於家康。至我家存亡。未暇恤也。雖然家康必不負我。汝輩謹保護秀頼。莫使生釁隙焉。又使木村重成・薄田兼相・渡部尙副二人。分親兵爲七隊。以速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野野村吉安・堀田正高爲隊長。馬標旌旗。盡傳之秀頼。使母衣騎郡良列・卒將津川左近掌之。八月。盡會大老奉行以下爲誓。誓曰。虛心協謀。務輔嗣子。勿樹私黨。勿忘公義。勿變更。勿漏泄。勿不告而結婚。勿不告

綖。拙修本作縦。

而交質。嗣子六歲。未能親政。前田保之於大坂。而德川視事於伏見。封邑行罰。皆竢嗣子之長。命淺野彈正・石田三成曰。汝赴朝鮮收我兵。不能收則遣家康。家康有不可往。則遣利家。二人遣一。雖有百萬敵不能尾也。十三日。疾大篤。將瞑。已而張目曰。勿使我十萬兵爲海外鬼。言畢而薨。年六十三。群臣祕喪。使前田玄以密葬之于阿彌陀峰。九月。三日。德川公與諸侯盟無貳於嗣君。遂使淺野・石田以遺命赴肥前。密召在韓諸將。諸將之與明軍相持也。明兵益至。邢玠・萬世德促諸軍進攻。劉綖患順天帶山海不可近。則思沈惟敬所爲。欲誘而取之。遣間使來告行長曰。先鋒嚮與我國盟矣。因清正詿惑關白。復致有今日。今兩國兵老。吾欲親與先鋒會以成前盟也。行長不信。瞰綖單騎候於道。則信之。將出赴會。而我兵降在綖部者。爲泄其謀。行長驚還。綖悉而來攻。行長擊卻之。清正亦竣蔚山役。糧多兵勇。人思一戰。九月。麻貴至温井。懲前敗。堅壁不敢出。清正屢出戰。擊走貴兵。立花宗茂在釜山。自請以五百人往救清正。値明五千人于元濱。乘曉霧薄擊。克之。遂追北。或以衆寡不敵止之。宗茂曰。敵馬足亂。可

追。不追。視我寡也。追擊復克之。既舍。逸明囚。設五伏以待。曰。吾乃視寡而誘之
也。夜半。明兵來襲。伏起。復克之。明日。未至蔚山數十里。與清正夾擊麻貴。大克
之。是時。義弘及子忠恒在新寨。與董一元夾晉江而軍。茅國器間島津氏與豐
臣氏爲宿仇。以爲可間也。乃作檄數秀吉罪。遣辯士以搖義弘。義弘叱而卻之。
國器又說一元曰。義弘築望津・東陽・泗川・永春・昆陽・金海・固城・新寨八壘。勢如
長蛇。望津。其首也。擊其首。餘易制耳。一元然之。會、明捕虜郭國安在望津。送款
於一元。約爲內應。舉火爲信。至期。國器引兵臨江。我兵亦出寨臨江。已而寨中
火起。吾兵顧而救之。明兵乃渡。陷望津。忠恒在新寨。欲赴援。義弘曰。未可。望津
兵退守泗川。而一元已分兵。襲永春・昆陽。燒其積聚。悉軍渡江。遂乘夜襲泗川。
我守將出戰。斬明驍將李寧・盧得功。潰圍走新寨。忠恒復請赴援。義弘曰。未可。
一元已取數壘。而島津氏不出。意甚輕之。進燒東陽倉。火晝夜不滅。遂向新寨。
國器止之。勸先攻金海・固城。以奪其羽翼。不聽。十月。朔。一元合兵。以國器及葉
邦榮・彭信古爲先鋒。以藍芳威爲後軍。攻新寨。自卯至巳。以木砲摧大門及城

計。川越本作赴。

來。川越本標註云。一作未。

牆。薄塹拔柵。城兵殊死戰。會砲炸烟焰四迸。明陣亂。義弘。目忠恒曰。可以出矣。忠恒唯而起。與數千騎闖門直衝明陣。明陣皆披靡。而國器・邦榮以萬人橫入于城。義弘豫勒五千人。迎擊走之。芳威望見先走。明軍遂大潰。義弘・忠恒追奔逐北。斬首三萬餘級。明兵爭走相擠。伏尸二百餘里。我軍以亡糧不復窮追。追至望津乃還。而秀吉之訃適至。諸將潛相告言。稍稍治歸裝。而明都御史在吳者。諜知秀吉沒。報告明主。明主大喜。擧朝相賀。於是。趣邢玠等躡我軍。郭國安亦走告之明群帥。群帥創新寨之敗。不敢進。當是時。我邦訛言。明大擧扼我兵歸路。德川・前田二老。皆欲親往。衆議止之。使藤堂高虎代之。來至行臺。得新寨捷書。乃止。而釜山軍。已從秀秋還對馬。清正・義弘次收兵還。行長亦欲還。而劉綎復來鬩之。清正與義弘返擊。拔行長。皆上舟。陳璘・鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等。以兵艦數千艘。要之海中。清正已去。義弘鬪且卻。至加德島。明兵四集於行長。行長厲士卒止戰。會、明人失火器。反中其船。我兵因奮擊。鏖其兵。斬子龍。舜臣來救。亦射殺之。進圍璘。幾獲之。而蠶・文煥繼至。銃炮交發。盡焚我

船。川越本作舟。

慶長四年

船。行長上一島。奪敵寨據之。明兵艦環守焉。行長乘夜獨遁。歸於義弘。義弘還。載其餘衆。與蠶・明宰戰。擒明宰而還。皆至加德。劉綎以生兵來攻。義弘・行長擊卻之。明軍不敢復追躡。我軍盡達對馬。十一月。諸將整軍至那古耶。兩奉行迎之。宣秀吉遺命。諸將皆泣。三成曰。公等詣伏見。當各之國。來秋會同。以茗讌相招。清正曰。諸君好爲茗讌。我守孤城七年矣。勞悴纔存。毋茗毋酒。當炊稗粥答之耳。三成嗛之。先是。行長德清正救順天也。欲釋憾焉。清正曰。吾亦欲之矣。如子善治部何。自是相讐益深。於是。諸將相率詣伏見。謁秀頼。諸老慰勞之。令罷之國。以嗣君猶幼。國家多難。不敢自逸。竢明年去。明年。大老奉行論征韓功。賜義弘以公田在薩摩者四萬石。清正・行長以下。得賞有差。

日本外史卷之十六終

日本外史 卷之十七

徳川氏前記

豐臣氏下

慶長四年。正月。十日。前田利家奉秀頼徙大坂。抱坐正廳。徳川公以下牧伯・將吏來謁之。徳川公還居伏見第。視事。五奉行更遣兵守城。皆如秀吉遺命。而徳川氏威權獨熾。利家謂其侮己。乃忿恚。欲罷就國。細川忠興爲利家戚屬。引遺命。諫止之。是月。二十一日。大老・奉行連署詰徳川公曰。足下行事。多可疑者。背太閤遺令。與伊達・福島・蜂須賀三家。私結婚姻。是欲何爲也。宜解政就國。又詰三家。三家不服。三家與黒田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡諸將。皆嫉石田三成。爭附徳川氏。仇視他侯伯。三中老議曰。遺命所謂居間和解者在於此。二月。乃請大老・奉行。尋盟于伏見。利家有疾。加藤清正與細川忠興・淺野

瞶。川越本・拙修本竝作聵。

長盛。拙修本作長成。

左京大夫。勸利家。輿疾赴伏見。三月。徳川公亦往大坂。利家病甚。扶而起。泣囑之曰。吾將旦夕入地。願公盡心以輔嗣君。徳川公曰。諾。利家次子利政欲刺徳川公。爲其兄利長所止。三成等。會議于小西行長宅。曰。內府專橫。蔑視嗣君。諸老所共憤也。不可不速除之。行長因建襲擊之策。前田玄以素通款徳川氏。故發異議阻之。三成又欲以火器襲之伏見第。延細川忠興告謀。忠興復阻止之。走告徳川氏。教之徙居于向島。行長曰。諸公明文墨而瞶兵機。乃爲豎子所誑。大谷吉隆聞諸奉行之謀。謂增田長盛曰。吾視諸公所爲。不務利嗣君。而專害內府。內府苟貳於嗣君。宜竢其罪著而討之。天下誰有棄此歸彼者哉。今自我開釁。彼則有辭。是不獨自禍。乃禍嗣君也。長盛以告三成。三成弗肯。文祿之役。三成・長盛・吉隆在朝鮮。聞淺野・黑田來。就議軍事。兩人方圍棊。不顧三成等。三成等怒而出。兩人收局。問侍者曰。三奉行何不來。侍者告故。乃使人呼返之。三成等不肯。爲惡言而去。終惡兩人於秀吉。兩人之子深銜之。於是。與加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興連署。罪狀三成。請誅之。徳川公不許。

洶洶。正本作二洶洶一。

川越本・拙修本竝三成下無二德川二字一。

覲。拙修本作レ覲。

乃如二大坂一。請二於利家一。利家疾篤。三成方視レ之。七將不レ得レ達。乃各自治レ兵。欲レ擊二殺之一。未レ發也。閏月。三日。利家疾革。奮呼曰。天下洶洶。吾不レ目二嗣君成立一而死。死不レ瞑矣。遂卒。衆推二其長子利長一代レ之、列二四大老之下一。七將曰。大納言既沒。三成必出。欲レ要二擊之一。或走告二三成一。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹五家。皆善二於三成一。佐竹義宣自二伏見一馳至。弔二前田氏一。因見二三成于浮田氏一。曰。寧自歸二於內府一。攜詣二德川公一。德川公納レ之。七將聞レ之憤惋。追至二伏見一。或說二德川公一。勿レ除二三成一。德川公大悟。遂諭二七將一弭レ兵。七將不レ得レ已聽レ之。又諭二三成一解二政權一。就二封澤山一。七將欲レ要二擊之一。見二德川氏兵護送一。乃止。上杉景勝與二三成一通レ謀。約レ竢二明歲一東西擧レ兵。以討二德川氏一。四月。太閤廟成。詔賜二號豐國明神一。自二秀賴徙二大坂一。伏見城無レ主。五月。黑田長政・堀尾吉晴等。請二德川公一入レ城。如二太閤故事一。六月。毛利・浮田以下外征諸將皆謁歸。七月。前田・上杉・佐竹三家亦之レ國。德川氏久不レ覲二秀賴一。頗有二物議一。淺野・片桐等數促レ之。辭以レ疾。八月。乃往。遂留二居西城一。西城時爲二秀賴嫡母淺野氏所一レ居。於レ是。淺野氏遜二於京師一。有二流言一。淺野彈正・大野治長・土方雄久援二前田氏一。以圖二德

慶長五年

川氏。十月。放治長于下野。雄久于常陸。眞彈正于武藏府中。下令北伐前田氏。細川忠興爲謝之。德川氏徵前田利長母爲質。十一月。徙之江戶。增田長盛・長束正家爭之曰。遺令勿不告而交質。盍與諸老議。弗肯。利長泣而奉令。是歲。德川公加封細川忠興・堀尾吉晴。各五萬石。五年。春。德川公戒上杉景勝西上。答曰。我受大閤遺旨。鎭守東陲。何受內府令也。乃數其背盟十罪。德川公大怒。議東伐上杉氏。夏。以其義女妻黑田長政。留兵於伏見。而自將諸軍東下。三成欲起兵乘其後。會大谷吉隆自其邑敦賀會師。三成使人要之。告以其謀。吉隆極言其非計。三成不肯。吉隆乃訣去。低回久之曰。吾與治部。共仕太閤。舊相好也。今知其事不克。棄之非義。乃還。三成大喜。與長束正家。皆赴大坂。見增田長盛定議。秋。遂移書遠近。曰。內府有罪。嗣君命討之。苟念太閤恩誼者。宜來戮力。毛利輝元以下侯伯來會者四十餘人。時東西諸侯妻子。皆在大坂。三成收之城中。使輝元・長盛守大坂。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等。將四萬人。攻伏見城。小野木重勝等。將二萬人。攻田邊城。毛利秀元與長束正家・僧惠瓊。將三萬

人。攻阿濃津。京極高次等。將二萬人。徇北陸。吉隆在敦賀。招北莊・大正寺・小松三城下之。前田利長與弟利政。爲德川氏攻拔大正寺。遂欲攻北莊。北莊乞援於敦賀。吉隆乃自將赴援。或曰。堀尾氏兵守府中。而在我後。不先取之。則進退皆難。吉隆曰。北莊陷。則小松孤立矣。至若府中。則不必取也。亦不可取也。卽可取也。不可不分兵守之。分則兵寡。以寡對衆。是爲難耳。且彼必不敢要我矣。是我使敵守城也。我既卻北兵。以存諸城。則彼不攻而下矣。卽夜五更。馳至北莊。利長姊夫中川宗伴在京師。將赴北陸。吉隆要而執之。令爲書給利長曰。內府西上。將士多叛之。大坂兵逆擊之美濃。走之。遂發舟師。將取加賀。公宜早爲之備。利長得書疑懼。引兵卻。府中果遂降於吉隆。會高次等至。合兵復大正寺。遂定越前。置守而南。吉隆敎三成。招織田秀信。秀信以岐阜降。於是。三成導諸將至大垣。秀家等拔伏見來會焉。德川公至下野。聞變不爲驚。然以諸將質在大坂。頗疑之。使人問其去就。諸將皆奮。欲擊三成。乃誓曰。公苟不渝太閤約。善視嗣君。則僕等力戰。必梟治部。諸將乃先發。首攻岐阜下之。三成與島津義弘援

弟。川越本・拙修本竝作兄。川越本標註云。按父兄疑當作父弟。下同。

之。不及。東軍陣赤坂。秀家欲夜襲之。三成弗聽。秀元拔阿濃津。來陣南宮山。秀秋來陣松尾山。初秀頼與生母淀君居大坂。而嫡母淺野氏稱北廳。居京師。庶母京極氏稱松城君。居大津。北廳之兄曰木下家定。家定子爲秀秋。及兵起。北廳使人戒秀秋曰。內府不利秀頼。則力拒之。非然則勿負之。秀秋遂送款於江戶。松城君之弟爲京極高次。高次受封大津。與德川氏嗣子竝娶淀君之妹。亦送款江戶。及岐阜陷。吉隆召北陸諸將會大垣。高次後發。馳歸大津。擧兵應德川氏。立花宗茂・筑紫廣門赴大垣。比至石部。聞之。返陣勢多。會毛利秀包等來自大坂。則合兵攻高次。淀君遣二女。使諭松城君及高次夫妻。不肯。宗茂等攻奪其郭。而城未下也。德川公分兵爲二。自將一軍。由海道。使其嗣子秀忠將一軍。由山道。命彈正少弼助之。關西從風而靡。爭先送款。山道之軍。進至小室。招眞田昌幸。初昌幸赴會津。至犬伏。而大坂檄至。長子信幸曰。吾受關東殊遇。請東矣。西軍即敗。吾爲父弟乞命。幸村曰。太閤舊誼。不可背也。寧西而死。不東而生。昌幸曰。欲東者東。欲西者西。而吾與西者也。乃遣信幸之江戶。而自與幸村。

以兵三千歸上田。東軍三萬陣于小室。信幸從在其軍。以書招其父弟。不肯。居四日、東軍來攻上田。城帶川、昌幸壅其上流。伏兵險阻。出戰佯走、東軍爭追、陷伏而亂、乃決其壅。水大至。東軍不能繼。幸村以突騎蹙之。遂大敗其軍。使不得進者三日。其海道軍竢之。亦遲回數日。以其久不至。乃獨進陣于赤坂。秀家與三成計。亦設伏而挑戰。敗其前軍而退。於是。諸將大議決戰。秀家・吉隆欲固守大垣。以竢田邊・大津兵。島津義弘欲夜襲赤坂。三成恃其衆。皆不聽。欲出戰于關原。夜赴南宮。請秀元夾擊東軍。秀元素通款東軍。佯諾之。三成遂赴松尾。奬厲秀秋。秀秋已與東軍約爲內應。亦佯諾之。吉隆疑秀秋有異。以其兵陣松尾山下。吉隆有惡疾。以絹蔽面。輕服坐轎。戒其左右曰。及敗。速斬我頭。旦日。兩軍大戰關原。自辰至未、東軍數卻。而秀元・秀秋皆觀望不戰、東兵窪島某馳白德川公曰、秀秋似背約、請更爲計。德川公驚曰。我悔爲小兒所賣。使窪島向松尾山發礮促之、黑田長政亦使人責秀秋。秀秋乃以兵八千、銃手六百下山。擊吉隆。吉隆怒。呼曰、豎子背恩忘義。不可舍也。以六百人直衝其麾下。戶田重政・平

平塚。正本作平家。

飢。正本作饑。

塚爲廣助吉隆。大破秀秋。斬東軍監使奥平貞治。而脇坂・朽木・小川・赤座等皆應秀秋。與東將藤堂高虎・織田長孝等。三面逼之。重政・爲廣皆戰死。吉隆隊將湯淺五介退告之吉隆。吉隆曰。吾可以死矣。勿使敵傳吾元。遂自殺。五介剄之。使侍臣某藏之泥中。而騈冒高虎陣死。吉隆二子。吉胤・吉之。姪賴繼。皆力戰。返見空轎。相泣欲死。從者諫之。乃走。欲守敦賀。無肯納者。遂走大坂。賴繼尋病死。東軍以秀秋内應。乘勢齊進。西軍遂大敗。秀家怒。欲與秀秋決鬭。明石守重諫曰。君爲元帥。何自爲匹夫行也。秀家曰。吾不翅惡秀秋也。輝元不親出。秀元亦持兩端。事可知矣。吾有一死報太閤而已。守重曰。縱諸將皆叛。君宜獨據其國以輔嗣君。徒死何爲。秀家乃走。其將長河内某死之。秀秋薄義弘。義弘擊走之。曰。吾雖敗。不肯卻走。以殘兵五百。薄東軍而南。東軍爲動。東將井伊直政等追躡。又擊走之。敵衆尾不止。阿多盛淳代義弘死。義弘得間踰鱒尾嶺而去。」三成走匿伊吹山。散從者曰。吾欲自大坂航赴薩摩以計再擧也。汝等宜伏匿以待時。三成遂採拾充飢。行四日患泄。至石橋村。就所知農夫某。某舍匿之。或者戒

某曰。聞子匿治部。今田中吉政在井口。索之甚急。事露。子必逮禍矣。農夫曰。無之。三成隔障聞之。謂農夫曰。吾終不可脫。汝盍出告。農夫使之遁走。三成曰。吾病矣。不能寸步。恐累汝。汝第速自首。農夫乃之井口。告吉政。吉政遣卒捕之。初三成之握權也。吉政事之甚恭。三成既被捕。呼吉政如故。曰。吾欲報先君知遇。與上杉・毛利等倶擧事。一敗至此。命也。願得速自裁。吉政請之德川氏。乃命醫治其疾。其父晴成・兄重成・子重家・姪朝成。皆在澤山。自殺。長束正家走保水口。東兵來逼。誘出之。迫使自殺。僧惠瓊亦被捕。皆囚于東營。諸將帥爭折辱三成。獨淺野左京大夫視之憫然。脫其短襖衣之曰。子雖我仇也。同爲豐臣氏臣。吾不忍乘其困加以無禮。德川氏聞之。心敬憚大夫。義弘之南走。經伊賀・大和。行破土兵。而至大坂。欲與輝元・長盛倶城守。二人不答。乃取其質。航歸薩摩。先是。田邊・大津皆下。立花宗茂引兵。東至草津。聞敗還入京師。使人謂木下家定曰。貴息之事不可言也。子猶有嗣君。則請共守大坂。家定曰。子先往。乃閉門自守。宗茂遂至大坂。使謂輝元曰。公苟城守。願扞一面。輝元曰。議而後答。宗茂罵曰。

耶蘇教。川越本・拙修本並作邪蘇教。

今日復何議。乃欲歸其國。將士曰。公所以酬豐臣氏足矣。因勸降德川氏。乃送降焉。亦航歸柳川。秀家經近江。爲士兵所困。獨從二人。竄土窟中。聞捕者至。欲自殺。從者止之。請其寶刀。出告東軍。以秀家既死。獻刀爲證。秀家至大坂。聞其國已覆沒。竟走薩摩。其妻前田氏。利長妹也。大歸加賀。後數年。利長問得其實。告之江戶。乃責前告者。告者請死。釋之。島津忠恒請宥秀家死。流八丈島。前田利政據能登。九鬼嘉隆據志摩。並抗東軍。利政除籍。嘉隆自殺。是役也。小西行長首應三成。三成以其更事倚賴之。行長爲人自殖而薄士。士不樂爲之用也。及敗。陣亂不可禁。乃走至糟川。逢僧林藏主者。曰。吾攝津守也。吾德汝矣。僧曰。公盍自刃。行長曰。吾奉耶蘇教。不可自刃。僧乃執而告之。是歲冬。與三成・惠瓊皆斬于京師。加藤清正初知三成必擧事。止德川氏東行。不聽。乃歸其國。逢大坂檄至。曰。是佞豎託幼主以濟其私也。乃發兵。攻小西氏城邑。盡幷之。會黑田孝高攻略近國。因合兵。降筑紫廣門等。遂臨薩摩。島津義久已降德川氏。森勝信。其弟勝永。出小倉。走匿土佐。上杉景勝。與伊達政宗・最上義光戰而勝之。佐

竹義宣。觀望不出。及聞上國敗。皆降德川氏。先是。德川氏既捷。將入京師。諸將先進。至大津。福島正則議曰。吾輩知三成舉事非郎君意。故右內府討之。今三成既敗矣。內府或遂謀不利於郎君。則吾以死拒之。淺野・加藤等皆然之。乃入京師。德川公至大津。置關于日岡。以其臣伊奈圖書守之。正則使使大津。爲關吏所辱。使者復命而自殺。正則怒。以其首贈井伊直政。直政驚。斬關卒數人謝之。正則愈怒曰。百卒不直一士。必得圖書頭。如不見許。吾將爲我所欲爲也。圖書聞之自殺。既而德川公入大坂。不問秀頼。遂大行慶讓。削毛利輝元之六國。放增田長盛于高野。眞田昌幸與子幸村。亦遁高野。以秀秋功最大。封浮田氏故地。尋病狂死。國除。其父家定削邑。兄勝俊・利房皆奪封。兄延俊獨邑于豐後。當是時。德川公威權益熾。七道將士皆會江戶。留其孥爲質。而秀頼獨食攝津・河內・和泉六十餘萬石。初片桐且元・小出秀正。憂諸奉行舉事。而不能制也。東西之軍未接。二人亟發使者赴關東。分疏其意。諸奉行要之。使攻阿濃津。使者亦恐嫌怯避。終從之。德川公怒。秀正退居岸和田。尋病卒。且元獨傅盡心輔導。

慶長八年

慶長十年

慶長十三年

慶長十五年

髯。川越本標註云。一作鬚。下長髯。川越本作長鬚。

未嘗離左右。」八年。二月。徳川公爲大將軍。四月。秀頼陞内大臣。敍從一位。七月。將軍以其孫女妻秀頼。命且元迎之。令大坂加且元封萬石。且元以嗣君幼辭。不受。尋如江戸。將軍面諭勿辭封。」十年。四月。秀頼遷右大臣。將軍讓職其嗣子秀忠。五月。前將軍在京師。諷北廳使秀頼來見。淀君母子相依。不欲分離。又恐其有變。固辭不遣。」十三年。二月。秀頼患痘。福島正則自安藝馳至。日夜看護。先是。正則謂結城秀康曰。公太閤養子。於大坂郎君爲兄弟。將軍百歳後。公善遇郎君。老奴亦當竭力周旋。秀康疑其有異志。絶之。」初秀吉造金馬數十。一馬當鈑金千枚。藏之大坂城中。以備軍須。十五年。秀頼以東旨再興方廣寺。以繼先志。以且元監役。所費鉅萬。多鎔金馬充費。」是時。關東工役數起。福島・加藤・淺野・池田諸家。毎助其役。清正赴江戸。多率士卒。又必過省秀頼。因置邸於大坂。如故。凡邦俗。男子必剃其鬢髯。而清正長髯自喜。前將軍使一親將以其私謂之曰。以予觀於公。有可去者三。長髯一也。大坂邸二也。東行從兵三也。清正曰。吾戎服著銅面。有髯以爲之藉。則肅然無有搖撼之患。撤大坂邸。是棄太閤舊誼。

我。川越本作吾。

不以兵自從。緩急不及事。皆不可去也。」十六年。三月。前將軍在京師。使織田長益來諭召見秀頼。淀君不肯。北廳使清正及淺野左京大夫促之。二將因啓曰。臣輩以死守郎君。必無慮矣。且元亦自京師馳還苦諫之。淀君乃遣秀頼。二十八日。溯淀入京師。二將以弓銃夾岸而北。福島正則稱疾守大坂。前將軍使其二子義直・頼宣迎之東寺。二將以下二十一人。徒步護輿入二條城。前將軍出迎之門。相見于正殿。前將軍南鄉坐。關東將士及諸侯伯。擁衞左右。秀頼北鄉坐。二將在其後。秀頼贈前將軍以名刀二口・駿馬一匹・黃金三百枚及錦緞若干。其公族將領皆有所遺。前將軍答以二刀・三鷹・十馬。饗畢。清正曰。淀君遲歸。請辭矣。前將軍使其女壻池田輝政賜酒於二將。既罷。扶秀頼出。謁北廳。拜豐國廟。視方廣寺役。自伏見上舟。清正獻酒賀焉。歸其邸。出短刀于懷。泣曰。吾今日聊報太閤之恩矣。四月。義直・頼宣來大坂。報秀頼北上也。秀頼迎而饗之。」六月。清正病卒。清正嘗謂人曰。前田利家晚志儒學。招吾及浮田秀家・淺野幸長。語次擧論語託孤寄命之章。我爾時不知其何謂。乃者讀而思之。略有所曉。當

慶長十八年

慶長十九年

今之世。不念此語者。恐陷不義也。清正既卒。淺野父子相繼病卒。十八年。秀賴以東旨。加片桐且元・大野治長祿各五千石。且元與木村重成・薄田兼相。及七隊長。以遺命保護秀賴。服事關東甚謹。而治長者。淀君乳母子也。織田長益者。淀君季父也。皆見親信。寖與且元相軋。十九年。正月。彗星見東方。二月。大坂天主閣烟起。衆趨救則無矣。使韓人李文長筮之。遇良之益。曰。尋兵失疆。喪其貞良。敗我殺鄕。再筮。遇臨之坎。曰。人面鬼口。長舌如斧。斲破瑚璉。殷商絕後。秀賴大懼。命巫禳之。四月。方廣寺成。乃鑄洪鐘。命東福寺僧清韓銘之。五月。遣片桐且元赴駿河。告成請慶。前將軍曰。右府爲願主。宜親往慶之。因命其親臣本多正純。以女爲且元婦。慰勞遣歸。且元大喜復命。卜八月三日。公卿以下皆會。縱四方民觀儀。將發行。會、前將軍覽鐘銘稿大怒。曰。銘有國家安康之句。是截我名也。序有大小釋迦迭爲主伴之語。是欲代我也。秀賴何意。乃敢詛我。德川氏京尹板倉勝重。馳使告之且元。停其慶會。且元大驚曰。是非右府所知也。託之清韓。偶然及此耳。臣不學。成卽附工。罪無所逃。今大儀垂成。萬衆已聚。而遽停

重昌。川越本・拙修本竝作重則。川越本標註云。按藩翰譜・烈祖成績等書。竝重則作重昌。重則未詳何人。疑謬誤。

註。川越本・拙修本竝作注。

之。恐驚民耳目。伏願且畢禮。尋毀滅銘文。然後臣甘心伏誅。毋悔也。勝重不肯曰。是成詛也。遂停儀。物情騷然。且元召問清韓。清韓不服。乃使清韓赴駿河陳謝。而自與其弟元重・大野治長繼赴之。前將軍執清韓。命板倉重昌如京師。令五山僧註疏銘文。僧多證其詛。且元至鞠子驛。留不敢入。九月。有命。遣歸治長。而獨召且元詰責之。且元陳謝甚力。淀君聞且元等不得見。遣其乳母大藏與尼正永赴謝。二女欲專辨銘辭。急習其句讀。且誦且行。至則召入。溫言慰藉。不復及銘辭。使往江戶省夫人淺井氏。二女大喜出意外。既還駿河。與且元皆告歸。許之。二女請答書。曰。既面諭之矣。乃皆辭上途。有命。獨止且元。使本多正純・僧天海言之曰。將軍意終不可解。右府何以爲信。表其無他。且元曰。願受敎。二人不答。且元曰。請赴江戶取將軍旨。二人入白焉。曰。將軍意亦與我同耳。汝宜歸而熟籌之。且元遂辭去。馳及二女於土山驛。二女乃悉語之以前將軍懇諭狀。曰。國事莫復足慮者。且元曰。吾所聞則大異諸。前將軍逼我以右府表信。吾揣其意。蓋有三策焉。淀君東與妹氏同居。上策也。右府往依婦翁。中策也。避大

坂徒他。下策也。三策行一。庶幾無事。二女不言。退而相言曰。前將軍豈至於此。是市正欲賣我君也。密馳書告大坂曰。且元形跡可疑。且元不之知也。使二女先還。而自入京師。與板倉勝重議事。淀君聞二女報。憤恚曰。吾雖太閤妾也。於右府爲生母。何屈辱關東哉。寧與右府枕城而死。乃欲誅且元。遂擧兵。治長・長益力贊之。已而且元至。謁秀賴陳三策。秀賴稟之淀君。淀君使人諭且元曰。姑後日面議。至期。且元朝服將出。會其臣小島某自外來告曰。淀君信讒言。猜公有貳於關東也。欲伏兵要之。遂擧大事。且元大息曰。噫年少輩誆誤我君。自速亡滅耳。治長傳內旨召之甚急。且元遂稱疾不出。治長知謀泄。恇懼曰。彼素掌管鑰。諳城內有無。即起兵奪城。不可悔也。不若先發誅之。乃令七隊長赴攻之。七隊長皆不肯曰。市正忠勇無比。誅之是絕嗣君手足也。於是。一城大擾。兵士聚片桐氏者三百餘人。治長患之。欲離間其兄弟。諭元重攻且元。元重答曰。家兄誠懷貳。吾將大義滅親。不必煩公等。公等忌害忠臣。又使人推刃於同氣。未能奉令也。秀賴近臣今木某潛來說且元曰。內城八門。公管其六。今夜潛兵

模。川越本作摸。川越本・拙修本並莢下有木字。

奪城。遂治長兄弟。而請命於關東。關東猶不釋。則翼我君擧兵耳。願公速斷之。且元蹙顣曰。吾特欲待讒人來攻而自殺也。苟如公所言。則長被反名矣。因命部下曰。卽及於戰。勿使矢嚮內城。明日。七隊長諭且元。納質弭兵。退就其邑。且元從之。十月。朔。與治長交質。盡獻城門管鑰。致事而去。七隊長送至大和川上。還質訣飲。且元曰。吾苦心運籌。欲利豐臣氏。吾上策而見聽。吾則請地築第于江戶之郊。故宏其規模以延數年。我君未壯。而前將軍大耋。吾策不亦善乎。區區之心。未遑盡明。乃卒至於此。因相鄉泣哭。顧望而別。且元遂歸其邑茨城。遠近騷擾。前將軍遂下令天下。共攻大坂。秀賴會諸將議拒守。先是。七隊長更候駿河。治長等疑之。頗收其兵。隊長皆怨望。於是不出參其議。速水守久和解之。乃出。治長建議曰。宜急擧事。天下比年苦土木。擧皆思亂。至西諸侯。概皆浴先君恩澤。誰不來援者。遂買城下及界浦漕粟及火藥。移檄四方。關原敗後潛匿所在者。若諸國獲罪亡命者。爭先來聚。眞田幸村自高野。長曾我部盛親自京師。後藤基次自南都。森勝永自土佐。其餘內藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿

政友・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人。治長以竹範鎔金馬以募兵。飢寒之士僞姓名應募。旬日得五萬。而有士將士無一人應者。秀賴手書招諸國主。前田氏以下皆縛使者。以其書獻德川氏。治長等意大沮。而事不可中止。乃颺言曰。諸侯伯皆陰通款於我矣。東軍來。夾而擊之耳。遂修守備。壘高丈餘。十步一樓。北帶淀河。柵于長柄・神崎二島。東控大和・木津二川。鵜野・今福以南至於鷺島。皆臨汗田爲壁。西據橫港。連砦于川場・博勞淵・葦島・福島・穢多・道頓諸處。列艦于海口。南穿空壕。交錯材木於壕內。以阻敵馳驅。七隊長曰。寨不可廣。廣則難守。況以一城抗天下。曠日持久。而驅市人糜糧食。毋爲也。治長不聽。眞田幸村不喜受人約束。乃別築偃月城于玉造阜。開東西二門。募信濃遺民。得百五十人。秀賴又附以伊木遠雄・山川賢信・北川宣勝等五千人守之。幸村因獻策曰。臣聞德川氏檄天下兵以來攻我。我坐竢之。無他奇道。度關東・北國之兵强半未至。宜以此時出大旆于天王寺。以勝永與臣爲先鋒。赴于山崎。使盛親・基次出大和路。扼宇治橋。攻拔伏見。縱火京師。

政友。川越本・拙修本竝作友政。
河。川越本作川。

衞友。川越本・拙修本竝作衞好。

對。川越本作答。

上吾儕。正本作吾儔。

以大閤・天下之衢路。則西國諸侯必有來屬者。是一奇也。其次曰。計雖善矣。非萬全者。本城壯固無匹。雖受天下兵。可支三五年。如此則敵必有內變。諸侯被先世恩者必歸款於我。何必遠出。衆然之。前將軍・將軍率諸侯伯。相繼西上。獨留福島正則・黑田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衞友于江戸。不許從軍。正則潛應大坂需。自其封安藝輸粟五萬石。其二姪正守・正鎭皆入城守。以故最見疑。竹中重信受命。自駿河赴江戸。諭旨正則。正則因以書諫秀頼曰。郎君因事忤關東旨。遂動兵馬。是自速亡滅也。願改其圖。奉淀君于關東。以計無事。不則老奴爲東軍先鋒。一擧拔城。君其勿悔。豐臣氏安危。將決於此。願熟計之。前將軍途覽其書。遂不許從。秀頼得書。亦無所對。重信復受命赴安藝。使正則子正勝治兵會師。正則遥戒其老福島丹波・尾關石見曰。汝輩輔我兒以應郎君。莫以我爲也。郎君而成事。吾死不恨。不然則吾何以見太閤地下哉。丹波欲從命。石見爭之曰。吾儕之於主公。猶主公之於右府也。吾儕何可禍主公哉。遂擁正勝會東軍。蜂須賀家政既老。首迎謁東軍。片桐且元嘗託其貲于界浦人宗薰。宗

薰告城兵來掠界浦。且元乃遣兵二百援之。至尼崎城索舟。尼崎人疑而不許。大坂兵出擊且元。城兵亦不援。且元退守神崎。士民聞其叛大坂也。爭起要之。與城兵合擊。遂鏖其兵。且元僅免。於是。前將軍至京師。召見之。且元辭曰。臣計輯和。乃開大隙。何以見爲。前將軍曰。兵起非汝罪。宜亟來此。更爲後圖。藤堂高虎爲東軍先鋒。來陣住吉。郡良列窺其孤軍。欲襲之。議不諧而止。良列又欲遣間諜縱火兩將軍營。亦不用。東軍患二島難濟。壅其上流。城兵出爭之。不克。十一月。池田氏兵自神崎濟。城兵出拒。不利。幸村・基次等建議曰。將軍不日至天王寺。及其未陣襲之。必克。治長曰。是可用之小戰。今與天下戰。始合失利。不可復振。不若致之堅城下而挫其鋒也。幸村等曰。以寡擊衆。自非出奇。何得勝乎。良列亦勸之。終弗聽。已而東軍悉至。列營四外。大凡五十萬許。治長發間使誘舊屬諸將。諸將皆捕其使。獻之前將軍。前將軍遣書城內。使請和。不肯。幸村叔父信尹從在東軍。前將軍使之入諭幸村降之。幸村答曰。關原之役。臣父子屬西軍。以寡兵抗大師。及敗遁逃。伏匿山野。右府不以臣陋劣。授臣以數千兵。使

政光。川越本。拙修本並作正光。

蘆島。川越本。拙修本並作葦島。

將一面。是知臣也。士爲知己者死。臣死不能負焉。信尹復命。再遣說之曰。苟降。則封以信濃地。世世毋絕。幸村曰。爲我謝前將軍。臣一死報右府。不知其他。有如東西彊兵。臣當寄食叔父耳。不然則雖受日本之半。而不能奉命矣。願叔父勿復來也。前將軍與木村重成父重茲有故。又招降之。重成不應。薄田兼相守穢多崎。蜂須賀至鎮來攻之。兼相飲於倡家。其兵留守。不支而走。兼相深以爲恥。已而鴫野柵爲上杉景勝所破。今福柵爲佐竹義宣所破。木村重成聞急。單騎出拒義宣。渡部尙與七隊長出拒景勝。秀頼自城樓望見之。顧基次往援重成。基次卽起。從士取鎧。及之京橋。擐而馳。謂重成曰。公勞矣。僕請代之。重成曰。事方殷。代將則陣亂。公老於兵者。何爲是言也。基次乃陣其後。泛舟澤中。排栅放銃。橫擊義宣陣。重成因大破之。鏖其老澁江政光。尙等亦擊破景勝前軍。竟不利退。重成・基次亦收兵。基次中丸。傷其左肋。捫之曰。吾創不至死。右府命厚矣。已而以柵難守。棄而入城。片桐且元入軍備前島。而蘆島・博勞淵前後皆陷。池田・淺野・蜂須賀諸將自西北進。七隊長曰。吾輩固曰。廣者難守。適以增敵氣。

耳。宜棄天滿・川場・道頓港三寨。約之內城。治房以萬人守道頓港。獨不肯。卽夜、諸將託軍議召之、遣其次等燒諸壘寨、治房部下驚走入城、其次伏死士、誡曰。備前之軍。其將年少氣鋭。必來於此。汝輩突起取之。池田忠繼在福島望火。果欲馳入川場。其將花房職之曰、後藤多謀。必有伏也。乃止、伏兵徒歸。其次曰、花房未死乎。十二月。東軍入三寨。卽夜、大野治長第失火。東軍意。城兵有內應者。自京橋口進。城兵堅拒御之。幸村與前田利光對壘。出銃手于城外林中。日斃敵兵。利光前鋒奧村某欲奪林以爲功。幸村諜知之。潛收其兵。奧村至。不見一人。城兵自銃眼指而笑曰。公等索狐兎乎。奧村忿、踰濠攀壁。則銃矢交發。殺傷數百人。南條光明在南壁。其叔父與藤堂高虎相識。高虎約書于矢。射壁上、招降之。叔姪合謀。欲導高虎兵。期四日黎明。事覺。秀賴與諸將議。族誅之。而不更其幟。列銃以竢。黎明。藤堂氏・井伊氏合兵傅壁。加賀・越前兵亦逼幸村壘下。皆遇銃而敗。會、櫓上失火、敵二百人乘之而登。幸村鏖之。是日之戰。自卯至午。而城兵不損一人。織田長賴、守星谷口。其卒私鬪、東軍乘喧疾攻。秀賴遣北川

羅城。描修本作羅城。

宣勝等援擊。卻東軍。東軍於是自天王寺口。穴地而進。城兵亦穴地而拒之、東軍休戰、每夜發砲而鬨。城兵亦發砲而鬨。前將軍數遺書於織田長益勸和。要三事曰。毀羅城塡周池。若徙封大和。若以淀君爲質。皆不肯。然城兵聞和議起。守備頗怠。而東使至愈頻。長益・治長以秀頼旨。使使答之曰。雖果成和。而諸客兵不忍棄之。願得益封、議乃輟。塙直次・長岡貞安請大野治房曰。受圍日久。不一出戰。軍氣何得振。今備前・阿波兵陣本街橋南北。宜分兵襲之。治房曰。吾亦欲之。夜戰利於寡。寡而分之。恐不能克。宜專襲其一軍。乃揀壯士百餘。申暗令。以直次・貞安將之。出斫阿波營。斬其將中村重勝。治房與御宿政友。出迎之橋上。而還。當是時。天下諸侯皆從東軍。未至者獨島津氏而已。京極高次子忠高從攻城。其母常光在京師。前將軍以其爲淀君妹也。使人迎之。以講和議。又陰誘降城兵。淀君遂使治長・長益勸秀頼。秀頼召七隊長及新附將士議。或曰。關東之謀不可測也。宜嬰城二三年。以竢敵有變。或曰。諸侯無援者。而城兵有貳者。以有貳之兵。守無援之城。而城內糧仗。不足以支三年。不若媾和以爲後圖

也、治長・長益欲和、說秀賴甚力。秀賴曰。片桐且元爲我盡忠。以計無事。汝輩乃
阻之。勸我擧事、今何與前言相反也。會、常光氏至。慫慂淀君。數往復傳東旨。終
約。逐客兵。塡周池。長益出子尙長。治長出子治德爲質。十九日。和成。翌夜、茶臼
山下失火。延燒二十餘營。幸村曰。敵新和而懈備、宜掩擊之。治長等不許。二十
日。前將軍遣板倉重昌。將軍遣阿部正次。入莅誓焉。秀賴遣木村重成。出莅誓
焉、而以郡良列爲之副。重成年少有風儀。盛服騎馬。抵茶臼山營。自轅門下馬。
關東諸將設臚幕中。引重成。重成不揖而入。永井直勝・土井利勝擯之、使坐下
坐。重成不顧而進、敍秀賴旨。然後退伏。前將軍曰。是常陸介子乎、何酷肖父也。
因問其齡。曰。二十二矣。曰、然則與右府同年矣。往日鷸野・今福之戰、壯勇無雙、
重成慨然。對曰。臣有遺憾焉、已而誓書出。押血糢糊、重成曰。淀君婦人、恐有疑
焉、敢請更面刺鮮血。前將軍鍼於指曰。年老血枯。重成爲不聞者。遂取血誓。拜
謝而退。禮諸將乃還。且日。東軍發卒十萬人。隳外城。塡空壕。以吏七名監焉。是
日。島津氏始至兵庫。居二日。治長與長益。倶往謁兩營。前將軍見治長。面稱揚

已。川越本・拙修本竝作也。

回。川越本・拙修本竝作四。

元和元年

正永。川越本・拙修本竝作正榮。川越本標註云。按正榮卽正永。

之曰。卿年少。能爲秀賴擧事。何其壯哉。吾欲上野介事將軍猶卿也。上野介者。本多正純也。因命正純請其上衣。遠近傳以爲榮。治長意氣益驕。其夜。前將軍遽入京師。吏請夷濠淺深。前將軍哂而對曰。使三歳小兒可得上下耳。初城中諸將約塡周池。以爲止西南外濠。居數日。外濠既堙。遂及內濠。城中大驚。皆咎治長。治長使人出詰監吏。吏對曰。吾輩受命塡周池。以爲周者周內外之謂也。是時將軍猶在岡山。治長自馳赴岡山。岡山將吏皆曰。是大御所命已。治長乃馳使京師。因板倉勝重請之。勝重曰。本多正純主此事。我所不與也。還詣正純。正純稱疾不出面。往復數回。而東軍益輿卒。晨夜督責。以至明春。塹壘皆夷。獨存牙城而已。元和元年。正月。兩將軍皆東歸。諸國兵罷之國。淀君游嬉恬安。而荒殘之餘。將士莫所仰給。物議囂然。三月。遣青木一重及大藏正永。請賑於關東。關東不報。客兵交勸秀賴母子再擧。曰。去歳擧天下攻我。而不能取。是世所共知也。今而再擧。必有歸者。乃召募遠近。得十二萬人。上下大喜。於是。大議戰備。數日未決。眞田幸村進曰。今日之事。兩言決耳。可戰也。不可守也。獨有急襲

京師。挾天子以令天下而已。治長兄弟不聽。七隊長乃說曰。城濠墮廢。誠不可比前役。此地三面迫水。而南接平野。敵每至自南。請以我兩軍迎彼兩帥。直衝突麾下。其勝敗天也。議終決。乃急繕守備。柵于外城舊趾。穿塹二尺。四月。東軍先鋒已至京師。兩將軍兼程西上。飛檄諸侯。復急赴大坂。留一重等不遣。使常光氏來言曰。弭兵徙大和七年。則吾修大坂如故還予之。不答。」於是。分軍爲三。大野治長領一軍。七隊長及後藤基次隸之。大野治房領一軍。長曾我部盛親・森勝永・仙石宗也隸之。木村重成領一軍。眞田幸村・渡部尙・明石守重隸之。秀賴具旗鼓。親按視南郊。上茶臼岡山。指揮三軍所嚮。士氣頗奮。然治長矜持太甚。以淀君命抑沮諸將。軍議屢變。長益父子出奔京師。治長益專。治長一夜過櫻門前。有人刺之。不中。走。治長卒追殺之。旦日。撿尸。治房部卒也。城中莫不相猜防。」前將軍潛使人招重成。重成不應。其女兄夫猪飼某應城中召募。創病歸鄉。重成遺書及物。訣之曰。城中近狀無復足觀。諸謀議皆決於母氏。我輩所陳。一切不聽。天下永爲家康之有可知也已。家康與僕有舊。使板倉伊賀數招僕。

定慶。拙修本作定次。
既。川越本作已。
戰。川越本・拙修本竝作勝。

僕受先君命。以屬嗣君。而懷藏二心。心所不安。故雖無一所聊賴。且因循在此。特願速戰死。復何言哉。此刀。僕所常佩服。經數十戰。未嘗蹉跌者。今以贈公。幸愛護之。諸將皆以治長之故。鞅鞅不樂。皆如重成意。兩將軍既至京師。大坂間細狙擊之。皆不成。乃遣大野道見。縱火界浦。奪東軍據貲。遣大野治房。以萬人入大和。攻郡山。走其守將筒井定慶。聞淺野氏擧紀伊軍至。因誘其國民乘虛起兵。紀伊軍乃還救。治房尾之。先鋒塙直次戰于樫井。戰死。治房赴援。不及。既而東軍來自大和・河內。水野勝成・藤堂高虎・井伊直孝・伊達政宗爲先鋒。諸隊長執前議。欲迎之南郊。基次不可曰。野戰勝敗。以衆寡決。今以寡擊衆。不若邀之險阻。臣請以萬人扼國府嶺。擊挫其先鋒。先鋒既挫。後軍必退。頓南都・郡山。不能輒進。吾因其變。以制其勝。至受大軍於曠原。臣所不知也。從之。授基次兵一萬四千。陣平野。又遣薄田兼相・渡部尙繼之。兩將軍使人誘基次曰。苟啓東兵。則封以播磨。基次拜謝曰。今東西決戰。使西强東弱。則歸東矣。今東强西弱。去弱就强。臣之所恥也。雖然。東旨之辱。亦不可不報。報以速死。臣速死。城亦速

川越本・拙修本竝就下有而字。

陷。所以報也。五月。五日。基次勒兵夜發。失道出古市。軍士恟懼。基次曰。此地據林臨水。戰守皆便。宜飮馬以待旦。旦日。治長出助基次。幸村陣道明寺。重成陣若江。盛親陣矢尾。基次不知敵有後繼。不告衆而進。至片山。與水野勝成遇。擊破之。尙・兼相來援。連戰未決。陸奧・美濃・伊勢諸軍夾擊基次。基次盡亡其兵。以十一騎在山腹。使使訣兼相曰。子勉之。吾將死也。乃復進。中銃殪。還至柏原死。兼相恥前役之敗。亦奮擊而死。治長來援。大敗。大谷吉胤戰沒。幸村聞急馳至。尙使人迎而告之曰。吾衆創殘。子請承之。幸村諾而進。橫邀陸奧軍。陸奧軍長騎戰。勁騎八百。馬上發銃。乘烟馳突。無不摧破。伊達氏每以此得志於東國。幸村諳知之。乃引兵上譽田東阜。阜中有凹處。就布陣焉。命其兵皆脫冑委槍。坐以竢指麾。陸奧軍稍近。幸村令曰。冑。及相去數十步。令曰。執槍。敵發銃且馳至。遇槍而沮。又令曰。皆起。敵兵大潰而走。幸村轉陣南阜。收兵。與尙更殿而退。盛親上矢尾堤。望藤堂氏旗。乃退伏堤下。敵先鋒二將以爲走也。徑田上堤。則盛親大呼起。擊走之。重成游兵亦來援。遂斬其二將。重成與井伊直孝相拒若江

堤。擊破其前隊。重成揮槍挺進。所向皆靡。斬敵將山口重信等三十餘人。而其兵死傷略盡。乃據隴而息。敵以生兵乘之。飯島某扼重成曰。盍還城。重成掉頭而進。遂死之。直孝部兵取其頭。獻之前將軍。前將軍撿之。冑纓無餘。而頭髮有香。前將軍歎惜曰。是預決死也。重成伯父宗明戰于山田村。敗退。井伊氏・藤堂氏合勢逼盛親。盛親亦敗退。增田盛次止戰。盛次。長盛子也。嘗仕尾張。前役從東軍。東軍勝則憂。敗則喜。是役。入城屬盛親。以父猶在不名而死。盛親與幸村等自平野退。縱火聚落而入城。三處之軍皆敗。將帥多死。城中失色。諸將議曰。今日期會皆失。各自爲戰。所以不得志。明日諸軍合力一戰。可以決雌雄也。秀賴諮之幸村。幸村曰。臣請陣茶臼山以誘敵。明石掃部自川場出今宮之南。擧火敵背。夾擊其中軍。而主公建旗鼓繼之。事或克矣。從之。旦日。幸村與渡部尙・大谷吉之等。出陣茶臼山。森勝永・竹田永應陣天王寺南。郡良列執桐號牙旗在其後。治長與七隊長陣毘沙門池南。治房與御宿政友陣岡山。津川左近執金瓢馬表在其後。東軍瀰漫山野。左右竝進。前將軍統左。將軍統右。少將忠直・

旌。川越本・抽修本並作旗。

前田利光・本多忠朝・小笠原秀政等爲先鋒。前將軍召候騎問敵狀。對曰。其陣甚堅。又待秀頼親出。頗有鬪志。乃命質子大野治德作書。贈其父治長。治長時巡視至茶臼山。幸村曰。天下之事。決於今日。公宜促主公出。主公出則軍氣自倍。川場軍亦當赴期。治長諾而反城。則秀頼已在櫻門。擐緋甲。穿錦袍。千槍十旌。左右成列。鞍于馬而竢。如秀吉東征之儀。將士踴躍。俄而治德書至。曰。聞城中有約內應者。欲竢右府出擧事。謹勿出。治長危懼。止秀頼而又往。欲與幸村議。東軍左先鋒已來逼。勝永等以銃手相挑。幸村止之。登高而望曰。中軍何不來也。因召其子大助曰。吾族在東。治長常猜我。我當死於此。汝往侍右府。以明我無貳心。大助時年十六。請止倶死。幸村叱曰。汝而死。誰明我志。盍殉右府乎。大助攬涕而去、敵兵益逼。而中軍及川場兵皆不至。幸村謂大谷吉之曰。事皆睽矣。是我死日已。麾兵而進。縱橫血戰。敵衆交至。幸村終死之。年四十六。吉之等皆死。御宿政友初仕越前。後歸大坂。於是。遺書忠直曰。臣無善馬。君猶記舊情。則願賜一匹。以戰死。忠直予之以馬。政友騎焉。自岡山至幸村營。則戰已酣

阿部。川越本・拙修本竝作安部。

畢。川越本・拙修本竝作半。

表。川越本・拙修本竝作標。

於。川越本作于。

矣。曰。此亦不可以死乎。躍馬冒陣而死。勝永與忠朝戰。擊大破之。斬忠朝。遂助永應。與秀政戰。又斬之。明石守重以驍騎三百自川場赴約。與東將水野勝成過。交綏而南。聞茶臼山敗。則轉出生玉。與阿部氏・高木氏戰。不利而走。東軍右先鋒逼岡山。治房擊破其先隊。轉逼將軍麾下。勝永・永應亦犯前將軍麾下。井伊氏・藤堂氏橫擊勝永。勝永退。治長軍代進。要以銃手。不能遏。七隊長邀戰。走之。時日已過午。前將軍使人入城議和。曰。徙封大和。弭兵。淀君乃使秀賴召還治長及速水守久。二人旋旗入城、諸軍望見。相驚擾曰。城中有變也。東軍乃齊進。城兵大潰。秀賴在櫻門。據胡床。迎見治長・守久。大助亦至。敍幸村遺命。語未畢。潰兵大至。秀賴曰。我將出戰決死。守久止之曰。潰兵塡路。不可出戰。徒死徒隸手。寧嬰壁固守。力窮而死。爲未晚也。秀賴從之。返坐于千席館。東軍鼓譟逼城。城中有應之者。焚大野治長第。京口門先破。我庖人大隅某謀反。縱火于庖。延及殿宇。城兵大擾。諸門皆破。郡良列・津川左近擘馬表・牙旗。至千席館。騈跪稽首而言曰。臣等當死于城外。顧所掌表幟。先君所以傳於主公。五畿・七道・四

無。川越本・拙修本竝作莫。弄。拙修本作棄。

海之外。苟有日者。無不親而識之。委之敵人。傳觀播弄。將貽羞萬世矣。故謹奉還耳。良列將自殺。顧謂守久曰。去歲之役。吾獻策。欲襲敵前軍。縱火牙營。而公等弗聽。是終天之憾。事已至此。言之無益。因卸甲。脫其母衣。置之床上。曰。是先君之賜。今而致之。吾事畢矣。遂割腹死。其子兵藏又死。眞野宗信・中島氏種相繼自殺。野野村吉安將入內城。火熾。不可前。乃自殺於二城橋上。堀田正高幾得歸第。手刃妻子而出。遇加賀兵夾入于廳。乃健鬬而死。秀賴奉淀君。將自殺于天主閣。守久止之曰。勝敗常也。請暫待之。乃自觀月樓。上于東櫓。煙燄隨至。治長徙之園莊倉中。與守久・勝永共護之。治長猶恃和議。致書兩將軍曰。群臣願自殺以全右府母子之命。因使人奉夫人德川氏。送致東軍。東軍既取夫人。使四將來監護倉外。命片桐且元錄倉中人名。欲出秀賴母子。四將發銃於倉中。以示絕。倉中皆哭。秀賴悽然。謂守久・勝永曰。吾爲太閤嫡子。而至於此。天也。乃自刃而薨。年二十三。勝永剄之。淀君抱秀賴首。悲號。使氏家道喜殺己。於是。道喜・治長・守久父子・勝永兄弟・津川左近・竹田永應。及堀・伊藤・成田・森島・加藤・

中高。拙修本作二中島一。
渡邊。川越本・拙修本竝作二渡部一。下同。
仕。拙修本作レ任。

高橋・土肥・寺尾・片岡・垣原・小室・淺井・中高等二十餘人。皆殉レ之。治長・重成・渡邊倘竝有レ母。與二北畠氏・湯川氏等婦女十人一皆死。秀頼之未レ死。眞田大助隨二其所一之。衆諭レ之曰。舊臣且有二逃者一。子客將之子。不二必殉一レ之。盍二出走一。對曰。我父命レ我。必與二右府一偕死。終就二倉外一藉レ藁而坐。不レ食者一晝夜。竢二秀頼死一乃自殺。東軍諸將爭赴二牙營一賀二戰捷一。小出三尹。秀正子也。時侍二前將軍側一。前將軍指二城中火一謂レ之曰。如何。三尹瞥然俛レ首曰。臣不レ忍レ視。諸將或有二愧色一。秀頼有二一男一女一。皆庶出。未レ知二所在一。東軍懸レ金大索レ之。男名二國松一。甫八歳。與二其保田中某一匿二伏見農人橋畔一。或睹二其美質一也。捕而獻レ之。斬二于六條磧一。田中持レ之號慟。竟殉レ之。京極氏捕二獻其女一。蜂須賀氏捕二長曾我部盛親于男山一。受レ命縛二之二條城西門一。數日。斬二于磧一。徇而梟レ之。大坂市尹水原石見。匿二二條城側一。藤堂高虎捕レ之。石見殺二三人一而死。渡邊倘。與二治長一約レ爲二後圖一。走至二近江一。聞二秀頼薨一。乃自殺。治長任子。後皆賜レ死。治長弟治氏。初與レ兄不レ協。往仕二前將軍一。至レ是自殺。使下人以二暴疾一聞上。治氏弟道見。磔二于界浦一。治氏兄治房。與二明石守重・仙石宗也一逃去。伊東長次・青木一重竝被レ赦。

懣。拙修本作慚。

元和二年

元和五年

寛永八年

眞田幸村妻。在紀伊。爲所捕獻。亦被赦。削髮爲尼。其餘大坂遺臣七十二人。卒六百人。諸出質。及通款城中者。皆被誅夷。增田長盛以子故賜死配所。兩將軍收城內燼餘。得金二萬八千枚。銀二十四萬兩。以金馬各二賜井伊直孝・藤堂高虎。以賞其功。爲片桐且元置邸駿府。徙居焉。且元愧懣成疾。未至而卒。是役也。加藤嘉明・黑田長政皆請而從。木下利房立功自贖。得復其邑。松下重綱亦以功得益其邑。重綱祖父之綱。卽秀吉微時所仕者也。之綱死。子吉綱嗣。關原之役。屬德川氏。其子爲重綱。至是再益邑。至二萬石。凡前後之役。豐臣氏舊臣從攻城者甚衆。獨福島正則不從。二年。前將軍薨。五年。正則褫封。放于信濃。時正則在江戶邸。將軍在京師。使使者來就第傳命。正則默然久之曰。使前將軍在。則吾將一言焉。今復何言。乃起入內。內中騷擾。久之。挈其兩女子出。流涕謂使者曰。吾欲與足下決死也。將先殺女兒。終不忍加刃。當甘心受命。因赴配所。將軍又使使率山陽・南海諸侯。收其封安藝・備後。其老臣留守廣島城。不肯奉命。竢正則書至。乃致城而去。其弟正頼爲大和宇多城主。先四年褫封。寛永八

寛永十四年
肥前。拙修本作肥後。
川越本標註云。一無冥字。
佐。川越本作助。
槀。川越本作稾。
視。川越本作見。
余。川越本作今。
川越本其字在民力上。

年。故加藤清正子忠廣。亦奪其封肥後。放于出羽。十四年。故小西行長遺臣起兵肥前。伏誅。豐臣氏既亡。有令毀豐國廟。獨存東山方廣寺及高臺寺。高臺者。北廳所建以祈秀吉冥福也。加藤・福島氏以其親屬助役。爲秀吉立一小祠。秀吉在時。雖有所嬖。皆置之別宮。獨與北廳同居。北廳。佐秀吉定天下。多所裨益。常戒之曰。願良人勿忘槀席瓦缻時也。及秀吉薨則削髮。視秀頼猶其自出。使親屬諸將輔翼之。未嘗與關東開釁。北廳與諸將前後皆沒。而秀頼孤立。以至於亡矣。高臺之祠。至今猶有秀吉夫妻像云。

外史氏曰。余遊東山。謁太閤像於高臺之祠。祠門蓋以征韓艦材造之云。嘗讀韓人所紀。曰。明遣使者。窺太閤相貌。矮而黑。無他異。唯見其目光烱烱射人。不可仰視。余觀其像。如信然者。嗚呼。使太閤生於女直・靺鞨間。而假之以年。則烏知覆朱明之國者不待覺羅氏哉。蓋其爲人。酷肖秦皇・漢武。而雄才大略遠出其右。夫漢武乘豐富馭區宇。不論可也。秦皇挾六世之積威。蹶衰殘之六國。孰與太閤之徒手奮起。制服群雄。然其過用民力。以取絶嗣之禍者。則與秦等。彼

不敢。川越本作敢不。

藉累葉之烈。猶且不免。況以匹夫暴起者乎。然以匹夫得天下。非如承祖業而重失之者。土地非其固有。故不惜分其利也。人民非其固畜。故不愛用其力也。夫其不愛民力。固足以招危亡。而不惜地利。又不可以計久安。此二者。其勢相持。而其禍相因也。然其初之所以速得天下者。無所愛惜也。譬如閭巷之人博而獲大勝。使其不勝。一窶人耳。苟勝矣。乃大揮霍之。招其朋類。醉飽喧呼。務取快一時。唯然。故暴富而人不怨。太閤起人奴。而主大國。固已踰其所望。乃遭遇變故。投機赴會。動得如意。皆初念之所不至。而四顧當時將帥。皆其儕輩。或其所不敢比肩。一旦立其上。而常恐其不服己也。以爲吾由微賤而得司利權。苟自封殖而不分於人。人將吾爭。而吾志不可速成也。故割膏腴。頒金帛。動舉數州之地以賞戰功。視之不啻如糞土。彼其鼓舞奔走一世之豪俊。以驟獲志於天下者。用此術也。然吾糞土授之。彼亦糞土受之。未嘗德我。而以爲當然。彼之所求無窮。而我之所有有盡。以有盡供無窮。其勢不得不取之於海外以塞之。於是。七道之民。裹其未愈之瘡痍。以趨不可知之地。連年無所成。而其力竭矣。

齧。川越本・拙修本竝作嚙。下同。

而柩肉未冷。群雄各有自立之心。蓋無足怪者。故太閤之不愛民力。由其不惜地利。而其禍遂至於此。皆其自取爾。雖然。以太閤之雄才大略。八歲定六十餘國。則以其餘力逞之海外。固其宜也。豈唯太閤爲然。當時猛將謀夫雄傑之士。布滿天下。天下已集。而其桀驁巧狙。喜事好功之心。猶未已也。譬之鷙鷹俊狗。其噬齧搏擊之力。用而有餘。則必至逼人。故朝鮮之役。是令天下群雄肆其噬齧搏擊。以殺其力者也。然徒殺其力。而使其無所獲。則彼將不復我之馴服。而反施其噬齧搏擊於我。嗚呼。養之而不得其術。安往而可也。能飽之。而不能節之。能發縱指示之。而不能收而寧之。故太閤之於群雄。苟制服之一時耳。豈長久之計哉。其所以速得天下。乃其所以速失之也。梁武帝有言。自吾得之。自吾失之。無復所恨。則太閤其亦無所恨耶。

日本外史卷之十七終

因又。拙修本作又因。

日本外史 卷之十八

徳川氏正記

徳川氏一

我徳川氏。出於新田義重。義重者。清和天皇八世裔也。天皇之孫經基。始賜姓源氏。降爲武臣。其玄孫義家。義家子義國。居上野。食新田・足利諸邑。生義重。及義康。義重氏新田。義康氏足利。共助宗子源頼朝。以王命討滅平氏。頼朝爲征夷大將軍。開府關東。令義重守寺尾城。義重有五男。其第四曰義季。義季食徳川邑。因氏焉。稱徳川四郎。義季生頼氏。頼氏敍從五位下。任三河守。食世良田。因又號世良田氏。頼氏生敎氏。敎氏生家持。家持生滿義。滿義生政義。政義生親季。當是時。宗子新田義貞奉後醍醐帝詔旨。討北條氏于鎌倉。滿義助之。自稻村崎入。擊破賊將安東昌貫。北條氏既滅。足利尊氏反。天下武人皆黨之。獨

元中

新田氏擧族勤王。官軍數失利。帝播遷南山。義貞戰沒。宗黨多死王事。帝崩。遺詔兪眷新田氏。以圖恢復。後村上帝嗣立。義貞子義興・義宗。擧義上野・信濃間。不克。死。政義父子蓋殉之矣。尊氏孫義滿爲征夷大將軍。開府京師。以族氏滿管領關東。親季子曰有親。爲右京亮。元中中。同宗族從義宗子貞方。匿信濃。爲氏滿所覺。遣兵鏖之。有親與貞方脫走。入陸奧。起兵。氏滿大兵來擊。我衆潰。有親挈其二子。逃入上野祝人村。匿舊識民家。聞鎌倉執事上杉氏遣吏募索新田氏族甚急。欲手刃二子而自殺。會、僧尊觀來過。變容貌。從之而西。尊觀者。蓋後村上帝子。帝無子。養龜山帝孫恒明。及帝生子。恒明避爲僧。是爲尊觀。後爲相摸藤澤寺主。周游諸國。謂新田氏先朝所眷也。爲謀所以保護之。乃權以有親及其長子。爲己徒弟狀。有親呼德阿彌。長子呼長阿彌。皆削髮。少子猶幼。未削髮。呼德壽。竝攜之去。過三河。寓大濱村寺。時尙連歌。寺僧與近村諸豪爲歌會。以娛尊觀。松平・酒井兩村長亦與焉。而長阿彌充書手。德壽周旋執事。兩村長熟視德壽容止。相語曰。是非凡種也。微叩之尊觀。尊觀察其無他。具語以故。

開。川越本・拙修本竝作闢。
糺。川越本・拙修本竝作糾。
永享
寛正六年

村長皆有女無男。欲分贅二子。尊觀許之。於是。德壽養於松平氏。及長。命名泰親。築室松平村。以奉有親焉。長阿彌亦蓄髮。名親氏。稱雅樂助。後生子廣親。是爲酒井氏也。泰親養父信重稱太郎左衞門。泰親襲稱之。爲村長。闢榛莽。達道路。性壯武。喜施。振貸貧民。而不責償。隣近親附。泰親因從容謂衆曰。吾爲仇敵追蹙。流寓至此。稍得安處。願積歲月。開地聚衆。興復先業。諸君能助我乎。衆對曰。敢不死生以之。其中有嘗有罪宥死者五人。糺衆略中山七邑。獻之。泰親分其歲入賞之。新田氏遺臣稍多來從者。後花園帝永享中。大納言平實照以罪貶三河。泰親善視之。及其赦歸。護入京師。實照爲奏請授一官。朝廷憚足利氏。不輒許。後敕除州目代。遂任三河守。敍從五位下。復世良田氏。泰親有六男。使長子信廣襲居松平村。謂次子信光武類己。以爲嗣。幼字次郎三郎。初守岩津。嗣立居岡崎。稱和泉守。善用兵。攻大給・北給幷之。又襲取安祥。寛正六年。額田民作亂。州守護細川成之不能定。幕府下敎於和泉守。一戰平之。和泉守生男女四十餘人。親戚蕃衍。次子親忠嗣。幼字竹千代。長稱藏人。居岩津。勵精爲政。

明應二年

永正三年

杯。川越本・拙修本並作盃。

常謂其老臣曰。先考嘗謂養一士多於獲一邑。然混忠邪。濫賜予。則徒費民力
耳。明應二年。擧母・寺部・上野・八草・伊保五城合兵來攻。藏人以三千人邀擊于
伊田。破之。建寺鴨田。名大樹寺。以弔陣亡士。藏人生九男。曰。親長・乘元・長親・親
房・超譽・親光・長家・長忠・乘清。而親長守岩津。乘元守大給。長親爲嗣。居安祥。稱
藏人。除出雲守。定西三河。而東三河猶屬今川氏親。氏親者。駿河守護也。永正
三年。氏親與其將北條長氏。率大兵來攻。八月。攻岩津。出雲守將五百騎赴救。
謂其騎曰。衆寡不敵。如何。衆請前決死。出雲守曰。汝等。世盡忠我家。而我未能
厚報。今亦爲吾決死。吾所深愧。因以大桶貯酒。泛杯數十。自飮一杯。瀉餘瀝桶
中。曰。事急。不暇觴各人。交就飮之。衆感奮。夜渡矢矧河。襲駿河軍。宇津宮忠茂
曰。我必捷矣。果捷之。收軍西岸。氏親・長氏遁去。戸田憲光以田原降。出雲守問
忠茂曰。何以知捷。曰。長氏負寵侮士。士無鬪志。是以知之。忠茂者。新田義貞將
泰藤五世孫也。後因其所居稱大久保氏。出雲守生五男。曰。信忠・親盛・信定・利
長・義春。出雲守老。信忠爲嗣。仍居安祥。任左京亮。左京亮不恤政。嬖臣用事。國

大永三年

頸。正本作剄。

享祿二年

拙修本無享祿二字。川越本標註云。諸本無享祿二字。蓋係闕文。今據他書補之。

內皆叛。群臣交諫。弗聽。因相聚謀廢立。左京亮覺之。親戮一人。左京亮生三男。曰清康・信孝・康孝。乃召群臣曰。我悔吾非。而不可追也。清康雖幼有器局。宜以代我。大永三年。老于大濱。清康立。仍居安祥。小字次郎三郎。幼聰達。每見舊臣。訪古今成敗戰鬭事。憑膝捋鬚以爲樂。或問某何在。聞其死且戰沒。輒痛傷之。嘗當食受謁。呼衆前之。以其所御椀飲之酒。衆不敢。清康曰。人生等耳。或爲君。或爲臣。分可隔。情可隔乎。強注之。皆霑醉。退相謂曰。今日之酒。吾輩頸血也。時族松平親貞據岡崎及山中。以掠傍近。大久保忠茂曰。先拔山中。則岡崎不攻而下。乃夜襲取山中。親貞輒降。以岡崎爲三河要地。徙居之。國人稱曰岡崎公。遂徇下西三河豪傑五十餘姓。欲賞忠茂。問其所欲。不答。強而後答。曰。願賜城下市租。岡崎公許之。而疑其貪也。忠茂盡召市人。以君命除其市稅。四方商旅。聞之爭至。岡崎終以是富實矣。享祿二年。吉田城主牧野傳藏欲起兵幷西三河。岡崎公將兵擊之。出伊奈。伊奈城主本多正忠迎降。正忠之先曰助秀。居豐後本多鄕。子孫邑于尾張。尋徙三河。擧族仕德川氏。而正忠尤大。岡崎公幷其

說。川越本作悅。

享祿三年

天文二年

横外。川越本標註云。一作摸外。

海龍。川越本作龍海。

兵進縱火御油。傳藏濟吉田川。毀舟而戰。我兵不利。本多信重戰死。佐野與八請退。岡崎公不肯曰。彼勝而驕。可破也。乃進戰。與八死之。叔父信定等力戰。遂破之。斬傳藏。遂攻吉田。正忠攻破其東門。遂陷之。岡崎公入城撫士民。遂攻下叛將戸田憲光。平東三河而還。會飲于伊奈。正忠獻盤殽。藉用葵三葉。岡崎公視而說曰。吾凱旋得此。自今當以此爲徽號。初德川氏因宗族。以中黑爲號。於是兼用三葵。是歲。出兵於尾張。略織田氏地。取品野以賜信定。三年。攻熊谷重長于宇理。自攻北門。信定以從子親次爲先鋒。攻南門死。初我僕人岩瀨者殺人。岡崎公愛其勇。宥死逐之。時在城中。夜縱火爲內應。我兵遂拔城。賞祿岩瀨。重長走。保高力。稱高力氏。遂來降。天文二年。與廣瀨・寺部二城主戰于岩津。破之。冬。信濃人來侵。迎擊大破之。岡崎公嘗夢有文在其握。曰是。覺而問衆。衆莫知其解。有僧横外者曰。是字。日下人也。日下以一人握之。公將大興乎。然握而未啓。在其子孫乎。岡崎公大喜。爲建海龍禪寺。岡崎公威名日著。甲斐國主武田信虎遣使通好。美濃・尾張諸城主亦有願附者。公一日慨然言於將士曰。我

川越本・拙修本並不屈之間有可字。

家與足利氏族望相敵。爲其所剪滅。削跡屈勢。以至於此。今仇家衰亂。天下之事可知矣。冀藉汝衆之力。糾合義兵。樹幟皇都。得一雪累世之恥。今我東有今川氏。西有織田氏。先攻織田氏。以開西上之路。宜厲兵峙糧。以竢吾令。衆奮躍聽命。十月。勒兵萬人。自將西上。入森山。信定居上野。稱疾不從。初信定負勢驕士。落合某者。因事抗之。衆爲危之。公曰。士者。先公以來所愛養。叔父傲之非也。彼不屈撓。可嘉。信定銜之。親次之死。信定不救。又爲公所詬責。深懷慙恚。於是。欲乘虛作亂。將士請且止西伐。公曰。何足介意。今大擧徒歸。士氣沮敗。納侮四鄰也。遂欲進攻清洲。國老安倍定吉從軍。數以書勗信定。有流言。定吉與信定通謀。定吉謂子彌七曰。衆嫉我寵。造作語言。主公必察之。卽不察見誅。愼勿以爲怨。宜竢時鳴寃。十二月。軍中馬逸。衆大騷。彌七奉刀侍公側。謂定吉已被殺。惶急。拔刀弑之。植村榮安自傍誅彌七。定吉聞之將自殺。松平信孝止之。時出雲守猶在。將士護喪歸。請命焉。初岡崎公娶靑木氏。生廣忠。乃立之。以定吉無罪。宥使傳之。織田信秀聞我內變。擧兵來侵。我見兵八百。以季父康孝爲將。迎

天文五年

天文六年
姪。正本作任。

天文七年

天文九年

戰伊田。植村榮安先進。高力重長及子長安戰死。信秀戰敗。請和而去。信定有寵於出雲守。遂圖自立。定吉奉廣忠。出奔伊勢。信定遂立。居上野。自結於織田氏。定吉密與弟正定。及大久保忠茂子忠俊・酒井廣親孫正親・正親從子忠次・石川清兼・石川數正・成瀨正義。通謀。請援於今川氏。以納廣忠。五年。冬。護入牟呂。三河人多往歸之。六年。信定來攻。忠俊佯從其軍。射書城上。期以四月迎之。信定危疑。宣言曰。我初無害姪孫之意。徒誅諸亂人而已。乃引兵還。數與將士誓。忠俊三上誓書。而密告岡崎留守松平信孝。信孝曰。吾亦欲之。未得間耳。念公等事不成死。誰繼之者。吾且全身焉。乃稱疾赴有馬。五月。忠俊等密迎廣忠入岡崎。將士爭謁。出雲守聞之。喜曰。吾恐駿河兵因以侵我。故拒之耳。兒我嫡曾孫也。因命信定折節事之。信定不得已來謁。信孝亦歸。廣忠任三河守。忠俊以下受賞。忠次稱左衞門尉。自父氏次。稍積功勞。於是娶三河守妹。尤見親重。七年。信定卒。衆心乃定。定吉羞爲逆家。自絕其嗣。婢有身。出嫁井上氏。井上氏。實安倍氏胤也。九年。六月。織田氏兵來。攻松平長家于安祥。三河守使松平康

天文十年
天文十一年
復。川越本・拙修本竝作又。
天文十二年
天文十三年
天文十四年
天文十五年

信等援之。不利。長家及松平康忠・林政緣等皆死。松平利長・松平忠繼苦戰卻之。十年。三河守娶刈谷城主水野忠政女。十一年。歲次壬寅。十二月。二十六日。生男于岡崎。有奇質。出雲守視之曰。此兒必揚名於天下。令酒井正親・石川清兼舉之。因故事命幼字竹千代。是歲。秋。織田氏復來侵。乞援於今川氏。今川氏遣僧大原。以三萬人來救。與戰于小豆坂。互有勝敗。冬。復來侵。內藤清長擊卻之。十二年。水野忠政卒。子信元叛。附織田氏。三河守難今川氏之意。與之絕婚。再娶戶田憲光女。十三年。八月。出雲守卒。織田信秀遣族敏宗攻安祥。敗去。信秀自將。代攻拔之。佐崎城主松平忠倫叛降。爲信秀守上輪田。以逼岡崎。十四年。三河守自將。擊尾張兵于清畷。走之。追至安祥。與城兵戰。大敗。殆不免。本多忠豐止戰死之。三河守得脫。取忠豐金扇馬表。置之牙營。以旌其忠。松平信定子清定據上野叛。初酒井正親兄忠尚譏人而不遂。慚而退居於是。往歸清定。三河守攻之。不利。十五年。三月。近臣岩松八彌酗。入公寢。爲逆。不成。三河守拔刀逐之。八彌走出。植村榮安入。遇之橋上。相搏墮濠。松平信孝提槍來臨濠曰。

天文十六年

子縱之。我刺之。榮安曰。縱則逸。併我刺之。信孝猶豫。榮安遂斬八彌。九月。三河守自將攻上野。大久保忠俊姪兒忠世力戰。清定・忠尙皆降。置清定于櫻井。令忠尙守上野。時松平信孝負功橫肆。親戚死者。輒幷其邑。衆謂復生一信定矣。十六年。正月。信孝如駿河。衆請乘其不在收其邑。從之。信孝至。無所歸。訴之今川氏。今川氏詰三河將士。將士告故。信孝乃走輪田。依松平忠倫。終降織田氏。酒井忠尙復叛。應之。九月。我兵攻信孝。戰于亘邑。鳥居忠宗死之。以亘賜忠宗父忠吉。忠吉八世祖忠景。與栗生顯友者。事新田義貞。及敗。共匿于亘。至忠吉。與栗生某俱出。仕岡崎公。栗生後爲大番頭。十月。忠倫將導尾張兵取岡崎。三河守遣刺客殺之。織田信廣代守輪田。益築六砦。三河守乞援於今川義元。義元徵質子。乃以世子竹千代應之。生六年矣。與諸將士質五十餘人東赴駿河。外舅戶田憲光陰通款尾張。佯以好迎。館于觀潮坂。馳使告尾張曰。公欲取三河。則莫若奪是質。信秀大喜。遣其將林正成等赴田原。以錢五百貫賜憲光。岡崎人森平太者。爲正成部卒。潛來我館。戒曰。戶田氏以郎君爲奇貨。公等未之

舵。正本作柁。

天文十七年

知乎。因告以故。我衆不信。且曰。憲光來說曰。此至駿河多大川。雨而暴漲。不若由海路也。衆從之。護世子上船。正成乘別船從其後。轉舵至熱田。岸上有兵。與從船相招。天野康景猶幼。在世子傍。覺變。乃謂其僕曰。平太之言信矣。比上岸。汝亟混敵兵。走歸岡崎。具白所見。已而上岸。正成納世子於大宮司。康景僕走歸告故。上下大驚。康景之先。亦新田氏遺臣也。已而信秀使至。曰。貴息在西。公宜背東鄕西。不則非貴息利。三河守答曰。欲殺卽殺。吾曷以一子故。失信隣國哉。信秀怒。錮世子於天王坊。備其艱苦。生母水野氏。再嫁於尾張人久松俊勝。與熱田近。遣家士平野某・竹內某存問之。給以衣物。十七年。三月。今川義元將兵來援。至安祥。三河守并其前軍。擊尾張兵于小豆坂。走之。酒井正親獲敵將鳴海大學。而織田信廣猶留守安祥。四月。松平信孝來攻岡崎。大久保忠俊・酒井正親等伏兵。射殺之。三河守泣曰。盍生致之。是月。復擊破尾張兵于重原。遂攻八草・梅坪。信秀自將來至西野。我兵堅壁不出。信秀侮之。進次柳河。我兵設伏雨射。長坂信政先馳之。信秀大敗走。信政素以勇著。岡崎公嘗曰。長坂每戰

天文十八年

聚。拙修本作衆。

大原。拙修本作大源。

弄。川越本作我。

血於槍。因呼曰長坂血槍。十八年。三月。三河守卒。年二十四。訃至熱田。世子哀慕如成人。三河守性猜忌。將士不親。及卒聚議。或曰。與尾張和。速迎世子。或曰。駿河強大。宜修舊好。徐計迎之。議未決。今川義元聞我喪曰。織田氏擁孤兒臨三河。三河必附之。急遣其將朝比奈泰能來守岡崎。將士乃附駿河。攻安祥。不利。本多忠豐子忠高死之。十一月。義元益發兵。使僧大原助攻安祥。時信秀已沒。子信長嗣。發兵會戰。遇伏敗走。城兵出救。我兵與援軍夾擊破之。追北取其郛。信廣僅嬰內城。信長至鳴海。不敢進。大原遣使謂之曰。公坐視信廣。盍以竹千代易之。信長不許。林正成・平手政秀皆諫。乃許之。於是。尾張・駿河會盟于笠寺。信廣西歸。而嗣君得歸岡崎。居十餘日。往質于駿河。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・阿部正次・高力清長・植村榮政等二十餘人。養卒百餘人從之。義元置之于宮崎。使來島某監焉。遣其兵守三河諸城。以松平重吉・鳥居忠吉監租賦。輸之於駿河。諭將士曰。竹千代猶幼。吾當權領國務。竢其長返予。自是。每有兵戰。驅三河人爲先鋒。平時命以賤役。將士不敢辭勞。獨願嗣君早還國。嗣君在

天文二十年　二十。川越本・拙修本竝作レ廿。下同。

天文二十三年

弘治元年

弘治二年

川越本・拙修本竝刀下有二報之二字一。

涙。川越本・拙修本竝作レ泣。

宮崎。供給甚薄。衣食不レ足。鳥居忠吉家素富。常送二錢帛一。又遣二其次子元忠一侍レ之。」二十年。嗣君甫十歲。五月五日。出二游安倍河原一。觀二兒童石戰一。一群百五十人。一群倍レ之。觀者爭就二其衆者一。嗣君在二僕背一。命就二其寡者一。僕怪問レ故。嗣君曰。衆者。自恃二其衆一。寡者。自知二其寡一。寡者勝矣。果如二其言一。義元聞レ之曰。所レ謂將門出レ將者也。」二十三年。嗣君始擐レ甲。弘治元年。義元出二兵尾張一。攻二蟹江一。松平眞乘・大久保忠俊等七人力戰。二年。正月。嗣君加二元服一。義元爲レ賓。使二其族將關口親永理一レ髮。命二名元信一。稱二次郎三郎一。妻以二親永女一。三河將士來賀。或獻二駿馬一。乃納二諸將軍足利義輝一。賜二手書及佩刀一。僧大原。義元庶父。爲二清見寺主一。而數將レ兵。嗣君從讀二書史一。受二兵法一焉。」三月。松平義春代二嗣君一統レ師。攻二奧平貞延于口近一。死レ之。嗣君聞レ之。潸レ涙嘆惜。左右感動。義元又城二福釜一。使二酒井忠次等八將守一レ之。尾張將柴田勝家來攻。大久保忠世・弟忠佐等善戰。幾得レ勝二家一。」是歲。嗣君年十六。從容謂二義元一曰。僕幼離レ國。流二寓尾張・駿河一。有レ年二於此一矣。願得下一歸二鄉里一。拜中掃先人墳墓上也。義元許レ之。於レ是。始歸二岡崎一。三河父老聞而大喜。爭出迎レ之。駿河將山田某在二內城一。嗣

弘治三年
永祿元年

君避之入外城。以延見將士。鳥居忠吉離次進。握嗣君手曰。臣老矣。不能效驅馳。特爲郎君置倉廩峙糧食。郎君以此多養兵士。揚武四方。臣或保餘年。猶得親目之。因嗚咽而泣。嗣君亦泣。嗣君於是更名元康。稱藏人。三年。春。復如駿河。永祿元年。義元謂嗣君曰。西三河公舊領也。而其諸城多叛歸信長。子盍擊而復之。嗣君曰。固所願也。二月。歸岡崎。盡會宗族將士議戰。先攻寺部。縱火外郭。城將鈴木重教出戰。不決。本多重次先登。其一子・二弟皆死。嗣君勵衆奮前。擊走重教。斬首百餘級。遂攻廣瀨。信長遣其將津田兵庫來救。大久保忠世與鬭斬之。石川淸兼說曰。郎君始臨陣。兩戰兩勝。斯已多矣。宜全勝養威也。乃凱旋岡崎。使松平家次守品野。三月。尾張兵攻之。家次夜襲擊。獲五十餘人來獻。後松平信一代守。又襲敗敵兵。四月。嗣君復如駿河。義元遺佩刀賀捷。納山中邑三百貫。是冬。本多廣孝・石川淸兼・天野景隆往請義元曰。小主人漸長。願如約。

永祿二年

義元諾而未果。二年。三月。關口氏生世子信康。義元時有西上之志。織田信長聞之。修鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部諸城。分兵守之。鳴海・大高・沓掛皆

鳥居。正本・川越本竝作鳥井。下同。

永祿三年

降於義元。義元遣鵜殿長持守大高。岡部長教守鳴海。已而大高告糧竭。義元使嗣君納糧焉。而城左右皆敵寨。衆難之。嗣君時年十八。以千騎護運而往。値信長在鳴海。使鳥居信吉・杉浦勝吉等候視之。信吉曰。敵欲邀戰。勝吉曰。彼不下山。是不欲戰也。嗣君然之。乃分兵爲向寺部・梅坪。縱火邑里。鷲津・丸根兵望烟馳援。嗣君則以麾下八百爲三隊。納糧大高。收兵而還。信長視我陣整。不敢犯。是歲。嗣君再徇西三河。復赴駿河。三年。五月。義元將四萬騎攻信長。至池鯉鮒。使嗣君攻丸根城。城兵爭出。嗣君曰。彼寡於我。當守而戰。是決死也。我撓以弓銃。乘機拔之可也。既而前鋒戰酣。麾下繼之。遂斬城將佐久間盛重。贄氏信先登。遂拔其城。駿河將朝比奈泰能亦拔鷲津。義元既取諸城。以大高當敵衝。欲得一勇將守之。問之於衆。衆曰。松平藏人其人也。乃使嗣君守大高。而自進陣桶峽。恃勝不設備。信長乘風雨。潛兵自間道襲擊。義元敗死。其諸將聞變皆走。駿河兵在大高者亦逃亡。我將士說嗣君曰。今川公既死。我獨爲誰守。不若全兵而歸也。嗣君曰。當審其實然後班師。急遽解走。而事若出謬傳。則貽笑天

下矣。水野信元在刈谷。私使來告曰。信長獲義元。將遂復諸城。宜乘夜速去。嗣君曰。水野雖我舅氏。而敵部將也。未可輕信。遣人偵之。報曰。信矣。衆爭勸還。嗣君曰。夜行恐失道。宜俟月出。彼能來。我亦能戰。頃之月出。乃整兵東還。土寇爭起。本多百助數返戰。達于今村。將入岡崎城。以爲義元在時未有還我之言。今乘其死取之。不義也。駐軍于大樹寺三日。駿河戍兵棄城去。嗣君曰。彼棄而我取。可矣。二十三日。遂入。嗣君六歲出國。十四年而得復歸焉。士民讙呼。國內諸城主來謁者。相踵於門。而其屬織田氏者。不肯降。嗣君乃將兵。攻擧母・梅坪・廣瀨。廣瀨兵拒于拂楚坂。我兵奮擊走之。遂攻沓掛。縱火城下而還。城兵追躡。大久保忠俊殿而還。鳥居元忠有首功。嗣君欲賞之以功狀。辭曰。功狀者。游士所以藉口也。臣矢不事二君。莫用功狀爲也。」

六月。信長謂水野信元曰。吾既獲義元。以爲子之甥當不戰而降。今乃强項如此。信元恐嫌疑。發兵攻岡崎。嗣君邀戰于石瀨。兩軍皆相識。故接戰尤厲。松井忠次傷股于銃。進斬其銃卒。明日。戰刈谷下。交綏。復攻寺部・擧母。皆拔之。進至山中。攻醫王山寨。久松俊勝先登。敵

永祿四年

岡城。拙修本作岡崎。

小。正本・拙修本並作少。

以槍鏦其肩。俊勝舉刀截槍幹。入寨縱火。衆繼之。遂取寨。嗣君乃使人言於義元子氏眞曰。公爲先公一戰。僕請先焉。不答。氏眞昏懦。嬖臣三浦義鎭。義鎭生父小原鎭實。並專國政。讒德川氏有異心。氏眞又視岡崎勢寖熾。有猜防之心。四年。二月。水野信元來侵。復邀戰石瀨。破之。遂攻廣瀨・伊保。板倉重定據中島不下。遣松平好景攻之。重定退保岡城。遂走佐脇。乃以其邑賞好景。信長素有霸心。欲出兵京畿。而武田信玄在甲斐。北條氏康在相摸。皆窺其後。信長患之。會、水野信元往說之。曰。僕甥以氏眞故抗於尾張。其實怨氏眞。可誘爲我黨。而彼雖小弱。天質剛鋭。必不肯請和。公以力取之。恐費歲月。不若自我結和。使彼當東面。而公專略其西。霸業成矣。信長大喜曰。是得我心。乃使瀧川一益來就石川數正求和。信元又使使來勸之。嗣君召諸將士議之。酒井忠次曰。我以微力介二大國。而圖自立焉。非便計也。氏眞忘仇廢武。沈溺酒色。不足與有爲明矣。與信長和便。嗣君曰。念固如何可背舊好乎。石川家成・酒井正親曰。忠次言是也。嚮義元佯爲好意。歲收我食。月戰我兵。而每餧我於敵鋒。丸根・大高之事。

可以見已。宜速許尾張矣。質之在駿河者。取之非難。氏眞重與我絕。必不能害也。嗣君曰。及吾幼時。我舊臣多膏鋒鏑。吾常傷於心。因泣下。終許和。信長大喜。定國界。解兵戍。遂請嗣君來盟。許之。酒井忠尙在上野聞之。恐其質之死于駿河也。乃來說曰。信長意難測。可和。不可往。今君室家皆在駿河。彼何信我乎。嗣君曰。業已定約。不當背也。忠尙不懌。乃去。左右慮其反。請追而誅之。嗣君曰。彼言自有理。且未必反。忠尙稱疾不出。信長修道供帳。至期。嗣君從百餘騎赴尾張。信長使林通勝等迎之熱田。嗣君憩于正海寺。遂至清洲。入城門。觀者喧騰。本多忠高子忠勝。小字平八郎。時年十四。擧薙刀先驅。厲聲曰。我君來此。汝輩胡無禮也。衆皆讋伏。信長出迎。導入內城。植村榮政操刀而從。衞士叱之。榮政瞋目曰。吾植村新六也。奉主人刀。何渠叱乎。信長揮衞士曰。我聞新六名久矣。勿怪。乃盟曰。兩家戮力。征討東西。織田有天下。德川爲之屬國。德川有天下。織田爲之屬國。遂饗嗣君。信長賜寶刀於榮政曰。汝今日擧動。如樊噲在鴻門。畢饗而還。信長郊送。使通勝等來謝岡崎。氏眞聞之怒。使使來詰。酒井正親使人

賜。川越本●拙修本竝作貺。

松井。拙修本作松平。下同。

進。川越本・拙修本並作前。

往駿河。因三浦義鎮。謝曰。三河之孥。皆在駿河。豈有貳心。獨病尾張日强大。勢將及我。故佯和以紓旦夕耳。氏眞不能詰。先是。吉良義諦守東條。牧野成定守西尾。以黨氏眞。欲圖岡崎。三月。嗣君攻東條。不下。使松平好景以中島備之。東三河豪姓菅沼・奧平・設樂・西鄉諸族。皆背氏眞來降。四月。義諦攻酒井忠尙于上野。好景救之。義諦窺其虛。徑襲中島。好景還戰走之。至善明堤。遇敵大至。遂戰死。嗣君築津平・小牧。命松井忠次・本多廣孝守之。以備東條。五月。氏眞攻東三河。諸豪善拒。七月。嗣君自將攻牛窪。使別將攻鳥屋。鳥屋陷。本多忠勝與叔父忠眞從軍。忠眞鏦斃一人。顧忠勝取其首。答曰。孺子不欲因人成功。自斃一人馘之。忠眞啓狀曰。平八郎將行爲君用也。嗣君大喜。五月。荒川城主吉良賴持。與兄義諦有郤。因酒井正親請降。俱攻拔西尾。走牧野成定。遂攻東條。東條裨將富永景通陣藤波畷。欲攻小牧。忠次・廣孝皆來。合於正親。邀擊景通。景通引弓擬廣孝。廣孝直進刺殺之。餘兵皆走。追北至城。降義諦而還。嗣君以義諦邑賜正親。以景通邑賜廣孝。以津平賜忠次。使鳥居忠吉・松平信一守東條。妻

賴持以異母妹。五年。三月。嗣君使松平清善攻西郡。不利。更使久松俊勝・松井忠次等攻之。忠次招甲賀間諜十八人。入城擧火。外兵應之。城將鵜殿長持走。追虜其二子。命俊勝守西郡。駿河兵來爭。不能取。氏眞欲殺我質。以我外家關口親永爲豪宗。不敢發。石川數正欲往護質。度嗣君不許。留書而往。聞氏眞甚惜鵜殿氏二子。則因親永請易質。許之。乃馳使還報。嗣君大喜。送二子於駿河。數正乃奉關口氏世子信康而歸。已而氏眞悔之。怒殺親永。擁我將士質。以誘降之。我將士無一人應者。卽盡串殺其質。嗣君聞之哀痛。四月。引間城背氏眞來降。七月。當山亦降。已而皆爲駿河兵所拔。九月。駿河將朝比奈泰長來襲五本松。殺其城主西鄉正勝。正勝子元正在月谷。聞變馳援。見父已死。赴駿河軍。死。其弟清員爲泰長所捕。行歷萬丈谷。奮袂自投。遂脫歸。因菅沼定盈告狀。嗣君命承父兄後。辭曰。臣兄有遺孤。臣請佐焉。嗣君義而許之。嗣君自將。攻板倉重定于佐脇。佐脇與牛窪・楡木合兵。拒于坂井。我前軍敗走。渡部守綱・夏目正吉殿戰。嗣君聞敗馳救。擊斬重定。拔佐脇・八幡二寨。六年。二月。遣松井忠次攻

針崎。川越本・拙修本並作鍼崎。下同。
剽。拙修本作標。

拔岩略寨。三月。自將。與駿河將小原鎮實戰于小坂井。破之。五月。放鷹近郊。至深溝。故松平好景子伊忠在焉。邀而饗之。賜之以鷹曰。長澤要地也。武田信玄所窺。非汝莫以當之。乃徙守長澤。十月。使菅沼定顯城于佐崎。糧儲未備。邑中有上宮寺。爲一向宗。頗饒資糧。定顯徵之。寺僧不聽。乃奪之。僧怒。檄同宗針崎・野寺・土呂三寺。合衆得千餘人。攻菅沼氏。劫剽而去。定顯訴之。乃命酒井正親捕其主謀。斬以徇。僧徒益怒。大招聚門徒。將士係其宗。若欲救親戚修仇怨者。往往歸之。矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・渡部守綱・本多正信・其弟正重等數百人。吉良義諦據東條。其弟賴持據荒川。酒井忠尙據上野。松平家次據櫻井。夏目正吉據野羽。一時並叛。僧分之牌。書曰。進一步生極樂。卻一步墮地獄。刻日來攻。嗣君大驚。分兵守諸城。大久保忠俊與從子忠世・忠佐以下守輪田。酒井正親守西尾。松平伊忠守深溝。本多廣孝・松井忠次守土井。松平淸善守竹谷。松平家忠守形原。松平信一守藤井。松平親俊守福釜。酒井忠次砦于上野傍。每賊出擧烽相報。嗣君覩烽卽馳救。賊輒逃走。石川數正與諸公族攻

十一月。川越本・拙修本竝作十二月。

永祿七年

太平。川越本・拙修本竝作大平。

上野。士井兵攻東條。藤井兵攻土呂・針崎。皆有功。深溝兵攻野羽。野羽城兵乙部某導而陷城。擒正吉。乙部請曰。臣所以爲導者。欲活正吉也。伊忠亦請之。嗣君終釋正吉。祿之。酒井忠次招戶田某。亦以爲導。攻野寺。破其後門。十一月。針崎賊攻輪田。忠俊邀戰于小豆坂。嗣君馳救。大破之。阿部忠政善射。渡部守綱與筧正重皆傷。水野忠重追蜂谷貞次。貞次揮槍返之。忠重卻。嗣君親進迫之。貞次卻。松平金助追而詬之。貞次曰。吾畏主公。豈畏汝哉。鏦殪金助。將馘嗣君呵之。貞次怖而走。筧正重追平岩親吉。射中其耳。將馘。又呵之。亦怖而走。忠俊進攻針崎。陣于伊田。大久保忠世與本多正重以銃相擬。忠世先發。正重傷走。賊議曰。爭戰不決。宜分兵於妙國寺。扼其歸途。夾擊陷之淖中。蜂谷貞次。忠俊壻也。痛其覆滅。獨騎低回寺前。忠俊悟之。引兵還輪田。十一月。嗣君攻佐崎。與矢田・馬場戰。走之。天野康景斬馬場。閏月。本多重次・高力清長攻土呂。本多廣孝・松井忠次攻東條。皆有功。賞功分邑。賜忠次松平氏。尋築砦于佐崎傍。七年。正月。三日。水野信元來賀正。會佐崎賊焚岡太平。嗣君望之。謝信元。上馬而出。

守綱。川越本・拙修本竝作高綱。

信元不忍去。以其卒從。嗣君使上輪田兵當針崎。而直出小豆坂。與賊遇。近藤新一射中嗣君轡。嗣君怒。親陷賊陣。與信元兵。合擊斬其二將。土呂・針崎・野寺賊合攻輪田。忠俊・忠世防戰被創。嗣君單騎赴援。踵馳者三十八騎。鵜殿康孝戰死。賊黨渡部守綱進逼嗣君。其甥內藤正成侍側。呼曰。事已至此。不能恤私親。乃射仆之。賊兵豨突而進。嗣君甚危。賊黨土屋長吉謂其儕輩曰。吾以門徒故。敢敵主君。今不忍視其危。吾寧墮地獄矣。乃倒鋒。當嗣君馬前。防賊戰死。會日暮。兩軍交綏。嗣君還。脫其甲。得二銃丸。命收長吉尸。葬于輪田。二月。西尾兵合水野氏援軍。戰于櫻井・野寺。破之。嗣君自討野寺賊。設伏破之。數日佐崎賊可三百。以矢田爲將。犯岡崎。嗣君密戒銃隊曰。賊所以困我者。以有矢田也。彼負勇。每先士卒。宜狙擊之。及戰交。矢田中丸斃。餘賊潰走。自是賊衆沮喪。互相悔責。勸本多正信・蜂谷貞次請降。貞次就大久保忠俊乞焉。忠俊因說嗣君曰。方今群雄務勵兵拓地。而我有內變。國兵半爲仇讐。有如隣國乘隙來侵。傾覆不旋踵。不若容其自新。使各效力。嗣君聽之。貞次乃與衆議。請三事。曰。將士復

乞。川越本作請。
於。川越本作于。

祿。曰。僧徒安堵。曰。渠帥滅死。嗣君曰。所請皆允。獨渠帥不可赦。忠俊泣諫曰。去歲以來。臣宗族幾殲。公欲恤而賞之。願賜此輩之命以爲前鋒。攻吉良・荒川。立功償罪。則疆土日拓矣。水野信元亦以爲請。嗣君勉從之。召貞次・守綱以下于輪田。徵盟賜書焉。使石川家成率針崎降將赴土呂。呼而諭之。賊投兵而降。佐崎・野寺相繼皆降。乃逐正信等五人及諸惡僧。以其餘爲先鋒。攻東條・荒川義諦・賴持乞降。不許。皆西走。是役也。榊原康政先登於上野。康政之先曰仁木義長。居伊勢榊原邑。其裔淸長徙三河。仕藏人親忠。康政。其孫也。幼沈深喜書。是歲。甫十六。成瀨正義與弟正一每戰有功。二人嘗獲罪。出奔甲斐。已而來歸。嗣君待之如故。二人感激。故戰最力。嗣君旣定西三河。三月。出兵東三河。四月。小笠原康元以幡豆。牧野定成以牛窪。戶田重定以楡木。皆降。乃築砦于一宮。使本多信俊守之。以逼吉田・田原。五月。氏眞將兵一萬。陣佐脇・八幡二邑。分其五千攻一宮。信俊告急。嗣君自將二千人赴援。過二邑間。至本能原。部伍嚴整。兵鋒甚銳。氏眞不敢犯。其兵圍一宮者解退。信俊尾擊破之。明日。嗣君復逼氏眞

六月。川越本作二八月一。

永祿八年

永祿九年

永祿十年

永祿十一年

營前而還。氏眞引去。自是不能復出。六月。嗣君使酒井忠次率牛窪・楡木・幡豆兵攻吉田。本多忠勝先登。蜂谷貞次戰死。城將小原鎭實終致城去。以賜忠次。本多廣孝攻田原。取其郛。城將朝比奈元智亦致城去。以賜廣孝。六月。酒井忠尙復叛。命廣孝・忠次討之。城兵醜其數叛。相率出降。忠尙奔駿河。尋死。是歲。攻御油・寺部。皆取之。長篠・築手・段嶺三邑皆降。八年。春。嗣君盡定三河。乃置奉行三人。掌國內政刑。以作左衞門本多重次・與左衞門高力清長・三郎兵衞天野康景充之。重次剛直。清長慈祥。康景沈重善謀。民爲之語曰。佛高力鬼作左。彼此無偏天三郎。先是。嗣君既與今川氏絕。以元康之名義元所命也。改名家康。取遠祖義家偏名也。鳥居忠吉爲嗣君奏京師。請襲先世官爵。九年。十二月。詔。敍從五位下。任三河守。十年。五月。三河守。爲世子信康娶織田信長女。信長使佐久間信盛來送女。三河守之定國也。武田信玄使使修好。是歲。使其將山縣昌景來言曰。請戮力滅氏眞。我取大井河以東。公取大井河以西。三河守許之。十一年。正月。詔。遷三河守爲左京大夫。三月。大夫出兵遠江。攻久能。使高力清

永祿十二年

長說城將宗能降之。松下・二股・高藪三族皆降。進攻堀川。拔之。遂取宇津山。城于見附。八月。織田信長西略近江。來乞援兵。大夫使松平信一以二千餘人往。信長將木下秀吉等攻箕作城。城固。不拔。信一疾攻。冒矢石而進。大呼曰。三河人松平信一先登矣。諸隊繼登。城遂陷。信長面褒信一曰。卿可謂膽生毛矣。賜桐號胴服。十二月。大夫入遠江。欲取井伊谷。谷中豪族井伊直親。以讒言爲氏眞所殺。其故部菅沼・近藤・鈴木三族。皆屬大夫。大夫遂取刑部。先是。引間城主飯尾某密通款於我。事覺被殺。其部下以城來降。又爭事相殺。於是。大夫入引間。益其壘壁。立爲根據。遂招降馬伏・高天神二城。是時。武田信玄已入駿河。逐氏眞。氏眞奔遠江。朝比奈泰能守掛川城以迎之。三浦義鎮・小原資久棄氏眞。而獨保花澤。甲斐將秋山晴近濟大井河。招久能。久能不下。奥平・菅沼迎戰于見附。我兵不利。大夫使人誚晴近曰。汝何敢背約。不亟引去。我親出擊之。晴近懼。引去。大夫遂攻掛川。城險食足。不可輒拔。乃連砦備之。退陣見附。是歲。奏請復德川氏。十二年。正月。詔報可。自是德川爲宗。松平爲族。是月。復攻掛川。使使

出。描修本作
日。

謂信玄曰。掛川則僕力能擧之。前日之約如何。信玄答曰。不敢渝。大夫乃徙陣于天王山。以逼掛川。氏眞陷久能宗能父宗明。以利。欲夾擊我軍。宗明諾而告之宗能。宗能不從。氏眞之使復至。戒期。宗明父子密謁大夫告之。大夫使佯期焉。而夜伏兵城外。候敵出起鬪。獲其五將。尾而入城。城兵堅拒。不得入。二月。退陣見附。降濱名・都築二城。三月。復攻掛川。泰能等出戰于西宿。我諸將擊破之。追走至城。以竹楯環攻。城兵以舟師出我軍後。鳥居元忠・榊原康政等。邀擊走之。大夫退入引間。使三奉行下令三條。禁鹵掠。按據士民。會、氣賀盜起。遣兵誅其首謀。盡赦餘黨。遠江民歸心焉。氏眞度掛川終不可守。欲走依北條氏康。氏康。其舅也。乃因酒井正親・石川家成乞和。大夫答曰。某幼爲尊翁所扶持。不敢失舊誼。讒者所間。以至構兵。今信玄欲併駿河・遠江。公若以遠江見附某。某當與氏康謀納公於駿河。因送誓書。五月。使松平家忠護送氏眞。至戸倉。授之於北條氏。大夫於是取遠江。以掛川賜石川家成。自從五百人。巡視郡縣。甲斐將山縣昌景將兵三千。自駿府至金谷。遇大夫。下馬而拜。覘我寡單。心動。託忿爭

元龜元年

花澤。正本作二華澤一。

某。拙修本作レ僕。

反襲之。大夫走就險隘。擊斬其前鋒八騎。昌景引去。大夫大怒。遣兵攻駿府。昌景棄壘走。乃使使氏康。謀復氏眞。氏眞舊臣岡部正綱等。修府城守之。」六月。以天方・飯田不奉我命。攻取之。」十一月。信玄與氏康戰勝之。降正綱。取駿河。分兵據小山。大夫使松平眞乘援掛川以攻小山。」元龜元年。正月。以遠江既定。徙居引間。改名濱松。使世子居岡崎以撫三河。大夫威名大振。稱爲海道第一。」是月。信玄攻拔花澤。小原資久・三浦義鎭奔高天神。城主小笠原長忠與之有故。而知大夫深惡二人。斬獻其首。大夫不賞。」二月。信長使人來賀二國平定。且請援兵擊朝倉義景。三月。信長先入京師。大夫將兵一萬繼之。四月。將軍足利義昭饗信長及大夫。遂赴越前。信長自近江。大夫自若狹。會于敦賀。攻拔手筒。遂下金崎。會、淺井長政叛應義景。欲夾擊信長。信長危懼。問大夫曰。爲之何如。大夫曰。公第馳入京師。長政見事遲矣。必未扼歸路。至如義景。則留一猛將。與某合力。必不能尾也。信長乃留羽柴秀吉。而夜走京師。數日。大夫與秀吉殿而退。信長將丹羽長秀・明智光秀在若狹。不能歸。大夫分兵救之。皆達于朽木。行擊士

大寄。拙修本作大崎。下同。二某字。川越本・拙修本並作僕。

寇而入京師。五月。歸岡崎。六月。信長擊淺井長政。復來乞援。大夫將兵赴之。朝倉義景使族景健援長政。信長兵三萬五千。大夫兵五千。陣于龍鼻。長政兵八千。景健兵一萬五千。陣于大寄。信長夜議戰。大夫曰。某年少。不喜混戰。願當一面。信長曰。然則當長政。顧公兵寡。我當分兵援之。大夫曰。某領小國。慣用寡兵。且縱賜援兵。非素撫循。何爲用乎。信長曰。使公獨當敵。吾將爲天下笑。請附一隊將。唯可者。大夫乃請稻葉通朝。信長召通朝曰。汝爲德川所識拔。榮莫大焉。因取一槍贈大夫曰。相傳是爲鎮西八郎箭鏃。公源氏胄胤。請朝其以此指麾。大夫喜而受之。於是。分兵爲四。酒井忠次等爲前鋒。石川數正等爲次隊。大夫自爲中軍。榊原康政・本多廣孝爲左右翼。稻葉通朝爲後拒。旦日。長政自東。景健自西。來至姉川。信長又使人來謂曰。吾深惛長政。欲甘心焉。願公當景健。大夫曰。諾。忠次諫曰。我所嚮已定。乃易之。部伍必亂。大夫曰。西衆而強。東寡而弱。舍東取西。吾所願已。乃引兵而西。與景健夾姉川而陣。景健縱兵百餘先濟。本多忠勝在中軍。請曰。彼欲擊我橫。我當逆戰。大夫曰。善。命忠勝馳擊。大久保忠

隣・安藤直次踵馳。擊走之。景健以全軍進。我前鋒卻。次隊承之。戰于河中。犬塚又內攬敵槍相挽。遂奪而殺之。內藤正貞遺槍敵中。回馬取之。松平忠次爲敵射。矢貫左手。拔矢反射。殪之。次隊卻。敵進。直逼麾下。麾下將士拒戰不決。大夫怒。奮槍指麾。縱左右翼夾擊。大破之。顧見信長軍敗。沿川而東。與後拒俱擊長政。又大破之。追北至大寄而還。信長大賞大夫功。目以武門棟梁。本多正信・渡部守綱等。亡在越前。悔而來歸。是役。從有首功。八月。大風傷稼。我國最甚。命三奉行賑恤之。九月。信長攻一向賊于攝津。淺井・朝倉・六角氏竝起。絕其歸路。大夫使酒井忠次・石川家成赴救。數擊六角氏。事平乃歸。是時信長已取近畿十餘州。而大夫僅得定三河・遠江。以與强敵接壤也。

日本外史　卷之十八　終

日本外史 卷之十九

德川氏正記

德川氏 二

川越本標註云。事諸本作仕非。今从門田尭佐家藏本改之。勁。川越本拙修本竝作勍。

元龜二年

初信長深畏武田信玄。事之甚謹。而信玄常欲西其兵。議曰。信長使家康當我。而自取易取之地。以致强大。今先獲家康。則信長隨手而亡。當是時。與信玄勁敵者。唯有北條氏康。及越後國主上杉謙信。是歲。冬。氏康卒。子氏政立。請和於信玄。信玄以其庇今川氏眞難之。使氏政殺之以表意。氏眞懼航海來奔。大夫給以邑。善遇之。氏眞素與謙信通好。勸大夫修幣焉。謙信喜答之。約夾攻信玄。大夫異父弟久松義勝。質駿河數年。爲信玄所奪。幽于甲斐。至是逃出。踏雪而歸。足指皆墮。大夫厚視之。信玄於是決意絕我。而德川氏與武田氏始構難矣。

二年。正月。大夫進從五位上。遷侍從。二月。信玄入遠江。三月。攻高天神。小笠原

元龜三年

川越本・拙修本並地下有二也字一。

長忠堅守。乃引兵去。令其將秋山晴近侵東三河。招降三族。獨菅沼定盈不降。四月。三河諸城多陷。我民叛。應信玄。欲襲岡崎。侍從遣青山忠門擊平之。忠門戰死。侍從出陣于吉田。遣兵擊信玄將山縣昌景。走之。信長聞我與信玄交兵。甚危之。而不敢來援。使人來言曰。聞信玄數侵貴國。某當赴援。以報去歲之勞。而以西事般未之果也。顧濱松當敵衝。宜避徙岡崎。侍從謝曰。某請徐計之。使者出。侍從笑謂近臣曰。吾而去此。當蹋折刀劍不復用焉。信玄何足畏哉。十二月。信玄兵侵吉田・楡木。侍從自將拒之。不敢戰而罷。三年。正月。侍從入駿河。三月。上杉謙信將兵入信濃。以爲我聲援。十月。信玄將兵三萬餘來侵。拔鞲・飯田二城。陣于袋井・見附。內藤信成・大久保忠世將四千人。至西島。與信玄遇。信玄曰。敵兵輕出。勿使一人還。麾兵來逼。信成曰。濱松八千之兵。其半在於此。而衆寡不敵。一敗塗地。何以再戰。乃退。侍從聞前鋒危。自出陣馬籠。使本多忠勝率精騎往援之。忠勝至一言坂。信成等欲退。甲斐兵尾之。結而不解。忠勝善用槍。所愛一槍。名曰截蜻蛉。於是。忠勝戴鹿角冑。提截蜻蛉。單騎馳入兩軍之間。兩

被。川越本作披。

軍乃開。終收兵而退。命卒積薪坂頭。而伏銃其側。敵至、銃發火起、敵不能復尾。時我兵多蒙唐首。信長所貽也。甲斐人爲之語曰。家康有過分者二。唐首也。平八也。已而信玄遣其子勝賴等攻二股。馬場信房備我援路。侍從赴援。渡天龍河。不敢戰歸。敵結筏河上。以絕城汲道。守將致城。收入濱松。我諸城多叛。降信玄。信玄合兵逼濱松。乃令松平清善往拒宇津山。濱松諸將勸請援於織田氏。侍從不欲之。諸將曰。信長富五倍於我。而逆請我援。我以二國抗强敵。未嘗請援。今而一請。何不可也。侍從從之。十一月。信長乃遣佐久間信盛・平手汎秀等來援。相持踰月。十二月。信玄部兵四萬。陣于三形原。縱火濱松城外。侍從怒。欲出擊之。信盛牽其衣諫曰。寡君戒臣等曰。信玄老將也。其兵精强。天下無敵。德川欲出戰。汝當固止之。侍從曰。嚮信玄入小田原。旌摩其門。而氏康不出。世傳以嗤之。今敵踏藉我城下。而不敢發一矢。非丈夫也。果然。則吾當削髮被緇耳。諸將固諫而止。二十二日。信玄退入井伊谷。侍從遂北出。陣三形原。日已晡。分兵八千爲九隊。遣鳥居忠廣往覘敵狀。返報曰。信玄返軍而來。陣堅勢銳。戰必

閫。川越本作室。

不利。請速收兵。侍從不聽。更使渡部守綱往。亦報曰。勿與戰。侍從叱曰。人入我閫蹴我枕。猶有臥而不較者哉。命大久保忠佐・柴田康忠往挑戰。守綱止之。不肯而馳。與石川數正・本多忠勝・榊原康政。共擊敵將小山田昌行。走之。侍從以麾下。與酒井忠次・大須賀康高。擊山縣昌景。亦走之。追北而進。勝賴與馬場信房自傍進。逼我麾下。昌景・昌行皆返之。信玄自縱奇兵。橫擊我軍。軍亂。信玄乃鼓全軍而徐進。山岳爲震。我軍終大敗。信盛走。汎秀死。數正與松平家忠止戰。不支。侍從切齒。口出沫。勵衆返擊。成瀨正義・本多忠眞・安藤基能・鳥居忠廣等。死者凡二百餘人。敵兵益逼。侍從自度不脫。欲返決死。士多喪馬步從。夏目正吉在濱松。聞急馳至。諫曰。勝敗常事耳。此非大將授命之日。君第速走。臣請代焉。乃扣其馬南向。以槍鐓策馬。馬走。正吉呼畔柳武重曰。子以我君免。武重欲止共死。正吉揮而去之。自奮槍拒敵。苦戰而死。侍從得間而走。使忠世樹旗于犀崖。以收敗軍。敵以爲大將。爭赴之。侍從因得達城。城門闔。武重大呼曰。君歸矣。盍開。開而入。一城聞敗大擾。高木廣正得一髠首而還。侍從命貫之刀鋒。徇

練。川越本・拙修本並作鍊。
拙修本向上有而字。
天正元年

曰。兩軍鬭亂。吾獲信玄矣、衆乃定。侍從下馬杖槍、慨然謂從者曰。吾恨爲尾張人所阻、戰失其時。乃取此挫衄矣。取腰間扇。以賜武重。都築秀綱妻。豫煮粥以犒士卒。賜之衣服。時已昏。或請關門。侍從曰。後者安歸。且示敵怯。非計也。命開諸門篝火。而自飽食酣睡。鼻息如雷。敵方追北逼城。見門開。恐其有伏兵。不敢入。鳥居元忠・渡部守綱等三百人。出門而戰。敗兵自敵軍後譟而還。信玄乃退舍。忠世・康政行破敵兵入城。本多重次喪馬。殪敵一騎。奪其馬還。初重次多儲糧仗。於是。衆賴以安焉。侍從召諸將。議守禦。忠世曰。敵新勝。當挫其鋒以振我軍氣。侍從然之。收城內銃手得十六人。以忠世及天野康景將之。五更登犀崖。亂射甲斐營。營亂。多陷谷死。信玄曰。家康兵何强項也。會、石川家成自掛川入援。我軍稍振。侍從上城樓。望甲斐軍。顧富永某曰。汝以爲敵去留何如。對曰。軍無輜重。竈不見烟。是必去矣。明日。信玄果去。陣刑部。馬場信房謂之曰。臣撿敵尸。北首者俯。南首者仰。可以見家康訓練矣。向使主公與家康和。結以婚姻以爲先鋒。則天下何足圖乎。天正元年。正月。將軍足利義昭下教信玄。使與信長

及侍從和。信玄不肯。引兵攻野田。菅沼定盈與援將松平忠正堅守。敵蒙竹楯。用龜甲車。外城陷。乃退保內城。敵環鹿砦。鑿地道以絕井泉。侍從自將救之。甲斐軍不可犯。退次吉田。馳使乞援於信長。信長不敢出。城中有善笛者村松。善銃者鳥居。村松夜上樓吹笛。敵數騎來城外聽之。標竿而去。鳥居晨起。見之曰。聞信玄喜音。得非是乎。密定準安銃。逮夜。使村松復吹笛。敵復來聽。銃發。墮一騎。且日。敵中傳言信玄有疾。來諭致城。定盈・忠正請出城自殺以免士卒。信玄許之。比出城。伏起。被虜。囚于長篠。誘降之。二人不屈。初奧平道文・菅沼正員・菅沼刑部。置質於濱松。而叛。降甲斐。於是。請歸二人以易其質。信玄乃使人來言。侍從許之。嘉二人守節。加其采邑。二月。信玄病創。分兵而去。使我叛將守七城以逼濱松。侍從曰。可使敵在我近郊哉。三月。使世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能復其五城。餘皆解走。四月。信玄創復發。歸國。途卒。勝賴當國。祕不發喪。五月。侍從徇駿河。六月。巡二股。壁于城山。七月。攻菅沼正員于長篠。以火箭焚其城。正員退保子城。乃築壘熊山。留兵而還。八月。勝賴來援。攻熊山。侍從自

信昌。拙修本作信員。

天正二年

將邀戰。甲斐諸將退。保險阻。侍從伏兵而佯遁。敵不敢出。遂去。城陷。正貞出奔甲斐。敵將還助之。戍鳳來寺。又助奧平道文戍筑手。道文之叛也。其子貞能諫之。及信玄去。道文危疑。貞能子信昌略涉書志。爲筮之。繇曰。蛇年之人死。道文謂信玄生歲辛巳。必旣死也。遂決意歸款。勝賴在黑瀨。徵質於貞能。貞能不能拒。遣其少子。或告貞能有異心。武田信豐召之。貞能卽往。戒從者曰。未見我首勿動。入見信豐。信豐詰之。貞能笑曰。公莫信反間。信豐意解。與之圍棊。畢局而出。勝賴軍監城道壽招之飮。又往。道壽使入出呼曰。奧平氏被誅。從者不動。貞能出而歸城。乃擧族來奔。甲斐戍將追之。侍從遣本多廣孝・松平伊忠。迎之瀧山。擊破追兵。進戰築手下。又破之。勝賴怒。殺其質。十月。勝賴遣諸將擣濱松。留守本多重次等。迎擊卻之。侍從乃還。勝賴出陣見附。不戰而去。二年。正月。侍從進正五位上。三月。上杉氏來修好。侍從修長篠城。復諸亡地。四月。攻乾城。遇雨引還。城兵尾擊。殿軍多死者。五月。勝賴大擧。來攻野田。城壁未修。菅沼定盈棄城退。六月。勝賴進攻高天神。侍從乞援於信長。信長聞信玄定死。乃肯來援。勝

流。正本作游。

天正三年

賴疾攻。以利誘降城將小笠原長忠。長忠遂降。信長聞之。止次吉田。侍從赴謝。信長亦謝其扞信玄之勞。贈黃金二袋而去。侍從以長忠邑賜大須賀康高。使守馬伏壘。九月。勝賴將兵二萬來侵。侍從將兵七千陣于天龍河。我兵分爲二。一在上流。一在下流。欲俟敵渡夾擊之。甲斐諸將視我陣不可犯。勸勝賴退去。三年。正月。天野康景有吉夢。以爲克甲斐之兆。獻之。二十日。因命連歌會。著爲恒例。二月。侍從出獵城下。見一成童。容貌秀俊。問之。對曰。井伊直親孤子。名直政。幼字萬千代。育於繼父松下清景。侍從曰。仕我否。直政曰。奉命。乃載歸。遂賜其舊邑井伊谷。統故部曲。是月。以長篠賜奧平信昌。井伊氏・奧平氏。皆南朝時屬官軍者也。侍從知信昌可用。使松平伊昌助之。益修守禦。以備勝賴。四月。勝賴侵宇理。我吏人大賀彌四郎者。以文無害起。岡崎胥徒。至司二十餘邑稅務。竊懷異圖。與其黨小谷・倉地・山田三人謀。通款甲斐。曰。臣掌岡崎管鑰。城之所有。世子與諸將質耳。請啓大師。挾質以臨濱松。無不降矣。勝賴大喜。刻期來襲。山田中悔。自首世子。世子使人伏其臥內。聽之。盡得其實。急報之濱松。倉地・小

谷知事覺。逃、捕斬倉地。終執大賀。窮治服罪。乃反接馬上。徇之二城。先磔其妻子。然後生埋之地。而鋸其首。勝頼潛兵至榆木。聞大賀敗。轉掠榆木・牛窪。侍從拒吉田。世子拒法藏寺。擊卻之。五月。勝頼大擧攻長篠。築壘于鳶巢山。分兵絕其饟道。信昌與伊昌勵衆堅守。侍從使小栗大六乞援於信長。信長不果出。奧平貞能自往固請。信長許之。未至。信昌出戰卻敵。焚其竹柵。勝頼攻奪其甕城。益修攻具。鑿地道。環塹柵。攻擊連晝夜。信昌謂其衆曰。孰能出促援兵者。鳥居勝高素倔強。稱強右衞門。進曰。臣請往矣。信昌許之。夜縋而出。至侍從營。致信昌命曰。城兵未疲。鉛硝亦具。所欠者糧耳。不急救之。則信昌自殺以免士卒。侍從召見。慰勞之曰。信長既在途。吾亦將以明日出。因留勝高自從。辭曰。城中延領遲報。臣不忍留也。卽夜。馳歸。將踰柵入城。爲敵邏兵所執。勝頼命解縛。諭之曰。汝往語城兵。信長・家康不能來。宜速出降也。則吾厚賞汝矣。勝高曰。諾。乃使甲士十餘人露刃擁之。至于城下。勝高仰城大呼曰。諸君努力。大兵來援。不出三日。言未畢。刃叢而死。勝頼益嚴防備。張索濠上。以防城兵逃出。十八日。侍從

觴。川越本標註云。一作賜。

以騎卒二萬先進。陣高松。信長與長子信忠。合五萬衆陣設樂。信昌望見之。作書曰。城猶足堅守。請勿輕進損兵。敵若急攻。當鳴鐘報之。使鈴木金七齎往。夜踰濠。以短刀截索。泅而來達。侍從獲書。以告信長。信長甚憚甲斐人。植重柵。穿塹。守以鳥銃。使侍從亦傚之。大久保忠世・其弟忠佐奉命。以銃手三百為先鋒。三河卒小栗某奔在甲斐。於是。爲勝賴使上國而還。竊懷歸志。過本多忠勝。忠勝攜謁。侍從授之密謀。使歸告勝賴以援軍易與狀。勝賴大喜。欲戰。將佐皆諫。弗聽。乃分兵當城。使武田信實守鳶巣山。而自進渡瀧澤。勒兵爲十三隊。本多廣孝・酒井忠次相謂曰。我誘敵入死地矣。成瀨正一營在甲斐。記敵旗幟。侍從召之。指甲斐軍。問曰。左者爲誰。曰。山縣昌景也。問其右者。曰。馬場信房也。問其中者。曰。公族也。忠次因說曰。敵鋒嚮我。銳甚。請分兵繞出其背。焚鳶巣壘。使敵顧後則克矣。侍從曰。善。未告信長。信長數發候騎候敵。皆曰。兵衆而整。不可犯也。一軍失色。二十日。信長召諸將問計。諸將氣沮。莫敢言者。忠次進曰。臣使人間視敵兵。寡羸。敗兆皆備。請明日決戰。信長曰。汝之勇。果如所聞。因命酒觴忠

往。川越本作行。

佳士。拙修本作良臣。

陣。川越本・拙修本竝作軍。

次。使傳之信忠曰。聞汝善撈蝦舞。爲我一爲之。忠次起舞。衆敲篋和之。舞畢。復議戰。忠次復進曰。是役係寡君國事。臣不敢辭讓。因進襲鳶巢之策。信長心善之。而恐其漏泄。佯叱斥忠次。忠次沸懌罷。已而信長陰召還之。附兵五千使往。侍從命松平伊忠・其子家忠・本多廣孝・菅沼定盈・阿部定次・奥平貞能。率三千人助忠次。約曰。至則擧燧。忠次不歸舍而發。乘夜踰險。五更達壘下。伊忠謂家忠曰。我必戰死。汝全軀以事主公。家忠泣請共死。伊忠叱曰。國恩未報。又絕先祀。忠孝安在。乃分兵附之。訣飲而去。昧爽。忠次擧燧。大喊逼壘。信實惶遽出拒。伊忠力戰死之。終破殺信實。遂焚諸砦。甲斐軍驚動。我兵覩燧大喜。織田氏將挑戰。忠佐謂忠世曰。我主彼客。使彼先戰。我之恥也。忠世曰。然。乃共出柵外誘敵。敵左陣突騎三千先縱。我銃隊擊却之。敵中軍繼至。忠世・忠佐周馳健鬪。信長望其背旗徽號。使人來問曰。一人以蝶爲徽。一人以鏡爲徽。其將衆也。如臂使指。敵乎。我乎。侍從對曰。蝶爲兄。鏡爲弟。皆僕家舊臣也。信長歎曰。德川氏何多佳士也。當是時。爲二人所擊破者。皆轉赴信長前軍。敵右陣亦冒銃直進。信

髯。川越本・拙修本並作鬚。

諏訪。正本作趣訪。

長前軍走入柵内。柵殆破。敵逼其麾下。侍從馳騎告信長曰。公令諸隊齊發銃。我軍用槍横擊。可以克也。信長傳令。敵兵大阻。本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等。攢槍接戰。甲斐諸軍遂大潰。信昌・伊昌出長篠夾擊。幾獲勝賴。勝賴僅免。是日。自卯至午。戰凡五十八合。斬首一萬餘級。武田氏宿將精兵略殲於此。侍從往說信長曰。今乘大勝之威。長驅追北。則甲斐・信濃可一擧取也。羽柴秀吉從在軍中。亦勸之。信長弗聽而去。侍從見信昌。賞其堅守。加賜采邑。許以女妻之。遂大賞將士。數日親往岐阜謝。信長亦謝曰。卿之君臣。以寡擊衆。爲吾扞東而數年矣。不則吾安得定京畿哉。今勝賴一敗褫氣。不能復出頭。卿宜取駿河。遂及甲斐・信濃。吾亦當相助焉。因見扈從將士曰。長髯將何不來。蓋謂忠世也。忠佐在扈從。對曰。家兄有故。不得拜趨。信長曰。吾子兄弟。長篠之戰。可謂絕類逸群矣。手賜衣服。又賞忠次功。賜薙刀。侍從辭歸。六月。侍從攻二股。使忠世守蜷原砦以當之。轉至掛川。攻光明城。使諸將逼其前。而自潛兵襲其後下之。七月。與世子信康攻諏訪原。至八月下之。城在田中・高天神之間。難其守。

剽。川越本・拙修本竝作慓。

天正四年

天正五年

松平忠次請守。乃賜偏諱。改名康親。稱周防守。名城曰牧野。以武田氏比殷紂也。自是勝賴數出。遂不能深入。侍從遂攻小山。酒井忠次曰。我已得二城。師暴兵疲。不可不戰。勝賴剽悍過父。我攻小山。必來援之。前有堅城。後有强敵。取敗之道也、康親勸往。遂往。九月。勝賴募兵二萬。陣大井河上。侍從曰。果如忠次言。乃循河班師。城兵出躡。世子信康殿而退。勝賴不敢逼。自是世子常從軍。十月。使大久保忠世・榊原康政攻二股。踰月下之。遂取伯耆塚・八荒山。信長復下岩村。佐久間信盛與水野信元有郤。譖信元通岩村。欲殺之。信元懼來奔。侍從冏請宥之、信長弗聽。遂賜死。使信盛取其邑。盡逐信元族人。獨其季子留匿三河。

四年。春。侍從築城横須賀。使大須賀康高守焉。以久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉屬之。勝賴納糧于高天神。侍從自出。相拒芝原。欲戰。內藤信成諫而止。乃交綏。上杉謙信出兵上野。遙爲應援。勝賴不敢南出。侍從乃納今川氏眞於駿河。使松平康親・松平家忠竝視其政。八月。自將拔樽井砦。使安倍光眞守之。五年。八月。侍從入山梨。擊甲斐將穴山信良。破之。甲斐兵又攻樽井。光眞擊卻之。十

天正六年

月。侍從修築濱松城。十二月。侍從進從四位下。遷右近衞少將。六年。三月。少將徇駿河。攻田中。井伊直政從軍。每戰先衆。與諸將破其外郭而還。八月。大須賀康高破甲斐兵于國安河。少將侵掠駿河。至持舟而還。過田中。恐其兵出尾。爲攻城狀。敵不敢出。我兵乃還。十一月。勝賴陣小山。少將陣馬伏。徙于總社。世子夜濟濟水。覘敵營歸。欲擊之。少將曰。據險之敵。不可輕擊。復交綏。七年。正月。勝

天正七年

賴又入遠江。聞少將出乃去。四月。三子長丸生于濱松。母西鄉氏。以故水野信元孤子土井利勝爲其侍臣。利勝從其母依土井氏。遂冒之也。初世子信康爲人剛厲。至手刃近臣。酒井忠次・大久保忠世數諫。不聽。所生關口氏以妬悍被廢居岡崎。其婦織田氏。亦妬而無男。又爲姑氏所離間。憤怨。是歲。七月。織田氏遂作書。以姑氏陰事告信長。因疏世子十二罪。會、忠次赴安土。信長示而問之。對曰。信。信長怒。使歸告少將。關口氏與勝賴通。欲除卿以立世子。遂滅我也。卿其亟計之。忠次過岡崎。不入。世子憂悸。八月。少將至岡崎。放世子于大濱。使俟後命。其明。世子親來哀訴。不聽。平岩親吉爲傳。請曰。世子材武。今遽殺之。後必

計。攝修本作討。

過。正本作遇。

不聽。川越本・拙修本並作弗聽。

過。川越本標註云。一作過。

瀧。拙修本作隴。

天正八年

悔焉。臣爲傅母狀。願斬臣首以謝信長。少將泣曰。喪我良臣。而兒終不免。悔更甚矣。數日遷世子于堀江。遂遷二股。令忠世護焉。誅關口氏。信長意未解。九月。望。終使世子自殺。年二十一。世咎忠世輩不曉少將意也。初少將姬人永見氏孕而獲罪。出產於其鄉。世子潛擧之。呼荻丸。三年而見之。少將不子也。本多重次抱持而賀曰。酷肖君。君處戰國。宜多子矣。臣請育焉。世子卒。時荻丸甫六歲。而立長丸爲世子。先是。上杉謙信卒。義子景虎與從子景勝爭國。景勝賂武田勝賴。合攻殺景虎。景虎。北條氏政弟也。氏政怒。絕勝賴。遂來修好。於是。三國交盟。約曰。武田侵伊豆。則德川出兵駿河。侵遠江。則北條出兵上野。侵美濃。則德川・北條並向甲斐。使織田毋東顧也。是月。勝賴・氏政相持于黃瀨河。少將聞之。自將入駿河。酒井忠次諫曰。踰險深入。其危不測。少將曰。約不可違。且二人相持。而我乘其弊。必有利矣。使忠次留陣瀨戶。而進過田中城。攻持舟拔之。縱火至由井。勝賴引兵來迎。氏政不敢尾。少將欲逆擊之。諸將諫曰。勝不可必。而敵城在背。乃還。忠次爲殿。十一月。松平家忠伏兵瀧坂。擊破甲斐兵。八年。正月。少

天正九年

天正十年

遁。川越本・拙修本竝作逃。

將進從四位上。三月。攻高天神。連砦逼之。五月。攻田中。使掠而還。持舟兵出躡之。返戰大破之。七月。復攻田中。岡田元次曰。天將雨。大井必漲。請速收兵。少將乃濟河而還。其夜果雨。勝頼聞我攻田中。疾驅而至。河漲不得濟。九年。二月。高天神兵力屈而逃。我兵邀擊。斬守將岡部與行。初小笠原氏叛。降甲斐。我監軍大河内政局不從。武田氏以利誘降。政局唾罵不顧。幽于石窟八年。至此得出。痿不能起。少將賞賜之。少將遂與織田氏議。大擧攻甲斐。十年。二月。信長遣信忠。將前軍入信濃。而自繼之。少將將騎卒三萬五千。入駿河。陣牧野。分兵攻遠目・鞠子・持舟・久能諸城。皆陷之。甲斐將穴山信良在江尻。少將遣長坂血槍說降之。信良潛來謁。走還其邑。乃進陣江尻。遣人降田中守將依田信蕃。不肯。乃使信良以書諭之。三月。信蕃致城而去。府中守將武田信龍棄守遁。少將以信良爲鄕導。自市川入甲斐。所過毫毛不犯。沿道望風歸降。當是時。信忠已下信濃諸城。進入甲斐古府。北條氏政以兵三萬臨境上。勝頼逃。無所之。乃以殘兵棲天目山。織田氏兵逼殺之。獻首信長。信長罵曰。豎子使乃公不得高枕數年

是。川越本作此。

矣。今果何狀也。傳至我營。少將下胡床。加禮曰。公以五州主將。而遂至於是。豈非天哉。甲斐・信濃士民聞之。皆竊歸心於德川氏。信長初誘武田氏諸將使叛。及勝賴死。皆誅之。下令逮捕。期無遺類。少將潛庇之。多得免者。依田信蕃久守田中。以抗我兵。少將最嘉之。收隷部下。於是。少將會信長于諏訪。賀戰捷。信長曰。長篠之戰。奪其爪牙。今日固易爲力。皆卿之力也。遂分武田氏地。使少將取駿河。少將曰。今川氏眞寓居僕所。願割其半予之。信長不許曰。子以兵力取駿河。何分之一寓公乎。遂割甲斐一郡。賜穴山信良。使我統屬之。置瀧川一益于上野。經略關東。置河尻鎭吉于甲斐。森長可等于信濃。皆使受我節度。四月。信長焚惠林寺。鏖其僧徒。遂自海道西歸。少將供給甚豐。五月。少將西往安土。穴山信良從焉。信長命吏除道。使明智光秀掌饗。饗于高雲寺。親饋之。使信良及酒井・大久保・石川・井伊・本多・榊原六將侍食。召優人爲樂。因謂少將曰。卿盍遊觀京畿。吾亦當踵往。少將與信良以小隊發。信長使長谷川秀一・京商茶屋晴延從之。經京師。至大坂。織田信孝將略南海。屯于大坂。迎饗焉。少將遂往界府。

亦。川越本作又。

遣晴延入京師。以候信長。六月二日。將還入京師。本多忠勝先發。至牧方。逢一騎來。近則晴延也。回指謂忠勝曰。公不見夫烟乎。明智光秀作亂。右府已被弑矣。忠勝大驚。回馬返報。少將已至飯盛山。望見二人。察其有異。留從隊。獨與五將挺前。二人告變。少將前晴延悉問之。秀一亦來。十騎聚馬首。計無所出。少將曰。吾義當立討光秀。而從兵至寡。今獨有入京自殺而已。乃引隊北上。使忠勝前行。數里。忠勝回轡。謂五將曰。僕欲敢獻異議。今光秀方得志。擁大軍據要地。吾浪戰貽禽、徒取笑天下。曷如歸國舉兵徐圖誅討哉。願公等勸之主公。酒井忠次・石川數正曰。老成之慮。乃出於少壯之人。吾輩慚愧。乃勸之少將。且曰。光秀已扼衢路。宜取間道。少將曰。我不諳地利。必爲土寇所困。終不若自殺。秀一曰。此間士民素慣臣使令。臣能使之導。晴延亦散金募之。大和人越智玄蕃。使其臣吉川某爲鄉導。土寇乘夜起。侵我輜重。高力清長數返戰。攘之。穴山信良自懷猜疑。不欲同行。自普賢谷。分道而去。至草內渡。爲村民所殺。明日。少將至木津。不可渡。有二舟來。呼而欲乘。舟人不肯。忠次擬銃脅之。舟人怖、艤而載之。

二國。川越本作二一國。

恇。拙修本作愜。

既濟。忠勝以槍鐵撞破其舟。以防追者。織田氏將山岡景隆帥衆來迎。已而光秀覺少將逃去。出兵諸路要之。本多正信聞少將當厄。馳至宇治河。與景隆議。諭茶商上林。發土人。護入信樂。館于鯙尾氏。使土人馳還設篝火河上。宣言德川公將來於此。光秀斥兵聞之。萃以竢焉。而少將已入伊賀矣。初信長屠伊賀人。獨匿我管內者得免。於是。其父兄相告來護。入伊勢。自白子浦上舟。七日達於三河大濱。入永井直勝家。將士迎賀。即日。少將徵兵管內。討光秀。美濃・尾張將士。使使送款。或勸急取二國。少將曰。右府故國也。吾可乘亂利之乎。十七日。進陣于熱田。聞羽柴秀吉以山陽兵入討。光秀已伏誅也。乃班師。論賞繼道扞衞之功。當是時。四方聞變騷擾。河尻鎭吉初藉信長威權。凌轢國人。每事行新法。國人囂然。及信長薨。鎭吉恇悸欲走。不敢。少將至三河之日。遣本多百助護鎭吉曰。子欲西歸。宜借道於我。國人流言曰。本多圖河尻。鎭吉乃饗百助。醉而殺之。國人乘之。攻殺鎭吉。森長可等。皆棄守西走。於是。甲斐・信濃空虛無主。上杉景勝・北條氏政並出兵爭之。少將聞鎭吉死。遣酒井忠次・大須賀康高・成瀨

來。正本作徠。

正一入甲斐。以武田氏降將依田信蕃・岡部正綱爲介。豎旗於柏坂嶺。以招來國人。武田氏骨鯁之臣橫田尹松・城昌茂等。相踵來歸。凡千餘人。少將皆予之印信。安堵如故。大村某者。欲導氏政兵入甲斐。穴山氏部兵擊平之。又遣大久保忠世・石川康通・本多廣孝。將兵繼往。招諏訪賴忠・小笠原信嶺。皆降之。七月。少將留兵守駿河諸城。親將入甲斐。甲斐父老爭供芻糧。進陣于古府。撫循降附。分守諸要。遣忠次・忠世以下。以兵三千徇信濃。圍高島城。八月。氏政遣子氏直。將四萬騎。入佐久郡。諸將聞之。退屯音骨。遂引還。初諏訪賴忠不服忠次。少將更遣忠世。乃服。二人頗有郤。於是爭殿不決。衆和解之。六將更殿而退。氏直尾之。行七里。十餘合。我兵不損一人。氏直止陣若巫。少將乃措伏。自將數百騎。出淺生原。氏直不敢進。少將使鳥居元忠・水野勝成・松平清宗・三宅康貞守古府。而自陣新府。氏政遣弟氏忠・族氏勝。將數千騎。入郡內。氏直潛遣使告焉。曰。古府兵寡。子攻取之。則新府隨潰。家康當自下山遁。乃夾擊殲之。古府四將。諜知其謀。以二千人邀擊之。氏忠・氏勝大敗遁去。少將望塵曰。我兵勝矣。已而四

將以首級三百還獻。命梟之新府郊外。氏直兵視之。皆其子弟親戚也、乃悲駭不欲鬭。少將賞四將。賜元忠以郡內。氏直砦于豆生田。三河人久世廣宣・甲斐人曲淵吉景。皆有功焉。氏政又遣弟氏規窺駿河。松平康親守三枚橋。本多重次守沼津。擊氏規破之。氏直數招甲斐人。甲斐人斬使者獻其書。信濃人眞田昌幸・保科正直初降北條氏。九月。少將使依田信蕃招降昌幸。合兵屯碓氷嶺。絕關東糧道。正直因酒井忠次來降。以高遠兵取箕輪。招諸城以屬我。氏直益窘。十月。氏政乃使氏規來請和曰。公取甲斐・信濃。我取上野。且請爲氏直娶少將女。少將許之。十一月。氏直撤兵而修平澤砦。少將使人詰之曰。我初欲取上野。遇和而止。今既和而築。是僞和也。使諸將發兵赴之。北條氏兵懼。毀砦而去。是時。上杉景勝既取河中島。築砦四外。少將遣依田信蕃・柴田康忠・菅沼大膳等。攻前山・高棚・小田井諸砦。拔之。於是。甲斐・信濃豪傑盡屬我部下。少將撿其采邑。或依舊。或削之。使平岩親吉鎭甲斐。大久保忠世鎭信濃。務因武田氏舊制。無所更變。獨除其厚斂苛刑。建寺于田野以弔勝賴。嘉小宮山內膳忠節。召

天正十一年

其弟又七。祿之。以其季弟爲僧者。爲田野寺主。收山縣・土屋・原・一條四族之兵。屬於井伊直政。軍裝皆用赤色。井伊氏兵自是勁矣。十二月。少將乃還濱松。以降附四人掌採訪。北條氏使使納幣。織田氏故將柴田勝家亦使使賀平定。十一年。閏正月。賞松平康親功。賜河東二郡。二月。依田信蕃攻拔岩尾。而死之。少將祿其子。賜姓名松平康國。依康親例也。乃命大久保忠世助康國。攻拔小室。走守將宇佐美定行。景勝不敢援。七月。北條氏迎女。酒井忠次護送之。八月。少將如甲斐。修法令。賜眞田昌幸以上田。昌幸侵上野。取沼田。十月。少將進正四位下。遷右近衛中將。

日本外史卷之十九終

頫。川越本・拙修本竝作俯。

日本外史 卷之二十

徳川氏正記

徳川氏 三

天正十二年。正月。朔。三河・遠江・駿河・甲斐・信濃五國將士。盡賀正于濱松。謁中將及世子長丸。二月。中將遷參議。進從三位。當是時。故織田信長將羽柴秀吉爲政於京畿。略有十餘國。威權獨熾。參議亦與之通好。信長二孤。信雄・信孝。勢皆出秀吉下。信孝擧兵圖之。不克而死。其黨柴田勝家等。皆爲所攻滅。諸宿將豪傑。皆頫首事秀吉。信雄孤立無援。秀吉復欲激而除之。故遇之亡狀。誘其驍將岡田重善・津川義冬・淺井多宮。使叛降己。信雄怒。三月。召三將誅之。分兵攻其邑。遂與秀吉絶。池田信輝。與二壻森長可・堀秀政在美濃。信雄・秀吉竝招之。秀吉特啗以利。乃附秀吉。瀧川一益・稻葉通朝・蒲生氏郷等。皆黨之。信雄益窘。

弟。川越本・拙修本竝作子。

乃來乞援於德川氏。參議曰。吾荷信長厚誼。視其孤之窮蹙而不援焉。將何以對天下。卽諾之。遣石川數正・水野忠重・其子勝成。往助信雄。攻拔星崎。勝成先登。秀吉陰誘諸將。忠重不納而獻其書。忠重。故信元弟也。於是。四近城邑交相攻擊。迭有勝敗。參議聞秀吉大擧且東下也。欲親將援信雄。虞北條・上杉窺其後。使大久保忠世備北面。松平康親・平岩親吉・鳥居元忠備東面。十日。親將發濱松。酒井忠次・奥平信昌等。以前軍先發。敵攻城邑者聞之。往往解圍去。參議四日而至清洲。見信雄。信雄謝之。參議曰。公安之。某在焉。秀吉之兵。雖有百萬。不能以病公也。乃引諸將。議戰守之策。榊原康政曰。宜進取小牧山。以瞰國內。莫使敵據之。參議然之。本多康重曰。往年勝賴侮敵。踰川而進。終以取敗。今盍鑒焉。酒井忠次曰。勝賴之敵我。我之敵秀吉。不可比也。參議遂命忠次修小牧故壘。十六日。自携信雄往駐軍焉。發間使入南海。招雜賀・根來及阿波・土佐諸豪。使竝起圖大坂。秀吉患之。未果來。遙命池田信輝據犬山。森長可陣羽黑。以拒我軍。長可稱武藏守。以驍勇著。有鬼武藏之目。忠次請曰。嘗試一搏鬼武藏。

使京兵知三河技倆也。乃與諸將進。縱火誘之。長可出軍八幡林。隔水挑戰。與平信呂單騎先濟。衆從之。擊走長可。斬首三百級。信輝與稻葉通朝聞之來援。或止之曰。敵兵乘勝。未可與爭鋒。宜按兵憑高。待其來而下突。信輝從之。參議諜知其謀。令諸將收兵。終留康政於小牧。而自入清洲。使本多廣孝築城小幡。以便三河往來。秀吉聞羽黑之敗。大怒。置戍南海。而自將而來。軍于犬山。兵凡十二萬五千人。分爲十五隊。自按視地形。仰視小牧山曰。吾後矣。乃穿空壕二重于山前。使數千人守之。起壘植柵。以頓諸軍。軍營彌亘數十里。參議聞之。留內藤信成等守清洲。而自攜信雄。合兵一萬八千。復陣小牧山。康政爲信雄移檄敵軍曰。秀吉蔑棄君恩。爲鬼爲蜮。加兵於君之遺孤。天下之人。孰不切齒。汝將士。嘗與之比肩以事先君。乃爲其所驅役。果何心哉。德川公受依託圖征討。盡發五國之卒。親將至此。大義所臨。必梟豎子。汝將士。苟改過歸順。皆聽其自償。不然則併誅戮之。身首異處。其勿悔。秀吉覽之。乃購康政首千金。參議上樓櫓。望見塹柵。笑謂信雄曰。彼襲尊公長篠之策。豈以我比勝賴乎。乃下令軍中。

秀一。拙修本作吉一。

覘。川越本・拙修本並作覘。

禁擅進。秀吉遣書參議請戰曰。且日吾欲背塹柵進戰。使士無退志。公亦盍傚我所爲。渡部守綱以銃長在前部。私答書曰。來諭所言。不足以聞寡君。寡君固欲與君樂戰。敢不奉約。至斷後之備。君自爲之。弊邦之士。有進無退。不必須此也。秀吉獲書大恚。欲進戰而不敢。乃上邸而罵。四月。秀吉兵益至。充滿山野。而我兵無纖。四日。池田信輝說秀吉曰。敵悉銳拒此。料三河必空虛。我潛軍出敵背。擣其窟穴。則彼必顧而潰。因夾擊之。可以獲其渠魁矣。秀吉沈吟不答。明日。復說曰。公速斷之。遲二三日。敵亦爲備。秀吉乃許之。信輝將前軍。森長可將二軍。堀秀政將三軍。長谷川秀一將四軍。秀吉甥秀次將五軍。兵凡三萬。翌夜潛發。秀吉戒曰。愼勿侮敵。信輝諾而往。至篠木・柏井。誘土寇以向三河。織田氏將丹羽氏次爲岩崎城主。時從在小牧。其弟氏重居守。信輝等。欲先取岩崎以及岡崎。岡崎賈人聞警。走至丸根。告之守將酒井忠利。忠利單騎來小牧。白之。參議發諜覘之。悉得其實。八日晡。秀吉陣燧起。參議曰。是爲號也。乃密戒諸將。夜半傳發。選輕騎四千人。自將之。皆卷旗裹馬銜。尾信輝軍而馳。榊原康政・水野

餐。正本作飧。
還。川越本作歸。

忠重等爲先鋒。至小幡砦。遣斥兵五十詗敵。敵前軍襲取岩崎。斬氏重。信輝撿其首級。大喜。報捷後軍。遂向岡崎。黎明。我先鋒至稻葉。則敵後軍頓東山下。傳餐而坐。我兵急擊之。秀次・秀一倉皇起鬬。終大敗。走於秀政。秀政報敗前軍。而自回擊。當是時。參議攜信雄至勝川。問其地名而喜之。謂其兵曰。吾勝矣。擐甲而進。途得捷聞。遂至長湫。有來告者曰。先鋒再戰大敗矣。我軍危懼。已而康政還謁。參議執其手。泣曰。汝得無恙乎。康政曰。臣等一捷而兵疲。爲秀政所乘。以君在也。忍恥至此。秀政已與信輝・長可合。追北而來。或說曰。敵大衆乘勝。勢不可抗。不若速走保岡崎也。參議哂而不答。渡部守綱還報曰。敵亂次追北。以麾下迎擊。必克。高木清秀提敵首而還曰。勝機在此。急擊勿失。本多正信侍側。進曰。是行危徼幸也。盍就萬全之策。清秀・守綱怒曰。子坐褥握籌可耳。何阻戰機乎。參議曰。二人之言然。乃命幢主擎葵章白旗・金扇馬標。遶出山後。敵兵望見驚阻。參議乃麾軍而進。井伊直政自南山下以銃手橫擊。敗秀政軍。奪其陣據之。長可・信輝與麾下相挑。勝敗未決。安藤直次獻計。循左麓發銃。長可挺進指

揮。中丸而斃。其陣大亂。參議大呼曰。二壻既敗矣。盍擊破阿翁。我兵爭進。陷池田氏陣。永井直勝覩信輝據胡床也。擧槍刺之。安藤直次斬信輝子之助。諸將追走。斬首一萬五千級。而日已加午。高木清秀・内藤正成白曰。我兵疲矣。卒與生兵遇。必敗。參議曰。然。卽收兵而退。入小幡砦。秀吉聞敗大怒。獨度以爲我兵恃勝懈備也。以數萬騎疾發。酒井忠次・石川數正・本多忠勝・松平家忠留守小牧。忠次欲乘虛襲其營。數正阻之而止。忠勝曰。敵大兵赴援。主公必危。自率兵五百。追及秀吉。與之竝行。相距可四百步。秀吉問曰。彼爲誰。左右曰。本多平八也。秀吉曰。名不虛已。每兩軍相近。忠勝輒發銃。其騎逸馬。追入敵中。忠勝獨騎馳取之。授騎共還。秀吉兵請擊之。秀吉不肯。遂至長湫。則僵尸蔽野。而不見隻騎。問偵人。曰。敵安之。曰。入小幡矣。秀吉歎曰。家康可謂具華實者也。乃欲遂攻小幡。以日暮兵疲乃止。下令曰。二魁在一砦。是天所予。旦日圍而取之。遂舍龍泉寺。忠勝見參議于小幡。說曰。臣不與於戰。人馬皆鋭。秀吉之兵。衆而不整。臣遣老兵覘之。悉其可擊矣。願主公益臣一隊兵。夜襲敵軍走之。必取秀吉首于

刪。川越本・拙修本竝作刪。

犬山以南。致之麾下。參議曰。吾得大勝。狃勝者必危。且秀吉未可侮也。卽夜。取路於平戶。以歸小牧。且日。秀吉來攻不及。曰。家康何神也。乃引兵還樂田。益增壘柵。使堀秀政・蒲生氏鄉等。以萬人守重濠。參議出。勒兵濠前。氏鄉等。馳使中軍。請戰。秀吉曰。竢彼來攻。整隊防之。不然則勿出。參議亦下令曰。敵未踰濠。勿戰。西軍最畏井伊直政。以其裝赤色。目曰赤鬼。五月。朔。秀吉留戍樂田。撤軍西還。自度大擧徒歸。恐取人笑。乃攻取美濃二砦。入大垣。六月。參議使酒井忠次留守小牧。而收入清洲。信雄亦歸長島。是時。織田氏故將瀧川一益・九鬼嘉隆。皆黨秀吉。一益將略最著。侵信雄統內。誘蟹江及下市・前田三城。降之。又誘大野。大野守將山口重政拒戰不屈。一益將以舟師入蟹江。城中擧烽爲應。參議望見之。急發兵赴援。呼記室作檄。有吾可親往之語。參議曰。可字阻兵機。命刪之。卽絺衣上鞍。奮鞭而馳。井伊直政・成瀨正成・內藤宗成・水野勝成等。追及於路。信雄亦來。俱至蟹江。江潮方落。一益舟膠不能進。我兵急迫之。一益兵潰。僅得以身入城。我兵隨攻之。別使石川數正・安倍信勝攻拔前田。走其叛將岡部

迫。川越本・拙修本竝作遁。下同。

大垣。拙修本作大坂。

還。拙修本作歸。

長盛。山口重政又擊嘉隆于下市。走之。參議與信雄。以中軍攻下市城。城負大澤。澤多蘆葦。參議曰。蘆葦蟠根。或可踐而行。使人試之。果然。乃徑澤迫城。城兵不備。因立拔之。斬其守將。乃合兵圍蟹江。榊原康政起土山下射城中。城中大困。嘉隆以大艦來援。我兵迎擊。復走之。一益終乞降。參議曰。斬叛將獻之。盡致邑於信雄。則宥死。一益盡如其命。七月。出城遁去。秀吉在大垣。得蟹江急報。悉軍來援。不及。乃屯桑名。參議進至神戶。修築諸砦。聞秀吉引去。乃還清洲。八月。秀吉將兵八萬。復入尾張。前軍至樂田。參議出陣岩倉。信雄陣氷村。九月。秀吉至茂呂。參議與信雄拔軍赴之。親出巡師。西軍覩我馬表曰。金扇復至矣。相驚擾不可定。大久保忠佐率騎乘之。秀吉夜退軍二十餘里。砦于大野・奈良。自入大垣。參議乃還。是月。信濃諸將攻妻籠。聞西軍來援解還。城兵追躡。保科正直殿戰卻之。十月。參議留酒井忠次守清洲。榊原康政守小牧。松平家忠・菅沼定盈守小幡。而收兵入岡崎。德川氏・羽柴氏。相持美濃・尾張之間者。幾乎一歲。天下聞德川氏屢克。羽柴氏不競。多來通款者。南海兵倍奮屢侵大坂。土佐國主

來約。川越本標註云。一作果約。歸。拙修本作還。

長曾我部元親與故紀伊國主畠山貞政。皆應於我。欲刻期夾擊秀吉。而未來約也。秀吉懼。十一月。將兵入伊勢。信雄與之對軍。參議聞之赴援。秀吉遽乞降於信雄。信雄許之。秀吉面謁獻誓。馳歸大坂。參議至淸洲。聞之憮然。使石川數正賀和成。十六日。還岡崎。而土佐・紀伊書至。參議慨然大息曰。使此書在十日前。則秀吉可生致也。今已後矣。勞使者遣之。南海之兵。所在皆解。居六日。參議凱旋濱松。論賞長湫戰功。秀吉遣富田知信・津田信季來請和。信雄亦遣瀧川雄利介之。參議召詢之諸將。石川數正嘗爲秀吉所誘。心竊嚮之。進說曰。主公之國。不能當秀吉之半。而氏政劫其背。景勝迫其肩。三面受敵。事不可爲矣。宜速聽和以爲國家之計。參議怒曰。問義如何耳。至勝敗之數。則乃公自計之。乃遣歸三使。秀吉復使土方雄久數來請焉。十二月。信雄自來濱松。謝出援之勞。且謂曰。公與秀吉素無仇怨。特爲援我構兵耳。今我已與之和矣。公獨何自執乎。宜聽其所言。秀吉以無子。欲養公之子。公宜予之一人。參議不得已聽之。欲遣異父弟松平定勝。母水野氏泣曰。渠兄嚮質於今川・武田。已極艱楚。其忍復

即。川越本作乃。

天正十三年

趨。川越本標註云。一作起。

之乎。參議愍然。乃止。時世子之外有三庶子。曰秀康・忠吉・信吉。秀康。即荻丸。忠吉嗣東條松平氏。信吉。嗣穴山氏。乃遣荻丸。時年十二。本多重次・石川數正。皆以其子從之。秀吉大喜。養爲子。稱羽柴秀康。給邑萬石。後任三河守。」是月。織田氏故將佐佐成政自越中來。見參議及信雄。請戮力攻秀吉。信雄不許。參議厚遇之。諸將忿成政倨傲。交勸勿援。曰。北地阻絕。不可赴援。參議乃謂之曰。吾不必與秀吉戰。即戰。亦不必借子力也。雖然子之來意。不可不答。他日有緩急。當爲之聲援。成政謝而去。」十三年二月。城吉良。」三月。參議患疔。危篤。臣民憂懼。本多重次造枕。請曰。臣嘗患此疾。有一醫治之而愈。君請命焉。參議曰。毋爲也。吾已決死矣。重次遽曰。君自絕命。臣請先焉。乃趨出。參議驚。命左右止之。重次不顧。强而牽至。參議曰。汝何得此言。吾賴有汝曹也。以瞑也。汝曹宜全軀撫循子弟以保我家。汝何得此言。重次泣曰。否。否。臣不欲生也。臣近視甲斐將士。喪其首領。折腰於我門。情狀可羞。今臣喪主公。亦將如是也。臣少小從軍。而目創手足缺。一疲癃翁耳。特以主公眷顧。頗爲人所畏。主公一瞑。隣國四襲。我子弟沮

喪不支。事可知矣。當是時。臣彷徨支吾。人將指曰。彼疲癃翁。何不恥之甚。臣故
寧速死。不欲生也。參議曰。然。吾能從汝意矣。汝亦能從吾意。爲吾忍恥乎。否。重
次曰。君苟聽於臣。臣豈敢違。乃召其醫。醫曰。宜灸。重次手灼艾進藥。其夜。疔潰
而瘥。重次喜極而哭。是月。秀吉南取紀伊。根來僧兵來奔二百人。乃置根來部。
五月。參議巡甲斐。先是。眞田昌幸侵上野。取沼田。北條氏直請還之。參議諭昌
幸使還之。取償於內地。昌幸不奉命。終屬上杉氏。因降於秀吉。大久保忠世・鳥
居元忠・平岩親吉。率將士攻之。八月。秀吉北取越中。降佐佐成政。上杉景勝又
擧越後降之。秀吉密與景勝議。使援昌幸以圖我。閏月。我兵攻上田不利。敵追
至利川。忠世以十餘騎殿而濟。陣南岸。欲返擊。二將不肯。明日。忠世濟筑摩川。
陣八重原。昌幸陣手白塚。忠世使柴田康忠還告二將曰。公等歷河而陣。與我
夾擊。必殲之。二將曰。吾暗於地理。不若持重。忠世怒。又使謂曰。公等怖敵。猶當
來我後以爲聲援。亦不肯。往復之間。昌幸已退。陣于城下。忠世切齒曰。脫籠禽
也。於是。諸將列壁相持。昌幸不敢出。參議遣井伊直政等援之。昌幸出兵。犯康

恟恟。拙修本作洶洶。

忠營。康忠擊走之。岡部長盛要其歸途。又敗之。九月。聞景勝大擧且至。解兵而
還。直政・康忠爲殿。昌幸子幸村請追之。昌幸曰。將勇陣整。不可追也。忠世於是
留守小室。以備景勝・昌幸來襲。參議欲徙國都于駿河。命諸將士。修築府中。北
條氏聞景勝與秀吉連衡也。大懼。十月。使將士來尋盟。益固從約。本多重次自
度曰。物情恟恟。而我兒在上國。恐受攜貳之疑。乃使使大坂曰。兒之母有篤疾。
請使一訣。因取其兒而還。石川數正守岡崎。其兒亦在大坂。秀吉資望日隆。位
至關白。賜姓豐臣。諸名族大邦入謁者。皆被恩榮。數正竊歆之。秀吉亦以八萬
石邑招之。數正遂送款焉。與眞田昌幸及小笠原貞慶通謀。又誘其部將松平
近正。近正怒。不肯曰。使者再來斬之。因獻其書。十一月。數正挈家出奔大坂。時
將士孥多在岡崎。松平家忠自深溝馳至。護其四門。酒井忠次亦至自吉田。馳
使上變。中外動搖。參議行放鷹。至岡崎。卽日臨忠次第。命張散樂。人心卽定。乃
召大久保忠世。忠世曰。景勝日伺我隙。而貞慶擧兵應之。又聞昌幸迎故信玄
孽子某以煽將士。吾一動。則甲斐・信濃皆覆沒矣。弟忠敎曰。敢請代守。生死以

去。川越本・揷修本並作出。

天正十四年

之。忠世喜。乃發。會、大雪踰歲。景勝・昌幸不能出兵。忠教得代而歸。參議修岡崎塹壘。厚褒近正。以數正部兵屬內藤家長。於是。諸將皆獻質。參議多還之。數正既至大坂。秀吉遇之甚薄。或榜其門嗤之。數正羞縮不出。秀吉既定南海・北陸。以爲我已奪德川氏左右臂。嗾景勝脅之。其國又有內訌。於是時而與家康和。和必成。家康必來。天下莫足復圖者。乃與信雄議。使羽柴勝雅・土方雄久來議和。戒使者曰。德川以數正故也。意必不平。汝輩善處之。二使來岡崎。卑辭厚禮。陳秀吉・信雄之意。請參議入覲京師。參議面諭曰。長湫之獲。皆秀吉所愛重。其欲甘心於我久矣。吾不敢往。至旗鼓相見。敢不努力。二使乃去。或諫曰。主公不往。則次郎將不免。參議曰。羽柴秀康爲其父所殺。我何與焉。遠近傳言。秀吉大擧東下。參議乃修守備。問群臣曰。岡崎我墳墓之地。而當敵之衝。誰可使守者。本多正信曰。緩急能手刃妻兒。枕城而死者而後可。參議曰。作左衞門其人也。乃以精兵數百屬本多重次。往守之。重次辭去。意色甚決。參議乃約其子成重襲封。給以手書。十四年。正月。參議適岡崎。秀吉復使羽柴勝雅來。固請入覲。信

雄亦使其叔父長益來慫慂之、參議弗肯。使者不敢去。在其館候之、參議獵于吉良、使者承間來見、參議臂鷹而顧曰。可一搏擊、不能就人條制。明日。復見參議曰、若未去乎。吾不欲復聞若說。勝雅進曰。願君侯少容之。使臣得終其說。夫關白以百萬之兵。翼天子出令。西有毛利之援。東有上杉之助。俊雄豪傑。爭爲之用。復何欲而不致。而屈節招君侯、使者三反矣、君侯不思安危之決、徒以放鷹逐禽爲事。臣視君侯境內。城壘不固。溝池不浚。關白一舉趾、則上田之南。鳴海以東。非君侯之有也、臣竊爲君侯危之、參議作色曰。何呶呶也、秀吉兵雖衆不過十萬、我兵雖寡、可得三四萬。要客兵於熟地。邀險而擊之。何難之有。歸語秀吉。能來則來。不能往也。勝雅・長益返大坂。慮秀吉怒、匍伏復命。秀吉徐曰。家康言良然。堀秀政・蒲生氏鄉等。爭勸東伐、秀吉不聽、沈思竟日。其夜四更、急召勝雅及信雄、被衣而出曰。吾業已使家康來矣。二人驚問故。曰。彼亡室。吾以我妹繼之。彼寧不來。國人猶有不安。則以我大廳爲質。堀尾吉晴・生駒親正侍坐。問曰。尊妹安在。曰。佐治之室是已、初秀吉有異父妹。適佐治日向者。秀吉欲奪

弗。川越本作不。

條。擶修本作條。

作。川越本作起。

匍。正本作蒲。

安在。川越本作何在。

已。川越本・擶修本竝作也。

之改適於我也。明日。使吉晴・親正諭告佐治。佐治勉強聽命。遣妻而自殺。二月。乃使長益・勝雅。及富田知信・天野雄光來議婚。別授密旨於淺野彈正少弼繼發。四使至。因酒井忠次求見。參議不見。忠次告故固請。數日延見之。四使曰。嚮關白無子。得養君侯子。聞君侯亡室。欲進關白妹。參議曰。好意至此。吾豈拒之。獨有三事。約之而後婚。請問。不答。使者曰。淺野彈正帶密諭。在淸洲。乃以馹召至。參議書三事。示之曰。新婦有出。不可爲嗣。故嗣子不可出質。吾或蚤世。不可割寸地。彈正少弼曰。某袖關白手書。亦有三條。出而視之。皆暗合焉。參議怡然。遂許婚。信雄來賀。北條氏聞之。意頗危疑。請盟。三月。參議與氏直盟于黃瀨河。極歡而止。遂毀沼津郛以示意。四月。納幣京師。秀吉使彈正少弼送女。參議使榊原康政往告禮成。館于富田氏。秀吉就見曰。吾欲見子面久矣。小牧之役。醜詆我者。非子乎。吾嘗購子頭千金。今德川已爲我壻。我壻有材臣如子者。吾所喜也。七月。參議將自將討上田。秀吉聞之。使使來言。關白爲昌幸請。願釋之。八月。令昌幸及小笠原貞慶來謝罪焉。參議遂議西上。酒井忠次曰。彼雖婚未可

捐。拙修本作損。

輕信。宜確得其情然後往。是月。秀吉遣親書固請。九月。使彈正少弼以下六輩來。約送大廳爲質。秀吉弟秀長諫曰。以母爲質。天下後世謂之何哉。何不征伐之。秀吉哂曰。汝何狹中。是非汝所知也。十月。詔遷參議中納言。秀吉奏請之也。中納言遂決意入朝。諸將皆諫曰。秀吉威力如此。豈眞以其母爲質。恐有詐謀。吾陷其計中。雖悔可追。願君勿往。秀吉怒而來。臣等當以死拒之。中納言曰。吾亦不保其非僞。雖然。彼百方修好。至以母爲質。而吾猶遲回。世謂吾怯也。且彼亦有天命。吾當助之共定天下之亂。今復與構兵。則亂曷有止乎。捐我一人之命。以救億萬生靈。不亦多乎。乃令世子留監國。大久保忠世・石川家成輔之。井伊直政助本多重次守岡崎。而親帥士卒萬人西上。至岡崎。遇秀吉母至。迎夫人見之。信矣。秀吉命沿道諸國。修橋梁。供帳。二十七日。至京師。館于茶屋晴延。秀吉與弟秀長及彈正少弼以下來見曰。自長篠之役。不相面見十二年矣。今吾子一爲天下屈節。吾事成矣。遂見扈從諸將。謂本多忠勝曰。小牧之役。汝與我軍抗而行。可謂一騎當千者也。遂命酒饌。自嘗而進。贈賄極厚。如是者連夜。

義之所在。川越本無之字。拙修本作義所至。川越本標註云。在一作立。是。川越本作此。旦。拙修本作且。

川越本・拙修本・寫本皆秀吉至下。有褚袍點若四字。又皆在以下三十二字。作皆在門外。秀吉曰。吾欲我母之早歸。故使我壻趣就國。秀長躡中納言足。中納言進乞其褚袍。

因從容問曰。我起微賤。諸侯多不心服。奚爲則可。中納言對曰。公第莫違義。義之所在。天下從之。秀吉曰。善。既而曰。明日見子于聚樂。子枉意降我。以視諸侯。十一月。二日。入聚樂第。秀吉大會諸侯。延見如儀。中納言拜跪甚恭。諸侯皆改容。其明日。大饗。當是時。秀吉母在岡崎。岡崎役卒。日積薪其館外。其侍婢怪之。召役卒問故。對曰。作左遲中納言歸也。曰。若有短長。焚殺大廳。此老性急。今旦已欲縱火。井伊公留之而止。婢大怖。相謂曰。往年三河任子來。關白指其一人曰。彼鬼作左之兒也。今其鬼乃欲殺我輩。遂白之大廳。大廳憂悸。馳書秀吉。促中納言歸。中納言方受秀長之饗。宴酣。秀吉至。曰。請祖於聚樂。乃與偕出。諸侯皆在。秀吉曰。我壻就國。吾欲祖之也。秀長目中納言。中納言請得秀吉所穿袍。爲贐。秀吉曰。此戎衣也。中納言曰。家康在焉。不使公復戎衣。秀吉哂。脫而付之。因左右顧曰。吾得快壻矣。蓋使秀長豫敎中納言也。諸侯相告悚然。遂起我第于二條。賜酒井忠次宅。命秀長部將藤堂高虎監役。以近江地三萬石。爲湯沐邑。賜忠次千石邑。五日。中納言進正三位。井伊直政任兵部大輔。榊原康政任

川越本•摺修本竝哂作笑。
付作附。
川越本•摺修本竝快壻矣下有衆謹然三字。
川越本•摺修本竝無諸侯相告悚然六字。
川越本•摺修本竝悚然下有秀吉二字。
我第。川越本•摺修本竝作德川氏第。
寫本蓋以下十六字。作衆驩然。秀吉。
大輔。摺修本作少輔。正本作太輔。下同。
大廳。摺修本作太廳。下同。

式部太輔。皆敍從五位下。其餘將領受官爵有差。鳥居元忠以爲。是秀吉假朝爵結納我輩也。乃辭曰。臣關東野人。創痍之餘。不便跪起。豈任衣冠哉。後秀吉使羽柴勝雅以女妻元忠子忠政。因養爲子。元忠曰。臣兒不可使有二君。亦辭之。十四日。中納言歸三河。重次以下迎賀。乃令直政送還大廳。諸侍女譽直政有禮。秀吉喜。饗之。中納言之在京師也、秀吉請許石川數正謁見。及饗直政。又使數正接伴焉。終饗。直政不交一言。指數正謂衆曰。彼人面而獸心者。一坐失色。大廳侍女又愬重次亡狀。請加罰。秀吉笑曰。家康多佳士。可羨。十二月。駿府城成。中納言留菅沼定政守濱松。而徙居駿府。以板倉勝重爲奉行。勝重幼爲僧。喜讀書。父好重•弟定重。皆死事。兄忠重卒。無子。中納言乃令勝重蓄髮爲吏。終議拔之。勝重固辭。不許、乃請曰。願得歸家與妻計焉。中納言哂。許之。妻欣迎曰、有人告夫壻有慶事。何也。勝重脫朝服坐。謂之曰。吾受奉行之命。欲與汝計之。且辭而歸。顧汝謂何。妻驚曰。是公事也。妾何得辨之。勝重曰。不然。自古爲吏者。誰不以內謁敗事。自今以往。汝於我所爲。無一有議。於外人苞苴。無一有受。

天正十五年

天正十六年

庭。正本作延。六月。据修本作二八月。

天正十七年

則吾拜命矣、妻曰、敢不唯命是聽。勝重與之誓。復被朝服。穿袴而出。妻送。見其袴後拗也、呼返。欲正之、勝重怒曰、何背誓也、妻惶恐謝。於是。往拜命就職。訟獄平允、百事大治。十五年。二月。造駿府二城。秀吉既與我和、不慮東而。於是。大擧西伐。中納言遣本多廣孝勞師。師攻岩石城。廣孝力戰受賞。七月。秀吉定九州而還。中納言赴大坂賀之。八月。轉大納言。進從二位。乃還。十二月。兼左近衞大將左馬寮御監。十六年。二月。辭兩職。三月。大納言朝京師。秀康以從西征有功。進左近衞少將。我諸臣多遷任者。四月。後陽成天皇幸聚樂。大納言與內大臣信雄等爲先驅。關白秀吉爲後乘。秀吉要大納言以下盟辭。特詔大納言與信雄・秀長・秀次・及浮田秀家。班清華之上。禮畢東還。於是。秀吉以北條氏未至。乃遣使責其不庭。北條氏遷延。意欲得婚及質如德川氏。而秀吉不加於意。閏五月。氏政使來。因我請和。六月。大廳有疾。大納言與夫人赴京師。問之。九月。留夫人而還。十一月。酒井忠次請致仕。大納言優旨答之。固請。乃莅其第。盡驩竟日。使其子家次襲封。是歲。陸奧伊達氏來通好。十七年。正月。眞田昌幸。以子信幸

弗。川越本作不。

聽。描修本作對。

天正十八年　東事。川越本標註云。一作東軍事。一作東軍。

質於我。」是月。大納言獵于中泉。息清見寺。有一兒。捧茗而出。問其名。僧曰。甲斐人土屋惣藏之孤也。惣藏事武田氏。死於天目山之難。大納言喜得其胤也。載歸。謂世子曰。吾與汝以一口護身刀。拉兒附之。後賜名忠直。常侍世子。」時少將秀康在京師。益長有英氣。嘗習騎。秀吉牙騎失禮。秀康馳斬之。秀吉不問。是時。關東諸豪往往因我降。結城晴朝亦降。請得豐臣氏族為子。秀吉乃遣秀康。」三月。大納言如京師。兩月而還。」先是。北條氏政。請得我侵地沼田而後入朝。秀吉弗懌曰。吾欲伐北條氏。以其為德川姻戚。姑假之耳。七月。秀吉發三使來請。大納言乃使人諭眞田昌幸。致沼田。而就內地償之。因說氏政以順逆。勸其入朝。亦勸伊達政宗。皆不聽。沼田守將亦侵其傍地。十二月。大納言如大坂。秀吉入朝。請東伐。詔許之。以大納言為前軍。秀吉謂諸將曰。家康為前軍。秀吉為後繼。雖橫行萬國可也。況於北條氏乎。令大納言還國治兵。」十八年。正月。夫人病。卒于京師。以東事興。祕不發喪。大納言遣世子如京師。井伊直政・內藤正成等從。至聚樂。秀吉喜迎曰。佳兒也。執其手入內。使夫人淺野氏結其髮。更衣袴。親取

忠次。擱修本作忠正。下同。川越本標註云。忠次一作忠政。誤。據鵞峯文集。忠政是忠次子。

金飾刀帶之。攜出。謂直政曰。變野樣爲京樣。大納言見之必驚喜。大納言朴實。其送幼兒。蓋以與北條有姻。故以此擬質也。吾豈有所疑哉。宜速護去。世子還至。大納言曰。秀吉不留我兒。是欲借我諸城也。乃命本多重次・本多正信。掃除海道諸城。命伊奈忠次。造浮梁于富士河。居三日。秀吉使者至。果如其言。二月。大納言發兵二萬五千。誓師而發。軍于長窪。三月。秀吉發京師。入岡崎。本多重次留守焉。不肯出迎。秀吉召見之。重次曰。非我君。何謁爲。辭不入。秀吉至吉田。伊奈忠次曰。天雨河漲。請待霽而行。秀吉曰。吾聞。兵行臨水。宜亟涉。不則後者病焉。對曰。是所以行寡兵耳。以行大衆則溺矣。秀吉從之。留三日。至駿府。將入。石田三成耳語曰。聞德川與北條通謀。勿入。秀吉猶豫。彈正少弼諫。浮言勿信。乃入。三成自童年以面首承寵。及長慧巧過人。秀吉以爲奉行。任治部少輔。與少弼同僚。自是寖有釁隙。大納言聞秀吉至。留兵而來會。與上國諸將皆在其次。本多重次以事來謁。自後罵曰。咄。主公爲此大怪事。主於國者。豈有空其城假人哉。如是則人或欲借夫人。亦許之乎。且罵且出。諸將相視而嘻。大納言謂

諸將曰。彼本多重次者。僕舊臣也。自僕幼時。從而百戰。僕亦愛愍之也。然天質頑縱。及老益甚。今於稠人中。詬僕如此。諸公可以想其平時矣。衆謝曰。聞此老之名久矣。今乃得見。有臣如此。眞可倚賴。已而大納言復至其軍。秀吉至沼津。二十八日。親巡敵寨。就我營。諸曰。諸將皆說我曰。氏政父子。擁數萬精甲而不出戰。是欲誘我於險而四襲之也。卿以爲何如。大納言對曰。以某觀之。是畏我焉爾。今宜爲三軍。一攻韮山。一攻山中。彼或來援。則以一軍邀擊之。秀吉曰。彼果來。煩卿邀擊。對曰。諾。某嘗將一萬。與彼之四萬。戰於甲斐・信濃。十合九勝。固易與耳。雖然。今彼據險決死。某若不利。公幸繼之。秀吉曰。諾。是必勝之計也。雖然。彼不肯出則奚爲。曰。二城必取。一某則以手軍。自古道出於酒勾驛。陣于早川。以扼八州援路。而公以大軍直擣小田原。敵必不能支焉。曰。酒勾之道。得無城寨乎。曰。有鷹巢・足柄・新莊三城。曰。何以踰之。曰。彼不能守也。武田信玄嘗以二萬入小田原。如行無人之地。今兵什倍信玄。其不能守必矣。曰。焉知無鯁將拒我者乎。曰。能然。我所欲也。某當攻而殲之。秀吉乃還其軍。夜發令。且日。攻二

川越本標註云。按戰袍尙餘一領。以賜中村一氏。見松榮紀事等書。

城。豐臣秀次・中村一氏攻拔山中。北條氏不出。大納言則以別軍出古道。松平康重・本多忠勝等爲先鋒。攻鷹巢陷之。足柄城潰。進攻新莊。守將拒戰。不克而走。秀吉繼至。與諸將相見于湯本。出戰袍三領。使大納言取其一。且使以其一授秀次。因戒秀次曰。汝宜學德川也。又使大納言召世子於駿府。秀吉自取甲被之曰。宜類我也。自取其偏名。名曰秀忠。秀吉蓋以事勢未定。務結納我也。四月。松平康重等攻宮城野。破之。湯本・竹浦解走。三日。大納言先諸軍。至於酒勾。城中讋怖。我兵復伏衢路。要擊敵援兵。多所俘斬。秀吉大喜。約我事平盡領北條氏地。我將松平康國・鳥居元忠・平岩親吉。助前田・上杉氏。入上野・武藏。下諸城。本多忠勝・酒井家次等。助淺野・木村氏。會前三將。徇上總・下總。還入武藏。攻岩築。陷之。本多忠勝子忠政手斬首級。城兵就元忠降。五月。康國次總社。爲降將所戕。弟康貞手斬十餘人。定之。大納言以康貞爲嗣。是月。小田原城兵夜出。襲蒲生氏陣。轉赴我陣。陣堅不動。乃收入。六月。大納言召伊達政宗。使來見。甘索城主北條氏勝初守山中。敗保其邑。秀吉遣黑田孝高。說降之。弗聽。大納言

陣。正本作陴。

使本多忠勝諭之。乃降。」江戸城主遠山景佐初守新莊。爲我兵所敗。走入小田原。其弟川村兵部・其姪遠山丹波。與眞田信尹處守江戸。丹波・信尹納款於我。大納言遣兵。逐兵部取其城。」石田三成・大谷吉隆攻館林。不拔。氏勝諭城兵。乃降。三成等轉攻忍城。彈正少弼助攻。將諭降之。三成忌其多功。給曰。城兵已有內應者。請分陣攻之。城兵怒而戰。三成曰。內應敗矣。遂引水灌之。不得地利而罷。」前田・上杉氏以降附萬餘來謁。秀吉不賞曰。彼無血刃之功。或居之。或降之。可也。西將加藤嘉明竊言曰。是豈主天下者言乎。二將遂攻居八王子。守將中山家範・狩野一菴等死之。大納言索一菴子主膳・家範二子昭守・信吉。祿之。」時小田原固守數月。兩軍禁戰。徒以弓銃相挑。先是。我軍徒于築地。鑿地道入城。未達。井伊氏營前有敵別堡。一橋通城。城兵時出戍堡。直政私計。以部下子弟襲之。會暴雨。地道壞。城樓崩陷。直政設伏塹外而進攻。輒取堡。直政至橋。自發銃。銃炸傷手。進而不已。士卒力戰。斬首四百。縱火于城。城兵益出。而我兵無繼。乃收兵卻。城兵追躡。遇伏敗還。我中軍望火而愕。松平家忠曰。少年輩乘雨入

撓。川越本作橈。

田。正本作畋。

蘆名。川越本・拙修本並作葦名。

城耳。捷聞至。秀吉大喜。賞之。是役得城中首級。是爲始也。」

織田信雄及西將數人攻韮山。數不利。大納言遣小笠原廣勝視之。廣勝怒諸將逗撓。自進奪其門。無繼而死。七月。大納言又遣內藤信成。諭城將北條氏規。降之。」

五日。氏直遂出。就我營。乞降致城。大納言遣井伊・本多・榊原三將。與西將二人。入受城。嚴禁抄掠。盡出氏政以下。我叛將小笠原長忠自甲斐亡。依小田原。於是。執誅之。十日。大納言入城。其明。氏政自殺。秀吉遣四使。大納言遣榊原康政莅焉。縱氏直高野。厚給之。」

德川氏於是領關東八國。近江地九萬石爲朝宿邑。海道地萬石爲田獵邑。凡二百五十五萬七千石。秀吉害我國逼京畿。而人心固結日久也。乃乘事徙之。以八國之名。厭其心。其實武藏・相摸・伊豆・上總・下總・上野六州而已。安房有里見氏。下野有宇都宮氏。其他結城・佐野・皆川諸族。割據方隅者頗多。而北條氏餘黨。所在潛伏。兵燹之餘。城邑荒廢。乃趣我使徙居焉。而以駿河・甲斐・信濃・遠江・三河。割予於親臣宿將。放織田信雄。奪尾張・伊勢。予之於甥秀次。以拒塞我。陸奧會津。蘆名氏故國也。爲伊達氏所侵。請復之。秀吉不許。予之於

康重。拙修本作康親。

貫。拙修本作賀。

蒲生氏鄉。以鎮壓我。五國士民大失望。諸將亦怏怏不樂。大納言曰。可也。關八州亦我宗故國。自古稱用武之地。養士撫民。足以觀天下之變矣。乃發兵四出。伐諸城邑未服者。盡定之。遂相地建都。將士以爲非小田原則鎌倉也。大納言乃與秀吉議。營于江戶。八月朔。振旅入焉。卽論功分地。賜武藏忍于松平家忠。其私部于松平康重。其岩槻于高力清長。其東方于松平康長。其松山于松平家廣。其羽生于大久保忠隣。其河越于酒井重忠。其本莊于小笠原信嶺。其八幡山于松平清宗。相摸・小田原于大久保忠世。其甘索于本多正信。伊豆韮山于內藤信成。下總矢造于鳥居元忠。其古河于小笠原秀政。其關宿于松平康元。其相馬于土岐定政。其蘆戶于木曾義就。上總緖瀧于本多忠勝。其久留里于大須賀忠正。其鳴渡于石川康通。其佐貫于內藤家長。上野碓氷于酒井家次。其廄橋于平岩親吉。其大胡于牧野康成。其吉井于菅沼定利。其阿布于菅沼定盈。其那波于松平家乘。其宮崎于奧平信昌。其藤岡于松平康貞。其白井于本多廣孝。其館林于榊原康政。其箕輪于井伊直政。直政・康政・忠勝・皆食十

隅田河。川越本作二隅田川一。

萬石一。忠世・元忠・康元食二四萬石一。其餘有レ差。總二內外士人一。分爲二五隊一。以二直政・忠勝・康政・康通・親吉一領レ之。更番二京師一。北條・三浦・木曾・保科・久能・岡部諸族。皆給二封邑一。乃促就レ封焉。命レ吏度二遠近輕重一。以給二資用一。衆皆忘二其遷徙之勞一。十月。遣二使京師一。致二五州地一。秀吉服二其神速一。江戶之地。東帶二隅田河一。南控二海灣一。西北接二武藏野一。上杉氏將太田道灌者始城レ之。而平衍沮洳。蘆葦叢生。城郭隘陋。至下用二船板一爲上レ階。本多正信白曰。是不レ可下以視二外賓一。請更レ之。大納言哂曰。汝乃執二此婦女之見一乎。土木之事。徐議レ之耳。乃因二地勢一。區二處士民一。賜二大番士一。以二西北地一。鏟レ高塡レ卑。以置二第宅一。東南鑿レ渠疏レ淤。輦二泥土一。起二街市一。以通二運漕之道一。復以二板倉勝重一爲二奉行一。諸制度盡因二北條氏之舊一。而除二其煩苛者一。國內大服。秀吉之東下。有二人獻二佐藤忠信冑一曰。今日當レ被レ之者。本多忠勝也。乃賜二之忠勝一。忠勝長子忠政謂二其父一曰。忠信。源九郎從僕耳。大人以二德川氏將領一。而被二其冑一。以爲レ榮乎。亟還レ之。秀吉之西還。銜二本多重次無禮一。諷レ我罰レ之。大納言不レ得レ已。置二之上總小原一。潛給二三千石一。時使三人慰二問之一。尋病卒。是月。陸奧・出羽寇起。伊達氏陰助レ之。蒲生氏鄉等。來乞レ援

天正十九年

於我彈正少弼西還。途聞變亦來乞焉。乃遣結城秀康・榊原康政赴之。十二月。秀吉遣甥秀次東伐。使石田三成來請親出。是歲。世子敍從四位下。任侍從。秀康襲封食十萬石。忠吉敍從五位下。任下野守。信吉封下總小金。食三萬石。以故世子信康女妻小笠原秀政。秀政。貞慶子也。十九年。正月。八國將士皆賀正于江戶。大納言親出至岩築。聞亂平乃還。勸伊達氏入謝。閏月。如京師。二月。天子賜之御香。勅入朝觀花禁園。三月。東歸。五月。陸奧復亂。六月。秀吉復使人來請節度東北諸將。七月。親征。井伊・本多・榊原各將一軍從焉。八月。軍于岩手。九月。盡定陸奧。十月。還江戶。最上義光世主出羽・山形。通於織田・豐臣氏。大納言輒爲說其名家。使善遇之。義光深德之。於是請以其次子臣我。乃賜名家親。處之侍從。是月。侍從轉左近衞少將。兼武藏守。尋遷右近衞中將。於是海內盡定。將休息於無爲。而秀吉汰侈喜事。諸輕銳小人承旨進說。會其愛兒死。欲用兵朝鮮以自遣。浮田秀家首慫慂之。乃讓關白職于秀次。自稱太閤。建行營于肥前。使人來告我。令來會焉。伐木伊豆。以造舟艦。海內騷然。諸將皆心知其非。莫

敢匡拂。十一月。中將陞參議。帶前職。文祿元年。二月。大納言命榊原康政。輔參議處守。而自將兵萬五千西行。率伊達・佐竹・南部・最上諸將。會于肥前。是月。徙松平家忠于下總小美川。以忍封下野守忠吉。三月。徙五郎信吉于下總佐倉。各食十萬石。尋封外孫奧平忠明于上野小幡。四月。浮田秀家等。將兵入朝鮮。七月。大納言遙命松平家忠。修拓江戸城。參議如京師。九月。參議遷中納言。進從三位。十二月。還江戸。先是。京師儒人藤原肅忤秀吉。避之肥前。豐臣秀秋與之有故。迎客之。大納言聞其名。時延之幕中。諮詢古道。二年。三月。江戸土功告竣。先是。外征諸將取朝鮮。所過殘滅。明氏出軍援之。連戰不決。黑田孝高在行營。議以爲元帥不堪其任。堪其任者新田公。不則前田利家。若孝高而已。秀吉又慮功不成而有內變。會諸將。宣言欲自與前田利家・蒲生氏鄉。將三軍入朝鮮。而留大納言守國。大納言卽奮辭色。願從行。彈正少弼極諫秀吉。秀吉怒。欲手斬之。諸將救而止。秀吉斥少弼。不許見。會肥後寇起。秀吉乃悟。大納言攜少弼入謝。令少弼長子左京大夫討寇。以本多忠勝助而平之。淺野氏嘗坐其臣

川越本標註云。東歸之東。一作面。

文祿三年

誠。拙修本・寫本並作試。

文祿四年

僞造金幣。獲罪。大納言潛往其家。審實爲自之事。得以寢。日益親善。八月。秀吉庶子秀頼生。秀吉大喜。東歸。大納言自西。中納言自東。皆往賀之。豐臣氏將吏在朝鮮。竊懷歸志。罔蔽秀吉。曲成和議。弭兵而還。十月。大納言還江戸。聘藤原肅。待以賓禮。講論益力。三年。春。秀吉大城伏見。課諸國助役。大納言令榊原康政諭管内將士。貸徭錢。出役丁。尋自西上監視。秀吉要之。共遊吉野。四月。永井直勝敍五位。爲右近大夫。大納言之在肥前。秀吉過其營與語。直勝出進茗。秀吉問知其名。曰。是往年獲池田者乎。因問大納言曰。爾時吾與卿對壘。卿何以不攻我重壕之兵。對曰。慮樂田兵夾撃之也。抑公亦何以不來戰。秀吉拊掌曰。吾誠置伏兵于壕。欲俟卿來夾而殲之。故不往戰耳。諸將傍聽者皆悦服。秀吉於是來請。冒直勝以豐臣氏。遂有斯命。大納言二女。適北條氏而寡。秀吉自媒。再嫁於池田信輝子輝政。以釋其憾。次年。又以三女嫁蒲生氏郷子秀行。九月。大久保忠世卒。子忠隣嗣。守小田原。兼世子傅。四年。大納言・中納言・少將共在京師。大饗秀吉。秀吉既生秀頼。欲廢秀次。秀次素淫虐。石田三成・増田長盛等

來言。川越本・拙修本竝作來告。未。拙修本作不。

從而構之。五月。大納言東還。留中納言于京師。戒之曰。秀次將及禍。卽來誘。愼勿應之。七月。秀吉自伏見使使京師。就聚樂第。詰秀次。秀次誓而遣之。以事已迫。欲取我中納言爲質。因扳我兵自援。卽夜五更。使人來言曰。關白欲供朝餐。請速來。土井利勝答曰。世子未起。當竢起告之。使者去。利勝告大久保忠隣。忠隣使之奉奔伏見。從者六人。議取間道。利勝直由大路南馳。使者復來促。忠隣故留之。度中納言已遠。乃出見曰。世子早有茶會之約。赴于伏見。秀次聞之大悔。秀吉見中納言來。悅曰。眞新田公之子也。乃以書告變江戶。大納言卽發。途聞秀次已被殺。兼程而至。秀吉大喜。秀吉素嗜刑殺。及老。喜怒不測。至治秀次獄。尤極慘酷。三成既陷秀次。遂欲連累諸將異己者。誣伊達政宗爲反黨。秀吉大怒。欲徙政宗于伊豫。政宗在京師第。使人往伏見。就請大納言營救。大納言不答。賜使者食。食畢。請對。大納言罵曰。而主怯懦。不足與言也。且若輩欲徙伊豫。餧於魚乎。死京中。餧於狗乎。必居一焉。因召而前之。授對遣歸。既而伊達氏兵皆裹甲而譟。京師大擾。秀吉聞之大驚。使使詰問政宗。政宗便服出迎。言曰。

飄。川越本・拙修本並作漂。

慶長元年

臣僕從皆曰。失累世之國。飄泊客土。不若死也。臣制止之。輒斥爲怯夫。在目下者。猶如此。留在國者。不審其爲何狀。使者還報。秀吉患之。會大納言親往申事。遂得釋。最上義光女嘗侍秀次。及敗被併殺。三成又誣義光。亦爲大納言所救。衆皆睚眦三成。而秀吉寵之益甚。三成專權。無復忌憚。獨畏德川氏。」九月。我中納言。以秀吉旨娶淺井氏。淺井氏有二姊。秀吉自取其長者。生秀賴。稱淀君。少者嫁京極高次。後稱常光。皆故織田信長外姪也。秀吉夫人淺野氏。稱北廳。及淀君專寵。北廳失勢。石田三成・增田長盛・小西行長・大野治長等。皆附淀君。加藤清正・福島正則等。爲北廳親屬。不敢附。清正與行長。並爲外征將。爭功相惡。內旨各有所助。及秀賴生。諸將益黨淀君。大納言亦與之有姻戚。而獨禮北廳。」慶長元年。五月。詔。以大納言爲內大臣。敍正二位。後二日入朝。是日。秀吉亦以秀賴入朝。敍從三位。任中將。」九月。明及朝鮮使者來謁。秀吉以來辭非其所望。復大徵兵。以明春濟海。而置吏行營。不復親出。」十月。酒井忠次卒。」十二月。以松平康親・松平家乘爲大番頭。初內大臣置大番五隊。以內藤・永井・栗生三家

子弟爲頭。皆不滿萬石者。於是。諭二人曰。吾以此職累子。子必不厭心。雖然。世
事未定。中軍之鋒。非子不可。又令井伊・本多・榊原・石川・平岩五將。更番伏見。頓
于藤杜。以備非常。三年。正月。二日。內大臣感吉夢。潛詣石淸水祠。富是時。內大
臣及前田利家・毛利輝元・上杉景勝・浮田秀家等。爲巨藩大老。秀吉嘗會諸侯。
而抱秀頼。自室中闚視。問曰。彼列坐者。誰最可畏。輝元狀貌尤魁偉。秀頼指之
曰。彼最可畏。秀吉哂曰。否。首坐黧面翁可畏耳。秀吉欲試內大臣。從容語諸將
曰。弓箭之事。方今莫及乃公者。諸將皆伏曰。誰敢望殿下。內大臣作色而跽曰。
某在於此。殿下未可出此言。殿下獨不記小牧之事乎。諸將相顧駭栗。秀吉默
然。起入內。諸將交謂內大臣曰。適所聞。公戲言之耶。內大臣曰。否。否。雖太閤有
天下。至弓箭之道。僕不肯讓一步。雖觸譴怒。所不避也。頃焉。秀吉復出。談他事
而罷。諸將皆謂內大臣善直言也。秀家等再伐朝鮮。與明人戰。不決。自外師興
至此。前後七年。丁壯苦軍旅。老弱罷轉漕。秀吉亦自倦。乃置軍事於度外。獨與
秀頼。及諸姬侍日爲宴樂。窮極奢侈。媮取快一時。性素喜土木。天下未定時。建

方廣寺。造大佛。索材諸道。費累鉅萬金。遇震而崩。是年。五月、欲復更造之。罹疾而止。於是。豐臣氏紀綱漫弛。其中軍將士。與諸牧伯互相讐視。六月。秀吉疾篤。召奉行淺野彈正少弼・石田三成・增田長盛・長束正家・前田玄以曰。如聞諸侯與麾下有郤。是大亂之本也。宜使相協和以翼沖子。十六日。五人乃大會內外牧伯將吏傳旨。衆對曰、協心奉嗣君。則敢不奉命。至於私憾。各有所由。不能輒聽從。告諭再三。終弗肯也。秀吉乃召內大臣告之曰。願以煩卿。內大臣乃出而諭之。衆對如初。內大臣作色勵聲曰。公等已言協心奉上。協心奉上者。猶挾私怨乎。果挾私怨。是懷貳也。安在其奉上也、衆屈服頓首曰。唯唯。謹奉命。內大臣入報。秀吉大喜。命五人大饗衆。衆復爭坐位。雜席而食。及酒行。皆離次忿諍。中村一氏・生駒親正傳旨周旋。不能定。復入告內大臣。內大臣復出。踞而按劍曰。公等賣家康乎。家康以公等言報太閤。太閤乃喜賜此饗。公等猶尙如此。非賣而何。舉坐皆我仇敵。我誓不縱一人。因顧五人。趣闔諸門。一坐讋服。莫敢出聲。淺野・中村自傍慰藉之。使衆謝罪。更獻酬。爲歡而罷。明日。秀吉聞之召內大臣

歡。川越本作讙

曰。疇昔之事。雖古名將。不能過焉。非卿威信素著於衆。則安能如此哉。垂涕謝之。秀吉已憂內難。又悔外征。欲班師鎭國。而兵連弗解。又恐明・朝鮮乘喪來侵。計不知所出。七月。終召內大臣。盡以後事委託之。曰。秀賴當立與否。一在卿之心。內大臣謝不敢當。秀吉曰。天下莫若卿者。故不得不煩卿。內大臣固辭而退。秀吉召石田三成・增田長盛議之。二人素有異謀。因大諫。以爲勿專託德川。秀吉然之。乃定五大老・三中老・五奉行。使前田利家輔秀賴。已而伏見城下。一夕大擾。井伊直政自藤杜馳至。內大臣使直政與天野康景出詗之。還報曰。石田・大野氏有甲。諸第相告自備。故致此騷擾也。已而事定。人莫知其故者。水野勝成爲父忠重所逐。歷游西國。聞警來歸。請自效。內大臣悅。諭忠重宥之。八月。五日。秀吉召內大臣曰。以卿固辭。置列老奉行。今則悔之。而令已布矣。雖然。雄武强任。誰若卿者。卿當冠諸人統軍國事。乃要諸將盟誓。旬餘。薨於城中。遺命彈正少弼及石田三成。祕不發喪。三成素惡少弼之善內大臣也。乃紿之曰。祕喪當以計。吾與子貽魚於內府。以視外人。少弼從之。其明。內大臣以中納言入城

問疾。途與三成遇。三成使人密詐之。內大臣還。歎曰。治部疎於我者也。猶告大故。彈正何以外我乎。人心固不易測也。即夜。命世子治行。且曰。遣歸江戶。以鎭本國。九月。命少弼及三成。以遺命赴那古耶。班外師。遣德永壽昌濟海。密令諸將。十月。有訛言。明大擧扼我歸路。內大臣曰。我不可不親往。前田利家寢疾。聞之曰。內府一動。則海內搖矣。我當輿疾往肥前。指揮諸將。衆皆止之。以藤堂高虎習外事。請遣之。內大臣曰。然。乃使高虎代往。外師已大克而還。十一月。盡至伏見。內大臣與諸老俱慰勞之。

日本外史　卷之二十　終

親正。拙修本作正親。

日本外史 卷之二十一

德川氏正記

德川氏四

慶長四年。正月。內大臣在伏見。代豐臣秀吉。權決天下事。與大納言前田利家・中納言毛利輝元・中納言上杉景勝・參議浮田秀家・式部少輔中村一氏・雅樂頭生駒親正・帶刀堀尾吉晴・彈正少弼淺野某・治部少輔石田三成・右衞門尉增田長盛・大藏少輔長束正家・法印前田玄以。俱論外征諸將之功。奏請天朝。以島津義弘全我國兵功最大。任參議。其子忠恆任左近衞少將。加封四萬石。賜刀劍。其餘行賞有差。豐臣秀吉之薨也。嗣子秀頼猶幼。內外疑懼。口耳相屬。石田三成・增田長盛相與謀曰。德川與前田協心出政。我輩徒爲其所驅役。方今之計。莫若離二家。二家已離。乃可以逞。二人乃爲相惡者。長盛事我。三成事

拙修本無已字。

利家。利家嘗欲饗內大臣。期已定。長盛遽來警曰。大納言將不利於公。乃託疾辭饗。他日。長盛謂利家曰。曩有流言。內府是以辭。今事已白矣。公復請之。利家曰。前日之事。吾辱已甚。吾不堪再被辱。長盛固請曰。內府悔不來也。苟請之。必欣然來。利家從之。長盛馳見內大臣曰。利家奸計既成。公愼勿往。內大臣曰。吾不忍再辱之。及期將駕。長盛復至。出密移於袖示之。內大臣驚怪。乃託事不往。利家慚憤。細川忠興與利家有姻。利家召而語之曰。吾衰老。爲人所侮。何面目立世乎。吾將歸國也。忠興曰。公之憤固宜。然廢遺命棄沖子。而自引之國。是自舍威權。而取嗤於人也。利家乃止。而終與我有隙。是月。利家奉秀頼徙居大坂。內大臣送之而還。舟至平潟。見岸上有兵。衆失色。以爲大坂人追躡也。或曰。得非井伊兵來迎乎。近則果然。乃使殿而還。當是時。天下牧長豪傑。人人有自立之志。而概皆忌德川氏。相與欲圖之。一日。內大臣觀散樂于有馬氏。井伊直政來請間曰。今日外間騷擾。恐有變。宜及未昏還也。藤堂高虎繼至。密語久之。共扶而出。關東士民在京畿者。更相告言曰。我君將有難。盍往護之。來護第者數

塡。正本作嗔。
偕。川越本作俱。
昵。川越本・拙修本並作暱。

百人。先是。伊達政宗以上總介忠輝爲女壻。福島正則以松平康元女爲婦。蜂須賀至鎭自娶小笠原秀政女。康元。內大臣異父弟之子。秀政者。故世子信康之壻也。諸老奉行使人讓三家私婚背遺令。三家分疏不服。諸老奉行遂連署來詰。使解政柄。內大臣曰。我固不欲執政也。諸公厭我。我當引去。於是我諸將以前日變故皆有蹤跡。反詰之。京畿騷然。黑田孝高・其子長政・福島正則・池田輝政・藤堂高虎・細川忠興・京極高次・織田長益・加藤清正・加藤嘉明・蜂須賀家政・森忠政・有馬則頼・金森長近・山岡景友・新莊直頼等。獨歸心於我。每夜來護議事。或勸入京極氏大津城。內大臣不肯曰。當是之際。進一步得勢。退一步失勢。乃止。榊原康政以更番至勢多。聞警。疾馳至大津。故止不進。塞關以壅行人。行人塡咽。乃開關通之。京師以爲東兵大至也。黨人之計。以故大阻。本多正信・伊奈忠次等。適監稅西上。亦兼程至。內大臣延正信問謀。且曰三中老調停尋盟。要我於大坂。可往否。正信曰。不可。因問曰。淺野彈正近爲何狀。曰。亦負平生。久不來。此正信卽赴淺野氏與偕來。內大臣讓曰。吾與子親昵日久。太閤之喪。

數。川越本作屢。

褥。川越本作蓐。

治部猶計於我。子何獨欺我乎。彈正少弼始知爲三成所賣。流涕陳謝。自是益傾心焉。而三成等務推戴前田氏。勸除德川氏。利家嗣子利長密告之細川忠興。忠興曰。吁。子亦爲治部所欺也。利長色變。忠興曰。子悔告我乎。前田氏存亡。將決於此。不敢不忠謀。生死必與子俱。子勿憂。利長大悟曰。微子。我殆不免。請煩子諫家君。忠興乃入。諫利家曰。治部推戴公。公知其情乎。彼欲專事權。而憚內府與公。乃欲假公力以除德川氏。今日除德川。明日及前田。公獨暗於此乎。公稔知其姦。今乃在其計中。而不自知也。夫內府雄資智略。諸將無出其右者。彼輩百計圖之。適竟自禍耳。公與彼輩。共被其禍。不若自結於內府。以爲子孫之計也。利家頷曰。然。唯子爲我計之。忠興卽夜赴伏見。比曉來入我第。具告以故。自是忠興數往來兩府。而憚外人指目。被簑笠自操舟。時利家有疾。忠興與淺野・加藤等。俱勸其力疾赴伏見。面內大臣。利家從之。內大臣乘輕舸迎入第。手設褥使坐。利家悉語諸奉行密謀。勸我徙向島第。以絕覬覦。曰。吾百歲後。公幸善視我兒。內大臣許諾。利家喜而去。忠興又請我往答之。內大臣許之。三月。

有。拙修本作存。

藤孝。拙修本作藤高。

內大臣欲赴大坂。三成故縱流言。以阻其行。欲使利家恐之。福島正則又諫曰。大坂姦人巢窟。不可輕入。內大臣曰。亞相來。可不答哉。吾有警備。奴輩何能爲。十一日。遂行。少將秀康留守。加藤・池田・細川・福島・黑田・淺野諸將皆從。以弓銃護水陸。細川忠興以與利家有姻。遣父藤孝侍舟中。其實質之也。舟至大坂。岸有女輿。一人自輿中出。視之。藤堂高虎也。進曰。道路恐有變。宜御此而行。內大臣從之。入高虎中島第。終詣利家。利家喜。扶起迎謝。利家次子利政有異心。爲兄利長所制而止。及饗。諸將皆侍。利政佩利刃。將近內大臣。利長目攝之。利政不敢發。其夜。內大臣復宿高虎第。諸奉行會于小西行長宅。獨彈正少弼以我館伴辭弗往也。三成議曰。內府・亞相復協矣。我輩將無噍類。爲之何如。行長建策曰。吾請今夜襲藤堂氏。縱火攻之。不則要之歸途。可以獲志。前田玄以素歸心於我。因阻之曰。嗣君未長。我輩受諸老之令。固其分也。今私動兵。背天下約。縱使得志。豈能晏然哉。且諸宿將皆護內府。不可輒得志。交戰不決。而結城秀康以東兵來援。必大敗矣。增田長盛亦然之。長束正家曰。且諜之。諜還報曰。中

列炬。川越本標註云。一作炬火。

吾。川越本作我。

公等下以。川越本・拙修本並作唯。

島列炬如星。乃止。明日。內大臣北還。榊原康政爲前驅。井伊直政爲後拒。遂歸伏見第。」三成等悔恨。又謀襲擊我第。以爲非摟忠興。則事不可成也。乃因玄以請忠興。餡以大封。忠興密告之諸將。諸將曰。且可佯聽以探其謀。忠興乃與三成會于長束氏。問三成曰。欲除內府有何策。三成曰。我諜其邸。邸兵僅二千。邸側宮部氏・福原氏皆爲我黨。而其宅頗高。我率衆據之。臨放火箭。竢其避火。迫以鳥銃。可以鏖之。問其期。曰。今夜矣。忠興憂之。而不動辭色。徐曰。內府素訓練其兵。二千人決死出鬪。公保必勝之乎。且放火箭何論地高卑。彼苟諜知我計。則我能放之。彼亦能放之。是非策之得者也。我有一策。我以吾兵二千。爲子爲先鋒。突入死戰。而公等以大衆承其弊。克之必矣。三成等不肯。忠興力爭。議未決而天明矣。忠興走告之加藤清正。並馳來白。內大臣曰。吾亦非不覺之也。奴輩來攻。則吾自焚第。出東北廣地決戰耳。忠興等促徙向島。向島。伏見故城址也。乃修築之。以二十六日徙居焉。諸奉行知事泄。皆著僧服。要謁于豐後橋。以謝其罪。物情稍定。」池田・黑田・淺野・細川・福島・兩加藤七將。皆與三成有仇隙。於

寐。拙修本作寢。

是。遂連署請誅之。內大臣不許。時三成依於利家。七將遂赴大坂。請之。利家亦不許。閏月。利家病卒。七將議伺三成出要擊之。毛利・上杉・浮田・島津・佐竹五家。素善於三成。三成於是乃間行。入浮田氏備前島第。而以五家兵自衛。秀吉在時。佐竹義宣嘗賂三成。得以兼幷其國。深德之。義宣是時在伏見。聞三成急。馳見之曰。衆怒不可犯。能制之者。獨德川翁。治部寧自歸焉。乃使女裝而往。自入乞命。內大臣許之。七將追至。夜治兵各第。而固請焉。內大臣心自計之。寢而不寐。本多正信入謁。欬曰。何亟就寢也。內大臣自中呼而問爲誰。曰。正信稟事。曰。所稟何事。正信曰。謂治部何。內大臣曰。吾方思之。正信曰。主公已思之。思則得焉。臣不必言也。趨而出。旦日。內大臣使伊奈圖書出諭七將曰。治部窮來投我。我不忍與之諸君。且諸君欲以私憾戮重臣。吾何得許之哉。諸君必求逞其意。吾當助治部而與諸君決戰。七將大驚。勉從之。乃使中村一氏・酒井重忠諭三成曰。衆情恟恟。子盍解職就國。是爲幼主屈躬。以靖國家之亂也。三成謝曰。當熟慮而答焉。三成乃潛馳使大坂。謀之於上杉景勝。景勝大會諸藩主議之。謀

曰。治部宜聽命就邑。退伺世變。然後上杉・佐竹皆歸藩聚兵。不復來覲。下兵於八州。以撼其根本。則內府必自將赴討。毛利・浮田以下。乃群起其後。夾內府而東西擊之。從征諸將。置質大坂。必不棄此黨彼。內府孤立。腹背受敵。雖有勇智。無復所施。竟窘蹙而乞降矣。天下之事。皆可圖也。乃使使者還。密報之三成。七日。三成聽命。十一日。就其邑澤山。內大臣慮七將要擊之。命少將秀康等護送之。七將不能發。三成既被擯。而諸奉行皆不自安。因三中老請內大臣。入伏見城以鎭京畿。許之。六月。十三日。自向島徙焉。諸藩主皆來賀。威望益重。七月。命諸奉行。令征韓諸將皆罷就國。上杉景勝請曰。去歲徙封。未及施政。奥地難服。君所悉也。請一往措置焉。佐竹義宣請曰。統內寇起。請往定之。前田利長亦以襲封後未視國政。請歸。皆許之。於是。前田氏歸加賀。佐竹氏歸常陸。上杉氏歸陸奥。毛利氏歸安藝。浮田氏歸備前。而黑田氏歸豐前。加藤氏歸肥後。細川氏歸丹後。其餘諸將皆就國。是歲春。島津氏重臣伊集院忠棟有罪。島津忠恒誅之伏見邸。衆尤其擅殺。忠恒懼。屛居于高雄。以竢罪。內大臣遣伊奈圖書。率兵

納。拙修本作能。

數十。迎還其邸。聞忠棟子久直在國擧兵。令忠恒歸討之。至是。又遣山口直友勞之。贈以衣物。尋遣寺澤廣孝。諭降久直。八月。內大臣入朝京師。九月。七日。赴大坂。欲以重陽節見秀賴。三成在澤山。聞之。遙授計於增田長盛・長束正家。長盛・正家乃就館。告內大臣曰。加賀黃門與淺野彈正通謀曰。內府入城。則彈正伴與之博。因拉其手。令大野治長・土方雄久耦刺之。內大臣與從者議。本多正信曰。宜稱疾不入。而徵兵伏見以歸。井伊直政・本多忠勝・榊原康政曰。不入則曲在於我。臣等從焉。以死衞之。內大臣兩用之。乃徵兵。兵來者三千八百。九日。率而入城。升堂。從升者十餘人。衞士欲止不納。直政厲聲曰。內府有戒心。關東野人。不復知禮節。內大臣入見秀賴母子。直政・忠勝・康政隔障而坐。彈正少弼聞有讒言。稱疾不出。內大臣出至中廚。託言曰。廚下大紙燈。東國所無。當使從者觀。酒井忠利出。招從兵護衞歸館。內大臣曰。冲子在此。而我居伏見。其勢隔絕。姦所以易入也。吾將徙居與之密邇。長盛・正家請以西城奉之。秀賴嫡母北廳時來寓西城。於是。去歸京師。內大臣代入焉。使秀康留守伏見。十月。與正信

山縣。川越本作山形。

慶長五年

援。川越本作引。

議。放治長・雄久。使彈正少弼就國。不敢就。而赴武藏府中。以依其子。內大臣遂下令擊前田氏。前田氏治于金澤。丹羽長重請曰。臣邑小松與金澤隣。北伐之役。願爲先鋒。許而遣之。細川忠興聞而來見。爲利長白冤。因馳書加賀。使其老橫山長知來謝。內大臣命以利長母爲質。利長聽命。是月。浮田秀家將坂崎・戶川・岡・花房四人。計攻嬖臣長船某。秀家欲誅四人。內大臣制止之。以四人附吏。時關東喧傳。上杉氏有異圖。石田氏亦招四方有名之士。島勝猛者。嘗仕甲斐山縣氏。稱爲知兵。三成延爲謀主。修繕守備。內大臣使人詰之。答曰。澤山當衢路。其荒廢不可不修也。五年。正月。內大臣在大坂。受諸將參賀。二月。中納言牙騎。有鼠巢其馬尾。人異之。或援文治故事。以爲亂兆也。是月。內大臣令增田長盛・大谷吉隆促景勝入覲。景勝稱疾不來。而東北諸國爭上變。告景勝有反形。乃令伊奈圖書再往詰之。景勝枝梧不服。四月。復令僧承兌以書諭景勝老直江兼續。五月。兼續復書。書辭悖慢。內大臣大怒。遂欲親將東征。中老・奉行並請命將代往。弗聽。乃大議軍事。按東國地圖。部署諸將所嚮。伊達氏自信夫。佐竹

道。川越本作路。

氏自仙道。最上氏自米澤。前田・堀・村上・溝口氏自津川。自餘侯伯。從內大臣。自白川進。堀氏老堀直政進言曰。白川之道絕險。所謂。一夫當關。千夫不過者。恐難於進。宜爲之計。內大臣曰。彼執一槍。我亦執一槍。何難之有。乃下令諸侯伯治兵。以來月會江戶。石田三成佯請自從。不許。乃徙前田氏質于江戶。養保科正直女。以妻黑田長政。十五日。秀賴來祖。明日。內大臣留佐野正吉于西城。而自至伏見。以鳥居元忠爲留守。以松平近正・內藤家長・松平家忠副之。元忠嘗從三形原之役。傷股而跛。及老益艱步履。於是聽堂上用杖。翌夜。入謝曰。留守之任。臣與近正足矣。會津事勢重大。家長・家忠皆宜扈從。內大臣曰。京畿不保無變。四將吾猶以爲少也。元忠曰。無變則已。苟有變。則此城先被兵。而四無應援。臣當死以報國。他將帥不宜留以貽敵也。內大臣慰勞之曰。吾童時質于駿河。汝自三河來侍。蓋十二歲矣。今何老也。留而與談。夜已三鼓。元忠曰。明朝早發。君少就寢。因辭曰。臣以此爲永訣。亦不可知也。將起。足益痺。內大臣命侍者扶出。目送攬涕而入。旦日。駕發伏見。諸第將帥在者盡從。至大津。見京極高次

弟。川越本・拙修本竝作子。

川越本標註云。按高知高次弟。非子。

川越本標註云。按一榮一氏弟。非子也。子一學幼。故遣弟從軍。一學卽忠一。見後。

棋。拙修本作碁。

賜物。及其諸臣。以其弟高知而行。及石部。水口城主長束正家請饗之。會、有告其異謀者。乃乘婦人輿。夜過城下。正家驚。追及於土山。謝罪。內大臣溫言遣歸。諸侯伯相踵來從。得兵五萬。沿道將士以次饗之。至駿府。府主中村一氏篤疾瀕死。使其子一榮從軍。軍至箱根。中納言使大久保忠隣・本多正信來迎。七月。二日。至江戶。七日。大饗內外諸將。休士馬數日。下軍令十三條。使前部先發。三成候內大臣之東也。曰。吾計中矣。乃議舉事。會、大谷吉隆自其邑敦賀將會東師。三成使其老樫原某要之垂井。吉隆問知其故。語樫原曰。治部雖有才。而不爲衆所喜。今舉大事。誠能推輝元・秀家而自下之。合其軍以應景勝。或可徼幸萬一焉。雖然。我軍未合。而內府反旆。則所謂魚潰矣。予將以此諫治部也。乃至澤山。問三成曰。子何以克內府。三成曰。西道豪傑。皆應嗣君之令。當不日會大坂。而東北諸國。概通於景勝。景勝縻內府數月。而我舉西諸侯。長驅踰箱根。可一舉而克。是諸老所定議也。吉隆曰。是亦可謂善計矣。而吾不保其中也。子獨不見夫奕棋者乎。中手相對。算成者勝。卽遇國手。其所爲皆出我意表矣。內府

終始。川越本・拙修本並作始終。抗。正本作校。

國棋也。吾恐其出子之意表也。且子擧事有不可者五。內府少小角武田・北條諸豪。老於・兵機。以故太閤之英略。終不能加焉。況於今人乎。其不可一也。內府國富兵强。諸大國莫可較者。其不可二也。內府資望重於諸侯。而子以卑位微力首事。其不可三也。內府多熊虎之將。在昔織田右府選諸家將率。圖繪其像。時德川氏有三河一國。而上圖者十九人。今又不知其幾倍。我將士有類之者乎。其不可四矣。德川氏撫士非一日也。部屬精銳。義與國終始者。不可勝數。卽有死事。祿其孤於襁褓。士之親附如膠漆然。我乃以瓦合之師抗之。其不可五矣。有五不可。子必止焉。三成曰。我已定約。其可止乎。且諸大國皆仇內府。內府不足畏也。吉隆大息曰。吁。子而有此謀。盍蚤告我。我託送內府。率兵從之。與長東大藏夾擊之。可一擊而獲。今已東矣。是放虎還山也。乃辭出。既而不忍棄之。遂還佐其謀。與俱至大坂。移書遠近。誣內大臣不利秀賴。抑留西諸侯赴江戶者。立花宗茂在柳川。得大坂檄。其老小野某曰。內府雖握兵。不能較西軍之衆。前跋後疐。不過保守箱根之險。而天下皆歸豐臣氏矣。不若速就大坂。衆皆是

之。立花增時曰、公等所言。皆其形也。吾聞、智將勝於無形、內府之東。必豫知西之有變、聞變之日卽還軍矣。且黑田孝高・加藤淸正在我近地。而素與諸奉行不善。必應內府、我宜與之俱進退、宗茂終從小野所言。孝高・淸正果不從大坂之徵、曰、三成藉口幼主、以樹私權。不可與也。乃勸島津義弘令歸東軍。而三成急促義弘。義弘終應西軍。孝高・淸正又諭小早川秀秋。秀秋嘗爲三成所讒。獲罪於秀吉。以內大臣救之。乃得免。常思報效。其從母北廳氏。又戒勿負內府、而諸奉行陽推奉之。秀秋亦陽應之。三成議收諸將孥于城內以爲質。遣兵諸邸取之。池田輝政妻爲內大臣女。加藤淸正娶水野忠重女。與黑田長政妻。竝爲內大臣養女。其族人留守者、皆以計脫之、細川忠興妻明智氏、使其姉前田氏先遁、而闔已令、乃下令禁鬬。縱火自裁。三成懼而戢兵、使人入西城諭佐野正吉。十四日、正吉出諸姬侍、自奔伏見、毛利輝元入居西城。於是。侯伯會大坂者四十餘人。爲應援者三十六國。乃議引軍東下。令增田長盛遣使伏見、諭鳥居元忠曰、大兵東下。將先攻伏見城。城本豐臣氏之有也。子棄而東、誰得誹議。吾

川越本標註云。又一作久。

受內府眷顧。又與子親善。故相告也。子速決計。元忠與三將答曰。我知受君命而守。不知聽他人令而走也。足下誠念寡君之顧乎。則當見勉厲。今乃示以走路。殊非所望。德川氏不乏於人。而我輩特受此任。固決志於死。雖有百萬敵。不敢逃避。請速來以試我鋒。使者再至。有刀而已。乃馳使關東告變事。二十日。浮田・小早川・島津・鍋島等十將軍。合兵四萬來攻。城兵僅二千。元忠盡焚城下街市。謂諸將曰。吾與諸君。以寡兵守大城。不可相救。各守其所。死而後已。乃命酒訣飲。分陣而守。木下勝俊在城內。不自安而出。佐野正吉請入守。內藤家長辭曰。子不可俱守者。正吉曰。我日棄大坂者。以諸姬故耳。我將死于此以明我志。乃納之。茶商上林政重素受我眷顧。亦請而入城。以茶筅爲號。秀秋・義弘送款於元忠。請入城俱守。元忠不納。諸軍乃圍城。松平家忠出戰。不利。乃收兵固守。大坂兵乃別攻細川藤孝于田邊。伏見受圍之前日。中納言發江戶。其明日。內大臣繼發。行四日至小山。而伏見使者至。內外大驚。中納言自宇都宮還。少將秀康自結城來。親信將士皆會焉。本多正信曰。從征諸侯。其質盡在大坂。必不

爲我用。爲今計者。宜盡罷歸之。而獨與諸舊臣固守四疆焉。衆多然之、井伊直政進曰。德川氏取天下。正在於今日。臣聞。天與不取。反受其殃。盍速反大旆掃蕩群雄。區區保一隅。臣所不知也。作色而出。秀康曰。直政言是也。宜留一要將。而擧軍西上。內大臣曰。然。使秀康出迎直政。入畢前議。且日下令盡會諸侯于小山。使井伊直政・本多忠勝傳命曰。大坂將吏。與景勝通謀。關西大亂。彼挾諸質子。而託言於幼主。諸君縱知其奸。亦情義之所難達也。卽欲歸西軍者。宜速解去。吾毫無所憾焉。當資其芻糧。送而達之。諸將相目。未有所答。福島正則進曰。三成首事。非幼主所知。臣等焉受其頤指。以敵於足下哉。願充前驅。殄滅姦黨。淺野左京大夫。與黑田長政・池田輝政・細川忠興・加藤嘉明等。皆贊其議曰。吾曹從足下。固不顧妻孥。內大臣悅。饗之。使人問曰。東西受敵。我馬首所嚮。先東乎。抑先西乎。諸將答曰。西哉。正則引滿屬長政曰。近日必以三成・行長頭爲下物。內大臣出。面謝諸將。諭曰。公等先行。我亦當繼往。因謂德永壽昌曰。子知兵矣。今日之事。勝敗如何。壽昌曰。雖諸侯伯擧敵足下。而各自爭威。號令不一。

藉。川越本・拙修本並作レ籍。

宇都宮。正本作二宇津宮一。下同。

敗形已覩矣。內大臣曰。然。凡勝敗之決。在於元帥。我雖無似。又更事者。諸君苟聽我約束。吾平天下。不出五六十日矣。卽賜壽昌騮馬。以爲鄉導。賜正則驪馬。以爲先鋒。直政・忠勝請問曰。諸客將之意未可測也。藉第令無他。使此輩下手。以得成功。異日必曰。我輩取天下。以授德川氏。臣爲主公羞之。請以臣等充監軍。當率以往焉。乃許之。諸將將發。皆獻誓書。納質。於是。擇留守之任。本多正信薦秀康。乃召命之。秀康曰。兒願效力西討。何留守爲。內大臣曰。汝年少。不知留守任重耳。且諸侯置質江戶。非汝莫以繫群心。秀康猶不肯。內大臣叱曰。汝畏景勝耶。秀康乃頓首曰。兒留矣。苟許兒以大將。則不使景勝出白河一步。大人勿復憂。正信進拊其膝曰。壯哉郎君。無論爲大將。內大臣濺泣。取一甲授之曰。是我少小所被。未嘗視背於敵。今以附汝也。秀康拜辭。以萬人陣于宇都宮。令東北豪傑皆受其節度。初佐竹義宣觀望兩端。陰遣梟將車猛虎。率兵救景勝。及西事作。益修守備。內大臣使人詰之曰。子撫四萬之衆。無一人東馳者。我不能無疑。苟不懷他心。則速擊會津。且納質焉。答曰。僕於足下。素無怨仇。何有他

心哉。至若妻子。盡在大坂。無復可納者。諸將請討之。內大臣曰。且置諸。上國本也。東鄙末也。苟覆其本。末不患其不靡矣。乃使平岩親吉・松平信一統下總諸豪以備之。初伊達政宗在大坂。請先馳歸以備會津。內大臣笑曰。子又發故態乎。事平。當賞以地。愼勿遽戰。政宗歸國。卽襲取白石。內大臣使中澤主稅往告西事。問其去就。政宗誓不貳。主稅曰。內府有別命。使公君臣熟議三日而後告之。政宗請速聞之。不答。明日。固請。乃答曰。內府使謂公曰。吾留兵宇都宮而西上。公收兵退守其疆。彼慮其後。不敢尾我。我捷西軍而來。可夾而殲之。政宗曰。吾力戰取此城。曷可遽棄之。宜乘勢入會津。主稅曰。是內府所以丁寧也。勝敗不可必。苟有敗衄。適張敵勢。四近皆叛翼而西鄕。其鋒豈易遏乎。願熟思之。公苟聽從。寡君更有密旨。政宗沈思久之。乃問曰。密旨何如。主稅附其耳。語曰。事平。以會津百萬石附公。政宗大喜。使人送至小山乞印信。收兵歸大崎。最上義光素戴內大臣。則首攻會津。率東陲諸侯。臨米澤口。堀直政・其子直寄。與溝口・村上氏。數擊越後人應會津者。內大臣皆下令禁戰。於是。東事處置盡定。乃使

既。正本作已。

諮。川越本作問。

主。川越本作守。

西征諸將以二十八日發小山。當是時。天下將士。東西嚮背。來往如織。而父子兄弟分處兩地者。迭懷危疑。訛言沸騰。內大臣使召還黑田長政。謂之曰。卿謂正則之心如何也。答曰。臣保其無他。卽有他。臣控掣之。乃賜長政鎧胄遣之。生駒一正・蜂須賀至鎭。九鬼守隆。其父皆在西軍。內大臣留之不遣。既而一正父近正。至鎭父家政皆送款。守隆亦固請。歸志摩招其父嘉隆。乃皆遣之。山內一豐之室。自大坂馳使告事。以路經敵中。襞書爲笠紐。一豐得之。不解而獻。內大臣還之曰。猶觀也。一豐又諮堀尾忠氏曰。子何以表志。忠氏曰。欲納城。一豐曰。善。乃自納其掛川城。先是。忠氏父吉晴受內大臣命。自濱松赴越前。將守其別邑府中。途遇所知利井重茂者。與俱至刈谷。刈谷城主水野忠重饗之。卒爲重茂所刺。吉晴驚。立斬重茂。重茂。石田氏所使也。報至小山。曰。吉晴殺二人。內大臣不懌。衆欲執忠氏。中納言曰。吾識彼父子爲人。是必謬傳也。已而得實。遣忠重子勝成。還撫其衆。而忠氏首發納城之議。一豐既納掛川。忠氏亦納濱松。中村一榮納駿府。有馬豐氏納橫須賀。池田輝政納吉田。田中吉政納岡崎。福島

道通。拙修本作貞通。

正則納清洲。乃令諸舊臣代守焉。海道於是闢。而山道未闢。本多正信建策。擢木曾氏遺臣山村良勝・千村吉晴。歸徇木曾。盡逐西吏。命遠山友次徇東美濃。取其故邑。西尾光敎以美濃兵來歸。眞田昌幸以信濃兵叛去。昌幸長子信幸。素受我眷顧。固諫之。昌幸使之赴小山。而自與次子幸村西走。夜過沼田。沼田。信幸邑也。欲入見其婦。婦本多氏。忠勝女也。辭曰。良人不同歸。是必有故。妾不敢私開門。欲見其子。曰。公欲抱孫。何必今日。遂命士卒乘陴。昌幸不能强。去歸上田。勵兵以竢我軍。我軍分爲二。內大臣由海道。中納言由山道。令定未發。內大臣乃赦淺野・大野・土方三人。以土方雄久與前田利長有姻。遣之北陸。勗利長。使發兵扼越前。令富田知信・稻葉道通等。就封伊勢。各自爲守。又發間使。予書于黑田孝高・加藤淸正。遙授方略。使統西海將士。以撓西軍之後。孝高益以書諭小早川秀秋。歸款於我。秀秋自伏見送書小山。謝曰。僕發筑前來上國。本將會於東征。不圖爲賊所要。共攻伏見。勢不可獨異。請竢大旆來。倒戈以償前罪。初西軍向伏見。以爲當一鼓而取也。已而我諸將捍禦不屈。敵益用大礮巨

熕。攻擊十晝夜。城中有甲賀人。長束正家部兵與之相識。浮田秀家命射書於城上。誘其內應。曰。不聽則磔汝孥。八月。朔。甲賀人縱火松城。西軍爭登。秀秋逼名越堡。松平家忠・松平近正力戰死之。島津義弘逼西堡。內藤家長開門而射。殪十餘人。被創退入。作書附一卒。曰。汝潰圍達之關東。遂縱火自殺。其子小一郞。與安藤定次・佐野正吉・山岡甫安。皆死之。外城已陷。鳥居元忠之卒勸其自殺。元忠曰。未也。殺敵一人。亦非報國乎。乃嬰壁亂射。殺傷過當。敵發火箭焚樓櫓。隨撲隨燎。元忠知不可守。麾兵二百。開門血戰。七合七克。敵衆群進。我兵皆斃。至廝養之卒。無不戰死。元忠杖薙刀。踞階而息。敵人雜賀重次進。欲擊之。元忠曰。吾本城大將也。授汝首。重次橫槍揖曰。僕豈敢。君請自刃。元忠乃使重次釋己鎧。自割腹而死。年六十二。重次刎而裹之。并諸將首。傳于大坂。賈人某竊元忠首。葬之知恩院。是日。我前軍發江戶。內大臣發小山。四日。至江戶。得伏見之報。哀慟。恤戰死者子。皆令襲封。米澤口諸侯。聞伏見陷。內大臣歸江戶也。疑懼引還。越後諸侯亦收兵自保。越後人應景勝者。亦收入津川。上杉氏將士請

赤座。正本作赤坐。下同。

尾擊內大臣。景勝不敢許。其將士竊相賀曰。內府西顧。狼狽而囘。我勝必矣。獨杉原親憲有憂色曰。內府囘軍。非不得已也。內府若勝。則我公何以獨立乎。初內大臣之赴小山也。遺其軍麾中路覺之。從騎欲馳歸取之。內大臣曰。無以爲也。命伐道傍竹篠爲麾柄。取紙手裂之。束於柄端。試揮之者再。曰。如景勝者。用此而足矣。及發小山。擲之地曰。此亦毋用矣。石田三成遺書眞田昌幸。報知上國之捷。轉致會津。且曰。內府分兵守管內十餘城。與上杉・佐竹相持。焉能歷二十日行程而來上國哉。卽能來乎。邀之海道。擊而擒之耳。子善守山道。諸老皆欲賞子以信濃也。昌幸喜。益治兵。三成等又遺書北陸。數招前田利長。利長不應。大谷吉隆導京極高次及脇坂・朽木・赤座・小川諸將入越前。長束正家導毛利秀元及長曾我部等入伊勢。中納言織田秀信在美濃岐阜。介居東西衝要之地。西人誘以大封。秀信欲應。其臣諫曰。豐臣氏嘗負我。德川氏嘗助我。宜以今日決去就焉。前田玄以爲京師所司代。亦教其歸東軍。秀信弗聽。終爲西人城守。氏家行廣以桑名。羽柴勝雅以神戶。九鬼嘉隆以鳥羽。岡部某以龜山。丹

羽長重以小松。青木一矩以北莊。山口正弘以大正寺。皆應西軍。西軍總十八萬騎。其闔伏見者。引而東下。入美濃。修大垣城。以爲根據。使四近將士砦于犬山。以援岐阜。十一日。三成先入大垣。以迎諸將。警聞至江戶者。項背相望。內大臣曰。我已處置之矣。擧動如常。十三日。我監軍井伊直政・本多忠勝。引前軍二十七將騎卒五萬。至淸洲。距大垣七里。相持未戰。毛利氏前部攻阿濃津城。城主富田知信受東命。固守不下。夜出擊敵將長束正家。走之。我將德永壽昌與市橋長勝。攻福東・高須二砦。取之。以絕大垣・桑名糧道。而大垣兵日加。我軍有流言。前軍諸將與敵通款。二監數返使江戶。促內大臣親出。欲以鎭軍情。不獲命。十九日。村越吉直銜命而至。二監迎問其旨。吉直曰。稱疾不出耳。二人大驚曰。子愼勿將此命。果將。則諸將解體矣。因私改其命授之。且曰。會諸將而引吉直。吉直心竊謂。二監所言。主公豈有不知乎。我素以率直名。而特受此命者。取我不枉其言也。乃言於諸將曰。內府言。諸公久屯良苦。吾有寒疾。不可速出。二監失色。諸將默然。加藤嘉明曰。臣聽命矣。福島正則曰。何謂也。嘉明曰。吾曹與

敵對壘。未嘗出戰。大旆之不西上。不亦宜乎。正則拍掌曰。然。衆遂議進取。正則曰。岐阜兵衆。而阻木曾川。未易攻。我聲言攻犬山。則彼必分兵援之。我則逼岐阜。岐阜陷。則犬山自潰。二監從之。織田秀信果分兵來援。二監乃部署諸將。留藤堂高虎・黑田長政等。備大垣・犬山。令福島正則涉尾越川。出其面。池田輝政亂河田渡。出其背。諸將分隷之。兵各萬餘。正則以河田上流路捷。欲自赴之以先諸軍。輝政又以出敵背爲恥。二監諭正則曰。公已受先鋒之任。誰能爭之。但公主本州。舟筏可辨。池田不然也。諭輝政曰。公德川氏之壻。當務利其翁。何悻悻然與衆人爭尺寸乎。二人乃服。岐阜人聞警。請堅壁以竢大垣援。秀信不聽。出兵阻水。二十二日。輝政亂流。遇敵于米野。破之。攻北門。正則攻陷竹鼻砦。攻南門。城兵善拒不可拔。淺野左京大夫與一柳直盛等。攻其別堡。堡險而隮左右泥淖。大夫老臣淺野右近生長美濃。諳其地理。蹊田而先登。揚徽于壁上。大夫望之曰。右近不可亡也。馬上揮槍。身先士卒。士卒皆奮。奪壁而入。斬城將南部・遠山以下五百人。餘兵走城。城中驚擾。諸將因爭登。秀信遂乞降。逃奔高野。

高政。川越本標註云。一作良政。

頓。拙修本作援。

可決。川越本作可必。

正則與輝政爭功。欲鬬。二監折之曰。以私忿忘公事。誓辭之實安在。二人服而罷。犬山敵聞敗而懼。戍將加藤貞泰與竹中重門・關一政。皆拔歸我軍。自餘諸將皆遁。大垣敵聞我攻岐阜。卽出援之。島津義弘・石田三成陣呂久川。遣三千人進至合渡。長政・高虎等諜知之。相謂曰。是吾輩任也。乃分道而渡。天方霧。敵兵不覺。諸將急擊敗之。追北至呂久川。義弘曰。前軍雖敗。吾與子整兵橫擊則勝。三成曰。敵兵銳進。岐阜蓋陷矣。吾已不能援。何可當新勝之鋒乎。收敗兵俱還大垣。高虎族高政進至赤坂。諭居民使安堵。諸將繼至止舍。定爲頓軍之地。南與大垣對。會浮田秀家至自伏見。三成迎而犒之。推爲元帥。秀家曰。敵兵戰疲。深入客地。吾乘夜襲之。以逸擊勞。必得大利矣。三成曰。當與島津・小西議。秀家曰。兵貴神速。何議之爲。吾獨出決戰耳。三成止之曰。島津・小西皆以爲地勢沮洳。不便夜戰。且夜戰以寡擊衆者也。今以衆擊寡。何必於此。今毛利參議在伊勢。安藝中納言在大坂。竢其盡至。合軍決勝。秀家曰。我軍盡至。則敵軍亦盡至。勝其可決乎。雖然。子稱老輩之言。吾後生也。不敢違焉。唯子勿悔之。乃入大

聚。拙修本作衆。

垣。小早川秀秋自伏見至高宮。稱疾不前。三成等疑之。使人往議事因刺之。秀
秋覺不見。於是。稱疾愈。來至美濃。不敢入大垣。大垣群帥以岐阜陷。召伊勢・越
前之軍。毛利秀元・長束正家等。再攻富田知信。知信堅守累日。上野城主分部
光嘉棄城來歸。與俱守。知信妻有勇。翼夫而戰。其郛已陷。嬰守內城。於是。敵使
僧興山入諭致城。不聽。強而後聽。秀元・正家等。乃入美濃。秀元族將勸秀元歸
東軍。遂陰送質。大谷吉隆數誘前田利長。利長不應。與弟利政攻拔大正寺。進
至細呂木。欲攻北莊。謬聞東軍敗于海道。乃退。遇小松兵于淺井畷。力戰而還。
吉隆與京極高次等。取大正寺・府中。於是。亦入美濃。高次素歸心於我。欲城守
大津。故遲回不發。脇坂以下先發。亦已通款焉。而吉隆不知也。使之陰備秀秋。
秀元屯于南宮山。秀秋屯于松尾山。皆在大垣城西。島津義弘屯于城東城北
有長松砦。砦將某爲西軍守。及我軍至赤坂。棄守遁。二監遣一柳直盛守之。益
旗幟。張疑兵。又遣水野勝成守曾根砦。爲其聲援。西軍聚議不決。我軍亦以敵
兵衆盛。不敢出戰。日竢內大臣至。內大臣得村越吉直之報。大喜。乃命榊原康

家成。拙修本作康成。

政輔中納言。以兵三萬西上。以二十四日發下野。直出山道。間日。得岐阜捷報。使人轉告東陲諸國。賜書正則・輝政以下。賞之曰。且勿戰以待我出。命異父弟松平康元。及石川家成。留守江戶。五郎信吉。及松平康直。留守其西城。遂命諸城留任。九月朔。內大臣親將發江戶。酒井某・村串某。擎金扇馬表・葵章白旗。在馬前。近藤秀用・大久保忠教掌槍。渡部守綱・伊奈今成・成瀨正成・安藤直次等十五人。爲弓銃隊長。下野守忠吉以下親屬將領三十餘人。兵凡二萬五千。石川家成白曰。臣聞星家之言。今歲西方塞矣。請避方而發。內大臣曰。西方塞。則我擊而開之。遂發。自東海道鼓行而西。近畿・西國將士爭發使者。上狀馬首者。絡繹屬道。而東北空虛。宇都宮軍中訛言。會津悉甲南下。少將秀康使人言於景勝曰。小子受父命。居守於此。不能從上國軍。甚苦無事。願與公一戰。公能來乎。抑小子當往也。景勝辭。顧遣兵北攻山形。最上義光・伊達政宗與之對守。堀秀治聞岐阜陷。大軍西上。乃攻取津川。前田利長將會大軍。發兵復攻小松。小松既通款。乃攻大正寺。逐敵守兵。遂招北莊。會前田利政以能登叛。乃不敢進。

豐上於。川越本作レ于。

則。拙修本作レ卽。

京極高次守大津。西軍三萬攻之。不能拔。細川藤孝守田邊。與西軍二萬。相持兩月。加藤忠明迎擊毛利氏軍于伊豫。加藤清正攻小西氏於肥後。黑田孝高攻大友氏於豐後。迭有勝敗。十一日。內大臣至清洲。召直政・忠勝於赤坂。賞其功勞。止軍二日。以竢山道軍。軍不至。內大臣決策獨發。十三日。至岐阜。或獻巨柿實。內大臣戲曰。大垣落我手矣。擲之地。使近士爭取之。蓋以垣柿國音相通也。十四日。發岐阜。前軍諸將迎謁呂久川上。內大臣面褒岐阜戰功。遂率諸將至赤坂。當是時。天下之兵。美濃以東者。概屬我軍。美濃以西者。概屬敵軍。四方豪傑割據方隅者。皆觀望其成敗。而東軍以內大臣來。士氣大振。西軍偵騎走報大垣曰。赤坂多白旗。得非內府來乎。秀家・三成等陽大言曰。彼方憂上杉・佐竹。踏跙不進。焉得遽來此乎。我諸將請乘機攻大垣。內大臣曰。大垣城壘壯固。兵食皆足。秀家雖少非暗者也。而義弘・行長・正家・吉隆一心戮力。持重不出。攻之必損我兵矣。獨三成輕而恃衆。若誘出之外。使秀秋・秀元撓其後。則可一戰鏖也。我且動軍以試之。日午。建大將旗鼓于岡山。令諸將少移陣而前。三成邀

當。正本作嘗。

卽。川越本・拙修本竝作則。

秀家登丘而望曰。東軍塵升何也。偵騎爭報曰。內府來矣。諸軍聞之恟懼。島勝猛曰。是張聲勢以怵我耳。我當乘其動搖擊之。秀家曰。然。藉內府來。亦吾所期也。吾與治部當以先鋒挑戰。勝猛建策設伏於一色村。而遣輕銳涉株瀨。犯中村一榮陣。一榮迎戰。有馬豐氏在其傍。分兵援之。西軍走。一榮張左右翼追之。內大臣自中軍望見。謂侍臣曰。式部嘗練兵。隊伍可觀也。追者渡而進。內大臣曰。嘻。敗矣。果遇伏。走者皆還。我兵不得退。內大臣命直政・忠勝往收之。二人卽馳。左右指揮。自殿而退。敵兵不能尾。收入大垣。大垣諸將會議曰。內府來確也。何以決勝。秀家曰。彼必悉銳來攻。我守備既具。足以待之。田邊・大津之兵。將不日來會。安藝黃門亦當繼至。我疲敵于堅城之下。而內外擊之。其勢如鷹鸇之搏鳥雀。是全勝之策也。三成曰。不然。今敵兵半於我。吾聞倍則戰。未聞倍則守也。我輩擁大兵。征伐關東。而坐守孤城。不敢出戰。天下之望我者。皆沮喪矣。往年小牧之役。太閤過慮。當戰不戰。終成內府之名。今豈可貳過哉。諸將負勇者。多右其議。吉隆・正家爭之曰。當今之世。誰與內府決勝於野戰者。獨有持重以

疲之而已。中納言謀慮深長。宜聽從之。議未決。內大臣揣知之。乃宣言曰。敵不敢出。我將置兵而西。直取大坂矣。皆束裝。大垣諸將聞之。終決議出戰。曰。備前中納言出陣關原。安藝宰相以前軍邀敵。薩摩參議自菩提山赴赤坂之北。遮出敵背。三成以下分屬三軍。胥機合擊。擠東軍于呂久合渡。乃下令治兵。使人出戒三國之軍。即夜。島津義弘使族家久入說曰。東兵遠來。衆心未定。請今夜。潛兵襲擊。吾爲先鋒。衝其麾下。必利。不利。乃赴關原。爲未晚。島勝猛曰。詰旦之事。吾將再見德川甲背。何必草草爲也。三成曰。然。家久顧勝猛曰。子嘗見德川甲背乎。對曰。僕少仕甲斐。嘗追之遠江矣。家久曰。今德川非舊德川。子同視之。可謂飯匕爲矩也。不辭而出。毛利秀元素通於我。乃託言不欲爲秀家先驅。三成親往諭之。不肯。三成乃約曰。吾輔浮田君。與敵交鋒。而公橫擊之。吾胥其時。擧烽爲號。秀元佯諾。三成乃赴筑前軍。見秀秋勗之。遂北赴小關村。大垣諸將繼發。設大炬于栗原山以燎路。路隘。隊伍不整。又遇雨。衣甲皆濕。五更而達。浮田秀家・島津義弘背天滿山。東向而陣。小西行長陣其左。石田三成又陣其左。

申驅。拙修本作中驅。下同。

有馬・河尻・糟屋・石河・布施・玉置氏陣其右。大谷吉隆與平塚爲廣・戶田重政。又陣其右。小早川秀秋屯松尾山。脇坂安治・小川祐忠・朽木元綱・赤座久兵在麓。毛利秀元屯南宮山。鍋島勝茂・長束正家・長曾我部盛親・安國寺惠瓊在麓。皆北嚮而陣。騎卒凡十二萬八千。福島氏候吏法齋者。走報曰。敵出矣。正則問。何以知之。曰。臣撥馬矢皆溫。是以知之。正則乃使人赴岡山告之。既而長松・曾根諸砦皆上狀。內大臣哂曰。敵墮我術中矣。乃下令軍中。部署諸將。以福島正則爲先驅。下野守忠吉與井伊直政・本多忠勝爲申驅。黑田長政・加藤嘉明・細川忠興・田中吉政・生駒一正・竹中重門・戶川達安等爲右軍。藤堂高虎・山內一豐・織田長益・津田信成・京極高知等爲左軍。蜂須賀至鎭・筒井定次・稻葉貞通・遠藤慶隆・小出秀家・龜井茲矩・寺澤廣高等爲游軍。淺野左京大夫・池田輝政與中村・德永・市橋・有馬・金森等。備南宮山。水野勝成・松平康長與一柳・松下・西尾・津輕等。備大垣。內大臣自以麾下爲中軍。酒井家次居前。本多康重・大須賀忠政居後。騎卒凡七萬五千。遣奧平貞治。潛赴松尾山。監秀秋軍。使候戰酣爲內

應。黑田氏將毛谷主水使至中軍。召問敵數。對曰。三萬。曰。我候騎皆以十餘萬
告。汝何所見。對曰。臣算其鬭士而已。內大臣大悅。十五日。黎明。親擐甲。不冑而
巾。上馬。率諸軍。進至桃配野。召忠勝曰。南宮之敵可疑。忠勝曰。彼若挾詐。當下
山陣。今猶在頂。是無慮也。內大臣曰。然。賜忠勝以名馬三國驪者。遣之。自進軍
可半里。家次以白旗十二旒先行三百步。會、天大霧。咫尺不可辨。東西之軍遇
于關原。日加辰而天霽。敵諸將覗我軍已近。欲誘致而夾擊之。未敢挑戰。忠吉
時年十二。與直政以兵三百。踰正則陣而前。正則臣可兒才藏誰何之。答曰。下
野公子・井伊侍從自爲斥候也。曰。候騎不可多。直政乃附兵於其老木俣右京。
而以十餘騎馳。既而中軍鼓螺起。諸隊大鬨。弓銃已交。忠吉親冒義弘陣。與二
驍騎搏。墮馬。命從兵斬之。復進被創。直政扞戰。右京尋至。忠勝乘三國驪橫衝
敵陣。陣皆披靡。其子忠朝手斬二騎。義弘・行長戰甚力。秀家亦擊正則。殺傷數
百。我衆將卻。正則叱咤督戰。會、游軍來援。合兵疾擊。我右軍自菩提山南循麓
而進。長政豫揀死士十餘自從。欲必擊三成。先諸將迫其柵。麾三成將島勝猛。

吉政・一正。與三成將蒲生備中・北川十郎戰而不利。嘉明・忠興擊其横。吉政等返之。左軍諸將自道南進。直擊吉隆。吉隆與爲廣・重政健鬭。我兵不可進。時日將午。兩軍迭進互退。勝敗未決。西軍數擧烽。秀元不敢動。秀秋亦不敢應東軍。東軍發礟松尾山以試之。奥平貞治亦促之。秀秋乃以兵八千下山。平岡重定・稻葉正成爲先鋒。迫吉隆之右。不利。貞治戰死。脇坂・朽木・小川・赤座諸將。與我左軍相翼而進。信成・長益斬重政。小川氏部兵斬爲廣。秀秋返戰。三面合擊。於是。內大臣傳令諸軍。鼓譟齊進。聲震天地。西軍大動。我先驅乘之。擊走秀家。我左軍既獲吉隆。進與右軍夾擊。走三成。斬十郎・備中。行長之軍望見擾亂。欲卻而整。我中驅迫擊走之。義弘以一軍東南走。正家・盛親等皆潰。西軍遂大敗。我軍乘勝追北。斬首四萬級。原草爲之赤。未時戰罷。我士卒死傷不滿四千。將帥無一人死者。盡赴中軍效首虜。內大臣據胡床。顧左右取冑。左右怪問故。內大臣笑曰。諺所謂勝而締冑綦者也。乃以忠勝爲擯。延見諸將。忠勝賛曰。列侯今日之戰。皆絕類離群矣。正則曰。中務用兵。乃過所聞。忠勝曰。敵脆弱。不足較也。

川越本・拙修本竝以下有爲字。

忠朝來謁。刀反不入室數寸。衆壯之。忠吉・直政裹創而至。内大臣起視直政創。手注藥。以其餘賜忠吉。直政告忠吉戰狀。曰。鄙語言。鷹之俊者。其雛亦俊。臣於四郎見之。内大臣曰。發縱者得宜爾。秀秋・秀元疑懼未至。内大臣使人召秀秋。乃與脇坂安治等來謁。膝行而前。莫敢仰視。正則耳語長政曰。黃門何醜也。長政曰。雛而遇鷹。固宜如此。内大臣使秀秋攻澤山自效。以小川・赤座有罪奪邑放之。秀元使使賀捷。以其父輝元在大坂。不敢先謁。引而西歸。池田・淺野等亦撤備上謁。正則進而言曰。足下決天下勝敗於一日。振古所無也。岡江雪曰。譬之。猶昏夜向明也。盍凱。内大臣曰。諸君爲我努力。得以取此大捷。而諸君家室皆在大坂。吾心未降也。不出數日。取附之諸君。然後凱耳。諸將聞之。有感泣者。於是。發使者。東報捷於中納言。及少將秀康。使直政・忠勝西次今須。自以諸軍止舍藤川。内大臣既大捷。西軍崩潰。散之四方。四方豪傑。莫不震慴。旬月之間。六十餘國。盡服於德川氏。先大捷四日。田邊圍解。細川藤孝徙龜山。先大捷一日。大津陷。京極高次之高野。敵圍二城者。或奔。或降。大捷後一日。内大臣進踰

針嶺。川越本・拙修本竝作鍼嶺。
令。拙修本作金。

磨針嶺。陣正法寺山。使直政・忠勝率小早川・脇坂以下攻澤山。澤山兵已逃。殘黨死守。明日。直政自城後水道入。縱火焚之。諸軍繼入。族誅石田氏。遂徙陣永原。明日。又徙八幡山。懸令大索諸渠率。我軍留備大垣者。聞關原戰作。進薄其陴。城將福原某。石田氏戚屬也。與熊谷・垣見・相良・秋月・高橋等。固守不下。松平康長令銃卒。以銃代梏。破陴而入。奪其外郭。議曰。大師既捷。是何足損我兵。乃緩攻之四日。相良以下素通款。於是。斬熊谷・垣見以降。福原削髮遁。尋賜死。我軍留備南宮者。奉命追擊。多所斬獲。池田長吉・龜井茲矩。逼水口。獲正家還報。以城內貨財賞賜之。近江人捕行長。獻之。田中吉政捕三成于伊吹山中。獻之。十九日。內大臣幕于草津。天皇使使勞之。內大臣拜謝曰。姦人託事。擾亂天下。臣家康賴諸將吏之力。得以攘除之。四方殘黨。當不日來降。幸勿勞聖慮焉。乃命池田左衞門尉・福島左衞門大夫・淺野左京大夫。先入京師。鎭撫士民。且慰問北廳氏。大坂聞敗。內外失色。輝元・長盛馳使乞降。內大臣不答。使大野治長往諭秀賴母子曰。近日之事。吾明知不出沖子也。今亂人既獲。宜安堵如故。於

是。衆情大安。京畿帖服。而山道軍亦至。山道軍。以是月二日至小室。使眞田信幸招其父昌幸。昌幸不肯。榊原康政曰。彼必夜來。嚴備以待。昌幸果至。不敢迫。本多正信勸攻之。戸田一西爭之。不聽。六日。攻之不利。乃令小室城主仙石秀久・川中城主森忠政備之而西。十七日。至妻籠。遇報捷使者。兼程以至。內大臣怒其愆期。稱疾不見。中納言垂泣而出。康政・正信與大久保忠隣・酒井忠利請見。亦使井伊直政辭之。直政素受寵任。又爲公子忠吉婦翁。於是出傳命。因颺言曰。儲君逗撓。不及大事。公等亦焉得不分責也。諸將惶恐而退。獨忠利留。謂之曰。儲君後期。以攻上田爾。主公不必深尤。子何遽詬之爲。直政曰。吾爲儲君數恨。不能不言。忠利作色曰。藉令儲君失驩於主公。子勸戚也。宜彌縫之。今乃衆彰其過。果何意乎。願得聞其說焉。扣刀而進。牧野康成・本多成重救解而止。衆指忠利曰。彼今日舌戰。過往年武功萬萬。本多正純入白曰。愆期由於正信也。願罰正信。以著儲君之無過。內大臣意稍解。二十日。至大津。召見中納言。謂之曰。爲天下猶奕棊也。既勝其全局。則雖有敵子存者。何足較輸贏哉。汝未聞

守。拙修本作下。

若說乎。中納言曰。爾時戶田左門諫兒。勿以小失大。誠如大人所言。曰。彼微者也。故其言不行耳。乃召一西。褒之曰。吾使汝言可行矣。命爲大津留守。淺野彈正少弼奉命。從中納言而至。內大臣召而謂之曰。西面之事。我與秀忠能辨之。東面獨有秀康。子往助之。以經理奧羽。彈正少弼乃東。於是兩道之軍盡萃于大津。侯伯將士來謁者如雲。前田利長圍青木一矩于越前。數日而捷聞至。一矩懼降。納質及賂。利長受質卻賂而來謁。內大臣慰勞之。問曰。令弟何如。利長囁嚅不敢對。內大臣曰。子安之。尊公嘗以子兄弟託於我。我豈忘之哉。使龍竢命。山岡景友奉命徇伊勢。援福島正賴守長島。及捷聞至。出兵。要南宮敗兵。擊走之。取桑名・龜山・神戶諸城而來謁。內大臣乃遣奧平信昌入京師。以板倉勝重・加藤正次・大久保長安爲副。行所司代事。捕僧惠瓊。二十二日。遣直政・忠勝。率列侯。臨大坂。輝元・長盛復乞降。不答。二十四日。中納言入京師。二十七日。內大臣入大坂。遠近屏息。十月朔。命奧平信昌。徇石田三成・小西行長・僧惠瓊。斬于六條河原。併長束正家首。梟于三條。磔伏見城中應敵者十八人于粟田口。

遂下令。伐西南諸國未定者。以中納言爲大將。刻期發軍。十九日。中納言入大坂。輝元・長盛乞降盆力。乃放長盛于高野。使藤堂高虎收其郡山。釋其留守渡邊了。屬高虎。削輝元六國。收浮田秀家三國。浮田氏臣某。來告秀家既死。而潛使秀家奔依島津氏。島津義弘之歸自關原。其兄義久囚之而乞降。內大臣曰。我初遇義弘父子甚厚。何所負而黨亂人。是固在所不許。雖然。吾不忍復勞兵。乃許其降。義久欲來謝。會疾作。伊集院族亦爲亂。以故未能來也。初豐後故主大友義統應西軍。欲復其舊國。首逼杵築。杵築告急於黑田・加藤氏。黑田孝高方以募兵萬人。發中津南伐。聞之赴援。與杵築兵合擊。破而降之。轉攻熊谷・垣見氏邑。偶得關原逃卒。縱入其城。城皆降。遂助中川氏。攻下太田氏。盡定豐後。還入豐前。攻香春・小倉。踰月皆下之。轉入筑前。加藤清正援杵築不及。乃攻宇土・八代。肥前大村氏始不應西軍。於是。發兵助清正。清正亦使關原逃卒入諭焉。二城皆降。薩摩兵援八代。至水股而遁去。清正乃與孝高約。夾攻筑後。鍋島直茂擧兵應之。擊立花宗茂。宗茂既降東軍。孝高・清正和解之。召立花增時行

渡邊。正本作渡部。

太田。正本作大田。

豐前下攻。川越本・拙修本竝作取。

既下。川越本作既降。

成。宗茂乃出而曰。公等豫知内府必勝。非我所及也。清正置之熊本。遂與孝高徇下毛利秀包・筑紫廣門邑。十一月。令二肥・二筑・二豐兵。臨薩摩境上。日向伊東氏世與薩摩仇。攻取宮崎・佐土原。引兵來會。内大臣聞之。下令。告島津氏既下。弭其兵以定九國。初毛利氏遣將徇伊豫。攻眞崎。加藤忠明爲兄嘉明留守。與其將佃一成。隨方防禦。大破之。長曾我部盛親還自關原。因井伊氏乞降。許之。盛親有庶兄。與藤堂氏善。盛親恐其代己。迫使自殺。内大臣怒。遣井伊氏將鈴木重好。奪其封以定四國。初福知山城主小野木重勝與圍田邊城。既解。據其邑。及大捷。細川忠興以其父仇請而討之。重勝自殺。石川賴明與圍大津。及捷而降。其父數正爲我叛臣。以故不許。當斬。幷重勝首梟之。細川藤孝之守田邊也。以死自矢。藤孝長詞學。受古今集於西三條氏。敵將谷衞友等。其弟子也。陰通款。不丸於銃。朝廷恐其學絕傳也。遣廷臣諭使行成。及聞捷。藤孝自愧。遁高野。京極高次亦愧。不敢來謁。内大臣使人諭高次曰。子守孤城。使數萬敵衆不及於事。功亦多矣。乃召見之。以前田玄以坐視田邊・大津之難。黜之。尋徙封

一矩。掴修本作一炬。

殉。正本作徇。

丹波八上。青木一矩・丹羽長重等。亦坐觀望失邑。九鬼守隆初招其父嘉隆。嘉隆不肯。守隆乃止。陣于畔乘。及大軍西上。恐獲罪。乃進戰效首級於途。內大臣不懌。及大捷。嘉隆懼奔新宮。守隆爲乞命得允。馳使迎之。未至而嘉隆自殺。眞田昌幸與少子幸村來乞命。不許。長子信幸因井伊・榊原二氏固請。內大臣使言之於中納言。中納言曰。我失關原之期。實終身之憾。而致之者昌幸也。必處之死。信幸固請曰。嚮也。臣寧負父。不能負君。今也。寧死殉父。不生事君。榊原康政入白。兩公嘉之。爲宥死一等。放之高野。先是。關原之報至陸奧。上杉景勝大驚。急召還山形軍。佐竹義宣亦懼。議降。東北亦稍定。十二月。內大臣與中納言。及諸親信議曰。禍亂略定。當裂天下賞有功。乃以關東八國爲根本之地。居江戶城如故。以越前・尾張・近江・伊勢封宗族舊臣。其餘盡爲外藩。賜加賀・能登・越中于前田利長。爲一百萬石。賜肥後于加藤清正。爲七十萬石。賜備前・美作于小早川秀秋安藝・備後于福島正則。筑前于黑田長政。播磨于池田輝政。竝爲五十萬石。賜豐前于細川忠興。爲四十萬石。賜紀伊于淺野左京大夫。筑後

丹波。川越本・拙修本竝作丹後。

知。正本作智。

于田中吉政。竝爲三十萬石。賜丹後・若狹于京極高知。因幡・伯耆于中村忠一。出雲・隱岐于堀尾吉晴。土佐于山內一豐。阿波于蜂須賀至鎮。讃岐于生駒一正。伊豫于加藤嘉明・藤堂高虎。竝爲二十萬石。賜飛驒于金森可重。丹波福知山于有馬豐氏。美濃高須于德永壽昌。伊勢神戶于一柳直盛。其阿濃津于富田知信。其松坂于古田重恒。伊賀于筒井定次。信濃上田于眞田信幸。因幡鳥取于池田長吉。備中庭瀨于戶川達安。豐後日出于木下延俊。或益封。或依舊。賜肥前四萬石于寺澤廣高。美濃二萬石于西尾光敎。以信濃之邑賞木曾諸士。諸降附之國。改立其嗣。賜薩摩・大隅・日向于島津忠恒。爲七十萬石。賜長門・周防于毛利秀元。肥前于鍋島勝茂。竝爲三十萬石。以攝津・河內・和泉六十餘萬石隷大坂。賜越前于少將秀康。爲六十七萬石。賜尾張于下野守忠吉。爲二十萬石。賜近江澤山于井伊直政。爲十八萬石。賜伊勢桑名于本多忠勝。併舊封爲十七萬石。賜美濃加納于奧平信昌。其大垣于石川康通。賜上野高崎于酒井家次。駿府于內藤信成。濱松于松平忠賴。岡崎于本多康重。增酒井忠利

慶長六年

秩爲萬石。餘各有差。外藩以今歲發命。舊臣以明歲發命。乃使中納言入朝告成事。令諸冒豐臣氏者皆復本姓。豐臣氏嘗立皇庶子良仁爲太子。而非天子意也。於是。欲立皇嫡子政仁。諮於內大臣。內大臣對曰。是非臣所敢議也。嫡庶之分。唯帝心裁之。天子卽以政仁爲皇太子。六年。正月。內大臣在大坂西城。中納言在二城。入見秀賴于牙城。列侯諸將盡朝西城。賀正。先是。修伏見城。三月成。徙焉。朝廷欲酬內大臣勳勞。擬以大將軍。大將軍之拜。自足利氏亡後。莫復擧其禮。內大臣不敢當。且恐其勞費天下也。固辭。乃以中納言爲大納言。陞從二位。下野守忠吉敍從四位下。任侍從。舊臣多進爵者。於是。以西事既平。使大納言往平關東諸國。四月。發伏見。歸江戶。佐竹義宣懼討。迎之品川。謝罪請降。使往伏見。請之於內大臣。內大臣曰。乘時擧事。英雄之常。不足深咎也。獨觀望兩端者。可鄙之甚。故吾憎義宣過於景勝。乃不許見。使就第竢罪。景勝屢因少將秀康謝罪。秀康以爲景勝方失勢。乘之非武。因爲請納其降。內大臣許之。七月。景勝來謝伏見。八月。收其會津一百萬石。賜米澤三十萬石。以會津賜蒲生

數。拙修本作遂。

十二。拙修本作二十三。

法。川越本・拙修本竝作派。

秀行。食六十萬石。伊達政宗藉大捷之威。數使上杉氏。達密命。又誘南部反臣和賀忠親作亂。及事不成。殺忠親滅口。乃停前約。割上杉氏地十二郡。六十二萬石賜之。加最上義光・堀秀治之封。命二人。率南部・戸澤・本堂・村上・溝口氏。撃平會津城邑未服者。會津之老直江兼續。初與石田三成定密謀。本多正信請特加刑。內大臣曰。與此謀者。豈獨一兼續。吾蕩滌天下。何必介介也。釋不問。九月。召前田利長任子利常。冠之遺歸。以大納言女妻之。內大臣方鋭意求治。時藤原肅以有名。石田三成嘗欲聘之。不就。尋應淺野氏之招。至是。內大臣數延之。諮問太平之策。後聘其門人林信勝。爲博士。以備顧問。是歲。夏。奏加供御之地。及廷臣食邑。給豐國廟以萬石。其他寺祠皆給釆田。初本願寺祖姓藤原氏。稱親鸞。創一向法。蓄妻食肉。八世孫兼壽。始建寺于山科。尋徙大坂。其曾孫光佐與織田信長構兵。所在門徒爭戰不已。後助豐臣秀吉西伐。誘其門徒。通薩摩之道。以功建寺于京師六條。光佐死。二子。光壽・光昭。光昭母美。秀吉納之。因立光昭。內大臣之東伐。二人皆送之江戶。爲石田氏所阻。光壽獨間行而達。歸

牙。描修本作本。

慶長七年

川越本標註云。據藩翰譜・烈祖成蹟諸書。馬鷹上所謁。錄時服下所獻。疑此文錯誤。

匿京師。已而大軍西上。黑田長政請誘門徒撓京畿。內大臣曰。吾以武定天下。何借浮屠力哉。乃止。大捷後。光壽迎賀大津。內大臣曰。光壽本當嗣也。乃爲建寺于六條東。令天下門徒分屬東西。以板倉勝重・加藤正次爲京師所司代。掌獄訟及寺祠事。尋罷正次。專任勝重。亂後物情不定。事務極繁。勝重詳雅強敏。人人無不厭心。其他大津・草津・界浦・尼崎等地皆置吏。吏皆稱職。又城于膳所。使戶田一西守焉。遂命關西諸侯城于京師二條。以爲駐駕之地。以大番士人更戍之。十一月。內大臣乃歸江戶。尋使大納言居牙城。而自居西城。天下牧長請朝于江戶。辭不許。先是。以本多正信・內藤清成爲關東奉行。以綜庶務。於是。命青山忠成爲副。賜奥平家昌以宇都宮。食十萬石。七年。正月。內大臣進從一位。大納言進正二位。前田利長請朝江戶以爲天下之率。自山道東下。內大臣避之京師。留大納言當之。利長至。大納言親迓之于板橋。待遇甚渥。利長喜出望外。乃就第。獻名刀・馬・鷹・金百枚。且曰。入謁。大納言出坐前殿。諸將群臣左右臚列。擯者出、延利長坐之下坐。尋行饗禮。賜名刀一口・金百枚・銀千枚・時服百

領遺之。利長遂赴伏見。謁內大臣而去。三月。內大臣適大坂。賀正。尋還伏見。後以爲常。四月。賜島津氏印信。島津義久既平國內反者。欲與疾入謝。反者復起。不果。五月。朔。內大臣入朝。二日。朝皇太后。因留在京師。六月。奏請前南都黃熟香。天使來莅。本多正純掌其事。八月。生母水野氏卒。爲建傳通院。十月。內大臣歸江戸。十一月。復赴伏見。十二月。島津忠恒盡平國內亂。來謁。謝其稽緩之罪。先是。前田利長告浮田秀家未死。乃召浮田氏臣嘗告其死者。詰之。告者請死。內大臣嘉其忠。祿之。於是。忠恒白曰。秀家實在臣所。彼爲關原渠率。天下所不容。雖然。窮來投臣。臣不忍殺。願幕下枉包容之。乃宥死一等。流之八丈島。以明年赴配所。是歲。春。井伊直政卒。直政以關原功。首賜石田氏故邑。居于澤山。尋奉命城彥根。未成而沒。其子直勝襲封。是歲。夏。內大臣欲廢佐竹義宣爲庶人。以其父義重乞哀。乃收其常陸八十萬石。賜出羽秋田二十萬石。收其弟貞隆之岩城。賜出羽龜田。以秋田氏不從關原之役。收其國。賜常陸宍戸。命松平康重撿常陸地。佐竹氏將車猛虎作亂。襲水戸。康重豫知之。邀擊擒猛虎。是歲。冬。

二日。拙修本作三日。

貞隆。川越本・拙修本竝作宣隆。川越本標註云。按宣隆常作貞隆。宣隆貞隆子。非義宣弟。

邀。川越本・拙修本竝作迎。

義。川越本・拙修本竝作節。

慶長八年

弉。正本作奬。

川越本・拙修本竝天下之下有之字。

勒。正本作勤。

小早川秀秋卒。無嗣。收其備前。以其老稻葉・平岡氏嘗有功于關原。召而用之。」內大臣欲賜榊原康政以水戶。辭曰。臣有罪於關原之役。免罰受賞。臣所不安。臣邑密邇江戶。緩急得以致身。不可徙也。遂馳還館林。本多正信使人止之。不聽。於是。封五男信吉于水戶二十萬石。以其舊封佐倉。封七男忠輝。以岩城賜鳥居忠政。食二十萬石。以酬其父元忠死義。自關原之役。至于此。賞罰略畢。天下大定。」八年・二月。天皇詔以源家康爲征夷大將軍。進右大臣。兼淳和・弉學兩院別當。補源氏長者。賜隨身兵仗。十二日。大納言藤原兼勝・參議藤原光豐以傳奏司奉詔書。就伏見拜焉。少將秀康進參議。敍從三位。其餘戚屬將吏。敍任有差。二十二日。入朝拜命。井伊直勝・本多忠勝等十餘將。騎從輿傍。參議德川秀康・參議細川忠興・參議京極高次・少將池田輝政・少將福島正則爲後乘。獻白金萬兩。皇后・皇太子及宗室百官。皆有贈遺。天皇賜之酒曰。天下亂久矣。汝能略定之。朕勒汝功。使擧乃祖之職。宜統我師以鎮護王室。大將軍稽首曰。家康雖不才。敢不服膺王命。禮畢而出。文武庶僚悉詣二條城賀之。」大將軍初捷

慶長九年

於關原。即使永井直勝就細川藤孝諮室町禮式於是。又與藤孝議禮。是歲。春。封七男忠輝于信濃川中。封八男義直于甲斐。義直幼。未之國。使平岩親吉攝其國事。徙川中城主森忠政于美作。加其封。三月。西道牧長盡朝江戶。四月。大將軍還伏見。時豐臣秀賴爲內大臣。年已十一。大將軍欲以孫女妻之。六月。大納言使夫人淺井氏攜女赴京師。七月。使大久保忠鄰送女于大坂。黑田長政以弓銃手三百衞之。大將軍聞之弗懌。豐臣氏素尙奢華。於是。欲以白綾覆城內道途。片桐且元曰。德川公不喜此等事。遽撤之。婚既成。秀賴不妻視之。淀君不婦視之。使福島正則密徵西諸侯誓書。十月。大將軍辭右大臣。尋歸江戶。十一月。大納言兼右近衞大將。補右馬寮御監。先是。水戶城主信吉卒。無嗣。封九男賴宣於水戶。是歲。召井伊直政遺腹子直孝于江戶。九年。二月。令東北三道。定道程。置堠樹。以三十六町爲一里。用織田氏故法。既而西南四道皆倣之。三月。大將軍入京師。六月。入朝。七月。大納言夫人淺井氏生男家光于江戶。大將軍授其幼字。呼竹千代。是歲。藤堂高虎倡議。使諸侯置邸及質于江戶。相良氏

速。川越本、拙修本並作遂。詣。拙修本作諸。

慶長十年

首納其母。衆繼之。是歲。黑田孝高卒。關原之事。孝高之計居多。其定九州。不妄
戮一人。既而告老。謝絕世事。大納言比以漢張良。及卒。殊悼惜之。自關原之捷。
德川氏威溢海外。紅毛・安南諸國皆來貢。而松前慶廣奉敎旨。約束蝦夷。先是。
大將軍謂對馬守宗義智曰。豐臣氏伐朝鮮。非我所知。我與彼皆無怨仇。彼苟
欲入貢。我當許之。然非自我求和。子體此意。往試計之。義智之國。遣使諷之朝
鮮。朝鮮苦明人來戍也。欲速成和。然喜懼相半。是歲。使孫文或等來對馬。請人
見。且求還其俘囚。義智馳使報之。大將軍答曰。明春。吾父子將入朝。卿率詣京
師以俟。義智如其敎。板倉勝重受旨。館之大德寺。十年。正月。大將軍入京師。二
月。見韓人于伏見。令諸道撿韓俘返予。謂義智曰。吾將老矣。貢使來。致之江戶。
又曰。吾欲擧鎌倉禮使右大將拜賀。期在近矣。宜留韓人觀其儀衞。乃賜義智
邑于肥前。三月。大納言率上杉・佐竹・伊達・最上氏西上。特命鳥居忠政爲後殿。
仗戟載途者十有七日。先入伏見。遂入朝。拜大將命。四月。大將軍奏請辭職。優
詔。許之。且欲遷爲左大臣。固辭而還。十六日。詔・以源秀忠爲征夷大將軍。遷內

大臣。陞正二位。仍帶舊職。弟忠吉進三位中將。弟忠輝任四位少將。十日。入朝拜命。東諸侯及前田・毛利・島津氏盡從。自是世號前大將軍曰大御所。五月。前將軍諷豐臣秀頼使入朝。淀君性猜忌。固執不遣。少將忠輝奉命往。告襲職焉。六月。大將軍歸江戸。七月。課諸侯十餘名。重修伏見城。十月。前將軍歸江戸。十二月。養榊原康政女。妻池田利隆。又謂異父弟松平定勝曰。島津・淺野皆冀與我結婚。汝二男皆已可有室矣。宜使長男娶島津。次男娶淺野。定勝奉命。是歲。命金工光次更造方金。初上杉氏有佐渡。毛利氏有石見。皆出白金。然不能多鑄造。豐臣氏收佐渡。亦無大利。及前將軍收二國。使甲斐人大久保長安掌之。居二歲。得數萬斤。長安又採於伊豆。其利亦等。乃因豐臣氏故制。造金幣。次年。又鑄新錢。民皆便之。十一年。春。前將軍建白。禁廷狹隘。不可行朝儀。遂課天下侯伯。修拓之。各刻名于礎。參議秀康掌其事。秀康尋遷中納言。又大修江戸城。使藤堂高虎率池田・福島・加藤・黒田・淺野・細川等十五姓助工。三月。前將軍赴京師。五月。榊原康政卒。命子康勝襲封。九月。賜島津忠恒松平氏及偏諱。改名

慶長十二年

家久。自是。諸藩多賜氏。是月。江戶城成。宏壯稱天下第一。藤堂氏以功賜備中地萬石。其餘有差。十月。前將軍歸江戶。是歲。封十男賴房于常陸下妻。食五萬石。爲少將忠輝娶伊達氏。罷內藤清成・青山忠成奉行職。以安藤重信代之。徙駿府城主內藤信成于長濱。十二年。正月。課海道及畿西諸國。城于駿府。前將軍嬰疾昏倒。既而愈。有訛言。二月。乃張四部散樂。下令縱觀。前將軍・將軍率諸侯臨焉。訛言立止。先是。中將忠吉有疾。少間。來江戶。寓大久保氏。三月。忠吉卒。無嗣。徙義直于尾張。食六十萬石。令平岩親吉居犬山。中納言秀康爲伏見留守。是月。以疾謁歸。兩月而卒。秀康武而善政。內外惜之。其子忠直襲封。後任少將。次子直基繼結城氏。三月。前將軍老于駿府。以松平定勝爲伏見留守。以井伊直孝副之。先是。韓囚歸其國。說我新政。韓主心嚮之。五月。遣使者呂祐吉等入貢。詣兩府。自是。每將軍禪代。輒來。永爲我屬國。兩將軍奏宗義智之功。爲四位侍從。比十萬石。前代外國書信皆委僧侶。於是。命博士林信勝掌之。是夏。課東北諸侯。作江戶天主閣。十月。前將軍之江戶。擧西城府藏貺將軍。又設茶會

慶長十三年

慶長十四年

三。川越本標註云。一作二。

而招將軍。以上杉景勝・佐竹義宣・伊達政宗爲接伴。皆手賜茶。當是時。兩公數臨諸侯邸。每極歡焉。十二月・前將軍還駿府。府城災。十三年。再城之。三月成。九月。將軍率諸侯往賀焉。自是兩公往來二府。而豐臣氏以下歲使使駿府賀正。是歲・筒井定次以淫虐。前田利宗以喪心。並收封。以利宗邑入上。徙封松平康重。以其地形不足以扼山陰。乃改城于篠山。課藤堂及池田・福島・加藤・淺野氏。十四年。正月。義直之國。前將軍送之。二月。歸。九月。徙脇坂安治于大洲。富田知信于宇和島。以伊賀・伊勢二十三萬石。賜藤堂高虎。治于阿濃津。比勳舊之臣。先是。廷臣有結伴姦淫者。前將軍奉敕。命板倉勝重按治之。十一月。誅其首罪一人。流竄其餘。十二月。封賴宣于駿河・遠江五十萬石。治于濱松。徙賴房于水戶。是歲。諸侯妻子盡至江戶。令其會同者留期年而去。著爲永制。禁西諸侯多造戰艦。先是。島津家久奉敕招琉球。琉球不至。請而討之。是歲。春。遣其將新納一氏。將八千人南伐。樺山久高爲先鋒。抵東求島。執琉球戍兵三百。夏。攻難巴津。虜以鐵鏁聯船。扼守津口。而津傍有山險多蛇蝎。虜恃不置兵。我軍放火豬

暘。川越本・拙修本並作陽。

具志。拙修本作奥志。

二百。川越本標註云。二一作三。

慶長十五年

讒。拙修本作譖。

山而上。進奪暘喚灘。戰于千里山。不利。轉攻朝築城。拔之。琉球王尙寧使其弟具志來乞降。不許。五戰而至國都。擒尙寧及王子大臣數十人。而嚴禁抄掠。安撫國民。以六十日定琉球。秋。幕議以琉球賜島津氏。爲其臣隸。先是。我賈舶至阿媽港。皆見誘殺。其三人潛逃歸。告之。是歲。港人二百至長崎。幕府命原城主有馬晴信。助長崎奉行長谷川藤廣。擊鏖港人。後二歲。其大人來謝。乃給印信。許互市。十五年。正月。將軍以內藤忠重爲嗣子傅。松平正綱子信綱・阿部正次子正秋爲侍臣。二月。將軍適駿府。先是。堀忠俊之宰堀直淸專政。讒庶兄直寄。逐之。直寄奔。訴之駿府。閏二月。兩公親聽之。直淸辭屈。放之山形。放忠俊岩城。封直寄于信濃飯山。以越後封少將忠輝。併舊封爲五十萬石。治于福島。尋遷高田。是月。將軍大獵于遠江。本多忠勝自桑名來謁曰。往年老僕從太公。拒武田信玄于茲。爾時以信玄兵爲衆盛不可當也。今郎君之衆什倍信玄矣。是春。爲義直城名護屋。課前田氏以下十七國助役。諸侯助篠山役者告竣。命助名護屋。福島正則謂池田輝政曰。土木荐興。我輩困敝。若夫兩府所不敢辭。此等

私役。復驅使我輩。何也。子爲駿府愛壻。盍爲我輩說之。清正奮髯曰。左衛門何出此言。不欲助役。則不如速反。不能反。則何出此言乎。輝政大笑而止。前將軍聞之。使輝政言諸侯曰。厭土木者。宜速就國。高壘深溝以竢我旆。諸侯大懼。併力就役。數月而成。八月。島津家久攜琉球王來謁駿府。獻方物。遂造江戶。九月。將軍釋王使復其國。命島津氏歸俘虜。十月。本多忠勝卒。忠勝自十四歲從軍。大小五十餘戰。每戰皆捷。而未嘗被創。前將軍殊悼之。使長子忠政襲封。自是藤堂高虎代忠勝鎭伊勢。十六年。三月。前將軍如京師。先是。朝旨欲以爲太政大臣。固辭不拜。是月。皇太子受禪。是爲後水尾天皇。前將軍命諸侯。修上皇宮。多置供御地。前將軍使人謂豐臣秀賴曰。自結婚未相見。恐生物議。願一來以定衆情。秀賴年十九。驕逸不知外事。事皆決於淀君。淀君欲不遣。嫡母淺野氏使使諭其不可再違命。乃遣之。四月。詣二條城。前將軍饗而還之。遣義直・賴宣往大坂。謝之。遺白金一萬三千兩。乃歸駿府。是月。淺野彈正少弼卒。前將軍最與少弼親善。以常陸眞壁五萬石爲其湯沐邑。而時召見與圍碁。及其沒。不復

耶蘇。川越本・拙修本竝作二耶歟。下同。

慶長十七年

奕也。乃賜眞壁于其季子長重。五月。加藤清正卒。嗣子忠廣猶幼。幕議使藤堂高虎往視國事。十一月。兩公偕獵于上野。先是。京師富人角倉某。上書言便宜。請通丹波之漕。許之。尋命通甲斐・駿河之漕。是歲。又請引鴨川通伏見。又許之。當是時。夷蕃入貢若乞互市者二十餘國。前將軍命吏贈書於明福建守。因故事請勘合印。守疑懼不答。而其商舶來者益衆。乃以長崎爲互市地。禁他依泊。初豐臣氏禁耶蘇教。既而禁弛。至是蠻人耶蘇子上變。告倡蠻教者皆覬覦非望。乃令海內撿蠻人。盡逐之。我民奉其教者。命僧諭之。不聽者處流斬。置耶蘇子于江戶東郭。厚視之。又有告有馬晴信修蠻教。次年。放晴信于甲斐。尋賜死。其子爲前將軍義女孫壻。因得襲封。十七年。正月。平岩親吉卒。無子。親吉爲義直假父。以故不敢立後。前將軍適尾張。二月。歸。六月。徙京畿豪商于江戶。七月。修春日祠。先是。祠樹折。朝議以爲凶兆。來諮。前將軍對曰。是神欲以修祠耳。乃有是命。因給穀祿。准伊勢大廟。又嘗與朝臣議。制天下寺祠修造之節。而嚴禁新立焉。是時。越前列宰爭權來愬。十一月。兩公在江戶聽之。一人坐不直處流。

領。拙修本作鎮。

舍。川越本作次。

一人愧恥自殺。前將軍遣本多成重爲宰。與舊宰並視國事。成重。重次子。幼侍秀康者也。是歲。蒲生秀行卒。子忠明以我外孫嗣鎮會津。十八年。正月。命三十七藩修皇宮。是月。池田輝政卒。池田氏。實楠氏。楠正行之死節。遺腹子敎正育於攝津池田氏。其裔恒利始徙尾張。恒利孫爲輝政。輝政助德川氏定禍亂。人以爲不辱其祖。長子利隆襲封播磨。二弟忠繼・忠雄。並以我外孫分領備前・淡路。八月。淺野左京大夫卒。關原之役。大夫首破岐阜。功最大。而保護豐臣氏不衰。前將軍心深韙之。遂約以其女妻義直。未成婚而卒。無子。有二弟。仲長晟。稱但馬守。少在大坂。國人避嫌。請立叔長重。前將軍命立仲襲封。是歲。春。大久保長安姦利事覺。會病死。誅其七子。故石川數正子康長連坐奪邑。以康長邑深志。賜小笠原秀政。復其舊封。是歲。冬。富田知信・高橋元種皆有罪。收封。是時。大久保忠隣・本多正信・土井利勝・安藤重信・酒井忠世。爲江戶老中。本多正純・成瀨正成・安藤直次。爲駿府老中。分執天下諸政。是歲。秋。前將軍適江戶。十二月。將還駿府。舍于中原。甲斐人馬場忠時上變事曰。大久保忠隣謀不軌。馬場嘗

領。川越本・拙修本竝作鎮。過。川越本作惡。籍。正本作藉。

蒙譴放小田原。請忠隣申雪。不見省。怨望。先是。忠隣喪其子忠常。乃稱疾謁歸。又與山口重政婚。吏劾其不告。奪重政封。忠隣謝罪。不報。乃杜門不出。馬場時之也。又聞正信與忠隣有郤。遂因本多氏誣告。前將軍驚。還入江戶。令忠隣如京師檢耶蘇教。踰歲。正信傳命京師。放忠隣于彥根。毀小田原外郭。逐其士臣。設兵備于箱根。前將軍乃歸駿府。板倉勝重奉命詣忠隣。館人走報。忠隣方與客奕。徐斂局而出。聽命。京師驚擾。忠隣乃縛鎧仗。送之板倉氏。終赴彥根。其族皆連坐。叔父忠佐卒。亦除國毀城。安房里見氏。坐與忠隣交通。奪國。忠隣自配所上書駿府曰。臣縱伏誅。而明無反心。有司不敢通。獨成瀨正成爲通之。僭天海以密教見親近。亦從容申救。以將軍怒不釋。乃止。及井伊直孝領彥根。勸忠隣再訴。辭曰。是顯君過也。亦止。兩將軍思大久保氏舊勳。使忠常子忠季襲其封二萬石。後竟復其舊。前將軍素留意學術。捷於關原之年。卽取經籍未經刊行者。盡上之木。以修禮文爲志。自讓職以來。益令天下購求遺書。引廷臣諳典故者。與林信勝等。講究於前。日夕不倦。又招文學之士。無緇素皆禮重之。是歲。

親試以ㇾ爲ㇾ政以ㇾ德頌。將軍亦試ㇾ草尙ㇾ之風ㇾ必偃賦。

日本外史卷之二十一終

慶長十九年

川越本・拙修本竝奉上有乃字。

日本外史卷之二十二

德川氏正記

德川氏五

慶長十九年。三月。大將軍陞從一位。遷右大臣。天使就拜焉。四月。天使歸自江戸。過駿府。諭內旨。以前將軍爲太政大臣。准三宮。辭不敢當。又諭納孫女爲中宮。奉詔。當是時。豐臣秀賴已長。其臣大野治長等。陰謀擧兵復其舊業。治長有姿容。密通淀君。所言莫不聽。與淀君季父織田長益議。遺書前田利長曰。先君有遺命。君盍來輔嗣君。城內甲仗豐足。福島正則等所貯穀粟。積至數萬石。足以有爲矣。利長以疾辭之。以其書來獻兩府。五月。利長卒。命子利光襲封。秀賴傅片桐且元常誡秀賴曰。德川太公不失義元之誼也。而納氏眞。不遺信長之好也。而助信雄。先公知其然。故臨終託孤。君務不失其驩心。則可以長久矣。不

赴。川越本作趣。

則禍將不測。秀賴頗悟。而群臣不悅。以且元數使關東。意其有私。稍猜防之。先是。秀賴造方廣寺。以繼先志。至是。畢功。又鑄巨鐘。乃使且元來告。請慶之。期以七月秀賴親往。是歲。高山友祥・內藤如安等。以奉蠻敎下京師獄。前將軍遣吏二名往。與板倉勝重議。放友祥等于海西。流餘黨於是。界浦有犯人。二吏率卒往按之。途經大坂。有訛言曰。且元候秀賴出。導東吏取城。秀賴懼。不出。二吏既按界浦。遂之長崎。訛言乃止。將慶之。其鐘銘觸忌諱。類呪詛者。上棟牌亦不如式。林信勝・僧天海等交言之。前將軍怒。乃馳使停其慶。八月。且元・治長等來謝。女使二人又奉淀君命至。前將軍召二女使。謂之曰。右府吾孫女壻。淀氏亦吾婦之姉。吾豈相負哉。吾視右府猶子。而右府視我猶仇讐。如聞大坂日招士繕甲。多峙糧餉。吾未知其何謂也。今吾在。猶如此。況後世乎。雖然。是非出於右府母子。蓋爲姦人所詿誤焉爾。苟悛非輸誠。則國家無事矣。不復問銘詞。二女大喜。遂赴江戸。候夫人氏。九月。使本多正純・僧天海責且元。以輸誠之實。且元請其旨。不答。且元與二女偕辭去。行思之。得三策。曰。納淀君爲質。曰。使秀賴居江

人。川越本作叉。

塹壘。川越本標註云。一作壘塞。

江戸。曰。避大坂徙他。因密啓曰。質母於德川氏者。先公所營爲也。是爲上策。或譖且元。賣君。淀君大恚。與群臣決議。誅且元。擧兵。且元奔其邑茨木。遠近騷然。板倉勝重飛書來報。十月。朔。報至駿府。前將軍方與諸子觀散樂。得報曰。孺子終不悟也。不得不除之。乃撤樂。使報之江戸。是春。課東諸侯。城于高田。是秋。課西諸侯。修江戸城。於是。皆罷就國。以備大坂。秀頼亦益散金募兵。關原餘黨。若諸藩亡命者。四集大坂。號稱十萬人。四出抄掠。以貯軍須。東府穀五萬石。在其城下。板倉勝重使人謂大野治長曰。聞之道路。諸公將有旗鼓之事。不腆弊邑之穀。敢犒從者。治長辭。不敢取。勝重乃使賈人漕送京師。不勞一兵。伏見留守松平定勝・井伊直孝與勝重議。遣諜大坂。悉知消息。輒報之東府。置關于淀・葛葉。以撿兵士往來。尼崎城主建部某。關原降將也。與池田氏有姻。前將軍命池田利隆。遣其戚屬下間重景。將兵援守。片桐且元已納降於我。將自茨木赴界浦。與大坂兵戰尼崎下。求救於重景。重景疑其僞。不肯救。且元敗走。大坂兵始合而捷。氣倍壯。大議守備。其城故秀吉所築。窮天下力。塹壘壯固無匹。西北帶

水。東南多池澤。於是。益設塹寨。置守兵。遂發間使招諸侯。伊達政宗遇之小山。縛送江戶。島津家久卻其幣。馳告駿府。且請師期。淺野但馬守國富兵强。而與大坂相爲腹背。議者以爲大患。已而大坂果數遣使誘其君臣以利。但馬守答曰。我父兄所以報故太閤足矣。吾於東府。恩誼非輕。今無故倍之。以黨亂人。不義孰大焉。使者猶來。百計勸說。但馬守乃欲斬其使。懼而止。前將軍得諸報告。乃下軍令曰。伊勢・近江・美濃・尾張・越前等兵。急扼淀・勢多。大和兵自守其地。北陸諸國兵。陣大津・坂本。中國兵陣池田。南海・西海兵。泊和泉海濱。竝俟大軍。勿輕戰。東海・東山將帥。皆隸前將軍。關八州及陸奧・出羽將帥。皆隸將軍。而世子家光與少將忠輝。及酒井重忠・其弟忠利等。居守江戶。蒲生・最上氏以下隸之。賴房與其傅中山信吉。留守駿府。義直與其傅成瀨正成。賴宣與其傅安藤直次。皆從軍。義直初爲右兵衞督。賴宣爲常陸介。竝敍從四位下。後竝進從三位。任參議。兼右近衞中將。賴房初爲左衞門督。後敍從四位下。任右近衞少將。於是。分賜白旗於義直・賴宣。諸嘗受豐臣氏特恩者。不許從。十一日。前將軍以數

利常。川越本・拙修本竝作利光。

百騎發駿府。大坂發刺客入京師、欲狙駕且焚二條城。板倉勝重覺之。盡捕下獄。二十二日、駕至京師。傳奏司傳敕勞問。少將忠直以二萬人、前田利常以三萬人。皆會焉。居三日、召諸將。開大坂圖。議戰、曰、西南兵未至。宜以先鋒挑戰。井伊直孝・藤堂高虎爲先鋒。松平忠明・本多忠政繼之。忠明。奧平信昌少子。以外孫故賜氏。封龜山。是歲。其兄忠正卒。代領其衆、統美濃將士。於是。先鋒自南面進。以北面難濟。令伊奈忠政。壅淀川于長柄。壅大和川于鳥飼。尋使毛利・福島氏助之。十一月。高虎至大仙陵。時城將薄田兼相・山口弘定掠平野。望之而走。城將大野道見焚天王寺。以撓我軍。高虎不動。終與直孝進陣住吉。城將堀氏弘掠界浦。聞之而走、過高虎軍前。前部渡部了慮其有伏。不敢擊。淺野但馬守將兵發紀伊。行擊土兵應大坂者。來與高虎議事。還陣大鳥。池田利隆與二弟忠繼・忠雄。至神崎川。城昌茂奉命監其軍。二弟亂下流。利隆涉上流。進至長柄川。城將織田長益等。以萬人守天滿・中島。利隆欲濟。昌茂止之。其夜。二弟復渡下流。逐守兵。以取中島。將軍以前將軍入京師之日發江戶。兼程而進。十日。至

歸路之歸。川越本・拙修本並作後。

伏見。其明。詣二條議事。十七日。前將軍陣平野。義直・頼宣陣住吉北。少將忠直・前田利常陣岡山。井伊直孝・藤堂高虎陣天王寺。上杉・佐竹・相馬・秋田・堀尾・京極諸將。陣平野西。伊達・金森諸將。陣今宮。淺野・蜂須賀・鍋島諸將。陣今宮北。池田・加藤・山內・森・有馬諸將。陣中島。九鬼・向井諸將。以兵艦泊傳法口。兵總五十萬人。環城四面。不遺尺地。前將軍度城中必悔。使人議和。不肯。已而住吉邏騎夜捕一卒。曰。欲適藤堂陣。誤至此也。撿其懷。得秀頼書。書曰。二魁深入我地。子計中矣。宜速令東國歸款諸將斷其歸路。事成則加封如約。前將軍覽書。哂曰。彼欲離間我。謀何淺也。召高虎。賜書及卒。高虎訊得其實。乃斷其手足指。黥額曰秀頼。縱歸之。城兵又誘池田利隆曰。事成。封以備前・播磨・美作。利隆縛使者獻之。兩將軍終議進取。阿部正之・安藤直次・永井直勝・小栗忠正等數十人爲巡使。大須賀氏部下久世廣宣・坂部廣勝獲罪出亡。以老兵事被收錄。是役皆爲巡使。傳令諸軍。進退操縱。莫不如意。蜂須賀至鎭攻取穢多崎。九鬼守隆・向井忠勝以水軍。奪敵候船數十艘。上杉景勝攻鴫野。佐竹義宣攻

卒。拙修本作手。

今福。皆破其柵。城兵分道出拒。船載銃手。出其中間。力戰交綏。已而城兵以柵難守。棄之而退。將軍令片桐且元代入屯備前島。以其最近城。屬以擲手。」諸將將攻博勞淵二寨。北寨下有洲。生蘆葦。皆以銃卒守之。我軍欲先取蘆洲。洲不容多兵。兵寡者。又不可守。石川忠總實大久保忠隣子也。欲以功贖父。乃請以手兵往。得舟二隻。以槍爲棹而濟。敵守洲者。皆走上寨。發銃。忠總仰攻連晝夜。九鬼氏給舟數十助之。拔北寨。又得蜂須賀氏援兵。遂拔南寨。進取土佐港・阿波坐港。還效首虜。前將軍曰。不愧忠世之孫矣。」於是。諸將爭進。池田忠繼臨蜆川而陣。部將花房職之望野田・福島二寨曰。旗植而無烟。是已逃也。使人伺之。不見一人。乃濟。中島諸將欲繼濟。城昌茂止之曰。太公命我護軍。戒其持重。公等違我言。乃違太公言也。諸將乃止。已而中軍傳令。責諸將逗留。諸將答以昌茂。前將軍召昌茂。使林信勝讀孫武傳。至將在軍君命有所不受。乃顧昌茂曰。汝拘我命。見機不進。何也。因逐之。令諸將進入福島。淺野氏以船兵至海口。爲其聲援。」阿部正之白曰。西北諸砦。相踵陷沒。川場・天滿二寨。脆薄背水。必遁。其

弗。川越本作レ不。

直正。川越本作二直政一。

夜。果焚レ寨而退。城將大野治房守二道頓港一。亦驚走入レ城。蜂須賀氏兵追獲二其旗幕一。十二月。忠總・忠繼與二淺野・鍋島・九鬼諸將一。進入二川場一。利隆等進入二天滿一。東南諸將亦進逼レ城。伊達政宗至二川場一。井伊直孝・藤堂高虎至二生玉一。臨二空壕一而陣。城兵燒二外城諸橋一。獨存二淡路・本街・高麗三橋一。石川忠總與二城兵一戰二于高麗橋一。欲レ使二敵不一レ得レ燒。諸巡使請レ救レ之。前將軍叱曰。止矣。我軍欲レ登レ城。何恃レ橋哉。彼自斷二出路一耳。令二忠總退舍一。遂令二諸將一曰。設レ垣列レ牌。竢レ令而進。勿三妄鬪以損二一卒一。又以二天寒一增二糧食一。本多正純受レ命。以二金工光次一爲レ介。遺二書城中一。使二織田長益・大野治長議一レ和。將軍聞レ之。使二來請一曰。圍合矣。請令二諸軍一。四面齊登。以二天下兵一攻二一城一。何難レ拔之有。和議若成。不レ可レ及已。前將軍曰。未也。將軍弗レ懌。本多正信曰。太公必有二神算一。願少竢レ之。藤堂高虎私射二書城上一。誘二南條光明一。使レ爲二內應一。光明約レ期。事覺。被レ殺。藤堂氏兵不レ知而進。井伊氏兵繼レ之。加賀・越前子弟亦進。逼二玉造貳城一。故秀康庶子直正先登。建二幟濠上一。而城將眞田幸村善拒。我兵死傷頗多。前將軍望レ烟怒曰。奴輩敢破二我令一。顧二安藤直次一往收レ之。將軍請レ罰二破レ令者一。前將軍曰。破

湟。正本作隍。

令者。亦不可得也。兩公屢巡視諸營。前將軍未嘗擐甲。被葵號戰袍。上馬。從十餘騎。至生玉口。城兵望視識之。叢銃雨注。衆爭請避之。前將軍不顧。按轡徐行。橫田尹松後至。排衆而進曰。此公喜當矢石。矢石之來。莫甚於川場。請往焉。乃扣馬而西。使去城遠。他日。將軍巡至天滿。登有馬氏堙樓。城兵狙發大熕。從者請去。不肯。水野勝成曰。元帥巡師。與斥兵異。不當專視一處。乃肯去。城將後藤基次曰。兩帥皆天授。豈可徼倖。扼衆勿妄發銃。六日。前將軍徙陣茶臼山。將軍徙陣岡山。築連珠砦相接。壅河之功既竣。湟水多涸。城兵大驚。我軍以土豚塡湟。列竹牌。排鐵楯。起距堙。鑿地道。而發銃鼓譟者。每夜三次。使城兵不得休止。前將軍令諸將。射書曰。降者有賞。城中人人相疑。將軍復請淩城齊登。前將軍曰。吾聞。良將不戰而勝。且損兵而得城。吾無取焉。復使金工光次入城議和。城中衆議不決。多願和者。大野治長等建議曰。德川翁旦夕人也。明歲西吉東凶。且約和以爲後圖。乃勸秀頼請和。前將軍曰。右府誠自艾。則吾莫復介意。城內客兵。皆釋不問。因約三事。曰。塡周池。曰。徙大和。曰。以淀君爲質。必居一焉。數日

請。拙修本作和。

川越本・拙修本竝事上有軍字。

存。川越本標註云。一作在。

徑。川越本・拙修本竝作經。

答聽塡周池而請爲客兵加食邑。前將軍怒曰。釋之已多矣。奚勝養之乎。議乃輟乃命工益造攻具。或詒井伊直孝議事。直孝方睡起。揩目而出。或曰。子何懈也。曰。我慮敵出襲。夜不交睫。唯晝間得睡耳。城將大野治房愧道頓港之敗。欲有報之。時阿波兵陣本街橋西。治房夜出襲之。阿波兵亂。死傷頗多。人乃服直孝也。先是。天皇使大納言藤原兼勝・大納言藤原實條來勞。於是。復來傳詔旨。曰。卿以耄老。冒風雪于戎間。宜委事諸將。以還息於京師。卽欲和議。將詔秀頼成之。前將軍稽首曰。臣少慣軍旅。且職分所存。不可獨逸。勿勞聖慮。至於和議。臣自修之。不足以辱天詔。使秀頼奉詔則可。若不奉詔。適增其罪。臣則不得不誅夷之。是以敢辭。乃令女監阿茶如京師。迎常光氏。常光氏。京極忠高母。而淀君妹也。使之入城勸和。徑工場而往。工人千百成群。造諸攻具。飛橋・轒轀。皆以千數。常光入城。具說淀君。淀君初與秀頼俱巡視城內。見守兵頗壯銳也。大喜。遂上天主閣。以望東軍。則極目皆兵。旌旗際天。淀君色動。已而備前島軍發大熕。中閣第二層。二女震死。淀君始大驚。勸秀頼成和。而會常光至。則喜懼交集。

重昌。正本作重正。

塹。川越本・拙修本並作湟。

常光傳命曰。右府必欲居大坂。則於其舊封。一無所闕。特逐諸客兵。使東軍毀外城塡周池。以著和親之實。秀頼母子召諸將議。議未決。本多正純使人言治長・長益曰。公上之議已成矣。子等遲疑。罪將至矣。二人大懼。急因後藤光次獻質。治長欲遣其幼子。光次斥之曰。稚弱者何用。乃率其冢子而還。十九日。和成。約塡周池。逐客兵。二十日。板倉重昌入監秀頼誓書。秀頼問曰。兩公何可呈。重昌私對曰。呈太公。持書而歸。前將軍目逆而問曰。嚮遣汝。不命其所呈。如何。重昌告狀。前將軍喜曰。非汝不能辨也。城將度我恃和而懈也。欲襲茶臼・岡山。夜使人候視。見其嚴備。乃止。初西藩獨島津氏未來會。二豐・二筑將帥受密命。亦不發。於是。以兵艦三千餘艘至兵庫。則和成已四日矣。前將軍使人勞而罷之。遂令諸軍撤圍。特留勳舊七將塡塹。以本多正純・安藤直次・成瀨正成掌之。諸侯爭助役。伊達政宗・藤堂高虎等請曰。秀頼聽命。終不可保也。恐遺後患。不若及今除之。前將軍曰。吾與豐臣氏以義合者也。長湫捷後。聽和入京師。始助征伐。終受委託。關原之役。乘勢壓大坂。事固非難。今彼乃以怨報恩。吾苟欲除之。

校。正本作挍。

歿。正本作沒。

豈竢卿等言哉。吾特念太閤舊好。以保全之耳。彼復負我。敢行不義。則自取亡
也。卿等且勿言。大坂諸將。欲要擊前將軍。二十四日。前將軍與數十騎。夜發行
營。比曉入京師。衆以爲神。初前將軍之出京師。命林信勝等。索御府及公卿家
典籍。命五山徒。開局校寫。在大坂軍中。遙督其役。使者往來不絕。至是畢功。爲
三本。獻納其一。置二于駿府・江戶。二十八日。入朝。上皇・天皇慰勞懇至。命議正
朝廷爵位。與諸節會。時京師流言。池田利隆懷觀望。逗留中島。故其尼崎戍將
不救。且元。前將軍怒。欲奪其封以與其弟忠繼。利隆之老。番氏明來陳謝之。不
聽而入。氏明牽裾號哭。以死爭之。初氏明父大膳爲囿人。長湫之役。池田輝政
見父兄歿。欲戰死。大膳扣馬遏之。輝政怒。以鐙踢其項。血被面而不縱。遂存其
祀。前將軍記之。嘉其世忠節也。乃釋利隆。次年。忠繼母子皆卒。命利隆攝備前
國事。伊達政宗長子秀宗。幼質於大坂。關原之役。始得放還。政宗避嫌。立少子
忠宗爲嗣。於是。秀宗從軍。前將軍愍之。封以富田氏舊邑宇和島。食十萬石。筒
井定次遺臣多應大坂募。以故賜定次死于配所。將軍在岡山。亦論賞諸將士

湟。正本皆作隍。

元和元年 川越本標註云。據他書。九日當作十九日。

功。是役。井伊直孝以兄直勝癈疾不勝事。代攝其軍。有功。將軍遂命領其國。直孝辭曰。直勝雖羸。有先臣養士在。每有君事。臣攝焉而從可矣。今以庶孽先嫡長。臣所不安也。又因安藤直次力請。將軍嘉賞而不許。乃賜彥根十五萬石。別賜邑于直勝。初直孝有故育於民間。比十一歲。有强盜數十。入其家。輒拔刀斫一人。父直政密召見。以常所執軍麾授之。而卒。及長。召用爲書院番頭。稍進大番頭。於是。既拜命。次日入謝。徐進坐執政本多正信之上。坐者洒然變色。既罷。謂正信曰。今日之狀。類不恭也。然已承故侍從之後。不能不然。正信曰。公唯能然。所以有是命。吾竊慶郎君知人也。當是時。諸工卒已塡外湟。遂及內湟。城中詰之。曰。初約塡周池。謂西南外濠也。今及於此。何也。成瀨正成對曰。謂之周者周內外也。且和親已成。何用湟爲。今欲存內湟。其意如何。城中不能爭。遂晨夜督役。超歲而畢。獨餘牙城一湟。元和元年。正月。三日。前將軍發京師。九日。將軍入京師。盡罷諸侯就國。使安藤直次追及岡崎。告功竣。且告大坂有再擧之計。居五日。入朝。又五日。東。二月。會前將軍于中泉。密議而往。十四日。前將軍歸駿

府。將軍歸江戶。江戶之士有小幡景憲者。有罪出亡。仕前田氏。玉造之戰。先衆奮鬭。城將大野治房識之。及和成。潛誘以厚利。景憲佯應。夜入見治房。治房大喜。遂告再擧之計。因約期遣歸。景憲歸。因板倉勝重・松平定勝。啓之將軍。將軍與前將軍議。爲不知者。以候其動息。大坂益召募客兵。以間使招景憲。勝重・定勝謂之曰。兩公再來。諸軍復集。不出五十日。其間城兵或侵京師。挾至尊以東鄉。則恐費力也。汝爲阻之。景憲諾而往。城中諸將有議出師者。治房兄弟固執不聽。信景憲之說也。或說治房曰。景憲諜賊也。請驗問之。治房驚。發甲闖其舍。景憲笑語自如。治房召之。卽從一奴入。治房曰。人言果不可聽也。乃置之界浦。使時來見。兩將軍已熟知敵情。而秀賴未知之。三月。使靑木一重。及二女使來請曰。兵荒後食祿不給。請賑貸之。時參議義直將娶故淺野左京大夫女。前將軍謂二女使曰。右兵衞督成婚在近。吾亦將往焉。東國女子。不嫺禮節。汝等幸往相之。婚畢則吾自適京師。以計賑給之事。乃遣之尾張。已而京師報至曰。募兵聚大坂者十四五萬。兵勢什倍前役。前將軍笑曰。多多益可敗。不必禁之。終

下令諸侯。皆如前役。先命井伊直孝・藤堂高虎。率兵往護京師。京師方訛言。大坂兵來。負擔四走。或入闕門及公卿宅。板倉氏僚屬。請爲兵備。勝重曰。置諸。乃便服巡行。不異平日。上下倚安焉。而諸將至。直孝陣東寺。高虎陣淀。去歲之役。山口重政欲以功自償。至箱根。不得出。於是間行屬井伊氏。藤堂氏將渡邊了縱敵於住吉。高虎自恐被疑。甚誚了。舊臣亦忿了新進傲人也。了請去。不許。四月。九日。前將軍至尾張。召大坂使者曰。吾聞右府復募兵。兵多則食乏。問其當已。吾將往驗其虛實也。因留使者不遣。遣常光氏。再諭弭兵。居三日。成義直婚。又三日。發尾張。十八日。至京師。常光氏來。報秀頼不聽命。又使後藤光次往。亦不答。乃徇畿內應大坂募者。收其妻子。降者宥之。將軍以前將軍至尾張之日。發江戶。少將忠輝與黑田長政・加藤嘉明。皆自請而從。二十一日。至伏見。明日。來謁二條城。前將軍欲以二十八日出師。將軍以兵未全集。請少竢之。前將軍曰。此役當決於野戰。野戰不用多。乃公以見兵先往。汝合大衆繼之。將軍曰。兒在此。使大人先。世謂之何。前將軍曰。吾老矣。不復可遭事。必先衆一樂戰。本多

郎。攄修本作帥。

走。川越本・攄修本並作去。

正信侍側曰。臣聞軍之先後。在地之遠近。太公在京。郎君在伏見。其次已定矣。太公甚無道理。前將軍乃止。召藤堂高虎。諮攻城方略。高虎對曰。利於遠。不利於近。輕兵挑戰。俟其遠出擊之。則敗衂之餘。無復守志。前將軍撫掌曰。子言如出我口也。遂定諸軍所鄕。石川忠總守高槻。池田利隆・池田忠雄守尼崎。其餘山陽・山陰將士自神崎進。淺野・蜂須賀以下南海將士自和泉進。而大和・伊勢・美濃諸部自大和口先進。少將忠輝・伊達政宗爲其帥。水野勝成爲其先鋒。前將軍召勝成曰。我大和口先鋒。非汝毋可者。汝統大和將士。有不用命者。先斬而後聞。與直孝・高虎相爲策應。期其全勝。愼勿作一條槍故態。勝成感謝而出。井伊直孝・藤堂高虎。以近江・伊勢兵爲中軍先鋒。榊原康勝・松平康重。與小笠原・仙石・諏訪・保科・丹羽諸將繼之。自河内口進。先是。城兵侵大和。大和法隆寺有工人中井正次。前役爲東軍造攻具。城兵怨之。闖法隆寺。焚之。二十六日。大野治房亦寇郡山。守將筒井定慶棄守遁。水野勝成進至長池。聞之謂部下曰。敵若焚南都。我恥也。疾馳赴之。治房至。不敢逼。遂退走。勝成追躡。至法隆寺。會

谷輪。川越本標註云。或作二淡輪一。

漿。正本作レ醤。

淺野但馬守以二兵五千一北赴二和泉一至二佐野一。治房等誘二紀伊土寇一。使レ起二其後一。而以二兵二萬一逆レ之。紀伊將龜田高綱曰。平地之戰。寡者必敗。宜下退至二樫井一。蔽レ林塞レ蹊而陣上。但馬守從レ之。明日黎明。治房先鋒塙直次・岡部則綱・谷輪重政等。爭レ先而進。高綱以二銃手一要擊。傷二則綱一。紀伊將上田重安與二直次一接レ槍。傷而交退。多胡某射二斃直次一。遂獲二則綱・重政一。治房在二貝塚一。聞レ敗走。而紀伊土寇亦平。但馬守復進。勝成分二其部下一。爲二二隊一。以二堀直寄・松倉重正一。爲二左右隊將一。重正不レ告而進。直寄怒。召二居民一問二捷路一。對曰。龜背嶺最捷。然昔物部守屋由二此路一取レ敗。武人相傳以爲レ凶也。直寄曰。吾既從レ軍。凶其分也。且守屋以敗。安知三吾不二以勝一乎。遂踰レ嶺先二重正一。至二國分嶺一。已而勝成引二諸軍一踵至。少將忠輝猶陣二南都一。兩將軍以二四方兵漸集一。遂議二親出一。會、大坂細作入二京師一。欲レ焚二禁內及二條一。板倉勝重捕下レ獄。前將軍以レ故停レ行。五月。五日。乃發。令三諸軍持二三日糧食一。以二米鹽酒漿一櫃一自從。駕二肩輿一而行。將軍發二伏見一。上杉景勝留二守京師一。陣二于男山一。前田利光・少將忠直以下皆從。卽日。前將軍舍二星田一。將軍舍二角南一。城中聞二我大軍至一。乃議レ戰。後藤基次・薄

前。川越本作先。

田兼相・渡邊尙出陣平野。大野治長・眞田幸村・木村重成・長曾我部盛親。相繼
而出。兵各萬餘人。計邀擊我前鋒。基次乘夜潛甲而南。勝成在嶺頭。謂諸將曰。
炬火北來者。至道明寺而滅。是敵欲出我不意也。乃嚴備以竢。而馳使告之中
軍。直孝・高虎亦赴中軍。取節度。前將軍曰。事如我意。六日。昧爽。與將軍俱發。至
平岡。勝成遣直寄・重正等赴道明寺。遇基次于片山。重正不利。直寄進擊其橫。
重正反之。兼相・尙來救基次。勝成擊尙破之。本多忠政・松平忠明與伊達氏將
片倉景綱。擊基次。兼相亦破之。大野治長・眞田幸村等自道明寺。以二萬餘騎
援至。景綱與幸村戰。不利。陸奧銃隊承之。幸村卻。於是。勝成與諸將齊進合擊。
伊達氏銃手荻又市。射基次斃之。水野氏騎士河村新八。鏦兼相亦斃之。本多・
松平・丹羽氏縱左右翼。大破治長。治長・尙皆走。幸村退保南阜。勝成馳使促伊
達政宗曰。公自進中軍。以備幸村橫擊。則吾追其北。不使隻騎返也。本多忠政
亦促之。政宗以兵疲丸盡辭。一柳直盛在越後部下。請進援前軍。忠輝不肯。幸
村與尙遂更殿而退。藤堂高虎自千塚南赴道明寺。其二族將高刑・良勝先進。

渡邊了自爲斥候。還報曰。道明寺囂聲。漸西漸微。是敵已敗也。乃擧鞭左指曰。矢尾・若江有敵。高虎使人遏先部轉旆而左。了曰。玆地沮洳。請由別路。乃馳傳令。高刑・良勝不顧而進。至矢尾堤。遇敵將盛親伏堤下。二人死之。盛親愈進。了等力戰。收兵據高阜。馳促高虎。高虎怒其不救二將。不肯。井伊直孝赴道明寺。亦轉而左。與木村重成戰于若江堤。其將長坂某曰。先得堤者勝。督銃隊奪堤據之。槍隊欲進。老臣菴原某曰。勿亟用槍。亟用槍。則敵近而勢竭。衆冒進不利。敵爭蹙之。菴原乃麾而進。山口重政與次子弘隆。奮戰被創。長子重信深入。斬二騎。進與重成鬪而死。直孝麾下繼進。菴原刺殪重成。安藤某取其首。敵兵皆潰。井伊氏兵追北里餘。其游兵見盛親幟。橫迫之。渡邊了亦見赤隊來也。乃奮擊走盛親。進扼平野橋。復使人促高虎。欲邀道明寺敗兵。高虎曰。斯奴不死於死處。今何嘵嘵乃爾。歸師勿遏。宜速收兵。會有一監使至。了迎而言曰。陪臣敢有請。盛親雖遁。幸村等將至。要擊鏖之。則大坂之陷。不出今夜。使之入城。則明日之戰。又將費力焉。臣策之至熟。如和泉守弗聽。何監使然之。往說高虎。高虎

不答。以日已暮。益促了收兵。了遂縱火而退。後直孝赴高虎營。賀戰捷。高虎曰。我有怯夫。多喪我良。是爲憾耳。直孝曰。僕自若江赴矢尾。見貴部一將樹席幟追敵。指揮甚可觀。斯人亦死否。高虎默然。了免胄進曰。所謂席幟。卽臣也。因呼其屬兵曰。掃部君有褒詞。我輩不徒勞矣。然了終以傲謾見黜。是日。榊原康勝等至菅江。擊敵將木村宗明。康勝患瘍。膿流至鐙。氣不爲撓。奮戰破之。與小笠原秀政等進赴若江。監軍藤田信吉扼之而止。少將忠直與其老本多成重等。陣四條畷。在井伊氏後。皆不逮事。兩將軍聞先鋒戰酣。欲以中軍繼之而捷報累至。效首虜於馬前。日已暮。前將軍次千塚。將軍次道明寺。下令曰。詰朝攻城。先鋒戰疲。當以他軍易之。忠輝・忠直皆以逗留失旨。本多成重以忠直命來稟曰。明日之戰。越前兵何陣。前將軍罵曰。惰夫晏起。不逮事。尚何言哉。成重等惴恐還報。且曰。君努力。忠直乃徇其士曰。明日我不先登。則先死。怖死者自此去。小笠原秀政亦恨爲監軍所誤。出雲守本多忠朝。其戚屬也。秀政夜往見之曰。明日吾有尺前無寸卻。忠朝曰。子得我心。初忠朝父忠勝臨死囑長子忠政。分

遺財於忠朝。忠朝曰。宗家多費用。吾已辱分地。不敢受。忠政固予之。忠朝曰。且寘之兄氏。以竢我需。及役。忠政問焉。答曰。既辨之矣。及在大坂。病其營處多沮澤。請易之。前將軍曰。乃父爲戰。未嘗問險易。若何不肯焉。忠朝慚恨。以故終與秀政約死。既而前將軍部署諸將。前田利光爲右先鋒。本多康俊・本多康紀。與遠藤・片桐・石川・蒔田等。在其右。本多正信・土井利勝・酒井忠世・本多大隅・黑田長政・加藤嘉明繼之。少將忠直爲左先鋒。本多忠朝・小笠原秀政。與秋田・六鄕・淺野・丹羽・仙石等。在其右。榊原康勝・松平康長。酒井家次・稻垣重種繼之。大將軍親將右軍。水野忠淸・青山忠俊・松平定綱以書院番頭。高木正成・阿部正次・內藤淸次以大番頭。竝在其前。安藤重信在其後。前將軍親將左軍。本多正純・植村家次・板倉重昌・本多信勝・內藤掃部等衞之。參議義直・參議賴宣在其後。井伊直孝・藤堂高虎。與細川忠興在右軍之左。水野勝成。與松平忠明・本多忠政・伊達政宗・少將忠輝。在左軍之左。處分既定。遣偵騎候戰地。而城中未之知也。以大敗後衆心恟懼。會議決計。曰。東軍來逼。不出二三日。欲誘之於南郊而

大出。拙修本作大軍。今且。川越本標註云。一作今日。

自西橫擊之。天未明。使人出爲斥候。候者東南望見聚落如常所無者。或以爲曉霧。及日出視之。則皆軍隊也。乃大駭。馳還告急。乃傳令諸將。眞田幸村陣茶臼山。以當我左。大野治房陣岡山。以當我右。森勝永・竹田永應・大野治長。及七隊長。陣其間。明石守重等。以別軍出于今宮。而秀賴親將繼之。鎧仗旌旗。皆極嚴整。城兵悉銳而出。其將帥人人欲必當兩將軍。將軍候騎來白於左軍曰。大兵出矣、請速進旆。前將軍叱曰、敵空城而出。不過七萬。何謂大兵乎。及住吉。乃舍輿穿韡。左右進鎧。斥之曰、誅奴輩。何以鎧爲、紵衣黃掛而上馬。其騎與前軍輜重相亂。不可禁。顧命横田尹松。尹松進呼曰、騎左重右。道闢而行。使人返馳告義直。賴宣曰、速來戰。將作也。已而右軍傳呼、將軍至矣、長政・嘉明出謁道傍。將軍甲而不胄。單騎從二十餘卒。巡師。見二人。立馬揖之。二人進執其銜曰。噫昔敵遠出。憾其逃入也。而今又大出。齊授其首。幕下之事。無不如意也。將軍首肯曰。今且剪滅之。本多正信笋輿從焉。柿蒂衣。持團扇拂蠅而過。長政嘆曰。何不類平日威嚴也。嘉明曰。重於常而輕於變。德川氏之癖。長政曰。可謂佳癖矣。」

直前。拙修本作進前。荻田。拙修本作萩田。

追。拙修本作迫。

忠脩。正本作忠修。攢。川越本作欑。

將軍行至前部。布令而歸。兩軍既近。左先鋒隊將本多成重上阜候戰。忠朝秀政與勝永。永應以銃手挑戰。戰少不利。幸村乘之。成重顧麾我軍。軍乃進。忠直曰。吾自此直入閻羅廳也。因呼餐。立而食之。一人捧餐。一人持冑。食畢而冑。謂左右曰。我既食矣。必不墮餓鬼道。騎而直前。軍鬨而從之。忠直弟忠昌手斬二人。成重與吉田修理・荻田主馬左右縱擊。幸村軍終敗走。追至安井。西尾久作。與幸村鬭斬之。忠朝見其軍卻。乘愛馬百里。馳且呼曰。出雲守在此。盍回戰。敵聞之四集。忠朝執槍殪二人。一人以銃迫之。射洞其腹。忠朝跳而下馬。拔刀斬銃者。其圍進鐵檛。乃左奪檛。右揮刀。殪八人。身亦被二十餘創。踰溝而僵。敵爭其首。從騎大屋某。伏尸上。扞敵而死。秀政亦躬自力戰。終死之。其長子忠脩死於攢槍下。少子忠眞被創欲死。其臣澁多見某・安積某。扶而還。右先鋒隊將伴八彌・安見右近等。進衝治房軍。書院番三隊繼進。迭有勝敗。本多・遠藤諸將橫擊之。治房敗走。返戰于稻荷。又敗。纔脫入城。右軍已前。左軍稍卻。直孝・高虎顧助左軍。酒井・榊原諸將方承敗進而戰未決。直孝・高虎橫斷森氏軍後。破之。與

返擊。川越本標註云一作二反戰。

七隊長遇。不利。安藤直次以前將軍令至。督衆返擊破之。勝成率所部。奉命赴住吉。望左軍戰作。轉向天王寺。行破敵兵。而趨川場。與明石守重遇。交綏而北。大番三隊以將軍令。邀擊守重于勝曼。走之。時兩軍酣戰。埃塵大起。彼此紛挐不可辨。阿部正次以爲東兵冒暑遠來。面目皆黑。城兵則否。乃令曰。面白者敵兵也。因物色斬數十級。諸隊相傳倣之。斬獲無算。秀賴欲親出。聞城中有反者。不果。又以前將軍數遣人議和。召還大野治長等。治長等走還。敵軍皆顧後。我軍乃乘之。遂大敗之。斬首一萬五千級。前將軍進上茶臼山。將軍進上岡山。少將忠直進至川場。縱火市舍。城中有爲內應者。忠直兵乃自高麗橋。破京口門而入。植幟城上。是爲先登第一。吉田修理轉自天滿。濟溺死。水野勝成繼忠直而入。忠直分兵焚諸樓櫓。終及天主閣。烟燄衝天。諸軍齊呼。皆破門而入。秀賴避火于觀月樓。淀君及夫人德川氏以下。皆從之。池田利隆發尼崎。路望其烟。乃馳濟神崎。要擊敗兵。多得首級。石川忠總與京極忠高・高知。發高槻。與敵將仙石某。戰于備前島。敗之。毛利秀元及加藤明成。以水軍至傳法港口。松平乘

川越本標註云。一無山字。

壽自森口。金森可重自岸和田至。皆獲首級。淺野氏・蜂須賀氏最後至。其他遠地侯伯皆不及也。前將軍據胡牀。望見火起。左右有更關原之事者。乃顧謂之曰。吾復捷矣。已而將軍來賀。前將軍曰。汝之功也。使躡陣本營。忠直來見。乃執其手曰。可謂乃公孫也。忠輝見。不顧。義直・賴宣自後軍馳。見諸軍輜重夥。途爭進。賴宣曰。是軍既捷將舍也。已而天主烟擧。賴宣咄嗟而進。義直從之。至茶臼山。則諸將賀者大聚。賴宣攬涕曰。大人置兒後軍。使不及事。松平正綱曰。君十四歲矣。前途修遠。不患不建功。賴宣變色曰。吾復有十四歲乎。前將軍曰。汝此言。足以當首功也。時秀賴猶在樓上。大野治長欲免夫人以成和也。使諸姬侍擁而出。蒙葵章衣。窘步亂兵中。城將堀內氏久覩之。進當其前。辟人而出。呼我將坂崎成正。護送之。治長遣木村某追及。因本多正信言其意。正信來啓前將軍。前將軍喜曰。吾且遂免其夫與姑也。正信又啓將軍。將軍叱曰。盍與乃夫俱死。秀賴遂入糒倉中。益發使乞命。而日已暮。將軍遣井伊直孝。及安藤重信・石川正次等。守糒倉以竢命。八日。前將軍遣本多正純。及加加爪某。往驗之。且言

伊東。川越本作伊藤。

重然。川越本

曰。事已至此。無復可言。太閤舊好。吾竟不能忘。苟母子皆出乎。置秀賴于高野。給淀君以萬石。治長入告。出答曰。謹拜命之辱。當往謝之。獨萬兵所注目。願得二輿而往。直孝疑其詐。乃使答曰。軍中唯一輿。右府請騎。往復不決。直孝謂重信曰。大旨雖仁恕。貽禍之道也。是在我輩耳。乃發銃倉中者二。秀賴以下知絕。皆縱火自殺。前將軍方進至櫻門。以待秀賴出。直孝等來。告狀請罪。前將軍領之。卽日午時遽命駕。獨從板倉重昌。北歸京師。曰。驅之。大戰後當雨。從者不信。已而雨大至。上下沾濕。及淀取雨衣。夜二鼓。入二條城。而大坂諸軍。一無知之者。將軍命阿部・青山・水野・高木四將。守天王寺・玉造・青屋・京橋四門。又命安藤重信。留西面四道卒。以修理城墟。收尸于岡山。以祭軍神。九日。凱旋伏見。諸侯爭捕殘黨來獻。十五日。徇長曾我部盛親于京師。斬于六條磧。後二旬。礫大野道見于界浦。大坂將伊東長實奔在高野。請得監使自裁。前將軍曰。治長等誤國。盛親等煽亂。皆所不宥也。其他豐臣氏舊臣。盡忠所事者。我皆假之。長實。及青木一重・岩佐正壽等。改圖而仕者數十人。吉田重然通大坂。事覺。伏誅。細川

標註云。或作重勝。或作重能。

宮。川越本・拙修本竝作實。

徙。川越本作移。

忠興庶子獲罪於父。奔歸大坂。及敗被捕。幕旨宥之。忠興賜之死。冬役。忠興以備薩摩不來會。及夏役興。前將軍謂近臣曰。忠興必先衆至。駕次星田。忠興果至。七日之戰與有功焉。於是。西南諸侯後至者。相繼謁兩公。兩公收大坂金。賜井伊・藤堂氏。金馬直大鈑千枚者各二。六月。賜大坂于松平忠明。食十萬石。忠明修荒廢。經田里。期年而殷富如故。十五日。前將軍入朝告成事。獻白金千兩。二十八日。將軍來二條。議賞罰。加封直孝・高虎各五萬石。後竝至三十萬石。水野勝成違敎旨。輕自接刃。故不賞。後封郡山。遂徙備後福山。食十萬石。本多忠朝死事。無子。以兄忠政子政朝襲封。小笠原忠眞襲父秀政封。榊原康勝病劇而卒。大須賀忠次。實康勝兄子也。命復本姓。襲其封。以大須賀氏衆。屬於賴宣。責藤田信吉失軍機。收其邑。令池田忠雄襲兄忠繼封。以其舊封。賜蜂須賀至鎭。少將忠直遷從三位。進參議。前田・伊達・淺野氏。皆進官爵。前將軍季女寡於蒲生氏者。再嫁淺野氏。至次年成婚。閏月。十一日。將軍率諸侯入朝。獻白金萬兩。二十七日。兩公偕觀樂于二條城。奏振鉾還城樂・延喜樂・太平樂諸曲。天下

川越本・拙修本・寫本。皆城郭下無立異結黨者。勿不告七字。川越本標註云。按城郭下當有立異結黨者。勿不告一條文字。蓋係脫落。

寖。川越本・拙修本並作浸。

大亂。伶官耗散者數百年。前將軍招撫有年。終復舊職。朝廷之樂自是興矣。先是。前將軍參考貞永・建武式目。與林信勝等議。定新式十三條。七月。七日。會諸侯于伏見。頒之曰。文武之道。勿不修。佚遊群飲。勿不禁。犯法者。勿舍。謀反若殺人者。勿不告。諸國民勿移其所。勿私築城郭。立異結黨者。勿不告。勿私結婚姻。侯伯會同。勿衞從過節。衣服之差勿紊。無爵位者。勿乘輿。諸將士勿厭儉約。國主任人。勿不擇其器。又與關白藤原昭實等議。定朝廷式十七條。其略曰。天子宜因寬平遺誡。專學古道而傍習和歌。見任三公。宜班諸王上。武家官位。宜在公家員外。廷臣繼嗣。不宜取異姓。諸服章不宜踰等。才藝異等若累功勞者。其超遷不宜拘門地。諸僧官。不宜濫授。諸朝士違關白及有司者。諸浮屠妄冀官達者。皆宜處流竄。是月。封織田氏于大和上野諸邑。本多正信請毀豐臣氏祖廟。前將軍不敢私斷。終與諸王公議。請焉。有詔。廢祀典。任其頹廢。十九日。將軍發伏見。八月。四日。至江戶。是日。前將軍發二條。二十三日。至駿府。初少將忠輝受封信濃。寖驕縱。嬖善擊鼓者花井某。遂委之政事。有三將。驟諫不聽。乃訴之

如此。川越本・拙修本竝作既然。

元和二年

駿府。忠輝馳至。誣三將有罪。賜死。及徙越後。益驕。及大坂夏役。行至森山。從兵與將軍牙騎鬬。殺三人。長坂信政之嗣在焉。已而向大和口。聽花井言。逗撓不進。前將軍東歸。過森山。驗實大怒。遂使人往詰其罪。有二士。自誣以解之。前將軍不信。遣吏按之。且詰其逗撓。花井歸咎於山田將監。逐之。次年。前將軍召忠輝母茶阿曰。少將驍健。吾期其成立。不圖荒惰乃爾。又擅殺長坂血槍之弟。在吾在時。如此。將軍時可知。吾不得不絕之。茶阿懼。報之越後。忠輝懼來謝。不許見。遺命將軍。放之伊勢。後遷飛驒。遂遷信濃。卒。十月。前將軍遊獵關東。遂如江戶。最上義光先大坂役而卒。其子家親嗣。庶兄義成陰應大坂。事覺。命家親討夷之。十二月。前將軍歸駿府。途經伊豆泉頭。以爲退老之地。期以明年營焉。是冬。以天下盡平。令五畿七道。毀諸壘砦。發公使。巡察諸國。三年一巡。又以武門服章不備。因明春正會改之。二年。正月。朔。侯伯將帥。隨爵位具衣冠。賀正兩府。二十一日。前將軍獵于田中。得疾。留四日。乃歸。將軍得報大驚。戒行。二月。朔。至駿府。日夜看護。衣不解帶。諸侯伯相踵來候。前將軍自知不起。卻醫藥不用。三

月。天皇使廷臣二人就拜前將軍爲太政大臣。二十七日。前將軍力疾。衣冠拜命。尋使將軍饗天使。四月。前將軍疾篤。乃麾婦女不許入侍。十四日。召諸侯伯。諭曰。吾老病。旦夕將入地。吾既平定天下。將軍執大政有日。吾不復以後事爲憂。雖然。吾死而將軍或失政。則侯伯當其器者。宜代執天下之柄。天下非一人之天下。吾何恨哉。乃分賜遺物。令罷就國以竢後命。初諸侯各度有如不諱。當拘留累年。於是。皆出意外。既而召將軍曰。吾諭諸侯曰。將軍失政。善者取之。汝愼其政治。勿毫有私曲。而天下若有方命者。雖親戚勳舊。宜速加誅伐。將軍歔欷而退。召義直・賴宣・賴房。誡以善事將軍。召其傅成瀨正成・安藤直次・中山信吉。勗以輔導。十七日。疾革。乃顧將軍曰。吾將死。汝謂天下何。將軍答曰。將大亂矣。前將軍曰。善。吾可以死也。召嫡孫家光曰。汝他日治天下者也。治天下之道在於慈。乃薨。壽七十有五。葬于久能山。天皇賜卹典甚厚。賴宣就建廟焉。初榊原康政兄淸政。輔故世子信康。及世子敗。棄官出亡。晚依康政。前將軍召賜祿。守久能。尋卒。長子淸定留仕宗家。乃令少子照久襲父職祿。親近之。臨終。枕其

元和三年

皇。正本作王。

問。川越本・擶修本竝作訪。

膝以絶。將軍因使照久掌祀事。僧天海請號廟大權現。三年。將軍以遺命改葬于下野日光山。就建新廟。四月。八日。畢事。既望。移主正殿。天皇遣廷臣三輩。宣命。贈正一位。賜號曰東照。是日。將軍自江戸來。次日。祀焉。梶井親王尊純掌禮。後三世益修祠宇。天下侯伯至諸外夷。皆獻器材。而親王更來護廟。以爲常。後三十年。詔改大權現曰宮。東照公爲人沈毅。有大略。用兵如神。而好學求治。愛人善容。處事必規百世之後。其事朝廷。恭順殊至。以鎭護王國爲己任。自執儉約。不敢驕侈。最重稼穡之事。雖至微細。無不諳知。屢託游畋。以問疾苦。其爲政。務養士氣。開言路。防巧佞浮華之習。公幼質於尾張。有獻百舌者。卻不受。左右問故。公曰。吾聞。主將不取小慧者。其在岡崎。有犯禁者二人。其一弋于囿。其一網于濠。皆被拘繫。牙兵鈴木某欲諫之。未有路。乃故自矯命。取池籞之鯉。煮而食之。他日。公觀於池。問守者。守者告故。公大怒。欲手斬鈴木。鈴木入。張目罵曰。噫。暗主以禽魚易人。惡乎得爲天下。公大悟。抛刀而入。遂釋前二人。召鈴木褒之。後語人曰。直言之功。愈一番槍。犯敵者賞可倖。犯君者罰不可測也。公在濱

率。拙修本作卒。
肯。川越本作敢。

松。召三士人命事。其一人留請曰。臣承聞。敢有白。出一疏于懷。獻焉。公使其讀。而聽之。每條輒稱善。讀畢。謂之曰。爾後有所見。勿憚於言。其人頓首出。本多正信侍坐。啓曰。彼何輕率也。且其所言。無一可取。君何褒之。公曰。否。吾褒其志也。且褒無可取者。則可取者至矣。公嘗欲官一士。問之於土井利勝。利勝曰。彼不常來臣家。臣未知其如何。公弗懌曰。汝宰我家。務在訪人材。材者豈肯附權勢哉。如汝所言。則知恥好義者。將日趨柔媚。知恥好義。國家之元氣也。元氣消亡。國家衰老。其能久乎。昔酒井正親以神谷某不禮己也。謂我曰。彼眞可用者。因請倍其俸。正親爲公忘私。奬勵士風。汝輩何不類焉。又嘗諭將軍近臣。大意謂。天下安危。在將軍之心。宜留思焉。奬節義。擯輕薄。愛士民。信賞罰。賜賚勿濫。濫則士怠。用人勿偏。偏則國危。國之有臣。猶木之有枝也。枝偏大則歷其根。猶鷙鳥之有爪翼也。愛其爪翼。所以期搏擊。臣之用舍。可不重哉。足利尊氏之任高師直。豐臣秀吉之用石田三成。皆以取人怨矣。我亦誤用大賀。殆陷危禍。可不懲毖乎。凡天下之亂。起於主將縱欲。而宰臣專權也。浚民膏血。盈之府庫。目曰

生民。川越本標註云。一作士民。

傚。川越本拙修本並作效。

能臣。是爲君蓄怨耳。且恃才能者。必以舊法爲迂拙。動欲更改之。武田・上杉・今川・大内氏所以衰亡。皆由於此也。凡政在因其舊。我嘗赴陸奥。見源頼朝榜牌。其辭曰。國事皆因泰衡之舊。吾信頼朝之能定東陲也。夫介冑之習如鐵。衣纓之習如金。金可以爲虚飾。鐵可以爲實用。國家將衰。必有喜衣纓之習者。建立新法。務其華飾。是大蠹也。我家法度。皆與祖考耆舊議。深謀遠慮。期其無弊。勿有所變更。譬之刀。鍛錬一成。傳之子孫。子孫各異好尚。數附冶工。則刀終不可用矣。凡所貴於故家者。以其存舊製養舊臣焉爾。侯伯將士。皆與我同苦勞者。子孫亦宜與同富貴。勿無故滅絶之。所以酬其祖先之忠也。凡所謂忠者。豈獨忠於德川氏哉。乃忠於天也。我亦忠於天者。故天授之以大柄。然自有其柄。驕奢怠惰。以虐生民。則天將奪之矣。故吾主岡崎。慮隣國攻守。主關東。慮三道治亂。定天下。慮四境安危。未嘗一日懈怠。夫折衝禦侮。以守王國。武臣之職爲然。武臣而遺武。是竊其職也。可不懼乎。公少與武田氏連兵。後講武備。多取其法。或説曰。武田之箭。必甘其鋌。使中人而難拔也。請傚之。公顰蹙曰。忍哉。孰非天

元和五年　元和六年　元和七年　元和八年

下之民。因令曰。德川之箭。必向其鋌。使中人而易拔也。公幼爲今川氏所育。今川義元之葬。在于桶峽。公每過必下拜。其仁且義。蓋天性也。將軍襲職。一奉其訓誡。以綏撫天下。五年。夏。將軍入朝。收福島正則封。正則。關原之役。負功驕橫。嘗殺公人伊奈今成。大坂之役。陰通謀城中。又擅增築城郭。酷嗜殺戮。國民不聊生。於是。將軍與井伊直孝決策。使鳥居忠政就正則于江戶第傳命。放之津輕。以其太僻。改放信濃。給七萬石邑。擧其舊封。賜於淺野氏。徙封參議賴宣于紀伊。所食如故。自是尾張・紀伊・水戶。稱爲三家。諸侯無敢抗禮。義直慈仁。賴宣雄豪。賴房謙遜。賴房特不之國。冠譜第將帥。以護幕府。是歲。復立花宗茂舊封。徙松平忠明于郡山。以大坂爲鎮府。遣勳舊一將守之。稱爲城代。六年。置京橋・玉造兩戍。遣大番頭率部衆更戍。與二條城同。於是。毀伏見城。獨置奉行。比於界浦・奈良・長崎・佐渡。七年。將軍納女禁內。備女御。後進中宮。稱東福門院。是歲。田中氏無嗣。國除。八年。秋。最上家親後嗣義俊。以不能統族屬。國除。冬。本多正純有罪。放于出羽。初正純父正信爲老中。東照公嘗欲增其封。辭曰。臣叨恩眷。

速。川越本作之。

元和九年

無。川越本・拙修本並作不。

而無矢石之勞。加之封土。誠不自安。願以其賜臣者。益養材武。以鎭平天下。而臣得送老於其間。何貺若之。遂以二萬石終。後東照公者五旬而沒。正純嘗於關原之役。請斬父以解將軍之過。頗有得色。安藤直次語人曰。傷倫以要名。必不令終也。及爲駿府執事。興國寺城工卒。誤殺公邑民。邑宰求償於城主天野康景。康景不肯。乃因正純訴之。東照公素知康景忠良。不輒決。正純誣康景。令速斬卒償之。康景不忍殺不辜。乃棄封出亡。東照公欲復之。會其病卒而止。世寃之。有馬晴信之誅。阿媽港人。正純僚吏岡本大八。揣晴信之希賞也。誑取其貨。事覺抵罪。在獄中。告晴信陰事。晴信以故敗。大久保忠隣之寃。世亦以爲正純父子所爲也。正純時食小山三萬石。及將軍時。食宇都宮十五萬石。安藤直次曰。正純將及於禍。是歲。奉使赴山形。以其增壘擅殺部屬。收封被放。其子弟前後皆死。獨叔父正重之後存焉。九年。七月。世子家光覲京師。將軍因上書致事。世子時爲正三位大納言。八月。入朝。進正二位。遷內大臣。任征夷大將軍。先是。參議忠直負功觖望。數不奉法。又縱酒色。殺無辜。幕府數以密旨朂之。不悛。

削。川越本・拙修本並作剃。
一柏。川越本・拙修本並作一伯。下同。
寬永元年
直正。川越本作直政。下同。
河中。正本作川中。
寬永三年
寬永四年
寬永七年
寬永八年
寬永九年

是歲。放之豐後荻原。削髮號一柏。寬永元年。徙封其子光長于越後。後三世。以不能馭其下。徙之美作。食五萬石。其弟忠昌・直正。皆有功於大坂之役。忠昌封于河中。尋徙高田。於是。封之越前。食三十萬石。直正初支封于大野。後封出雲十八萬石。一柏之敗。本多成重復歸幕府。列爲諸侯。」三年。八月。前將軍・將軍共入覲。九月。六日。天皇幸于二條城。兩將軍率諸侯伯饗之。前將軍遷太政大臣。將軍遷右大臣。於是。義直・賴宣・忠長。竝累遷大納言。賴房及前田利光・伊達政宗・島津家久。竝累遷權中納言。忠長。將軍弟也。」是歲。前將軍夫人從二位淺井氏薨。」四年。蒲生忠鄉卒。無嗣。國除。後數歲。弟忠知卒。亦無嗣。國除。以白川十萬石。封丹羽長重。」七年。九月。天皇讓位於皇女。諱興子。德川氏出也。是爲明正天皇。將軍遣酒井忠勝・松平信綱賀之。詔。以忠勝爲少將。信綱爲侍從。皆不敢拜。告幕府而後受。」八年。始置少老職。副老中。掌諸雜事。」九年。正月。二十四日。前將軍薨。壽五十四。葬于增上寺。前將軍位至從一位。官至太政大臣。贈正一位大相國。諡台德。台德公爲人。勤謹和厚。朝廷以外舅故。禮秩異等。而公益小心。嘗

徒。川越本標註云。一作從。

在禁內。獨休于便室。或闕之。公衣冠肅然。莫有惰容。其事東照公。盡心承懽。至微細事。無不咨稟。關原之役。公不及事。而兄秀康・弟忠吉皆有功。其歲。東照公召諸大臣。問曰。吾欲定繼嗣。誰可者。井伊直政右忠吉。本多正信右秀康。大久保忠隣曰。冢子資望已定。不宜動搖。且自今以往。撥亂之才。不若守成之器也。東照公頷之。公聞之不御直政・正信。而忠吉亦踈忠隣。益與之厚。每來江戶。輒館其第。公以同母故。最愛忠吉。忠吉疾病。公親往其館候視。使者旦夕往來。寢食隨報加損。又以庶兄故。最重秀康。凡西諸侯會同者。不得齎火器。秀康嘗赴江戶。具銃隊。入碓氷關。關吏呵禁。秀康曰。汝不知越前宰相乎。公聞而驚。命吏勿問。自迎謝之。及其卒。悼惜殊至。東照公嘗以義直・賴宣・賴房屬於公曰。我百歲後。善視之。公常念其言。故特愛重三家。凡公每聞宗族功臣之喪。雖燕樂之時。必變容隕涕。其出行。既戒駕而止。則親面徒御罷之。嘗戒行。漏刻報期。公方食。舍箸而出曰。信不可失也。居常無所耽嗜。特崇儒術。好書及歌。諸武技皆究其精。而不以傲臣下。以故諸宿將豪傑皆馴服焉。嘗謂其下曰。織田・豐臣二子。

對。川越本作答。
附。川越本。拙修本竝作付。

喜爲人所事。家君則喜使人矣。所以異也。以故諸政治皆倣東照公。而最愼於選人。將軍之幼。以雅樂頭酒井忠世・大炊頭土井利勝・伯耆守青山忠俊爲傅。忠世以嚴。利勝以和。忠俊以直。共盡心輔導焉。利勝嘗侍燕樂。乘間說曰。願聽伯耆言。不則雅樂謂之何。將軍輒悟。酒井忠利子忠勝。自扈從爲側用人。公又以爲傅。亦大稱職焉。公既薨。諸臣欲祕之。忠勝以爲不可。卽夜發喪。於是將軍下敎。盡召諸侯伯。親出面之曰。前將軍薨矣。諸君或冀望天下。則唯其所欲。然家光既係軍職。當以弓箭授受之。諸侯瞿然未答。伊達政宗進而言曰。孰不被德川氏恩澤。今日有敢挾異心者。政宗請先往蹂躙之。衆同聲對曰。誠如中納言所陳。乃退。是歲。始置大目附。專掌監察。六月。徙封池田光政于備前。初光政父利隆封播磨。叔父忠雄封備前。皆卒於元和中。光政嗣。徙于因幡・伯耆。至是。與忠雄子光仲易封。先是。台德公女適大坂而寡。改爲本多忠政之婦。生女。於是。以其女妻光政。是月。加藤忠廣有異圖。發覺。國除。放于出羽。徙封細川忠興于肥後。割忠興舊封。賜小倉于小笠原忠眞。中津于其兄子長次。追賞大坂之

座。正本作坐。
餻。正本作糕。

田。正本作畋。

寛永十年

功也。後幕府索加藤・福島二氏遺胤。召而祿之。以存其祀。十月。收大納言忠長封。忠長與將軍同母。幼字國松。爲母氏所鍾愛。將軍爲世子時。內外流言。幕府有易嫡之意。世子乳母春日局者。往駿府告之。居數月。東照公使人言將軍曰。久不見幼孫。盍使來見。兩公子乃來見。公迎世子于上座。忠長欲踵升。公曰。叱。叱。汝敢欲升斯座乎。坐定。供餻。公取其一。命左右曰。進於竹千代。取其一。投與忠長曰。阿國喫之。衆望於是定矣。世子爲大納言。在西城。城濠多鳧。忠長手發銃。獲一鳧焉。以示夫人。夫人悅甚。命宰之。竢台德公入饗焉。曰。阿國所獲也。公悅啖之。問曰。且何處得之。具對以實。公吐哺。怒曰。何得此大怪事。謂西城誰所居乎。乃罪其從者。忠長既長。元和中。封甲斐。寬永中。增封駿河・遠江。既而驕恣。失驩於台德公。公擯之就國。及公有疾。田獵自如。公疾病。將軍爲請召見之。不許。及公薨。忠長無戚容。嗜殺。喜怒無常。於是。將軍既除服。乃收其封。置之高崎。附城主安藤重長。忠長不悛。次年。重長受命。諷使自殺。自是。駿河・甲斐直隸征夷府。府兵是時有大番及書院扈從兩番。更戍駿府。十年。堀尾氏無嗣。國除。次

寛永十一年

寛永十四年

寛永十五年
帥。正本作率。

寛永十六年

寛永十七年

寛永十八年

寛永二十年

正保元年
次。川越本作二。

正保二年
二年。拙修本作三年。

慶安四年

年。徙封京極氏焉。後三年。亦無嗣。收封。召其胤子。賜播磨地六萬石。十一年。將軍入朝。進從一位。遷左大臣。始置京師町奉行。斷市人訟獄。十四年。十月。故小西氏餘黨。以耶蘇教煽民。據肥前島原作亂。將軍下敎西海諸侯。遣板倉重昌監其軍。討之。尋遣松平信綱。命水野勝成贊謀焉。未至。十五年。正月。朔。重昌戰死。信綱至。城陷。誅賊渠帥十餘人。斬首四萬。申耶蘇禁於海內。十六年。始置大老職。以土井利勝爲之。免老中連署。而猶參大議。十七年。生駒氏無嗣。國除。十八年。將軍生長子家綱。是歲。始置勘定奉行數員。掌錢穀。以松平正綱告老也。正綱實郡吏大河內秀綱者子。冒松平氏。長於理財。歷事三世。常爲度支。嗣子信綱。秀綱庶孫。而養於正綱。二十年。九月。天皇讓位於皇兄紹仁。是爲後光明天皇。天皇正保元年。將軍生次子綱重。後爲參議。封于甲斐。二年。生三子綱吉。後爲中將。封于館林。慶安四年。四月。二十日。將軍薨。年四十八。葬于日光山。贈官位如前代。謚大猷。大猷公幼英偉。東照公器之。戒台德公曰。易嫡。亂之本也。且竹千代後必爲明將。宜速定儲貳焉。戒其保傅曰。父必求其子類己。是不協

之原也。宜因其器成就之。吾於三郎。有終身之憾。汝輩勿使將軍再憾也。及長。聰明勇決。恩威竝行。東照・台德之世。諸巨藩各自偃蹇。其會同者。將軍或郊迎之。禮分未定。及大猷公時。嘗盡召天下侯伯于大城。自諭之曰。我祖考。因卿等力定天下。且以其嘗比肩同等。故加禮待。不敢比譜第將士。至於家光。則襁褓已主天下。自有與祖考異者。今已居統率之任。而不一事權。非所宜也。自今待卿等。當同於譜第。若不厭心。其各之國。給暇三歲。熟思以決去就。諸侯皆逡巡曰。敢不聽命。公乃起。入坐內廳。以次延諸侯。賜佩刀。公便服盤坐。腰無所佩。諸侯受刀拜。公曰。檢刃。諸侯悚息。抽刀寸許。輒退。自是德川氏權勢益定。然而其事皇室。恭順如故。其再入朝。朝廷欲以爲太政大臣。公固辭曰。先臣嘗叨此職幸得全首領以沒。臣敢復哉。公甚敬祖先。諸老臣侍燕。間言及東照公事。公輒曰。少竢之。乃改衣帶。盥漱。然後聽之。善摘察臣下是非。而不輕發之口。遇有黜陟之議。輒曰。某貌如此。性如此。其所知過於諸老。久世廣宣三子廣之。爲側衆。有權寵。公一日卒問之曰。汝今朝得諸侯贈遺乎。廣之拜而對曰。然。問贈者姓

名及其物件。廣之條對。公曰。未盡也。廣之取簿記於懷。撿之。果然。因惶汗而退。更相告警。堀田正盛・太田資宗等。以春日局緣故。皆見寵任。皆不至橫邪。時承平既久。麾下風習。漸趨奢侈。往往不能自給。台德公之薨。頒賜遺金。又周加其俸。婚嫁喪葬。概皆得貸於官。而猶告困乏。世子生之明年。有赦。盡召麾下士人。及諸吏。衆皆謂當有慶典也。公此日患頭痛。以手巾約額。扶杖而出。諭衆曰。聞汝等困乏極矣。卽明日有緩急。出次品川。亦不可能也。如是則汝等欲置吾於何地乎。因大息泣下。衆莫能仰視。酒井忠勝在側。颺言曰。諸君恃仁狃恩。忘奉上之道。從今以往。不容假貸。各自量度。勿勞公上之念。衆心服而罷。已而下令。諸士子弟。年長堪用者。擧充番士。因給俸。又置新番。以大番子弟充之。又遣使諸道。問民疾苦。數擧賑恤之典。台德公時。青山忠俊獲罪。放于遠江。及公親政。未及復之。而死配所。乃召用其子宗俊。晩歲。賜邑于信濃。面諭曰。自吾之幼。汝父盡忠輸誠。吾騃不爲意。使之死配所。今悔無及也。猶將報之於汝焉。庶幾慰其寃魂。自今汝事我子。猶汝父事我也。君臣皆嗚咽。又賜大久保忠季肥前地

拙修本、公下無爲字。

覩。川越本・拙修本並作觀。

呿。川越本・拙修本並作胠。

八萬石。及其子忠任。終復舊封。再鎭小田原。以白父祖之寃。天下悅服。當公之時。名臣盈朝。肥後守松平正之・掃部頭井伊直孝・大炊頭土井利勝・讃岐守酒井忠勝・周防守板倉重宗・伊豆守松平信綱・豐後守阿部忠秋等。爲其最焉。自公爲世子時。信綱・忠秋爲侍臣。公嘗見屋上乳雀。命近臣往捕之。屋係將軍燕室。衆莫敢往。乃推信綱。曰。汝年幼體輕。宜往。信綱勉强應命。夜潛緣屋索之。失足墮庭中。譟然有聲。將軍提刀。夫人執燭而出。見信綱。問其來由。對曰。臣覩雀兒。愛之。竊來捕也。將軍曰。否。是必有主使者。窮詰再四。而不告。將軍怒。内信綱於巨囊中。而緘其口。懸之柱。曰。汝不首實。不許出。信綱自囊中爭之。徹旦。旦日。將軍出視朝。夫人憫信綱之志。而慮其飢。私呿囊口。以餧啗之。復緘其口。如初。日中。將軍入。復詰之。終不改辭。夫人固請而縱之。將軍目送焉。謂夫人曰。孺子能如是。後必羽翼我兒。果如其言。信綱警敏絕人。而能下於人。公嘗欲急改造一城樓。信綱督工。一宵而成。以白紙糊壁。如新堊者。利勝讓之曰。不成則已。是使人主責難於下也。信綱謝曰。僕請終身以爲戒。信綱嘗如京師。朝旨有所徵

解。川越本標註云。一作辨。

求。疏十餘條。信綱盡辨其不可而還。衆稱其敏。忠勝讓之曰。列世恭順之旨。子豈不知乎。何必盡拒之爲。信綱驚悔無措。公之始親政也。下教曰。大小之事。盡如東照公約。伊達政宗上狀曰。東照公曾約封我百萬石。願如約。幕議病之。利勝曰。掃部頭能辨之。乃命直孝。直孝退朝。直詣伊達氏。而見政宗曰。聞公擧前代約。請封。信乎。曰。信。曰。所謂約。有印信乎。曰。有。曰。蓋僞也。政宗曰。何得謂僞乎。吾且示之。即出示之。直孝受而熟視曰。是故紙耳。乃扯裂投爐火中。政宗色然而駭。直孝笑曰。此約。蓋出一時權宜。且事既往矣。今乃持以要利。何計之淺也。政宗曰。老夫誤矣。因笑而止。福島氏之收封也。群議不決。板倉勝重薦直孝曰。掃部頭不踐人足跡者。乃召直孝。議遂得決焉。勝重爲京尹年久。元和中。以老辭職。台德公優勞。使擧人自代。勝重曰。莫若臣長兒。乃命重宗。重宗愼密廉平。世以爲不愧其父。公嘗有疾。困劇。遠近疑懼。既而愈。馳使京師報之。重宗答書至。曰。臣遊獵數日而歸。以致奉答稽緩。公覽之曰。京師驚擾可知也。明日。忠勝入。覽其書曰。京師驚擾可知也。侍者無解其意。竢忠勝退問之。對曰。周防守務

示暇豫。非鎭衆情乎。侍者乃服。其上下一心。概如此。忠勝・直孝相踵爲大老。信綱・忠秋自少老進老中。而正之特位于諸老之上。正之爲台德公孽子。公侍婢有孕而出。生男於其鄕。邦俗端午節。有男兒者。樹章幟于門。婢家幟用葵章。吏詰得其故。有證左。遂以聞。保科正光以無子。請得爲嗣。命名正之。大猷公立而未逹也。公嘗放鷹於驪鄕。群騎散而自息。公與近臣數人微行。入邑中佛寺。寺僧誰何。公曰。吾番衆也。願少息此。僧與坐而談。公視其壁畫頗雅。謂之曰。貴寺在僻。何以得若是。豈有大檀越耶。曰。無有也。唯有保科氏。亦貧乏不足有爲。吾聞保科君。將軍親弟也。小民猶知恤兄弟。貴人何情薄如此。公色少變。目從者。辭謝而出。頃之群騎至。索將軍。問之僧。僧曰。嚮有數少年來息。騎曰。是將軍已。僧大驚懼誅。居無何有敎。增封正之于山形二十萬石。賜松平氏。給驪鄕寺香火邑。後正之徙鎭會津。累遷四位中將。性敦實好學。公特親重之。公臨終召諸老。而屬世子家綱。世子襲職。甫十一。天資仁恕。時利勝已卒。正之以下受遺命。輔佐幼主。不敢爲慶讓。以竢其長。大納言義直先公而卒。賴宣・賴房猶健。國多

已。川越本・拙修本竝作也。川越本標註云。一作耳。

輔。拙修本作補。

明暦三年

二位。川越本作一位。川越本標註云。正一位。一作正二位。或作從三位。

流言。明暦三年。江戸災。踰歲不滅。城郭第舍。延燒略盡。物情恟然。信綱・忠秋指麾內外。事皆立辨。忠勝等協議。盡罷諸侯就國。各撫其民。經理土木。盡復舊觀。天下不復動搖。既而親藩老臣前後皆卒。而將軍親政。還諸侯質在城中者于各第。禁殉死。在職三十一年。薨。葬于寬永寺。諡嚴有。」自是之後。寬永・增上二寺。爲德川氏塋域。初東照公事祖先甚謹。後陽成帝嘗欲賜公以菊桐章。辭曰。此已賜足利氏。非新田氏之榮也。臣自有葵章焉。天恩苟欲酬微勞。伏願錄臣祖先。乃詔贈上祖義重從四位下鎭守府將軍。父廣忠正二位大納言。其歲。與台德公。偕獵于上野。使土井利勝等如新田・世良田・德川諸邑。問其父老。得義重・義貞故址。建一寺。曰大光。以奉詔書。與三河大樹寺。皆准敕願寺。台德・大猷二公益敬祖先。以故後嗣以親拜兩塋爲常務。如上野・三河。則遣使修祀。而在職之中。必一詣日光廟。以爲重典。」嚴有公薨。而無嗣。弟中將諱綱吉。自館林入紹職。二十九年。薨。諡常憲。從子中納言諱家宣。自甲斐入紹職。四年。薨。諡文昭。世子諱家繼襲職。四年。薨。諡有章。無嗣。賴宣孫中納言諱吉宗。自紀伊入紹職。大

常。川越本標註云。一作定。

修曾祖之政。厲精爲治。多所釐革。天下號爲德川氏中興之主。三十年。辭職。後六年。薨。謚有德。世子諱家重襲職。十七年。薨。謚惇信。世子諱家治襲職。二十五年。薨。謚浚明。浚明公以上至嚴有公。敍任官位。概有常例。爲世子時。敍正三位。任大納言。及襲大將軍。進正二位。累遷內大臣・右大臣。兼右近衞大將。及薨。贈正一位大相國。賜謚。其軍職所帶皆同。大納言以前。敍任如源氏・足利氏故事。而天使就拜。布告天下。自大納言始。初有德公爲後世深慮。就世祿中。立官俸增減法。及祿其二子。不復建封土。給廩粟十萬石。賜第于田安・一橋。惇信公又沿例祿其一子。第于淸水。皆爲省卿。及浚明公無嗣。今公自一橋入爲世子。名家齊。實有德公曾孫。及襲職。復修其政。任賢使能。百廢悉擧。在職最久。累遷左大臣。終拜太政大臣。固辭不得命。又以世子家慶。進從一位內大臣。於是。使掃部頭井伊直亮・越中守松平定永入朝謝恩。源氏・足利氏以來。在軍職兼太政官者。獨公而已。蓋武門平治天下。至是極其盛云。

外史氏曰。吾嘗遊江戶。觀其城闕之壯。侯伯邸第之夥。既而歷東海。彷徨尾・濃

棊。正本作棊。

川越本・播修本並抗上有二而字一。

之間。北望信・越諸山綿亙重疊而來。迤赴京畿、而其南沃野洪濶、與三・遠接、眞天下之衢路。想見千軍萬馬之馳驟。今之布邸列第者。其初皆決嚮背於此也。蓋源平以還、治少亂多。群雄棊峙。分裂梗塞。不知其閱幾百歲。而今吾綏帶垂橐、不齎糧而行焉。則誰之力耶。世論者或病大坂之事。爲累東照公之德。是不知時勢之論也。吾曰。公之取天下。不在大坂。而在於關原。不在關原。而在於小牧。夫公織田氏屬國也、而太閤其將校也。太閤以織田氏將校起身。乃欺其君之遺孤。欲加之以兵。諸同列畏其力。私其惠。逡巡而莫敢爭。而公獨毅然扶弱抗强。野次一戰、獲其二驍將。固足以破姦雄之膽。而服天下之心。當是之時。太閤所據。不過近畿諸州。瓦合烏集。人懷觀望。而公以三・遠膠漆之民。加以甲・信之精銳。勵舊忠義。如雲如雨。使和親不成。兩姓構兵。天下之事。未可知也、昔者曹操謂劉玄德、天下英雄。唯君與我。袁本初輩不足論。今以太閤視柴田勝家等。猶操之於本初。而其憚公也。不啻玄德。宜其卑辭厚禮。百方講和。是太閤至計。所以速取天下。而天下之權。已在於德川氏矣。何哉。我戰勝。而彼求和。求者

勁。正本作勍。

在彼。許者在我。我欲和則和。欲戰則戰。安危禍福一取決於我。我不已有天下之權也耶。唯夫權在於我。是以班爵之崇。封土之隆。不得不置之天下侯伯之右。太閤末路。兵連于外。士亂于內。而莫之能定。能定之者。公而已矣。太閤一瞑。制馭天下者。非公而誰。是其勢不待智者而後知。特未有釁耳。關原之事。是群雄相聚。推天下而貽德川氏者也。何則彼自開釁。而使我乘之。我有辭於天下。天下誰能禁之。於是。朝廷授之上將之任。以統天下侯伯。會同朝聘。莫不於東。則大坂徒一侯國之坐食者耳。公已不忍織田氏之孤。寧復忍於豐臣氏之孤乎。蓋思有以善處之。而彼不察焉。專挾猜疑。再自開釁。而速其覆滅。於公何累焉。公之雄武老鍊。雖太閤非其所畏。況於當時群雄。直兒童視之。而何有於驕婦騃孺哉。而謂公蓄謀積慮而斃之。皆不知時情者也。公自少小。轉質隣國。已極艱虞。及其主國。又接境勁敵。百戰爭鋒。寸攘尺取。纔定五州。而織田・豐臣氏。以其間奄有近畿。暴致强大。蓋無不以公爲遲鈍。而不知天之所以成公。乃在於是。二氏之於天下。唯速得之。故速失之。公未嘗急於取天下也。而天下之釁。

呼。正本作レ乎。

每足三以開二公。嗚呼。是其所下以長有二天下一以基中今日之盛業上也歟。

男　賴元協
男　賴　復
男　賴　醇　同校
門人後藤機

日本外史　卷之二十二　大尾

（寺本平一校正）

昭和六年九月二十五日印刷
昭和六年十月一日發行

賴山陽全書（全集上）

不許複製

廣島縣廳內
發行者 賴山陽先生遺蹟顯彰會
代表者 大田清

東京市京橋區銀座西七丁目一番地
印刷者 大谷仁兵衛

東京市京橋區銀座西八丁目五番地
印刷者 渡邊安雄

發行所 廣島縣廳內 賴山陽先生遺蹟顯彰會
電話 五七七八番
振替 下關六三三〇番

帝國地方行政學會印刷
民友社印刷所印刷

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03046 6775